伊良原ダム関係埋蔵文化財調査報告 － 2 －

伊　良　原　Ⅱ

上伊良原榎遺跡
上高屋台ノ原遺跡

福岡県文化財調査報告書　第229集

上　巻

上伊良原榎遺跡全景

上伊良原榎遺跡土層

刺突文土器

梅花流水双雀文鏡

序

福岡県教育委員会では、伊良原ダム建設事業に伴い、京都郡みやこ町犀川上伊良原・下伊良原に所在する諸遺跡の発掘調査を平成１８年度から実施しています。この発掘調査によって、今まで予想すらできなかった数の遺跡が見つかりはじめています。その多くは縄文時代と中世の遺跡であり、縄文時代の遺跡からは当時の豊かな自然と、その自然と共生する人々の生活を、中世の遺跡からは、今と変わらぬ農村集落の景観ばかりでなく、もはや残像を留めるに過ぎない当時の山岳信仰の繁栄や、地方豪族の在りし日の姿を、我々に教えてくれます。

本書は平成１９年度に実施した二遺跡の発掘調査の記録をまとめたものです。本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、地域文化の普及啓発や学術研究の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査および報告書作成にあたり、ご協力をいただいた方々に厚く感謝いたします。

平成２３年３月３１日

福岡県教育委員会
教育長　　杉光　誠

例　言

1　本書は、県営祓川流域総合開発事業（伊良原ダム建設事業）に伴い平成19～21年度に福岡県教育委員会が実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　本書で報告する遺跡は、上伊良原榎（かみいらはらえのき）遺跡・上高屋台ノ原（かみたかやだいのはる）遺跡の２遺跡である。

3　発掘調査および報告書作成は、福岡県県土整備部河川開発課の執行委任を受け、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。

4　本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者の吉田東明・下原幸裕が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。ラジコンヘリによる空中写真撮影は九州航空株式会社に委託し、気球写真による空中写真撮影は（株）空中写真企画に委託した。

5　本書に掲載した遺構図の作成は、大里弥生・海出淳平・犬塚カヲル・佐山彰子・楠木益子・内野陽子・城戸冨士子・渡辺万里子・吉留ますみ・森渕アツ子の協力を得て調査担当者が行った。

6　出土遺物の水洗、復元、実測、浄書作業は、調査担当者ならびに九州歴史資料館および福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府発掘事務所で行った。

7　出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

8　本書に使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図「田川」を改変したものである。本書で使用する方位は、国土座標Ⅱ系による座標北である。

9　本書の執筆は、Ⅲ－１－４）とⅢ－２－４）の第二・第三次調査報告分を下原、Ⅳを株式会社　古環境研究所が行い、その他を吉田が行った。編集は吉田が行った。

本　文　目　次

（上巻）

Ⅰ　はじめに …… 1
1　調査に至る経緯 …… 1
2　調査の経過 …… 3
3　調査・整理関係者 …… 6

Ⅱ　位置と環境 …… 7
1　遺跡の地理的環境 …… 7
2　周辺の歴史的環境 …… 8

Ⅲ　調査の内容 …… 13
1　上伊良原榎遺跡 …… 13
1）遺跡の概要 …… 13
2）基本層序 …… 13
3）縄文時代の遺構と遺物 …… 27
4）中・近世の遺構と遺物 ……143
5）小結 ……227

（下巻）

2　上高屋台ノ原遺跡 ……251
1）遺跡の概要 ……251
2）基本層序 ……251
3）縄文時代の遺構と遺物 ……263
4）その他の時期の遺構と遺物 ……290
5）小結 ……316

Ⅳ　自然科学系の分析 ……321
1　上伊良原榎遺跡における自然科学分析 ……321

Ⅴ　おわりに ……341

図　版　目　次

巻頭図版1　１．上伊良原榎遺跡全景
２．上伊良原榎遺跡土層

巻頭図版2　１．刺突文土器
２．梅花流水双雀文鏡

巻頭図版3　１．上高屋台ノ原遺跡　第１次調査区全景
２．第１次調査　石敷路

図版 1　１．上伊良原榎遺跡上空から下流域を望む（南から）
２．上伊良原榎遺跡上空から東側を望む（西から）

図版 2　１．上伊良原中村地区全景（南から）
２．Ⅰ区全景（南から）

図版 3　１．Ⅰ区全景（北から）
２．Ⅰ区第Ⅰ文化層全景（上空から）

図版 4　１．Ⅱ区西側第Ⅰ文化層全景（南から）
２．Ⅰ区グリッド全景（南から）

図版 5　１．Ⅰ区北側グリッド全景（南から）
２．Ⅰ区東側グリッド全景（西から）

図版 6　１．Ⅲ区グリッド全景（上空から）
２．Ⅲ区北側グリッド全景（北から）

図版 7　１．Ⅲ区西側グリッド全景（東から）
２．Ⅲ区南側グリッド全景（北から）

図版 8　１．Ⅱ区全景（上空から）
２．Ⅱ区東側グリッド全景（西から）

図版 9　１．調査前全景（東から）
２．調査前全景（東から）
３．調査前全景（北から）

図版10　１．表土掘削風景（南から）
２．Ⅰ区南東壁際土層（西から）
３．Ⅰ区南壁際土層（北から）

図版11　１．Ⅱ区西壁際土層（東から）
２．Ⅱ区西壁際土層（東から）
３．Ⅰ区北東壁際土層（西から）

図版12　１．N－12Gr東壁土層（西から）
２．Ⅰ区東側第Ⅱ文化層（西から）
３．X－4Gr北壁土層（南から）

図版13　１．F－20Gr東壁土層（西から）
２．G－18Gr北壁土層（南から）

3．H－20Gr西壁土層（東から）
図版14　1．I－21Gr北壁土層（南から）
2．L－24Gr南壁土層（北から）
3．M－24Gr北壁土層（南から）
図版15　1．N－22Gr西壁土層（東から）
2．N－23Gr北壁土層（南から）
3．N－24Gr北壁土層（南から）
図版16　1．P－23Gr西壁土層（東から）
2．N－18Gr西壁土層（東から）
3．P－17Gr西壁土層（東から）
図版17　1．AW－13Gr西壁土層（東から）
2．AX－14Gr西壁土層（東から）
3．AX－18Gr西壁土層（東から）
図版18　1．BA－15Gr西壁土層（東から）
2．BA－15Gr西壁土層（東から）
3．調査区外トレンチ土層（東から）
図版19　1．O－12Gr№9土器出土状況（東から）
2．AA－6Gr石匙出土状況（西から）
3．N－22Grナイフ形石器出土状況（東から）
図版20　1．１号竪穴住居跡（南から）
2．１号竪穴住居跡（完掘後）（南から）
3．２号竪穴住居跡（南から）
図版21　1．２号竪穴住居跡（南東から）
2．３号竪穴住居跡（西から）
3．４号竪穴住居跡（東から）
図版22　1．１号集石（西から）
2．２号集石（東から）
3．32号土坑（西から）
図版23　1．33号土坑（南から）
2．34号土坑（西から）
3．35号土坑（南から）
図版24　1．36号土坑（南東から）
2．37号土坑（西から）
3．42号土坑（南東から）
図版25　1．43号土坑（北から）
2．44号土坑（西から）
3．45号土坑（北から）
図版26　1．46号土坑（東から）

2．47号土坑（東から）
3．48号土坑（西から）

図版27　1．49号土坑（西から）
2．50号土坑（西から）
3．51号土坑（東から）

図版28　1．53号土坑（北から）
2．57号土坑土層（南から）
3．57号土坑（北から）

図版29　1．58号土坑土層（西から）
2．58号土坑（北から）
3．59号土坑（東から）

図版30　1．76号土坑半截（東から）
2．76号土坑（東から）
3．76号土坑集石（東から）

図版31　1．１号掘立柱建物跡（西から）
2．２号掘立柱建物跡（上空から）
3．３号掘立柱建物跡（上空から）

図版32　1．４号掘立柱建物跡（北から）
2．５号掘立柱建物跡（西から）
3．６号掘立柱建物跡（北から）

図版33　1．15号土坑（西から）
2．26号土坑（西から）
3．31号土坑（南から）

図版34　1．62号土坑（東から）
2．64号土坑（東から）
3．65号土坑（東から）

図版35　1．66号土坑（南東から）
2．１号土坑（西から）
3．２号土坑（西から）

図版36　1．３号土坑（南から）
2．４・５号土坑（西から）
3．６号土坑（西から）

図版37　1．７号土坑（東から）
2．８号土坑（北から）
3．９号土坑（北から）

図版38　1．10号土坑（西から）
2．11号土坑（西から）
3．12・13・14号土坑（西から）

図版39　1．16号土坑（東から）
2．17号土坑（北から）
3．18号土坑（北から）
図版40　1．19号土坑（北から）
2．20号土坑（西から）
3．21号土坑（北から）
図版41　1．22号土坑（南から）
2．23号土坑（南から）
3．24号土坑（南東から）
図版42　1．25号土坑（東から）
2．29号土坑（西から）
3．30号土坑（東から）
図版43　1．38・41号土坑（北から）
2．38・41号土坑（西から）
3．39・40号土坑（西から）
図版44　1．52号土坑（西から）
2．54号土坑（西から）
3．55号土坑（西から）
図版45　1．56号土坑（西から）
2．60号土坑（東から）
3．61号土坑（西から）
図版46　1．63号土坑（東から）
2．67号土坑（東から）
3．68・74号土坑（南東から）
図版47　1．69号土坑（北から）
2．70号土坑（東から）
3．71号土坑（西から）
図版48　1．72・73号土坑（東から）
2．75号土坑（西から）
3．3号集石（北西から）
図版49　1．3号集石（北西から）
2．3号集石遺物出土状況（北東から）
3．石列（南から）
図版50　1．P361・P362（南から）
2．P875（北から）
3．焼土（北から）
図版51　縄文土器①
図版52　縄文土器②

図版53　縄文土器③
図版54　土製品・石器①
図版55　石器②
図版56　石器③
図版57　石器④
図版58　石器⑤
図版59　土坑出土土器
図版60　土坑・溝・３号集石出土土器
図版61　３号集石・ピット出土土器
図版62　ピット・遺構面・包含層出土土器
図版63　遺構面・包含層出土土器・土錘
図版64　石製品①
図版65　石製品②
図版66　鉄製品・銅製品・鉄滓
図版67　１．上高屋台ノ原遺跡遠景（東から）
２．上高屋台ノ原遺跡から祓川下流を望む（南から）
図版68　１．第１次調査区全景（東から）
２．東半部グリッド全景（北から）
図版69　１．Ｄ－13Gr西壁土層（東から）
２．Ｏ－8、Ｐ－7～9Gr（北から）
３．Ｐ－8Gr西壁土層（東から）
図版70　１．Ｓ－9～12、Ｔ－9～12Gr（北から）
２．Ｓ－12Gr西壁土層（東から）
３．Ｃ－13Gr遺物出土状況（西から）
図版71　１．Ｅ－13Gr遺物出土状況（西から）
２．Ｐ－8Gr遺物出土状況（東から）
３．Ｔ－10Gr遺物出土状況（東から）
図版72　１．11号土坑（北から）
２．12号土坑（南西から）
３．１号土坑（北から）
図版73　１．２号土坑（掘削前）（東から）
２．２号土坑（掘削後）（東から）
３．３号土坑（東から）
図版74　１．４号土坑（南から）
２．５号土坑（西から）
３．６号土坑（東から）
図版75　１．７号土坑（西から）

２．８号土坑（西から）
３．９号土坑（東から）
図版76　１．10号土坑（北から）
２．第１次調査石敷路中央付近（西から）
３．第１次調査石敷路東端（東から）
図版77　１．第２次調査石敷路遠景（南東から）
２．第２次調査石敷路と石垣（南から）
図版78　１．第２次調査石敷路①（東から）
２．第２次調査石敷路②（東から）
３．第２次調査石敷路③（東から）
図版79　１．第２次調査石敷路④（東から）
２．現道と旧道の分岐点（東から）
３．第２次調査石敷路⑤（西から）
図版80　１．第３次調査石敷路　中央付近（東から）
２．第３次調査石敷路　中央付近（東から）
３．第３次調査石敷路　西側（西から）
図版81　１．第３次調査石敷路　南側（南から）
２．第３次調査石敷路　Ａ－Ａ’付近（南から）
３．第３次調査石敷路　Ｂ－Ｂ’付近（東から）
図版82　縄文土器①
図版83　縄文土器②
図版84　石器・陶磁器・土師器

挿　図　目　次

（上巻）

第１図　みやこ町の位置 …… 7
第２図　周辺遺跡分布図（1/50,000）…… 9
第３図　上伊良原榎遺跡　周辺地形図（1/5,000）…… 11
第４図　上伊良原榎遺跡　調査区位置図（1/2,000）…… 12
第５図　上伊良原榎遺跡　グリッド配置図（1/800）…… 14
第６図　上伊良原榎遺跡　基本土層図（1/40）…… 15
第７図　上伊良原榎遺跡　土層図①（1/60）…… 16
第８図　上伊良原榎遺跡　土層図②（1/60）…… 17
第９図　上伊良原榎遺跡　土層図③（1/60）…… 19
第10図　上伊良原榎遺跡　土層図④（1/60）…… 20
第11図　上伊良原榎遺跡　土層図⑤（1/60）…… 22
第12図　上伊良原榎遺跡　土層図⑥（1/60）…… 23
第13図　上伊良原榎遺跡　土層図⑦（1/60）…… 24

第14図　上伊良原榎遺跡　土層図⑧（1/60）…… 25
第15図　上伊良原榎遺跡　土層図⑨（1/60）…… 26
第16図　第Ⅱ文化層グリッド配置図（1/1,000）…… 28
第17図　Ⅰ区第Ⅱ文化層遺構配置図（1/300）…… 29・30
第18図　Ⅱ区第Ⅱ文化層遺構配置図（1/300）…… 31
第19図　Ⅲ区第Ⅱ文化層遺構配置図（1/300）…… 32
第20図　第Ⅱ文化層　L－9～12、M－9～13Gr実測図（1/100）…… 33
第21図　第Ⅱ文化層　N－9～13、O－9～13Gr実測図（1/100）…… 34
第22図　O－12Gr　№130土器出土状態（1/10）…… 35
第23図　第Ⅱ文化層　P－9～13、Q－9～13Gr実測図（1/100）…… 36
第24図　第Ⅱ文化層　V－3～5、W－3～7Gr実測図（1/100）…… 37
第25図　第Ⅱ文化層　X－4～7、Y－4～7Gr実測図（1/100）…… 38
第26図　第Ⅱ文化層　Z－4～6、AA－4～6Gr実測図（1/100）…… 39
第27図　第Ⅱ文化層　Z－7～9、AA－7～9Gr実測図（1/100）…… 40
第28図　第Ⅱ文化層　T－15・16、U－15・16Gr実測図（1/100）…… 41
第29図　第Ⅱ文化層　V－15・16、W－15・16Gr実測図（1/100）…… 42
第30図　第Ⅱ文化層　X－15・16、Y－15・16Gr実測図（1/100）…… 42
第31図　第Ⅱ文化層　L－23・24、M－23～26Gr実測図（1/100）…… 43
第32図　第Ⅱ文化層　O－17・18、P－17・18、Q－17・18Gr実測図（1/100）…… 44
第33図　第Ⅱ文化層　N－23・24、O－23・24、P－23・24Gr実測図（1/100）…… 45
第34図　第Ⅱ文化層　AR－15・16、AS－15・16Gr実測図（1/100）…… 46
第35図　第Ⅱ文化層　AT－16・17、AU－14・16・17Gr実測図（1/100）…… 47
第36図　第Ⅱ文化層　AV－16～18、AW－14・15・17・18Gr実測図（1/100）…… 48
第37図　第Ⅱ文化層　AX－14～18、AY－15～18Gr実測図（1/100）…… 49
第38図　第Ⅱ文化層　AZ－14～18、BA－14～18Gr実測図（1/100）…… 50
第39図　第Ⅲ文化層グリッド配置図（1/1,000）…… 52
第40図　Ⅱ区第Ⅲ文化層遺構配置図（1/300）…… 54
第41図　第Ⅲ文化層　AR－15・16、AS－15・16Gr実測図（1/100）…… 54
第42図　第Ⅲ文化層　AT－15・16、AU－13～17Gr実測図（1/100）…… 55
第43図　第Ⅲ文化層　AV－13～16、AW－13～16Gr実測図（1/100）…… 56
第44図　第Ⅲ文化層　AV－17・18、AW－17・18Gr実測図（1/100）…… 57
第45図　第Ⅲ文化層　AX－13～16、AY－14～16Gr実測図（1/100）…… 58
第46図　第Ⅲ文化層　AX－17・18、AY－17・18Gr実測図（1/100）…… 59
第47図　第Ⅲ文化層　AZ－14～16、BA－14～17Gr実測図（1/100）…… 60
第48図　第Ⅳ文化層グリッド配置図（1/1,000）…… 61
第49図　Ⅰ区第Ⅳ文化層遺構配置図（1/300）…… 63・64
第50図　Ⅱ区第Ⅳ文化層遺構配置図（1/300）…… 65
第51図　Ⅲ区第Ⅳ文化層遺構配置図（1/300）…… 66

第52図　第Ⅳ文化層　Q－13～15Gr実測図（1/100）…… 67
第53図　第Ⅳ文化層　W－4～7、X－4～7Gr実測図（1/100）…… 68
第54図　第Ⅳ文化層　Y－4～7、Z－4～8Gr実測図（1/100）…… 69
第55図　第Ⅳ文化層　AA－4～8、AB－4～8Gr実測図（1/100）…… 70
第56図　第Ⅳ文化層　AA－9～13、AB－9～13Gr実測図（1/100）…… 71
第57図　第Ⅳ文化層　AC－9～13Gr実測図（1/100）…… 72
第58図　第Ⅳ文化層　AA－15、AB－15・16Gr実測図（1/100）…… 73
第59図　第Ⅳ文化層　F－17・18、G－16～18Gr実測図（1/100）…… 74
第60図　第Ⅳ文化層　F－19～22、G－19～22Gr実測図（1/100）…… 75
第61図　第Ⅳ文化層　H－17・18、I－17・18Gr実測図（1/100）…… 76
第62図　第Ⅳ文化層　H－19～22、I－19～22Gr実測図（1/100）…… 77
第63図　第Ⅳ文化層　J－18～21、K－18～21Gr実測図（1/100）…… 78
第64図　第Ⅳ文化層　L－19・20、M－18・19Gr実測図（1/100）…… 79
第65図　第Ⅳ文化層　N－17～19、O－16～19Gr実測図（1/100）…… 80
第66図　第Ⅳ文化層　P－16～18、Q－16～18Gr実測図（1/100）…… 81
第67図　第Ⅳ文化層　K－23・24、L－23・24Gr実測図（1/100）…… 82
第68図　第Ⅳ文化層　M－22～24、N－22～24Gr実測図（1/100）…… 83
第69図　第Ⅳ文化層　AT－14～16、AU－13～16Gr実測図（1/100）…… 85
第70図　第Ⅳ文化層　AT－22・23Gr実測図（1/100）…… 86
第71図　第Ⅳ文化層　AV－13～15、AW－13～15Gr実測図（1/100）…… 87
第72図　第Ⅳ文化層　AX－13～16、AY－13～16Gr実測図（1/100）…… 88
第73図　1・2号竪穴住居跡実測図（1/30）…… 90
第74図　3・4号竪穴住居跡実測図（1/30）…… 91
第75図　1・2号集石実測図（1/20）…… 93
第76図　32～34号土坑実測図（1/30）…… 95
第77図　35～37・42・43号土坑実測図（1/30）…… 97
第78図　44～48号土坑実測図（1/30）…… 98
第79図　49・50号土坑実測図（1/40）……100
第80図　51・53・59号土坑実測図（1/30）……101
第81図　57・58号土坑実測図（1/60）……102
第82図　76号土坑実測図（1/30）……103
第83図　縄文土器実測図①（1/3）……105
第84図　縄文土器実測図②（1/3）……106
第85図　縄文土器実測図③（1/3）……107
第86図　縄文土器実測図④（1/3）……108
第87図　縄文土器実測図⑤（1/3）……109
第88図　縄文土器実測図⑥（1/3）……110
第89図　縄文土器実測図⑦（1/3）……111

第90図　縄文土器実測図⑧（1/3）……112
第91図　縄文土器実測図⑨（1/3・1/4）……113
第92図　縄文土器実測図⑩（1/3）……114
第93図　縄文土器実測図⑪（1/3）……115
第94図　縄文土器実測図⑫（1/3）……116
第95図　縄文土器実測図⑬（1/3）……117
第96図　土製品実測図（1/3）……119
第97図　石器実測図①（2/3）……121
第98図　石器実測図②（2/3）……122
第99図　石器実測図③（2/3）……123
第100図　石器実測図④（2/3）……124
第101図　石器実測図⑤（2/3）……125
第102図　石器実測図⑥（2/3）……126
第103図　石器実測図⑦（2/3）……127
第104図　石器実測図⑧（2/3）……128
第105図　石器実測図⑨（2/3）……129
第106図　石器実測図⑩（2/3）……130
第107図　石器実測図⑪（2/3）……131
第108図　石器実測図⑫（2/3）……132
第109図　石器実測図⑬（2/3）……133
第110図　石器実測図⑭（2/3）……134
第111図　石器実測図⑮（2/3）……135
第112図　石器実測図⑯（2/3）……136
第113図　石器実測図⑰（1/2）……137
第114図　石器実測図⑱（1/2）……138
第115図　石器実測図⑲（1/3）……139
第116図　石器実測図⑳（1/3・1/6）……140
第117図　石器実測図㉑（1/6）……142
第118図　Ⅰ区遺構配置図（1/300）……145・146
第119図　Ⅱ区遺構配置図（1/300）……147・148
第120図　Ⅲ区遺構配置図（1/300）……149・150
第121図　1・2号掘立柱建物跡実測図（1/60）……151
第122図　4号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）……152
第123図　3・4号掘立柱建物跡実測図（1/60）……153
第124図　5・6号掘立柱建物跡実測図（1/60）……154
第125図　15・26・31・64～66号土坑実測図（1/30）……156
第126図　15・62・64～66号土坑出土土器実測図（1/3）……157
第127図　62号土坑実測図（1/30）……158

第128図　1～4号土坑実測図（1/30）……161
第129図　3～6・9号土坑出土土器実測図（1/3）……162
第130図　5～7号土坑実測図（1/30）……163
第131図　8～11号土坑実測図（1/30）……165
第132図　12～14・16号土坑実測図（1/30）……166
第133図　12・14・19号土坑出土土器実測図（1/3）……168
第134図　17～21号土坑実測図（1/30）……169
第135図　22～25・27号土坑実測図（1/60、1/30）……171
第136図　22～25号土坑出土土器実測図（1/3）……172
第137図　28～30・38～40号土坑実測図（1/30）……173
第138図　40号土坑出土土器実測図（1/3）……174
第139図　41・52・54～56号土坑実測図（1/30）……175
第140図　60・61・63・67号土坑実測図（1/30）……177
第141図　60・61・68～70号土坑出土土器実測図（1/3）……178
第142図　68～70・74号土坑実測図（1/30）……180
第143図　71～73・75号土坑実測図（1/30）……181
第144図　1～6号溝断面図（1/20）……183
第145図　5・6号溝出土土器実測図（1/3）……184
第146図　3号集石実測図（1/40）……186
第147図　3号集石出土土器実測図①（1/3）……187
第148図　3号集石出土土器実測図②（1/4）……188
第149図　石列実測図（1/40）……188
第150図　ピット・焼土実測図（1/20）……190
第151図　ピット出土土器実測図①（1/3）……192
第152図　ピット出土土器実測図②（1/3）……193
第153図　ピット出土土器実測図③（1/3）……195
第154図　ピット出土土器実測図④（1/4）……196
第155図　ピット出土土器実測図⑤（1/3）……197
第156図　不整形ピット群断面土層図（1/40）……200
第157図　遺構面出土土器実測図（1/3）……201
第158図　包含層出土土器実測図（1/3）……203
第159図　包含層・表土中・排土中出土土器実測図（1/3）……206
第160図　土錘実測図①（1/2）……207
第161図　土錘実測図②（1/2）……208
第162図　石製品実測図①（1/1、1/3）……210
第163図　石製品実測図②（1/2、1/3）……212
第164図　石製品実測図③（1/2）……213
第165図　石製品実測図④（1/4）……214

第166図　石製品実測図⑤（1/4）……215
第167図　石製品実測図⑥（1/4）……216
第168図　石製品実測図⑦（1/4）……217
第169図　石製品実測図⑧（1/4）……218
第170図　鉄製品実測図①（1/1、1/2）……221
第171図　鉄製品実測図②（1/2）……222
第172図　鉄製品実測図③（1/2）……223
第173図　銅製品実測図（1/1）……225
第174図　鍛冶関連遺物実測図（1/2）……226
第175図　刺突文土器の出土例（1/6）……230
第176図　上伊良原榎遺跡出土土器・石器出土比率……232

（下巻）

第177図　上高屋台ノ原遺跡　周辺地形図①（1/5,000）……252
第178図　上高屋台ノ原遺跡　周辺地形図②（1/2,000）……253
第179図　上高屋台ノ原遺跡　基本土層図（1/40）……254
第180図　上高屋台ノ原遺跡　第１次調査区遺構配置図（1/300）……255・256
第181図　上高屋台ノ原遺跡　第２次調査区全体図（1/400）……257・258
第182図　上高屋台ノ原遺跡　第３次調査区全体図（1/300）……259
第183図　上高屋台ノ原遺跡　土層図①（1/60）……260
第184図　上高屋台ノ原遺跡　土層図②（1/60）……261
第185図　上高屋台ノ原遺跡　土層図③（1/60）……262
第186図　上高屋台ノ原遺跡　グリッド配置図（1/800）……263
第187図　上高屋台ノ原遺跡　第Ⅱ文化層遺構配置図（1/300）……264
第188図　第Ⅱ文化層　D－13・14Gr実測図（1/100）……265
第189図　第Ⅱ文化層　E－11～14、F－11～13Gr実測図（1/100）……266
第190図　第Ⅱ文化層　I－13・14、J－13Gr実測図（1/100）……267
第191図　第Ⅱ文化層　O－13、P－13Gr実測図（1/100）……268
第192図　第Ⅱ文化層　S－9～12、T－10～12Gr実測図（1/100）……269
第193図　第Ⅱ文化層　R－14、S－13・14、T－13Gr実測図（1/100）……270
第194図　上高屋台ノ原遺跡　第Ⅲ文化層遺構配置図（1/300）……272
第195図　第Ⅲ文化層　C－13・14、D－12～14Gr実測図（1/100）……273
第196図　第Ⅲ文化層　E－12～14、F－12・13Gr実測図（1/100）……274
第197図　第Ⅲ文化層　N－8、O－8Gr実測図（1/100）……275
第198図　第Ⅲ文化層　P－7～9、Q－8Gr実測図（1/100）……276
第199図　第Ⅳ文化層　P－8Gr実測図（1/100）……278
第200図　11・12号土坑実測図（1/30）……279
第201図　縄文土器実測図①（1/3）……280

第202図　縄文土器実測図②（1/3）……281
第203図　縄文土器実測図③（1/3）……282
第204図　縄文土器実測図④（1/3）……283
第205図　縄文土器実測図⑤（1/3）……284
第206図　縄文土器実測図⑥（1/3）……285
第207図　石器実測図①（2/3）……286
第208図　石器実測図②（1/2）……287
第209図　石器実測図③（1/2）……288
第210図　石器実測図④（1/2）……289
第211図　石製装身具実測図（1/1）……290
第212図　1～3号土坑実測図（1/40）……291
第213図　土器・陶磁器実測図（1/3）……292
第214図　4～7号土坑実測図（1/40）……294
第215図　砥石実測図（2/3）……295
第216図　8～10号土坑実測図（1/40）……296
第217図　1号溝断面土層図（1/20）……297
第218図　石敷路実測図①（1/60）……299
第219図　石敷路実測図②（1/60）……300
第220図　石敷路実測図③（1/60）……301
第221図　石敷路実測図④（1/60）……302
第222図　石敷路実測図⑤（1/60）……303
第223図　石敷路実測図⑥（1/60）……304
第224図　石敷路実測図⑦（1/60）……305
第225図　石敷路実測図⑧（1/60）……306
第226図　石敷路実測図⑨（1/60）……307
第227図　石敷路実測図⑩（1/60）……308
第228図　石敷路実測図⑪（1/60）……309
第229図　石敷路実測図⑫（1/60）……310
第230図　石敷路実測図⑬（1/60）……311
第231図　石敷路実測図⑭（1/60）……312
第232図　石敷路実測図⑮（1/60）……313
第233図　石敷路実測図⑯（1/60）……314
第234図　石敷路実測図⑰（1/60）……315
第235図　石敷路出土磁器実測図（1/3）……315
第236図　暦年較正結果　……324
第237図　テフラの岩石学的諸特性……329
第238図　上伊良原榎遺跡における植物珪酸体分析結果……339
付　図　上伊良原榎遺跡全体図（1/300）

表目次

（上巻）

第１表　上伊良原榎遺跡　中世墓一覧表 ……236
第２表　京築地域における中世墓出土和鏡一覧表 ……237
第３表　「弓削刀子」出土遺跡一覧表 ……238
第４表　上伊良原榎遺跡　グリッド別出土遺物点数一覧表 ……240～244
第５表　上伊良原榎遺跡出土縄文土器観察表 ……245・246
第６表　上伊良原榎遺跡出土石器観察表 ……247～249
第７表　上伊良原榎遺跡出土土製品観察表 ……250
第８表　上伊良原榎遺跡出土土錘観察表 ……250

（下巻）

第９表　上高屋台ノ原遺跡　グリッド別出土遺物点数一覧表 ……318
第10表　上高屋台ノ原遺跡出土縄文土器観察表 ……319
第11表　上高屋台ノ原遺跡出土石器観察表 ……320
第12表　放射性炭素年代測定結果 ……324
第13表　上伊良原榎遺跡におけるテフラ分析結果一覧表 ……328
第14表　上伊良原榎遺跡L－24Gr南壁における樹種同定結果 ……332
第15表　上伊良原榎遺跡における植物珪酸体分析結果 ……338

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経緯

伊良原ダムは、福岡県と大分県の県境にある鷹ノ巣山を源流としてみやこ町、行橋市を流れ、豊前海へと注ぐ、二級河川祓川の上流、福岡県京都郡みやこ町犀川下伊良原に建設予定の重力式コンクリートダムである。洪水の調節、水道用水の開発、既得取水の安定化及び河川環境の保全のための流量の確保を目的として計画された、集水面積36.8㎢、湛水面積1.22ha、総貯水量2,870万㎥を有する多目的ダムである。

建設の計画は古く、昭和36（1961）年にはすでに予備調査に着手され、昭和49年度には実施計画調査も採択されたが、建設事業が採択され、田川地区・京築地区水道企業団と基本協定が締結されたのは平成２（1999）年度になってからである。

文化財に関する協議は平成６年度、地元地権者５団体と建設に関する基本協定書の締結を待って開始された。福岡県土木部（現県土整備部）河川開発課、福岡県行橋土木事務所伊良原ダム建設出張所（現伊良原ダム事務所）、福岡県教育庁指導第二部文化課（現総務部文化財保護課）、同京築教育事務所等の協議の中で、埋蔵文化財調査については用地買収が終了し民家が移転した後に本格的に開始すること、移転地については用地買収後に先行して実施すること、民俗文化財についてはその性格上、移転前に実施する必要があること等が合意され、福岡県教育委員会では平成７年度から10年度の４カ年に亘って民俗文化財の調査を実施、平成11年３月に報告書が刊行された。

下伊良原原田ノ谷遺跡

ダム建設事業の関連として最初に埋蔵文化財調査のメスが入ったのは、平成10（1998）年９月のことである。岩屋河内地区代替地への工事用道路建設予定地として、下伊良原西ノ塚地区に試掘トレンチが設定され、下伊良原原田ノ谷遺跡（試掘調査当時は西の塚平原遺跡）の所在が明らかになった。以降、平成13・17年度の小規模な試掘調査を経て、関連建設事業が本格化する平成18年度を迎える。平成18年６月には下伊良原西ノ塚地区の試掘調査を本格的に実施し、新たに下伊良原中ノ坪遺跡、下伊良原平原遺跡第1地点、同第２地点の３つの遺跡を確認し、工事着工前に本調査が必要である旨ダム事務所に通知。協議の結果、早速７月より下伊良原中ノ坪遺跡の発掘調査を実施す

下伊良原中ノ坪遺跡

ることとなった。

平成18年度は下伊良原西ノ塚地区にある下伊良原中ノ坪遺跡・下伊良原原田ノ谷遺跡、下伊良原寺ノ谷遺跡と、上伊良原中村地区にある上伊良原川上遺跡、上伊良原下ノ段遺跡の５遺跡の発掘調査を実施した。この５遺跡の発掘調査の成果は、平成20年度に福岡県教育委員会が刊行した『福岡県文化財調査報告書第222集　伊良原Ⅰ』で報告を行った。

下伊良寺ノ谷遺跡

平成18年12月、ダム事務所からの要請で、伊良原ダム水没対象地の住民の移転代替地として造成が計画された、上伊良原中村地区の上伊良原地区代替地（C代替地）の試掘調査を行った。その結果、事業対象地のうち約14,000㎡に遺跡が広がることを確認した。また、平成19年１月には上高屋高座地区の工事用道路建設予定地の試掘調査を行い、対象地のうち約3,500㎡に遺跡が広がることを確認した。この二つの遺跡は、みやこ町教育委員会と協議の末、それぞれの遺跡所在地の大字・小字名から「上伊良原　榎」遺跡と「上高屋　台ノ原」遺跡と呼称することとなった。発掘調査は平成19年度に実施することで協議が整った。

調査前の上伊良原榎遺跡

平成20年度には、水没地内の住宅移転及び工事用仮設道路設置の計画が出されたことを契機に、周知の包蔵地であった下伊良原塚本遺跡の試掘調査を実施し、遺跡の存在が確認できたので６月から発掘調査を実施した。また、平成18年度末に実施した上高屋台ノ原遺跡に続く箇所が、付け替え国道のための工事用仮設道路として造成されることになり、約190㎡の発掘調査を実施した。さらに同じ工事用道路の別地点においても現地踏査によって石敷路の痕跡を確認したが、これについては協議により翌年度に行われる伐採の後に調査を実施することで調整した。以上のうち、上高屋台ノ原遺跡第２次調査については本書で報告を行う。

上伊良原榎遺跡の試掘調査

平成21年度には、ダム建設予定地内に残された観音堂や石塔・石碑類についてダム事務所から

早急に文化財調査を実施するよう要望があったため、平成21年５月から現地の測量や写真撮影等を行った。併せて、下高木神社と上高木神社についても平板測量を実施した。これらの測量成果については、続刊においてまとめて報告を行う予定である。この他、前年度にダム事務所側から要請があった上高屋高座地区の２号工事用道路予定地内の伐採が実施され、石敷きの測量と写真撮影を実施した。この地点も蔵持山参道に関わる遺構であると判断し、上高屋台ノ原遺跡の第３次調査とした。この調査については本書で報告を行う。

上伊良原榎遺跡の試掘調査

2　調査の経過

ダム事務所との協議の中で、中村地区のC代替地は遅くとも平成19年11月から工事に着手する予定で準備が進められており、他の関連工事との調整上着工時期を遅らせることができないことが判った。上伊良原榎遺跡は面積約14,000㎡、試掘調査の結果から少なくとも中世と縄文時代の二つの文化層があり、更に複数の文化層の存在が予想され、平成19年４月から10月までの７ヶ月間では発掘調査の完了は到底見込めないことも切実に訴えたが、造成工事の着工時期の変更は叶わず、発掘調査体制の大幅な充実を図ることでこの局面に対処することとなった。そこで、調査担当者２名、調査補助員２名、発掘作業員60数名という山間部の発掘調査にしては大規模な体制を整えて調査に望んだ。

重機の搬入

調査の様子

上伊良原榎遺跡の発掘調査は平成19年４月11日から開始した。調査区は大きく３つの地点に分かれるため便宜上Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区の３つに調査区を分割し、Ⅰ区から表土掘削を開始することとなった。少しでも効率化を図るために0.7㎥のバックフォーを一度に４台投入し、表土掘削と廃土送りを急ピッチで進めていった。翌12日にはユニットハウスやリース機材等を搬入、13日には発掘器財を搬入し、週明けの４月17日から作業員による作業を開始した。

発掘調査は第Ⅰ文化層である中・近世の遺構検出作業から開始した。遺構確認・掘削作業を経て、順次写真撮影・図化作業を進めていった。５月24日にはⅠ区第Ⅰ文化層の空中写真撮影を行い第Ⅰ文化層の調査を完了、引き続いて下層の調査のため４ｍメッシュのグリッドを設定し掘削を進めていった。下層の文化層は2層、場所によっては３層に分かれることが判明したため、各層毎に遺物取り上げ、遺構精査、図化作業を繰り返した。６月27日にようやくⅠ区のグリッド掘削を終え、28日に空中写真撮影を行い、７月５日にⅠ区の全作業を完了した。

調査の様子

当初はⅠ区からⅡ区、Ⅲ区へと調査を進める予定だったが、工事の工程上Ⅰ区の調査完了後はⅢ区へと発掘調査を進めることとなったため、７月３日にはⅠ区の調査と併行してⅢ区の調査に着手した。ちょうど７月前半は梅雨の最中でもあり、台風襲来も重なって集中豪雨による災害発生も懸念されたため、降り続く雨の中を沈砂地造成や水路掘削、土嚢による築堤、廃土のシート被覆等、防災作業に追われる日々が続いた。

調査の様子

Ⅲ区の第Ⅰ文化層は遺構の密度が希薄であったため、７月24日には図化作業も完了し、引き続いて下層のグリッド調査へと進んでいった。Ⅲ区では予想以上に遺構が多く、また厚い包含層の掘削に手間取ったが、９月６日にはⅢ区の空中写真撮影を行い、９月14日には（株）古環境研究所による土壌分析サンプルの採取を実施、９月20日にⅢ区の全ての調査を完了した。なお、工事を少しでも先に進めておきたいというダム事務所の要望で、調査の完了したⅠ区・Ⅲ区部分の工事が10月２日から着手された。

現地説明会の様子

Ⅲ区の調査と併行しながら、８月27日からはⅡ区第Ⅰ文化層の調査を進めていった。10月２日からは第Ⅰ文化層の調査が完了した区域から順次グリッド調査を進めていった。10月23日にⅡ区の空中写真撮影を実施、24日には現地説明会開催のため現地で記者発表を行い、10月27日に現

地説明会を開催した。市街地から遠く離れた山奥の遺跡であるにもかかわらず、130名の来訪者を得た。10月31日に全ての作業が終了し、器財等を撤収、予定通り10月末日までの調査完了を果たすことができた。

現地説明会の様子

現在の上高屋台ノ原遺跡

上高屋台ノ原遺跡の発掘調査は、遺跡がある場所へ重機が進入する経路が無かったため進入路が完成した後の平成19年12月に発掘調査に着手することとなった。12月13日にダム事務所と現地協議を行い、12月17日に重機を搬入し表土掘削を開始した。19日には作業員による作業を開始し、まずは蔵持山参詣道に敷かれた石敷路部分の清掃作業を行った。12月25日に石敷路の清掃が終了し、写真撮影の後、表土掘削が終了した西側の平坦地から遺構確認作業を進めていった。

石敷路の実測と並行して中世以降の遺構確認作業を行い、遺構の掘削が済んだ箇所から随時写真撮影、図化作業を行った。１月29日には既に中世遺構面の調査が終了した調査区西側から４ｍメッシュのグリッドを設定し、翌30日からグリッド掘削による縄文時代包含層の調査を開始した。２月18日には中世遺構面の調査が全て完了し、縄文時代のグリッド調査に専念することとなった。期間が許す限りグリッドの範囲を拡大し続け、現場の明け渡しも差し迫った２月27日に気球による空中写真撮影を実施、28日に掘削作業を終了、２月29日には図化作業も完了し、器財を撤収して発掘調査を終了した。

上高屋台ノ原遺跡の第２次調査は、平成20年６月12日に開始した。この２日前からは下伊良原塚本遺跡の調査も開始しており、限られた機材と人員を作業工程を鑑みながら両遺跡間で調整し、同時並行で進めることとなった。

当初は蔵持山参道の測量を行うために表土の除去を行った。除去は地形的に重機の使用が困難であることから人力で行った。これと並行して平板測量による地形図の作製を実施し、６月25日には平板測量を完了した。27日からは表土を除去して現れた石敷路の実測図作成を始めた。７月15日からはラジコンヘリによる空中撮影に向けての清掃を表土掘削作業と並行して始め、18日に撮影を実施した。29日には石敷路の実測作業を完了し、30日には現地の撤収を終了した。

上高屋台ノ原遺跡第3次調査は、平成21年11月5日から開始した。調査以前の段階で石敷路の遺存状況を把握し、良好な箇所を中心に清掃を行い写真撮影、図化作業を行った。図化作業は1/100で全体図を作成し、遺存状況が良好な部分については1/20の個別図作成を行い11月19日に全ての作業を終了した。

3　調査・整理関係者

平成19～21年度の発掘調査関係者および平成21・22年度の整理作業関係者は以下のとおりである。

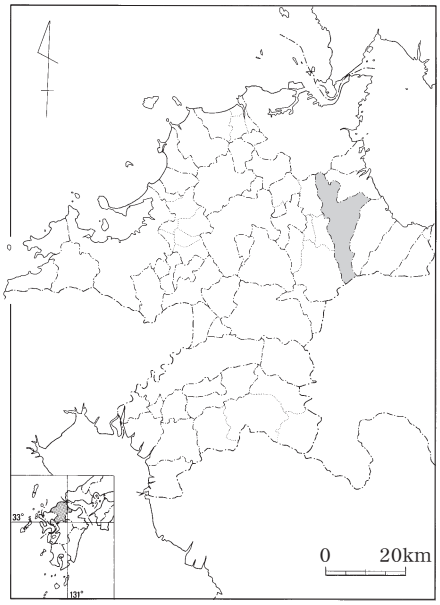
福岡県教育委員会

	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
総括				
教育長	森山　良一	森山　良一	森山　良一	杉光　誠
教育次長	清水　圭輔	楢崎　洋二郎	亀岡　靖	荒巻　俊彦
総務部長	大島　和寛	荒巻　俊彦	荒巻　俊彦	今田　義雄
文化財保護課長（本副理事）	磯村　幸男	磯村　幸男		
文化財保護課長			平川　昌弘	平川　昌弘
副課長	佐々木隆彦	池邉　元明	池邉　元明	伊崎　俊秋
参事	新原　正典	新原　正典	伊崎　俊秋	
参事兼課長技術補佐	池邉　元明	小池　史哲	小池　史哲	小池　史哲
	小池　史哲			
課長補佐	中薗　宏	前原　俊史	前原　俊史	日高　公徳
庶務				
管理係長	井手　優二	富永　育夫	富永　育夫	富永　育夫
管理係	淵上　大輔	小宮　辰之	野田　雅	仲野　洋輔
調査・整理				
調査第一係長	小田　和利	小田　和利（調査）	吉村　靖徳	吉村　靖徳
調査第一係	吉田　東明（調査）	木下　修（調査）	木下　修（調査）	吉田　東明（整理）
	下原　幸裕（調査）	岸本　圭		
	城門　義廣（調査）	下原　幸裕（調査）		
調査第二係			下原　幸裕（整理）	下原　幸裕（整理）
大規模遺跡対策・災害復旧班			吉田　東明（整理）	
調査補助員	大里　弥生			
	海出　淳平			

なお、発掘調査および整理作業にあたり、ご理解・ご協力いただいた関係各位に厚く感謝申し上げます。

Ⅱ　位置と環境

1　遺跡の地理的環境（第１図）



第１図　みやこ町の位置

上伊良原榎遺跡や上高屋台ノ原遺跡が位置するみやこ町は、福岡県の北東部に位置し、総面積151.28k㎡、北は北九州市小倉南区、東は行橋市・築上町、南は大分県中津市、西は田川郡添田町・赤村・香春町と接する。平成18年（2006）３月20日、京都郡勝山町・豊津町・犀川町の三町が合併して新たに発足した町である。

伊良原（IRAHARA）地区は、みやこ町の南部、旧犀川町にあり、英彦山系の分水嶺を境にして大分県と接する山間地である。鷹巣山麓に端を発し、北流して豊前海へと注ぐ、二級河川祓川の上流域にあたり、南側から順に帆柱、扇谷、上伊良原、下伊良原という四つの集落がある。以前はこの四つの集落をもって伊良原村が形成されていたが、昭和31年（1956）に隣接する城井村とともに犀川町に合併した。面積は37.46k㎡で、そのうち90％以上が山林である。標高は南部の最高所で800m、北部の下伊良原付近で150m前後である。年平均気温は上伊良原地区14度、下伊良原地区15度で県下有数の寒冷地域であり、日照時間も少なく雨も多い山地型気候区である。産業はやはり地形の特質を活かした農林業が盛んで、棚田による稲作や林業、炭焼きの他、近世の特産物としては菜種子の生産があり、戦中から戦後にかけては石炭層が発見され石炭採掘も行われていた。近年では椎茸や茶、ミョウガ、ホオズキなどが特産品である。梅雨時にはホタルが清流に群れ、秋の彼岸には棚田の路傍に曼珠沙華が色鮮やかに咲き誇る。こうした山地ならではの豊かな自然を求めて伊良原地区を訪れる人々も少なくない。

地質を見てみると、ダム湛水域は古生代の三郡変成岩類に中生代白亜紀時代に大規模に貫入した酸性深成岩の花崗岩類が広く分布している地域であり、また一部には小規模な中性岩である閃緑岩の貫入も認められる。標高300m以上の高所では新生代・第三紀に噴出した英彦山火山岩類が花崗岩類を覆って広く分布する。祓川の両側には、新生代、第四紀に属する主に亜円礫、砂よりなる段丘堆積物が標高200m付近に所々小規模に堆積する。祓川に合流する支流及び祓川の山裾部には主に花崗岩類の各礫よりなる崖錘堆積物が段丘堆積物、河床堆積物を覆って発達している。

伊良原を流れる祓川

市街地から離れた深緑豊かな伊良原では、動植物相にも希少種が見られる。伊良原の樹木相は本来はシイ・カシ類やクスノキ・ツバキ

科等の常緑広葉樹が優先する照葉樹林帯であるはずだが、現在では植樹によるスギ・ヒノキが卓越する。その他やはり二次林であるコナラ類を主とする落葉広葉樹林、河川沿いの岩角地にはアラカシ群落やタブ群落、丘陵地や尾根の緩斜面ではシイ群落等の常緑広葉樹二次林が分布する。草木類の中には絶滅危惧Ⅱ類のエビネやナツエビネの生育が確認される他、ミズマツバやホシクサ、セッコクなどの貴重種も見られる。

魚類ではカワムツが優占種として見られる他、放流が行われているウナギ・アマゴ・アユ・オイカワ・コイ・ギンブナをはじめ、ムギツク・カマツカ・ドンコなど河川の上・中流域に生息するもの、稀少種のオヤニラミなども生息する。他所では既に失われてしまった自然の河川形態がよく保存された地域である。鳥類では河川でサギ類が多く、他に希少種であるヤマセミ・カワセミも確認されている。陸域の貴重種ではハイタカやサシバなどが見られる。

哺乳類ではニホンイノシシ、キュウシュウジカが近年特に増加傾向にあり、その他にもコウベモグラ、キュウシュウノウサギ、ホンドアカネズミ、ホンドタヌキなどが確認されており、一般的な北部九州低山地の哺乳類相が見て取れる。昆虫類ではオオムラサキ、ゲンジボタル、クロセセリが貴重種として確認されている。

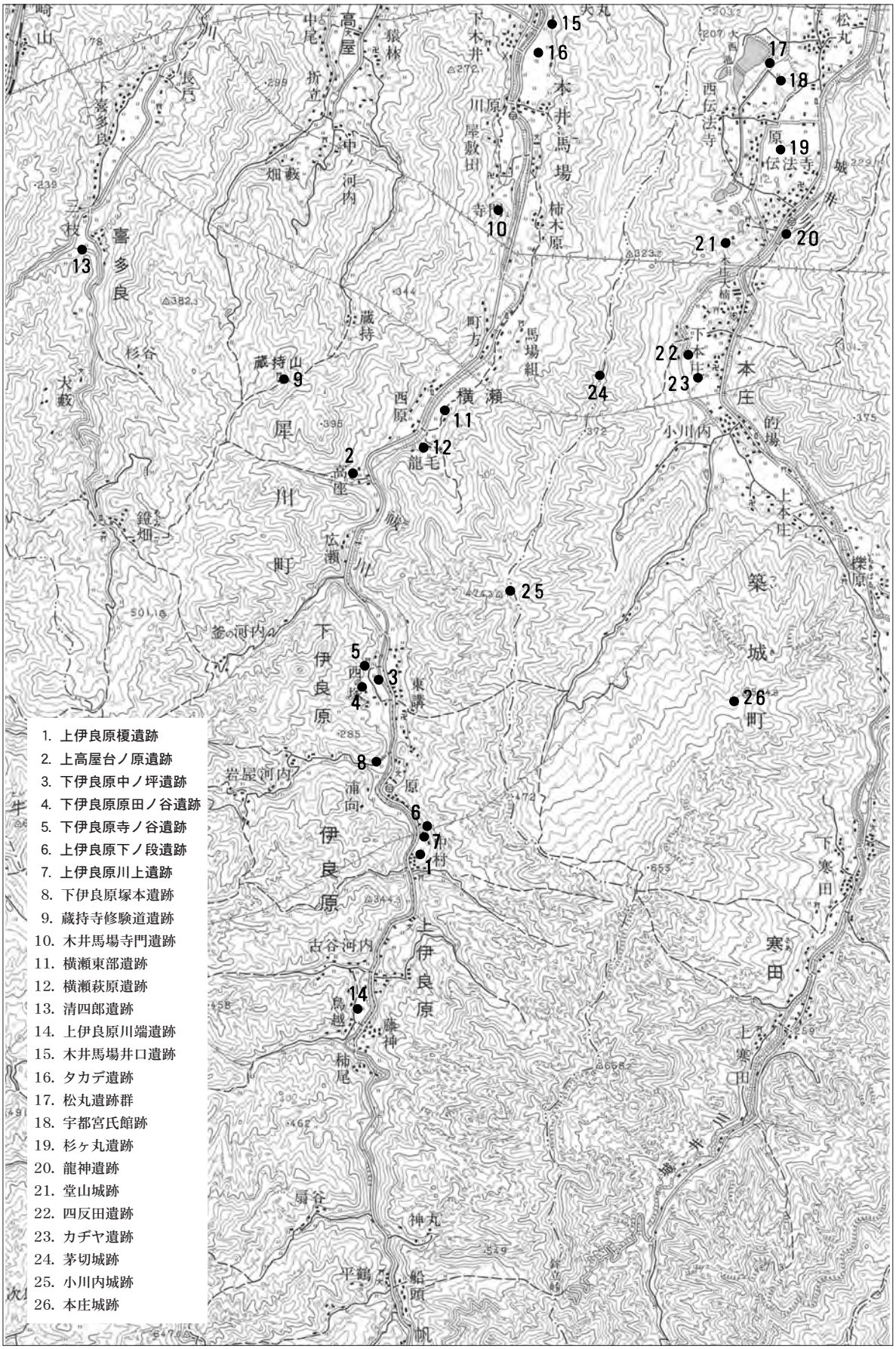
2　周辺の歴史的環境（第２図）

伊良原一帯は平地の少ない山間部であり、これまでに見つかっている遺跡は大半が縄文時代と中世である。縄文時代は食料の獲得を山間部での狩猟採集に依存した結果であり、中世は可耕地を求めて人々が山間部に進出したため、或いは天台系山岳宗教の霊山として知られる蔵持山の存在とその影響下にあった所謂宿坊集落の成立によるものと思われる。

上伊良原川上遺跡の竪穴住居跡

縄文時代では、上伊良原にある上伊良原川端遺跡が知られる。農業基盤整備事業に伴い平成９年度に発掘調査が行われ、縄文後期初頭の竪穴住居跡２棟と、良好な一括出土遺物が見つかった。また平成18年度から開始した伊良原ダム建設に伴う発掘調査では、上伊良原川上遺跡で早期・後期・晩期の土器が出土し、晩期の竪穴住居跡も確認された。下伊良原原田ノ谷遺跡からは前期轟Ｂ式土器がまとまって出土し、また火山灰分析の結果アカホヤ火山灰の良好な堆積を確認することができた。下伊良原中ノ坪遺跡では突帯文土器がまとまって出土し、当時の生活形態に再考を促す成果が得られた。

周辺地域においては、伊良原からやや下流にある横瀬東部遺跡では農業基盤整備事業に伴って平成７年度に発掘調査が行われ、包含層中から前期轟Ｂ式土器がまとまって見つかった。更に下流の木井馬場地区では、農業基盤整備事業に伴い平成４年度に発掘調査が行われた木井馬場寺門遺跡で早期・後期・晩期の遺物が比較的まとまって出土している。また谷を一つ隔てた城井川上流左岸にある築上町松丸遺跡群では、後期の竪穴住居跡や土坑が豊富な遺物とともに見つかっている。他に前期・晩期の遺物もある。



第２図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

伊良原地区では弥生時代から古代の遺跡は基本的に存在しないが、先述の下伊良原原田ノ谷遺跡からは弥生時代中期の土器が数点出土している。また今回報告する上高屋台ノ原遺跡では古代の土器が数点出土している。非継続的な様相であるが当時の生業を理解する上で重要である。

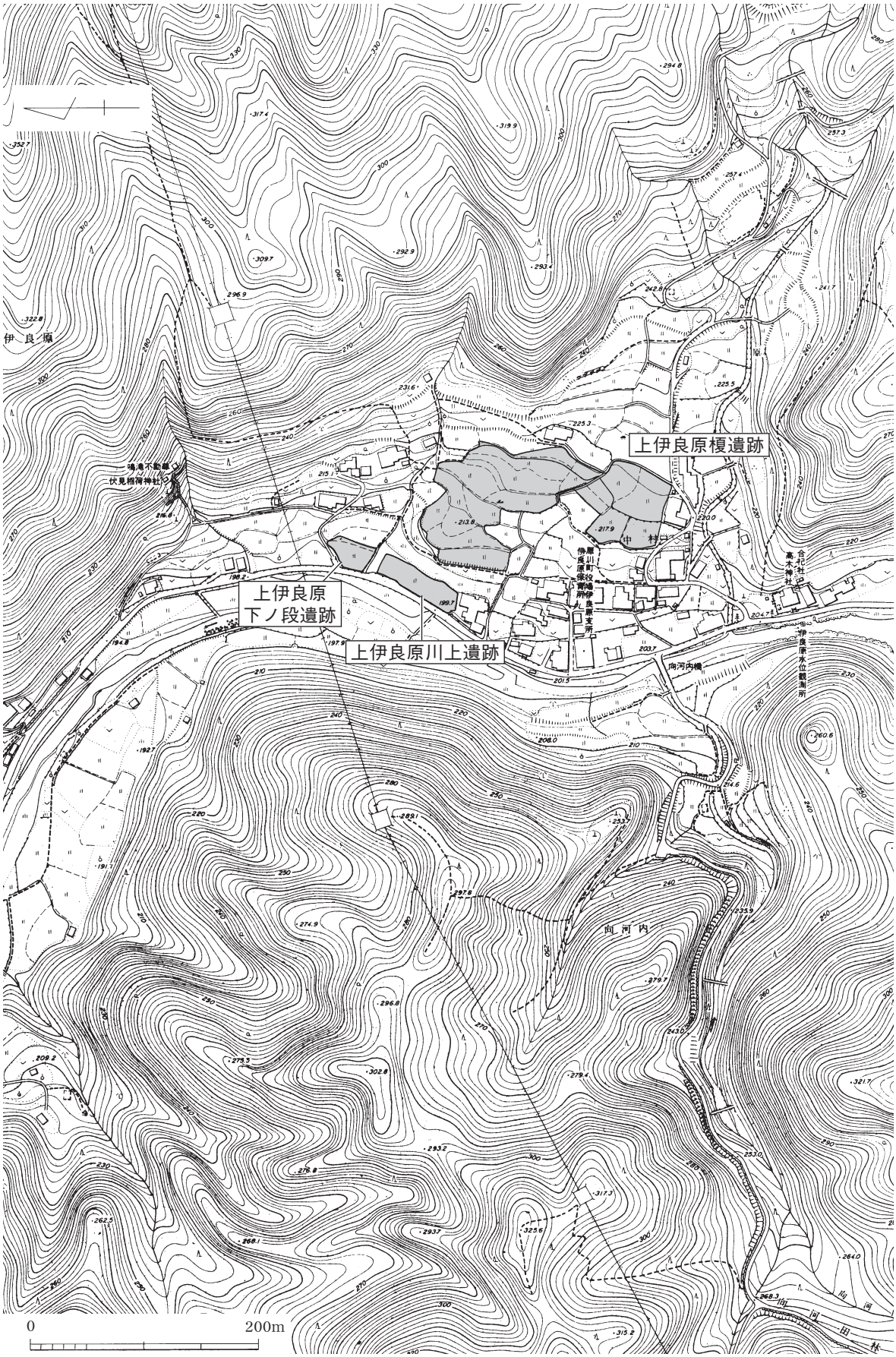
この頃の集落遺跡が見られるのは木井馬場地区より北側の、やはり広い平坦面と可耕地が確保できるところである。木井馬場遺跡寺門遺跡で弥生時代中期、国道496号の改良事業に伴い平成12年度に調査が行われた木井馬場井口遺跡で弥生前期・中期の集落跡、圃場整備事業に伴い平成２年に調査されたタカデ遺跡で前期～後期の集落跡と墓群が見つかっている。タカデ遺跡では古墳時代後期の集落跡も併せて見つかった。

蔵持山神社

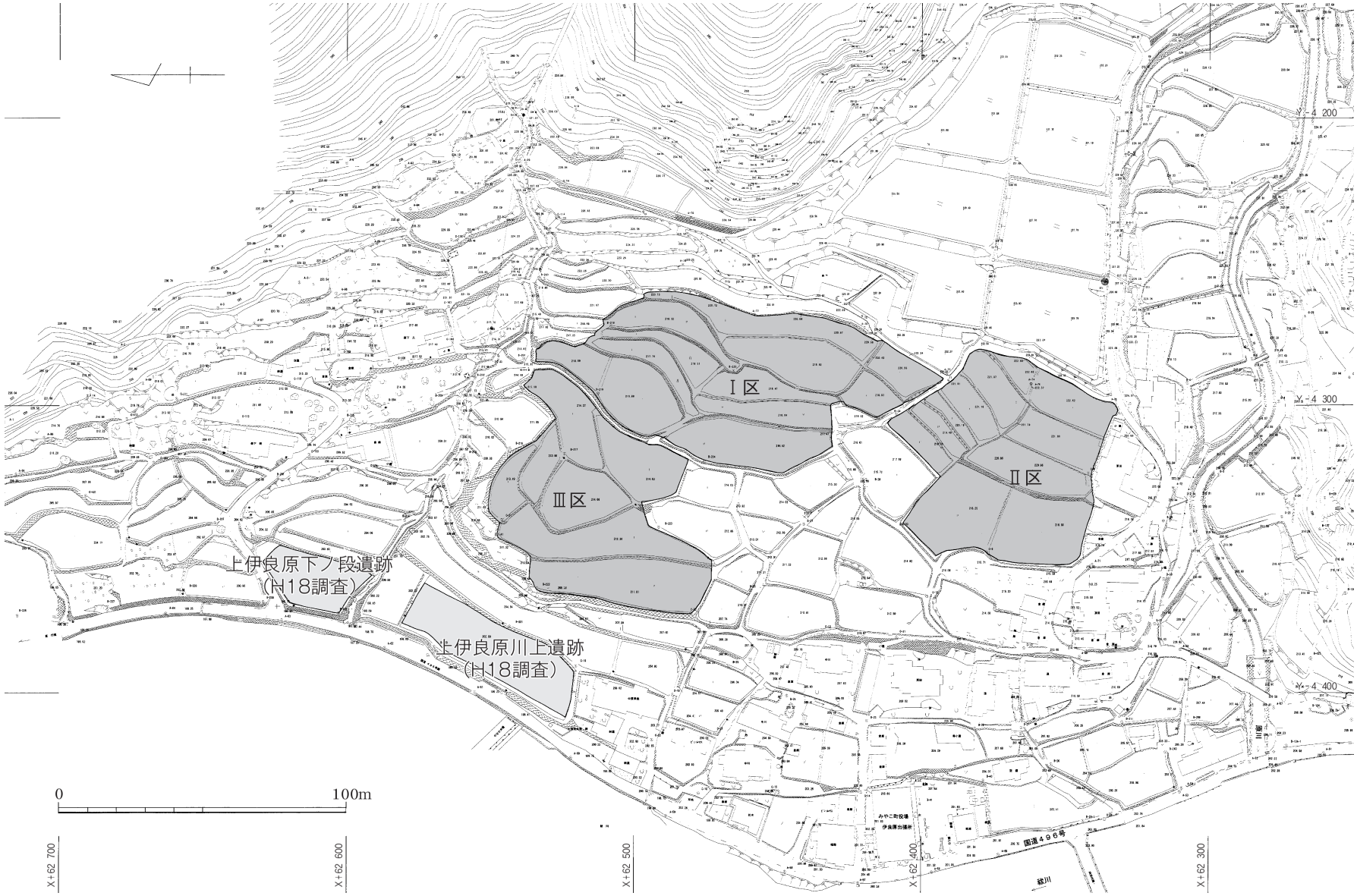
古代の遺跡として特筆すべきは、蔵持山修験道遺跡である。蔵持山は伊良原の北西にある標高478mの山である。その初現は明らかではないが、採集遺物に10世紀代のものが見られることから、遅くともこの頃には山岳信仰の場として成立していたようである。また平成16・17年度に林道建設事業に伴い蔵持山修験道遺跡の発掘調査が行われ、成果の大半は中世以降のものだったが、11・12世紀頃の巨岩祭祀跡も見つかっている。中世以降は彦山の勢力範囲に組み込まれ、彦山領の東北域を守護する彦山六峰の一つとして繁栄し、盛時には九十六の坊数を数えたという。山内に残された坊跡や窟群、石塔類は大半が中世期のものであり、発掘調査でも中世の坊跡や集石墓が見つかっている。また現在蔵持山神社の所有品に、宝治元年（1247）の紀年銘がある金堂十一面観音懸仏がある。明治初期の廃仏毀釈の難を危うく逃れ、現存する貴重な品である。

一方、中世の京築地域一帯を支配下に置いた宇都宮氏（城井氏）は14世紀前半まで本拠地を木井馬場の神楽城に置いており、蔵持山と宇都宮氏との関係も浅からぬものがあったはずである。彦山と蔵持山、宇都宮氏との関連は恐らく密接なものであったに違いない。伊良原には今でも中世石塔群が各所に残っており、また伊良原ダム関連の発掘調査でも中世の遺構が多く見つかっている。下伊良原中ノ坪遺跡や下伊良原原田ノ谷遺跡では13・14世紀の集落跡、下伊良原寺ノ谷遺跡では15～17世紀の寺院跡、上伊良原川端遺跡では中世の集石遺構が見つかっている。蔵持山から彦山へと向かうルート上に位置する伊良原地区でのこうした中世遺跡の成立・繁栄には、三者の密接な関連の所産であるとも言える。

なお、宇都宮氏の本拠地として知られる木井馬場地区では、市屋敷遺跡や下木井遺跡など、宇都宮氏に関連する重要な遺跡の発掘調査例がある。また本拠地の移転先である築上町本庄では、本庄立屋敷遺跡で14世紀前半の建物跡が見つかっており、更に同町松丸にある宇都宮氏館跡は保存を目的とした範囲内容確認調査が平成11～15年度に町教育委員会の手によって行われた。このように、これまで文献史料でしか窺えなかった伊良原とその周辺の歴史的環境は、近年の発掘調査によって次第に明らかになりつつある。



第３図　上伊良原榎遺跡　周辺地形図（1/5,000）



第４図　上伊良原榎遺跡　調査区位置図（1/2,000）

Ⅲ　調査の内容

1　上伊良原榎遺跡

1）遺跡の概要（第 3 ～ 5 図・付図）

上伊良原榎遺跡は、京都郡みやこ町犀川上伊良原118、125、128、175、185、186、187、188、190、191、192、195に所在した遺跡である。祓川の右岸にあり、祓川とその支流の小河川によって形成された中位段丘面上に立地する。遺跡の標高は213m～222m。発掘調査前の地目は水田、畑地。調査面積は14,076㎡である。

伊良原地区の中でも数少ない開けた土地が広がる区域であり、また位置的にも伊良原の中央にあたることから「中村地区」と呼ばれ、村の時代には旧伊良原村役場が置かれていた。現在でも役場の支所や小学校など地域の象徴である建物が置かれ、また彦山七大行事社の一つである上伊良原高木神社が置かれるなど伊良原の中心的役割を担う地区である。

発掘調査を行うにあたっては、先述のとおり遺跡を大きくⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区の 3 つに区分し、Ⅰ区から調査を開始した。まず中・近世遺構面である第Ⅰ文化層の調査を行い、第Ⅰ文化層の調査完了後、縄文時代の遺物が確認された場所や予想された場所に 4 mメッシュのグリッドを設定、グリッド毎に層の確認を行いながら掘削を進めていった。縄文時代の包含層は後述するように第Ⅱ～第Ⅳの 3 つの文化層に分かれたため、各文化層でそれぞれ遺物取り上げや遺構確認作業を繰り返しながら調査を進めていった。

発掘調査によって確認した主な遺構は、縄文時代の竪穴住居跡 4 基、集石 2 基、土坑21基、中・近世の掘立柱建物跡 6 棟、墓 7 基、土坑48基、溝 6 条、集石 1 基、石列 1 条である。出土遺物は、旧石器時代・縄文時代・中・近世におよぶ。旧石器時代の石器は数点出土したに過ぎない。縄文時代は早期・前期・後期の遺物が見られ、早期は柏原式土器と呼ばれる刺突文土器、押型文土器とこれらに伴う石器、前期は数点の轟式土器、後期は西和田式土器を中心に後期前半前後の遺物が出土した。グリッド調査によって出土した土器の点数は1,852点、石器は1,949点を数え、中近世の遺構や表土などから出土した点数を含めるとその数はさらに多くなる。

中・近世は12世紀後半～16世紀の土師器、土師質や瓦質の雑器類、輸入陶磁器、国産陶磁器、土製品、石製品、金属製品等が出土した。

2）基本層序（図版17、第 6 図）

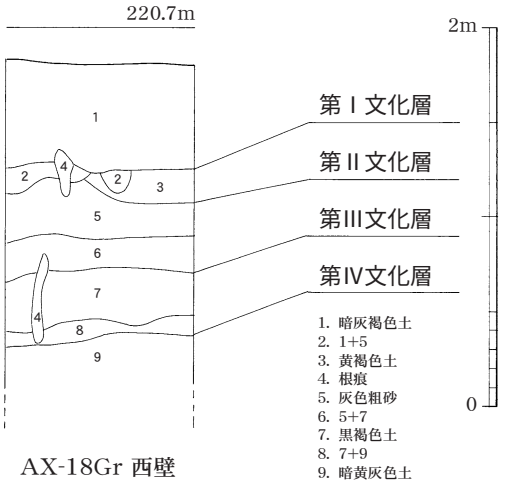
第 6 図はＡＸ－18Gr西壁の土層図で、上伊良原榎遺跡の基本的な層序である。上伊良原榎遺跡の旧地目は水田であったため、地表面には耕作土、その下層には黄灰色土の水田床土が堆積する。この図は耕作土と床土を除去した段階のものである。最上層には第 1 層暗灰褐色土が厚く堆積する。この層は中世の遺物を含んだ包含層である。この層と第 3 層黄褐色土との区別は明瞭であり、第 3 層の上面を最初の遺構面と判断し遺構確認作業を行った。従って中世の包含層である第 1 層暗灰褐色土層を上伊良原榎遺跡の第Ⅰ文化層と設定した。

第 2 層は第 1 層と第 3 層の混成土層である。第 3 層黄褐色土はこのグリッド付近ではあまり堆積状況が良くなかったが、他の場所では良好に堆積する層である。黄褐色を呈する地点や、場所によっては黄橙色や黄茶色を呈する所もある。概して肌理が細かく締まりのない土質である。この

第５図　上伊良原榎遺跡　グリッド配置図（1/800）

層は過去の発掘調査の成果でアカホヤ火山灰に由来する層であることが判明している。その下層にある第5層灰色粗砂層とは明瞭に区分できるため、灰色粗砂層上面で遺構確認作業を行った。従って第3層黄褐色土層を第Ⅱ文化層に設定した。

第5層灰色粗砂は遺跡の南側に位置するⅡ区では良好な堆積が確認されたが、他の地点ではあまり良好な堆積状況ではなかった。従ってⅡ区に限定した文化層ではあるが、第7層との混成土層である第6層も含めて第Ⅲ文化層に設定し、第7層上面で遺構確認作業を行った。



第6図　上伊良原榎遺跡　基本土層図（1/40）

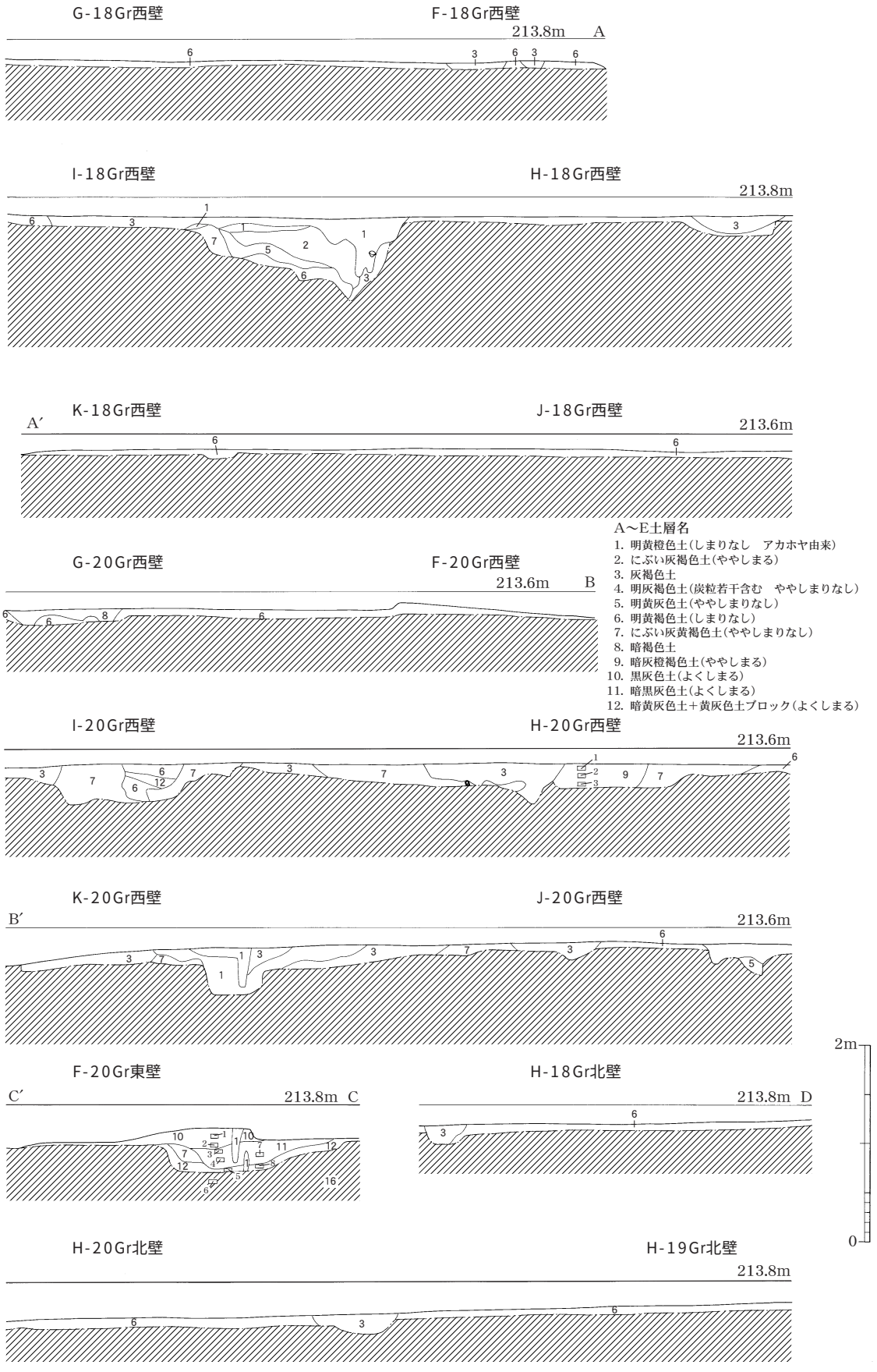
第7層黒褐色土層は遺跡全体に広がる層であるばかりでなく、伊良原地区全体で確認できる層である。やはり過去の調査でこの層から縄文時代早期以前の遺物が出土することが確認されていたため、この第7層や第9層暗黄灰色土層との混成土層である第8層を第Ⅳ文化層に設定し、下層の第9層上面で遺構確認作業を行った。

第9層暗黄灰色土層は礫を多く含んだ緻密な層で、数カ所の掘削により無遺物層であることが確かめられたため、この層の確認をもって掘削終了の目安とした。

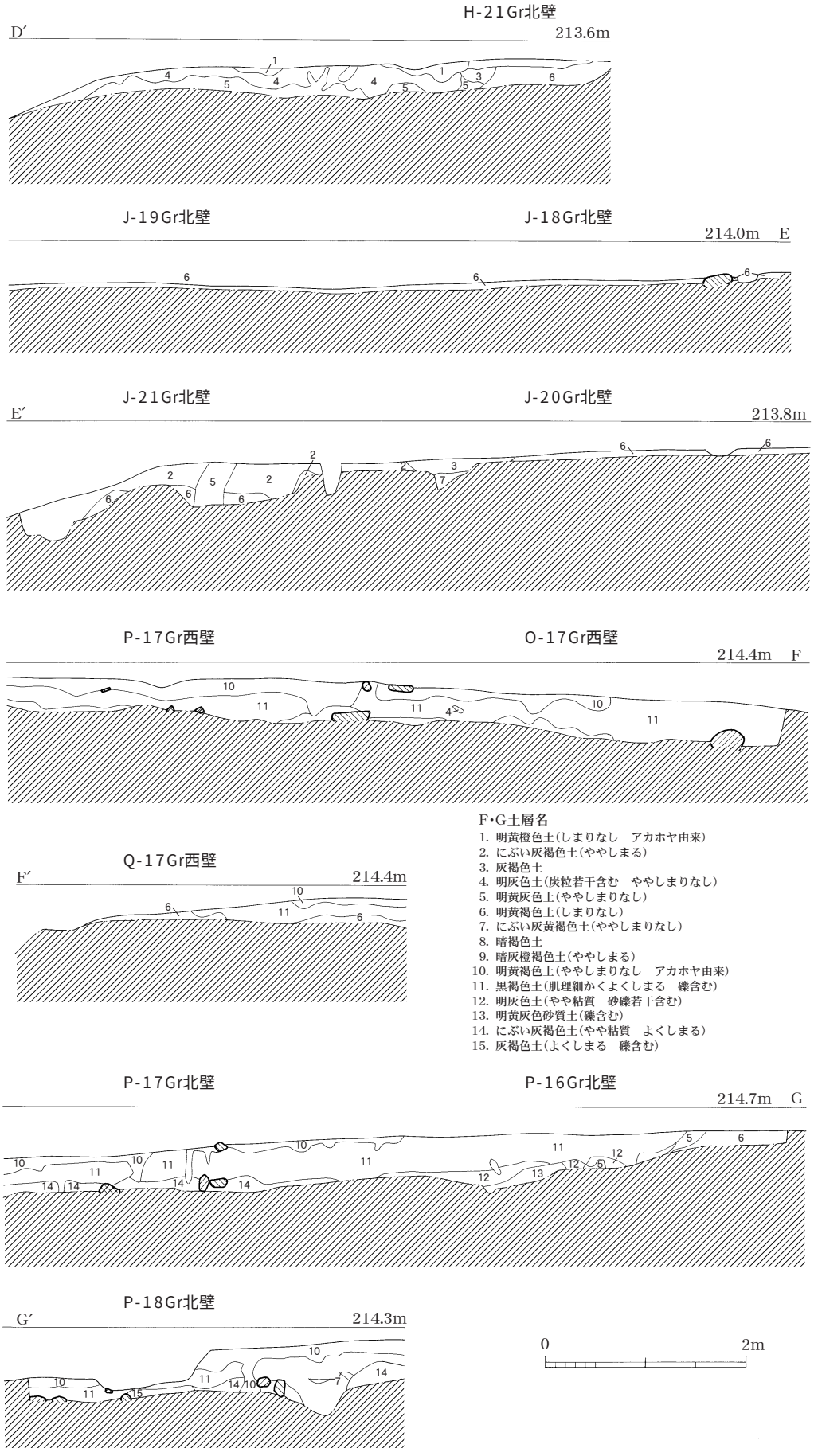
第7図～第15図は縄文時代包含層の調査を行った各グリッドの土層図である。第7・8図A－A’B－B’C－C’D－D’E－E’各断面土層図は、Ⅲ区北側に設定したF－17～K－21Grの土層図である。この一帯は舌状に突き出た広い平坦面であり、調査前から遺跡の存在が予想されていた所である。確認調査や表土掘削の結果、この一帯は土砂流出や後世の耕作等により堆積が良好ではなく、縄文時代の包含層は既に失われており、耕作土の下層にはすぐに無遺物層である明黄灰色土や黄褐色土が検出された。しかしこの層上面では縄文時代の遺構が確認されたため、第Ⅳ文化層として調査を行った。

A－A’間の土層では縄文時代の包含層は既に削平され、無遺物層の第6層が露出していることが判る。B－B’間の土層では、第3層灰褐色土や第7層にぶい灰黄褐色土が見られるように薄い包含層が残る。この一帯の包含層は他の地点と比べると異質で、前述した基本層序のどれにも当てはまらない質・色調の包含層が堆積する。恐らく流出や二次堆積が繰り返された結果であろう。他地点との比較検討は難しいが、少なくとも第1層よりも下層にあることから、第3層や第7層はアカホヤ火山灰以前の時期に位置付けられる層である。D－D’間やE－E’間ではH－21GrやJ－21Grなど西側の緩斜面で包含層の堆積が見られる。ここでは一部にのみアカホヤ由来の第1層明黄橙色が残るが、大半は第1層の下層に位置する第4層明灰色土や第5層明黄灰色土である。これらの層もアカホヤ火山灰以前に位置付けられる。

A－A’間のI－18Gr西壁では49号土坑の断面が見えるが、ここでは上層にアカホヤ由来の第1層明黄橙色土、中層に第2層にぶい灰褐色土、下層に第5層明黄灰色や第3層灰褐色土が堆積する。49号土坑では第1層明黄橙色土の存在からアカホヤ降灰以後の遺構であると推察される。



第７図　上伊良原榎遺跡　土層図①（1/60）



第8図　上伊良原榎遺跡　土層図②（1/60）

Ｂ－Ｂ’間のＨ－20Gr西壁では第９層暗灰橙褐色土の３箇所で植物珪酸体分析のための試料採取を行った。その結果、ミヤコザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Ａ、および樹木（照葉樹）のクスノキ科なども認められた。

Ｃ－Ｃ’間のＦ－20Gr東壁は４号竪穴住居跡の覆土にあたるが、ここでは第10層黒灰色土や第11層暗黒灰色土などが堆積する。恐らく他の地点の黒褐色土と同質のものと思われる。ここでも土壌分析試料の採取を行い、第10層試料２に含まれる炭化物の加速器質量分析法（ＡＭＳ法）では11280±35年ＢＰ（２σの暦年代でＢＣ11300～11140年）、第11層試料7の堆積物では9895±35年BP（BC9450～9270年）という年代値が得られている。

同じく植物珪酸体分析を行った結果、第12層の試料５と、地山から採取した試料６ではミヤコザサ節型が比較的多く検出され、樹木（その他）も認められた。第11層（試料３、４）では、ミヤコザサ節型が増加し、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Ａなどが出現している。

第８図Ｆ－Ｆ’Ｇ－Ｇ’各断面土層図は、Ⅲ区の東側に設定したＯ－16～Ｑ－18の各グリッド付近の土層図である。この一帯は緩斜面地形で、第Ⅰ文化層調査終了時に第10層アカホヤ由来の明黄褐色土層や第11層黒褐色土が露出していたため、第Ⅱ文化層と第Ⅳ文化層の調査を実施した。

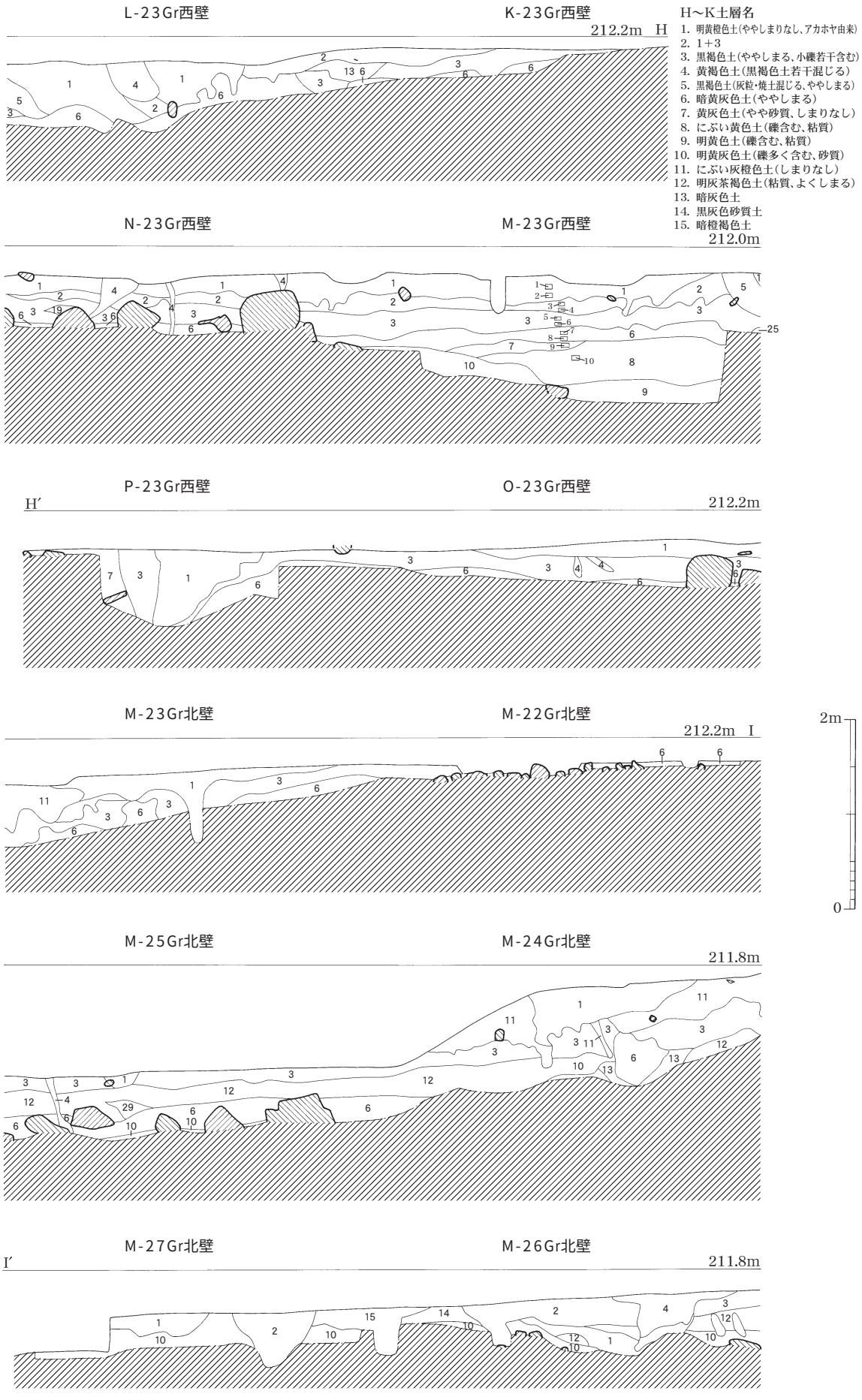
Ｆ－Ｆ’Ｇ－Ｇ’両断面土層図とも、第10層の堆積はせいぜい厚さ20ｃｍ、大半は10ｃｍ程であまり良好ではなく、グリッド調査の範囲もＯ－17Gr～Ｑ－18Grにとどまる。第11層は場所によっては40cm程の厚さがあり、良好に堆積する。グリッドもＬ－19～Ｑ－18Grの範囲に及ぶ。

第９・10図Ｈ－Ｈ’Ｉ－Ｉ’Ｊ－Ｊ’Ｋ－Ｋ’各断面土層図は、Ⅲ区西側に設定したＫ－23～Ｑ－24の各グリッド付近の土層図である。この一帯は緩斜面地形で、第Ⅰ文化層調査終了時にアカホヤ由来の第１層明黄橙色土が良好に堆積しており、その下層には第５層黒褐色土がやはり良好に堆積していることを確認したため、第Ⅱ文化層と第Ⅳ文化層の調査を実施した。

良好な堆積を示すＨ－Ｈ’間のＭ－23Gr西壁の土層図を見てみると、最上層に第Ⅱ文化層である第１層明黄橙色土が約40ｃｍの厚さで堆積する。これはアカホヤに由来する層できめ細かく締まりがない。第２層は第３層との混成土層、第３層は第Ⅳ文化層である層黒褐色土で、ここでは炭粒や焼土が若干混じる。堆積は良好で40ｃｍ程の厚さがある。第６層以下は無遺物層である。なお、このＭ－23Gr西壁では土壌分析のための試料採取を行っており、第８層試料10ではミヤコザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族Ａなども認められるという結果を得た。７層から２層でもおおむね同様の結果であるが、チマキザサ節型、樹木（その他）などが出現している。第１層試料１・２ではネザサ節型や樹木のアワブキが出現し、チマキザサ節型は見られなくなっている。

Ｍ－25Gr～M27Grは他よりも１ｍほど低い位置にあるグリッドである。この一帯でもやはり第１層の堆積が見られたため調査を行ったが、第３層の堆積は良好ではなく、また遺物の出土もあまり無かったため周辺域への調査範囲の拡大は行わなかった。

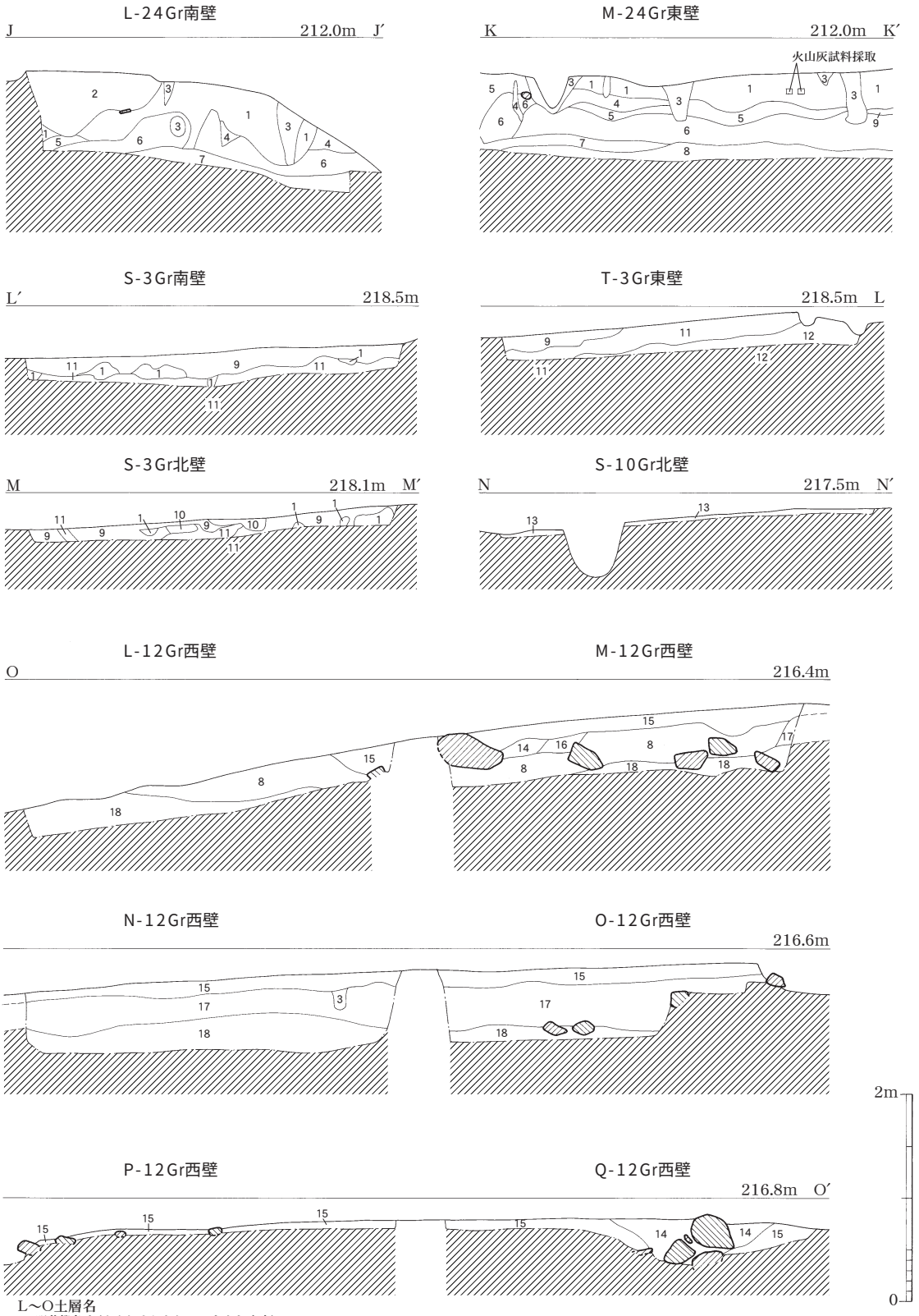
Ｊ－Ｊ’のＬ－24Gr南壁では第３層黒褐色土から炭が採取できたため試料採取を行い、ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を行った。結果は4115±25年ＢＰ（BC870～2800、2760～2570年）という結果が得られ、二次堆積による混入の可能性が想定される結果となった。また、Ｋ－Ｋ’はＭ－24Gr東壁の土層図であるが、ここでは第１層明黄橙色土の堆積が特に良好だったため火山灰分析のための試料採取を行い、鬼界アカホヤ火山灰及びその二次堆積物という結果を得た。



H～K土層名

1. 明黄橙色土(ややしまりなし、アカホヤ由来)
2. 1＋3
3. 黒褐色土(ややしまる、小礫若干含む)
4. 黄褐色土(黒褐色土若干混じる)
5. 黒褐色土(灰粒・焼土混じる、ややしまる)
6. 暗黄灰色土(ややしまる)
7. 黄灰色土(やや砂質、しまりなし)
8. にぶい黄色土(礫含む、粘質)
9. 明黄色土(礫含む、粘質)
10. 明黄灰色土(礫多く含む、砂質)
11. にぶい灰橙色土(しまりなし)
12. 明灰茶褐色土(粘質、よくしまる)
13. 暗灰色土
14. 黒灰色砂質土
15. 暗橙褐色土

第９図　上伊良原榎遺跡　土層図③（1/60）



L～O土層名

1. 明黄橙色土(ややしまりなし　アカホヤ由来)
2. 暗黄橙色土(焼土　砂粒含む　しまりなし　アカホヤ由来)
3. 暗灰褐色土
4. にぶい黄褐色土(しまりなし)
5. 1＋6
6. 黒褐色土(粘質　よくしまる)
7. 暗黄灰褐色土(粘質　よくしまる)
8. 黄灰色土(粘質)
9. 明黄灰色砂質土(粗砂　マンガン含む)
10. 1＋9
11. 9と同質だがやや暗い
12. 淡灰色シルト
13. 黄茶灰色粘質土
14. 暗灰褐色粘質土(マンガン含む)
15. 明茶色粘質土(よくしまる　マンガン含む)
16. 灰褐色粘質土(ややしまる)
17. 明橙褐色土(ややしまる　礫含む)
18. 明灰褐色砂質土(礫多く含む)

第10図　上伊良原榎遺跡　土層図④（1/60）

第10図L－L’M－M’はⅠ区北東側で設定したS－3・T－3Grの土層である。ここでは他の地点では見られない第9層・第11層暗黄灰色砂質土の堆積が見られ、また第Ⅰ文化層調査時に縄文時代の遺物を採集したためにグリッド調査を行ったが、ほとんど遺物が出土しなかった。N－N’はS－10Gr北壁の土層図であるが、ここも遺物を採集したために掘削を行ったが、この場所に堆積する第13層黄茶灰色粘質土からは遺物は出土しなかった。

第11図O－O’土層図はⅠ区北側に設定したL－9～Q－13の各グリッド付近の土層図である。この一帯は緩傾斜地形で第15層明茶色粘質土が広く堆積しており、この層から縄文時代前期以降の遺物が出土する事が判ったため、第Ⅱ文化層としてグリッド掘削調査を行った。この第15層は他の地点には見られない層だが、層中から出土する遺物から縄文時代後期以降に堆積した層であることが判明している。なお、その下層に堆積する第17層や第18層は無遺物層である。またQ－13～Q－15Grでは黒褐色土層が確認されたため第Ⅳ文化層として調査を行ったが、遺物はほとんど出土しなかった。

第11・12図P－P’Q－Q’R－R’S－S’土層図はⅠ区東側に設定したV－4～AE－8Gr付近の土層図である。この一帯は緩傾斜地形で、アカホヤに由来する明黄灰褐色土や黒褐色土の縄文時代遺物包含層が良好に堆積することが確認されたため、第Ⅱ・第Ⅳ文化層としてグリッド調査を行った。

P－P’を見てみると、上層には10～20cmの厚さでアカホヤ由来の第1層明黄灰褐色土が堆積する。その下層には第2層・第3層の黒褐色土層が20～40cmの厚さで堆積する。第4層明黄灰色砂質土は無遺物層である。

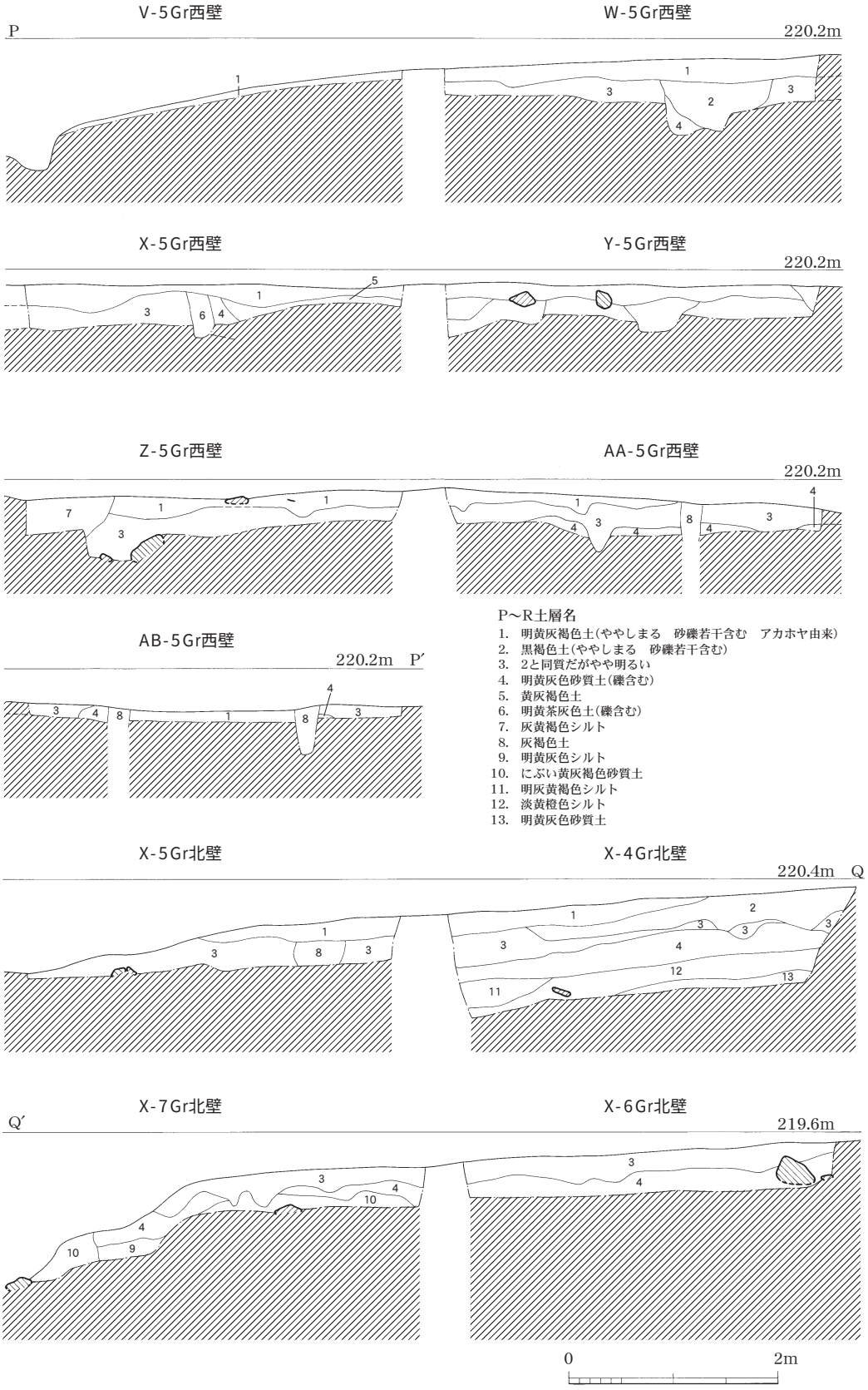
Q－Q’では、X－6GrやX－7Gr北壁には第1層の堆積は見られない。この付近では既に第1層は流失或いは削平されており、層としては確認できなかった。しかし第3層上面には第1層を覆土とする遺構が確認されたため、これらの遺構を第Ⅱ文化層として調査を行った。同様にR－R’でもアカホヤに由来する明黄灰褐色土層は既に失われており、黒褐色土層上面にある遺構の調査を第Ⅱ文化層の調査として行った。

S－S’はAA－11Gr～AC－11Gr間の土層図であるが、ここでは明黄灰褐色土層の遺構は全く見られなかったため、第Ⅳ文化層の黒褐色土層の調査のみ実施した。

第13図T－T’U－U’土層図はⅠ区西側のT－15～AA－16Gr付近の土層図である。T－T’の土層を見てみると、T－16GrやU－16Grでは薄く、他のグリッドでは部分的にアカホヤ由来の第1層暗黄褐色土が堆積していることが判る。従ってこの層の調査を第Ⅱ文化層の調査として実施した。またここでは第1層の下層に茶褐色土層の堆積が見られ、明瞭に分離できたため分層発掘を行ったが、遺物はほとんど出土しなかった。さらにAA－15、AB－15・16Grでは黒褐色土層の堆積が見られたため、第Ⅳ文化層として調査を行った。

第14・15図V－V’W－W’X－X’土層図はⅡ区東側に設定したAR－14Gr～BB－16Gr付近の土層図である。この一帯は緩斜面地形でアカホヤ由来の明黄橙色土や黒褐色土の良好な堆積が見られ、またこのⅡ区にのみ明灰色砂質土の良好な堆積が見られ、これらの各層中に遺物が包含されることが判ったため第Ⅱ文化層～第Ⅳ文化層としてグリッド調査を行った。

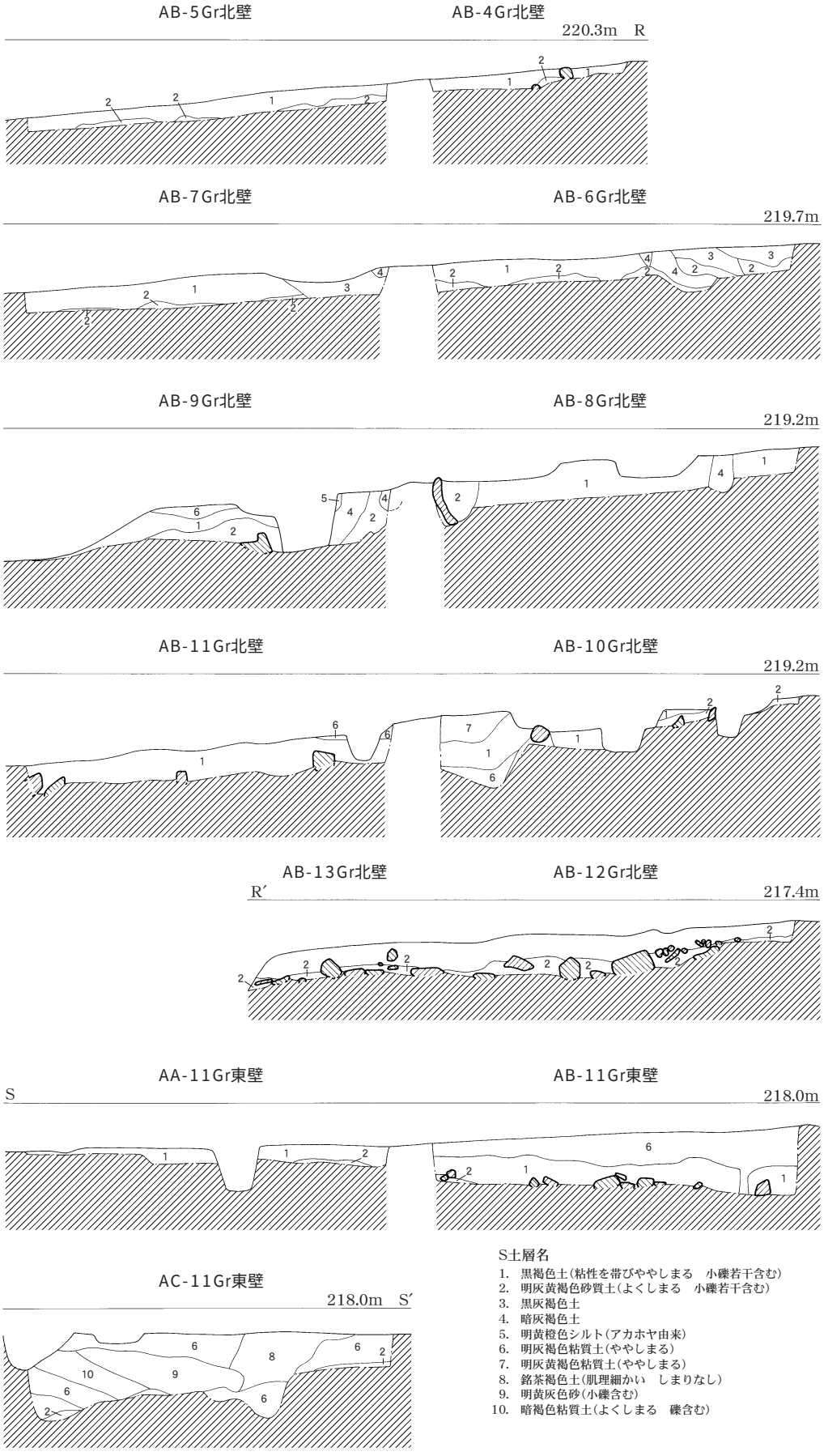
V－V’を見ると、第2層明黄橙色土の堆積は部分的に20cm程の堆積が見られるものの全体的に見るとあまり良好な堆積状況とは言えない。第4層明灰色砂質土は粗砂を多く含み良く締まっ



P～R土層名

1. 明黄灰褐色土(ややしまる　砂礫若干含む　アカホヤ由来)
2. 黒褐色土(ややしまる　砂礫若干含む)
3. 2と同質だがやや明るい
4. 明黄灰色砂質土(礫含む)
5. 黄灰褐色土
6. 明黄茶灰色土(礫含む)
7. 灰黄褐色シルト
8. 灰褐色土
9. 明黄灰色シルト
10. にぶい黄灰褐色砂質土
11. 明灰黄褐色シルト
12. 淡黄橙色シルト
13. 明黄灰色砂質土

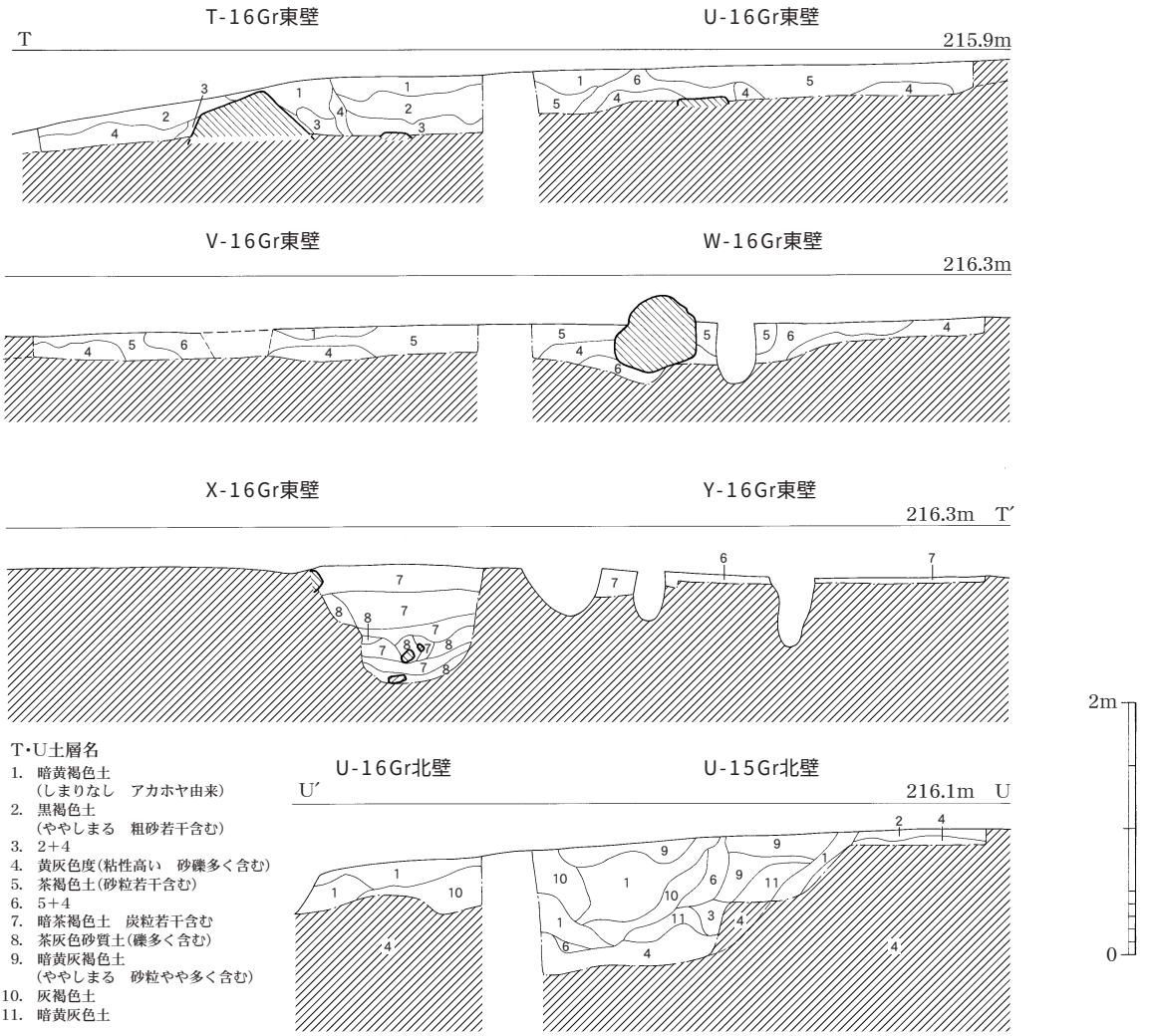
第11図　上伊良原榎遺跡　土層図⑤（1/60）



S土層名

1. 黒褐色土(粘性を帯びややしまる　小礫若干含む)
2. 明灰黄褐色砂質土(よくしまる　小礫若干含む)
3. 黒灰褐色土
4. 暗灰褐色土
5. 明黄橙色シルト(アカホヤ由来)
6. 明灰褐色粘質土(ややしまる)
7. 明灰黄褐色粘質土(ややしまる)
8. 銘茶褐色土(肌理細かい　しまりなし)
9. 明黄灰色砂(小礫含む)
10. 暗褐色粘質土(よくしまる　礫含む)

第12図　上伊良原榎遺跡　土層図⑥（1/60）



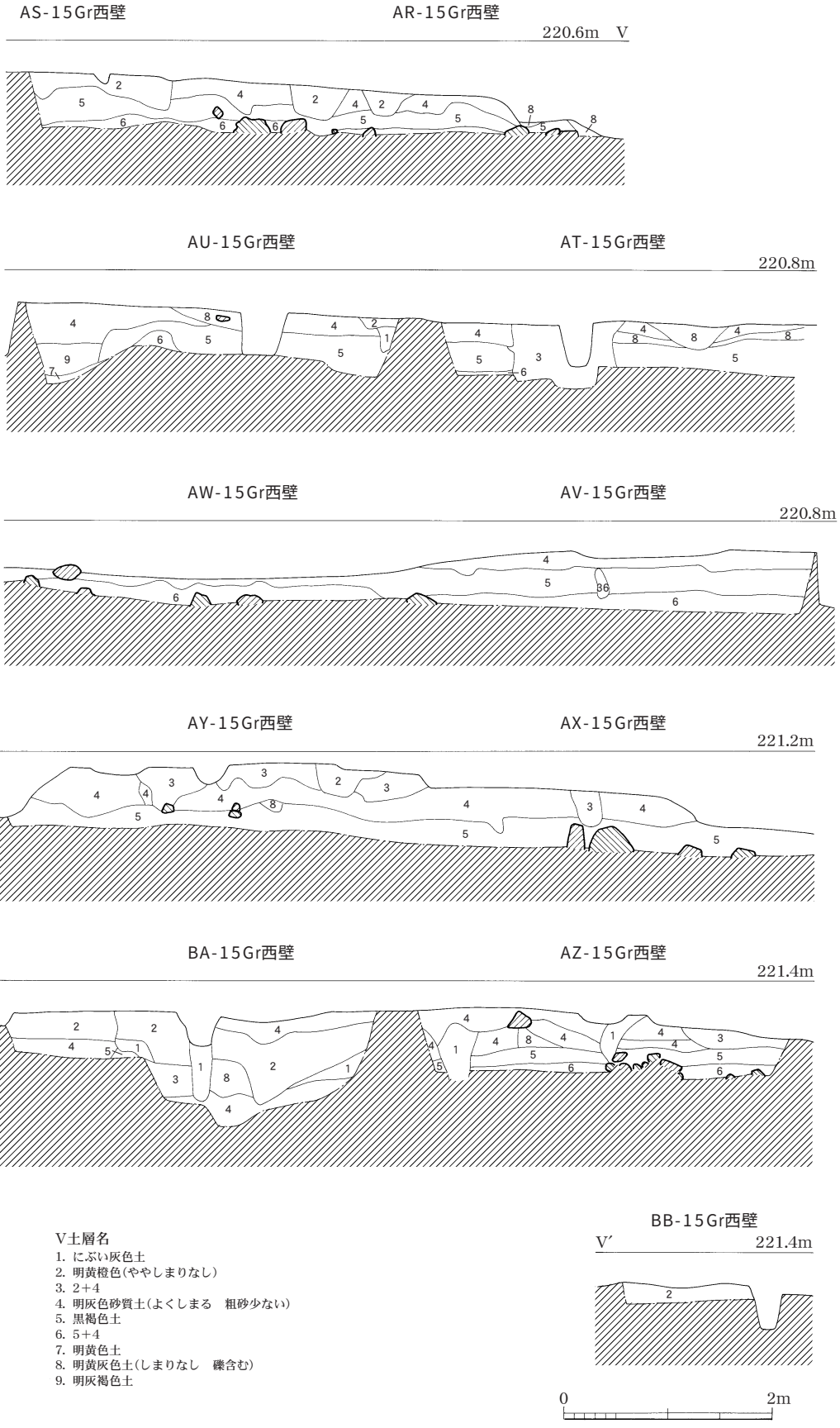
第13図　上伊良原榎遺跡　土層図⑦（1/60）

た層であり、20～40cmの厚さで堆積する。その下層に第５層黒褐色土が20～40cmの厚さで堆積する。東西断面であるＷ－Ｗ’を見ると、東側のＡＷ－13Gr北壁では既に第８層黒褐色土が露出する。西側に位置するＡＷ－16Gr～ＡＷ－18Grでは上層に第３層黄橙色土、その下層に第５層明灰色粗砂、第８層黒褐色土と続き、さらに下層にある第15層明茶色土は無遺物層である。

Ｘ－Ｘ’はＡＸ－18Gr西壁の土層図で、この遺跡の基本となる堆積状況を示す土層として既に提示したものである。

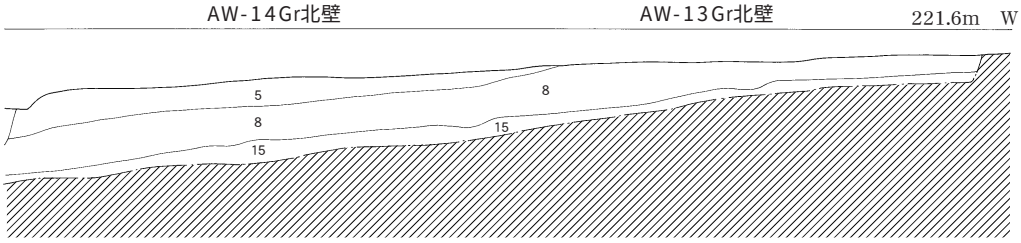
第15図Ｙ－Ｙ’は、Ⅱ区西側に設定したＡＴ－22・23Grの土層図である。ここでもやはり上層に第３層黄橙色土、その下層に第３層と第５層暗灰色粗砂が混ざった第４層、その下層に第５層の堆積が見られたが、遺物が全く出土しなかったので周辺域のグリッド調査は行わなかった。

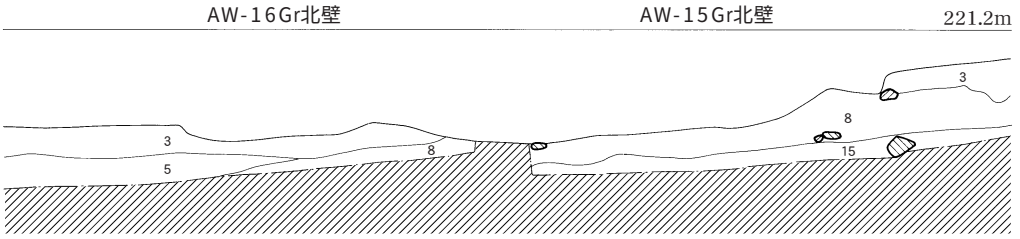
Ｚ－Ｚ’はⅡ区南西端の調査区壁面の土層図である。上層に第１層暗灰褐色土、その下層に第16層暗黄灰褐色土やアカホヤ由来の第17層黄茶色土、更に下層に第19層黒灰色土や第20層暗灰褐色土が堆積するが、やはりこの付近でも縄文時代の遺物はほとんど出土しなかったため土層の確認のみにとどめた。

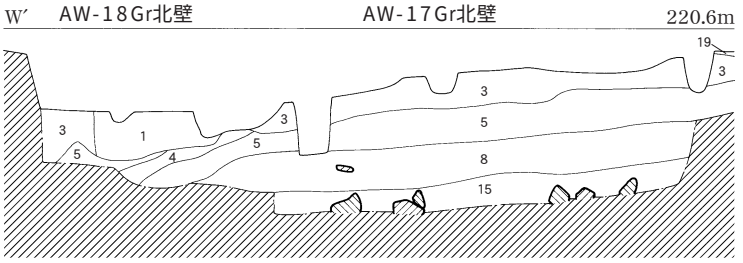


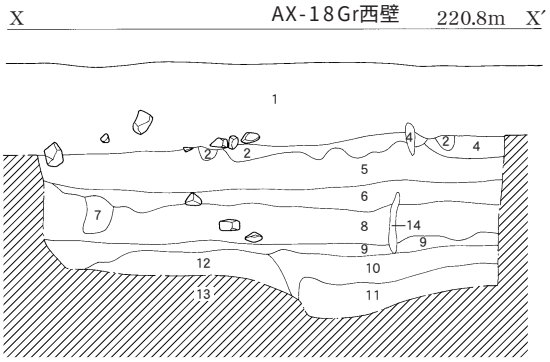
V土層名
1. にぶい灰色土
2. 明黄橙色(ややしまりなし)
3. 2+4
4. 明灰色砂質土(よくしまる　粗砂少ない)
5. 黒褐色土
6. 5+4
7. 明黄色土
8. 明黄灰色土(しまりなし　礫含む)
9. 明灰褐色土

第14図　上伊良原榎遺跡　土層図⑧（1/60）



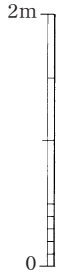


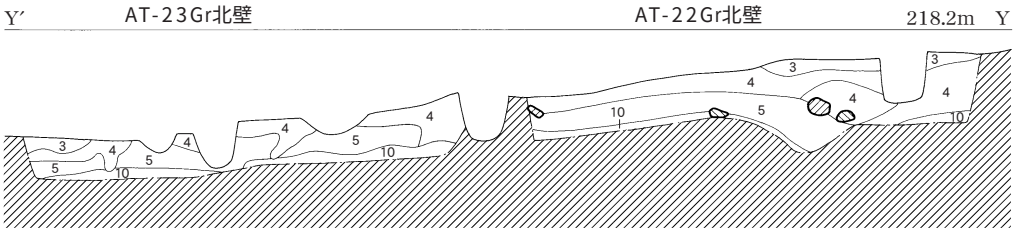


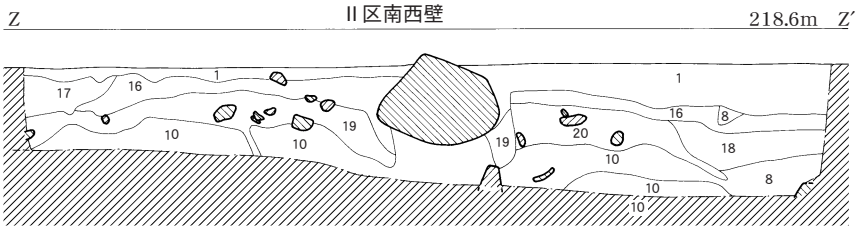


W～Z土層名

1. 暗灰褐色土(あまりしまらない　礫･粗砂含む)
2. 1+5
3. 黄橙色土(あまりしまらない)
4. 3+5
5. 明灰色粗砂(よくしまる)
6. 5+8
7. 3+8
8. 黒褐色土(よくしまる)
9. 8+13
10. 暗黄灰色土(肌理細かい　よくしまる)
11. 10よりやや暗い
12. 黄灰色土
13. 明黄灰色土
14. 根痕
15. 明黄色土(粘質　よくしまる)
16. 暗黄灰褐色土
17. 黄茶色土(アカホヤ由来)
18. 黄茶色土(小礫多く含む)
19. 黒灰色土(小礫含む　あまりしまらない)
20. 暗灰褐色土(小礫含む　あまりしまらない)







第15図　上伊良原榎遺跡　土層図⑨（1/60）

3）縄文時代の遺構と遺物

第II文化層の調査（第16～19図）

黄灰色土または黄橙色土からなる層で、肌理が非常に細かく締まりのない土質である。場所によっては色調が灰色味を強く帯びたり砂礫を含んだりする箇所もあるが、これらは二次堆積によるものと思われる。火山灰分析の結果から、この第Ⅱ文化層はアカホヤ火山灰に由来する層であることが判明している。

Ⅰ区では東側のV－4～AE－8Grで明黄灰褐色土、西端のT－15～AA－16Grで暗黄褐色土が確認され、第Ⅱ文化層として掘削を行った。また北側のL－9～Q－13Grでは明茶色粘質土が確認されたが、出土遺物から前期以降の堆積層と判断されたため第Ⅱ文化層として調査を行った。

Ⅱ区では東端部は大幅に削平を受けて無遺物層が露出していたが、東半部の中央から西側には明黄橙色土が堆積していたために第Ⅱ文化層として調査を行った。またⅡ区の西半部にもこの明黄橙色土の堆積が確認されたが、この付近は遺物を全く含まないことを確認したため面的な掘削を行っていない。

Ⅲ区では南東端で暗黄褐色土、西側で明黄橙色土を確認したため、第Ⅱ文化層として掘削を行った。同様に第Ⅱ区の東半部で明黄橙色土の堆積を確認したため掘削を行った。

以下、挿図毎に各グリッドの説明を行う。

L－9～12、M－9～13Gr（第20図）

Ⅰ区北側に設定したグリッドである。掘削前から第2層明茶色粘質土中に縄文時代の遺物が確認されたため、グリッドを設定して掘削を行った。

掘削前の地形は南から北に向かって傾斜しており高低差は100cm程ある。第2層は南半部を中心に堆積していたが、北側は既に削平されてほとんど残っていなかったため、残っている南半部を中心に掘削を行った。

掘削の結果、南半部では20cmの厚さで堆積しており、層の中から遺物の出土を確認した。なお第2層掘削後に精査を行って遺構確認を試みたが、遺構は全く確認できなかった。

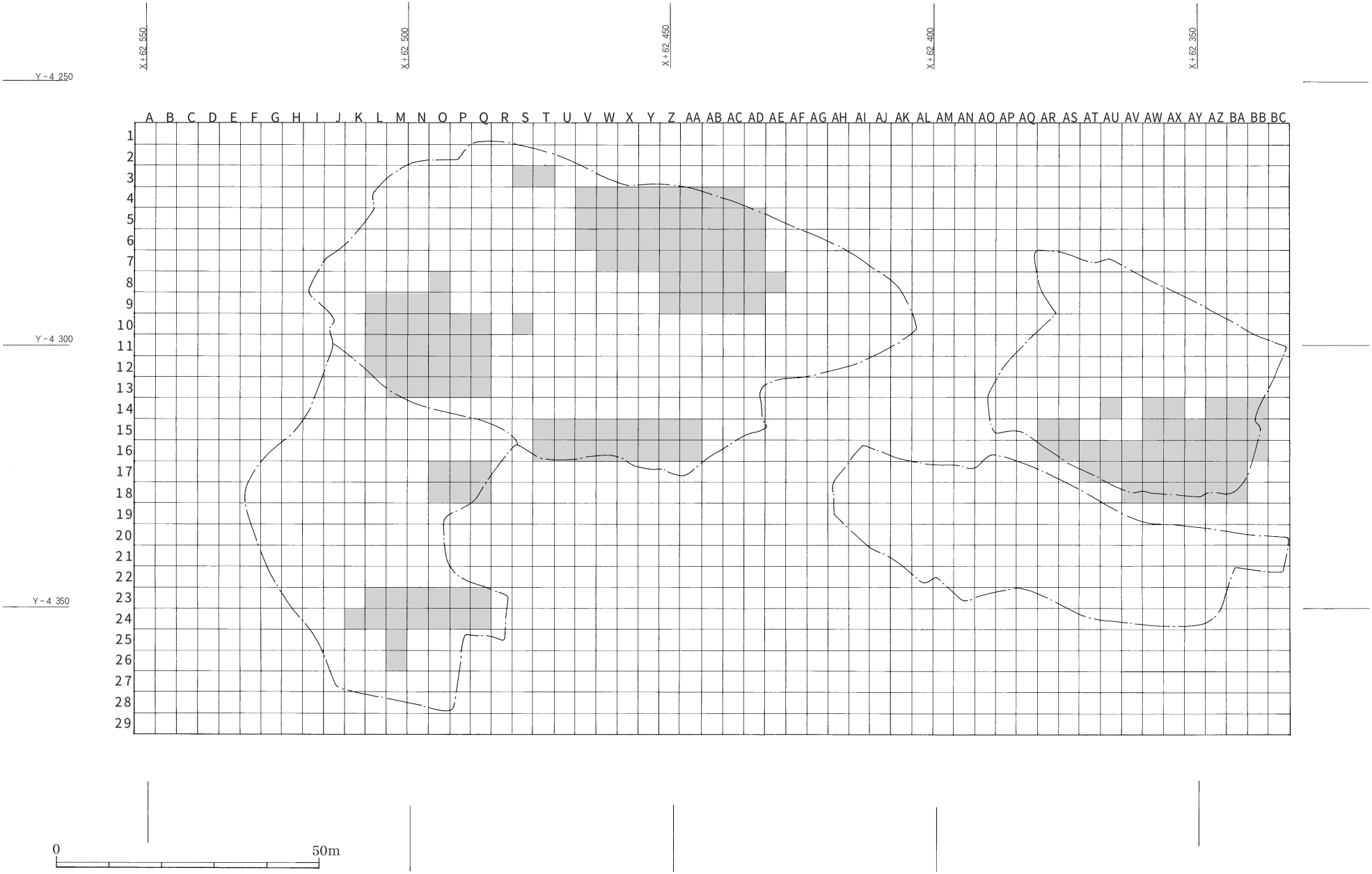
出土遺物は南半部に多く、特にM－10GrやM－11GrとM－12Gr間に集中する。M－10は安山岩チップが比較的多い。M－11・12Gr間は姫島産黒耀石のチップが集中する。土器は後期のものが数点出土した。石器は安山岩製石鏃が最も多く出土し、黒耀石・姫島産黒耀石製石鏃も出土した。他に197の姫島産黒耀石製スクレイパー、旧石器の可能性のある13の安山岩剥片、280の敲石が出土した。

N－9～13、O－9～13Gr（図版12・19、第21・22図）

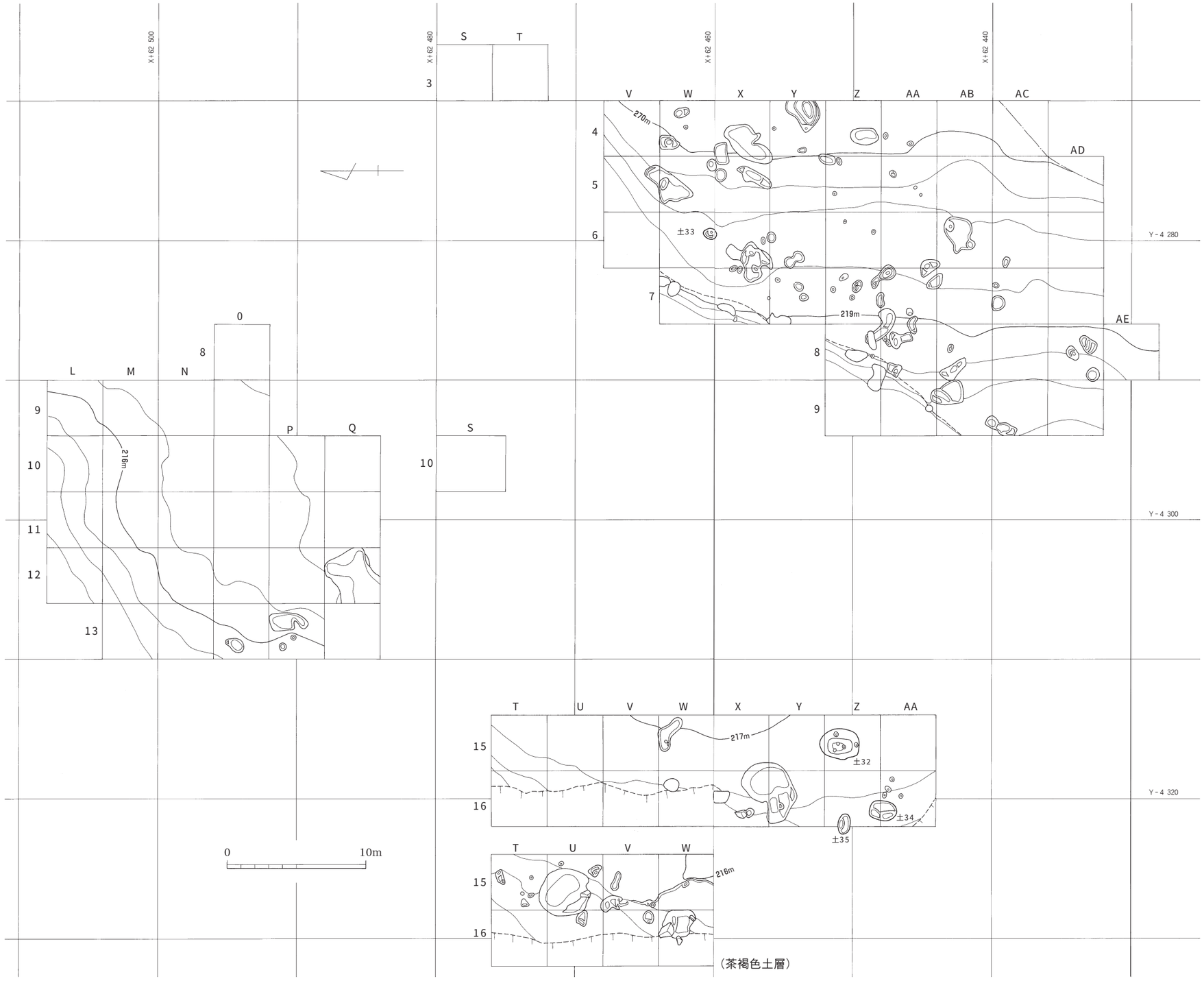
Ⅰ区北側に設定したグリッドである。

掘削前の地形は、東半部は平坦で西半部は緩やかに傾斜する。東側と西側との高低差は70cmを測る。第2層は東側ではほとんど残っておらず、西側に良好に遺存していたため西側を中心に掘削を行った。

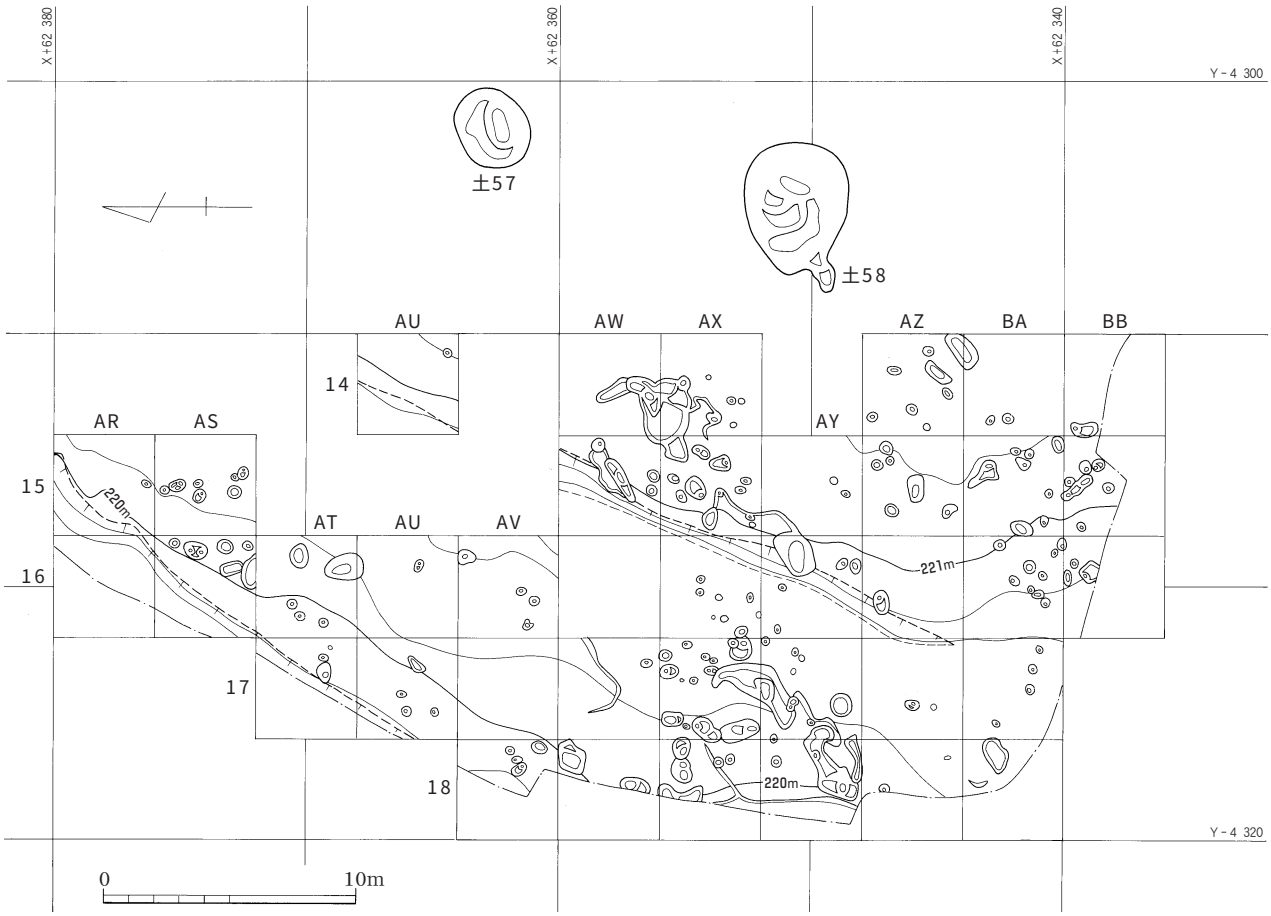
掘削の結果、西半部では20cmの厚さで堆積し、層の中から遺物の出土を確認した。掘削後に精査を行って遺構確認を試みたが、遺構はO－13Grでピットを検出した以外は確認できなかった。



第16図　第Ⅱ文化層グリッド配置図（1/1,000）



第17図　Ⅰ区第Ⅱ文化層遺構配置図（1/300）



第18図　Ⅱ区第Ⅱ文化層遺構配置図（1/300）

出土遺物はそれほど多くない。土器は早期・前期・後期のものが出土した。O－12Grでは130の土器が第22図の状態で出土した。石器は姫島産黒耀石製や安山岩製の他、151の石英製石鏃が出土した。253の珪質岩石核も出土したが珪質岩のチップはほとんど出土していない。他に241の珪質岩剥片や252の黒耀石円礫も出土した。

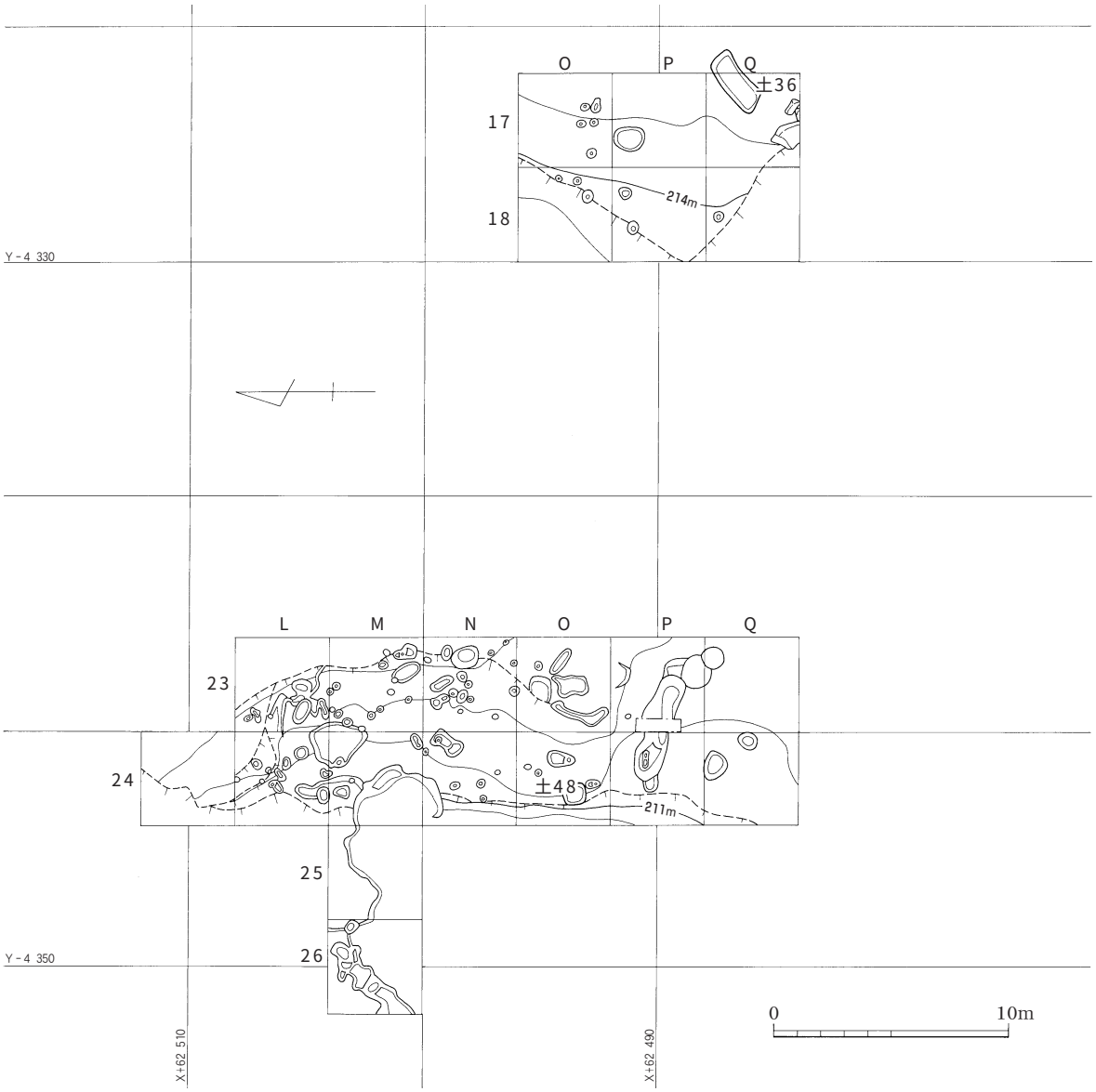
P－9～13、Q－9～13Gr（第23図）

Ⅰ区北側に設定したグリッドである。

掘削前の地形は、東側は平坦で西側は緩やかに傾斜する。東側と西側との高低差は50cmを測る。第２層は西側を中心に残っており、この部分を中心に掘削を行った。

掘削の結果、西側では10cmの厚さで堆積し、層の中から遺物の出土を確認した。掘削後の遺構面精査の結果、P－13Grでピットと土坑状の落ち込みを、またQ－12Grでは不整形の落ち込みを確認した。

出土遺物はP－12・13Grに集中する。姫島産黒耀石チップが多く、他に黒耀石や安山岩のチップも少量見られる。土器はP－13Grから後期の土器が出土している。石器はP－13Grの落ち込み中から24の黒耀石製石鏃、Q－12Grの不整形落ち込みから237の安山岩製剥片や228の黒耀石製剥片が出土した。他に222の黒耀石剥片や260の珪質岩石核が出土した。



第19図　Ⅲ区第Ⅱ文化層遺構配置図（1/300）

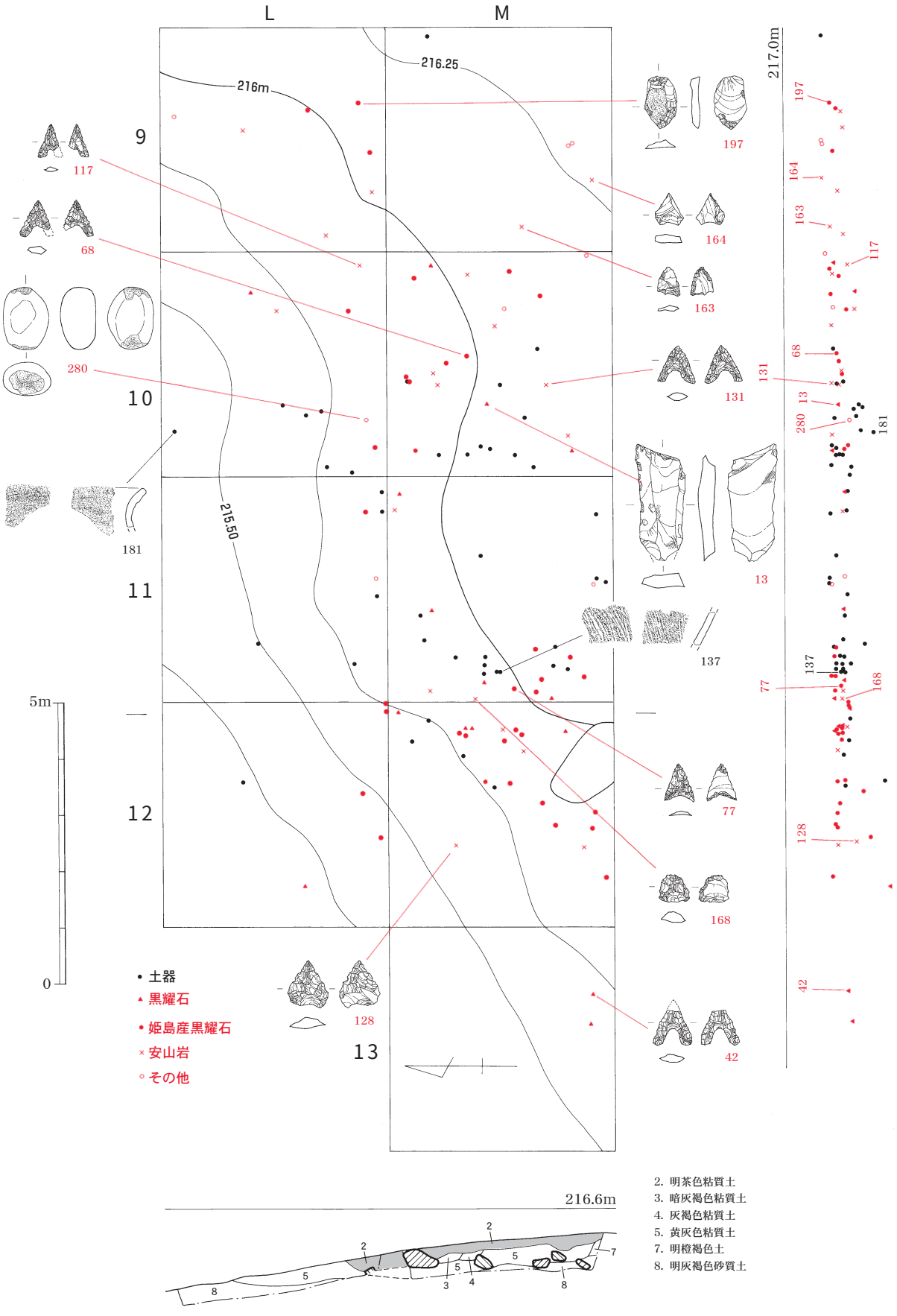
V－3～5、W－3～7Gr（第24図）

Ⅰ区東側に設定したグリッドである。

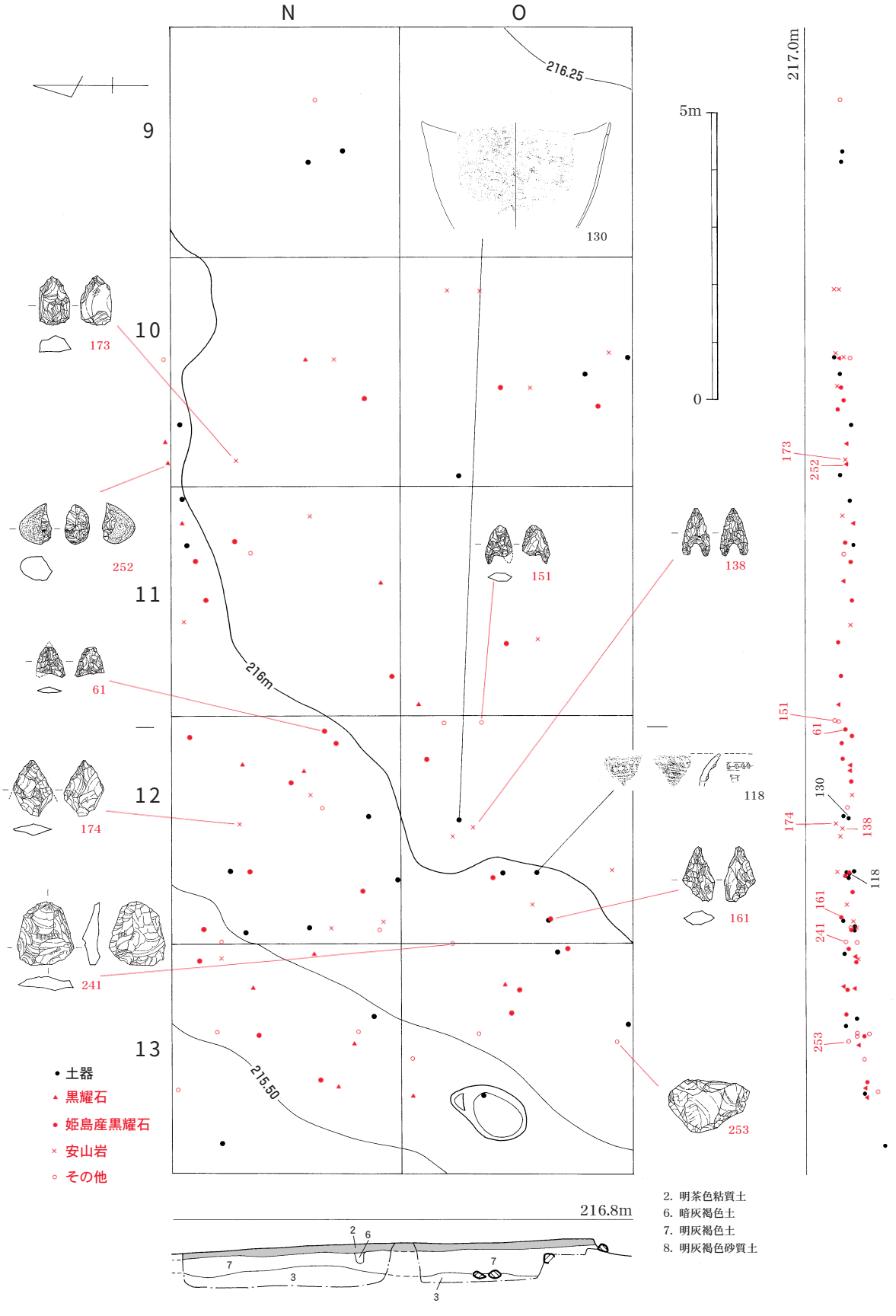
第Ⅰ文化層の調査時に既に第５層明黄灰褐色土層から縄文時代遺物の出土が見られたため、第Ⅰ文化層の調査終了後にグリッドを設定して掘削を行った。

掘削前の地形は、東側は後世の削平を受けて平坦な地形だが、西側は緩やかに北西方向へと傾斜する。第５層は東側のV－3・W－3Gr、西側のW－6・7Grでは削平されてほとんど残っていなかったが、W－5Grでは20cmの厚さで堆積が確認された。掘削後の遺構面精査の結果、W－6Grでは33号土坑を検出した。またV－5、W－4・5Grでは不整形のピットや落ち込みを検出した。

出土遺物はV－4・5、W－4・5Grから多く出土しており、特にW－5Grに集中する。ここでは黒耀石チップが非常に多く出土している。安山岩や珪質岩のチップは数点出土しているが姫島産



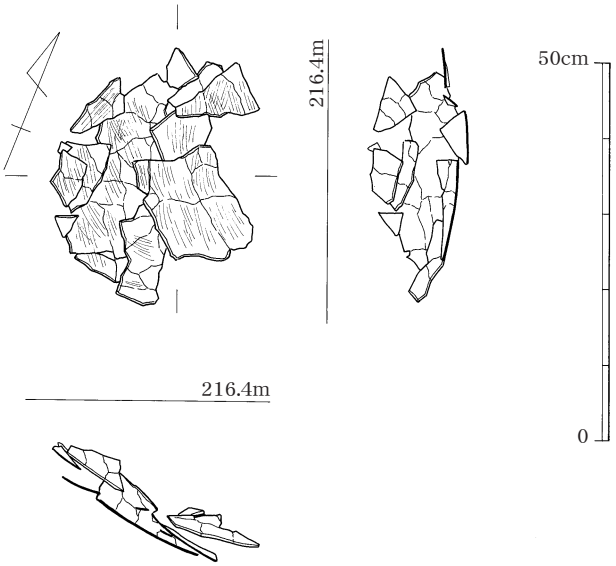
第20図　第Ⅱ文化層　L－9～12、M－9～13Gr実測図（1/100）



第21図　第Ⅱ文化層　N－9～13、O－9～13Gr実測図（1/100）

黒耀石は１点も出土していない。

土器の出土は全体を通して多くなく、図示できたものでは54の楕円押型文土器がW－5Grから、73の轟B式土器が同じくW－5Grのピット中から出土した程度である。図示した石器では、V－4Grから134の安山岩製石鏃、V－4・5Gr間から118の安山岩製石鏃、V－5Grから217の珪質岩製スクレイパー、W－4Grから46の黒耀石石鏃、122の安山岩石鏃、246の珪質岩剥片、W－5Grから32の黒耀石製石鏃、107の安山岩製石鏃、223の黒耀石剥片、258の珪質岩石核、W－5Grのピット中から55の黒耀石製石鏃、W－6Grで検出した33号土坑から29・35の黒耀石製石鏃が出土した。



第22図　O－12Gr　№130土器出土状態（1/10）

X－4～7、Y－4～7Gr（図版12、第25図）

Ⅰ区東側に設定したグリッドである。掘削前の地形は東から西へと緩やかに傾斜するが、後世の耕作地造成により削平を受け東側や中央付近に平坦面を形成する。第１層暗黄灰褐色土層はX－4・5Gr、Y－4・5Grでは20cm程の厚さで堆積するが、東端や西側は既に下層の第５層黒褐色土が露出していた。

掘削後の遺構面精査の結果、各グリッドでピットや不整形の落ち込みを検出した。落ち込みは土層観察の結果、風倒木痕であることが判明した。

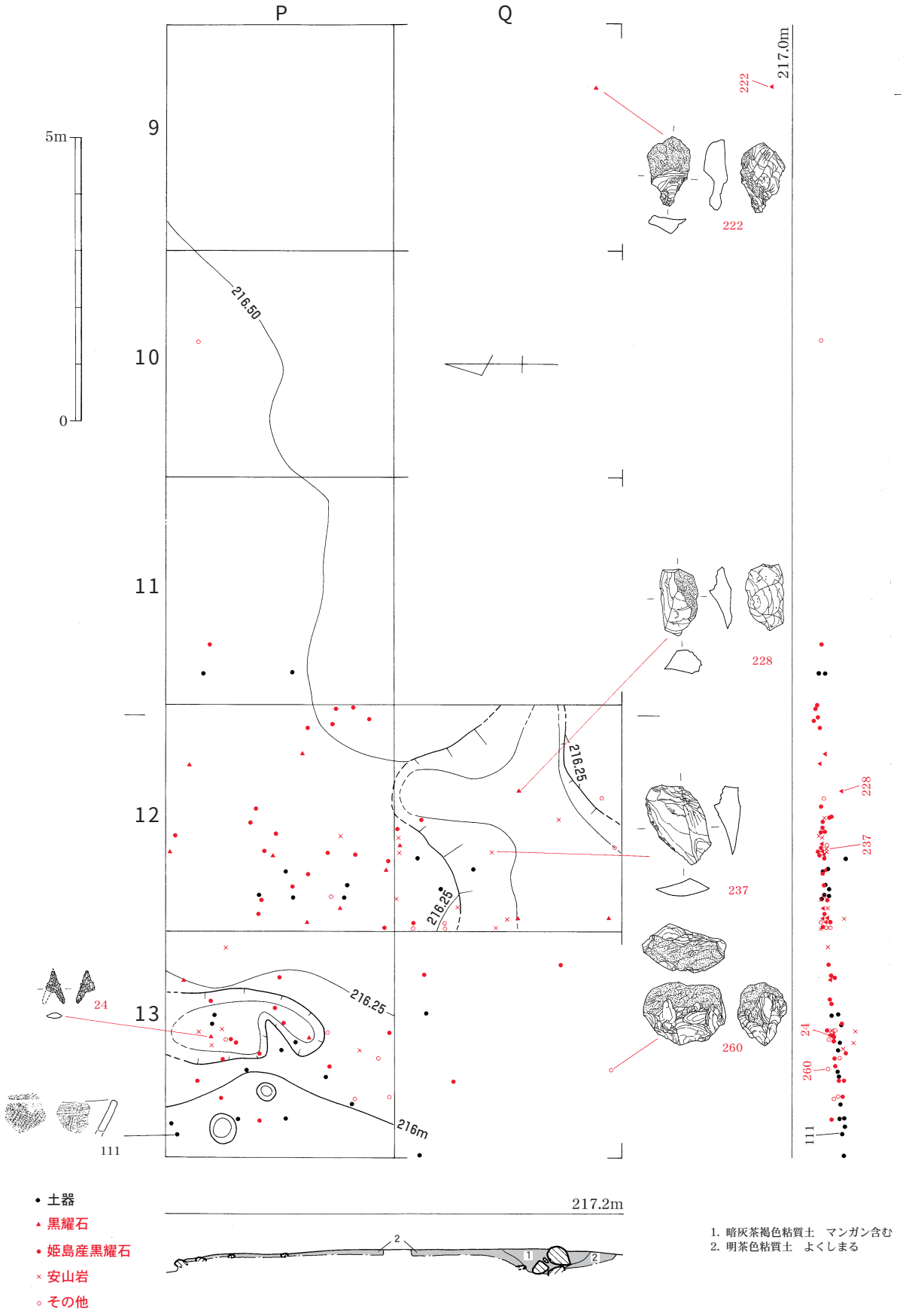
遺物はX－4・5Gr第１層中や各ピット、落ち込みから出土しているが概して少ない。土器はX－4Grから数点出土しており、60・66の押型文土器や71・72の轟B式土器が落ち込み内から出土している。石器ではX－4Grから203の安山岩製スクレイパー、X－5Grから47の黒耀石製石鏃、75の姫島産黒耀石製石鏃、206の安山岩製スクレイパー、X－6Gr不整形落ち込み内から18・25の黒耀石製石鏃、281の敲石が出土した。

Z－4～6、AA－4～6Gr（第26図）

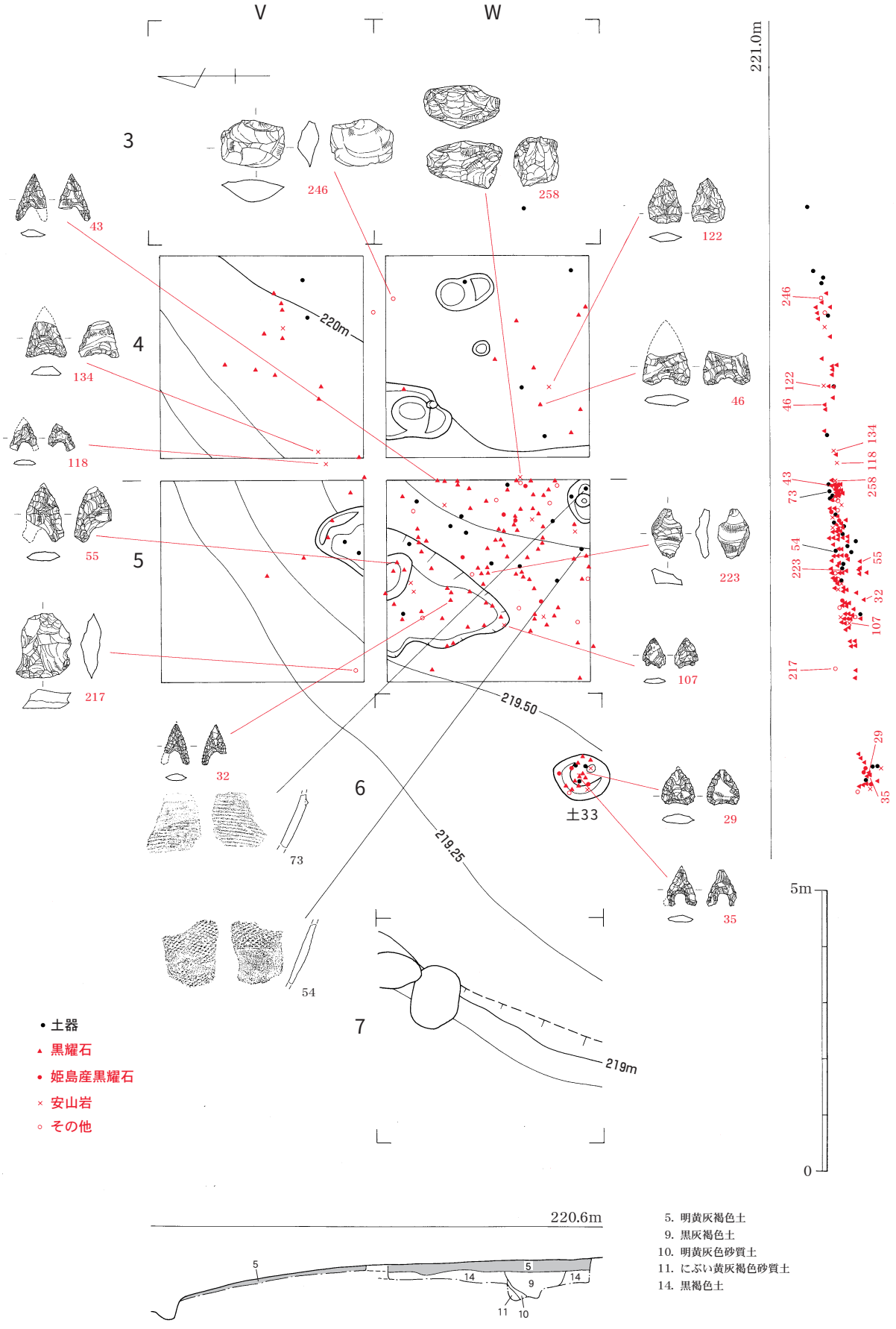
Ⅰ区東側に設定したグリッドである。

掘削前の地形は東から西へと緩やかに傾斜しており高低差は約50cmを測る。第１層黄灰褐色シルトはZ－4・5Gr、AA－4・5Grで10cm程の厚さで堆積する。西側のZ－6Gr、AA－6Grでは削平され既に下層の黒褐色土が露出していた。掘削後の遺構面精査の結果、各グリッドでピットや不整形の落ち込みを検出した。

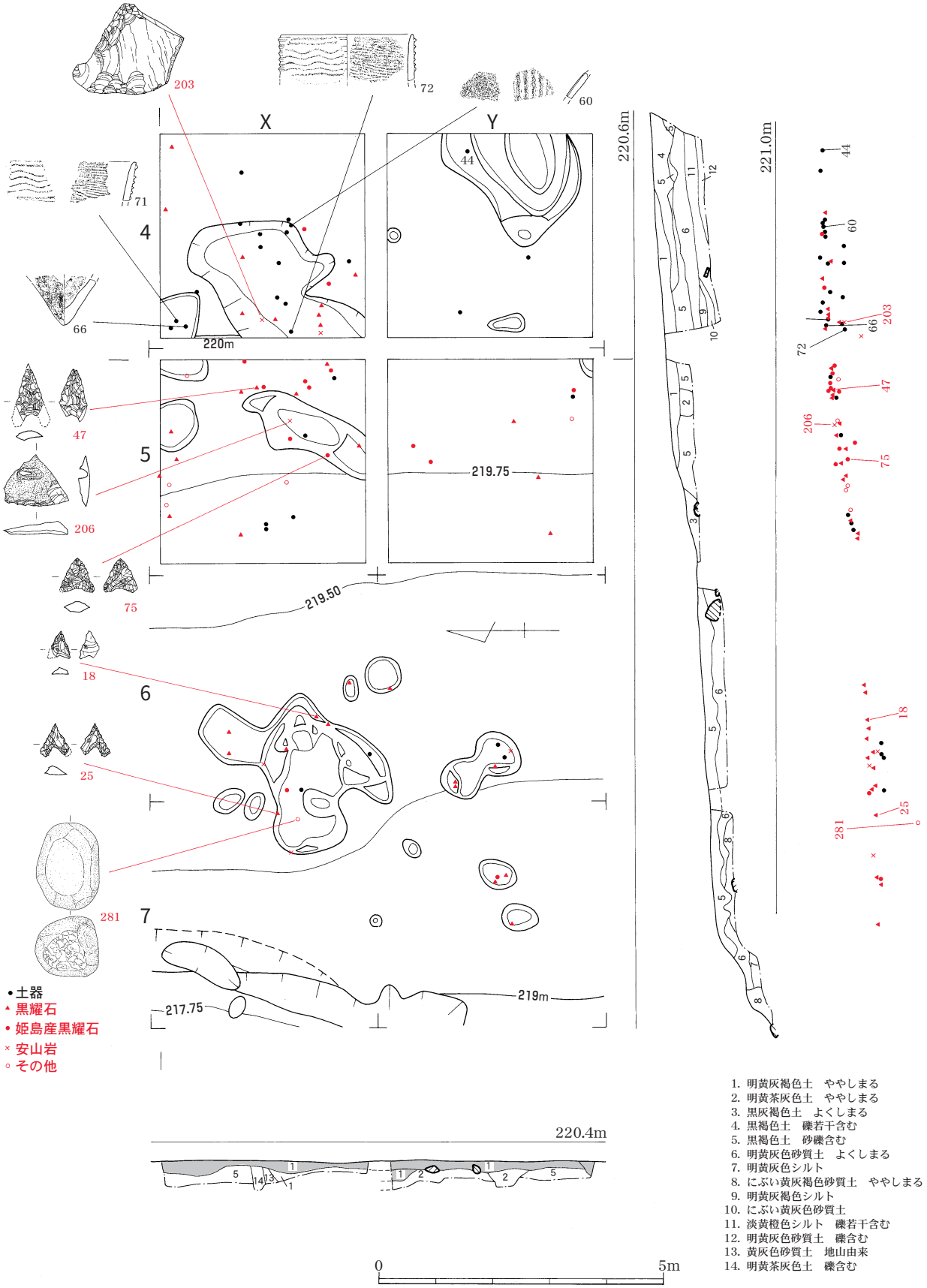
遺物はZ－4・5Gr、AA－4・5Grで出土しているが数は少ない。土器ではZ－4Grから19の粘土瘤のある土器、62の押型文土器、AA－4Grから41の押型文土器、AA－5から40・43の押型文土器が出土している。石器ではZ－4Gr第１層から50の黒耀石製石鏃、270の凹石、落ち込み内



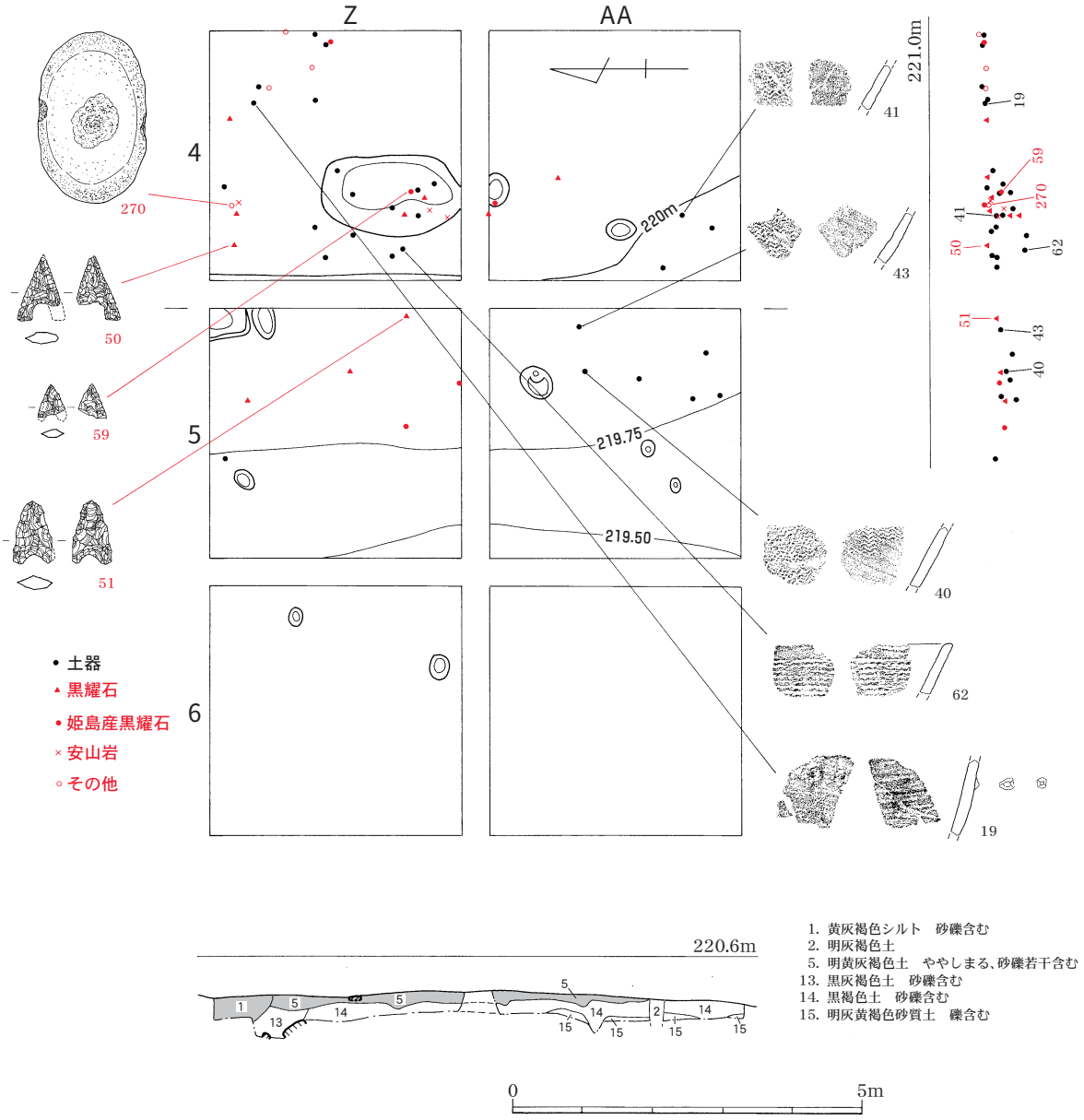
第23図　第Ⅱ文化層　P－9～13、Q－9～13Gr実測図（1/100）



第24図　第Ⅱ文化層　V－3～5、W－3～7Gr実測図（1/100）



第25図　第Ⅱ文化層　X－4～7、Y－4～7Gr実測図（1/100）



第26図　第Ⅱ文化層　Z－4～6、AA－4～6Gr実測図（1/100）

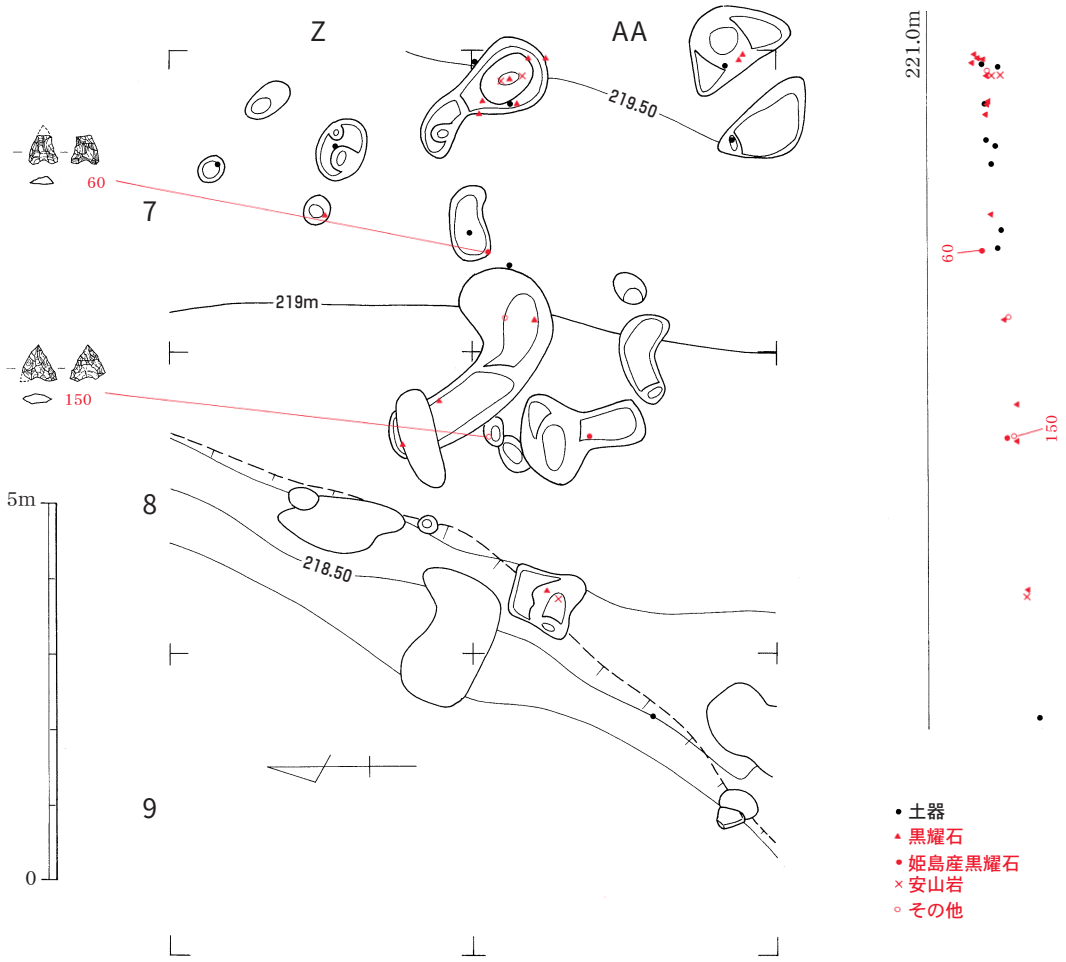
から59の姫島産黒耀石製石鏃、Z－5Grから51の黒耀石製石鏃が出土した。

Z－7～9、AA－7～9Gr（第27図）

Ⅰ区東側に設定したグリッドである。調査前の地形はわずかに東から西へと傾斜する。

後世の耕作地造成により削平を受けており、黄灰褐色土層は残っておらず黒褐色土層が露出していた。そこで、黒褐色土層上面で精査を行い、黄灰褐色土層を覆土とする遺構の掘削を行った。検出された遺構はピットや不整形の落ち込みである。

遺物は遺構覆土から数点出土した。土器は小片で図示に耐えない。石器ではAA－7Grから60の姫島産黒耀石製石鏃、AA－8Grから150の石英製石鏃が出土した。



第27図　第Ⅱ文化層　Z－7～9、AA－7～9Gr実測図（1/100）

T—15・16、U—15・16Gr（第28図）

Ⅰ区西側に設定したグリッドである。掘削前は東から西へと緩やかに傾斜しており、西端は後世の耕作地造成により削平される。

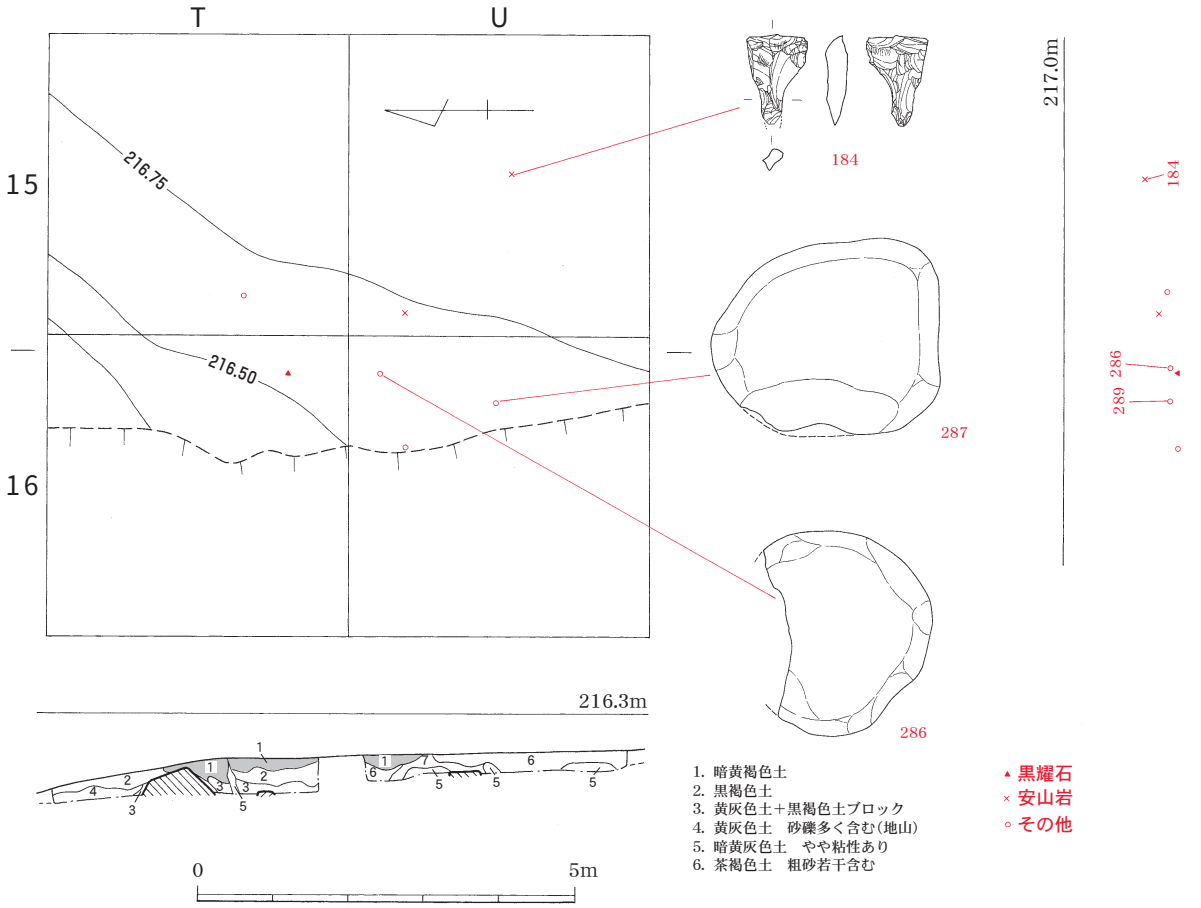
第１層暗黄褐色土は地形の凹地に部分的に残る程度であり、大半の部分では下層の茶褐色土が露出していた。掘削後に遺構面精査をしたが、遺構は確認できなかった。

遺物は第１層中から数点出土している。U－15Grから184の安山岩製ドリル、U－16から286・287の台石が出土した。

V—15・16、W—15・16Gr（第29図）

Ⅰ区西側に設定したグリッドである。後世の耕作地造成により削平を受け、第１層暗黄褐色土は地形の凹地に見られる程度である。掘削後に精査を行ったが遺構はほとんどなく、W－15Grで不整形の落ち込みを検出できたに過ぎない。

出土遺物は非常に少ない。土器はV－15・16Gr間から14の刺突文土器、32の条痕文土器が出土した。石器はV－15Grから22の黒耀石製石鏃が出土した。



第28図　第Ⅱ文化層　T－15・16、U－15・16Gr実測図（1/100）

X—15・16、Y—15・16Gr（第30図）

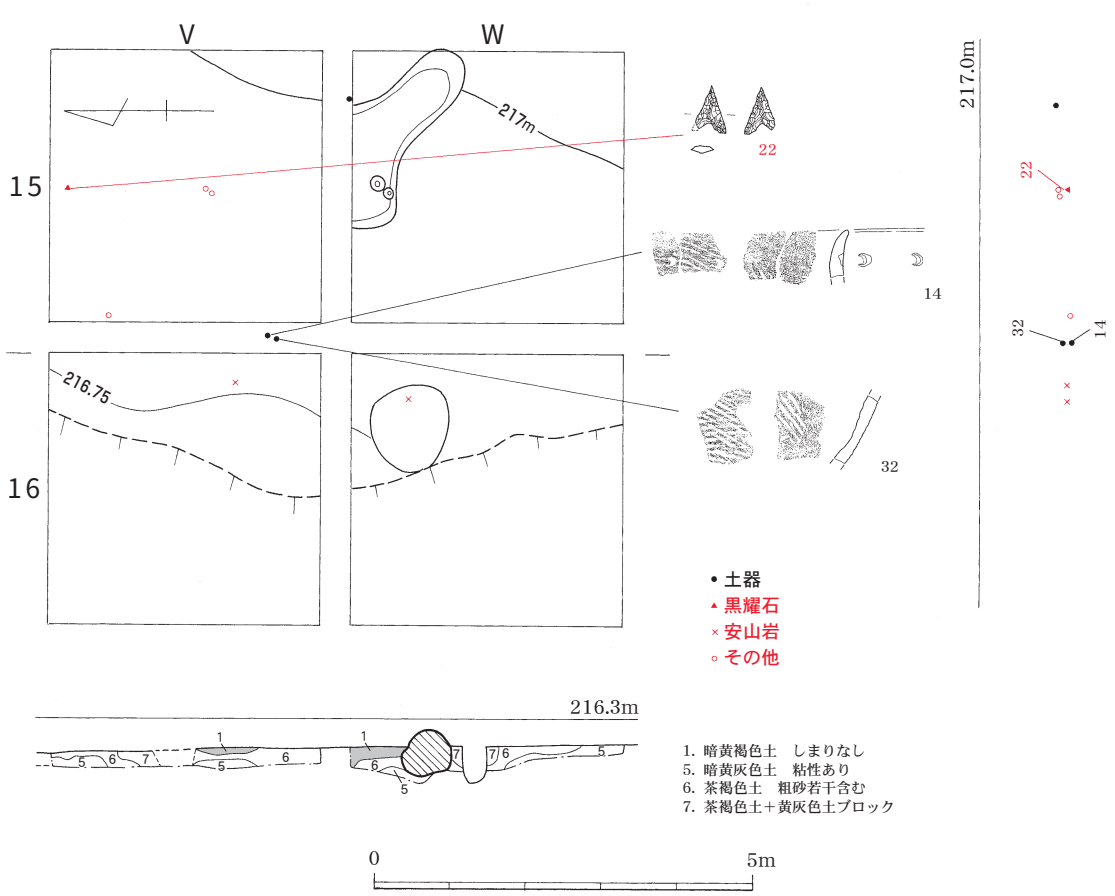
Ⅰ区西側に設定したグリッドである。後世の耕作地造成により削平を受け黄褐色土は全く残っておらず、下層の茶褐色土が露出していた。

茶褐色土上面の精査を行い、X－16Gr・Y－16Gr間に大型の落ち込みを検出した。この落ち込みは土層観察の結果、風倒木痕であることが判明した。

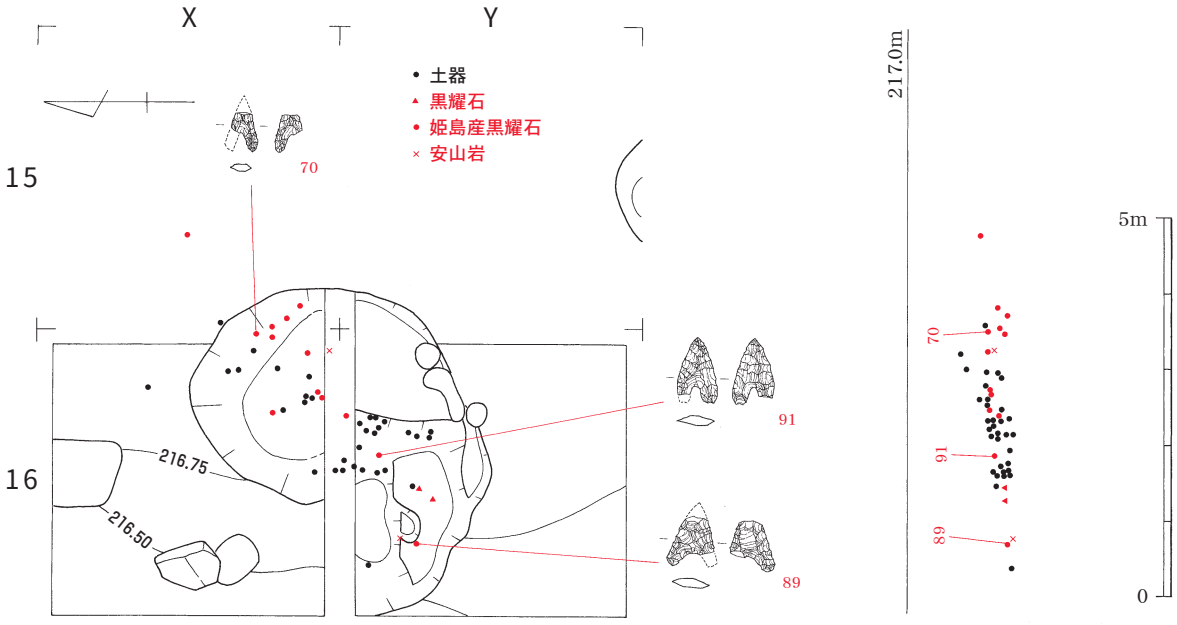
遺物は落ち込み覆土から出土している。土器は小片ばかりで図示できない。石器はX－16Gr落ち込み覆土から70の姫島産黒耀石製石鏃、Y－16Gr落ち込み覆土から89・91の姫島産黒耀石製石鏃が出土した。

L—23・24、M—23～26Gr（図版14、第31図）

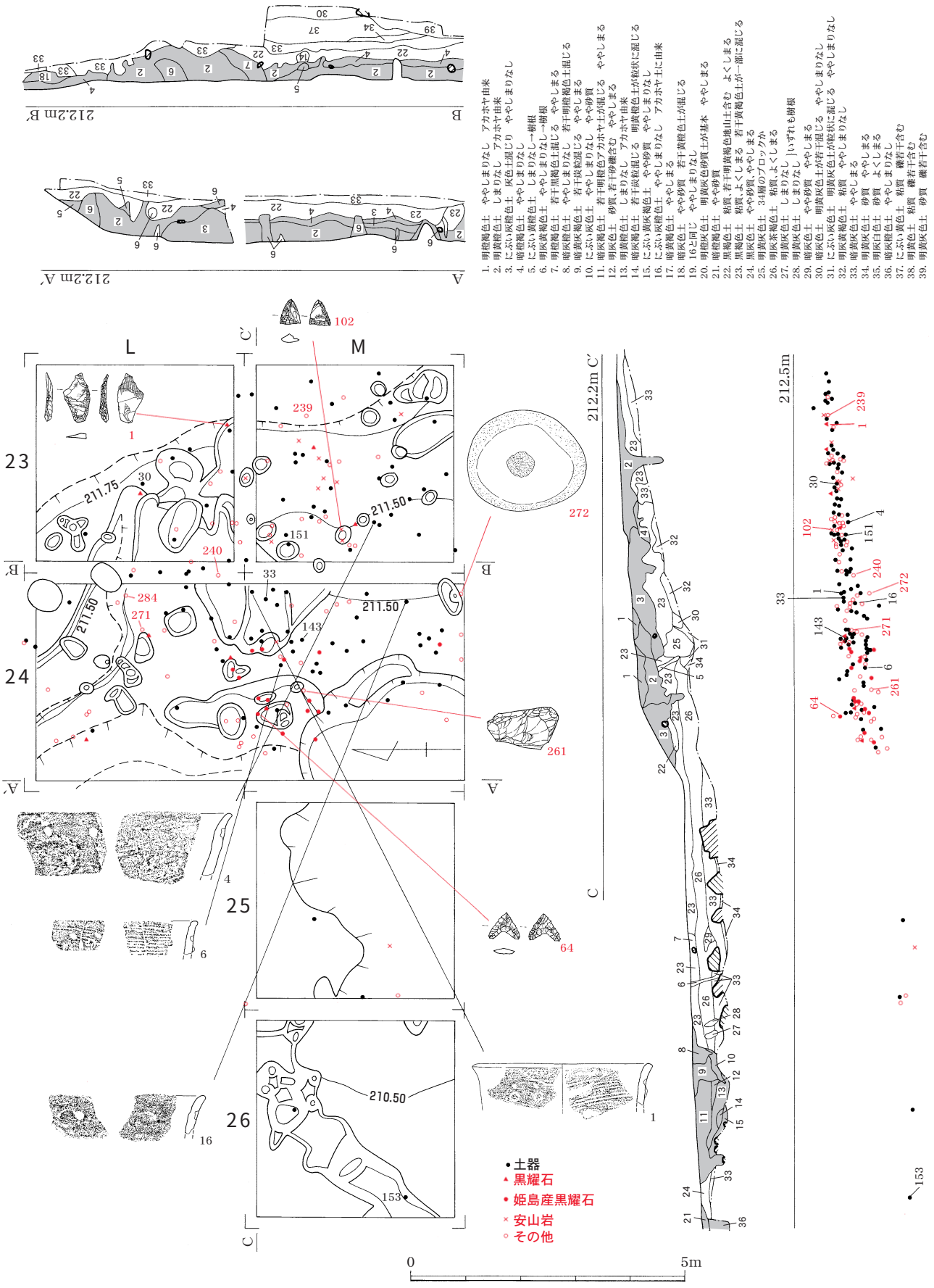
Ⅲ区西側に設定したグリッドである。掘削前の地形は後世の段造成によって東側と西側にそれぞれ平坦面が形成されており、両者の高低差は100cm程ある。アカホヤ火山灰に由来する明橙褐色土や黄灰褐色土はM－25Grを除く全グリッドに及んでおり、特にL－24GrやM－24Grは厚さが50cmを超える箇所もある。東半部に堆積する層は黄色味が強く締まりのないオリジナルの火山灰に近い層だが、西側の堆積層は灰色がかった黄色で粘性のある土へと変化しており、再堆積によるものと思われる。掘削後に遺構面精査を行い、L－23・24Gr、M－23・24Grではピットや不



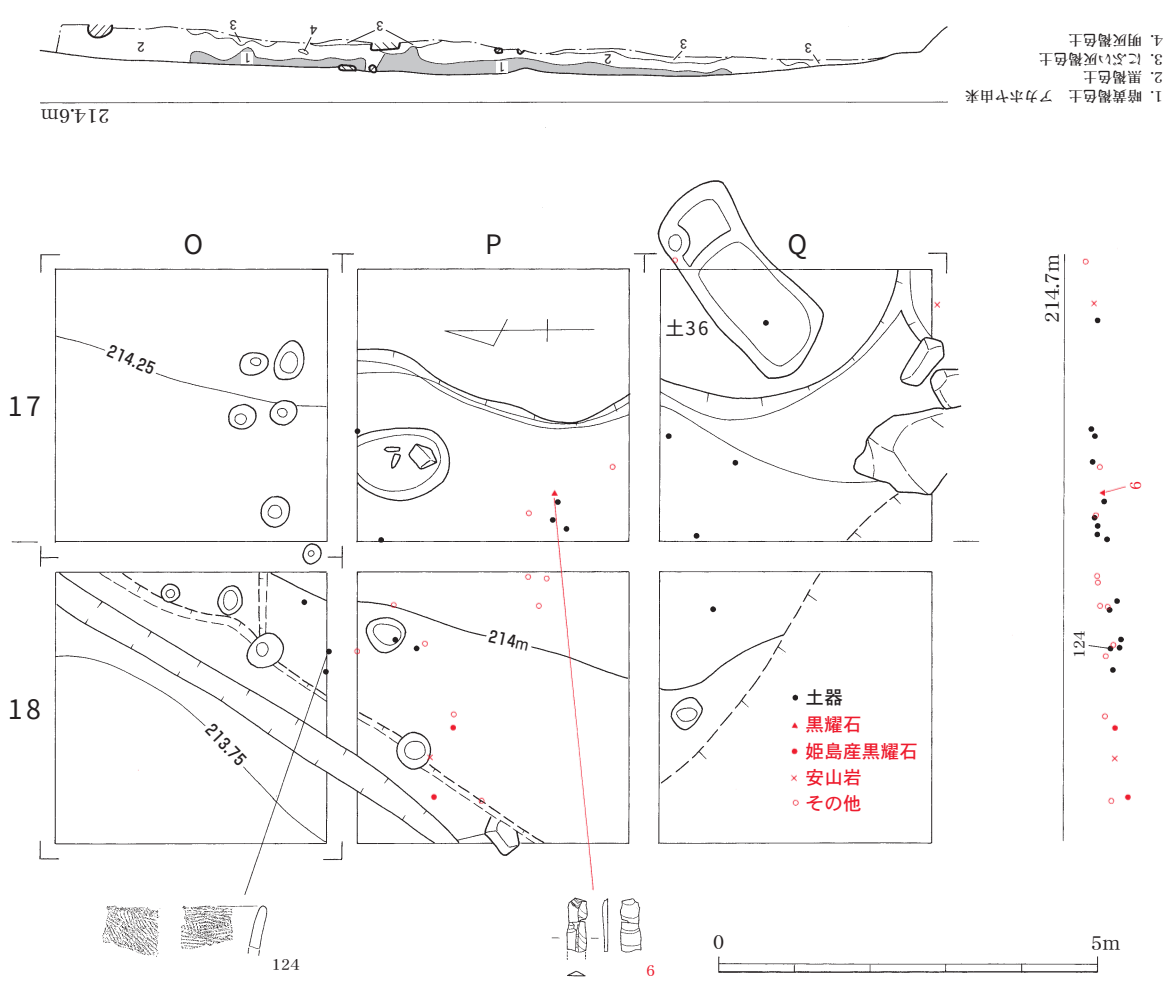
第29図　第Ⅱ文化層　V－15・16、W－15・16Gr実測図（1/100）



第30図　第Ⅱ文化層　X－15・16、Y－15・16Gr実測図（1/100）



第31図　第Ⅱ文化層　L－23・24、M－23～26Gr実測図（1/100）



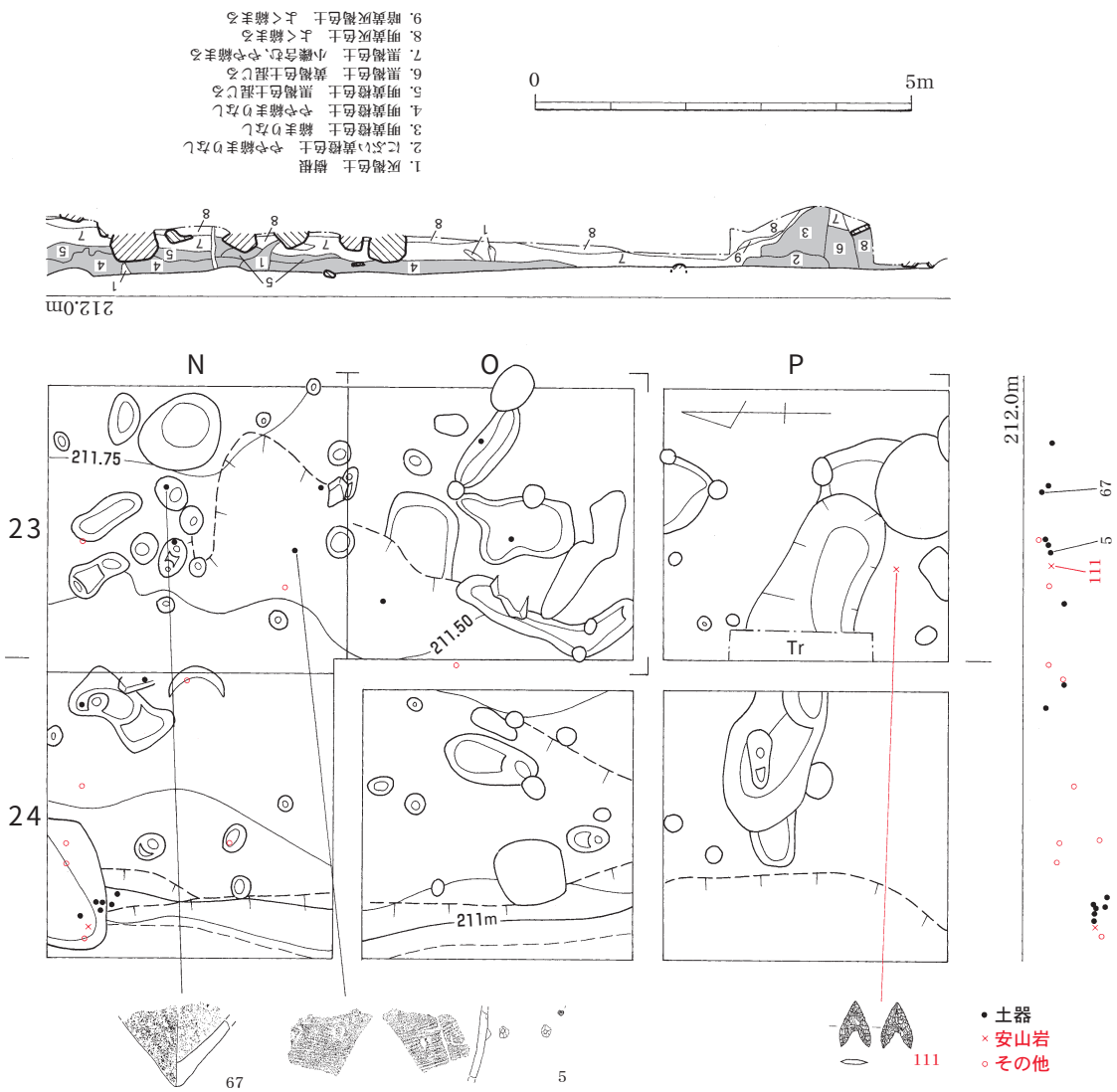
第32図　第Ⅱ文化層　O－17・18、P－17・18、Q－17・18Gr実測図（1/100）

整形の落ち込みを検出した。M－25・26Grでは不整形の落ち込みを検出した。

遺物は東側のグリッドから多く出土し、西側のM－25・26Grからはほとんど出土しなかった。土器の出土点数は多く、図示したものではL－23Grから30の条痕文土器、M－23Grから４の刺突文土器、151の条痕文土器、M－24Grから１・４・６の粘土瘤のある刺突文土器、16の刺突文土器、33・143の条痕文土器が出土した。石器ではL－23Grから１の黒耀石製ナイフ形石器、L－23・24Gr間から240の珪質岩剥片、L－24Grから271の凹石、284の台石、M－23Grから102の安山岩製石鏃、239の珪質岩剥片、M－24Grから64の姫島産黒耀石製石鏃、261の珪質岩石核、272の凹石が出土した。また各グリッドから珪質岩チップが多く出土しており、他にM－23Grで安山岩チップが数点まとまりを見せる。黒耀石や姫島産黒耀石は少ない。

O―17・18、P―17・18、Q―17・18Gr（図版16、第32図）

Ⅲ区東側に設定したグリッドである。地形は東から西へと緩やかに傾斜する。第１層暗黄褐色土は全体的に確認されたが堆積状況はあまり良好ではなく、10cm前後に過ぎない。場所によっては下層の黒褐色土が露出しているところもあった。掘削後に遺構面精査を行い、Q－17Grでは36



第33図　第Ⅱ文化層　N－23・24、O－23・24、P－23・24Gr実測図（1/100）

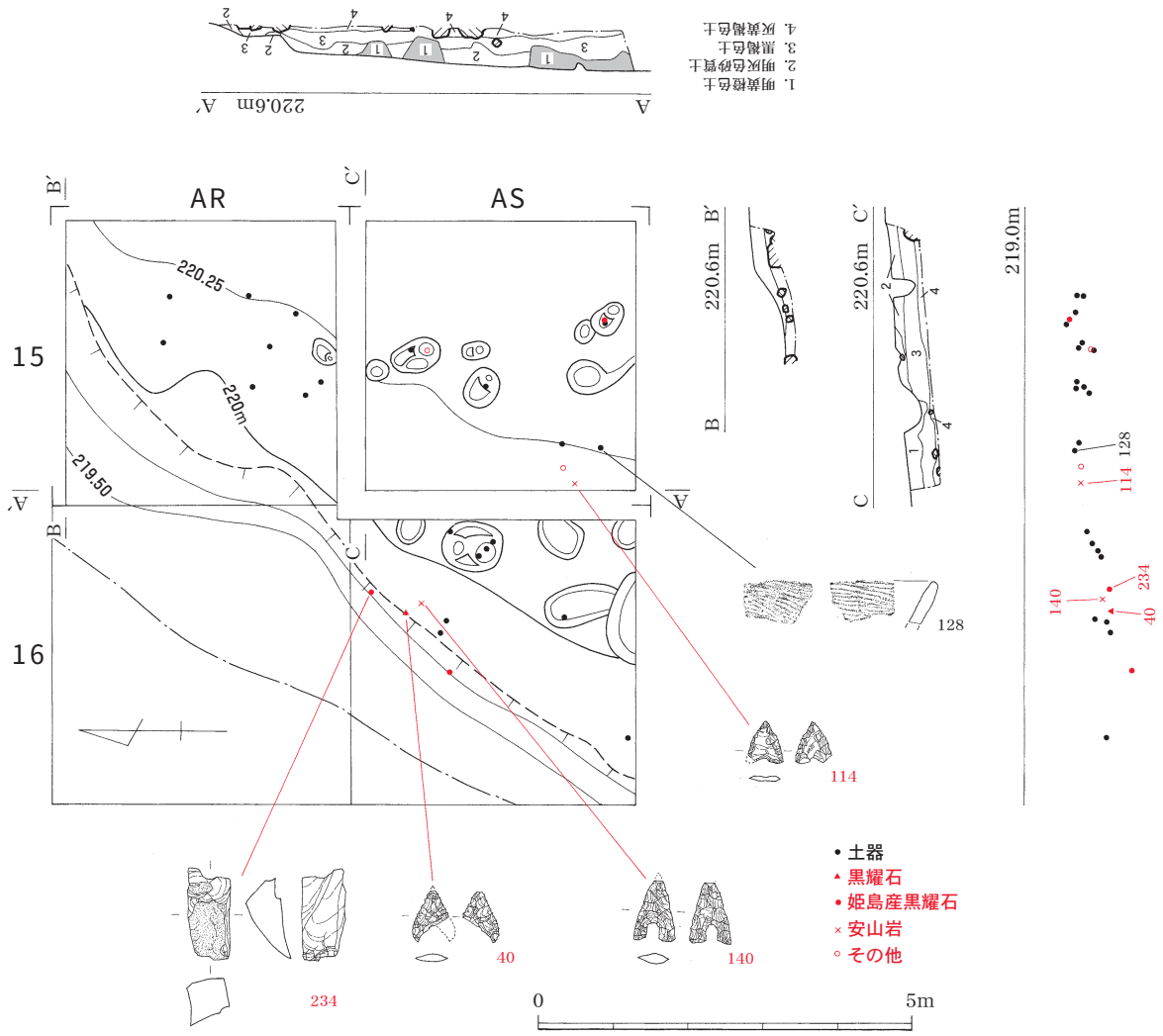
号土坑を検出した。また他のグリッドでもピット等を検出した。

遺物は非常に少なく、数点出土しているに過ぎない。図示した遺物では、O－18Grから124の条痕文土器、P－17Grから6の黒耀石製細石刃が出土した。他にP－17・18Grから珪質岩チップが数点出土した。

N—23・24、O—23・24、P—23・24Gr（図版15・16、第33図）

Ⅲ区西側に設定したグリッドである。地形は東から西へと緩やかに傾斜しており、西端は後世の造成のために段が形成される。アカホヤに由来する黄橙色土は北側のグリッドに20～30cmの厚さで良好に堆積するが、南側は削平を受けており下層の黒褐色土が露出している。掘削後に遺構面精査を行い、ピットや不整形の落ち込みを検出した。

出土遺物は非常に少ない。図示した範囲では、N－23Grから5の粘土瘤のある刺突文土器、67の尖底となる底部片、P－23Grから111の安山岩製石鏃が出土した。



第34図　第Ⅱ文化層　AR－15・16、AS－15・16Gr実測図（1/100）

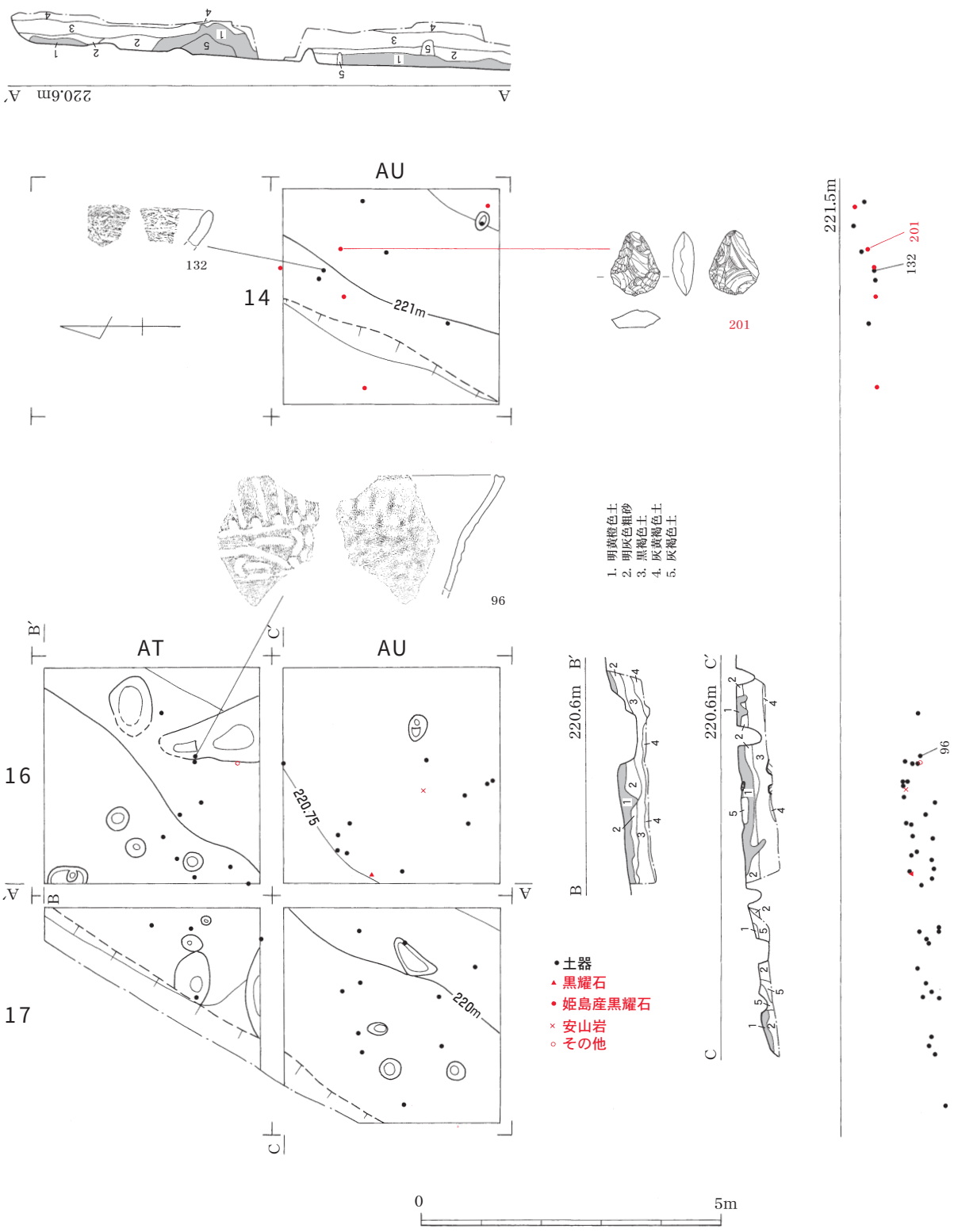
AR－15・16、AS－15・16Gr（第34図）

Ⅱ区東半部の北側に設定したグリッドである。地形は北西方向へと傾斜する。明黄橙色土はあまり良好な堆積状況ではなく、部分的に下層の黒褐色土が露出しているところもある。状況の良い箇所で20cm程の厚さがある。掘削後に遺構面精査を行い、ピットを検出した。

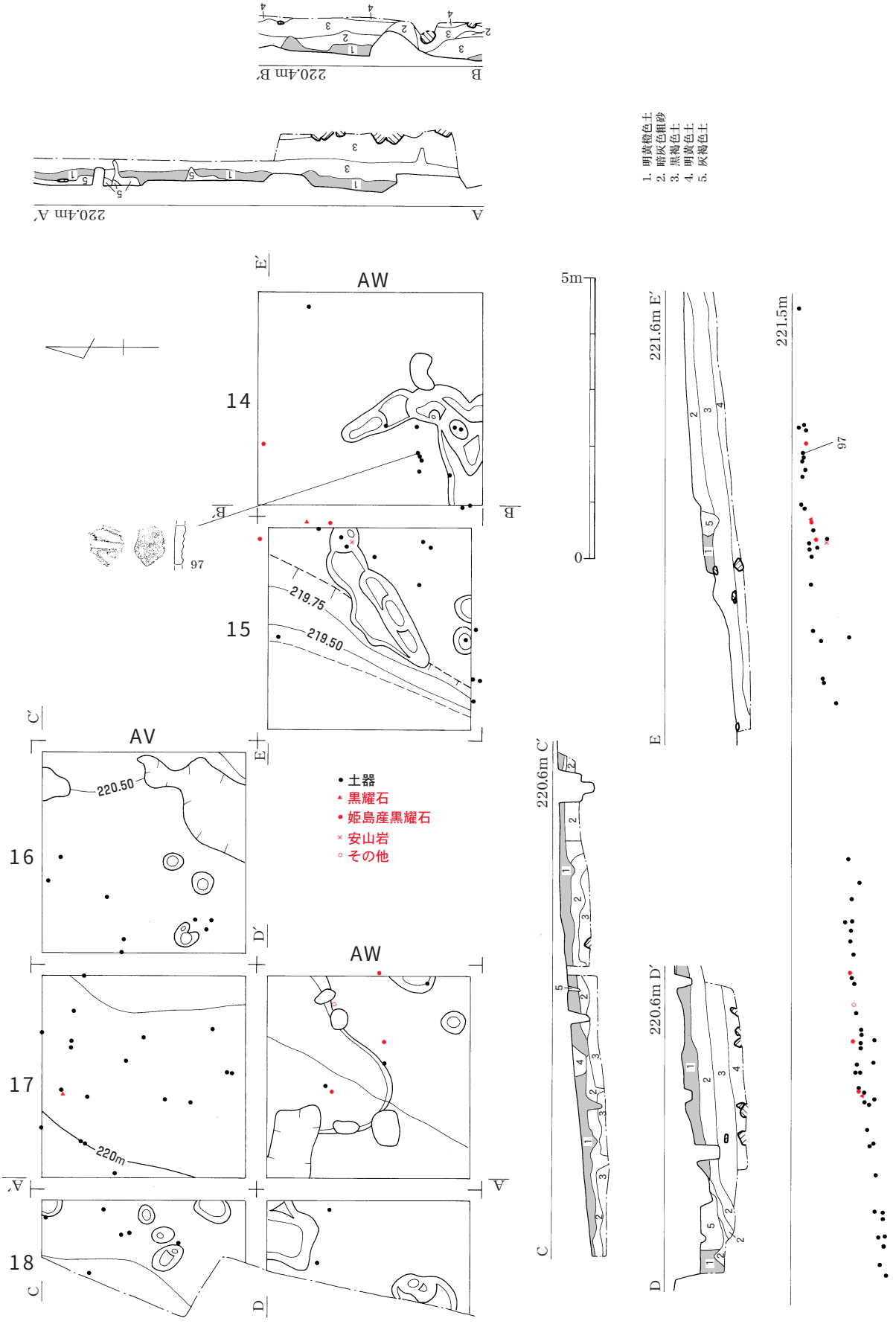
出土遺物は少ない。AR－15Grでは土器片が数点出土した。AS－15Grでは128の条痕文土器、114の安山岩製石鏃、AS－16Grでは40の黒耀石製石鏃、140の安山岩製石鏃、234の姫島産黒耀石剥片が出土した。

AT－16・17、AU－14・16・17Gr（第35図）

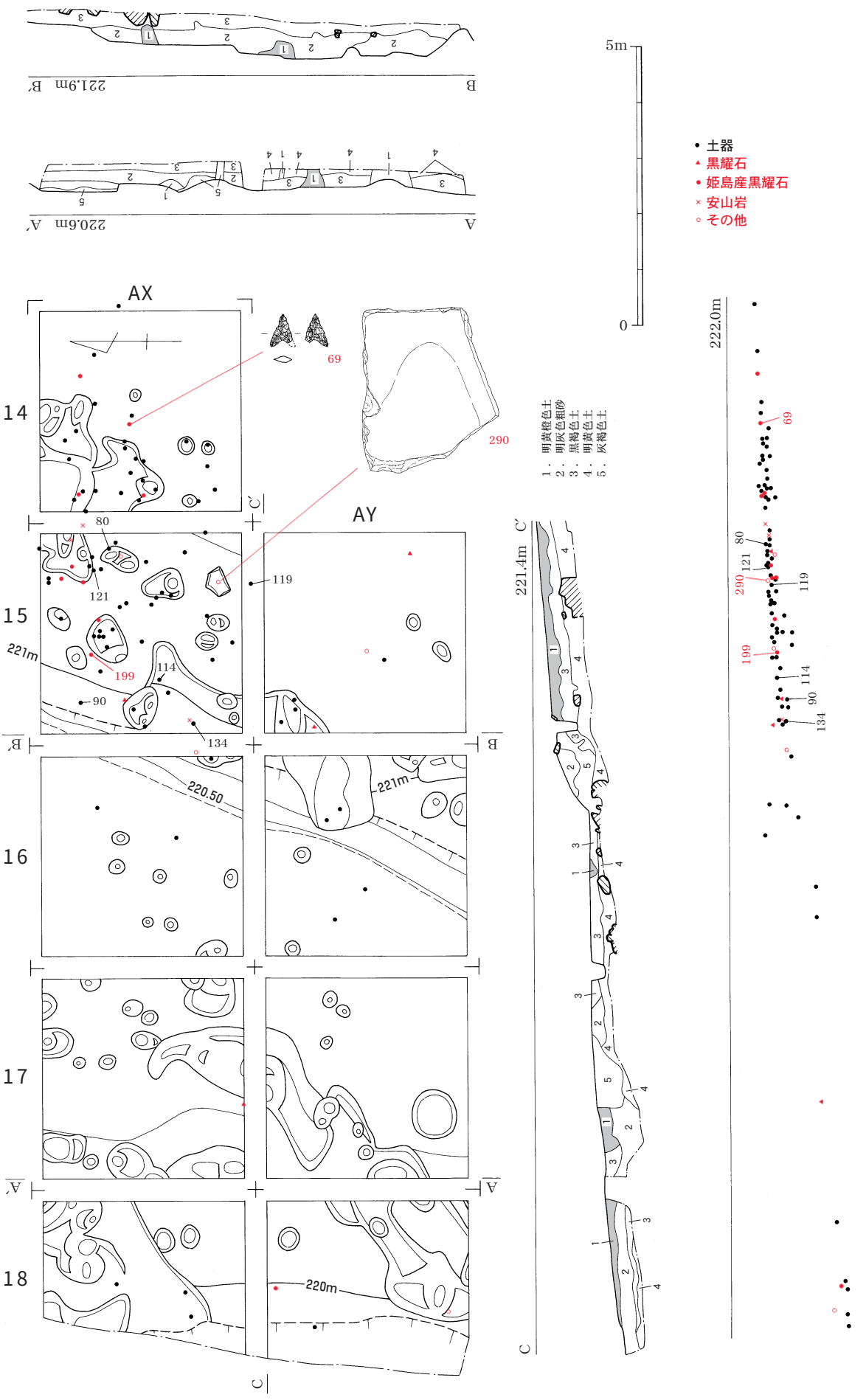
Ⅱ区東半部の北側に設定したグリッドである。地形は東から西へと緩やかに傾斜する。第１層明黄橙色土はほぼ全域におよんでおり、厚いところでは20cm程堆積していた。掘削後に精査を行い、ピットや不整形落ち込みを検出した。



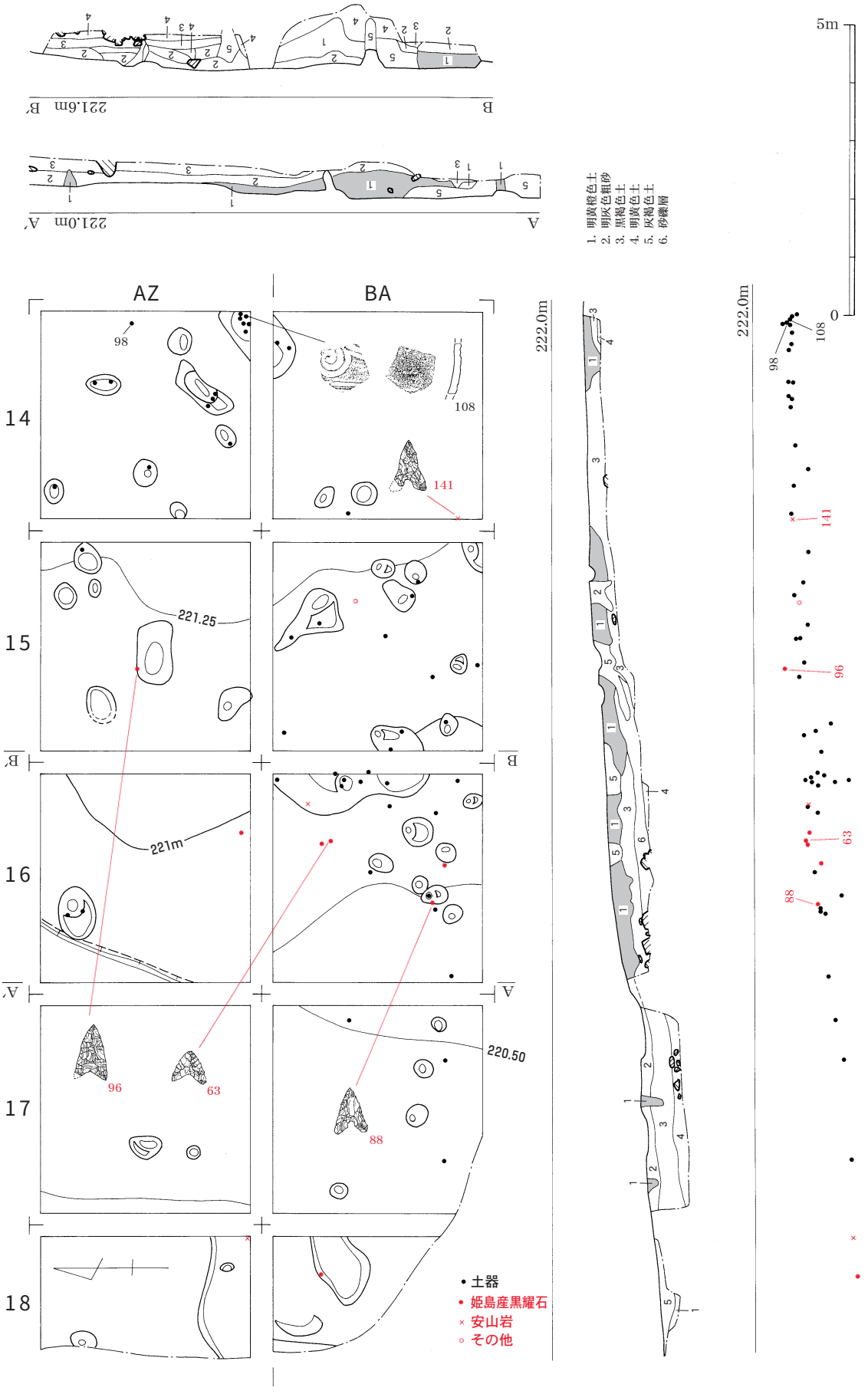
第35図　第Ⅱ文化層　AT－16・17、AU－14・16・17Gr実測図（1/100）



第36図　第Ⅱ文化層　AV－16～18、AW－14・15・17・18Gr実測図（1/100）



第37図　第Ⅱ文化層　AX－14～18、AY－15～18Gr実測図（1/100）



第38図　第Ⅱ文化層　AZ－14～18、BA－14～18Gr実測図（1/100）

出土遺物はあまり多くない。土器は全域から出土しており、AT－16Grからは96の阿高式土器、AU－14Grからは132の条痕文土器が出土した。石器はチップ等を含めてもわずかな点数である。AU－14Grからは201の姫島産黒耀石製スクレイパーが出土している。

AV－16～18、AW－14・15・17・18Gr（図版17、第36図）

Ⅱ区東半部の中央付近に設定したグリッドである。地形は東から西へと緩やかに傾斜する。第1層明黄橙色土は東側のAW－14・15Grはほとんど堆積しておらず、西側の各グリッドでは20cmの厚さで堆積していた。掘削後に遺構面精査を行い、不整形落ち込みやピットを検出した。

出土遺物はあまり多くない。土器は全域から出土しているが小片が多く、図示できたのはAW－14Grから出土した97の阿高系土器しかない。また石器ではチップが数点出土しただけである。

AX－14～18、AY－15～18Gr（図版17、第37図）

Ⅱ区東半部の中央付近に設定したグリッドである。後世の段造成により東側と西側にそれぞれ平坦面を形成しており、両者の高低差は60cm程ある。第1層明黄橙色土はAX－15・18Gr、AY－15・18Grに若干堆積が見られるが、他のグリッドは削平のために下層の明灰色粗砂層や黒褐色土層が露出していた。第1層掘削後に精査を行った結果、不整形の落ち込みやピットを検出した。

出土遺物はAX－14・15Grで多く出土したが、他のグリッドはほとんど出土していない。AX－14・15Grでは土器が多く出土しており、AX－15Grから80・90の西和田式土器、119の大きな突帯のある土器、121の突帯をもつ土器、134の条痕文土器が出土した。石器ではAX－14Grから69の姫島産黒耀石製石鏃、AX－15Grから199の姫島産黒耀石製スクレイパー、290の大型台石が出土した。

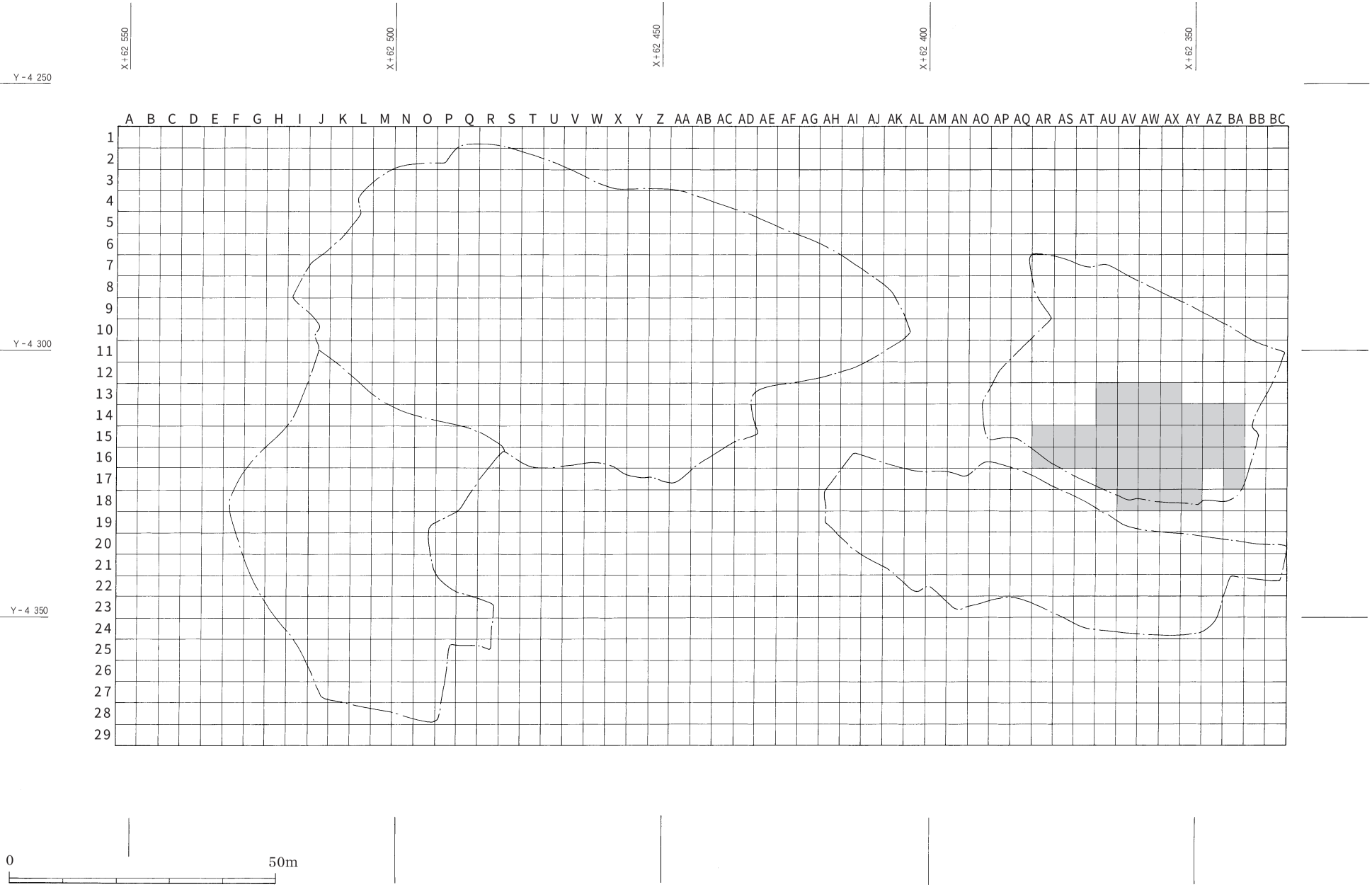
AZ－14～18、BA－14～18Gr（図版18、第38図）

Ⅱ区東半部の南側に設定したグリッドである。後世の段造成により東側と西側にそれぞれ平坦面を形成しており、両者の高低差は60cm程ある。第1層明黄橙色土は中央付近にのみ20cmほどの厚さで堆積しており、それ以外は削平のため下層の明灰色粗砂や黒褐色土が露出していた。掘削後の遺構面精査の結果、ピット等を検出した。

出土遺物は比較的少ない。AZ－14、BA－14Grではピット中から土器が数点出土している。BA－15・16Grでは第1層中から土器が数点出土している。図示した限りでは、AZ－14Grのピット中から108の渦文を配した後期の土器が出土した。石器ではAZ－15Grのピット中から96の姫島産黒耀石製石鏃、BA－14Grから141の安山岩製石鏃、BA－16Grから63・88の姫島産黒耀石製石鏃が出土した。

第Ⅲ文化層の調査（第39・40図）

明灰色粗砂からなる層である。アカホヤ火山灰に由来する層である明黄橙色土の下層にあり、黒褐色土よりも上層に位置する。Ⅱ区にのみ良好に堆積し、他の地点では見られない層である。層中に遺物を含み、その下層である黒褐色土の上面にこの層を覆土とする遺構が見られることから、第Ⅲ文化層として分層発掘を行うこととした。



第39図　第Ⅲ文化層グリッド配置図（1/1,000）

AR－15・16、AS－15・16Gr（第41図）

Ⅱ区東半部の北側に設定したグリッドである。地形は東から西へと緩やかに傾斜する。第２層明灰色粗砂層はAR－15、AS－15Grの東側と、AR－16、AS－16Grに20cmの厚さで堆積が確認された。掘削後に精査を行い、ピットを幾つか検出した。

出土遺物は非常に少ない。図示した遺物では、AS－15Grから194の姫島産スクレイパー、AS－16Grから34の条痕文土器が出土している。

AT－15・16、AU－13～17Gr（第42図）

Ⅱ区東半部の北側に設定したグリッドである。地形は後世の段造成のために東側、中央付近、西側にそれぞれ平坦面を形成しており、東端と西端の高低差は80cmを測る。第２層明灰色粗砂層は、AU－13・14Grでは削平されてほとんど残っておらず、下層の黒褐色土が露出していた。AT－15・16、AU－15～17Grは第１層の下層に堆積しており、厚さ10～20cmを測る。掘削後に第３層黒褐色土上面の精査を行い、ピットや不整形の落ち込みを検出した。

出土遺物はそれほど多くない。土器はAT－15・16、AU－16Grから割と多く出土している。AT－15Grでは7・12・15の粘土瘤のある刺突文土器、AT－16Grの不整形落ち込みから101・110の凹線文土器、171の条痕調整を行う平底の底部、AU－14Grから147の条痕文土器が出土した。AT－16Gr出土土器は、不整形落ち込みが風倒木痕と思われるので上層から混入したものと思われる。石器はチップも含めて全体的に点数が少ない。図示した限りではAT－15Grから100の姫島産黒耀石製石鏃が出土した。

AV－13～16、AW－13～16Gr（図版17、第43図）

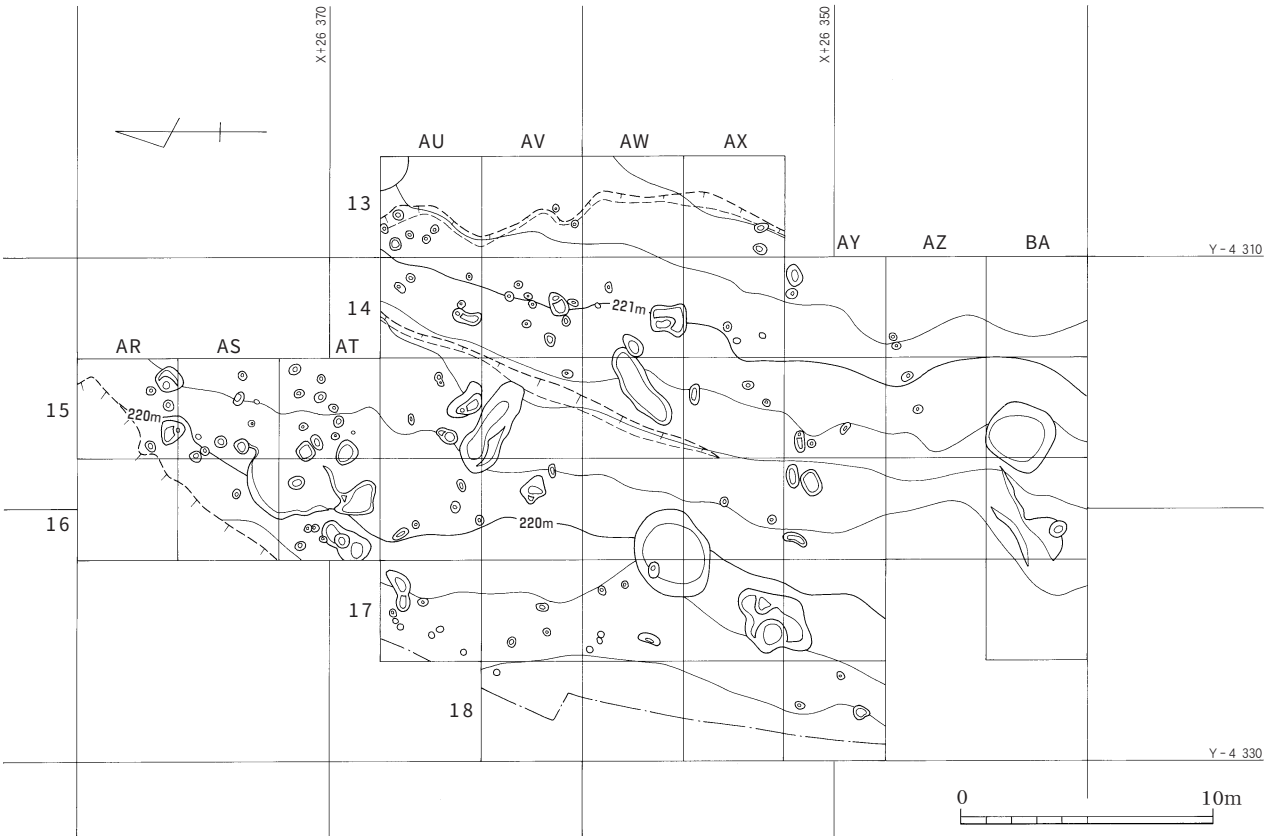
Ⅱ区東半部の中央付近に設定したグリッドである。地形は東から西へと緩やかに傾斜する。第２層明灰色粗砂層はAV－13、AW－13・15Grでは削平されてほとんど残っておらず、掘削前に既に下層の黒褐色土が露出していた。掘削後に黒褐色土上面の精査を行い、ピットや不整形の落ち込みを検出した。

出土遺物は全体的に土器が多く、石器が少ない傾向にある。土器はAW－14・15Grにある不整形落ち込み周辺から多く出土した。図示した土器のうち、AV－14Grからは180の無文土器、AW－14Grからは91の阿高系土器、123・142の条痕文土器、AW－14・15Gr間から103の阿高系土器、144の条痕文土器、AW－15Grから82の阿高系土器が出土した。石器ではAW－15Grから236の姫島産黒耀石剥片が出土した。

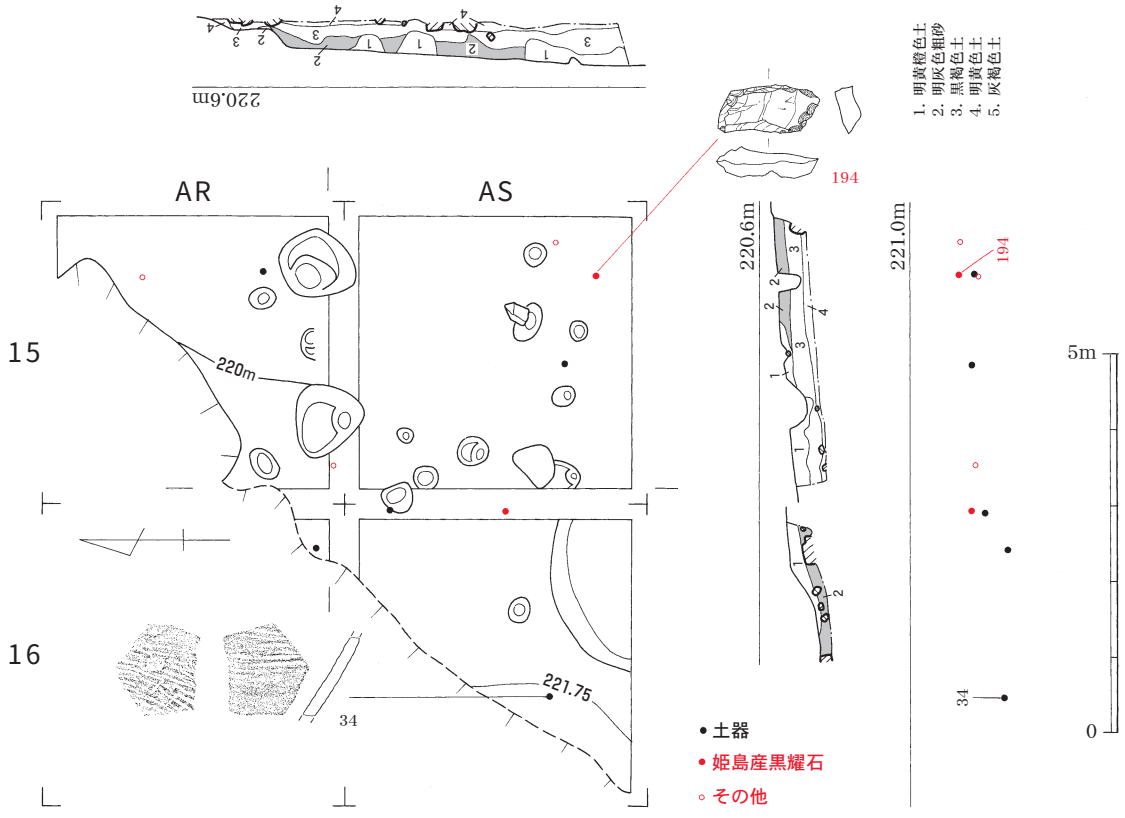
AV－17・18、AW－17・18Gr（第44図）

Ⅱ区東半部の西側に設定したグリッドである。地形は緩やかに東から西へと傾斜する。第２層明灰色粗砂層は各グリッドに20～30cmの厚さで良好に堆積していた。掘削後に下層の黒褐色土層上面の精査を行い、数基のピットを検出した。

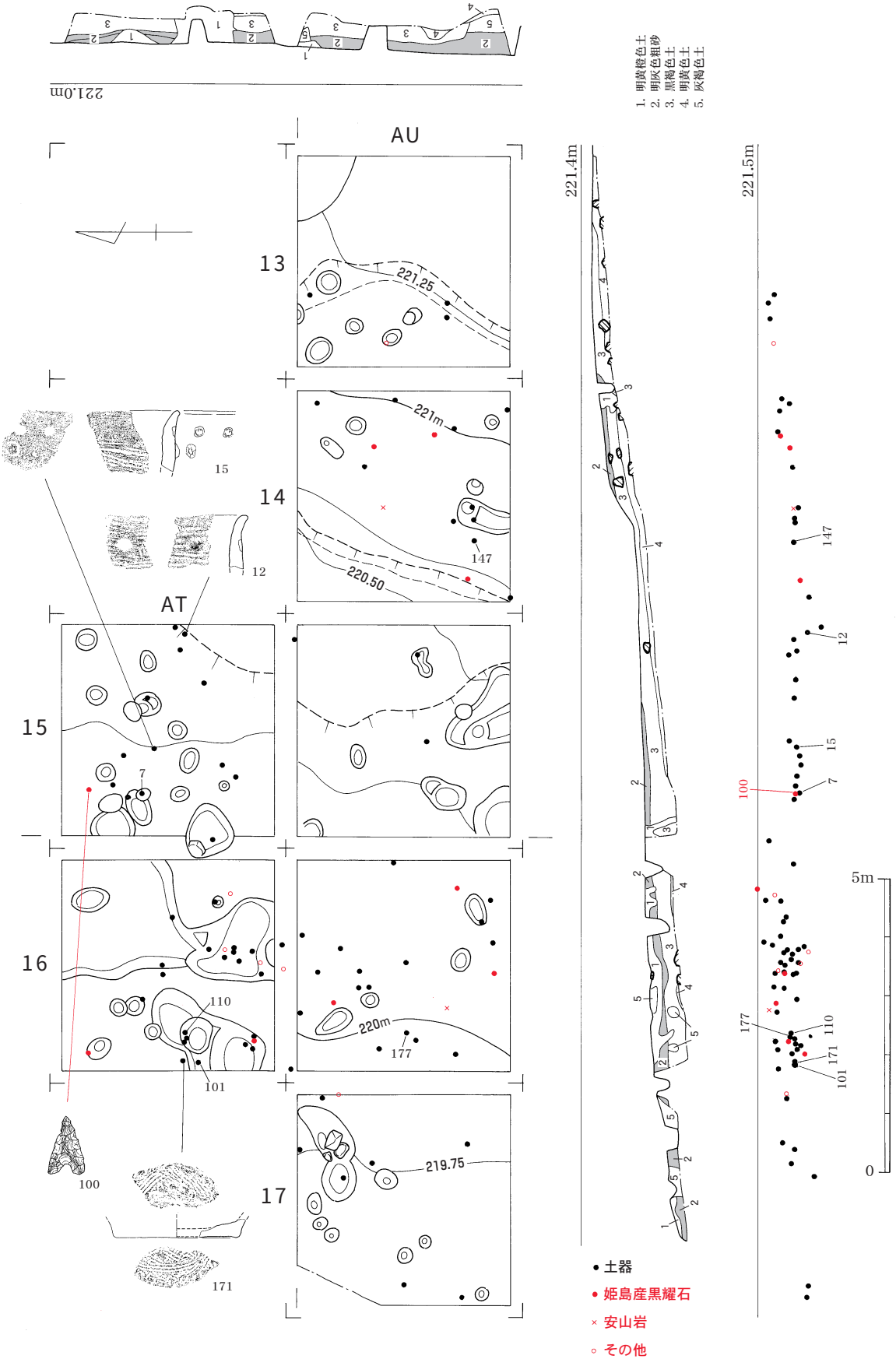
出土遺物はあまり多くない。土器はAV－17Grが最も多いが細片ばかりである。図示した限りでは、AW－17Grから61の撚糸文土器が出土している。石器は出土点数こそ少なかったものの図



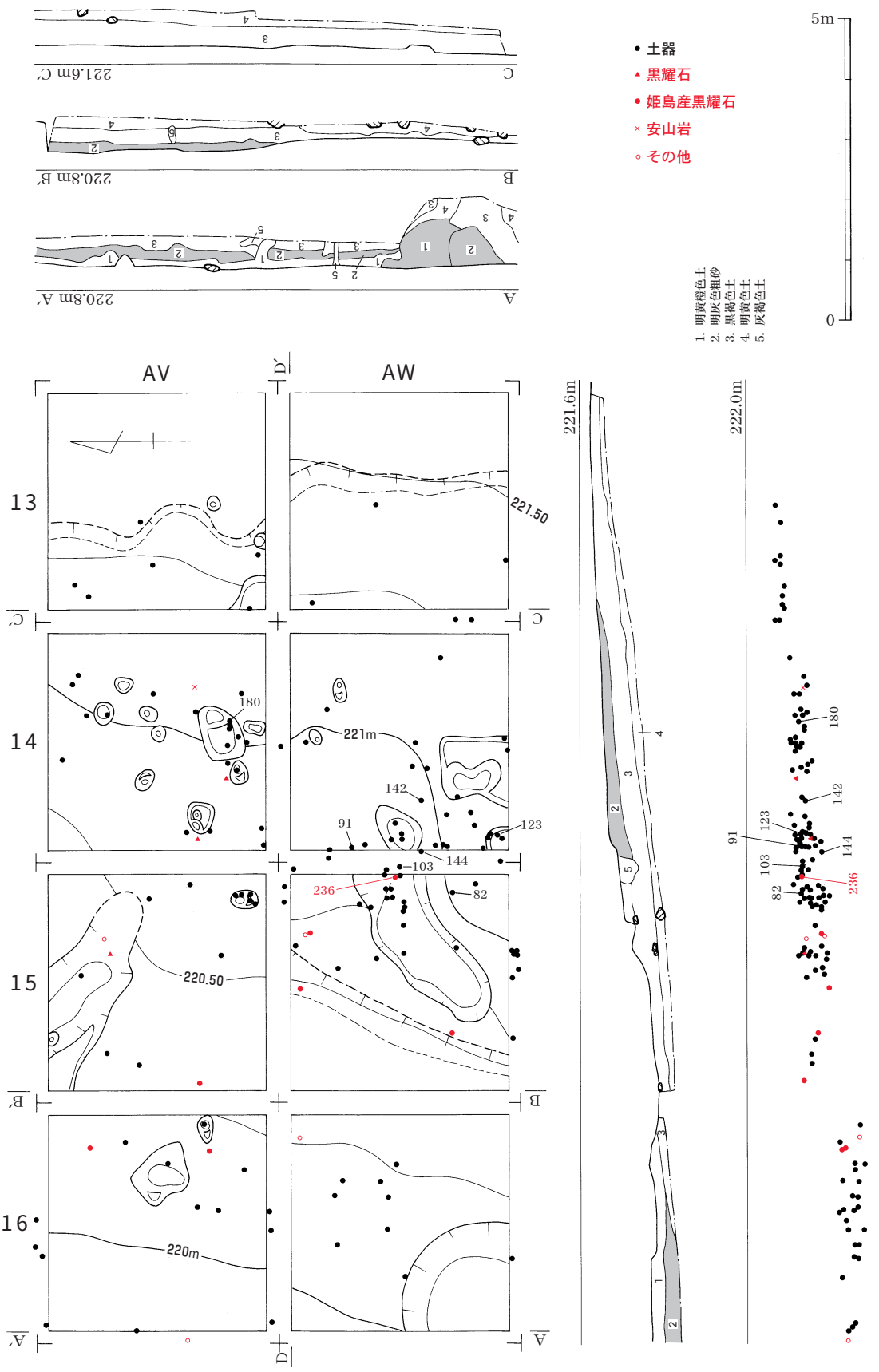
第40図　Ⅱ区第Ⅲ文化層遺構配置図（1/300）



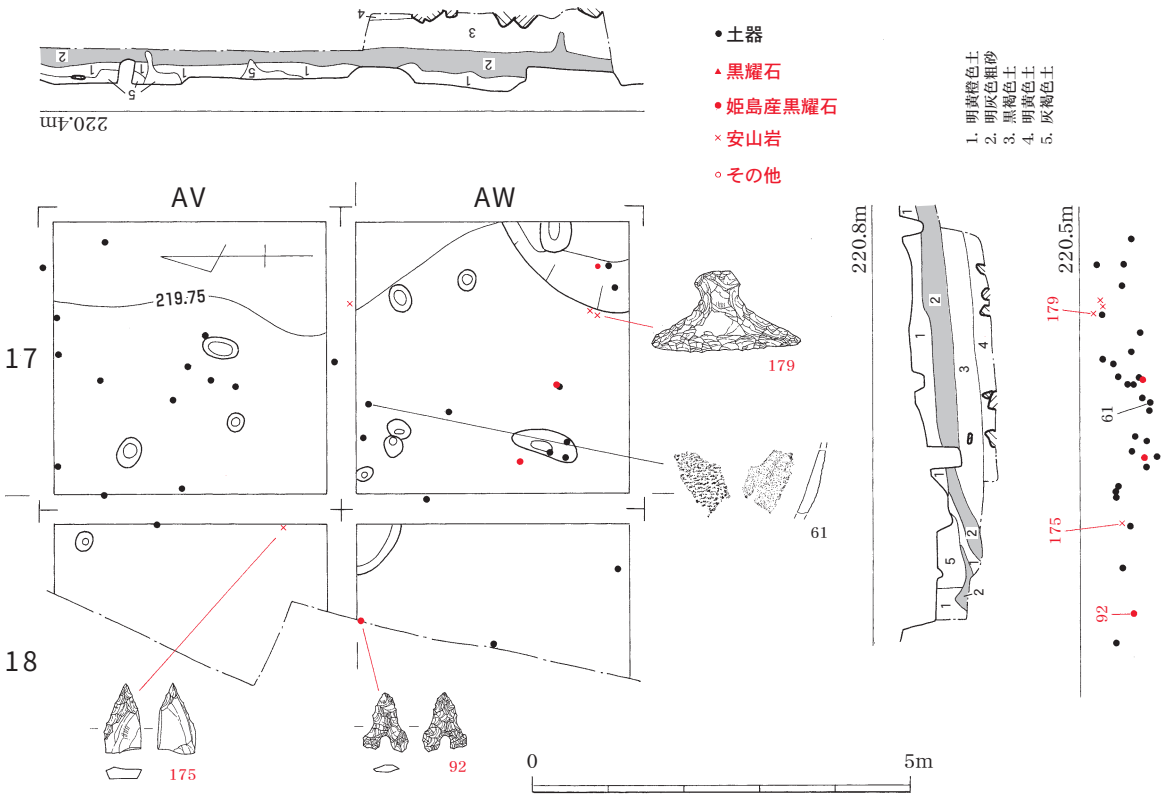
第41図　第Ⅲ文化層　AR－15・16、AS－15・16Gr実測図（1/100）



第42図　第Ⅲ文化層　AT－15・16、AU－13～17Gr実測図（1/100）



第43図　第Ⅲ文化層　AV－13～16、AW－13～16Gr実測図（1/100）



第44図　第Ⅲ文化層　AV－17・18、AW－17・18Gr実測図（1/100）

示できた資料が複数あった。AV－18Grから175の安山岩製石鏃未製品、AW－17Grから179の安山岩製石匙、AW－18Grから92の姫島産黒耀石製石鏃が出土している。

AX－13～16Gr、AY－14～16Gr（図版17、第45図）

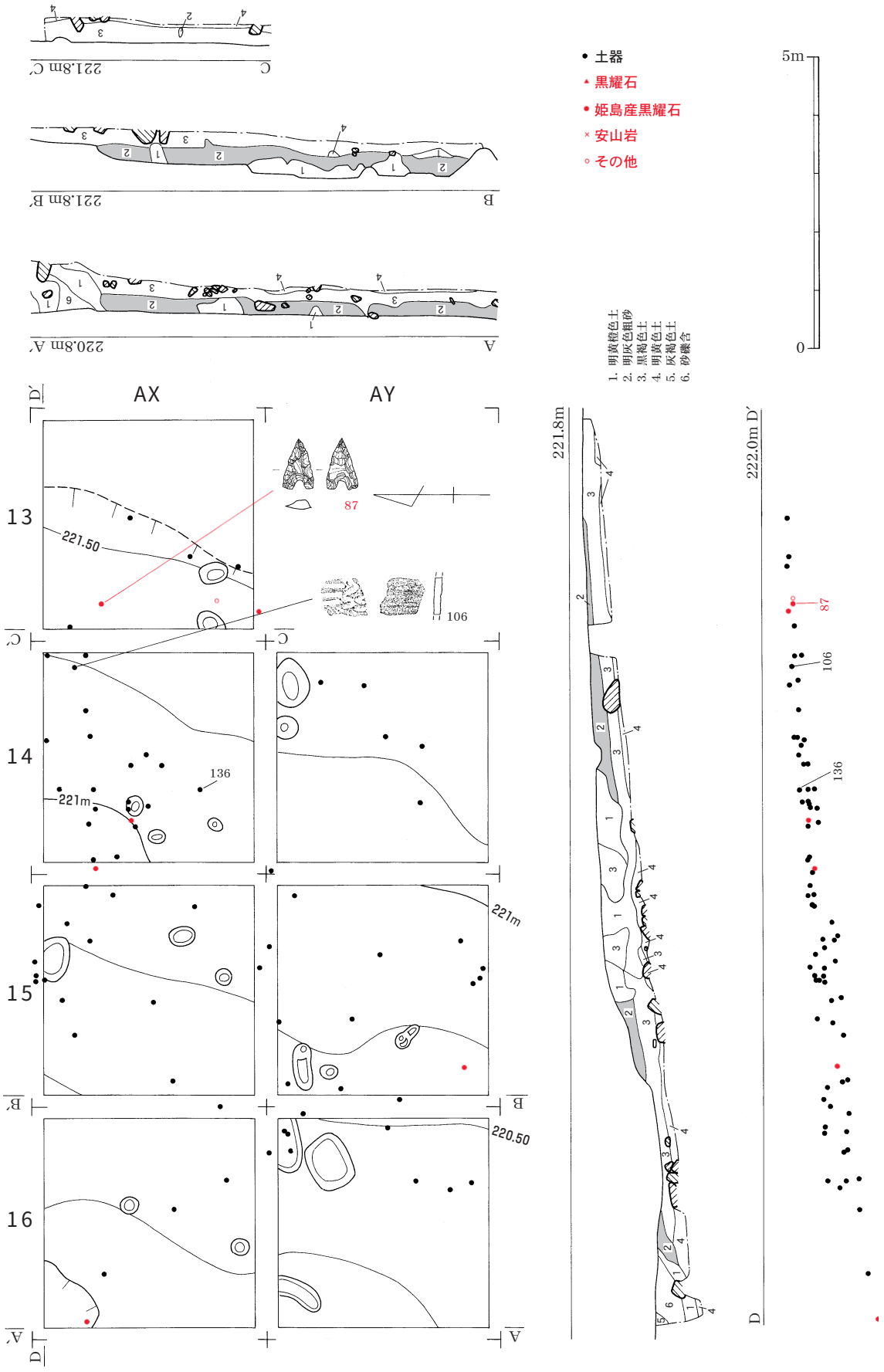
Ⅱ区東半部の中央付近に設定したグリッドである。後世の造成によって削平を受け、第２層明灰色粗砂層はAX－13、AX－16、AY－16Grではほとんど残っていない。他のグリッドでは20～30cmの厚さで堆積するが、この付近には風倒木による土層の撹乱が多く見られる。掘削後に遺構面の精査を行い、数基のピットを検出した。

出土遺物はそれほど多くない。土器はAX－14・15Grが最も多いが、他のグリッドからも点々と出土している。AX－14Grからは106の凹線文土器や136の条痕文土器が出土した。石器も非常に少なく、図示したものでは87の姫島産黒耀石製石鏃がAX－13Grから出土した程度である。

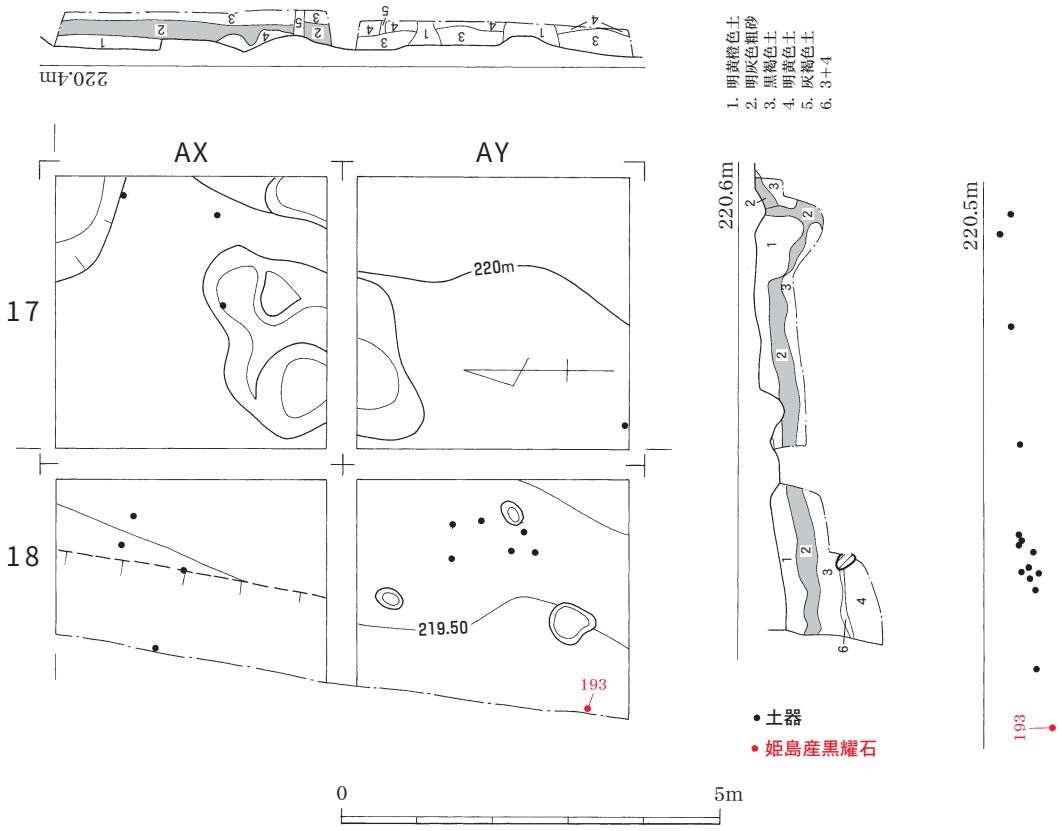
AX－17・18、AY－17・18Gr（図版17、第46図）

Ⅱ区東半部の西側に設定したグリッドである。地形は緩やかに東から西へと傾斜する。第２層明灰色粗砂層はAX－17・18Grでは20cm程度の厚さで堆積していたが、AY－17・18Grでは後世の造成により削平を受け、下層の黒褐色土が露出していた。掘削後に遺構面精査を行い、不整形土坑やピットを検出した。AX－17・AY－17Gr間にある土坑は風倒木痕である。

出土遺物は非常に少なく、AY－18Grから土器小片が数点まとまって出土した程度である。土器は図示できるものはない。石器では193の姫島産黒耀石スクレイパーが出土した程度である。



第45図　第Ⅲ文化層　AX－13～16、AY－14～16Gr実測図（1/100）



第46図　第Ⅲ文化層　AX－17・18、AY－17・18Gr実測図（1/100）

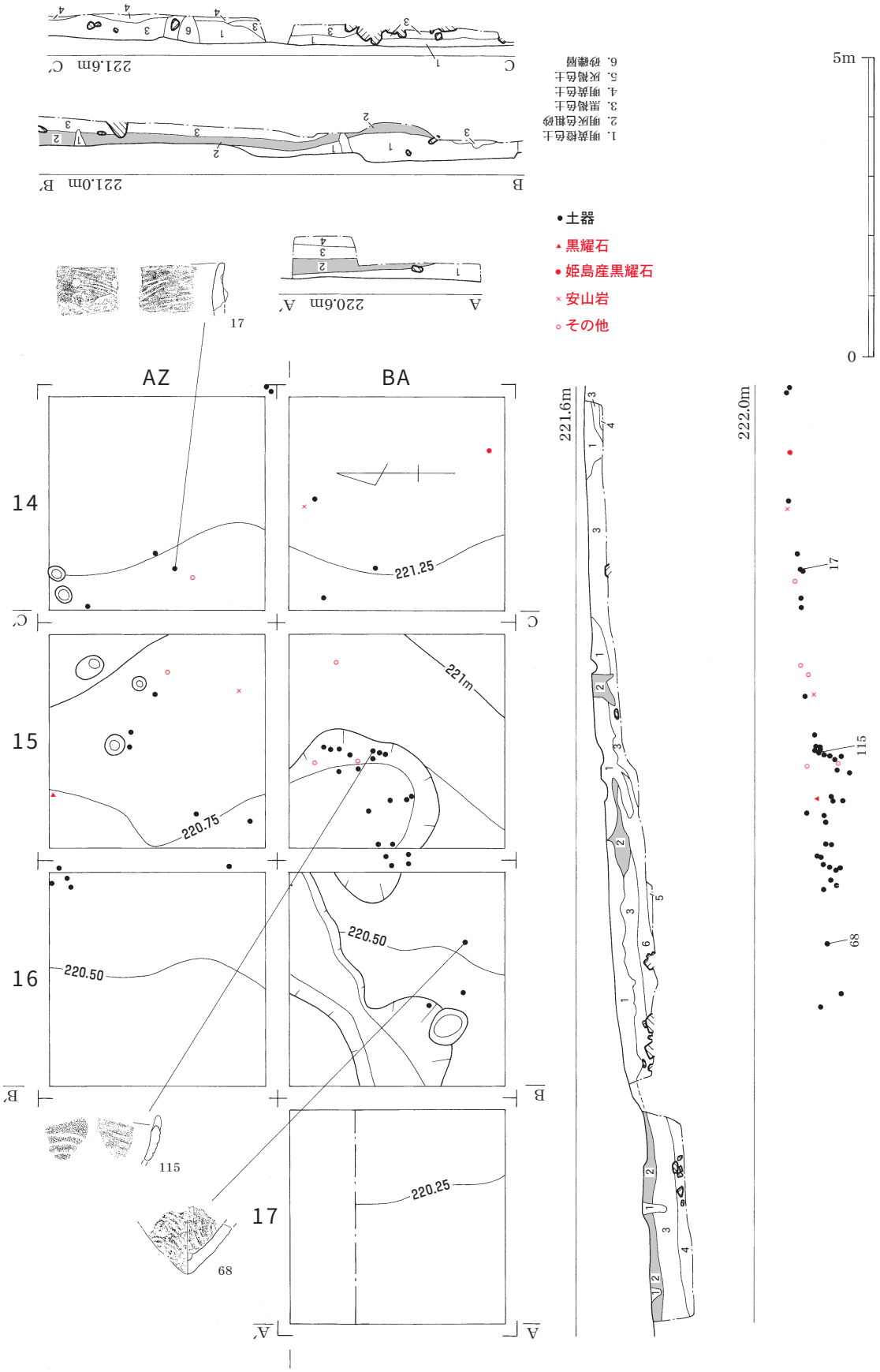
AZ－14～16、BA－14～17Gr（図版18、第47図）

Ⅱ区東半部の南側に設定したグリッドである。地形は緩やかに東から西へと傾斜する。第２層明灰色粗砂層は、後世の造成によってAZ－14、BA－14Grでは削平されており、またその他のグリッドでも風倒木痕などの撹乱によって良好に堆積するところが少ない。最も厚く堆積するところでは、厚さ20cmを測る。掘削後に遺構面精査を行い、ピットや不整形の土坑を検出した。BA－15・16Gr間で検出した土坑は風倒木痕である。

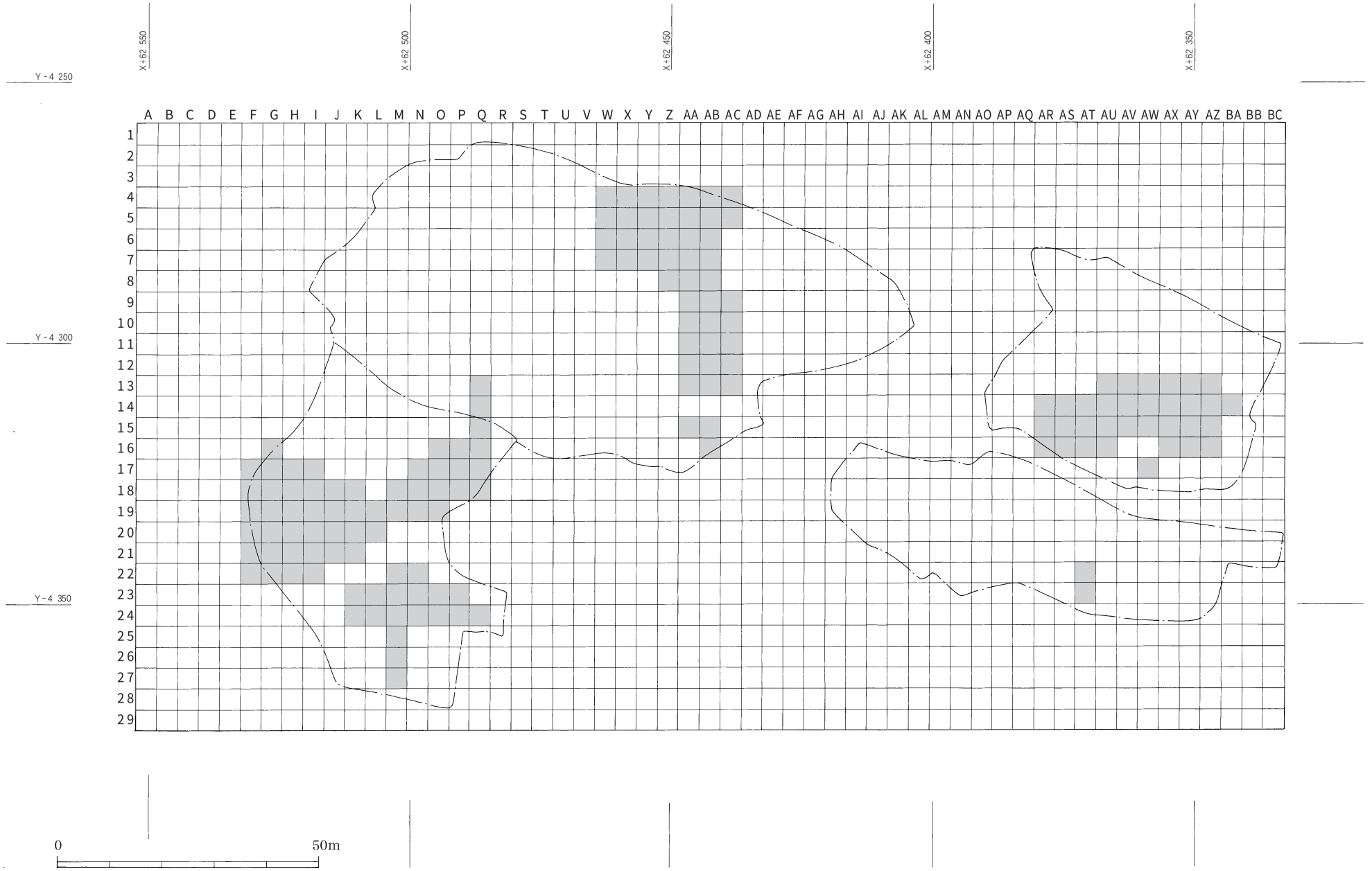
出土遺物はあまり多くない。土器はBA－15・16Gr間の風倒木痕内から多く出土している。図示したものでは、AZ－14Grから17の粘土瘤のある刺突文土器、BA－15Grの風倒木痕内から115の磨消縄文土器、BA－16Grから条痕調整を行う尖底の底部が出土した。石器はチップ等が数点出土したが、図示できるものはない。

第Ⅳ文化層の調査（第48～51図）

黒褐色土または黒灰色土からなる層である。粘性があり締まった感じの土質で、粗砂や礫を含む。Ⅰ区やⅢ区では第Ⅱ文化層の下層に位置しており、Ⅱ区では第Ⅲ文化層の下層に位置する。上伊良原榎遺跡の文化層では最下層に位置し、この層の下層は粘性が強くて固く締まり礫を多く含んだ黄灰色土・黄褐色土か、もしくは黄灰色の砂礫層であり、これらは数カ所のトレンチ調査の結果、無遺物層であることを確認している。



第47図　第Ⅲ文化層　AZ－14～16、BA－14～17Gr実測図（1/100）



第48図　第Ⅳ文化層グリッド配置図（1/1,000）

Ⅰ区北側のQ－13から15Grではこの黒褐色土層が一部で見られたため、遺物出土状況の確認も兼ねてトレンチ状に掘削を行った。Ⅰ区東側から南側にかけては、黒褐色土の堆積が広範に及んでいたため、遺物が出土する箇所を中心に広くグリッド調査を行った。

Ⅲ区北側は既に黒褐色土包含層は削平されており、その下層にある黄褐色土無遺物層が露出していたため、この層の上面で検出された遺構の調査を行ったものである。この地点についても第Ⅳ文化層の調査成果として報告を行うが、上述の理由のため確認された遺構には時期が下るものも含んでいる。Ⅲ区南東側や西側は黒褐色土の堆積が良好に認められたのでグリッド調査を行った。Ⅱ区でもやはり黒褐色土層の良好な堆積が広範囲に認められたため、遺物が出土する範囲を中心に調査を行った。

Q－13～15Gr（第52図）

Ⅰ区北側に設定したグリッドである。この付近では黒褐色土の堆積はあまり良い状態ではなく、礫を多く含んだ黄灰色粘質土の無遺物層の上に薄く堆積する程度であった。そのため、遺物の有無の確認も含めてQ－13～15Grの掘削を行った。

掘削後の地形は東から西へと傾斜しており、高低差は150cmを測る。出土遺物はあまり多くなく、石器が若干出土した程度である。土器はほとんど出土していない。図示できた石器は意外に多く、Q－13Grからは14の安山岩剥片、94の姫島産黒耀石製石鏃、133の安山岩製石鏃、185の珪質岩製楔形石器、Q－14Grからは31の黒耀石製石鏃、Q－15Grからは38の黒耀石製石鏃と156の黒耀石製石鏃未製品が出土した。

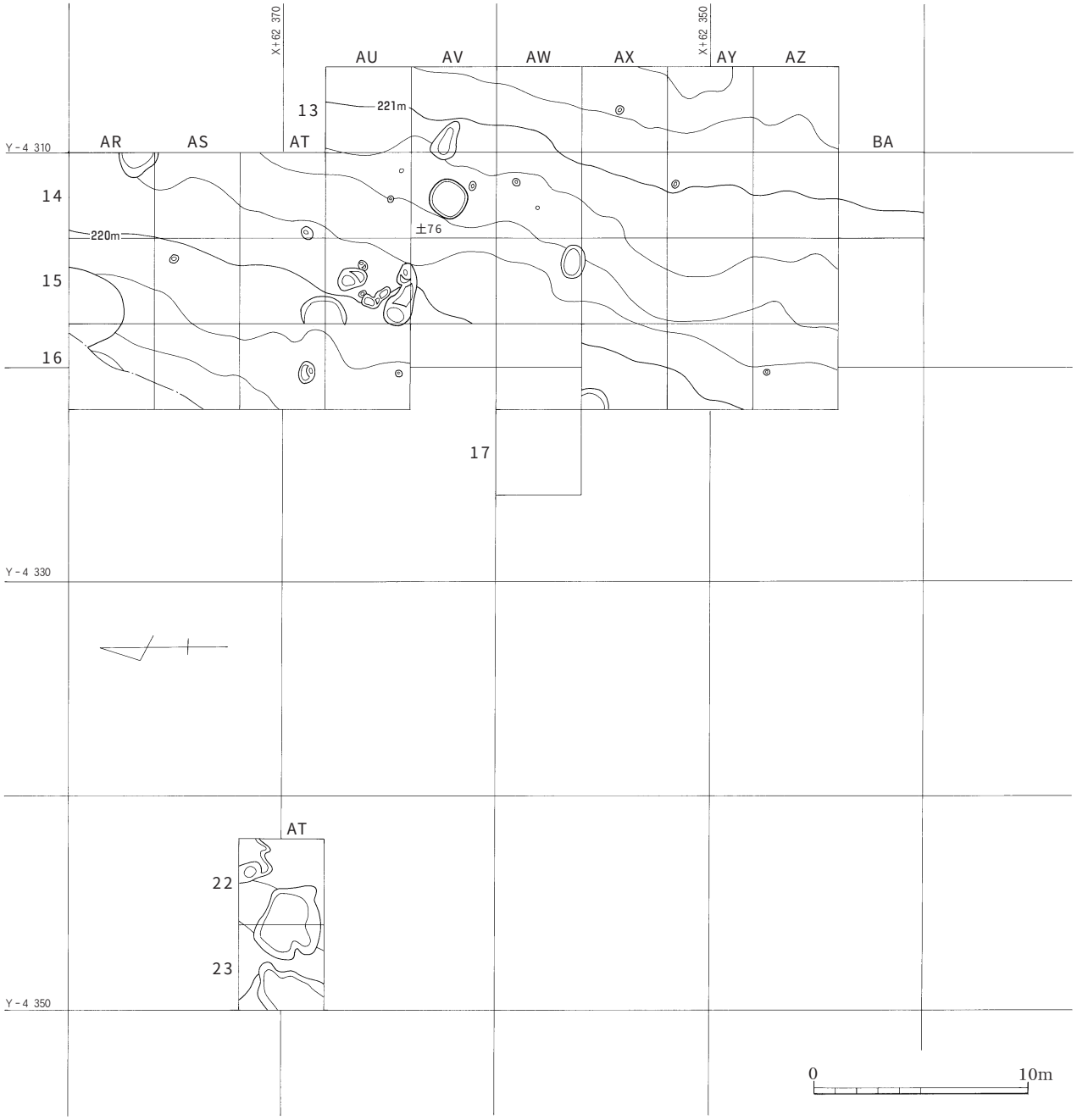
W－4～7、X－4～7Gr（図版12、第53図）

Ⅰ区東側に設定したグリッドである。掘削前の地形は東から西へと緩やかに傾斜する。黒褐色土は20cmの厚さで各グリッドにわたって堆積していた。掘削後に下層の明黄灰色砂質土の上面を精査した結果、ピットや土坑を検出した。特にX－5Grでは１号集石を検出することができた。

出土遺物はかなり多い。土器はそれほど点数が多くないが、図示できたものではW－4Grから45の山形押型文土器、X－4Grから64の広角尖底の土器底部、X－5Gr１号集石から46の楕円押型文土器、包含層中から55の楕円押型文土器が出土した。

石器は各グリッドから出土しており、特に黒耀石の出土点数が非常に多い。安山岩や珪質岩も若干出土しているが、姫島産黒耀石はほとんど出土していない。また安山岩チップは少ないが石鏃などの製品の点数は多い。図示した石器では、W－4Grから227の黒耀石剥片、W－5Grのピット内から37の黒耀石製石鏃、包含層中から33の黒耀石製石鏃、112の安山岩製石鏃、208の安山岩製スクレイパー、W－5・6Gr間から142の安山岩製石鏃、W－6Grから226の黒耀石剥片、242の珪質岩剥片、X－4Grから121の安山岩製石鏃、187の珪質岩楔形石器、257の珪質岩石核、X－5Grから123の安山岩製石鏃、158の黒耀石製石鏃未製品、167の安山岩製石鏃未製品、251の黒耀石石核、ピット内から53の黒耀石製石鏃、W－5・X－5Gr間から152の黒耀石製石鏃未製品、X－5・6Gr間から159の黒耀石製石鏃未製品、X－6Grから225の黒耀石剥片、X－７Grから188の珪質岩楔形石器が出土した。

第49図　Ⅰ区第Ⅳ文化層遺構配置図（1/300）

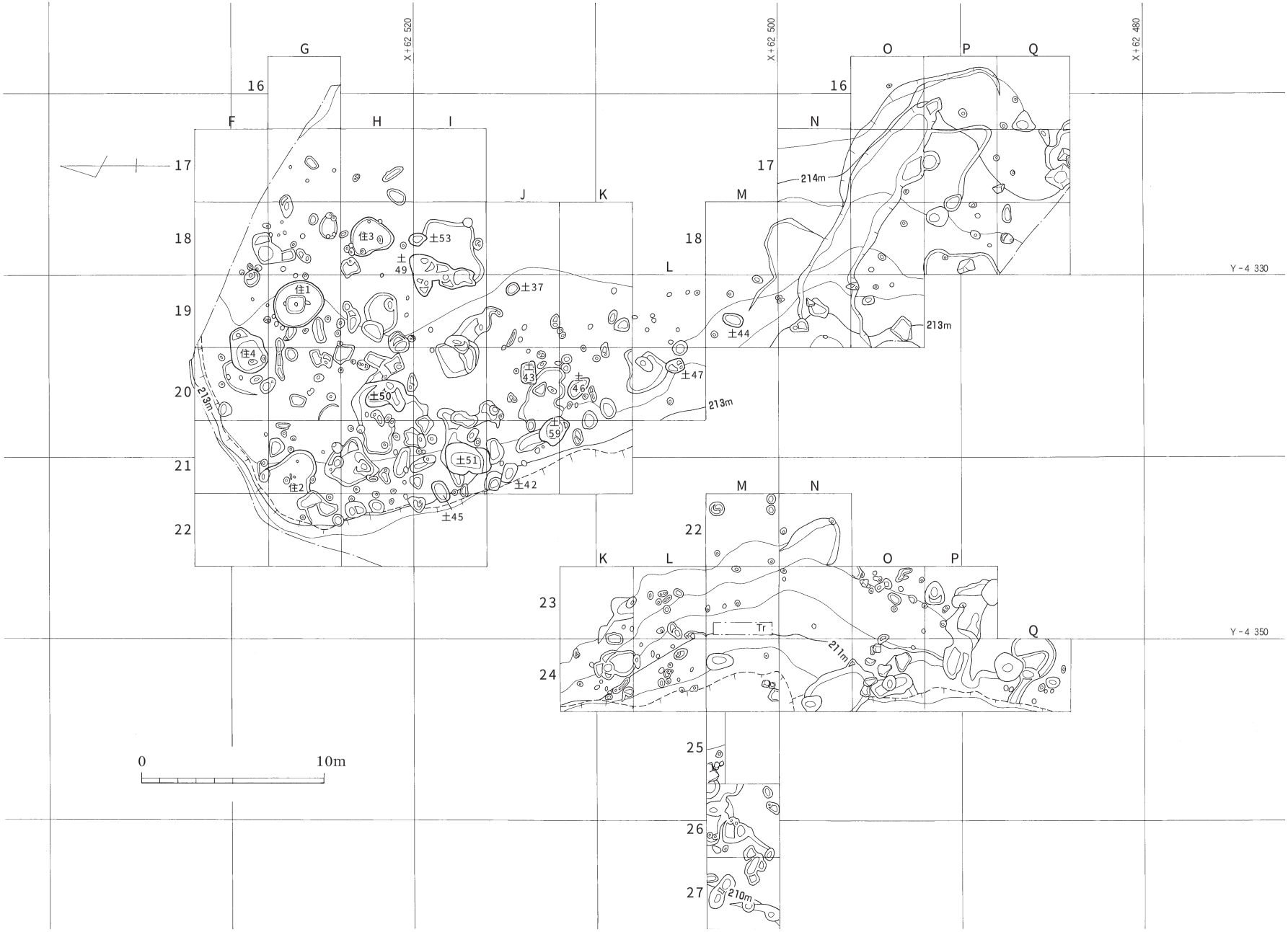


第50図　Ⅱ区第Ⅳ文化層遺構配置図（1/300）

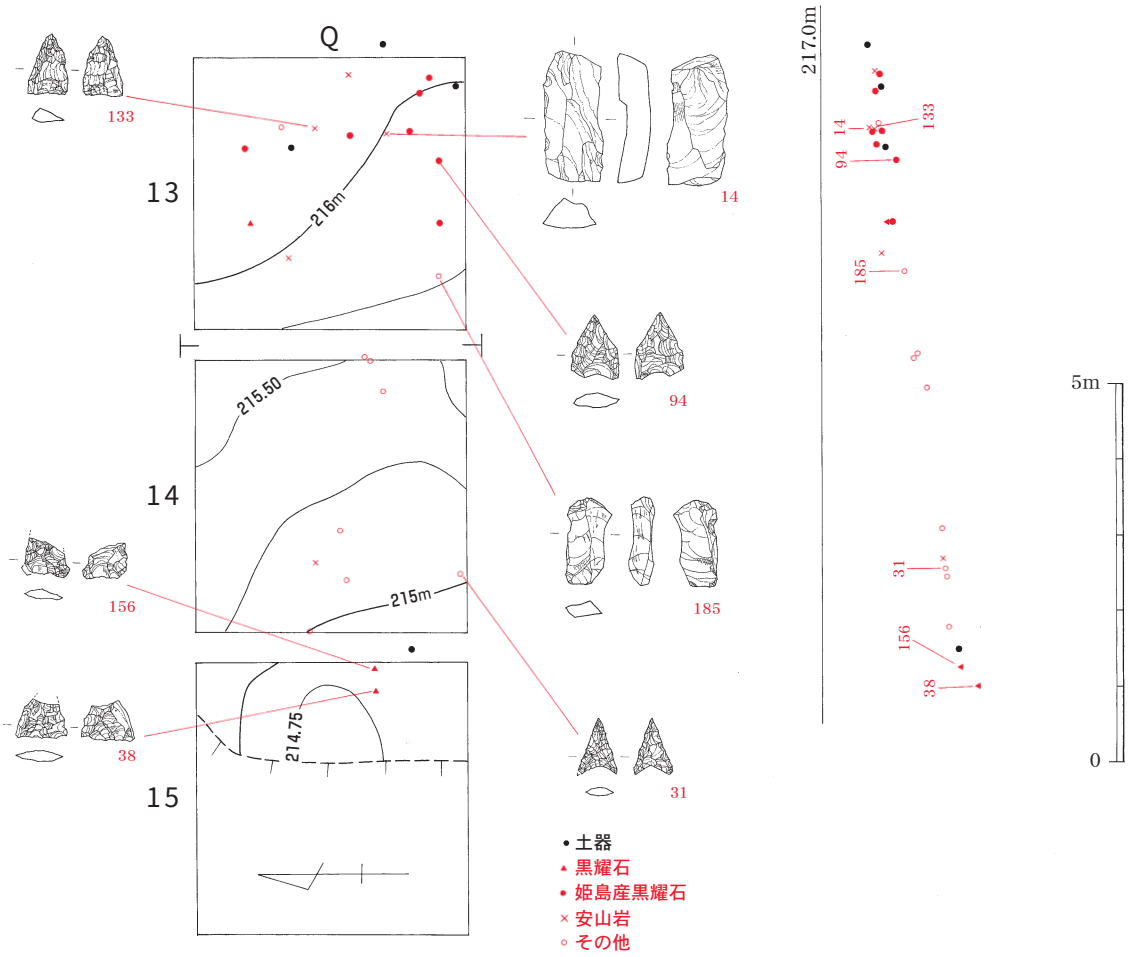
Y−4〜7、Z−4〜8Gr（第54図）

Ⅰ区東側に設定したグリッドである。地形は東から西へと緩やかに傾斜する。黒褐色土は各グリッドに見られ、20cm程の厚さで堆積していた。掘削後の遺構面精査の結果、ピット等を検出し、またZ－6Grでは２号集石を検出した。

出土遺物は比較的多い。土器はそれほど多くはないが、２号集石からまとまって出土した。図示したものでは、Y－5Grから56の楕円押型文土器、Z－6Grの２号集石内外から42の山形押型文土器、47〜50の押型文土器が出土した。石器は黒耀石や安山岩の出土が多く、姫島産黒耀石はほとんどない。図示したものではY－4Grから144の珪化木製石鏃、Y－5Grから21の黒耀石製石



第51図　Ⅲ区第Ⅳ文化層遺構配置図（1/300）



第52図　第Ⅳ文化層　Q－13～15Gr実測図（1/100）

鏃、Y－5・6Gr間から154の黒耀石製石鏃未製品、231の黒耀石剥片、Y－6・7間から５の黒耀石細石刃、Y－7Grから34の黒耀石製石鏃、Z－5Grから229の黒耀石剥片、Z－6Grから15の安山岩剥片、45の黒耀石製石鏃、２号集石内から288・289の凝灰岩台石、Z－8Grから230の黒耀石剥片が出土した。

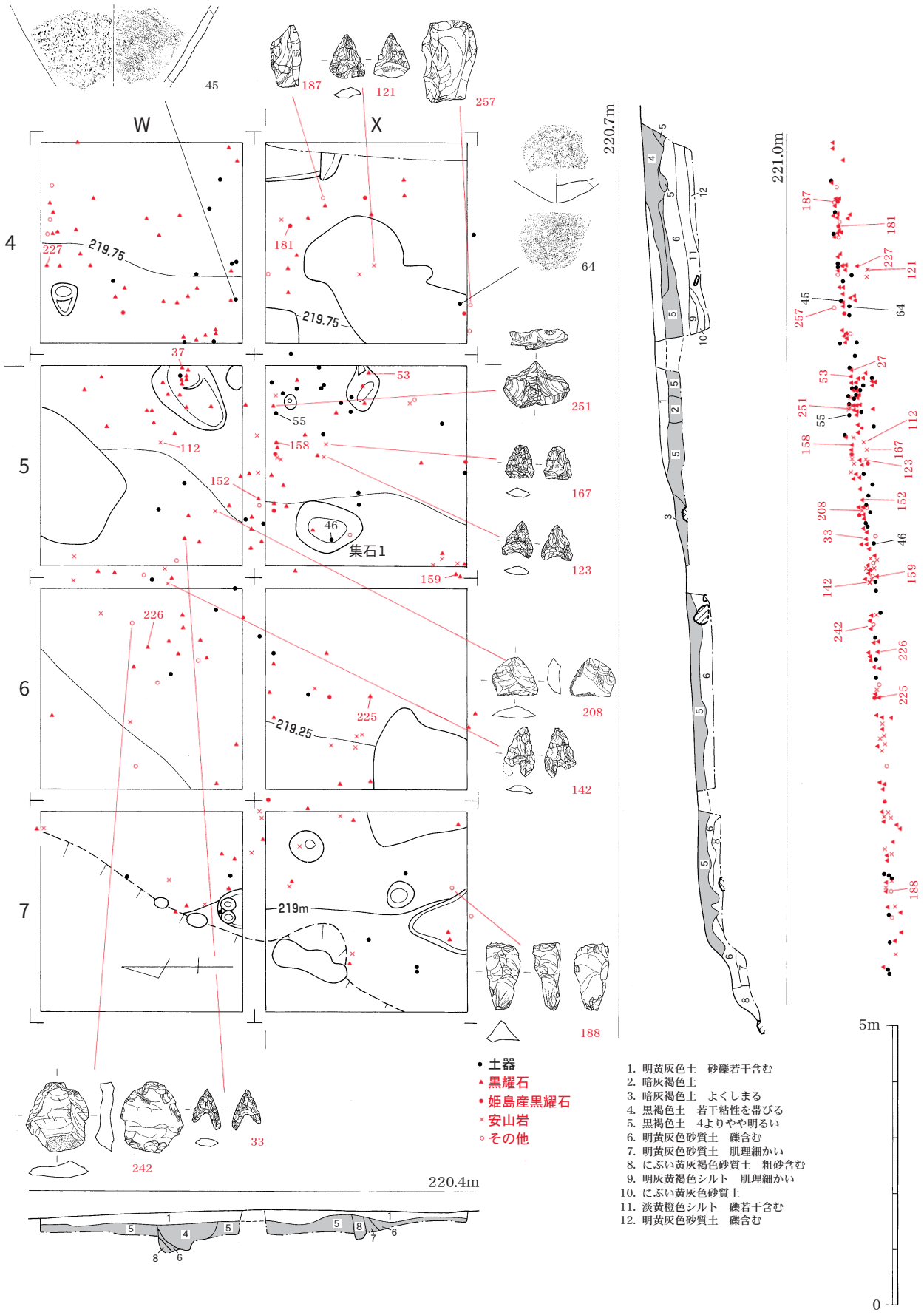
AA－4～8、AB－4～8Gr（図版19、第55図）

Ⅰ区東側に設定したグリッドである。地形は東から西へと緩やかに傾斜する。黒褐色土は各グリッドに良好に堆積しており、厚さは10～30cmを測る。この付近の黒褐色土は若干粘性を帯びる。掘削後に下層上面の精査を行い、ピットや不整形の落ち込みを検出した。

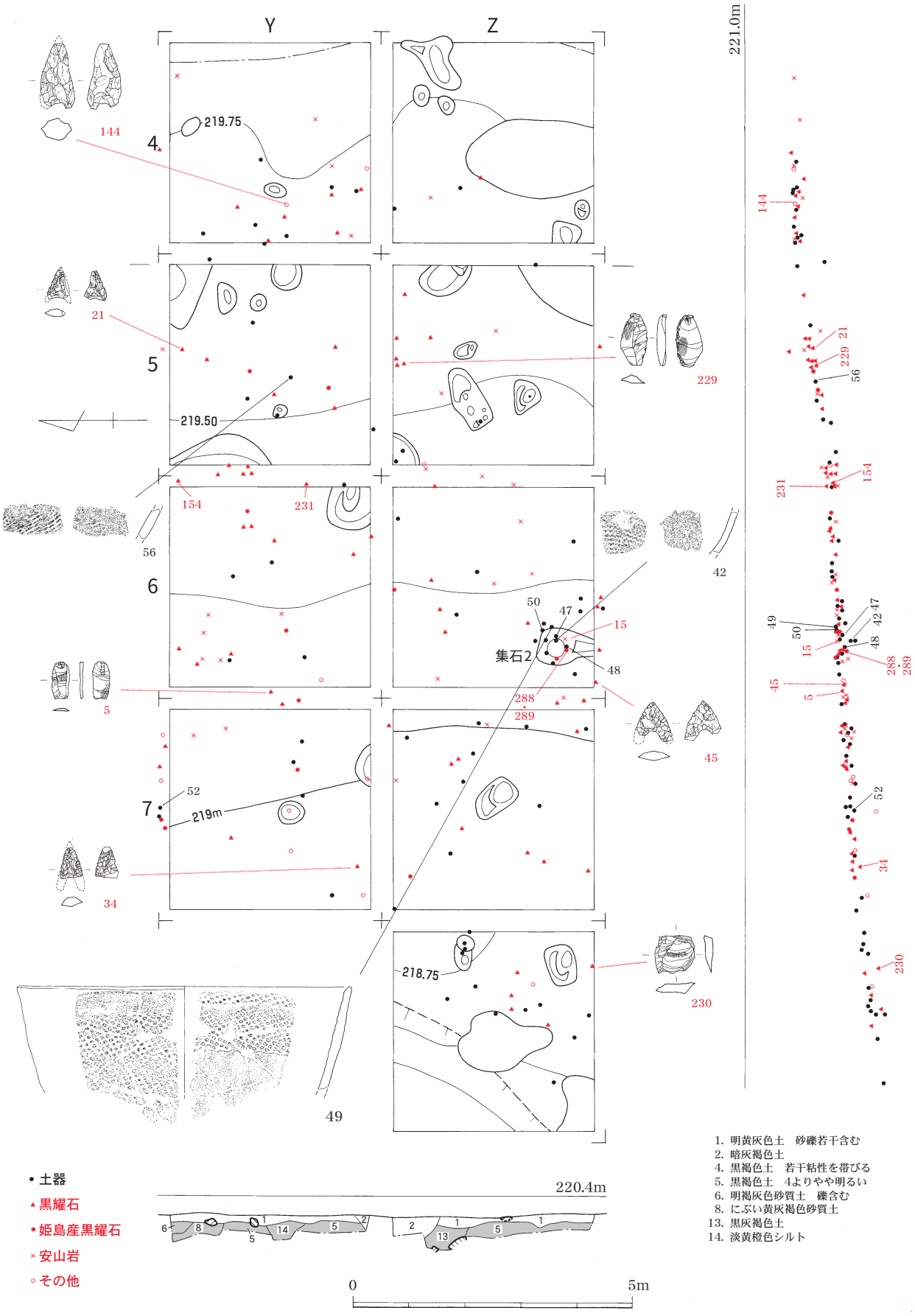
出土遺物はあまり多くなく、AA－6～8Grに集中が見られる程度である。図示した土器では、AA－6Grのピット内から35の条痕文土器、AA－7Grから53の楕円押型文土器が出土した。石器では、AA－5Grから54の黒耀石製石鏃、AA－6Grから178の珪質岩製石匙、AA－7・8Gr間から235の姫島産黒耀石剥片が出土した。

AA－9～13、AB－9～13Gr（第56図）

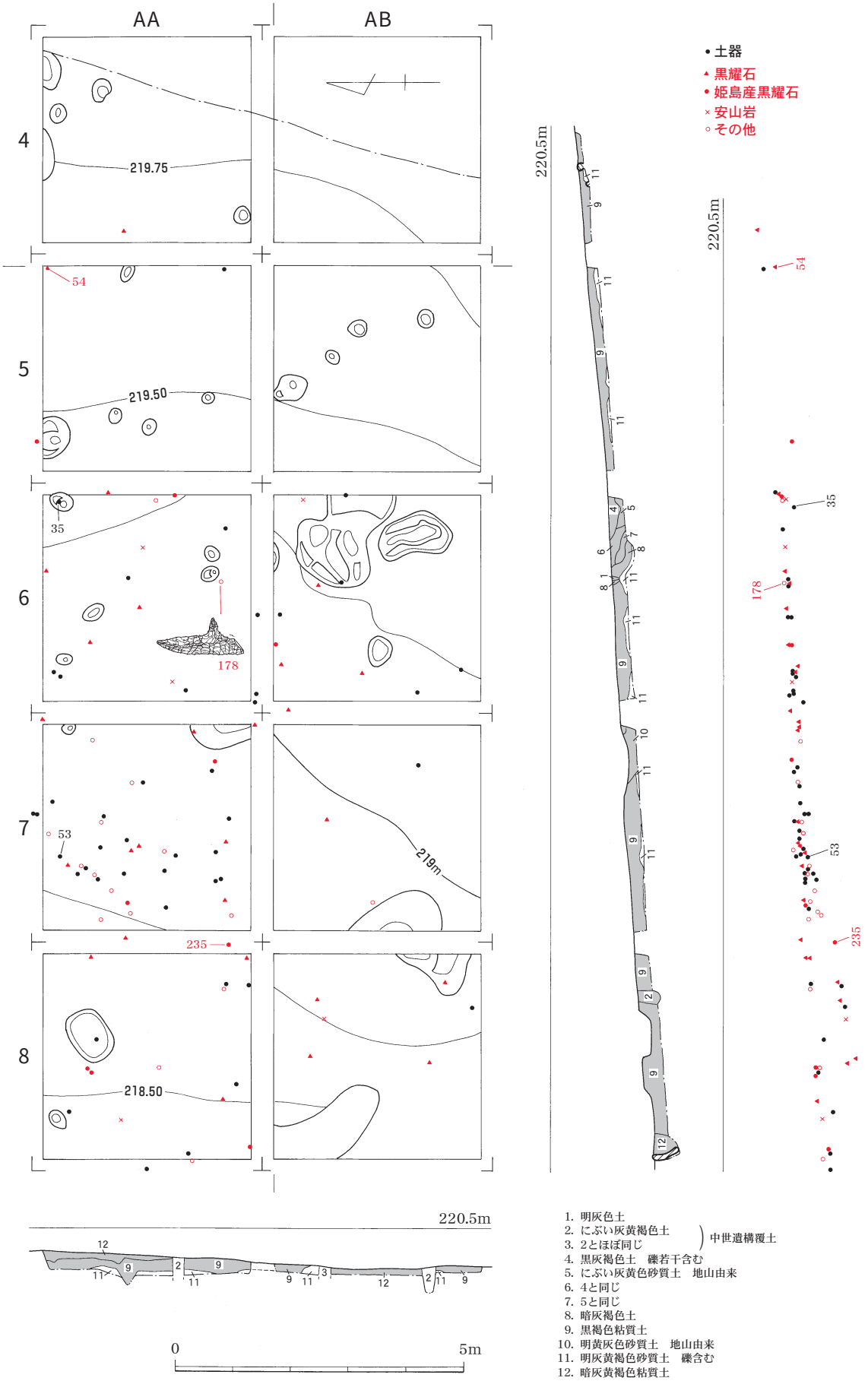
Ⅰ区南側に設定したグリッドである。地形は東から西へと緩やかに傾斜する。後世の造成に



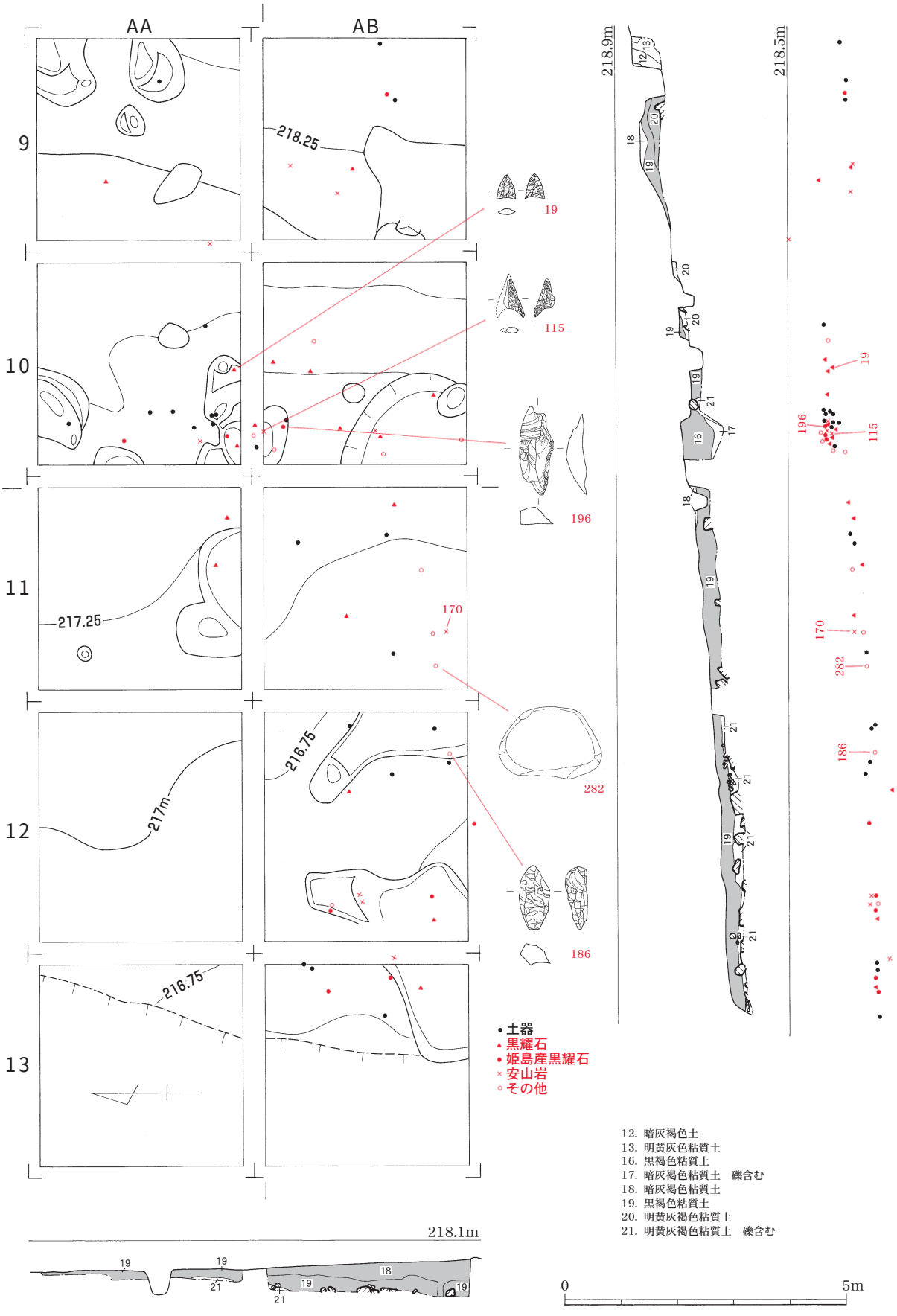
第53図　第Ⅳ文化層　W－4～7、X－4～7Gr実測図（1/100）



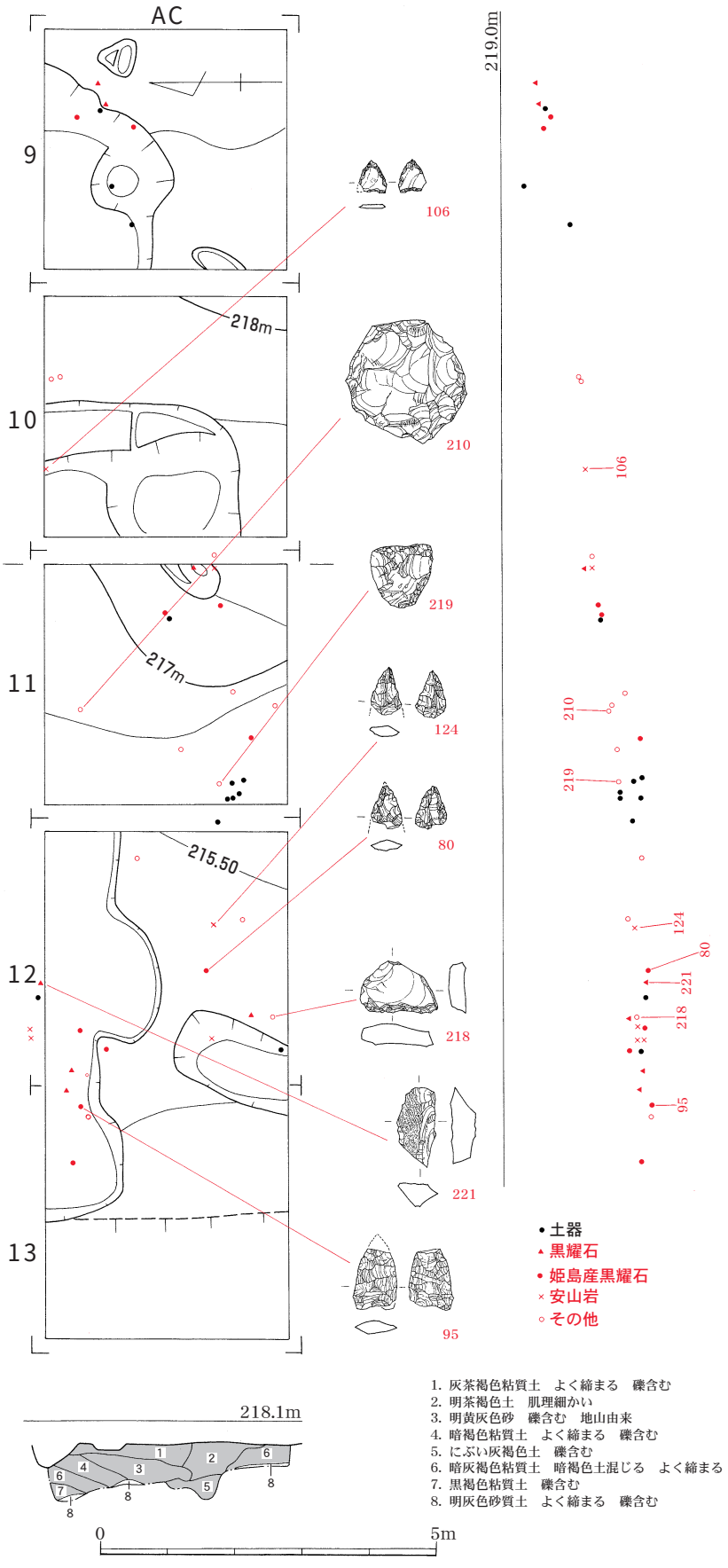
第54図　第Ⅳ文化層　Y－4～7、Z－4～8Gr実測図（1/100）



第55図　第Ⅳ文化層　AA－4～8、AB－4～8Gr実測図（1/100）



第56図　第Ⅳ文化層　AA－9～13、AB－9～13Gr実測図（1/100）



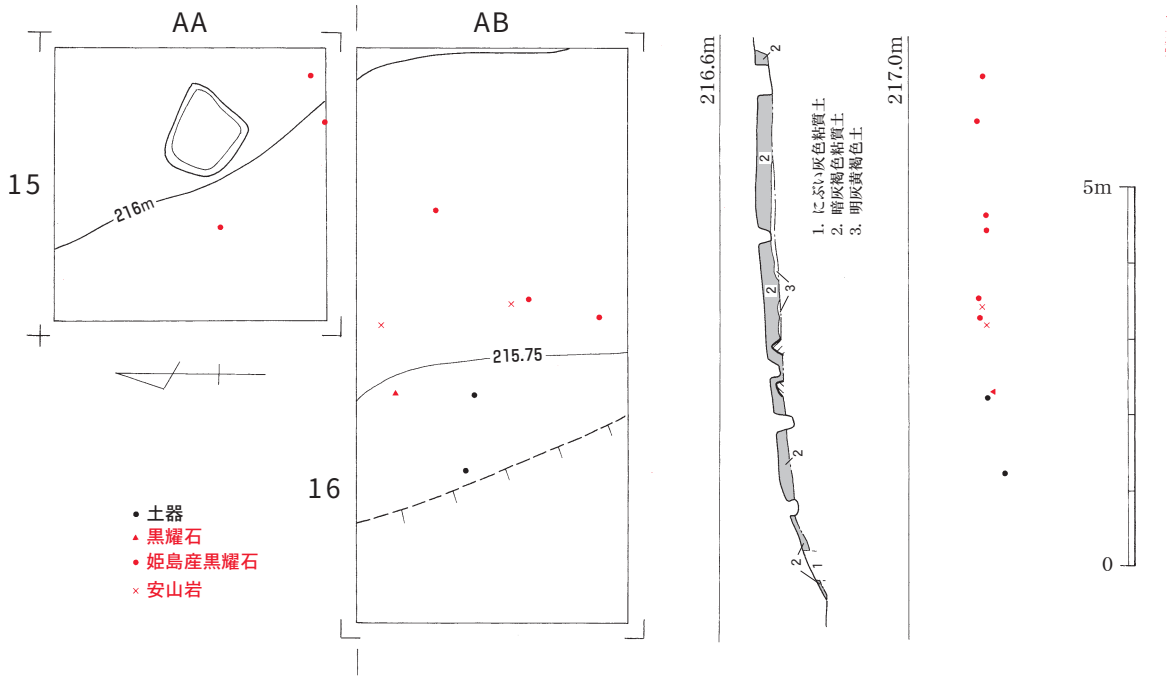
第57図　第Ⅳ文化層　AC－9～13Gr実測図（1/100）

よって部分的に削平を受けるが、黒褐色土は各グリッドで確認することができた。この付近では粘性を帯びた土質になる。層の厚さは5～40cmを測る。掘削後に下層上面の精査を行い、ピットや不整形の落ち込みを確認した。これらのうち、AA－10・AB－10Gr間にある不整形落ち込みは風倒木痕である。

出土遺物は少なく、AA－10、AB－10Gr付近で多少まとまっている程度である。土器は小片ばかりで図示できたものはない。石器ではAA－10Grから19の黒耀石製石鏃、AB－10Grの風倒木痕から115の安山岩製石鏃、196の姫島産黒耀石製スクレイパー、AB－11Grから170の安山岩製石鏃未製品、282の台石、AB－12Grから186の赤色チャート製楔形石器が出土した。

AC－9～13Gr（第57図）

Ⅰ区南側に設定したグリッドである。地形は東から西へと緩やかに傾斜する。黒褐色土は各グリッドで確認することができたが、この付近では粘性の強い土質になる。図示した土層はちょうど



第58図　第Ⅳ文化層　AA－15、AB－15・16Gr実測図（1/100）

風倒木痕に当たっており層の逆転が見られる。

出土遺物はあまり多くなかったが、その割に図示できた石器は多い。AC－10Grから106の安山岩製石鏃、AC－11Grから210の珪質岩製スクレイパー、219の珪化木製スクレイパー、AC－12Grから80の姫島産黒耀石製石鏃、124の安山岩製石鏃、218の赤色チャート製スクレイパー、221の黒耀石剥片、AC－13Grから95の姫島産黒耀石製石鏃が出土した。土器は小片ばかりで図示できなかった。

AA－15、AB－15・16Gr（第58図）

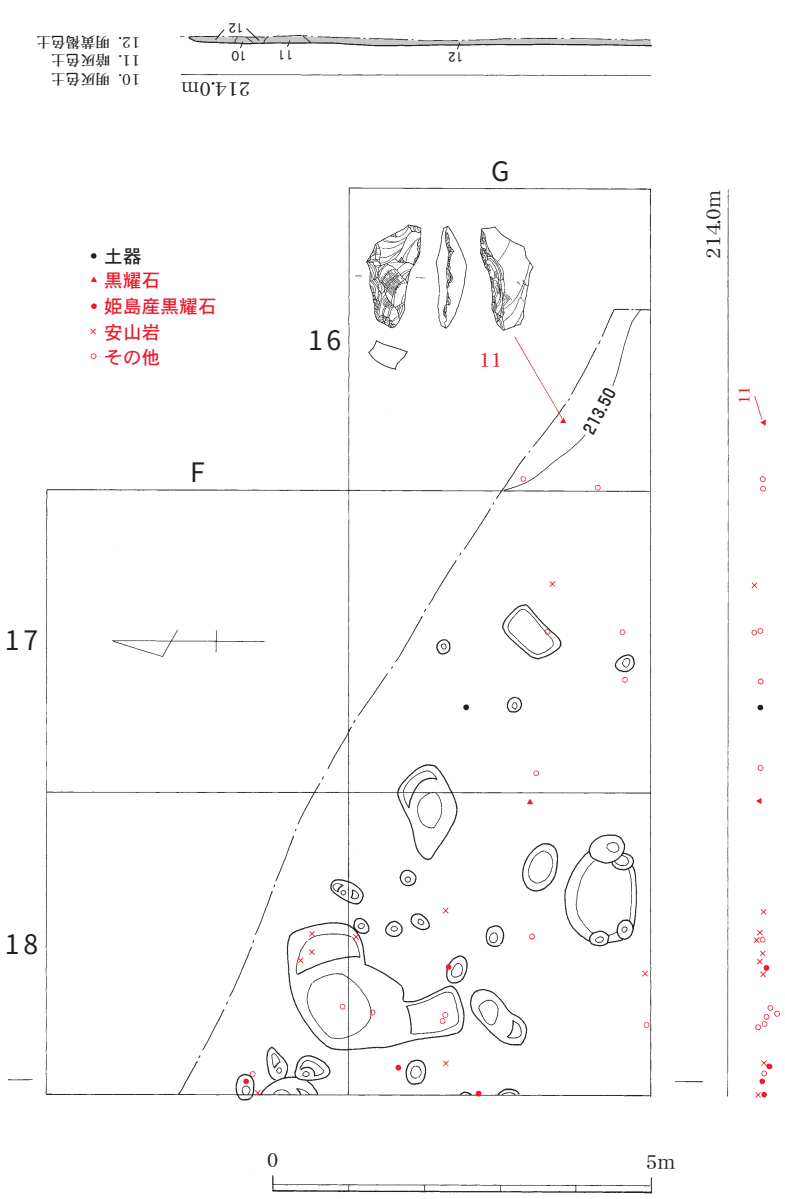
Ⅰ区西側に設定したグリッドである。地形は緩やかに東から西へと傾斜しており、西端は後世の段造成により大きく削平される。黒褐色土は他の地点とは質が若干変化しており、粘性のある灰褐色土となる。この層は各グリッドで約20cmの厚さで堆積していた。掘削後に下層上面の遺構面精査を行ったが、検出できたのはAA－15Grの不整形ピット1基のみである。遺物は数点出土したが、図示できるものはない。

F－17・18、G－16～18Gr（図版13、第59図）

Ⅲ区北側に設定したグリッドである。地形はほぼ平坦でほとんど高低差はない。後世の耕作等によって削平をうけており、５cm程度の包含層しか残っていなかった。包含層は第11層暗灰色土である。

包含層掘削後、第12層明黄褐色土層上面の精査を行い、ピットや不整形土坑等を検出した。

出土遺物はあまり多くない。珪質岩や安山岩のチップが目立つ。図示した遺物では、G－16Grから11の剥離調整のある黒耀石が出土した。



第59図　第Ⅳ文化層　F－17・18、G－16～18Gr実測図（1/100）

F－19～22、G－19～22Gr（図版13、第60図）

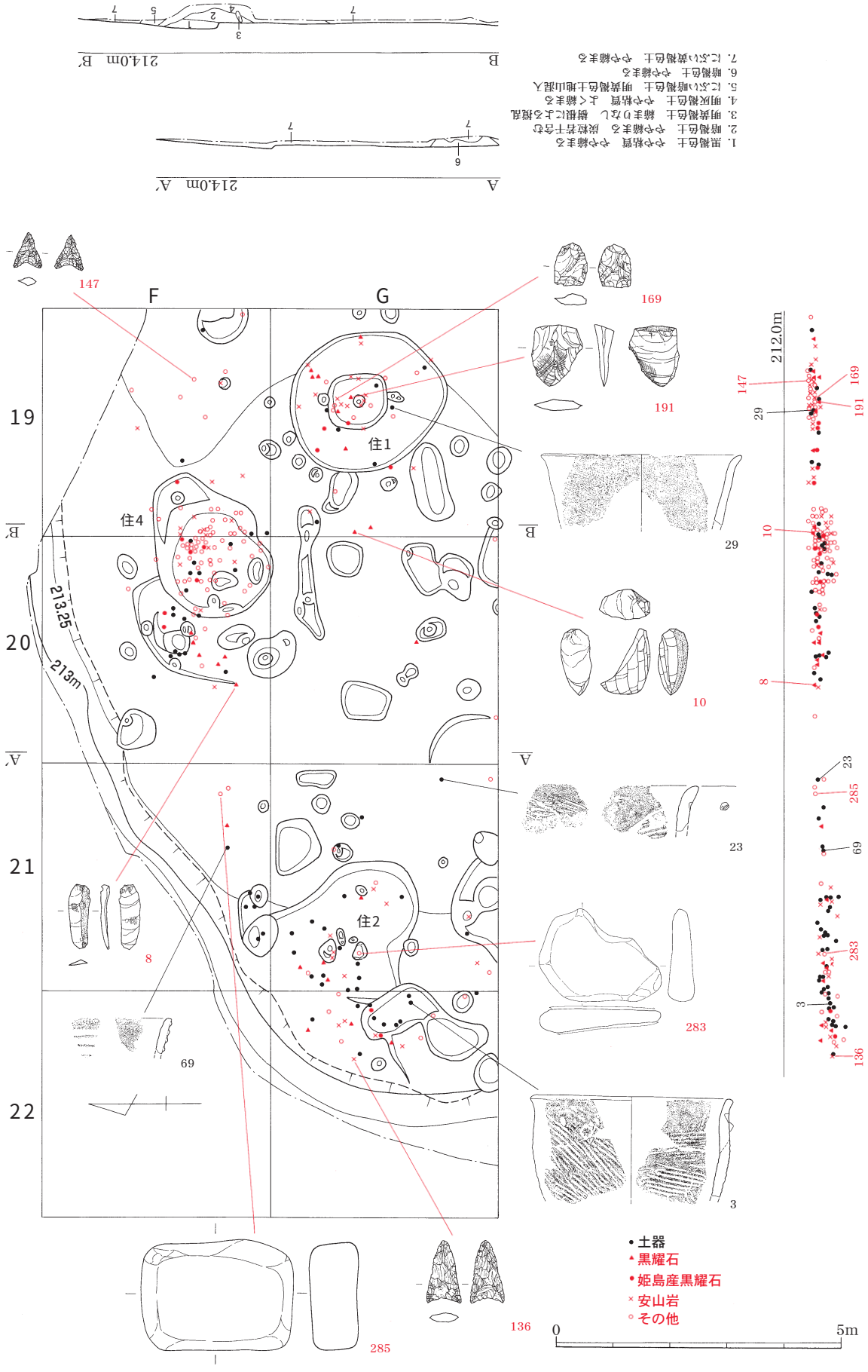
Ⅲ区北側に設定したグリッドである。地形はほぼ平坦で高低差はほとんどない。北西側は丘陵の縁にあたり急角度の崖面となる。後世の削平を受けており、包含層はほとんど失われてグリッド調査以前から無遺物層の第７層黄褐色土が露出していた。この層上面の精査を行った結果、F－19・20Grから４号竪穴住居跡、G－19Grから１号竪穴住居跡、G－21・22Grから２号竪穴住居跡を検出した。その他各グリッドでピット等を検出した。

包含層はほとんど失われていたため、出土遺物は遺構内に集中している。土器は１・２・４号竪穴住居内に集中する。図示できたものでは、F－21Gr包含層から69の轟B式土器、G－19Gr１号竪穴住居跡内から29の条痕文土器、G－21Gr包含層から23の刺突文土器、G－22Grピット内から３の粘土瘤のある刺突文土器が出土した。

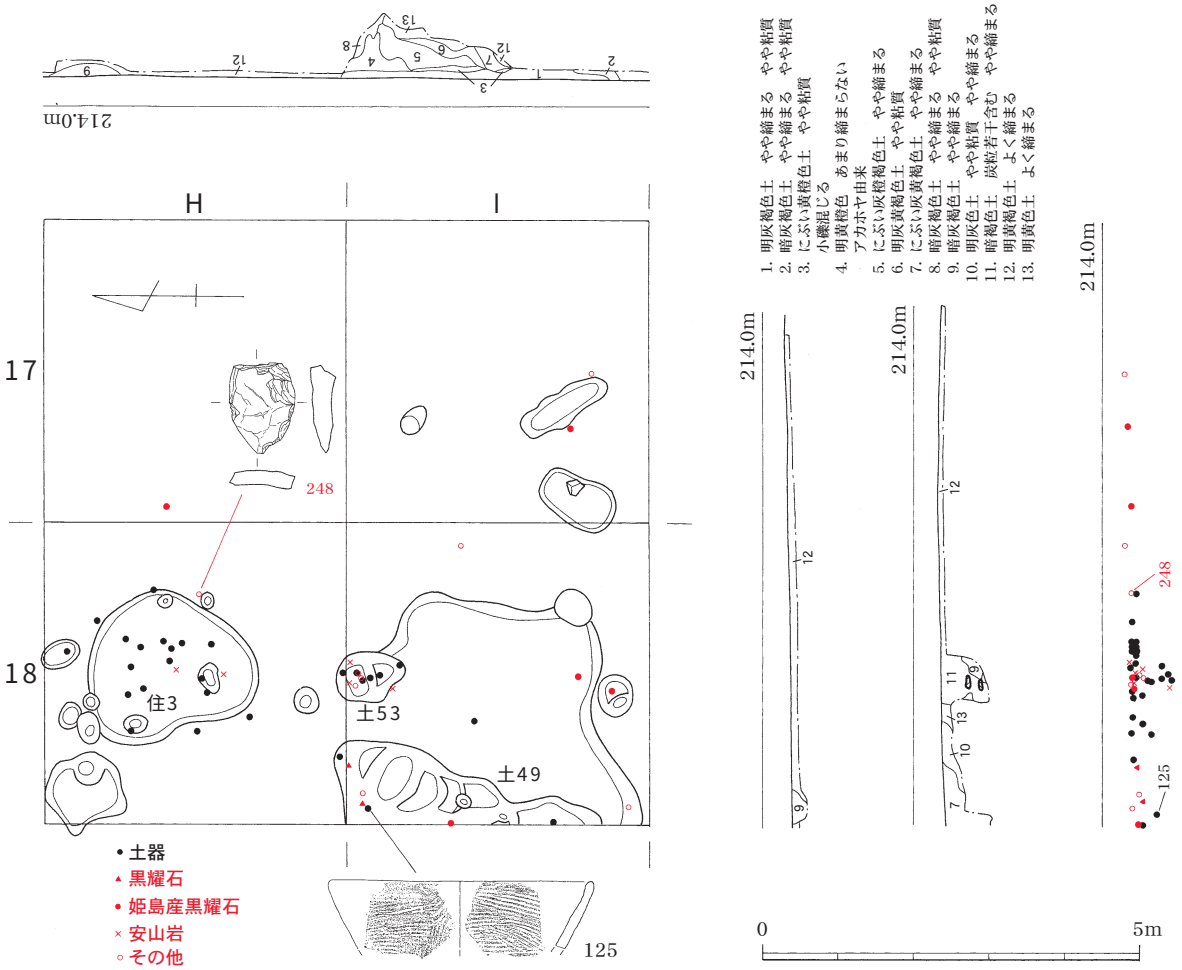
石器では４号竪穴住居内から出土した多数の珪質岩チップが特徴的である。他に図示した石器ではF－19Gr包含層から147の赤色チャート製石鏃、F－20Grから８の黒耀石製細石刃、285の台石、G－19Gr１号竪穴住居跡内から169の安山岩製石鏃未製品、191の黒耀石製スクレイパー、包含層から10の黒耀石細石刃核、G－21Gr２号竪穴住居跡内から283の台石、G－22Grから136の安山岩製石鏃が出土した。

H－17・18、I－17・18Gr（第61図）

Ⅲ区北側に設定したグリッドである。地形はほぼ平坦で高低差はない。後世の削平等により包含層はほとんど失われ、グリッド調査以前から下層の無遺物層である明黄褐色土層が露出していた。この層上面の精査を行い、H－18Grで３号竪穴住居跡、I－18Grで49・53号土坑を検出し



第60図　第Ⅳ文化層　F－19～22、G－19～22Gr実測図（1/100）



第61図　第Ⅳ文化層　H－17・18、I－17・18Gr実測図（1/100）

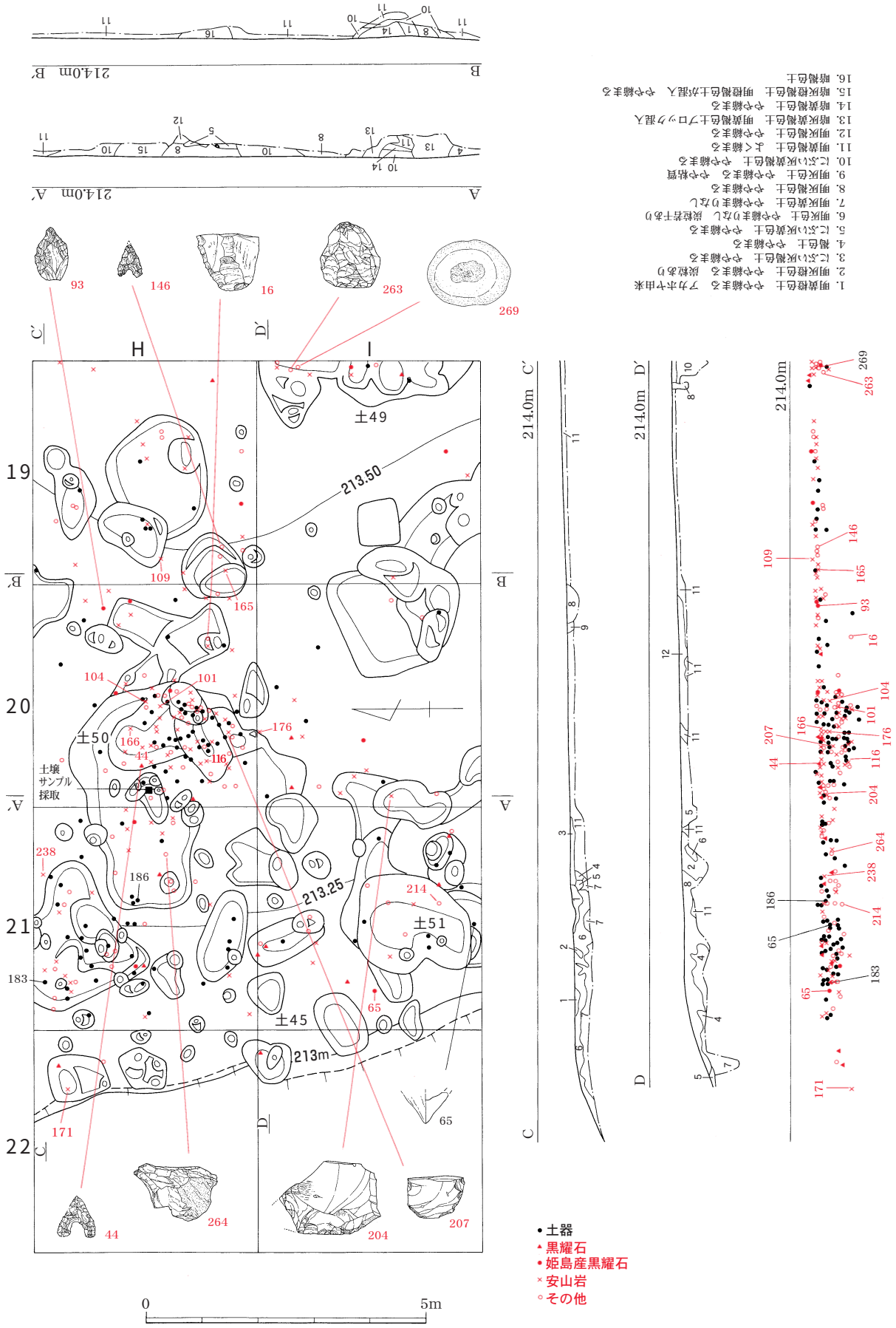
た。その他ピット等も検出した。

包含層はほとんど失われていたため、出土遺物は遺構内にほぼ限定される。H－18Gr３号竪穴住居跡からは土器がまとまって出土したが、図示できたものはない。I－18Gr49号土坑からは125の土器が出土した。他にH－18Grの住居跡近くから248の石英剥片が出土した。

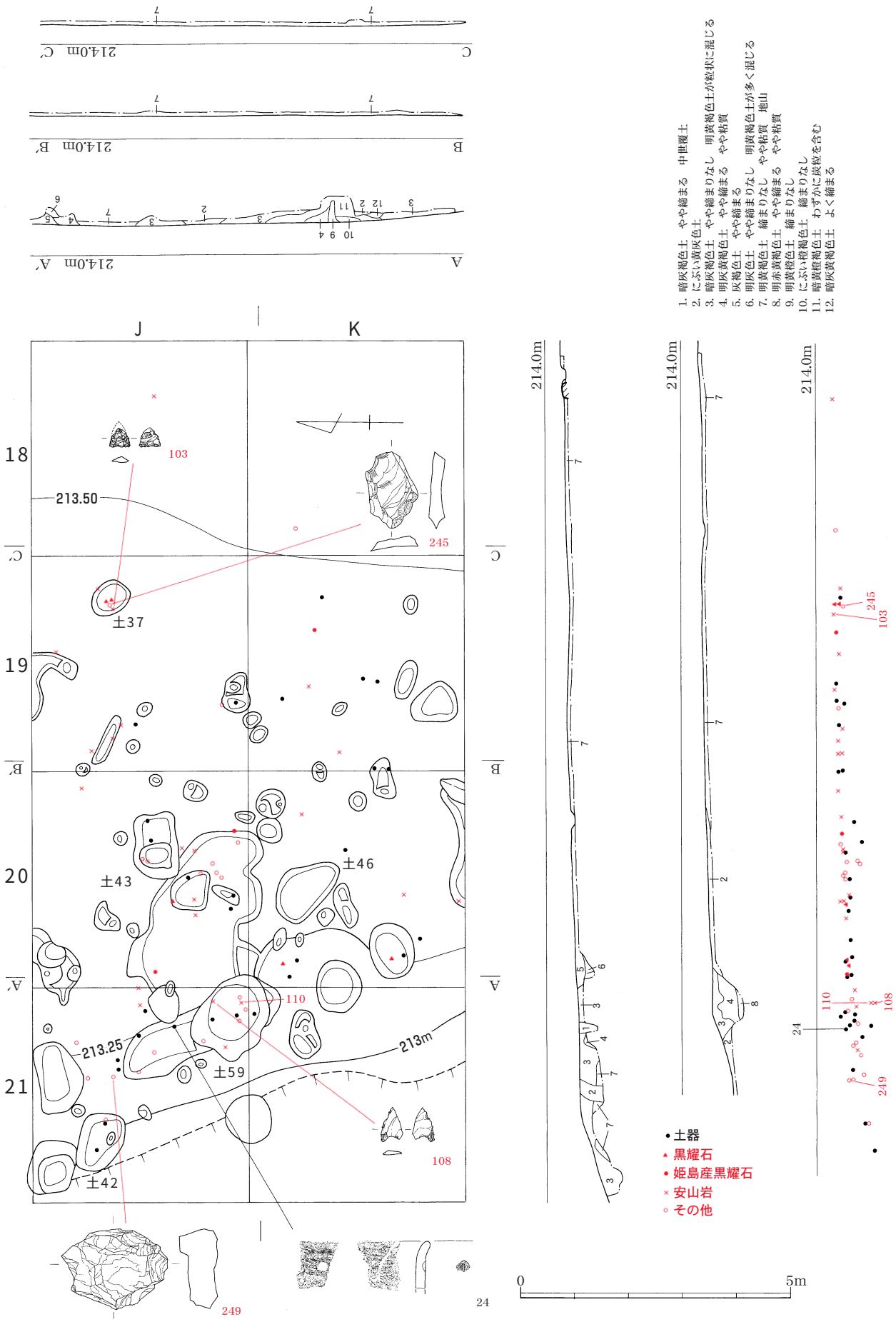
H－19～22、I－19～22Gr（図版13・14、第62図）

Ⅲ区北側に設定したグリッドである。地形はほぼ平坦で高低差はなく、西端は急斜面で地形が落ちている。東半部は削平によって包含層はほとんど残っていなかったが、西半部は20cmの厚さで灰褐色土の包含層が堆積していた。包含層掘削後、下層にある明黄褐色土上面の精査を行い、H－20Grで50号土坑、I－19Grで49号土坑、I－21Grで45・51号土坑を検出した。他にも各グリッドでピットや不整形の落ち込みを検出した。

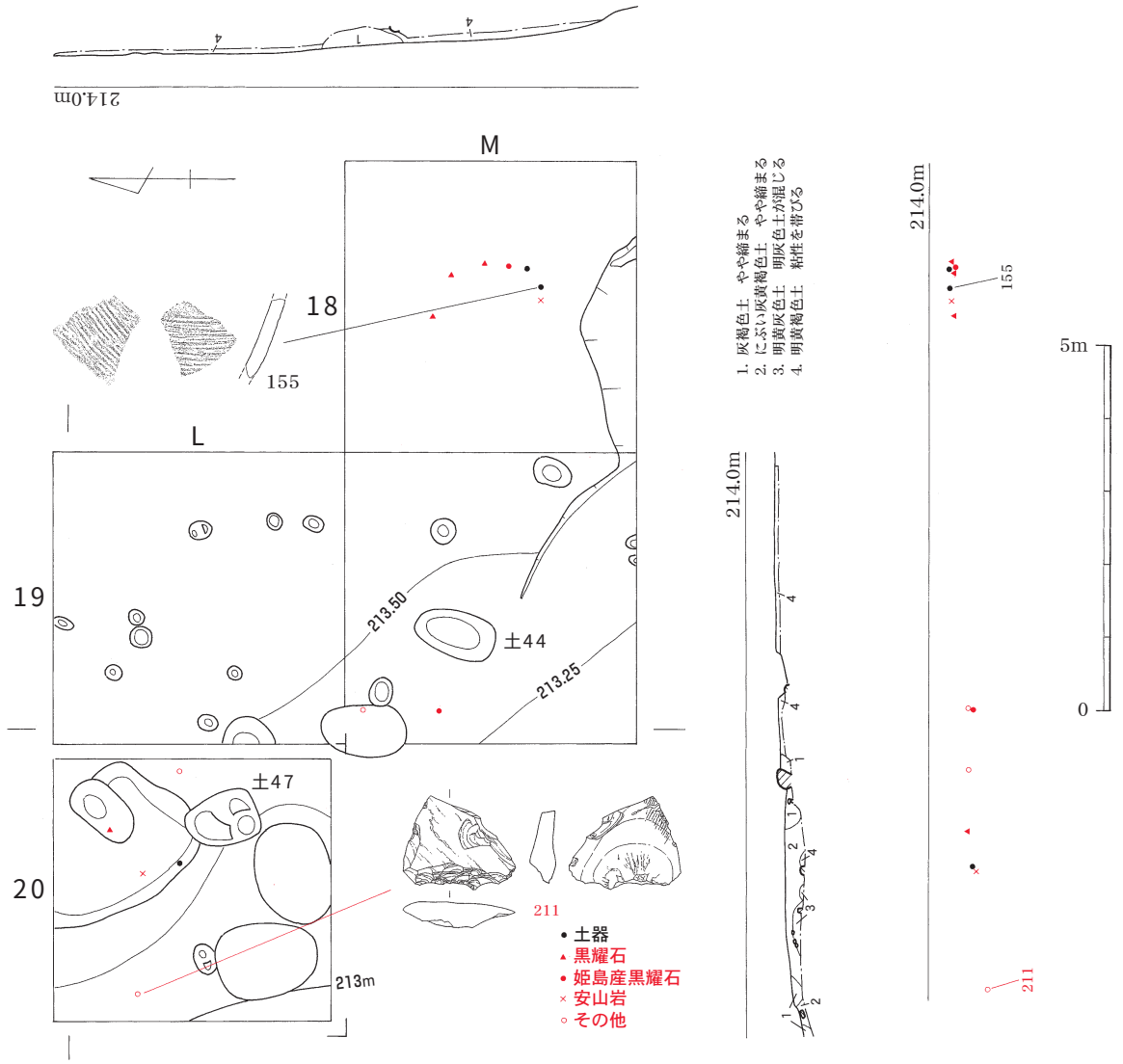
出土遺物は遺構内に集中する。図示した土器ではH－21Grの不整形落ち込み内から184の波状口縁の土器、186の無文土器、I－21Grから65の尖底の底部が出土した。石器ではH－19Grピット内から146の赤色チャート製石鏃、109の安山岩製石鏃、165の安山岩製石鏃未製品、H－20Gr不整形落ち込み内から16の珪質岩製スクレイパー、50号土坑から44の黒耀石製石鏃、101・104・



第62図　第Ⅳ文化層　H－19～22、I－19～22Gr実測図（1/100）



第63図　第Ⅳ文化層　J－18～21、K－18～21Gr実測図（1/100）

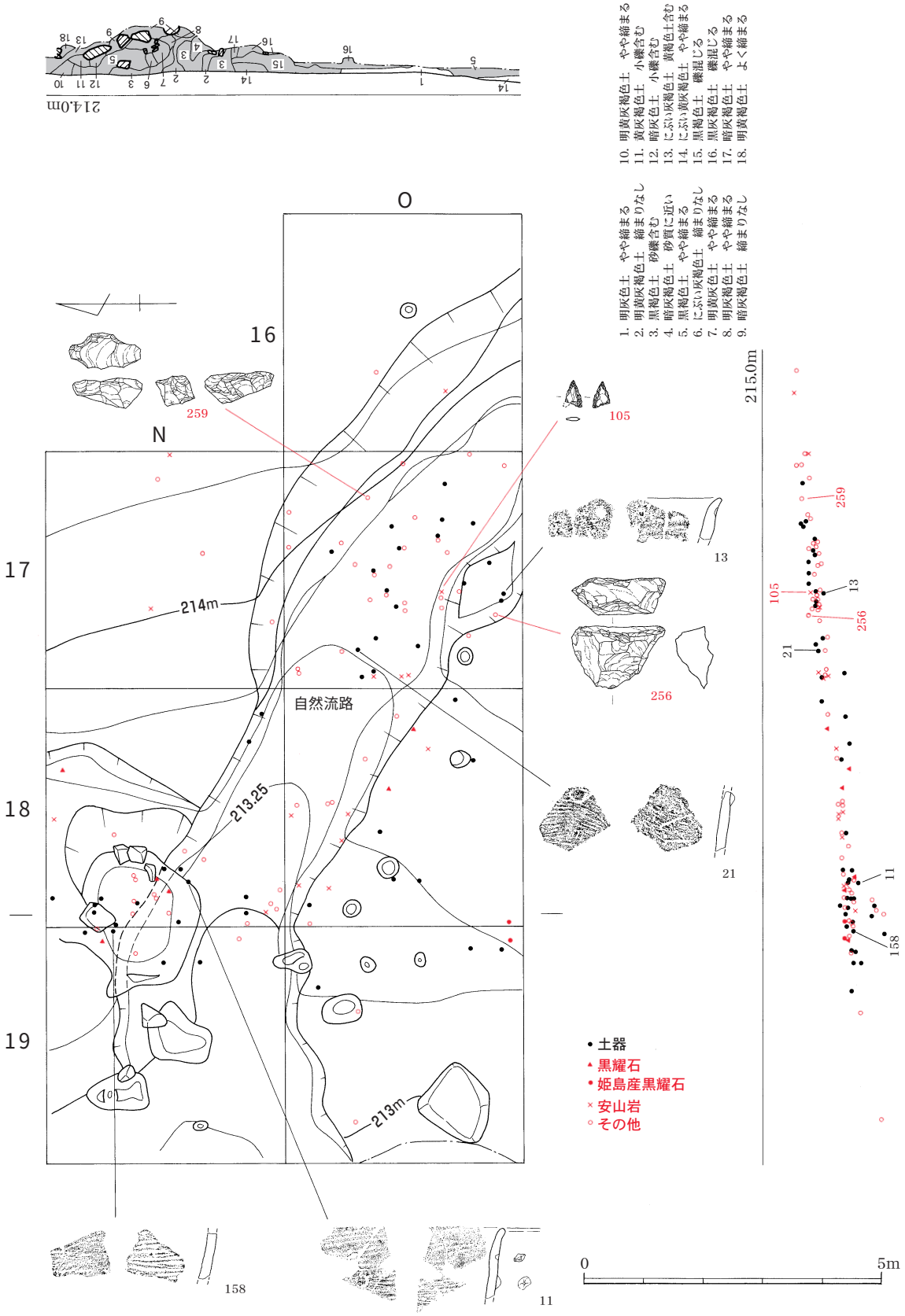


第64図　第Ⅳ文化層　L－19・20、M－18・19Gr実測図（1/100）

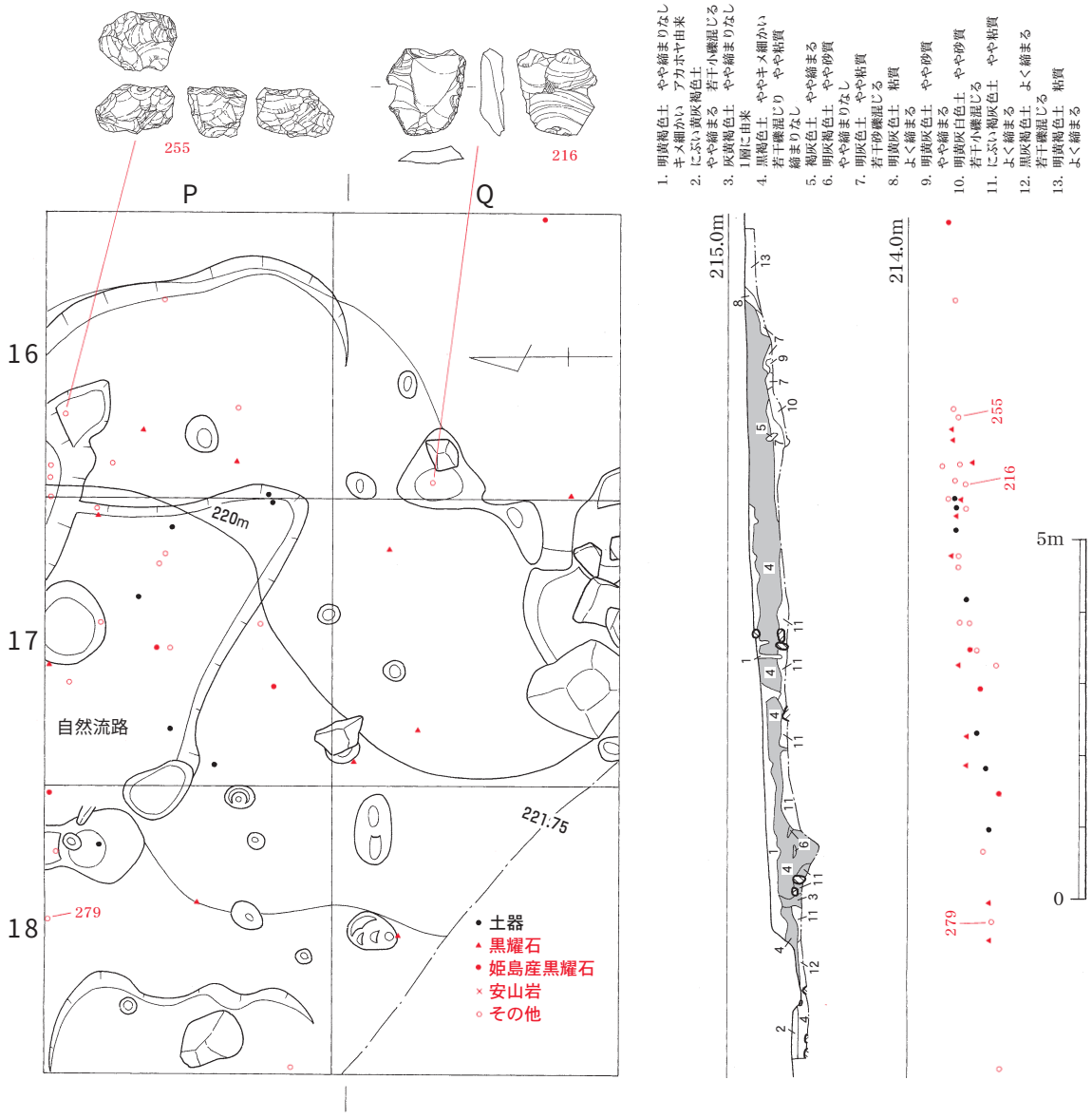
116の安山岩製石鏃、166の安山岩製石鏃未製品、207の安山岩製スクレイパー、包含層中から93の姫島産黒耀石製石鏃、H－21Gr不整形落ち込み内から264の赤色チャート石核、包含層から238の安山岩剥片、H－22Grピットから171の安山岩製石鏃未製品、I－19Gr49号土坑から263の赤色チャート石核、269の凹石、I－20Gr不整形落ち込み内から176の安山岩製石鏃未製品、204の安山岩スクレイパー、I－21Gr51号土坑から214の珪質岩製スクレイパー、包含層から65の姫島産黒耀石製石鏃が出土した。

J－18～21、K－18～21Gr（第63図）

Ⅲ区中央付近に設定したグリッドである。地形はほぼ平坦で高低差はほとんどない。西側は平坦地の縁にあたり、急斜面で地形が落ちている。中央付近から東側にかけては削平等によって包含層はほとんど残っていなかったが、西側は第３層暗灰褐色土の包含層が20～30cmの厚さで堆



第65図　第Ⅳ文化層　N－17～19、O－16～19Gr実測図（1/100）



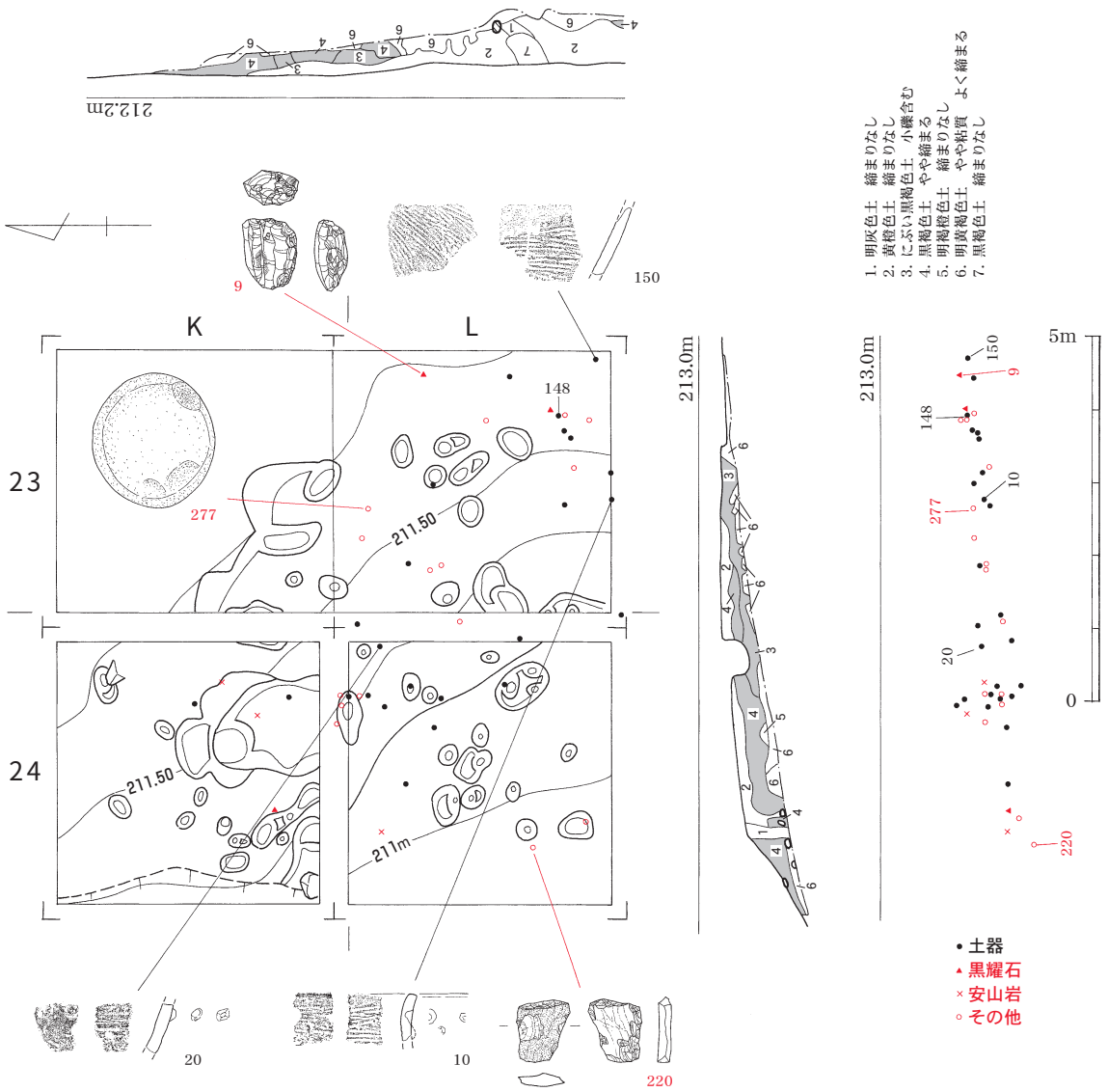
第66図　第Ⅳ文化層　P－16～18、Q－16～18Gr実測図（1/100）

積していた。包含層掘削後、下層にある第７層明黄褐色土の上面を精査し、J－19Grで37号土坑、J－20Grで43号土坑、J－21Grで42・59号土坑、K－20Grで46号土坑を検出し、他にもピットや不整形落ち込み等を検出した。

出土遺物は全体的に少なく、遺構内からもあまり出土していない。図示した土器では、J－21Gr不整形落ち込み内から24の刺突文土器が出土した。石器ではJ－19Gr37号土坑内から103の安山岩製石鏃、245の珪質岩剥片、J－21Gr59号土坑内から108・110の安山岩製石鏃、包含層から249の剥離調整のある石英剥片が出土した。

L－19・20、M－18・19Gr（第64図）

Ⅲ区中央付近に設定したグリッドである。地形は北東から南西へと緩やかに傾斜する。包含層はほとんど削平されており、下層の第２層にぶい灰黄褐色土が露出していた。この層は無遺物層



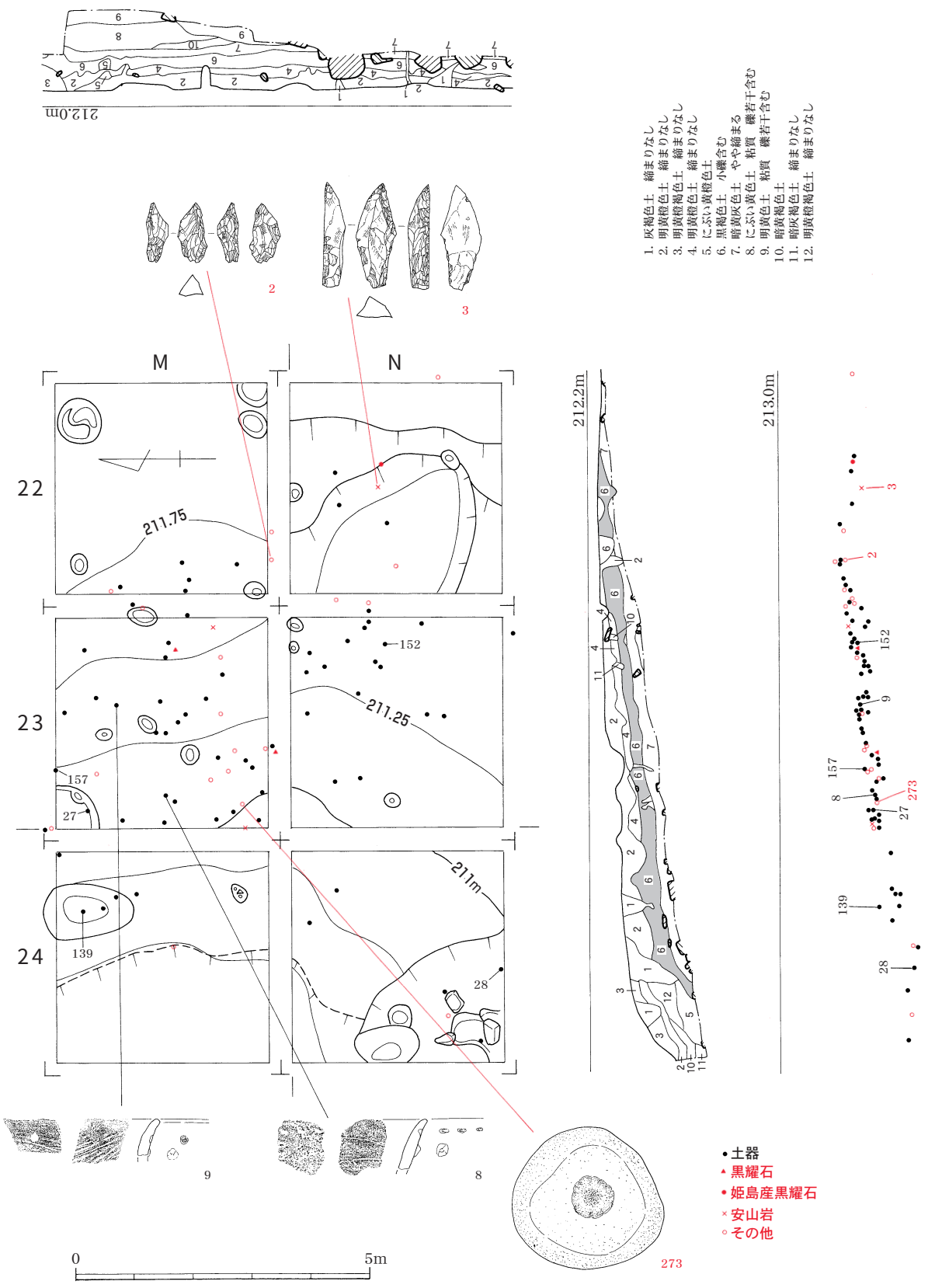
第67図　第Ⅳ文化層　K－23・24、L－23・24Gr実測図（1/100）

である。遺構面精査の結果、L－20Grで47号土坑、M－19Grで44号土坑を検出し、他にピットを検出した。

出土遺物は少ない。図示したものではM－18Grから155の条痕文土器、L－20Grから211の珪質岩スクレイパーが出土している。

N－17～19、O－16～19Gr（図版16、第65図）

Ⅲ区南東側に設定したグリッドである。地形は東から西へと傾斜しており１m程の高低差がある。ほぼ全面に10～20cmの厚さで黒褐色土の堆積が確認された。掘削後、下層上面の遺構面精査を行い、幅2.5～４m、深さ50cm前後の自然流路を検出した。その他にもピットや不整形落ち込み等を検出した。N－18・19Gr間にある土坑状の落ち込みは土層観察の結果風倒木痕であることを確認した。



第68図　第Ⅳ文化層　M－22～24、N－22～24Gr実測図（1/100）

出土遺物は流路や風倒木痕内から多く出土している。図示した土器ではN－18・19Gr間風倒木痕内から11の粘土瘤のある刺突文土器、158の条痕文土器、O－17Gr流路内から13の刺突文土器や21の粘土瘤のある土器が出土している。石器は珪質岩や安山岩のチップが多く、黒耀石や姫島産黒耀石が少ない傾向にある。図示したものではO－17Gr内から105の安山岩製石鏃、256・259の珪質岩石核が出土した。

P―16～18、Q―16～18Gr（図版16、第66図）

Ⅲ区南東側に設定したグリッドである。地形は東から西へと緩やかに傾斜する。Q－17Gr南端には巨石の露頭がある。西端は削平されるが、各グリッドのほぼ全面で20～40cmの厚さで黒褐色土の堆積が確認された。掘削後に遺構面精査を行い、自然流路、ピット、不整形落ち込みを検出した。

出土遺物はP－16・17Grの流路内にまとまりを見せるが全体的に点数は少ない。土器は図示できるものがなかった。石器はP－16Gr流路内から255の珪質岩石核、P－18Grから279の磨石、Q－16Grピット内から216の珪質岩製スクレイパーが出土した。

K―23・24、L―23・24Gr（図版14、第67図）

Ⅲ区西側に設定したグリッドである。地形は北東から南西へと緩やかに傾斜する。この付近では第3層にぶい黒褐色土や第4層黒褐色土は20～40cmの厚さで堆積する。土層の断面観察では風倒木による層の撹乱も見られる。包含層掘削後に下層の第6層明黄褐色土上面の遺構面精査を行い、ピットや不整形落ち込みを検出した。

出土遺物は少ないが、図示できた遺物は意外に多い。土器ではL－23Grから10の粘土瘤のある刺突文土器、148・150の条痕文土器、L－24Grから20の粘土瘤のある土器が出土した。石器ではL－23Grから9の黒耀石細石刃核、L－24Grから220の水晶製スクレイパーが出土した。

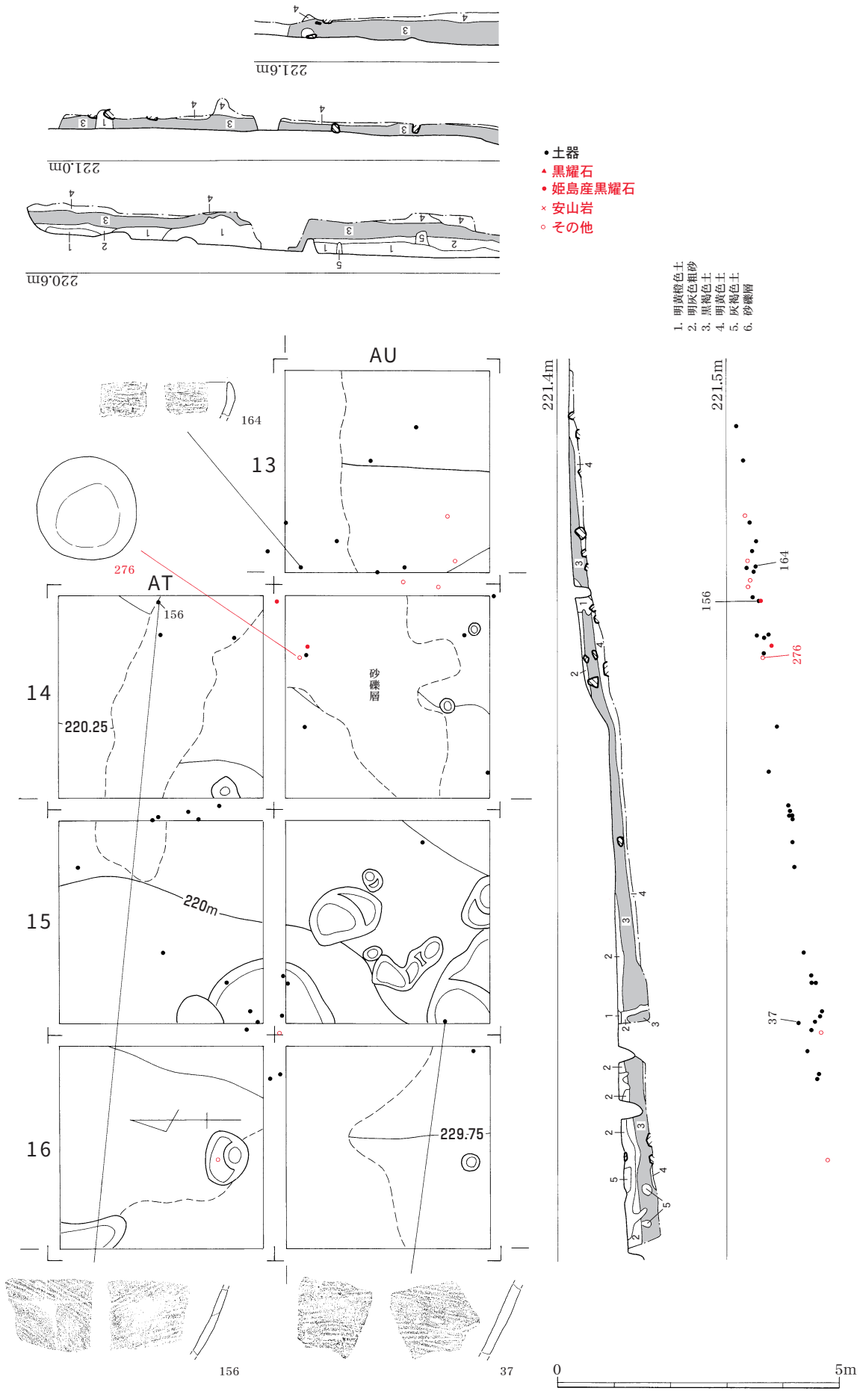
M―22～24、N―22～24Gr（図版14・15・19、第68図）

Ⅲ区西側に設定したグリッドである。地形は東から西へと緩やかに傾斜する。第6層黒褐色土は20～30cmの厚さで堆積する。掘削後に下層の第7層暗黄灰色土層上面の精査を行い、ピット等を検出した。

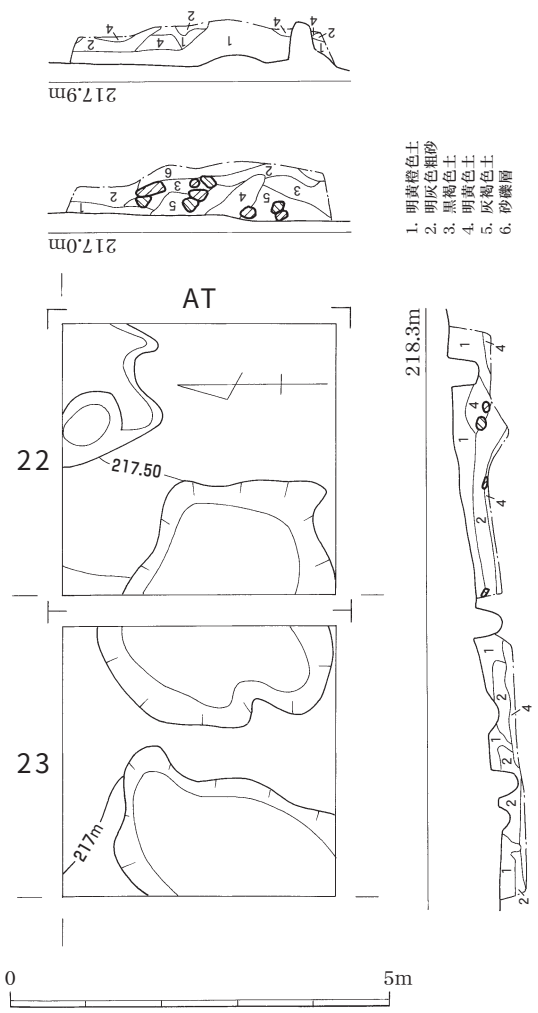
出土遺物はM－23・N－23Grに集中する。図示できた土器ではM－23Grから8・9の粘土瘤のある刺突文土器、27・157の条痕文土器、M－24Grピット内から139の条痕文土器、N－23Grから152の条痕文土器、N－24Gr落ち込み内から28の条痕文土器が出土した。石器ではM－23Grから273の凹石、M－22・23Gr間から2の水晶製ナイフ形石器、N－22Gr第7層上面から3のナイフ形石器が出土した。

AT―14～16、AU―13～16Gr（第69図）

Ⅱ区東半部の中央付近に設定したグリッドである。地形は東から西へと緩やかに傾斜する。第3層黒褐色土は各グリッドに確認され、20～40cmの厚さで堆積する。この第3層掘削後に下層の第4層明黄色土上面の精査を行い、ピットや不整形落ち込み等を検出した。



第69図　第Ⅳ文化層　AT－14～16、AU－13～16Gr実測図（1/100）



第70図　第Ⅳ文化層　AT－22・23Gr実測図（1/100）

出土遺物は少ない。図示できた土器ではAT－14Grから156の条痕文土器、AU－13Grから164の巻貝条痕文土器、AU－15Gr落ち込み内から37の条痕文土器が出土した。164は後期の土器であり、上層から混入したものと思われる。石器ではAU－14Grから276の磨石が出土した。

AT－22・23Gr（第70図）

Ⅱ区西半部に設定したグリッドである。地形は東から西へと緩やかに傾斜する。このⅡ区西半部一帯には他の地点と同質の第1層明黄橙色土層、第2層明灰色粗砂、第3層黒褐色土が堆積していたため遺物の出土が十分に予想されたが、意に反して各層とも1点の遺物も出土しなかった。そのためこのⅡ区西半部は縄文時代の文化層は存在しないという結論を出すに至った。

図示した遺構は第3層黒褐色土掘削後に下層の明黄色土上面を精査して検出したものである。土坑状の落ち込みは恐らく風倒木痕であろう。

AV－13～15、AW－13～15Gr（図版17、第71図）

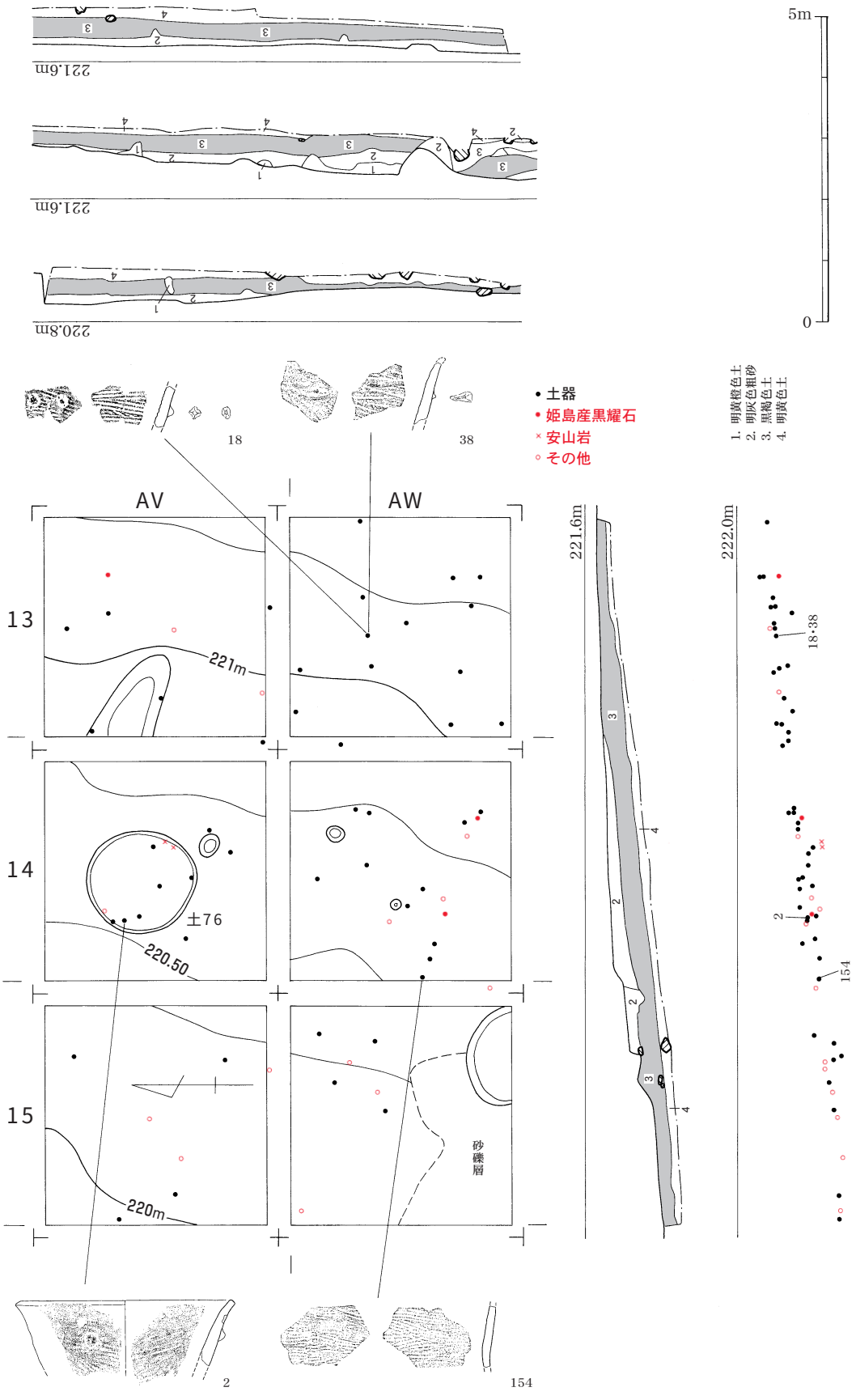
Ⅱ区東半部の中央付近に設定したグリッドである。地形は東から西へと緩やかに傾斜する。第3層黒褐色土は各グリッドに20～40cmの厚さで堆積が確認された。この第3層掘削後に第4層明黄色土上面の精査を行い、AV－14Grでは76号土坑を検出し、他に落ち込みやピットを検出した。

出土遺物はあまり多くないが各グリッドから出土している。土器は小片も含めて比較的多い。図示したものでは、AV－14Gr76号土坑内から2の粘土瘤のある刺突文土器、AW－13Grから18の粘土瘤のある土器、38の鰭状突起のある土器、AW－14Grから154の条痕文土器が出土した。154は後期の土器で混入品である。石器はチップが数点出土したが図示できるものはない。

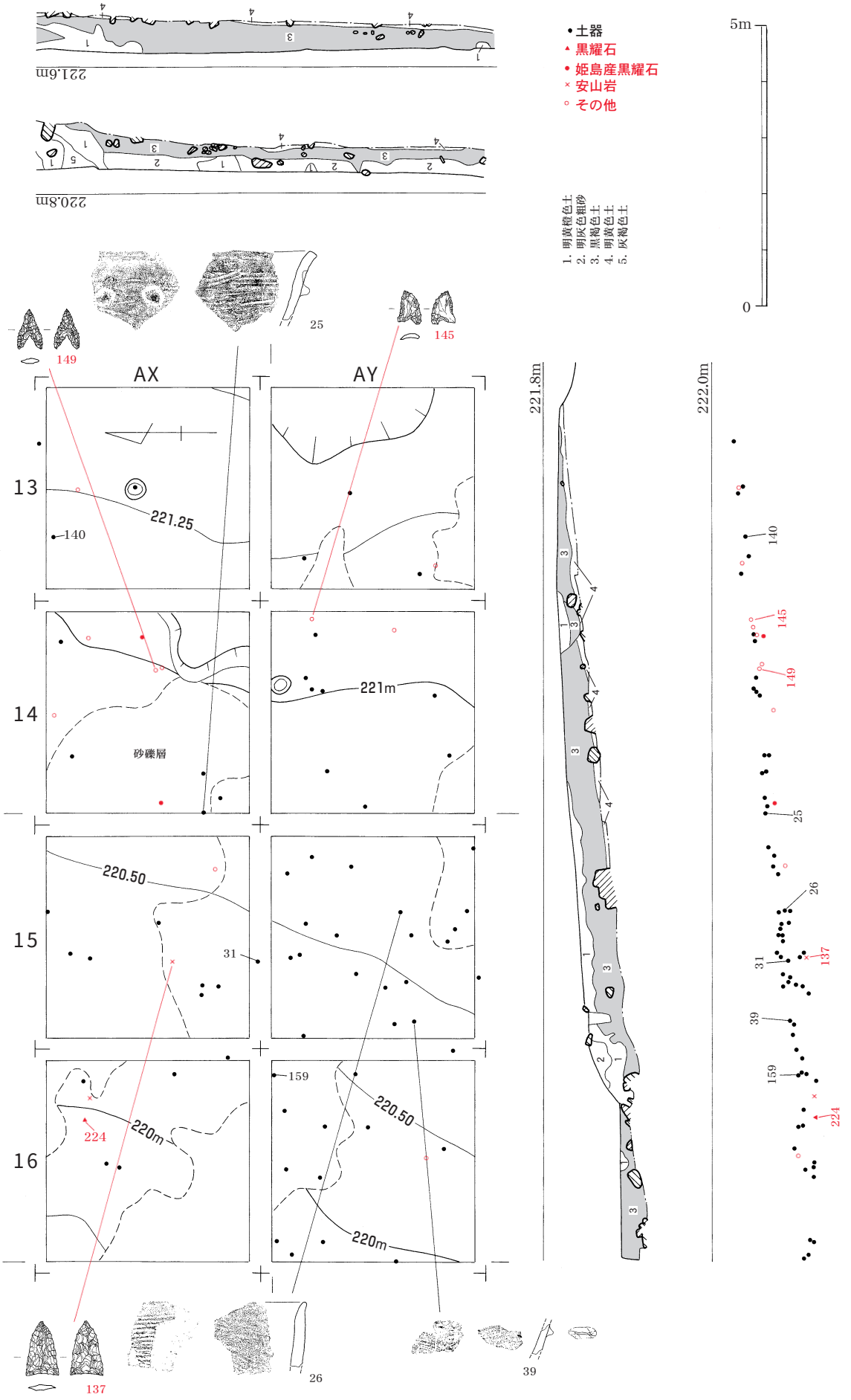
AX－13～16、AY－13～16Gr（図版17、第72図）

Ⅱ区東半部の中央付近に設定したグリッドである。地形は東から西へと緩やかに傾斜する。第3層黒褐色土は各グリッドに20～50cmの厚さで良好に堆積していた。この第3層掘削後に下層上面の精査を行ったが、2基のピット以外に遺構は検出されなかった。またここでは第3層の下層に、第4層明黄色土と同一面で広範囲に広がる砂礫層を確認した。

出土遺物はあまり多くないが、AX－15・AY－15Gr付近では土器が比較的まとまって出土した。図示した土器では、AX－13Grから140の条痕文土器、AX－14Grから25の粘土瘤のある刺突文土



第71図　第Ⅳ文化層　AV－13～15、AW－13～15Gr実測図（1/100）



第72図　第Ⅳ文化層　AX－13～16、AY－13～16Gr実測図（1/100）

器、ＡＸ－15・ＡＹ－15Gr間から31の条痕文土器、ＡＹ－15Grから26の条痕文土器、39の鰭状突起のある土器、ＡＹ－16Grから159の条痕文土器が出土した。石器ではＡＸ－14Grから149の珪質岩製石鏃、ＡＸ－15Grから137の安山岩製石鏃、ＡＸ－16Grから224の黒耀石剥片、ＡＹ－14Grから145の赤色チャート製石鏃が出土した。

検出遺構

竪穴住居跡

竪穴住居跡は合計で４棟検出した。全てⅢ区北側の第Ⅳ文化層で検出したものである。

１号竪穴住居跡（図版20、第73図）

第Ⅳ文化層Ｇ－19Grで検出した遺構である。平面形は円形プランで南北に若干長い。長軸272cm、短軸237ｃｍを測る。床面は中央付近が円形に窪んでおり、この窪みの規模は約100ｃｍを測る。検出面から床面までの深さは中央の窪みの部分で15cm、周辺部分で５ｃｍと浅いものである。覆土は中央付近に黒褐色粘質土、周囲に暗黄灰色土が堆積し、中央の窪みには黒褐色粘質土に黄灰色土がブロック状に混入した土が堆積していた。

床面では数基のピットを検出したが、このうち中央の窪みの両側にあるＰ１・Ｐ２は住居跡覆土である黒褐色粘質土に類似した土であり、住居跡に伴う遺構として判断した。他のピットは締まりのない灰色土が堆積しており、後世の遺構と判断した。Ｐ１は直径18cm、深さ８ｃｍ、Ｐ２は楕円形を呈し長軸30cm、短軸18cm、深さ15cm。

覆土中からは29の条痕文土器、169の安山岩製石鏃未製品、191の黒耀石製スクレイパーが出土した。他に土器小片、黒耀石や安山岩、珪質岩のチップも数点出土した。

２号竪穴住居跡（図版20・21、第73図）

第Ⅳ文化層Ｇ－21Grで検出した遺構である。平面形は楕円形に近く、北西側は削平により壁の立ち上がりが失われている。また北側や西側も後世の遺構の重複によって失われている。長軸315cm、短軸212cmを測り、主軸方位を北西－南東方向にとる。床面は中央付近が多少窪んでいるが全体的に平坦で、深さは15cmを測る。覆土は黒褐色粘質土を基本とする。

床面上では４つのピットを検出した。Ｐ１はほぼ中央に位置し、直径40cm、深さ40cmを測る。Ｐ２は長軸28cm、短軸15cm、深さ15cm、Ｐ３は直径15cm、深さ10cm、Ｐ４は直径20cm、深さ30cm。

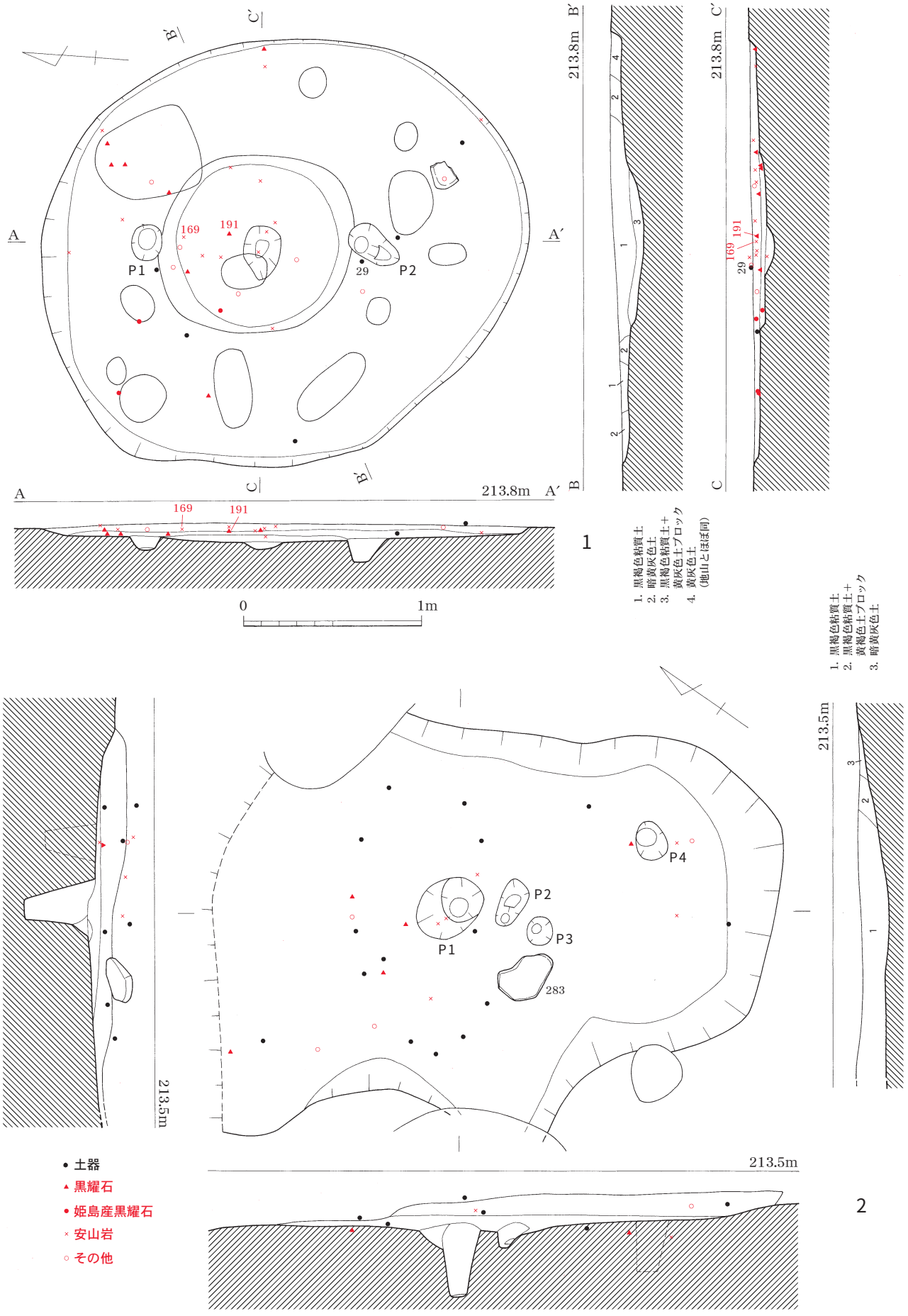
覆土中からは数点の土器小片や黒耀石、安山岩、珪質岩チップが出土したが図示できるものはない。中央付近の床面直上からは283の凝灰岩台石が出土した。

３号竪穴住居跡（図版21、第74図）

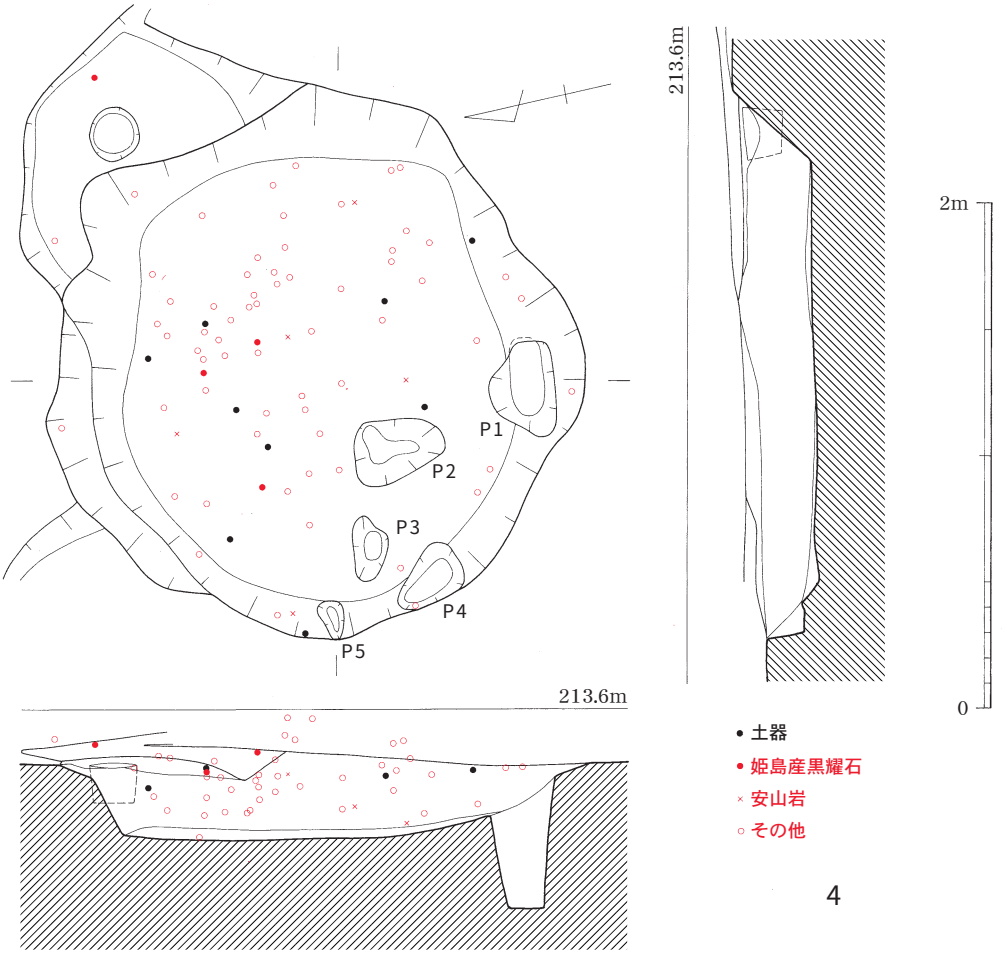
第Ⅳ文化層Ｈ－18Grで検出した遺構である。平面形は若干いびつな楕円形を呈し、西壁が内側に窪んだような形状となる。長軸230ｃｍ、短軸205ｃｍを測る。床面はほぼ平坦で深さは10ｃｍを測る。覆土は灰褐色土が中心である。

床面状では３つのピットを検出したが、このうちＰ１以外は後世の遺構であることが覆土から判断された。Ｐ１は長軸18cm、短軸10cm、深さ20cmを測る。

覆土中からは数点の土器小片が出土したが図示できるものはなかった。



第73図　1・2号竪穴住居跡実測図（1/30）



第74図　3・4号竪穴住居跡実測図（1/30）

4号竪穴住居跡（図版21、第74図）

第Ⅳ文化層F－19・20Grで検出した遺構である。平面形は円形プランで長軸220cm、短軸210cm、北東隅にテラス状の張り出し部がある。床面はほぼ水平で、深さは35cmを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。テラス部分は深さ10cm。覆土は上層に良く締まった黒灰色土、その下層には同質の暗黒灰色土、床面直上には暗黄灰色土が堆積していた。なおこの土層については土壌サンプルを採取して放射性炭素年代測定を行っており、第11層下部の炭化物（第7図C断面　試料№7）では11,280±35年BP（2σの暦年代でBC11,300～11,400年）、第12層の堆積物（第7図C断面　試料№8）では9,895±35年BP（BC9,450～9,270年）という測定結果を得た。

床面上や壁面からは計5つのピットを検出したが、この竪穴住居跡に伴うものか否かは明確ではない。P1は長軸40cm、短軸25cm、深さ50cm。P2は長軸35cm、短軸25cm、深さ40cm、P3は長軸25cm、短軸12cm、深さ10cm、P4は長軸30cm、短軸20cm、深さ10cm、P5は長軸15cm、短軸10cm、深さ15cm。

覆土中からは多くの珪質岩チップが出土した。大半は1cm以下の小片である。他に安山岩、姫島産黒耀石、土器小片も数点出土したが図示できるものはなかった。

集石

集石は2基検出した。Ⅰ区第Ⅳ文化層から見つかったものである。

1号集石（図版22、第75図）

第Ⅳ文化層X－5Grで検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し長軸の方位を南北にとる。長軸125cm、短軸87cm、深さ15cm。底面はほぼ水平で壁の立ち上がりは緩やかである。土坑内部からは扁平な礫が複数個かたまって出土した。熱を受けた痕跡があり、集石炉として使用されたものと思われる。

覆土中から46の押型文土器が出土した。

2号集石（図版22、第75図）

第Ⅳ文化層Z－7Grで検出した遺構である。平面形は北西－南東に長い楕円形を呈し南側が他の遺構と重複する。長軸80cm、短軸63cm、深さ20cmを測る。底面はほぼ水平で壁の立ち上がりは南側が急角度で、他は緩やかな立ち上がりとなる。土坑内部からは扁平な礫が数個かたまって出土した。熱を受けた痕跡があり、集石炉として使用されたものと思われる。

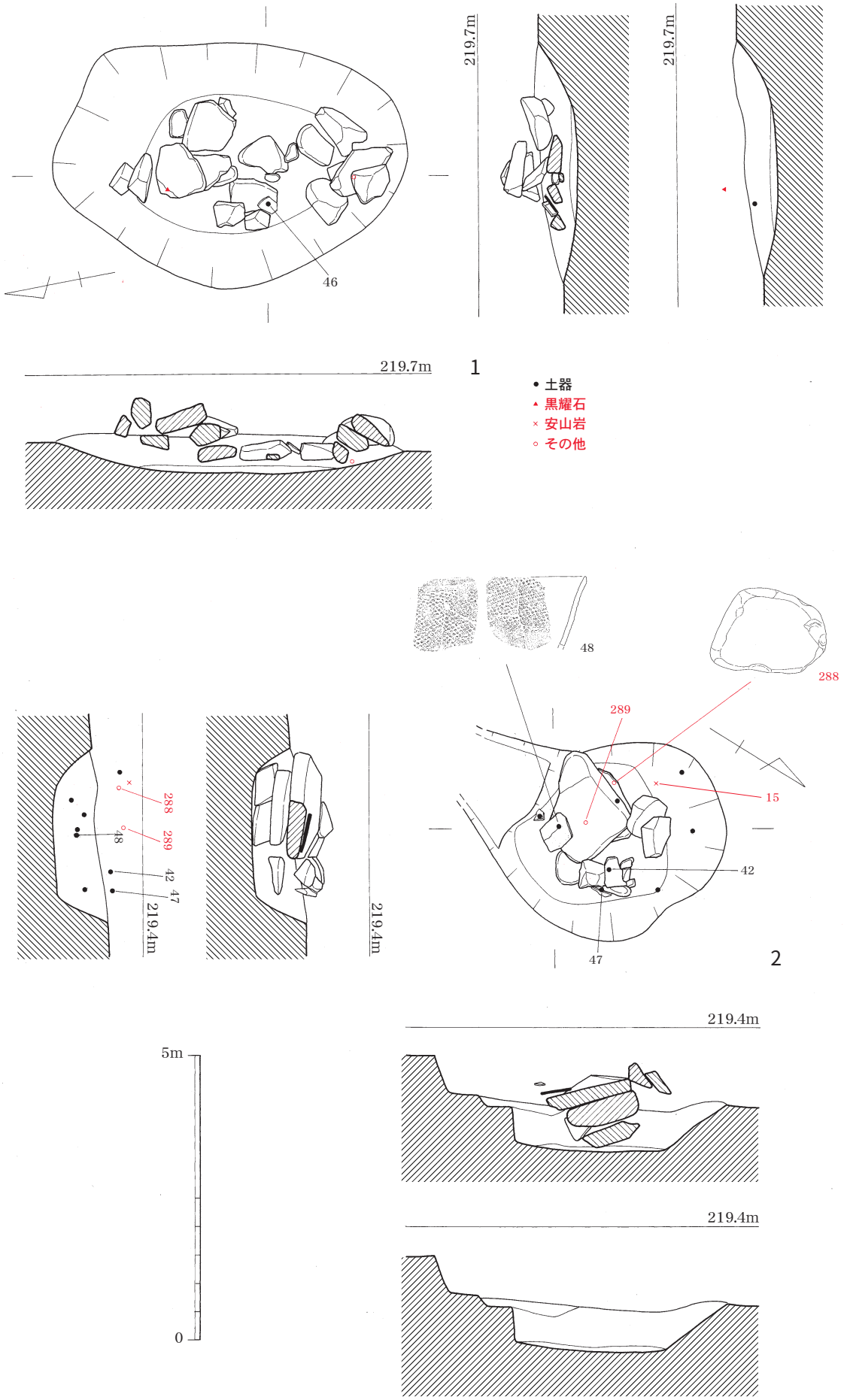
覆土中や礫の上面から42・47・48の押型文土器、15の安山岩剥片が出土した。また288・289は礫とともに出土した。

土坑

土坑は21基検出した。不整形を呈したものが多く、中には風倒木痕と思われるものもある。

32号土坑（図版22、第76図）

第Ⅱ文化層Z－15Grで検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸を南北方向にとる。長軸260cm、短軸200cm、床面は中央が最も深く65cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、中央



第75図　1・2号集石実測図（1/20）

へ向かってすり鉢状に傾斜している。覆土は中央付近に暗灰褐色土、その周辺に黒灰褐色土が堆積する。

遺物は出土しなかった。

33号土坑（図版23、第76図）

第Ⅱ文化層W－6Grで検出した遺構である。平面形は正円形に近い楕円形で、長軸100cm、短軸83cmを測る。床面はほぼ水平で深さは50cmを測る。壁は急な立ち上がりとなる。遺物は出土しなかった。

34号土坑（図版23、第76図）

第Ⅱ文化層Z－16・ＡＡ－16Grで検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸を南北方向にとる。長軸190cm、短軸138cm、床面は中央付近で25cm、南西隅が若干深くなっており30cmを測る。壁は比較的急な立ち上がりとなる。覆土は下層に黒灰色土、上層に黄灰色土が堆積する。

遺物は土器小片が2点出土したに過ぎない。図示できる大きさではない。

35号土坑（図版23、第77図）

第Ⅱ文化層Z－16Grで検出した遺構である。中世のピットに数カ所切られている。平面形は楕円形に近く、長軸147cm、短軸105cm、床面は中央付近がピット状に深くなっており、深さ30cmを測る。覆土は黄灰色土が堆積する。

36号土坑（図版24、第77図）

第Ⅱ文化層Q－17Grで検出した遺構である。平面形は長方形を呈し、長軸を北東－南西方向にとる。長軸275cm、短軸110cmを測る。底面は中央付近が最も深くて32cm、北東側はテラス状に高くなっており深さ25cmを測る。

遺物は土器小片や珪質岩チップが出土しただけである。図示できるものはない。

37号土坑（図版24、第77図）

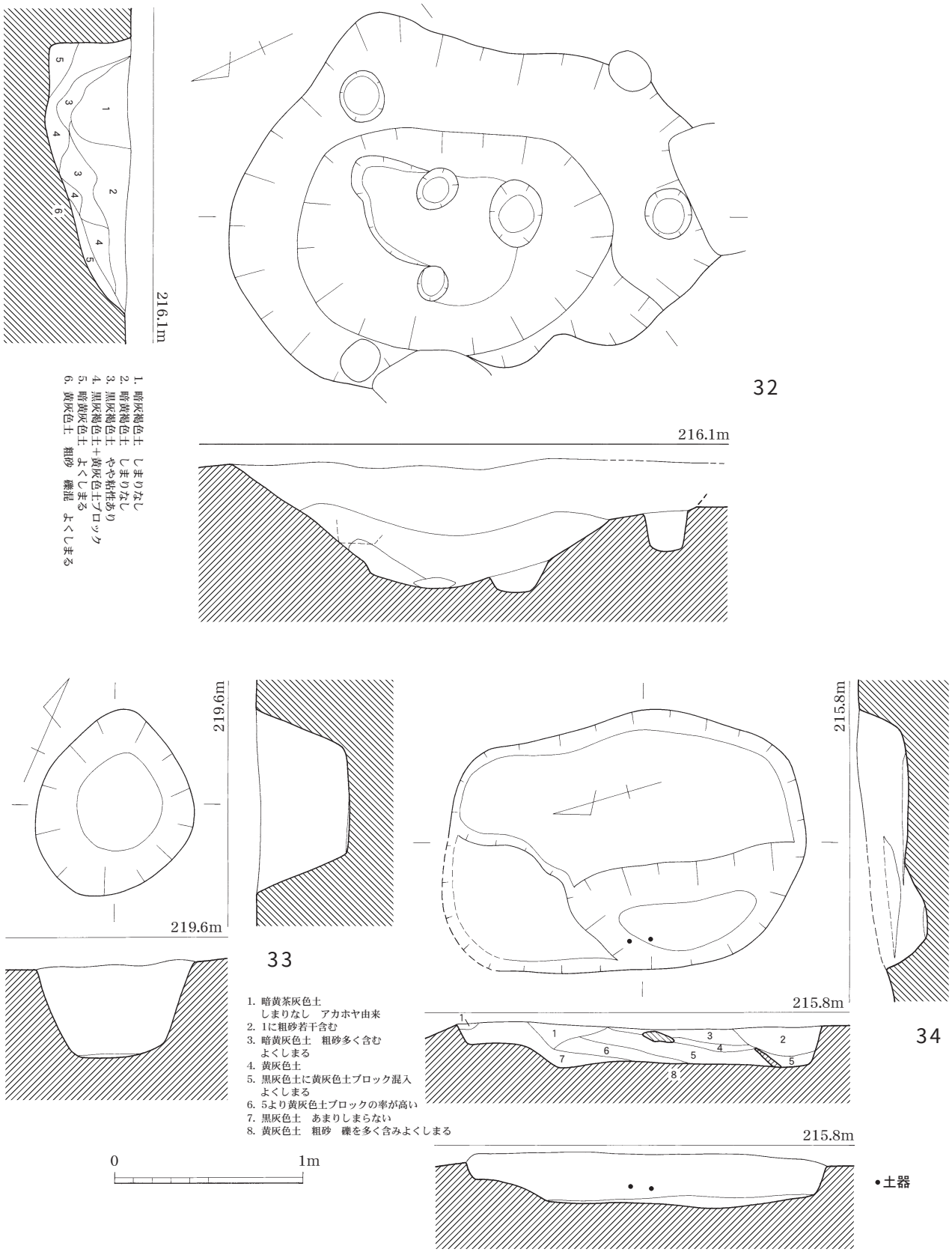
第Ⅳ文化層J－19Grで検出した遺構である。平面形は整った楕円形を呈し、長軸を南北方向にとる。長軸78cm、短軸62cm、床面は平坦で深さは13cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は中央付近に黒褐色土が堆積し、壁際には黄灰色土が堆積していた。

遺物は245の珪質岩剥片が出土した。土坑検出面上層の包含層からは103の安山岩製石鏃が出土した。

42号土坑（図版24、第77図）

第Ⅳ文化層J－21Grで検出した遺構である。平面形は楕円形に近く、長軸を東西方向にとる。長軸110cm、短軸75cm、床面は平坦で深さは30cmを測る。床面には深さ10cmほどのピットが１つある。覆土は暗灰褐色土が堆積する。

遺物は土器小片や珪質岩チップが出土した。



第76図　32～34号土坑実測図（1/30）

43号土坑（図版25、第77図）

第Ⅳ文化層J－20Grで検出した遺構である。平面形は不整楕円形で、長軸を東西方向にとる。長軸130cm、短軸90cm、床面は中央付近がピット状に深くなっており、35cmを測る。東側のテラス部では深さ20cm。覆土は暗黄褐色土が堆積する。

遺物は土器小片や珪質岩チップが数点出土した。

44号土坑（図版25、第78図）

第Ⅳ文化層M－19Grで検出した遺構である。平面形は整った楕円形を呈し、長軸を南東方向にとる。長軸115cm、短軸64cm、床面は北側が若干高く、深さは12cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は暗黄灰色の単一層である。

遺物は出土しなかった。

45号土坑（図版25、第78図）

第Ⅳ文化層I－21・22Grで検出した遺構である。平面形は整った楕円形を呈し、長軸を東西方向にとる。長軸116cm、短軸85cm、床面はほぼ水平で深さは40cmを測る。壁は比較的急な立ち上がりとなる。覆土は黄灰色の自然堆積である。

遺物は出土しなかった。

46号土坑（図版26、第78図）

第Ⅳ文化層K－20Grで検出した遺構である。平面形は楕円形に近い形状で、長軸を北西－南東方向にとる。長軸142cm、短軸85cm、床面はほぼ水平で深さは15cmを測る。壁は比較的急な立ち上がりとなる。覆土は黄灰色土の自然堆積である。

遺物は出土しなかった。

47号土坑（図版26、第78図）

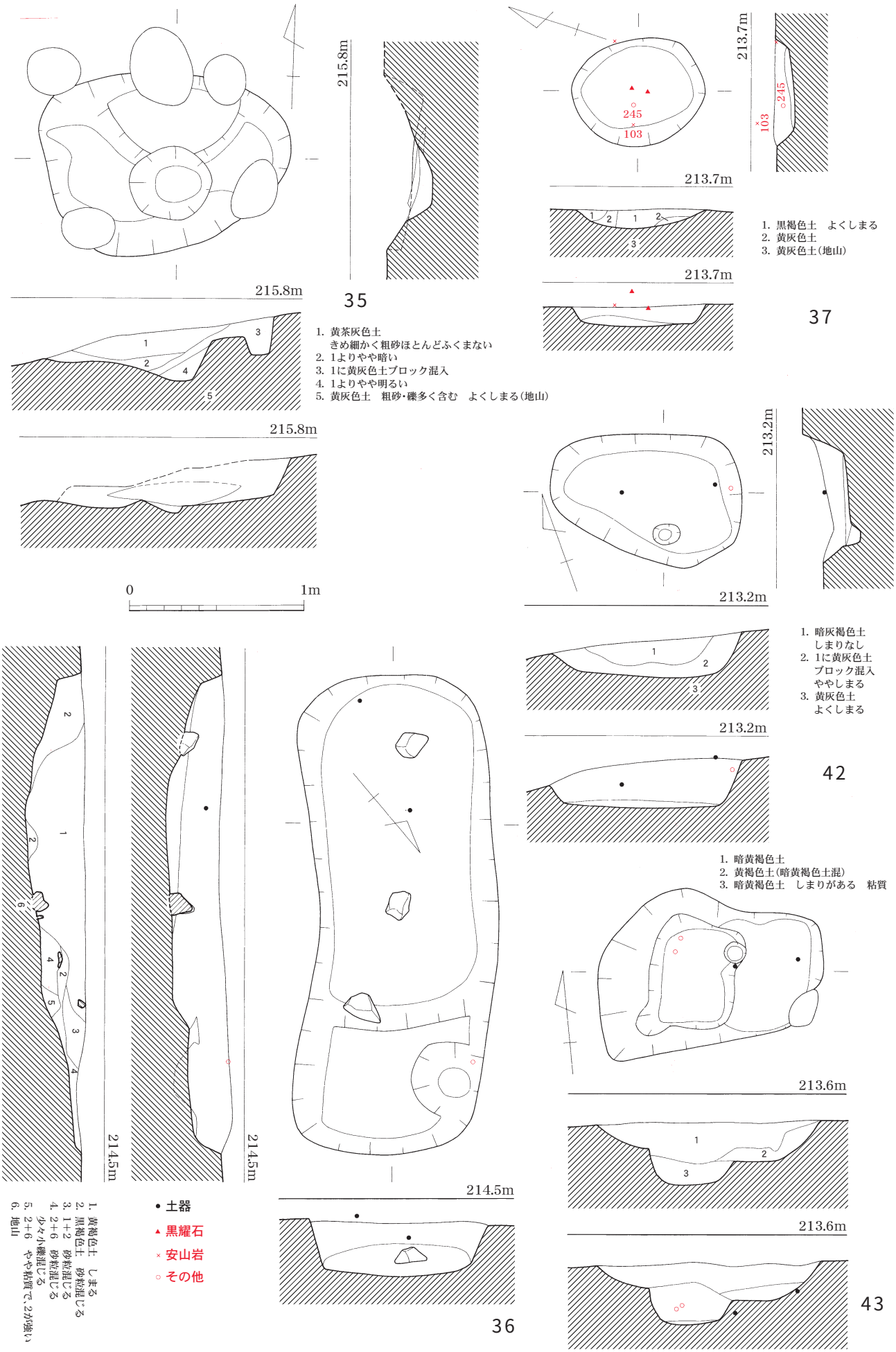
第Ⅳ文化層L－20Grで検出した遺構である。平面形は楕円形に近い形状で、長軸を南北方向にとる。長軸103cm、短軸78cm、床面は北から南に向かって傾斜しており、南側はピット状に深くなる。このピットの内部で深さ60cmを測る。壁は急な立ち上がりとなる。覆土は暗灰褐色土が堆積する。

遺物は出土しなかった。

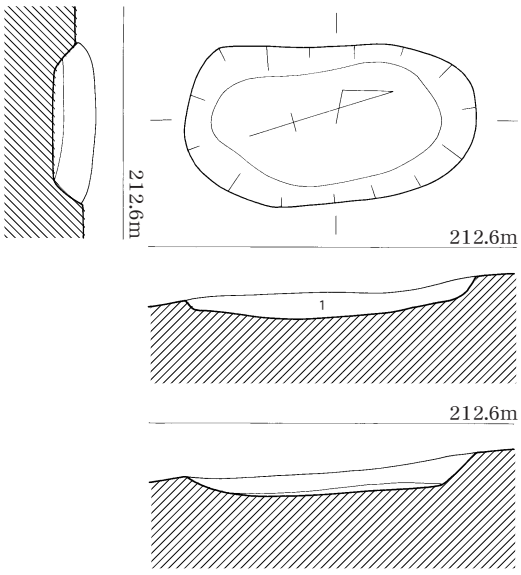
48号土坑（図版26、第78図）

第Ⅱ文化層O－24Grで検出した遺構である。平面形は円形に近く、長軸110cm、短軸94cmを測る。床面は中央に向かってなだらかに傾斜しており、中央付近で深さ35cmを測る。覆土は明黄灰色土が堆積する。

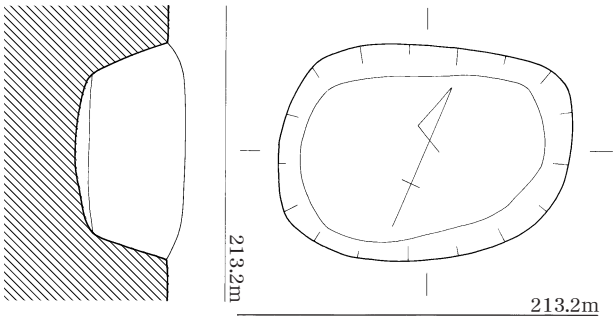
遺物は出土しなかった。

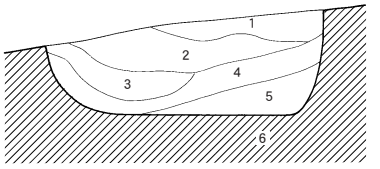


第77図　35～37、42・43号土坑実測図（1/30）

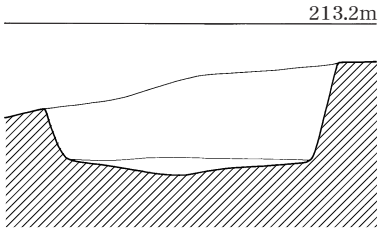


1. 暗黄灰色土　キメ細かい、若干小礫混

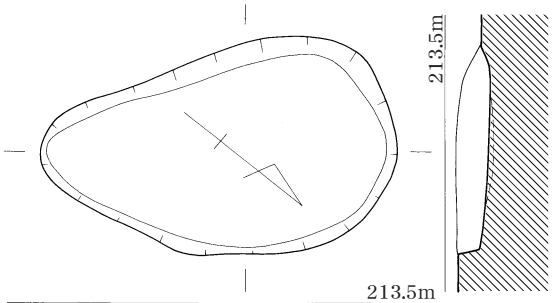


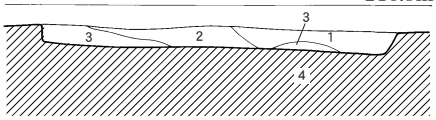


1. 暗黄灰色土　しまりなし
2. 黄灰色シルト+暗黄灰色土ブロック　しまりなし
3. 暗灰色粘質土　ややしまる
4. 黄灰色土　あまりしまらない
5. 黄茶灰色土　よくしまる
6. 黄灰色土　混礫よくしまる

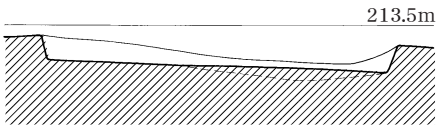


44



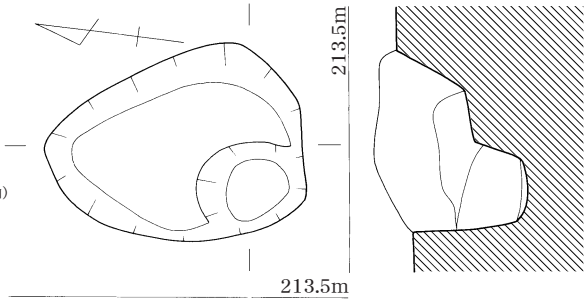


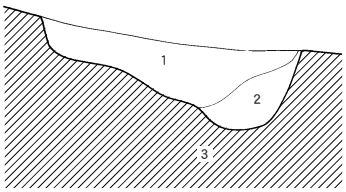
1. 暗黄灰色土　しまりなし
2. 黄茶色土(焼土)
3. 黄灰色土　よくしまる
4. 黄灰色土　よくしまる(地山)



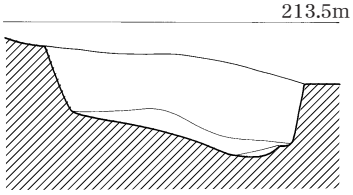
45

46

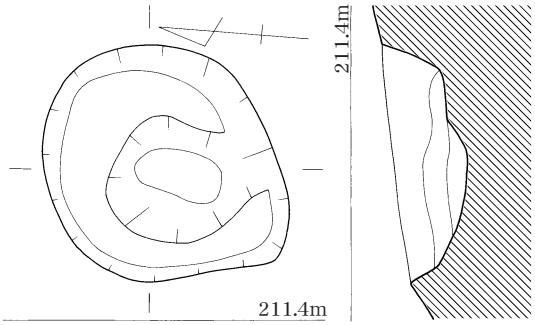


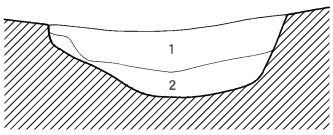


1. 暗灰褐色土　よくしまる
2. 暗灰褐色土、黄灰色土ブロック　よくしまる
3. 黄灰色土　礫混

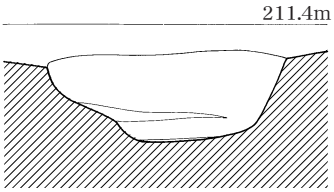


47





1. 明黄灰色土　しまりなし、キメ細かい
2. にぶい黄灰色土　しまりなし



48

第78図　44～48号土坑実測図（1/30）

49号土坑（図版27、第79図）

第Ⅳ文化層I－18・19Grで検出した遺構である。平面形は不整形を呈し、北東－南西に長軸をとる土坑と南西に長軸をとる土坑とが重複しているようにも見えることから本来は二つの遺構が重複していたのかもしれない。

長軸330cm、短軸200cm、土坑底面は北側が最も深く深さ100cmを測り、他の箇所はいくつかのテラスを形成している。壁の立ち上がりは急傾斜になるところが多い。

遺物はあまり多くなく、125の条痕文土器や263の赤色チャート石核、269の凹石が出土した。

50号土坑（図版27、第79図）

第Ⅳ文化層H－20Grで検出した遺構である。平面形は不整楕円形を呈し、長軸を南北方向にとる。長軸360cm、短軸240cm、土坑底面は南側が最も深く55cmを測る。底面にはいくつかのテラスやピットがあり複雑な状況を呈している。最も深いピットは土坑の南東側にあり、検出面からの深さは87cmを測る。壁は比較的緩やかな立ち上がりとなる。

土坑内からは多くの遺物が出土したが、土器は小片が多く図示に耐えない。石器は44の黒耀石製石鏃、101・104・116の安山岩製石鏃、166の安山岩製石鏃未製品、207の安山岩製スクレイパーが出土している。他の石器は大半が安山岩と珪質岩のチップである。

51号土坑（図版27、第80図）

第Ⅳ文化層I－21Grで検出した遺構である。平面形は不整形を呈し、長軸を南北方向にとる。長軸245cm、短軸180cm、床面は中央から北に寄った位置が最も深く55cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は覆土中から214の珪質岩製スクレイパーが出土した。他に土器小片や珪質岩チップ等が出土したが、点数は少ない。

53号土坑（図版28、第80図）

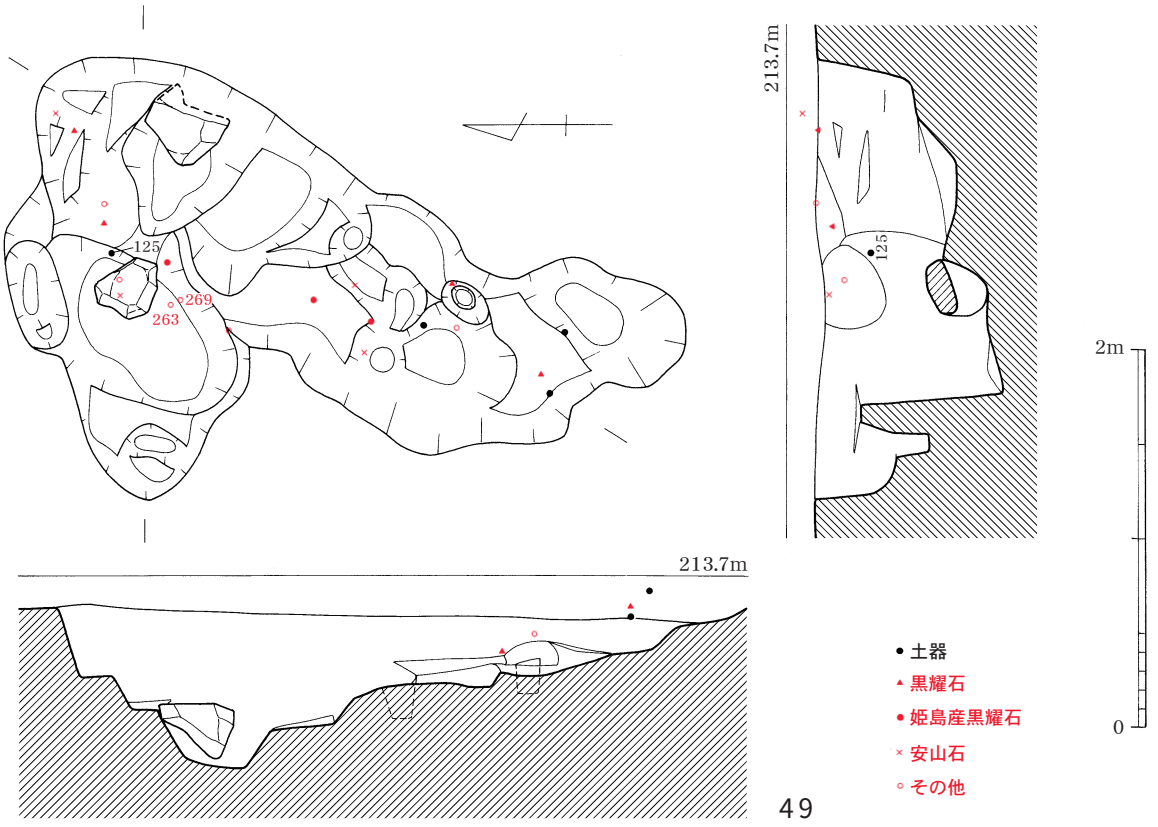
第Ⅳ文化層H－18・I－18Grで検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸を南北方向にとる。長軸95cm、短軸68cm、床面は北側が深くなっており65cmを測る。土坑内からは土器小片や安山岩、珪質岩のチップが出土したが図示できるものはない。

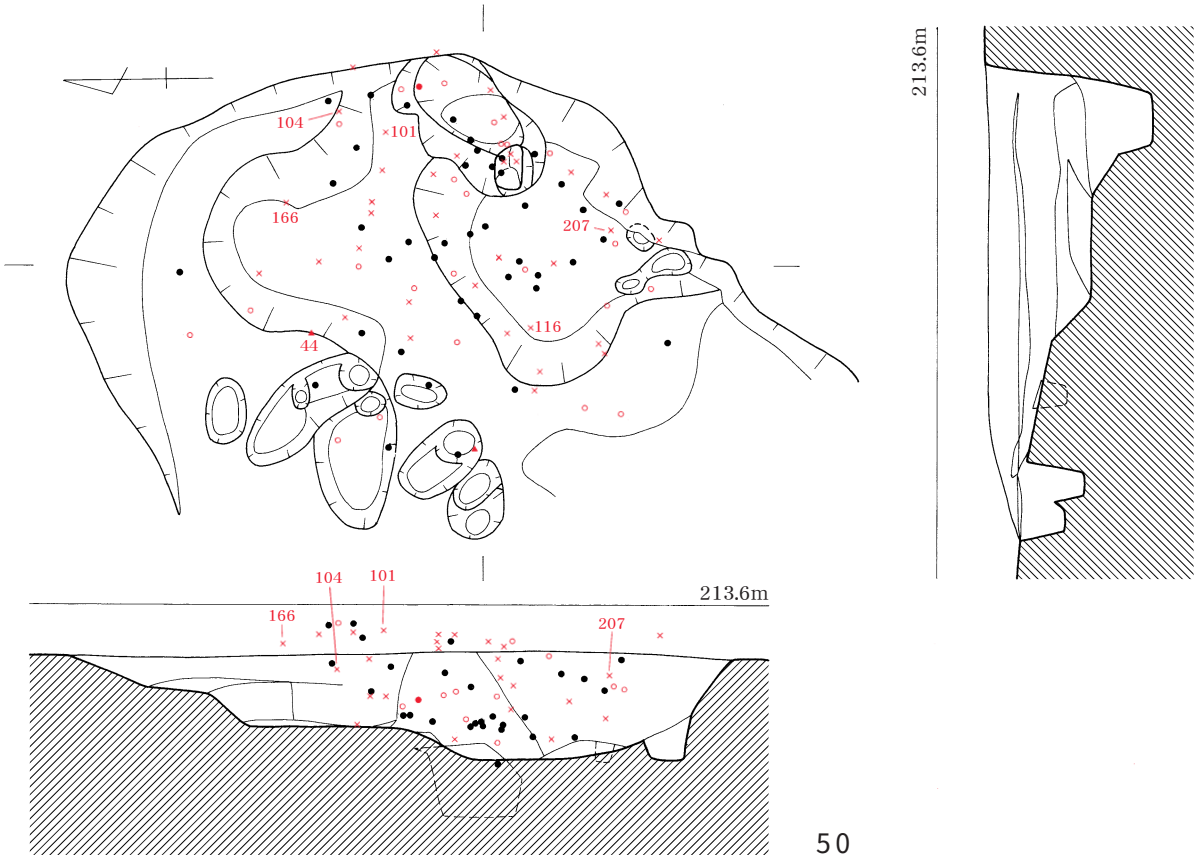
57号土坑（図版28、第81図）

Ⅱ区の北側に位置し、周辺は削平が著しく既に無遺物層が露出していたためグリッド調査を行わなかった区域で確認した遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸340cm、短軸290cm、底面は中央付近が最も深く60cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、中央に向かってすり鉢状に傾斜している。覆土は風倒木痕に見られる下層の堆積層の逆転が明瞭に表れている。

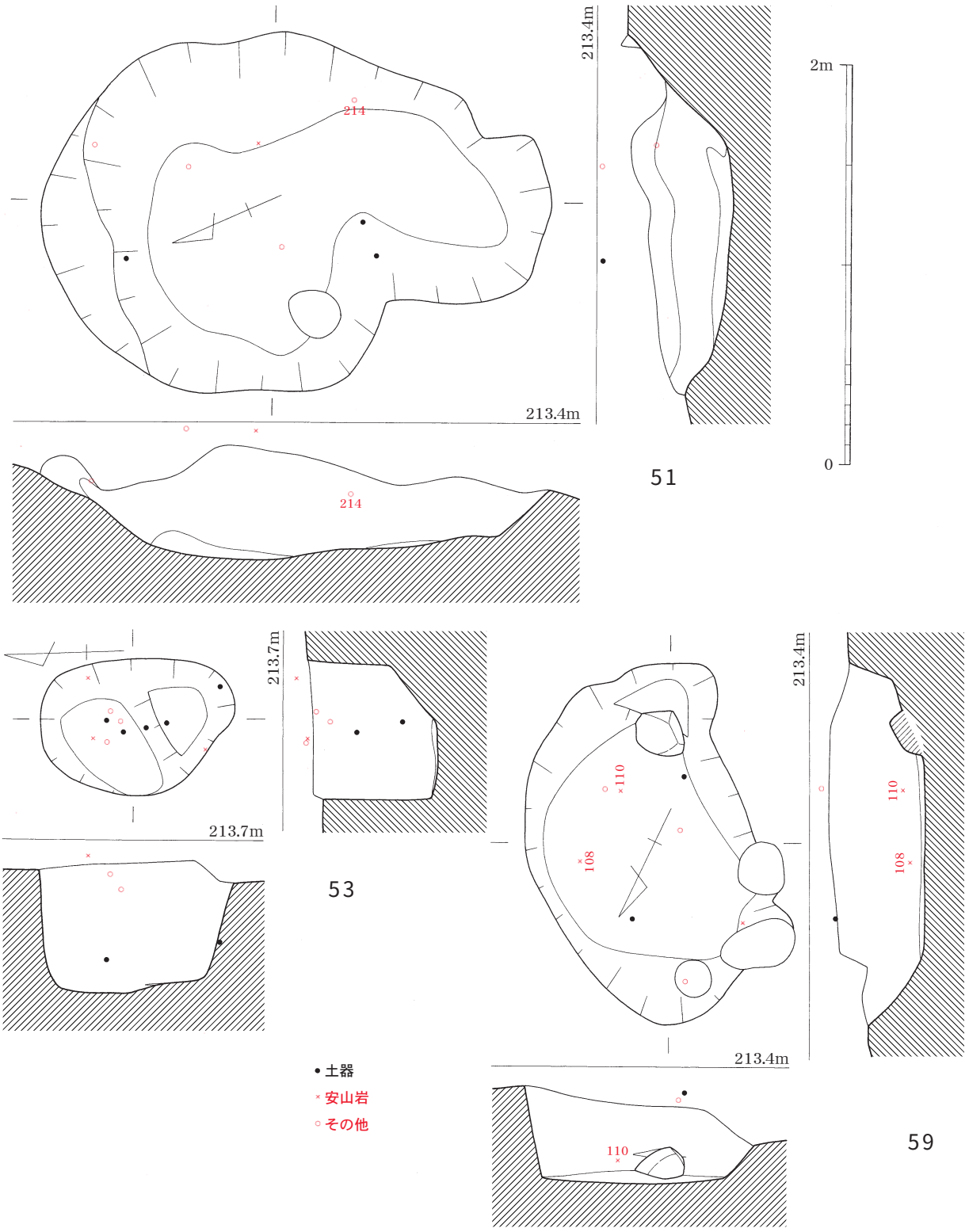
58号土坑（図版29、第81図）

Ⅱ区の北側に位置する。周辺は削平が著しく既に無遺物層が露出していたためグリッド調査は行っていない。平面形は不整楕円形を呈し、西側に小さな張り出しが付いた形状となる。長軸を

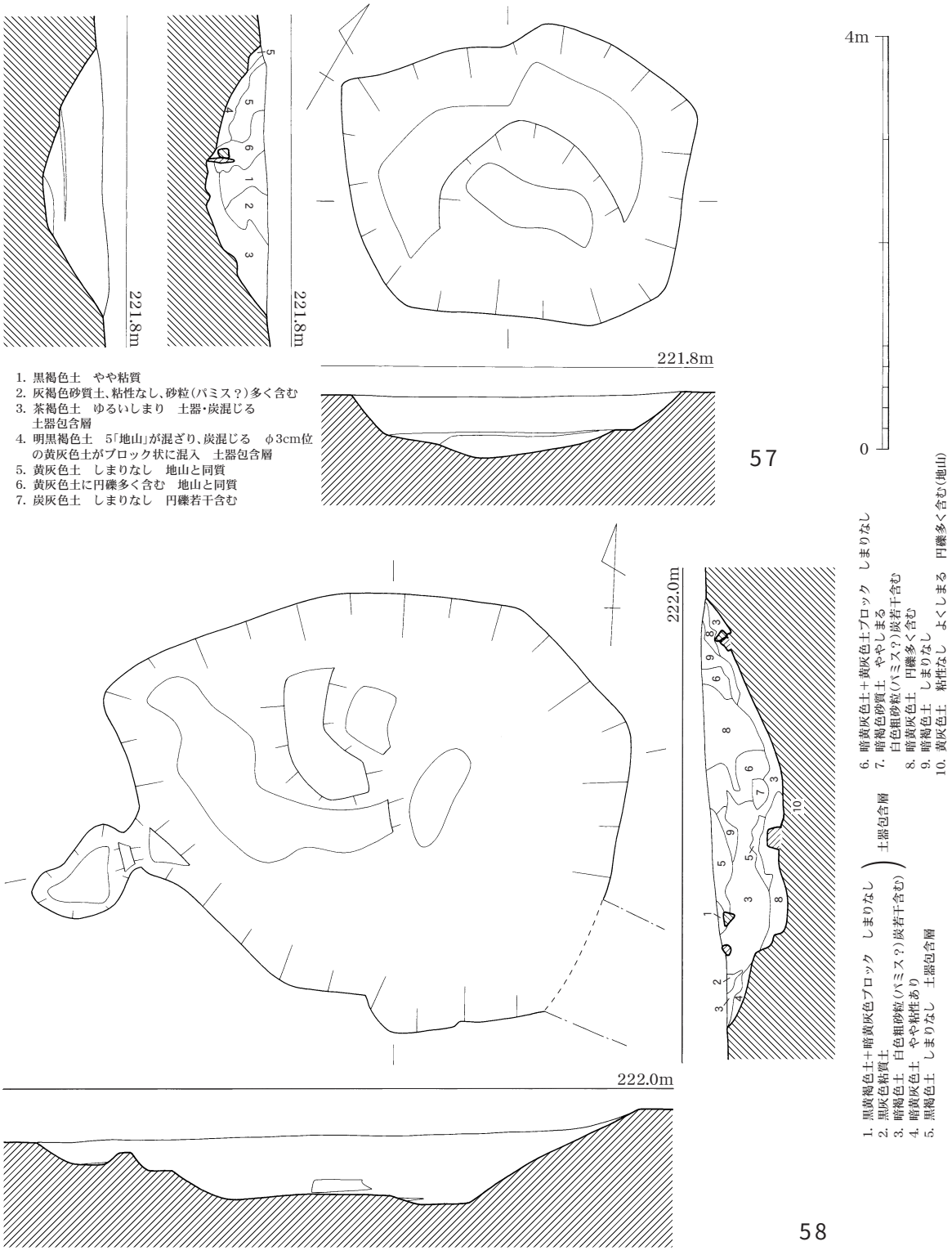




第79図　49・50号土坑実測図（1/40）



第80図　51・53・59号土坑実測図（1/30）



第81図　57・58号土坑実測図（1/60）

東西方向にとり、長軸510cm、短軸430cm、底面は中央付近が最も深く65cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで中央に向かってすり鉢状に傾斜している。覆土は57号土坑同様土層の逆転現象が見られ、風倒木痕であることが判る。

風倒木痕であるにもかかわらず、多くの遺物が出土した。土器は凹線文系統の西和田式土器が大半を占める。石器は石鏃や石斧などが出土している。

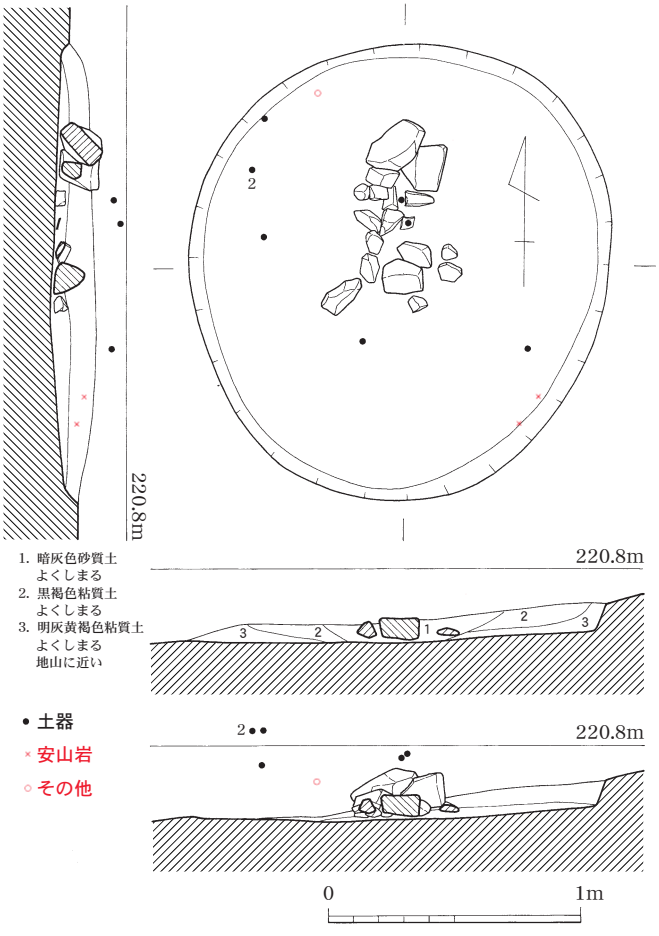
59号土坑（図版29、第80図）

第Ⅳ文化層J－21Grで検出した遺構である。平面形は不整楕円形で長軸を北西－南東方向にとる。長軸180cm、短軸115cm、床面はほぼ平坦で深さ45cmを測る。壁は比較的急な立ち上がりとなる。

土坑内覆土からは108・110の安山岩製石鏃が出土した。

76号土坑（図版30、第82図）

第Ⅳ文化層AV－14Grで検出した遺構である。平面形は整った形状の円形を呈し、長軸180cm、短軸165cmを測る。床面はほぼ平坦で、深さは最も残りの良い東側で15cm程度と、全体的に残りが悪く非常に浅い土坑である。覆土は中央付近に暗灰色砂質土が堆積し、その周囲には黒褐色粘質土が堆積する。



第82図　76号土坑実測図（1/30）

床面中央には数個の円礫がかたまって検出されたが熱を受けた痕跡は無かった。竪穴住居の可能性も考えて床面を精査したが、ピットや掘り込み、焼土等は確認されなかった。

出土遺物は礫の直上から土器が出土したが、小片で図示できなかった。また南東隅部からは赤色チャートチップが2点出土した。また検出面より30cm程上の包含層から2の粘土瘤のある刺突文土器が出土した。

出土遺物

縄文土器（図版51～53、第83～95図）

1～25は粘土瘤のある刺突文土器である。1は口縁部があまり開かず端部が面をなす。刺突文は棒状工具を使用し大きさは6mm～8mm程と小さい。粘土瘤は刺突文の直下に等間隔で貼り付けられる。器面調整は粗い二枚貝条痕調整。復元口径19.6cm。2は口縁部が

若干開いた器形となる。復元口径21.4cm。 3 は棒状工具を使用して縦長の刺突文を施文する。器面調整の二枚貝条痕は粗い施文具を使用して深く施文される。器壁は厚めで11mmを測る。復元口径21.2cm。 4 は器壁が剥離しており器面調整不明。刺突文は巻貝の頂部が切断されたと思われる工具を使用している。 5 の刺突文施文工具も同様である。 5 は粘土瘤が径15mmと大きめである。 6 も頂部切断巻貝による刺突文施文である。粘土瘤は直径 6 mmと小さい。 7 は刺突文の大きさが 1 cmを超える。外面は二枚貝条痕調整だが内面はナデ調整を行う。 8 の刺突文は棒状工具を右方向から刺突する、いわゆる押引による施文を行う。施文の間隔が狭く、 1 cm程度しか離れていない。器表の風化が進んでおり、器面調整が不明瞭である。 9 の刺突文も恐らく頂部切断の巻貝による施文である。10は大きめの刺突文が深く施文される。11は雑な刺突が行われ円形をなさない。12は 7 と同一個体であろう。大きな楕円形の刺突文が施される。14の刺突文は竹管状工具により右方向から施文される。15は器壁が厚く 1 cmを超える。16は恐らく頂部切断の巻貝による施文である。調整はナデによる。18～20は粘土瘤部分のみの破片であるが、瘤の間隔が非常に狭い。22～25は刺突文の施文に二枚貝の頂部押圧を行うものである。

26～37は刺突文や粘土瘤はないものの、胎土や調整からたまたま刺突文や粘土瘤がない部位の破片か、刺突文や粘土瘤のある土器と形状が類似する同時期の土器と判断されるものである。

26は口縁部が尖り気味に薄くなる。内面の調整はナデ。27・28も内面ナデ調整。29は内面の器表が剥離し調整不明。口径23.2cm。30は口縁端部付近のみ内外面横ナデ。31～37は粘土瘤のある刺突文土器に特徴的な、太く粗い条痕文施文が見られる。器壁の厚さは 1 cm前後となる。

38・39は横長の楕円形に近い鰭状突起をもつ土器である。38は外面ナデ、内面横条痕調整。39は内外面ともナデ調整。

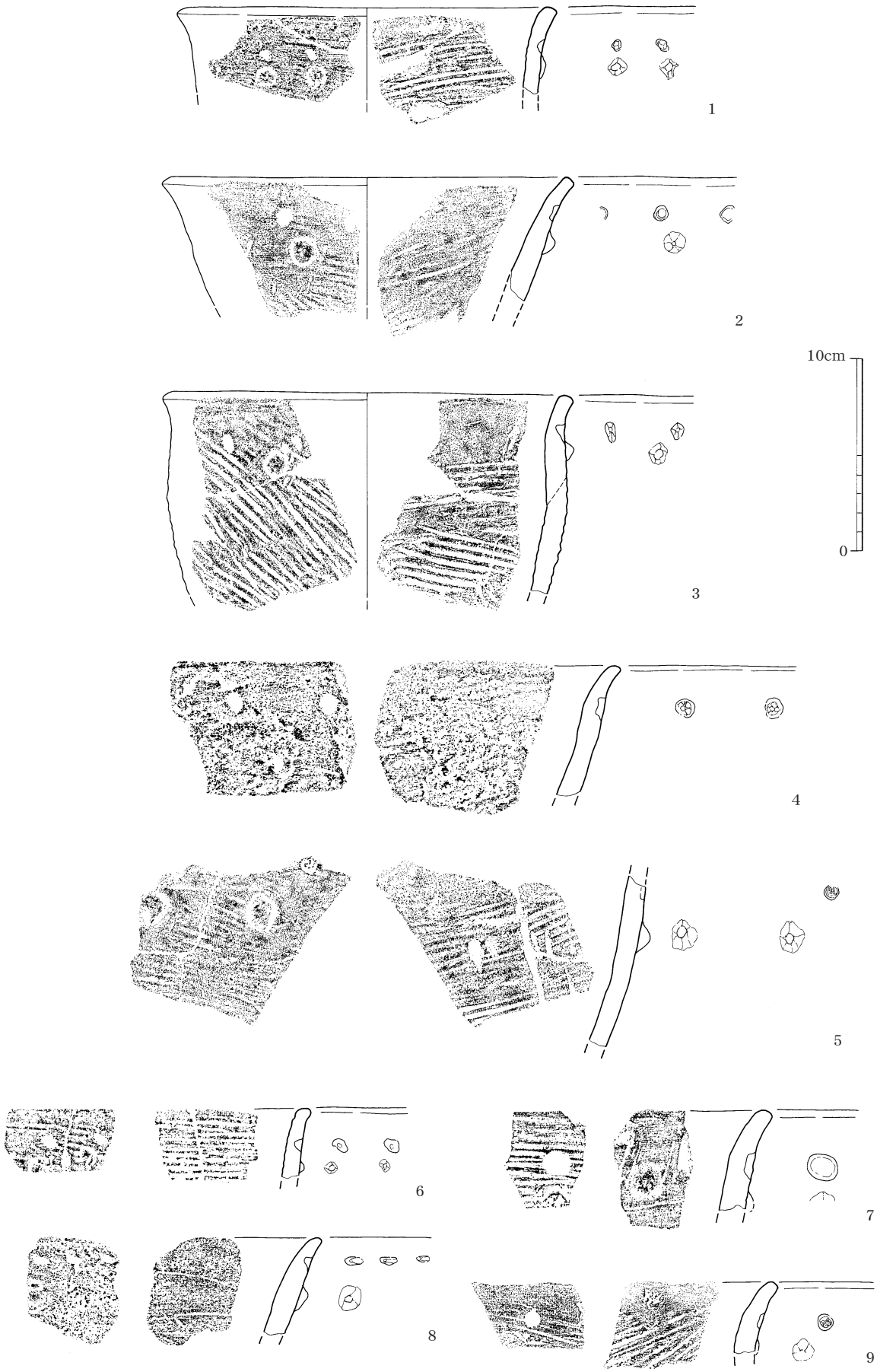
40～60は押型文土器である。40～45は山形文施文の押型文土器である。40の内面調整は山形文施文。46～56は楕円文施文の押型文土器。47～49は同一個体である。口径35.6cmに復元される。内面調整は楕円文を施文する。53は縦位施文である。楕円文の長さが 8 mmと大きい。56は細長の特異な形状の楕円文である。57～59は格子文の押型文土器である。 3 点とも恐らく同一個体であろう。口縁部の残る57では、内面の上位に原体条痕、下位に格子文を施文する。外面の口縁部直下はナデ調整。60は外面の器表が剥離しており施文不明。内面は原体条痕調整である。

61は撚糸文土器である。強く施文され文様が明瞭である。内面はナデ調整。62は内外面ともつぶれた押型文を施文する土器である。

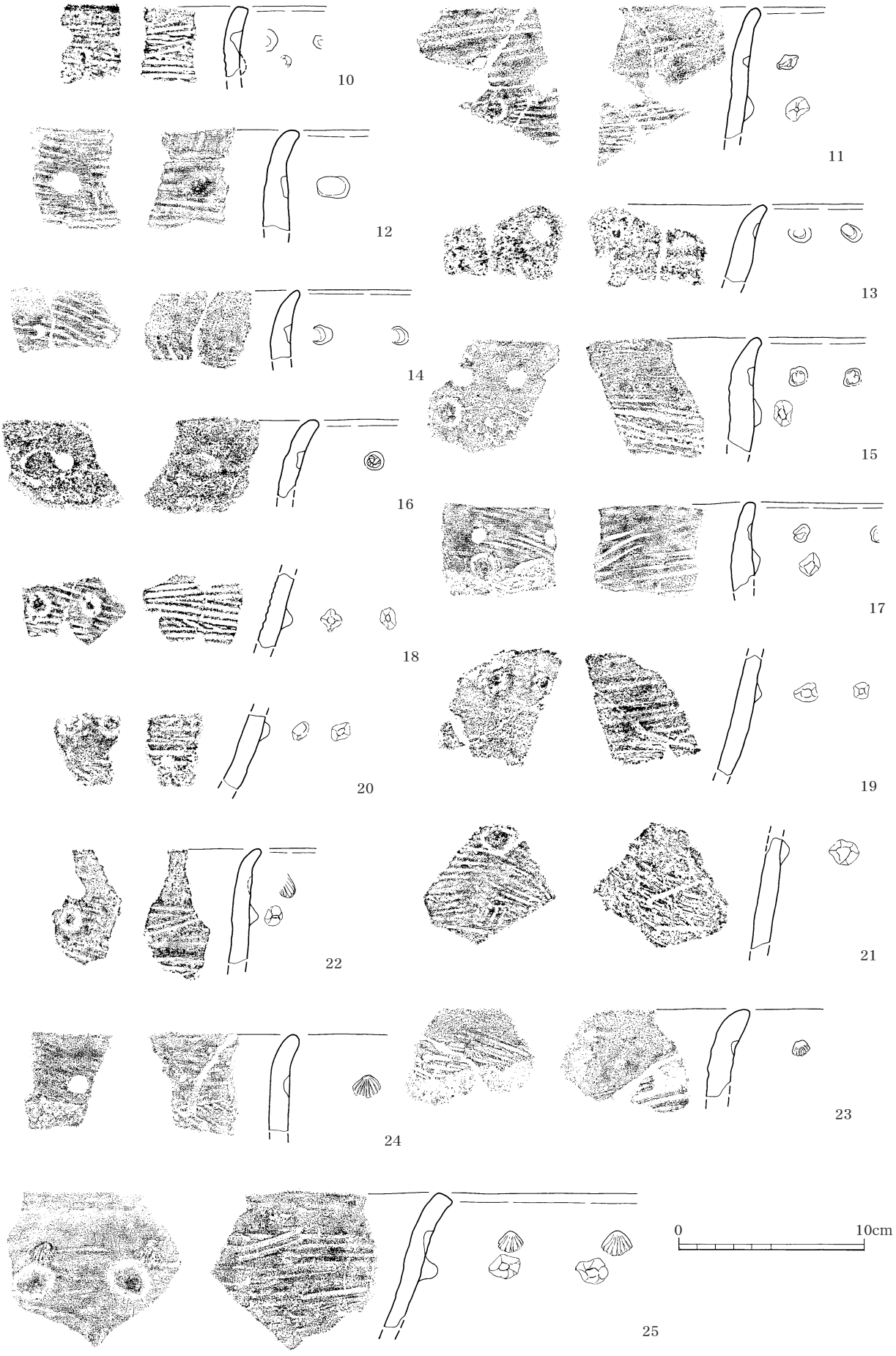
63～68は粘土瘤のある刺突文土器または押型文土器の底部と思われるが、どちらに属するのか形状では判断できなかったため一括している。調整は内外面ともナデ調整のものが多いが、68は条痕調整を行う。また68の内面には整形時に棒状工具を使用したのであろうか、刺突痕がある。64は広角で丸底に近い尖底、他は狭角の尖底となる。

69～74は隆起帯を数条巡らせる前期轟B式土器である。70の口縁部には小さな刻目が施文される。71・72は同一個体であろう。波状隆起帯を施文する。口径13.6cmに復元される。74は口縁部に低い突起を貼り付ける。隆起帯の上部は弧状に貼付され、下部は直線状に巡らせる。口径39.4cm。

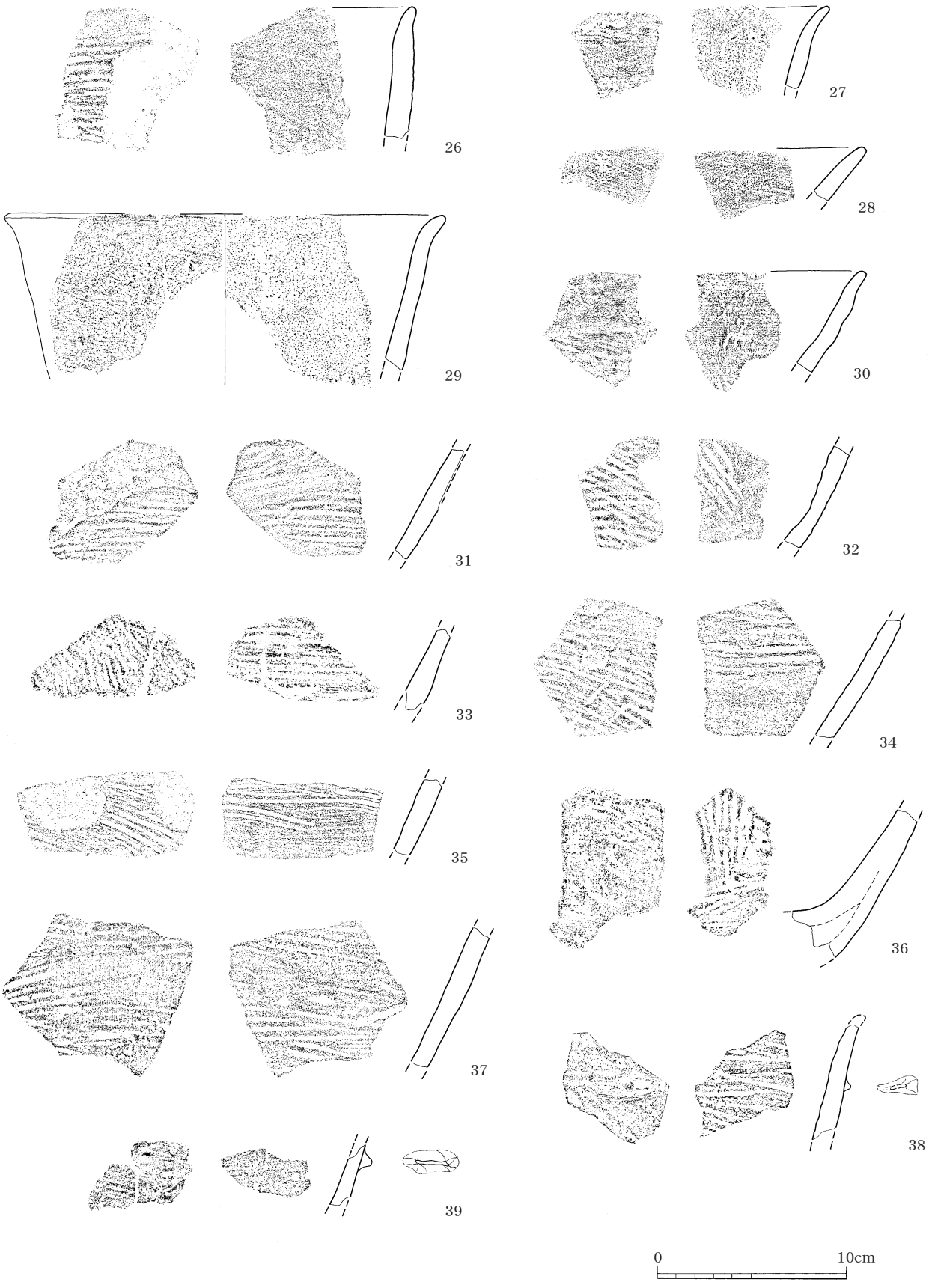
75～95は口縁部上面に押圧を加えて波状とし、外面には太い凹線を複数条巡らせる、後期初頭の西和田式土器に相当する。口縁部は大半が直立または若干開く程度である。端部の押圧は指に



第83図　縄文土器実測図①（1/3）

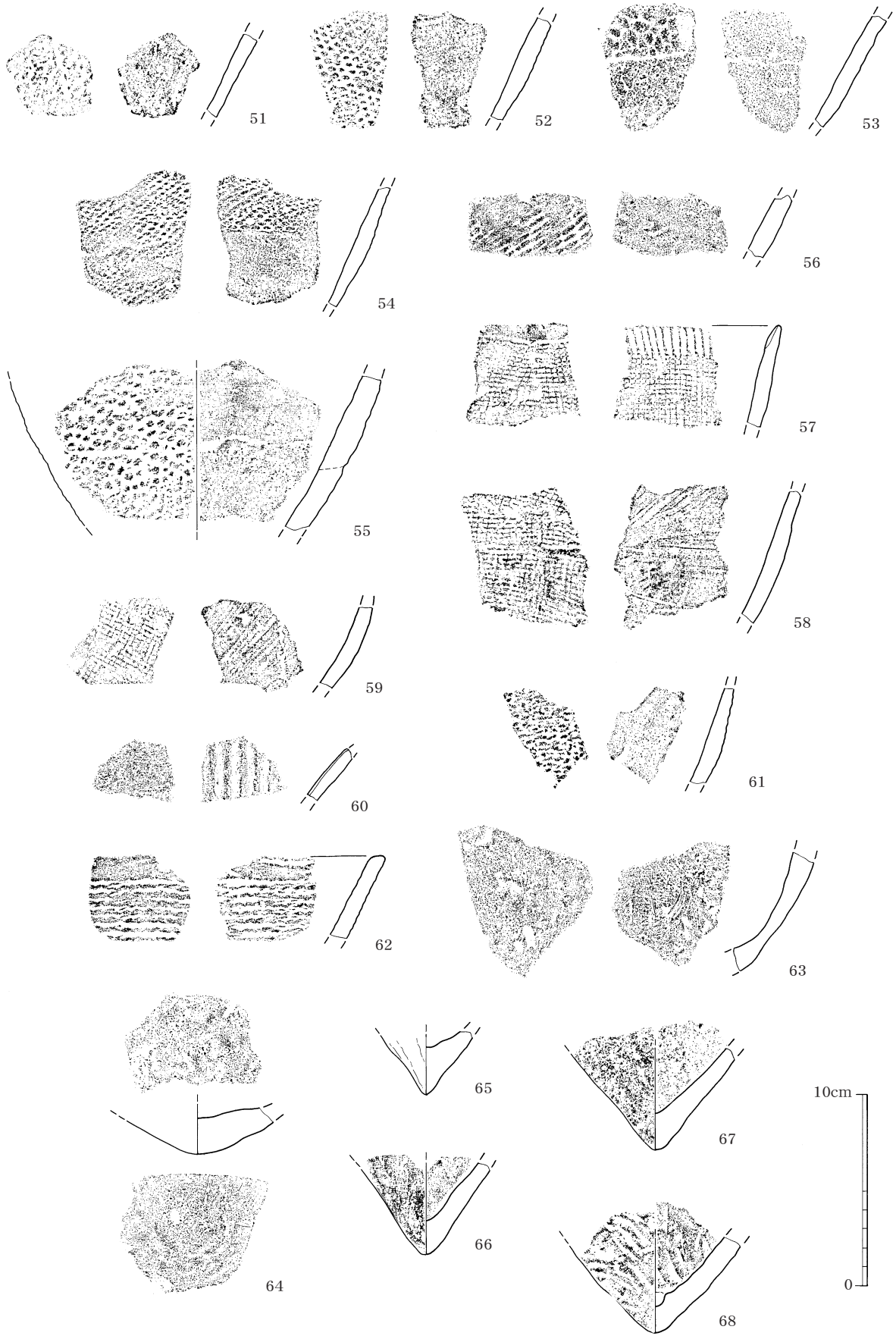


第84図　縄文土器実測図②（1/3）

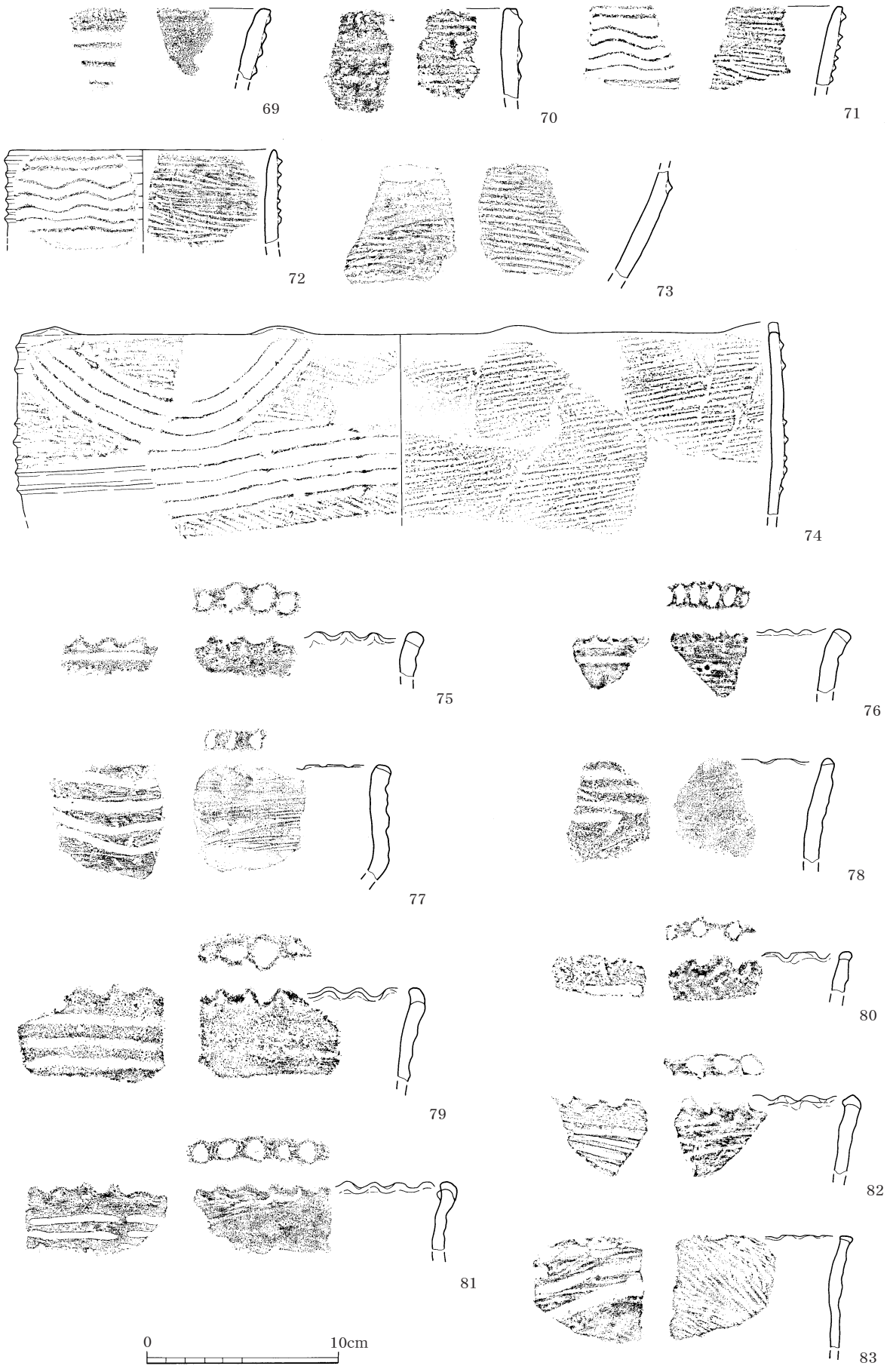


第85図　縄文土器実測図③（1/3）

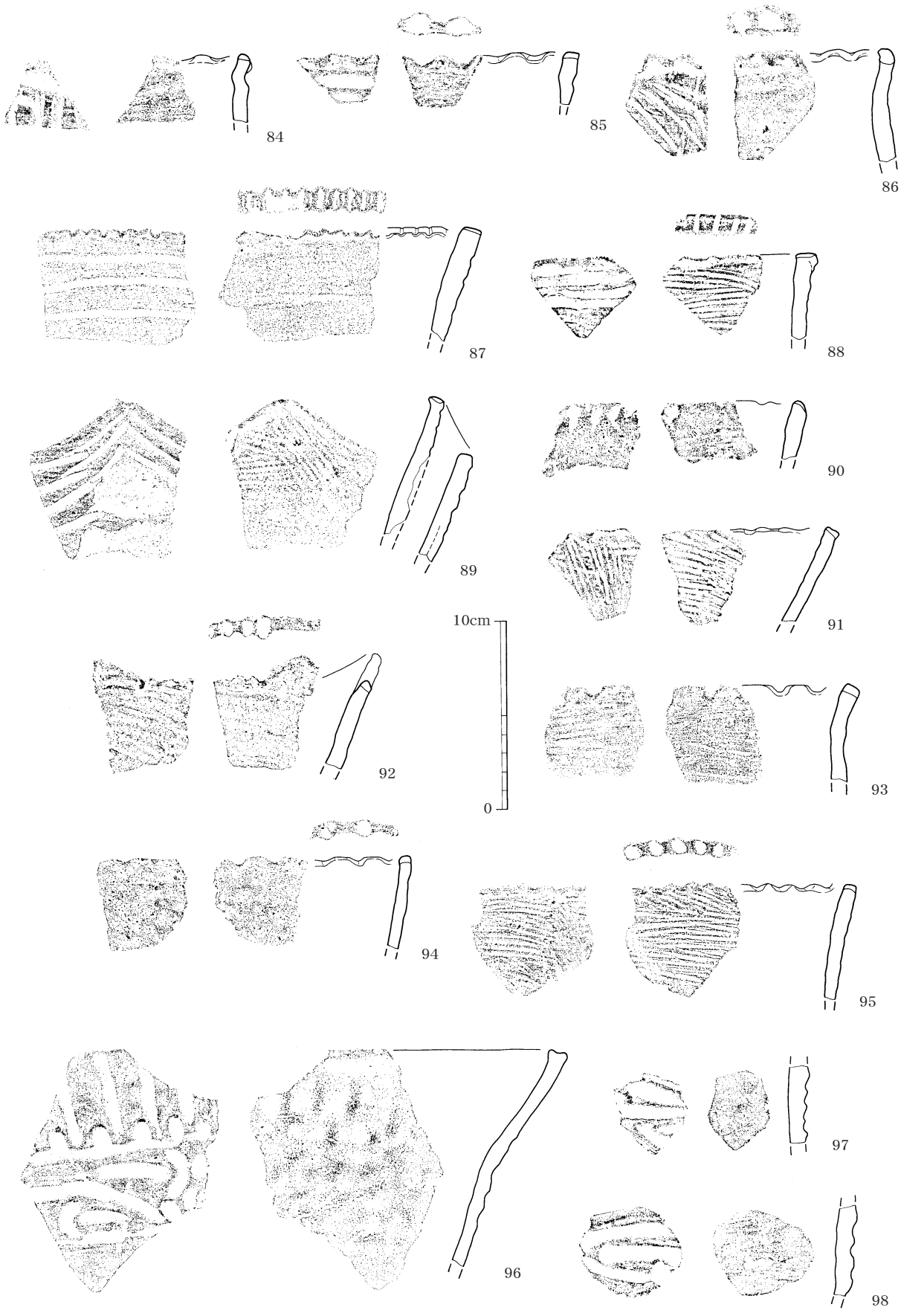
第86図　縄文土器実測図④（1/3）



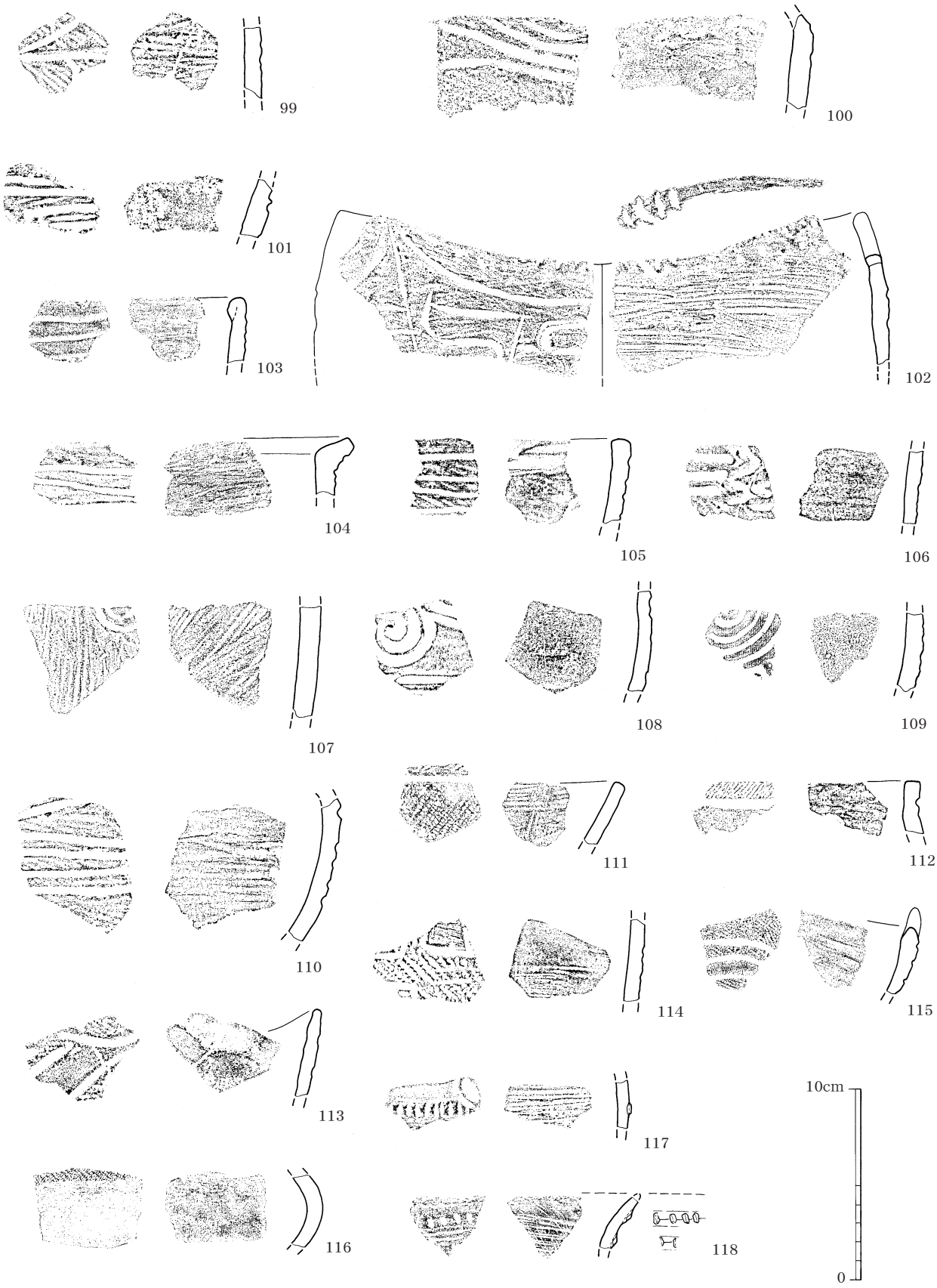
第87図　縄文土器実測図⑤（1/3）



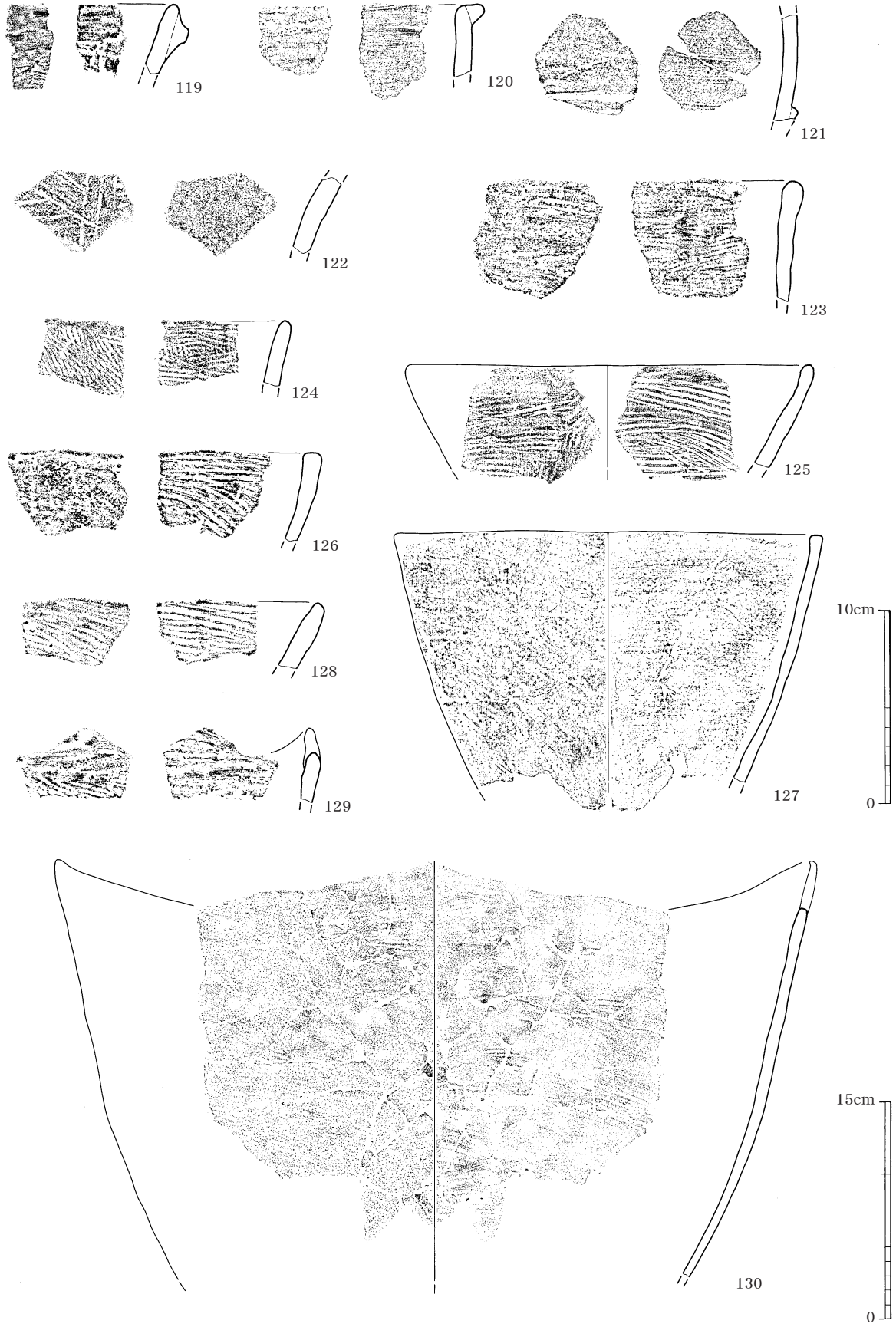
第88図　縄文土器実測図⑥（1/3）



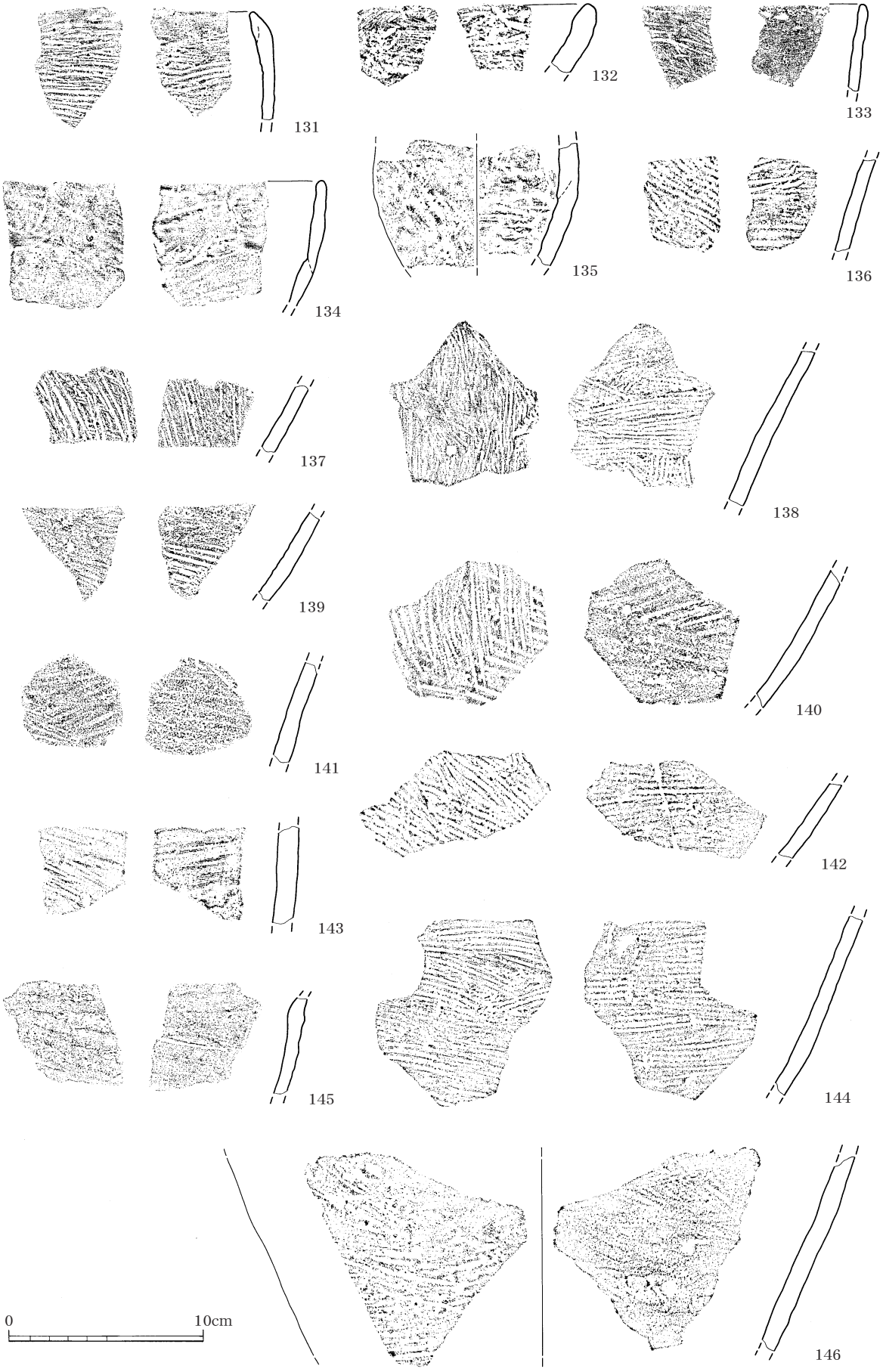
第89図　縄文土器実測図⑦（1/3）



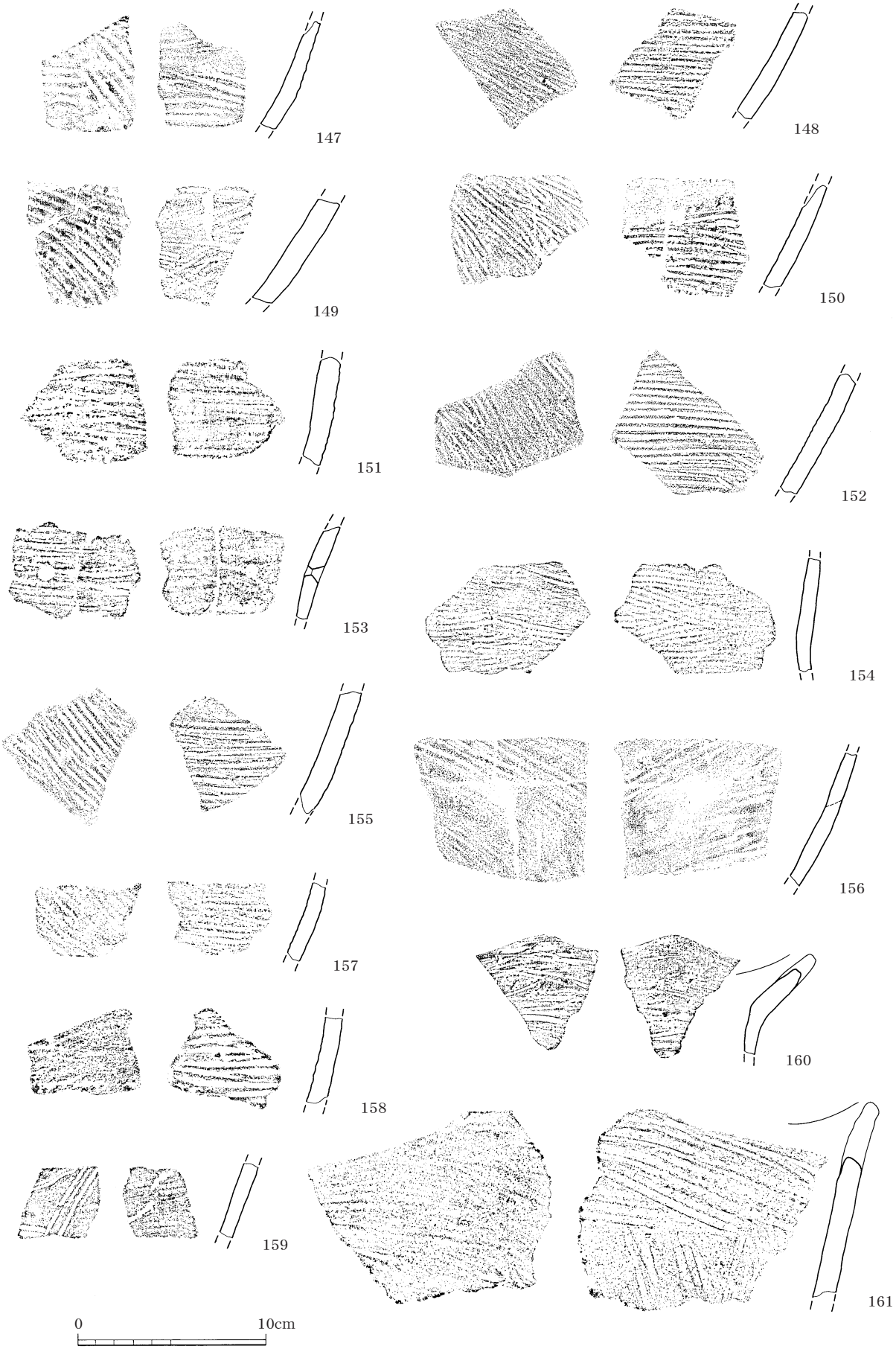
第90図　縄文土器実測図⑧（1/3）



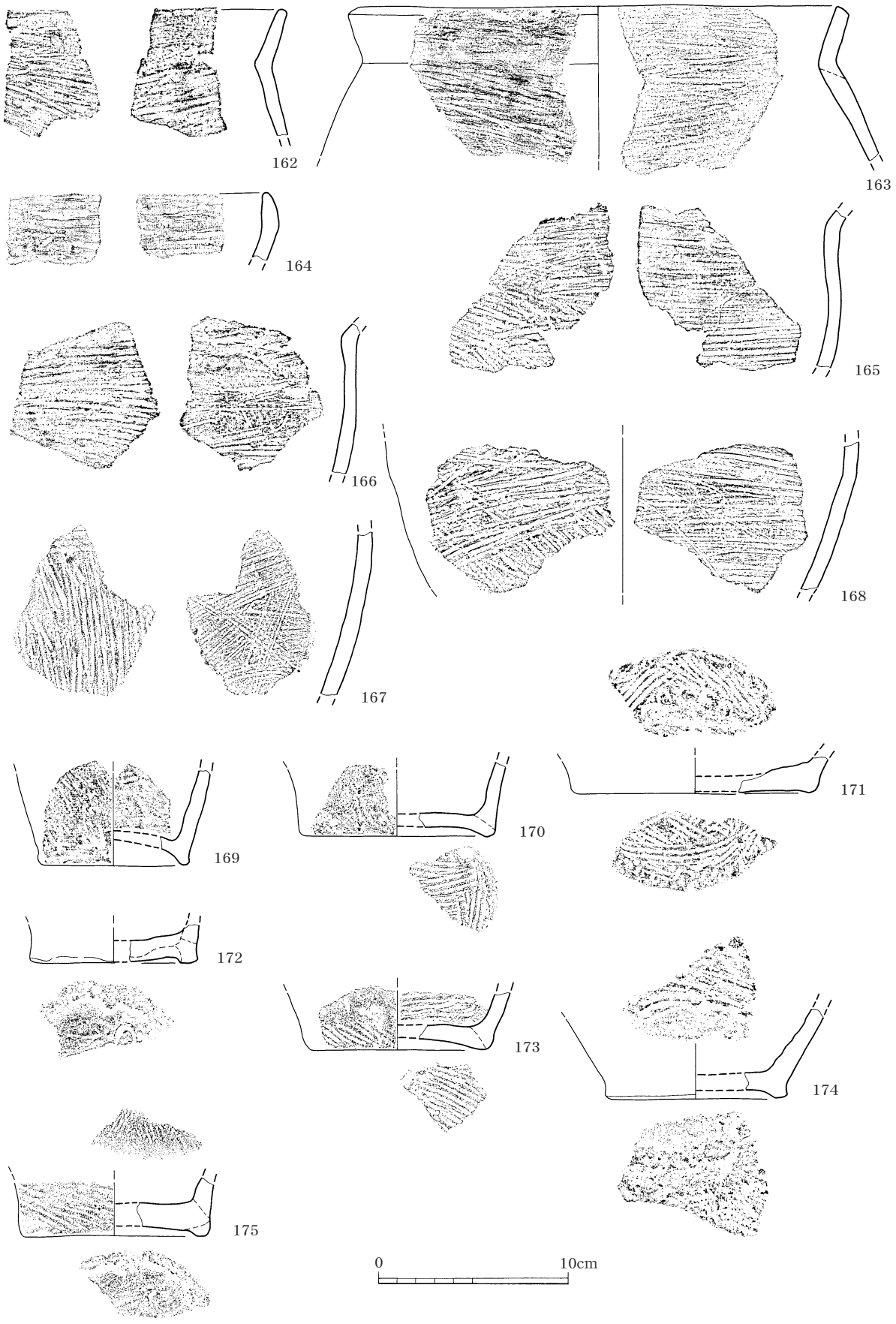
第91図　縄文土器実測図⑨（130：1/4、他1/3）



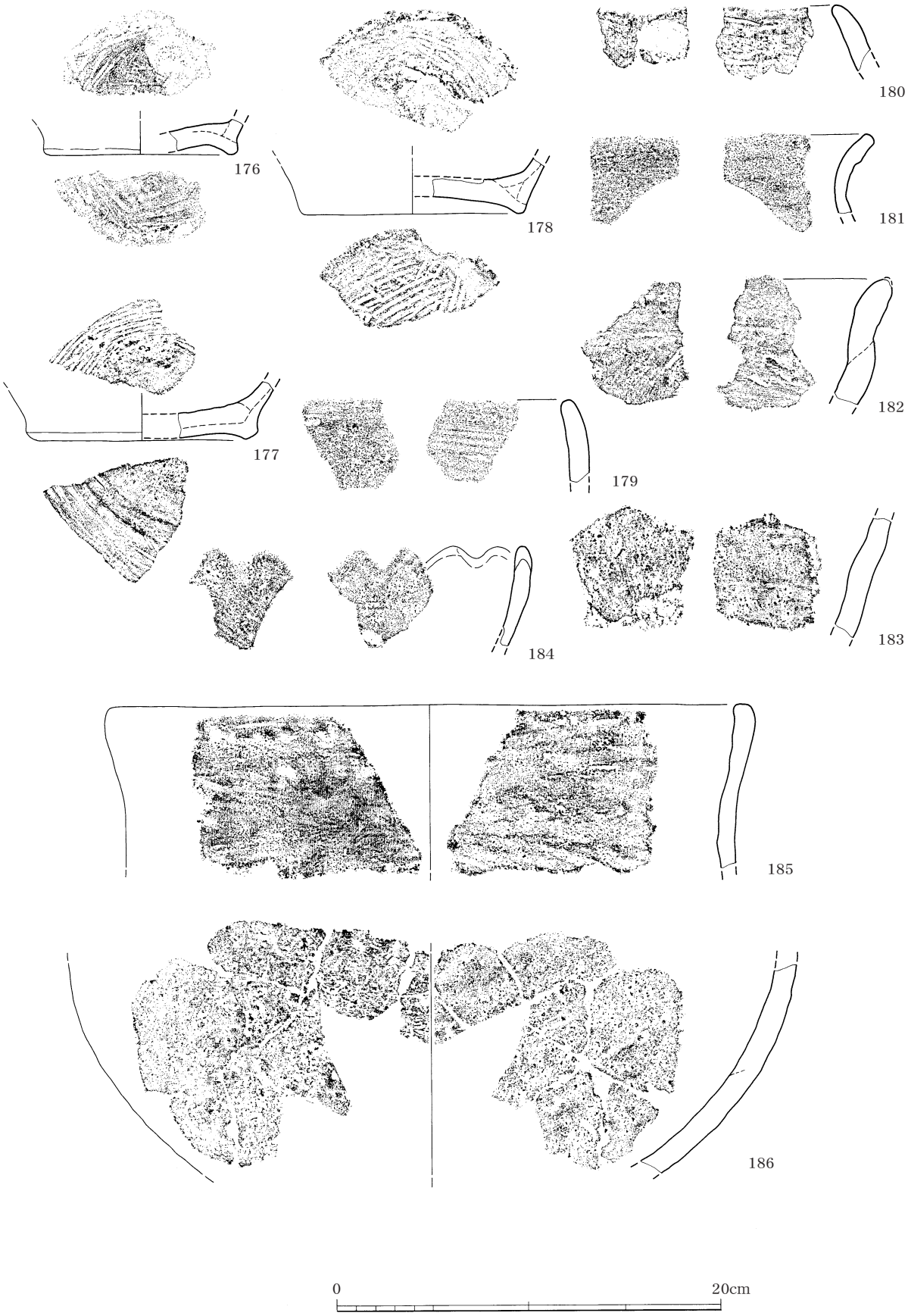
第92図　縄文土器実測図⑩（1/3）



第93図　縄文土器実測図⑪（1/3）



第94図　縄文土器実測図⑫（1/3）



第95図　縄文土器実測図⑬（1/3）

よるものが大半だが、中には87や88のように棒状工具による施文もある。89は磨消縄文の要素をあわせ持った土器である。波状口縁で頂部に押圧による刻目を施文し、体部は直線的に開いている。外面はナデ後に凹線文による施文を行う。90～95は口縁部上面の押圧のみで外面の凹線施文が見られないもの。96は阿高式土器である。口縁端部は内側につまみ出しており、外面の太い凹線文は曲線的な文様を描く。97・98は凹線文を施す小片。99～101はやや細めの凹線文を施文する。102は中津式の要素を持った沈線文土器である。口縁部の低くなる箇所に刻目を施文し、外面には細い凹線文による施文を行う。口径27.2cm。103～105は外面に直線的な凹線文を数条巡らせる。103は口縁端部を内側に丸く肥厚させる。104は口縁部が外側に屈曲し鐘崎式土器に含まれるものと思われる。

106は凹線文の文様構成に縦位の山形文を描く阿高系の土器。107～109は渦文を描く破片である。111～116は磨消縄文土器。113や114には新しい要素が窺える。117・118は刻目を巡らせる小片で、前期轟Ｂ式土器であろうか。119・120は口縁端付近に突帯を一条巡らせる。121は一条の三角突帯が見られる。122は沈線で施文する小片である。

123～178は条痕調整の土器である。幅の狭い条痕調整の土器は後期の所産と考えて良いものであるが、幅広の条痕調整を行うものについては早期に属する可能性もあると思われる。123～159は二枚貝条痕調整の土器である。125は口径20.8cm。126や128は粗めの条痕調整であり早期に属するものか。127は口縁部があまり開かない器形となる。口径21.8cm。129・130は波状口縁となる。130は口径52cmを測る大型品。廃棄された状態で一括出土した個体である。後期前葉に伴うものと思われる。

131は口縁部が内傾する。133・134は器壁が比較的薄い。135は復元径10.6cmの小型品。136・139・140・147・149・153などは粗くて深い条痕調整を行っており早期の所産である可能性が高い。153は焼成後の穿孔がある。138や144などは小さめの条痕調整を行っており後期のものと思われる。

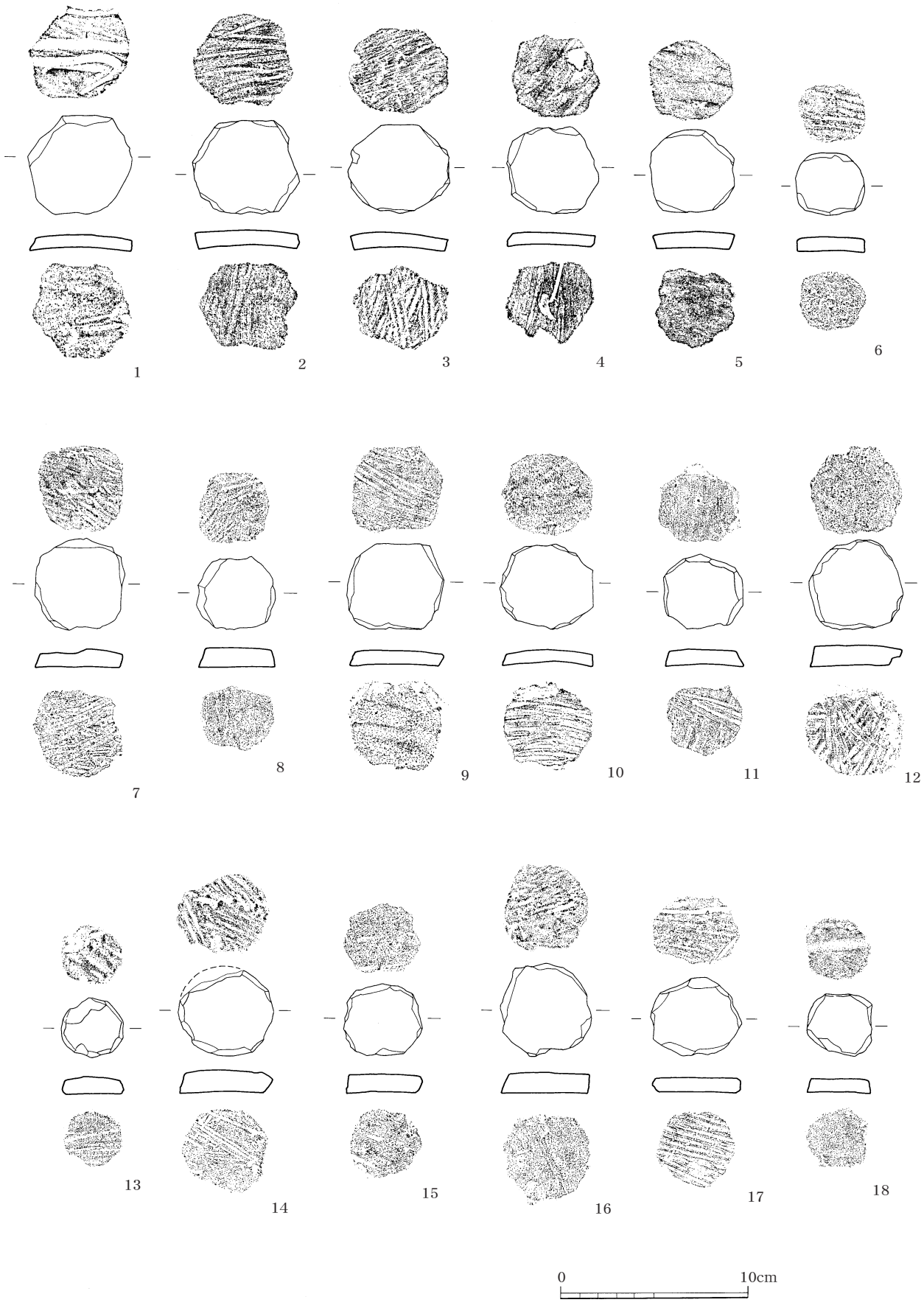
160～168は巻貝条痕調整の土器である。160・161は波状口縁となる。162・163は口縁部が外折する器形となる。どちらも端部は面をなす。163は26.0cm。164は口縁部が内傾する器形となる。165～168は同一個体である。口縁端部は欠失するが、口縁部が外側に外反する器形となる。

169～178は底部である。全て平底または若干上げ底で、端部が高台状に高くなるものもある。

179～186は器壁の調整がナデ仕上げの無文土器である。179・180は口縁部が大きく内傾する。181～183は口縁部が外反する。181は器壁が他よりも薄い。182は器壁が厚く、15mmを超える。183は頸部付近の破片である。184は薄手の土器で口縁部は波状口縁となる。185・186は同一個体である。頸部は直立気味に立ち上がり口縁部がわずかに内湾する。胴下半部は丸味を帯びた器形となる。口径33.8cm。

土製品（図版54、第96図）

１～18は土器片円盤である。土器の調整や焼成、出土位置から見て、全て後期の所産である。整形は端部を打ち欠いて円盤状に仕上げるが、６は部分的に擦過による整形を行う。大きさは径3.3cm～5.3cm。



第96図　土製品実測図（1/3）

石器（図版54～58、第97～117図）

１～17は旧石器時代に属すると思われる石器や剥片を掲載した。１～３はナイフ形石器である。１は不純物を若干含んだ黒耀石を素材とし、薄い縦長剥片の基部側両側縁に加工を加えたもので整った形状である。２は純度の高い水晶を素材とする。厚みのある横長剥片の側縁に粗い剥離調整を加えるが、素材の硬度が高いためかいびつな形状であり、ナイフ形石器とするのに躊躇を覚える。３は質の良い安山岩製。厚みのある大型の縦長剥片の両側縁に剥離調整を加えており、特に右側縁の調整は丁寧である。表面の風化が著しい。

４～８は細石刃である。全て黒耀石製。頭部の調整は全て行われており、５・８は自然面を残す。７の側縁には微細剥離が見られる。７や８は長さが３cmを超える大型品である。８は表面の風化が進む。

９・10は細石刃核である。どちらも黒耀石製。９の打面は複数回調整され背面側に傾斜する。側縁には大まかな剥離加工を加えて整形され一部自然面を残す。細石刃の採取は同一方向から行われ、採取された細石刃の大きさは長さ３cm、幅５mm前後になると思われる。残核形態は円錐形に近い。10は背面に自然面を大きく残し素材の整形は現状では確認できない。側縁には同一方向からの７条の細石刃採取が認められ、大きさは長さ3.5cm、幅５～７mm程度となる。打面再生剥離によって打面が大きく傾斜する。表面の風化がかなり進行している。

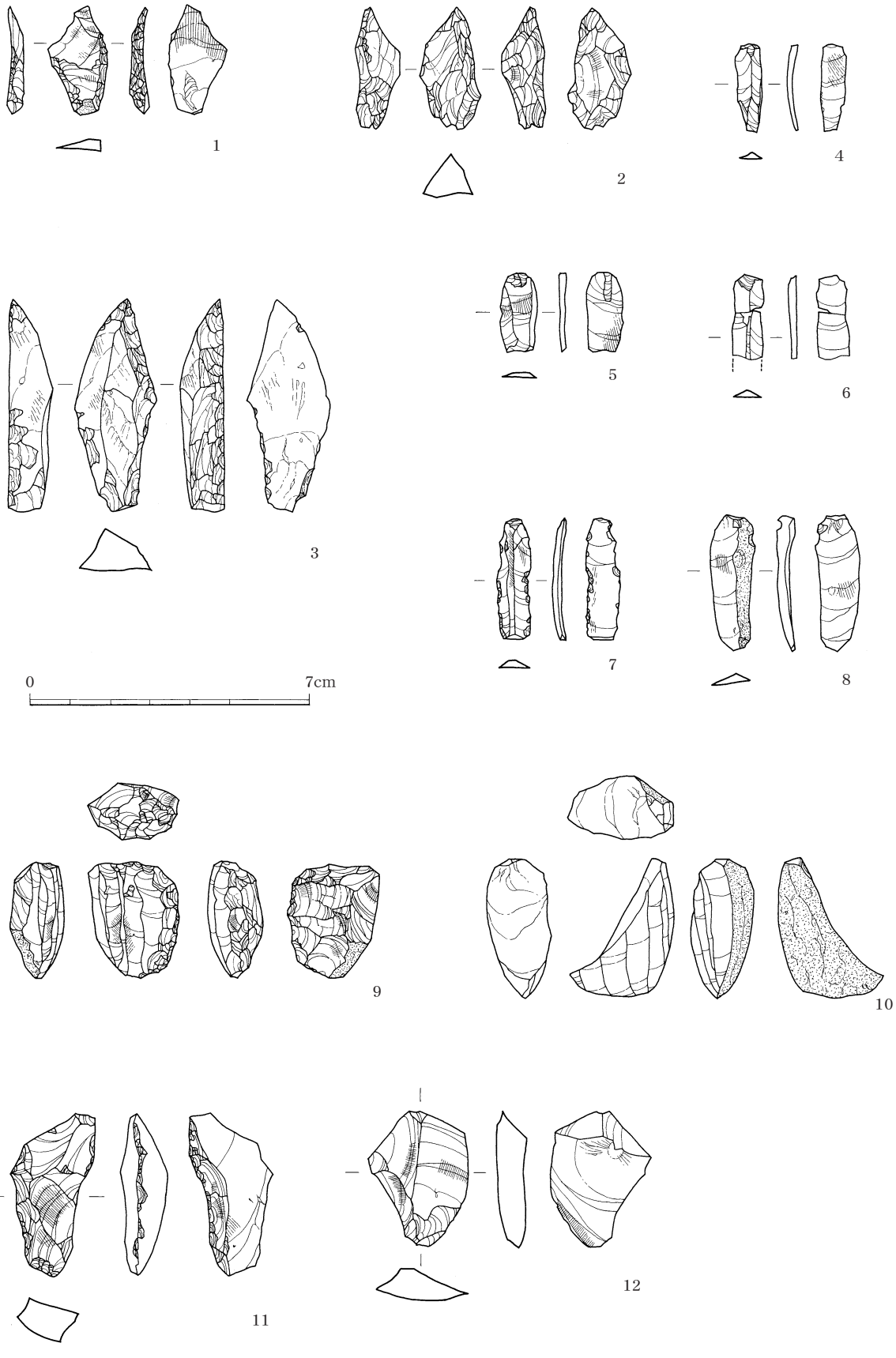
11～17は剥片類である。11・12は黒耀石製で、どちらも表面の風化が顕著である。11は両側縁に階段状剥離が認められる二次加工剥片。12は幅広の縦長剥片の打点部と側縁の一部に剥離調整を加えた剥片である。13～15は安山岩製。やはり風化が顕著である。13は扁平な縦長剥片の打点部を除去したもので、側縁に微細剥離が認められる。14は肉厚の縦長剥片。15は自然面を大きく残す大型の剥片である。縄文時代の遺構である２号集石内から出土しており縄文時代の所産である可能性もある。16・17は珪質岩製。16は薄い剥片素材の打瘤を除去し側縁に剥離調整を加えて刃部を形成したものである。17は大型の縦長剥片で部分的に微細剥離が認められる。

18～151は石鏃である。18～55は黒色黒耀石製。18～29は長さが２cmに満たない小型の鏃である。18～24は縦長の三角形、25～29は正三角形に近い形状となる。18・19は基部の抉りがほとんど無い。18は表面の側縁にのみ剥離調整を行う剥片鏃。24は丁寧な剥離調整で抉りが深く細身である。25・27・29は主剥離面を残す。29は側縁が丸味を帯びた形状となる。

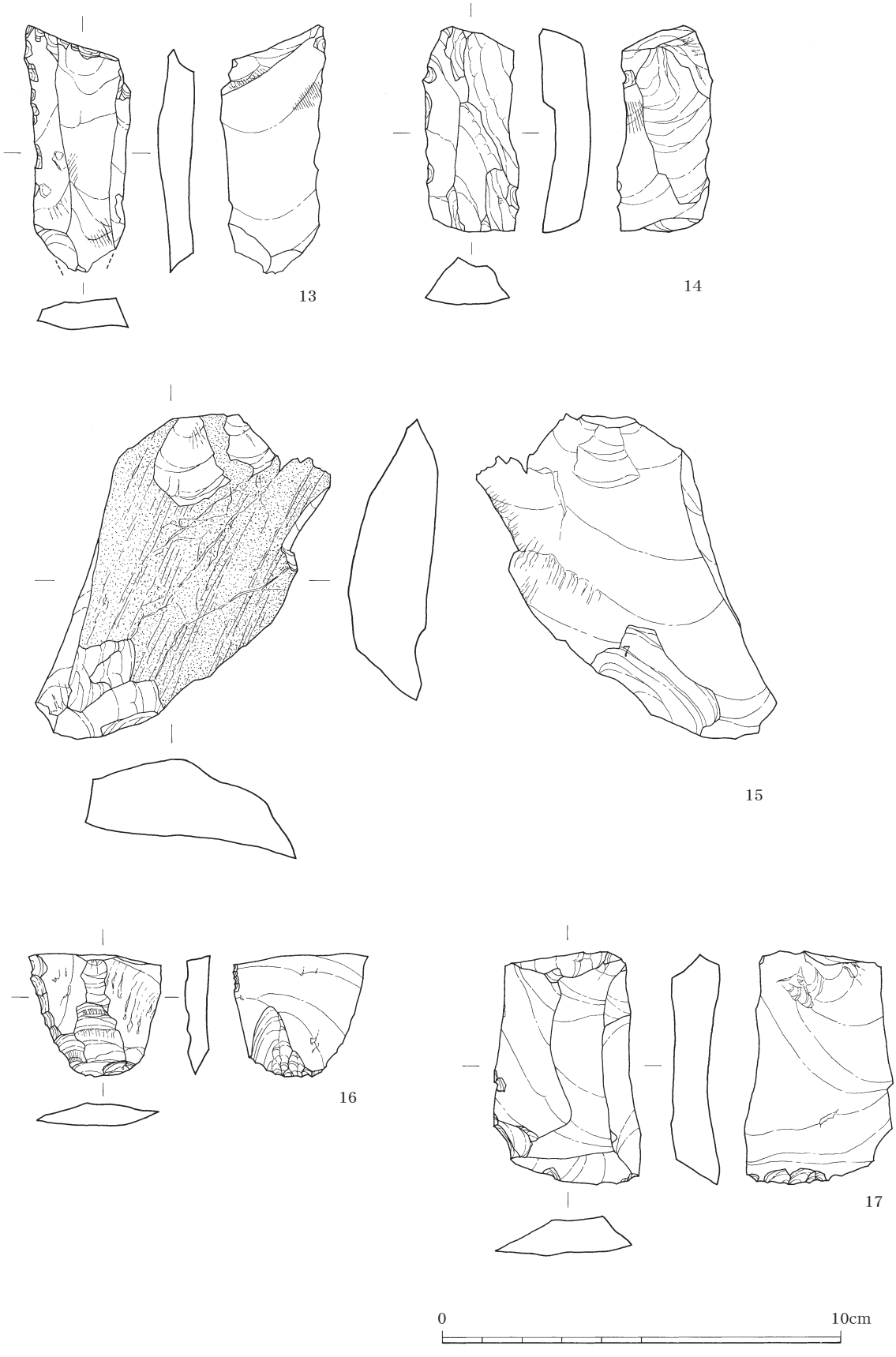
30～45は長さが2.0～2.5cmの中型品。30～37は縦長の三角形、38～45は正三角形に近い。30～32は調整が丁寧である。30は基部の抉りがほとんどない。32は基部の抉りが深い。33は左右で形状が異なるが二次加工によるものか。35は雑な剥離のため左右非対称である。38は粗い剥離調整のみで基部加工も行われない。未製品の可能性も残る。42～45は基部の抉りが深い。

46～55は長さ2.5cmを超す大型品である。46は先端部を大きく欠失するが3.5cmを超える大きさになると思われる。側縁が丸味を帯びた形状となり基部の抉りは浅い。48は剥離が細かく丁寧な造りである。51は粗い剥離調整を行う。

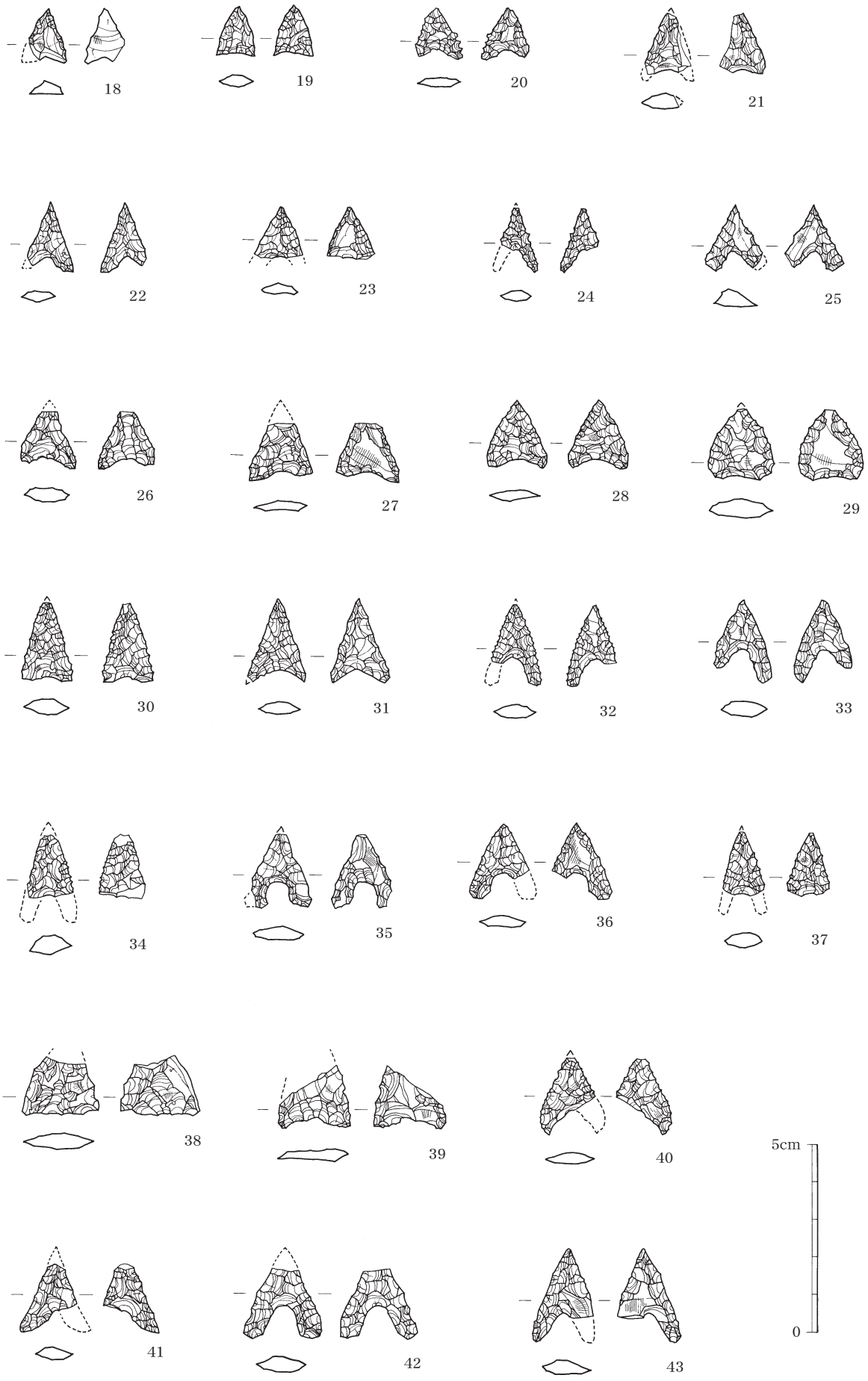
56～100は姫島産黒耀石製の石鏃である。56～71は小型品。56～58は基部の抉りがほとんどない平基式の鏃である。調整が縁辺部にしか及ばない剥片鏃である。59～61は基部の抉りが浅いものである。62～68は長さが短く正三角形に近い形状となる。69～71は縦長の三角形となる。71は剥離調整が裏面にはほとんど及んでいない。



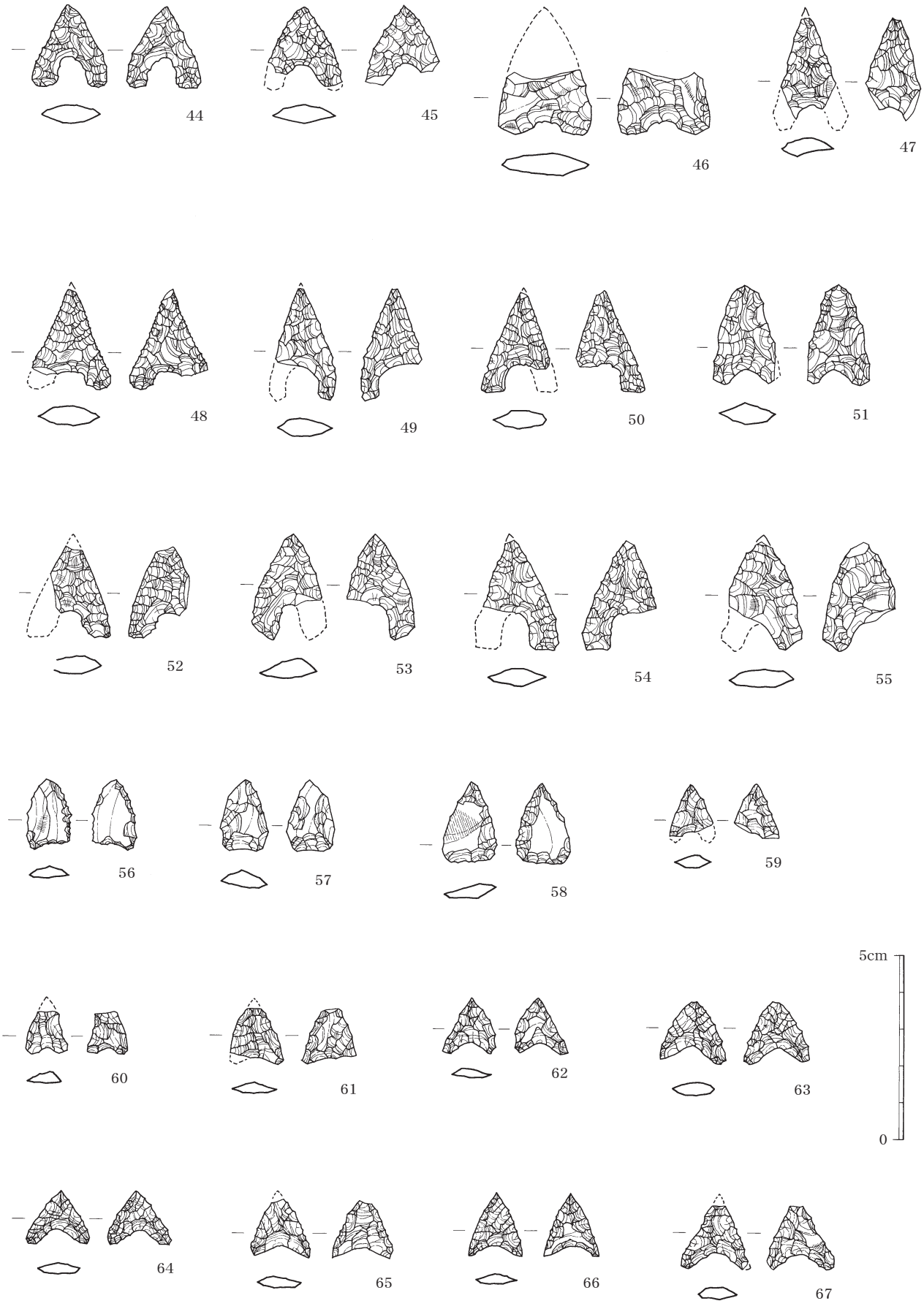
第97図　石器実測図①（2/3）



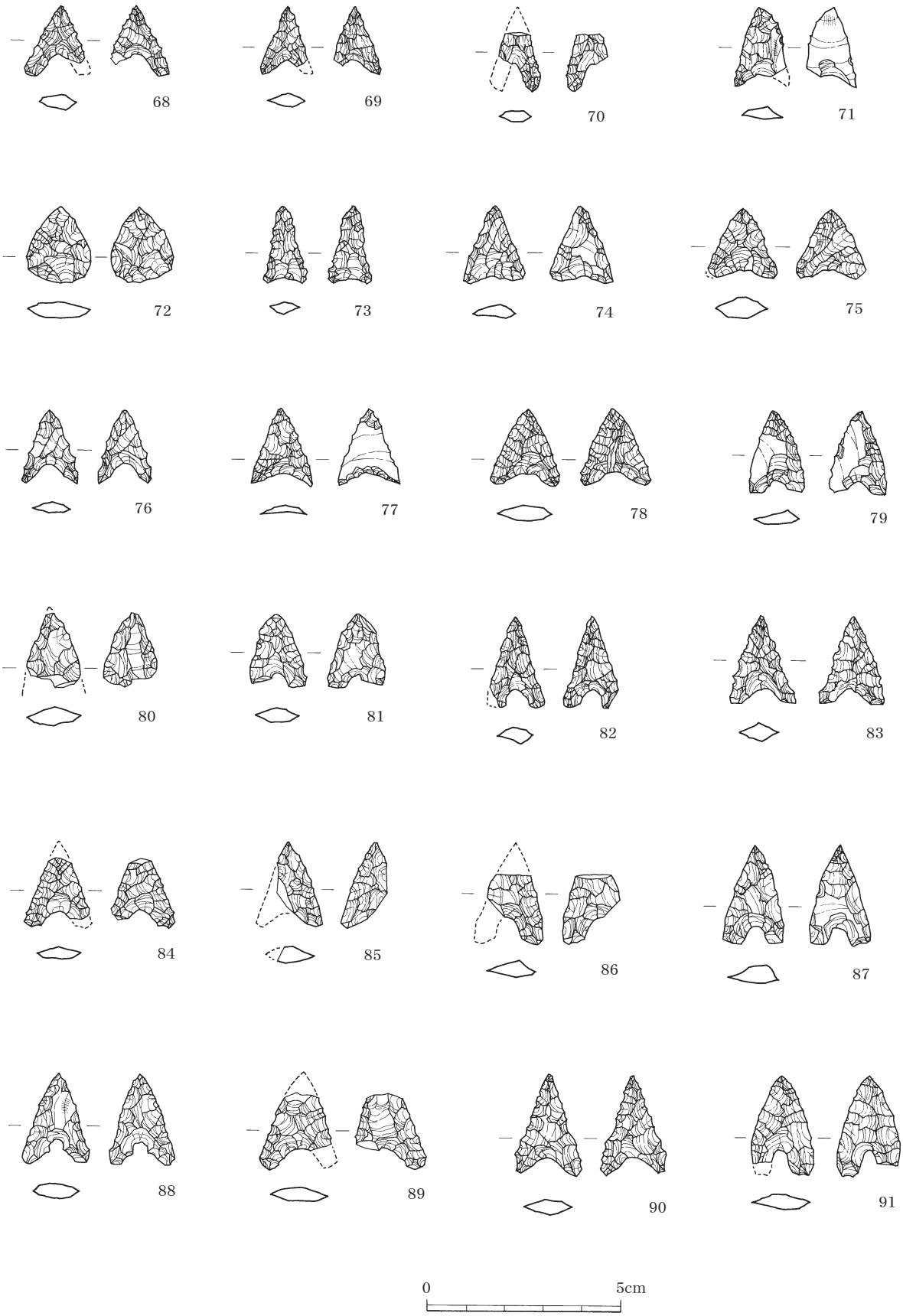
第98図　石器実測図②（2/3）



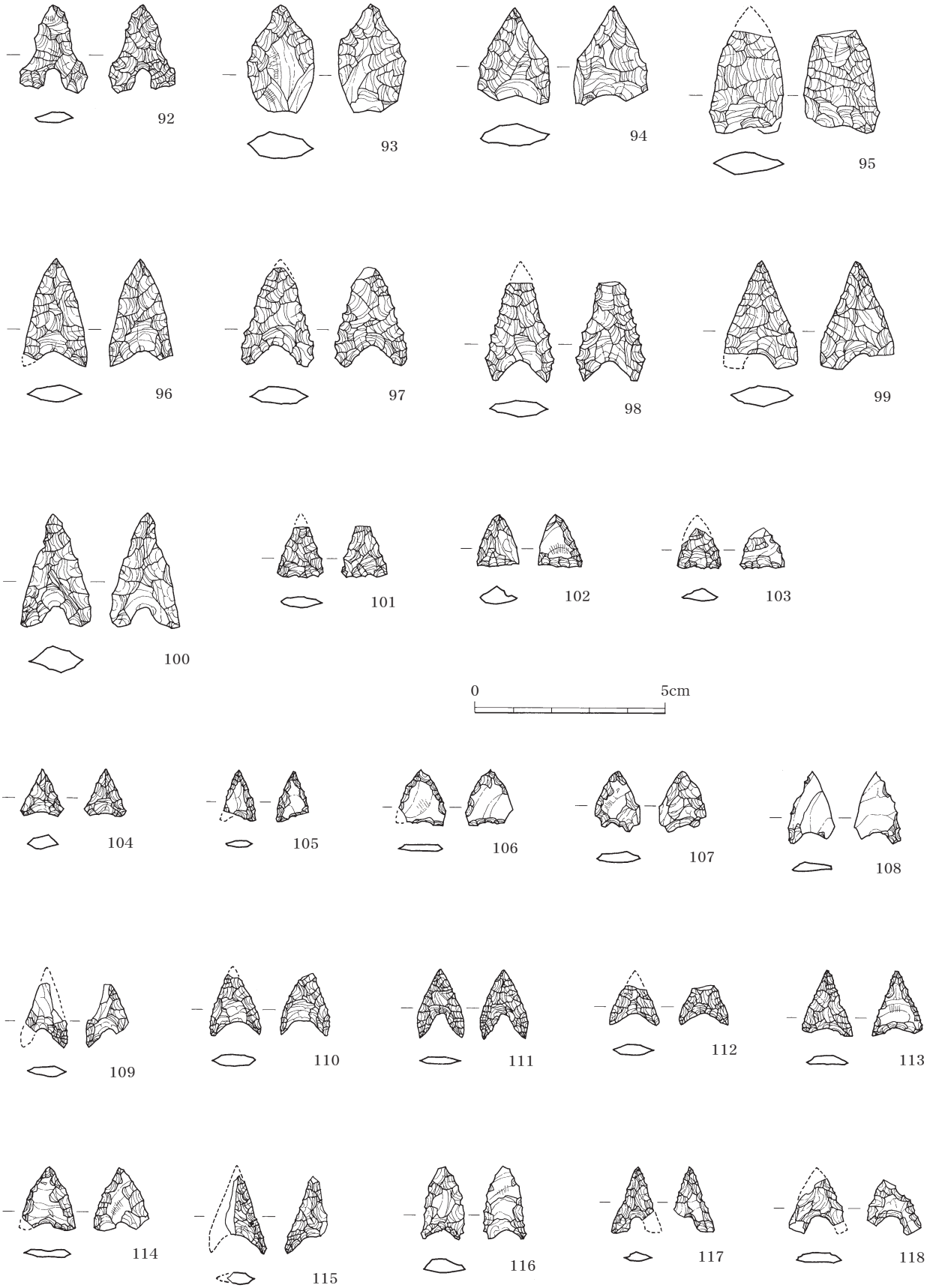
第99図　石器実測図③（2/3）



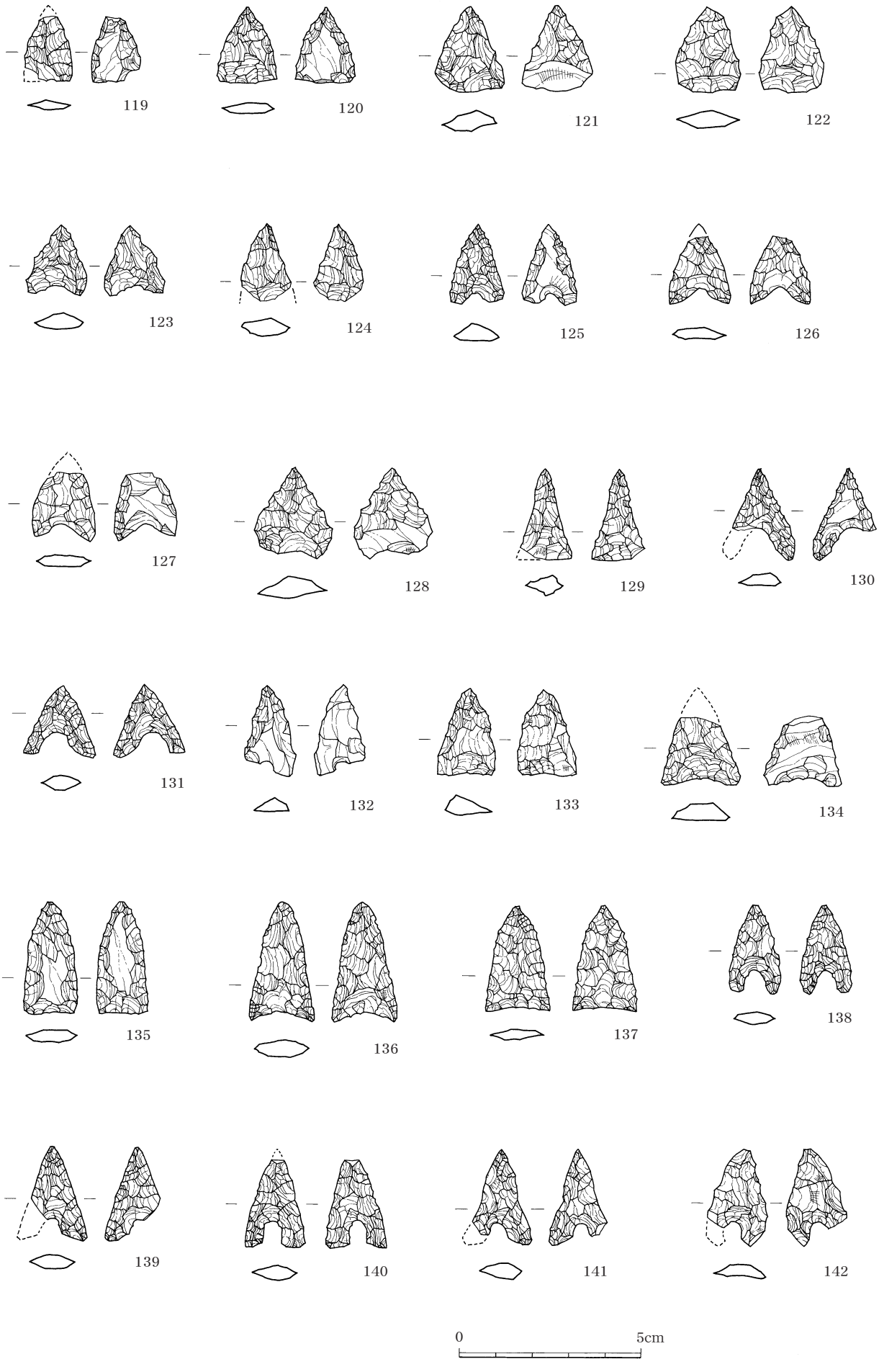
第100図　石器実測図④（2/3）



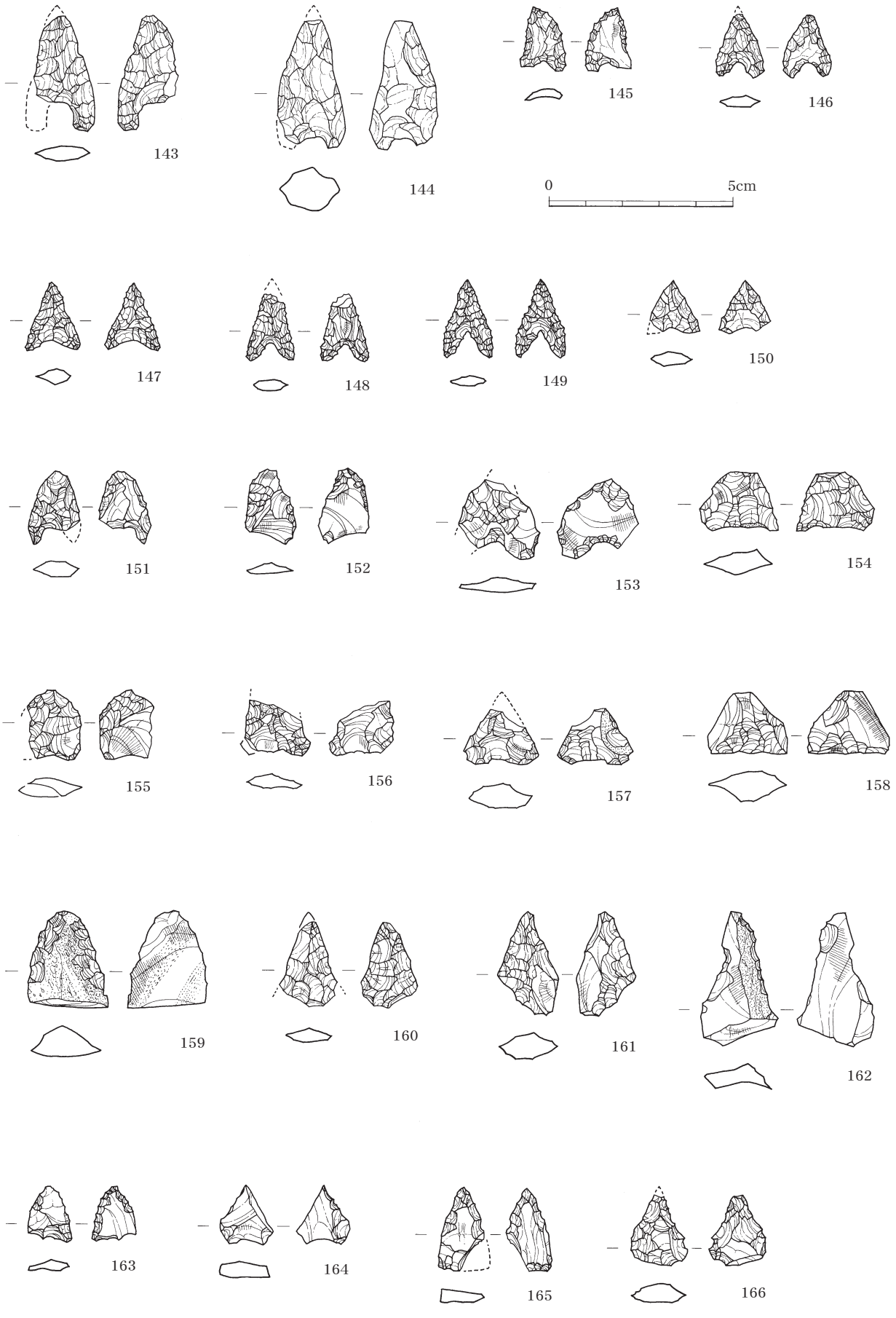
第101図　石器実測図⑤（2/3）



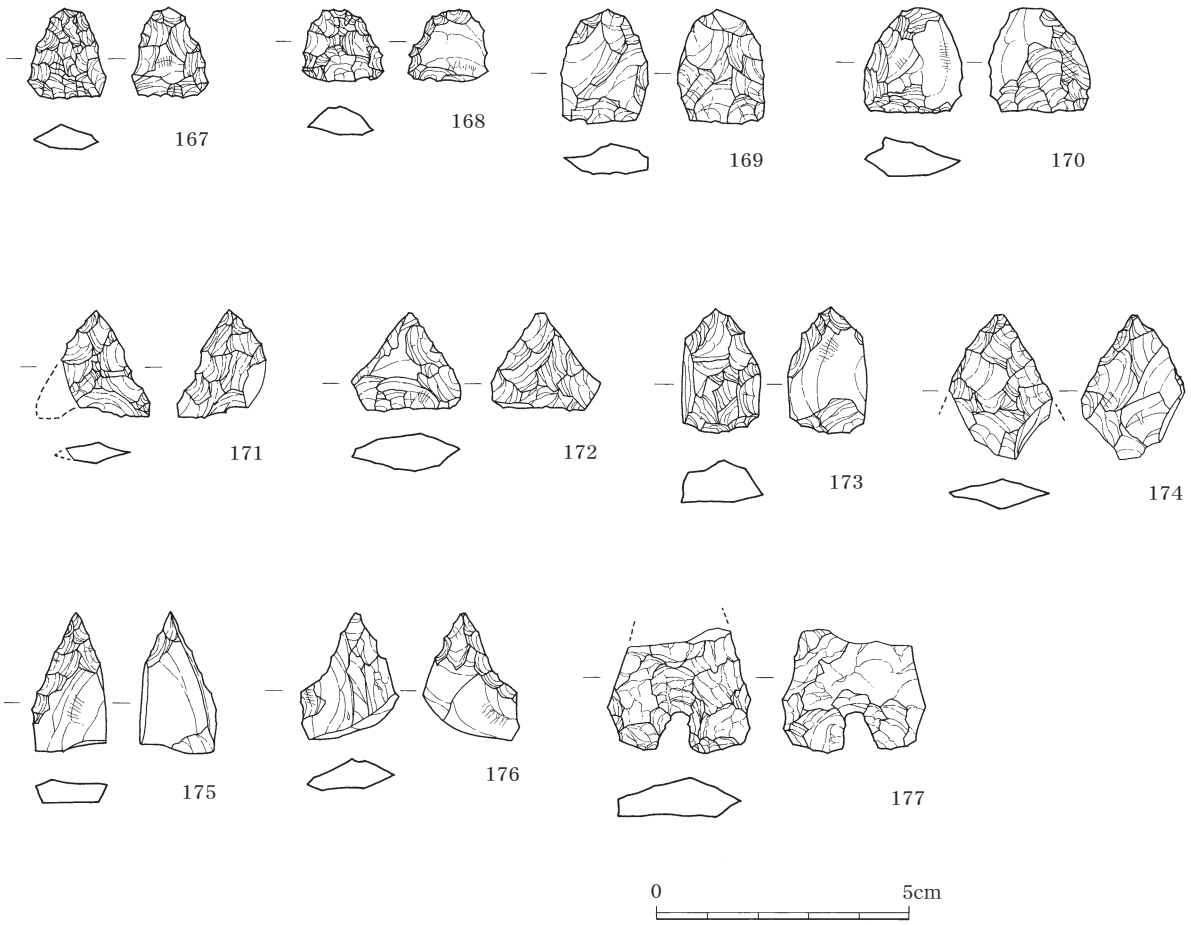
第102図　石器実測図⑥（2/3）



第103図　石器実測図⑦（2/3）



第104図　石器実測図⑧（2/3）



第105図　石器実測図⑨（2/3）

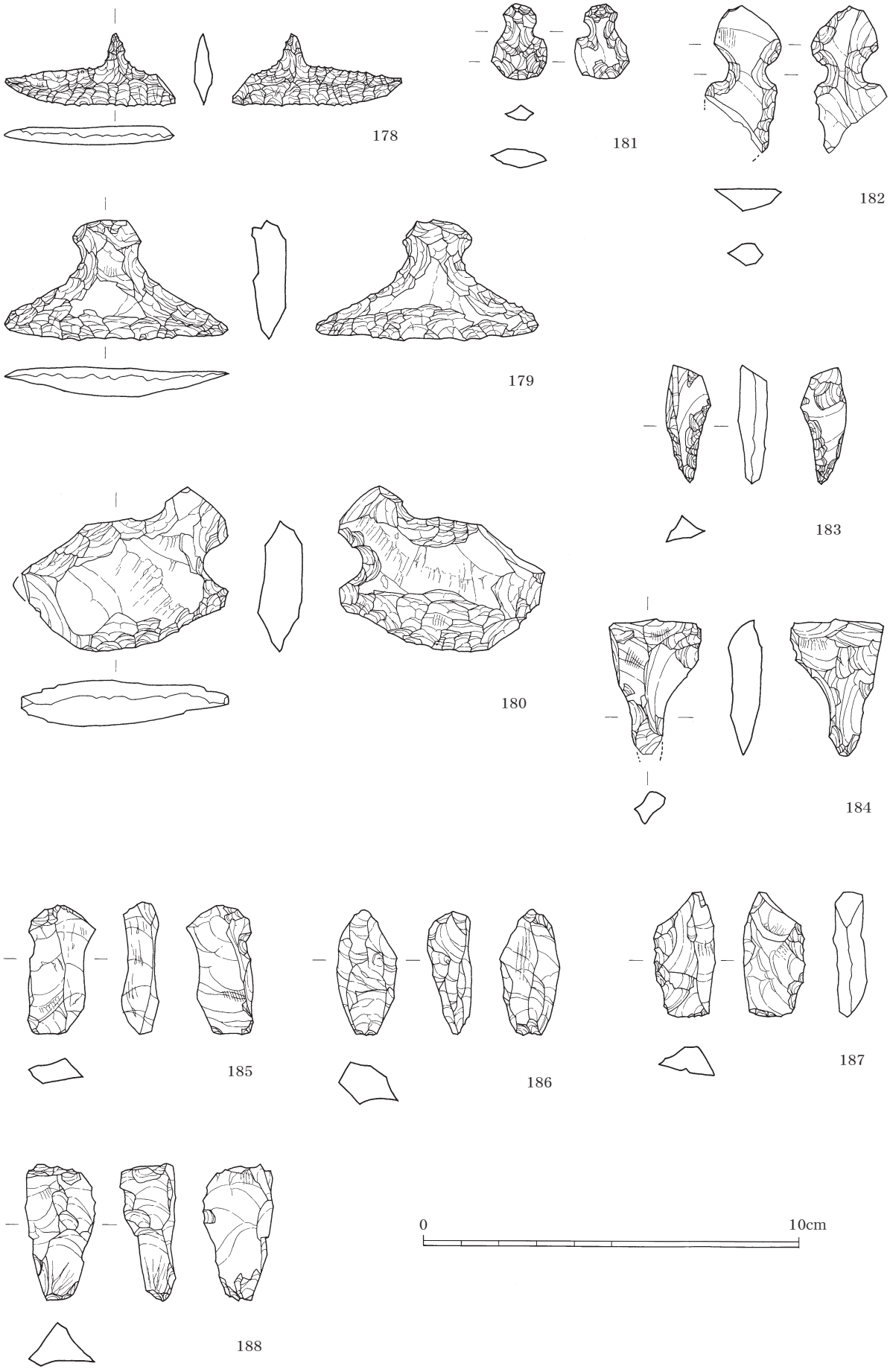
72～92は中型品である。72は基部に抉りがなく側縁が丸味を帯びた形状となる。73は細身で基部の抉りがほとんどない。74～81は抉りが浅い鏃である。74～78は長さが短く正三角形に近い形状の鏃。77や79は主剥離面を大きく残す。82～92は基部の抉りが比較的深く、形状も縦長の三角形となる。91は側縁が丸味を帯びた形状となる。92は側縁が若干抉れた特異な形状となる。

93～100は2.5cmを超える大型品である。93は先端部が丸く基部も抉りがなく形状も整っていない。94は五角形に近い形状となるが、剥離も粗くいびつな形状である。95～100は縦長の三角形となる。95は側縁が丸味を帯び基部の抉りの少ない形状となる。

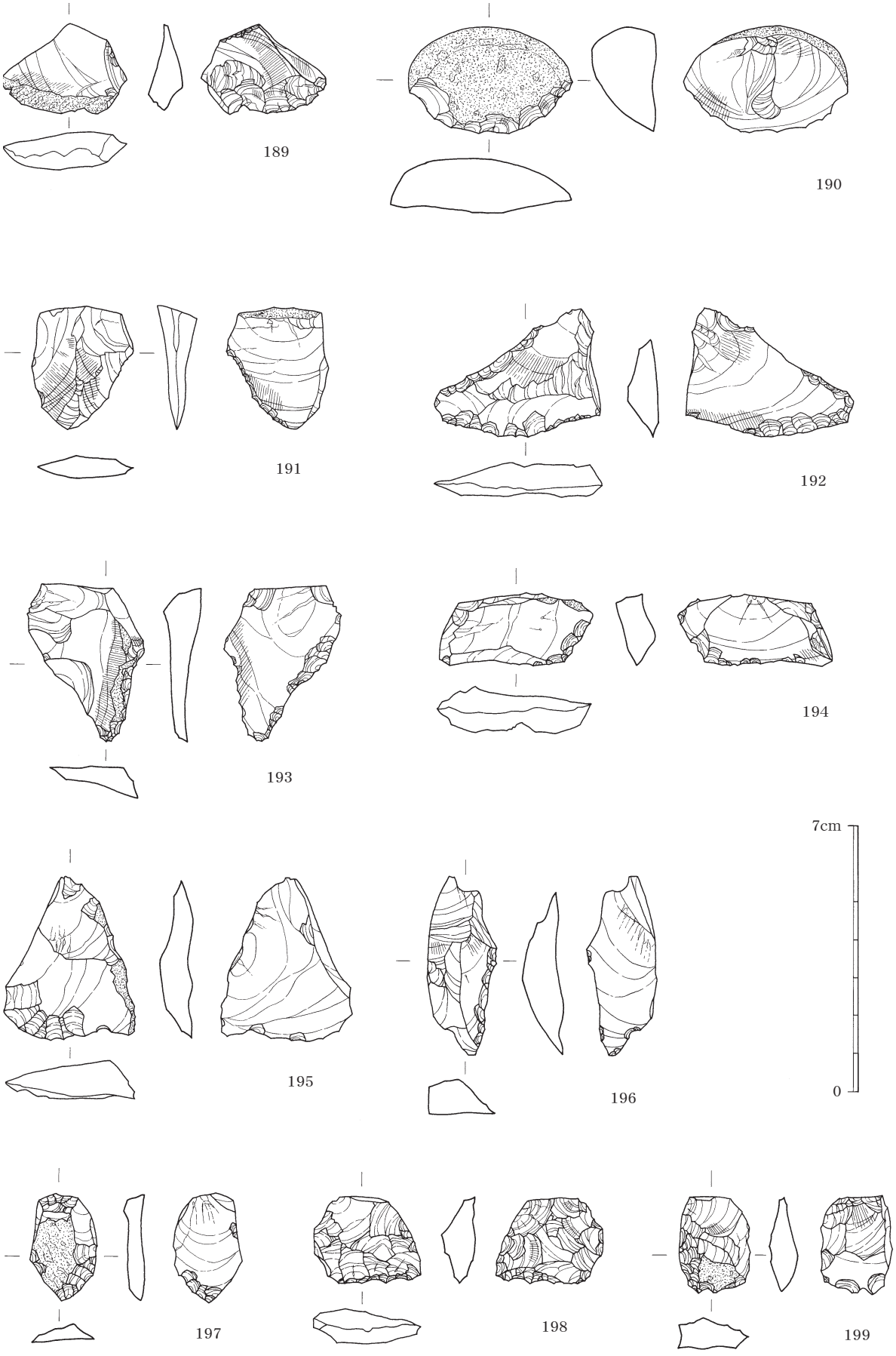
101～143は安山岩製の石鏃である。101～107は長さが1.5cm前後の小型品である。調整が全面に及ばず主剥離面を残すものが多い。108～118は長さが２cmに満たないものである。108は剥片素材の形状を生かし最小限の調整しか行わない。111や112は小型の割に丁寧に作られる。

119～133は中型品である。119～122は基部が平基式となる。121や122は粗い剥離でいびつな形状であり未製品の可能性もある。128は五角形に近い形状である。129は細身で基部の抉りをもたない。130・131は基部の抉りが深い。132は側縁の一部にしか剥離調整を行っていない。

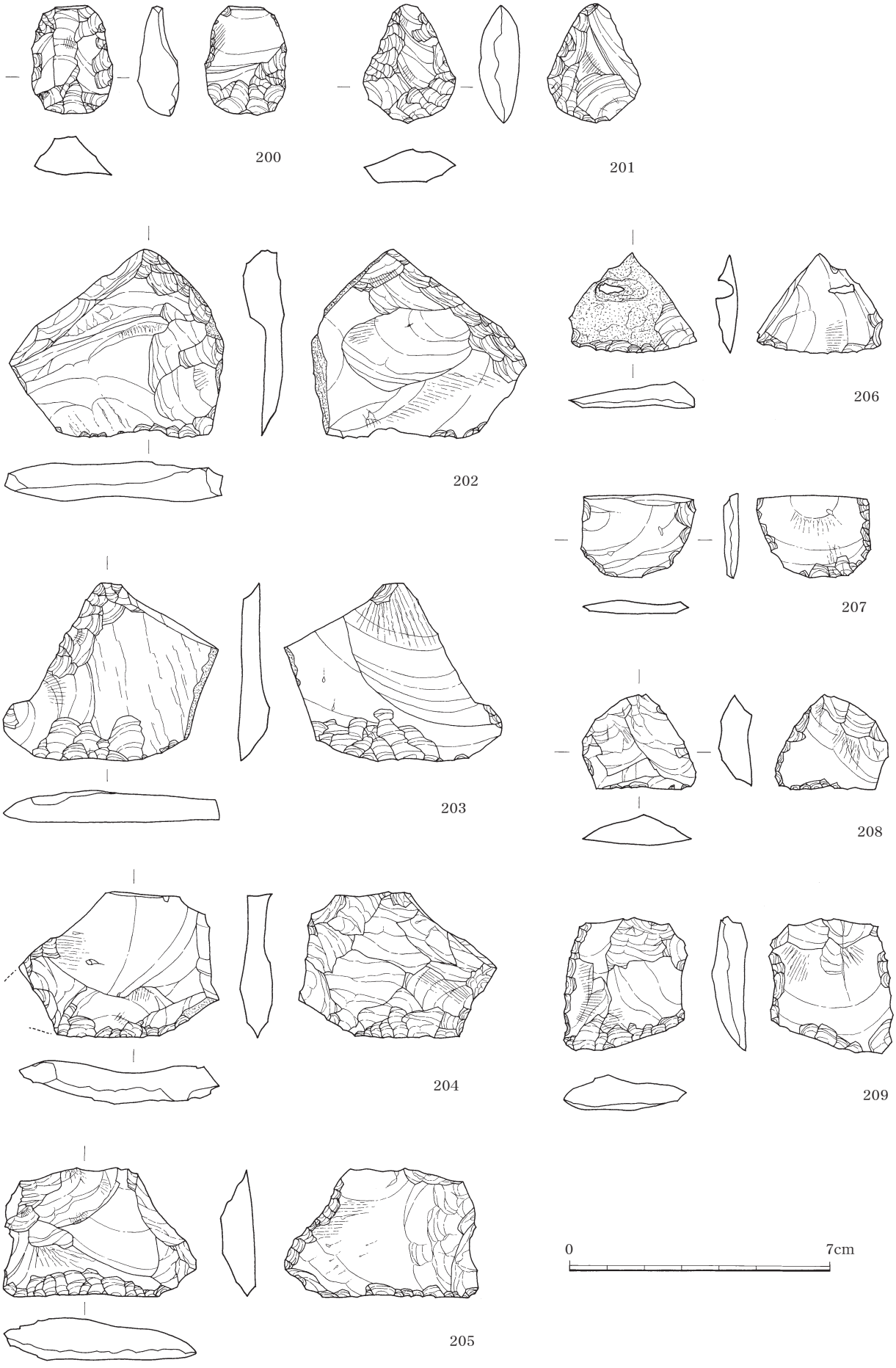
134～143は長さ2.5cmを超える大型品である。形状は縦長の三角形に近い形状となる。135～137は左右対称の丁寧な作りで基部の抉りがほとんどない点で共通し、特に137は薄く丁寧な作りである。表面の風化も進んでいる。142は粗い作りで未製品の可能性もある。



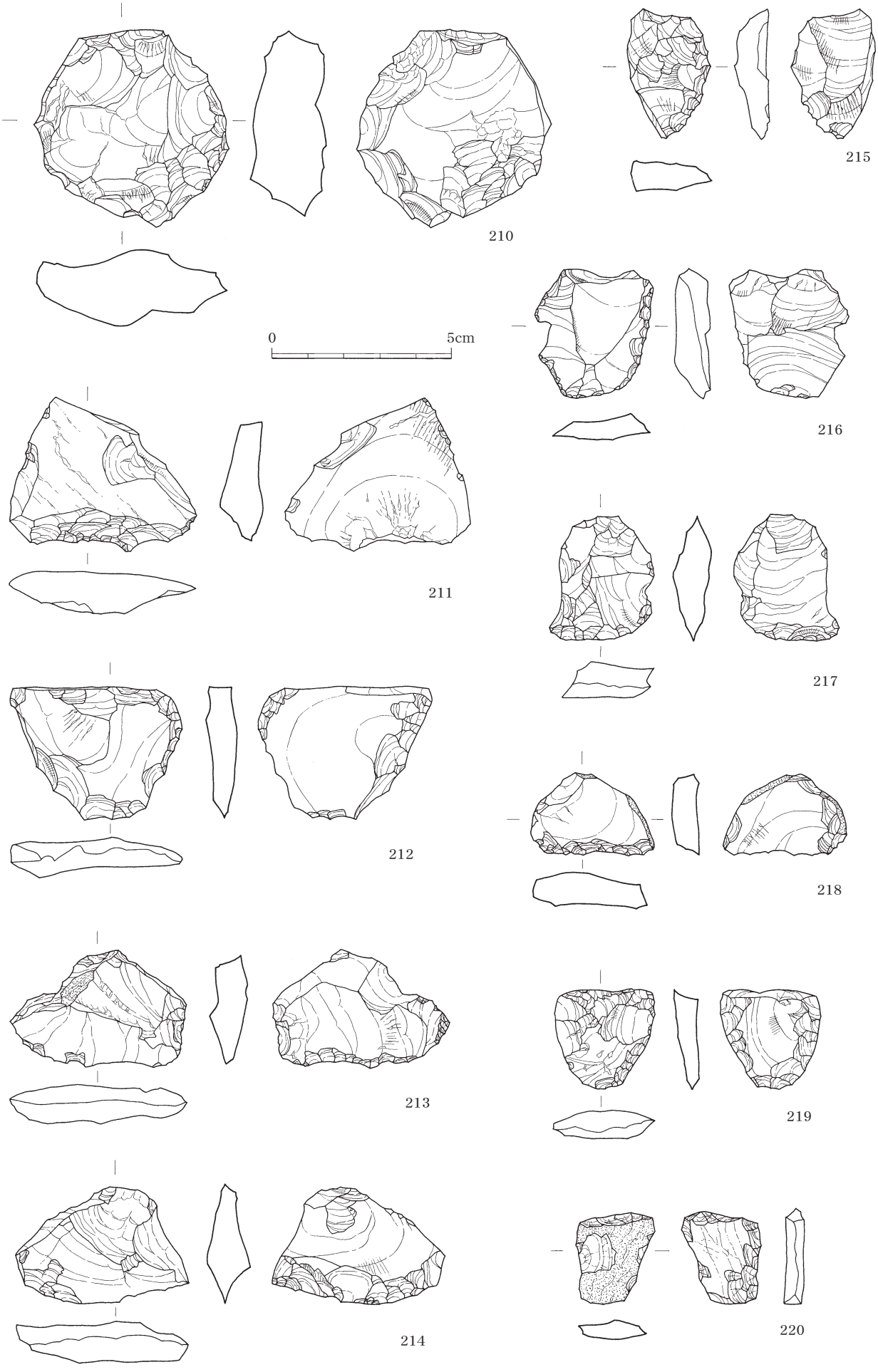
第106図　石器実測図⑩（2/3）



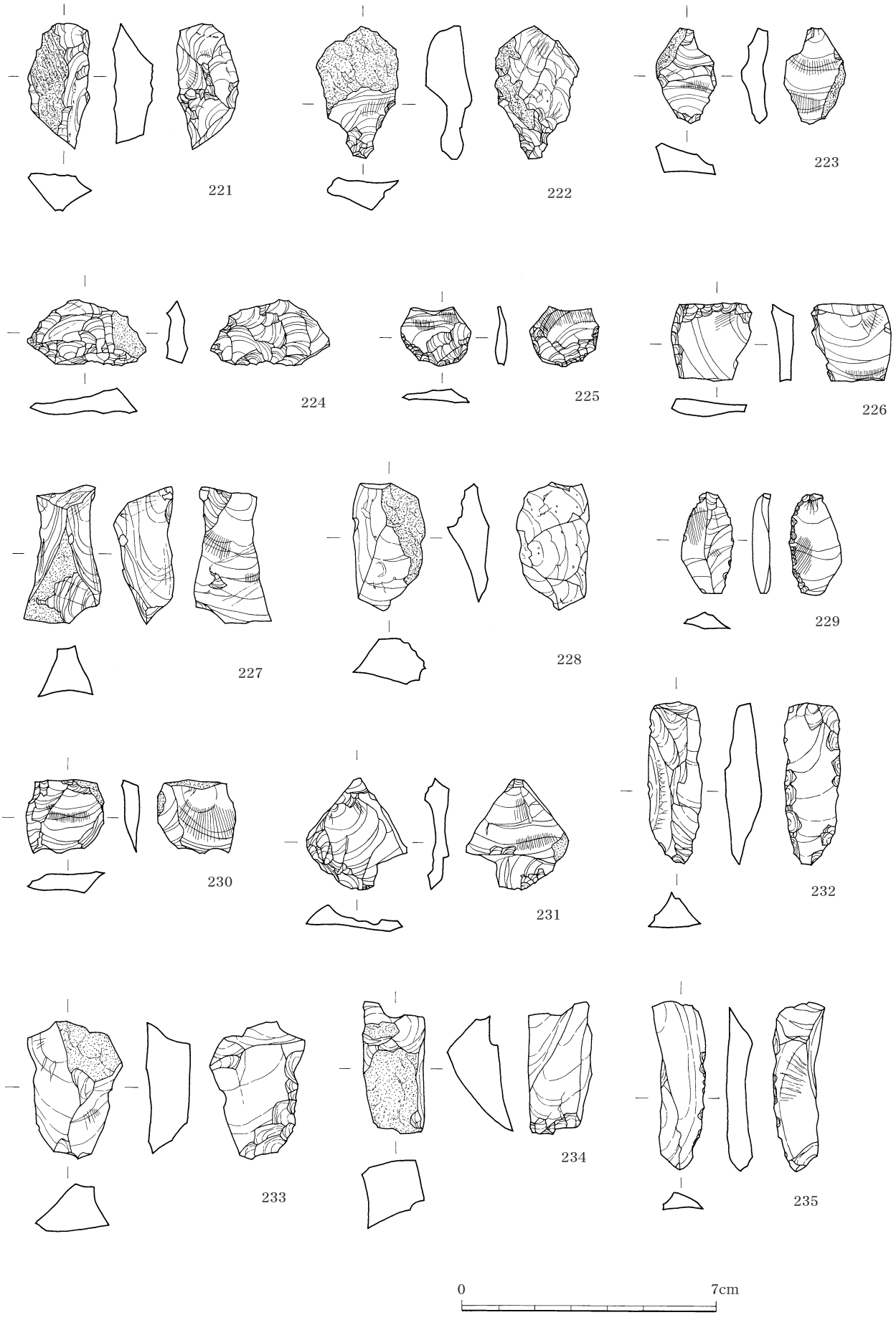
第107図　石器実測図⑪（2/3）



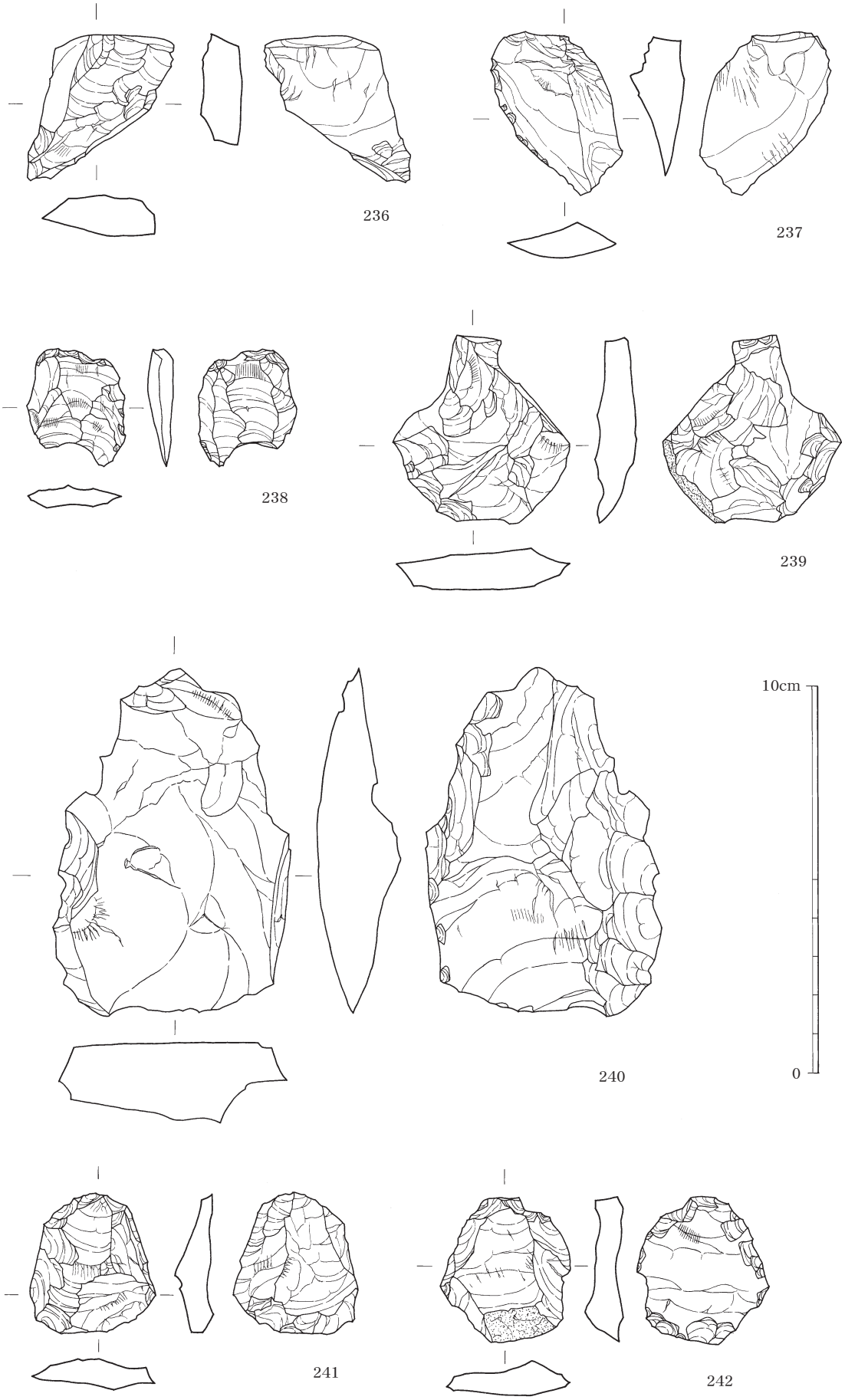
第108図　石器実測図⑫（2/3）



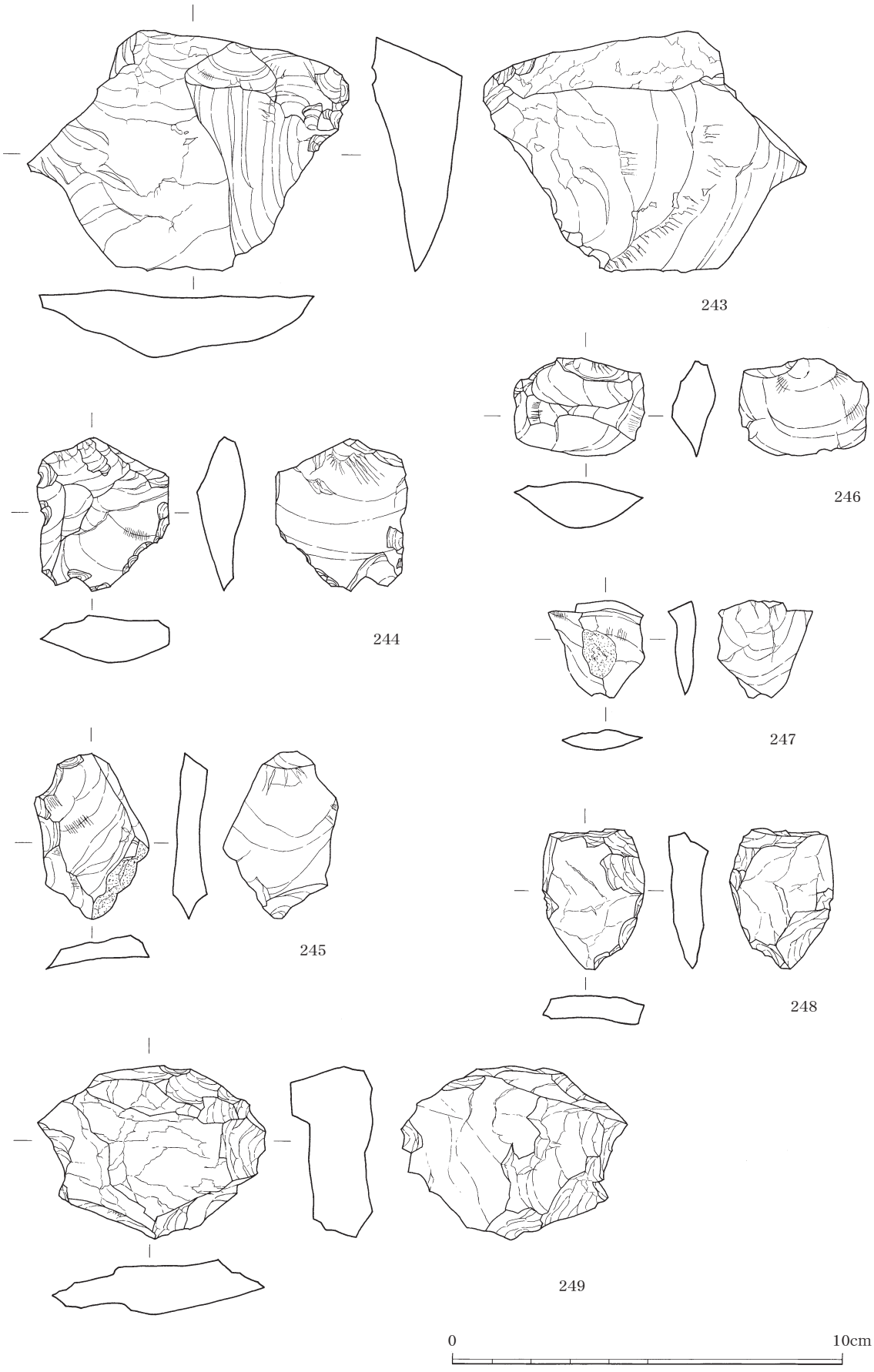
第109図　石器実測図⑬（2/3）



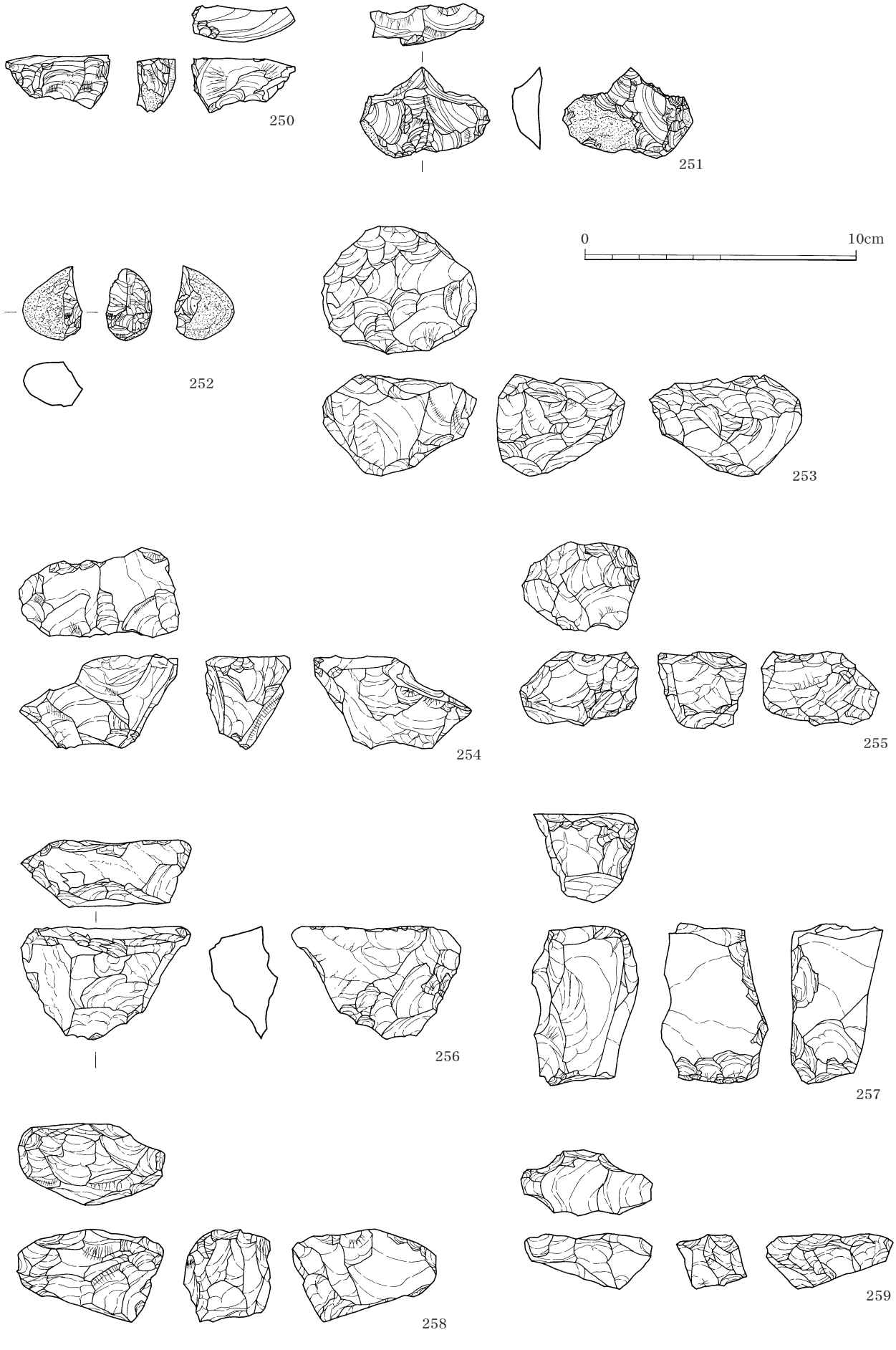
第110図　石器実測図⑭（2/3）



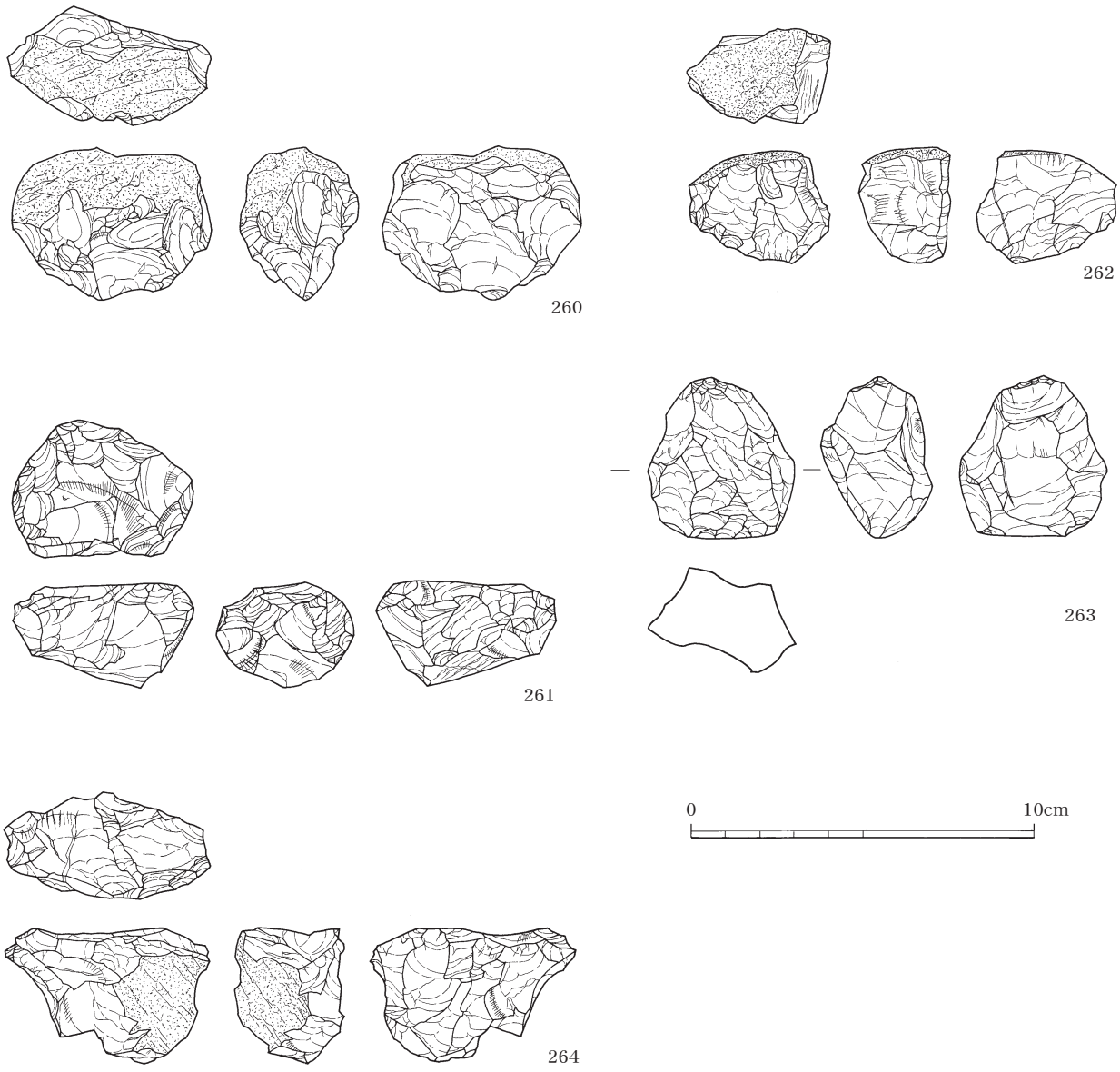
第111図　石器実測図⑮（2/3）



第112図　石器実測図⑯（2/3）



第113図　石器実測図⑰（1/2）

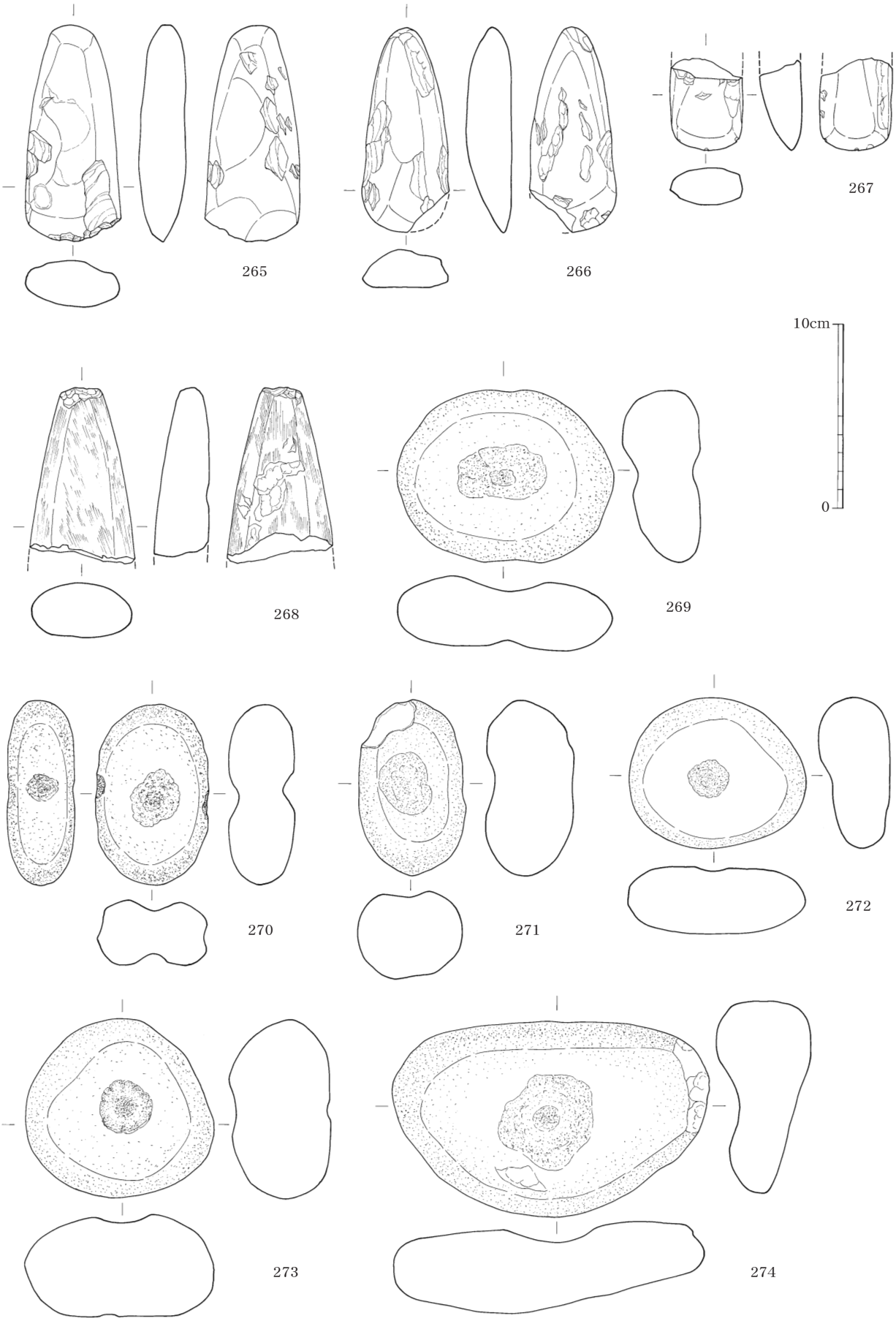


第114図　石器実測図⑱（1/2）

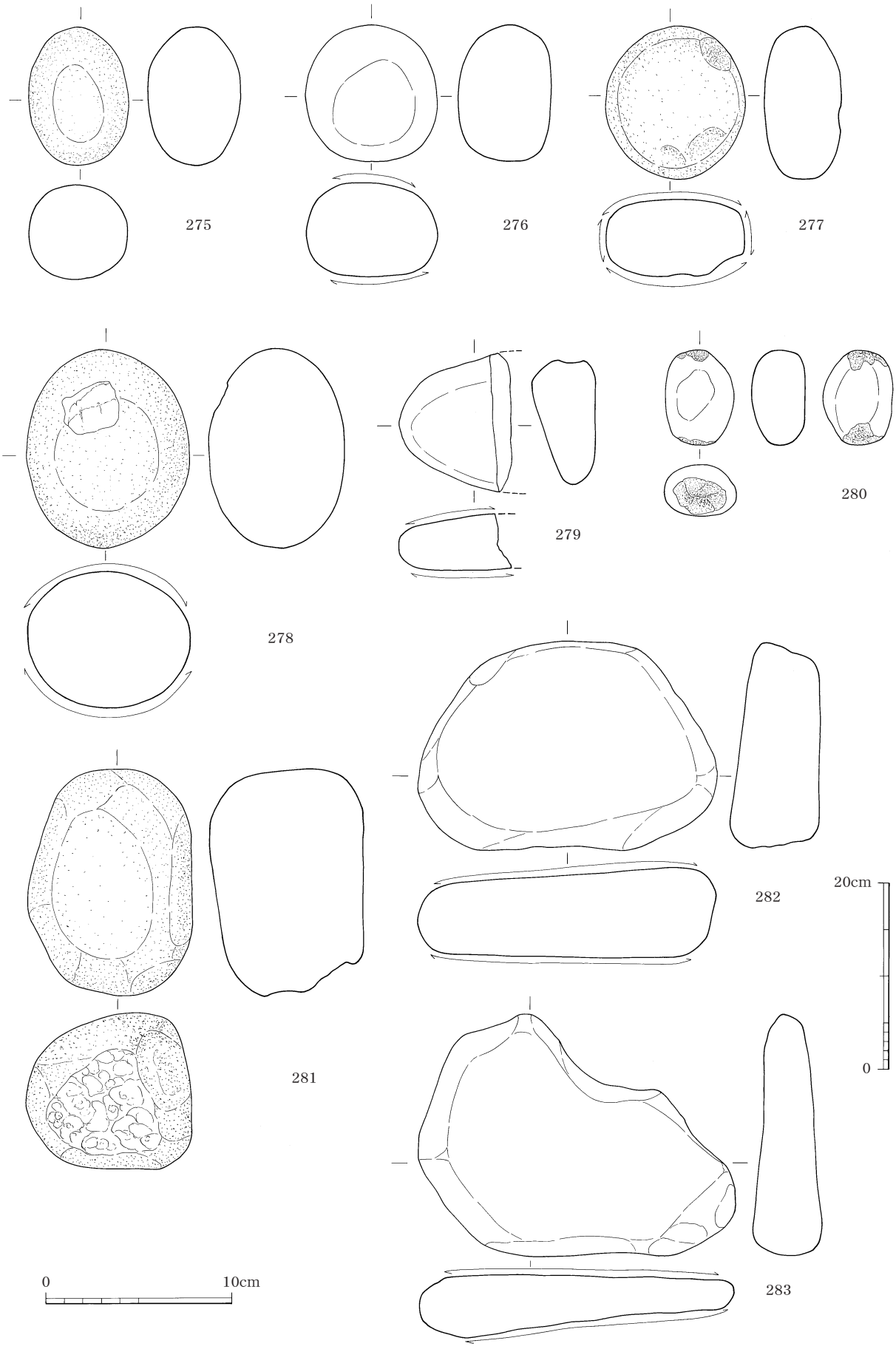
144は珪化木製の鏃である。風化が進んでおり既に珪質ではなくなっている。非常に厚みがあり形状も整っていない。145～147は赤褐色のチャート製石鏃である。３点とも比較的小型である。145は調整が側縁部にしか及んでおらずいびつな形状となる。148は灰色半透明のチャート製石鏃である。149は茶褐色の珪質岩製石鏃。比較的丁寧な作りである。150・151は白色の石英製。

152～177は石鏃の未製品と思われるものを掲載した。152～159は黒色の黒耀石製。159は表面に自然面を大きく残す。石材には白色粒の不純物が多く含まれる。160～162は姫島産黒耀石製。163～176は安山岩製。167や168は剥離調整がかなりの範囲に及んでおり、石鏃ではないかもしれない。175は石錐の可能性もある。177は玄武岩製で石鏃には全く不向きと思われる石材を使用している。

178～180は石匙である。178は黄茶色の珪質岩を使用し、剥離が全面に及んでおり非常に丁寧



第115図　石器実測図⑲（1/3）



第116図　石器実測図⑳（275～281：1/3、282・283：1/6）

に作られる。つまみの形状が抉り部を持たず特異である。179・180は安山岩製。179は比較的整った形状である。180は主剥離面が大きく残る。

181・182はつまみ部をもつ石器である。181は姫島産黒耀石製。横長剥片を使用してつまみ状のものを作り出す。182は安山岩製。石匙のような形状になるのであろうか。183・184は石錐であろう。183は姫島産黒耀石製。側縁部に丁寧な剥離調整が加えられ断面は三角形となる。184は安山岩製。雑な剥離調整しか行っていない。表面の風化が著しい。185～188は楔形石器である。185・186は赤色チャート製、187・188は黄茶色珪質岩製。厚みのある縦長剥片を使用しており先端部につぶれたような剥離が認められる。

189～220はスクレイパーである。189～191は黒色黒耀石製。189は裏面の一側縁にのみ剥離調整を加えて刃部としたもの。190は黒耀石の円礫から得た厚みのある一次剥片に、表面側から剥離調整を加えて刃部としたものである。

192～201は姫島産黒耀石製である。192～196は比較的大型のものである。192は縦長剥片の二側縁に両面から剥離調整を行う。193は二側縁に片面ずつ剥離調整を行う。194は横長剥片に粗い剥離調整を行って刃部としたものである。195や196は剥離調整をあまり行わない。198は調整がほぼ全面に及ぶ。刃部の片側を嘴状に若干伸ばすような形状が特徴的である。200や201は剥離が全側縁に及んでおり整った形状となる。

202～209は安山岩製である。202～205は比較的大型のものである。いずれも素材の形状をあまり変えず側縁部の一部に調整を加えて刃部を作り出している。204は両極剥離が行われる。206～209は比較的小型品である。やはり剥片の側縁に簡単な剥離を加えて刃部としている。208や209は嘴状に刃部の片側を伸ばす形状が特徴的である。

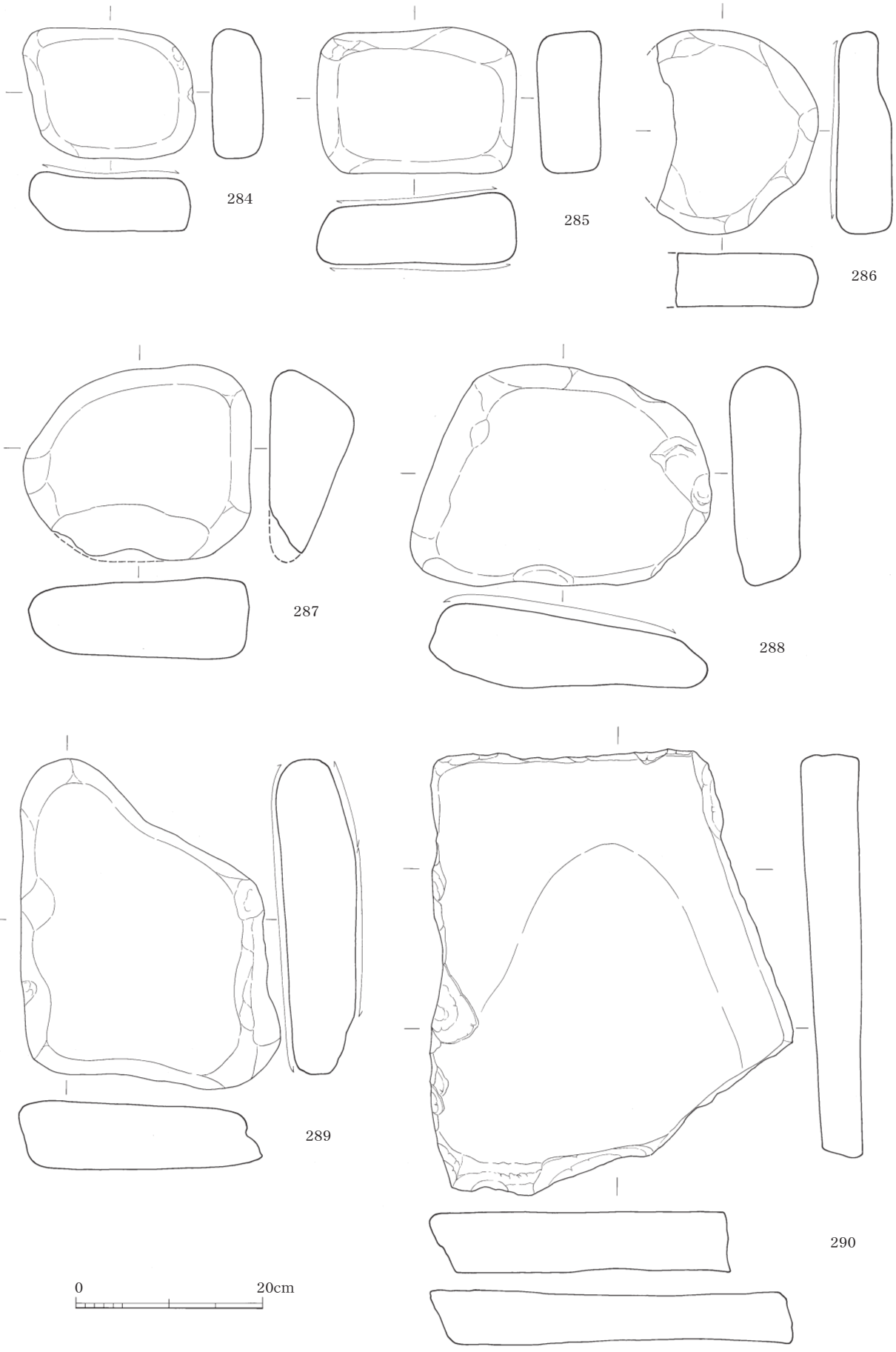
210～216は黄茶色の珪質岩製スクレイパーである。210は厚みのある大型の素材に刃部加工を加えたもので、石核の二次加工品とも思われる。211～214は大きめの剥片の一側縁に剥離調整を加えて刃部としたものである。125・126は小型品。217・218は赤茶色のチャートを使用したスクレイパーである。219は珪化木製。若干風化しているが珪質は保っている。調整はほぼ全側縁に及んでおり整った形状である。220は水晶製スクレイパーである。表面には自然面を大きく残し、剥離は一部両面から行われる。

221～249は剥片類である。221～231は黒色黒耀石製。221は不純物を多く含み風化が著しい。222も不純物を多く含んだ黒耀石を使用している。223は先端部に微細な剥離が認められる。224は広い範囲に剥離が及ぶが刃部等の形成は見られず、何かの未製品かとも思われる。不純物を若干含んだ黒耀石を使用。225や226は側縁に剥離があり何かの未製品の可能性もある。227や228は厚みのある剥片で不純物を含んだ黒耀石を使用する。229は使用による微細剥離が顕著である。230や231も微細剥離がある。

232～236は姫島産黒耀石製。232は縦長剥片の両側縁に剥離が見られる。233は一側縁に粗い剥離調整が見られる。234や235は使用による微細剥離が見られる。

237・238は安山岩製である。どちらも使用による微細剥離が見られる。

239・240は茶褐色の珪質岩を使用する。どちらも粗い剥離調整による整形を意図しているようであり未製品の可能性もある。241は赤茶色のチャート製。242は暗茶褐色の珪質岩製。側縁に使用によると思われる剥離が見られる。243～247は黄茶色の珪質岩を使用する。243は不純物を多



第117図　石器実測図㉑（1/6）

く含み自然面を大きく残す剥片である。244は使用による微細剥離が認められる。

248・249は石英の剥片である。一部に粗い剥離調整が認められる。

250～264は石核である。250～252は黒色黒耀石製。250は不純物が若干含まれる。252は黒耀石の小円礫を打ち欠いたものである。不純物を多く含む。253～261は黄茶色の珪質岩製である。円錐状や角錘状になるものが多いが257は角柱状となる。打面の調整は意識的に行われているが、意図した剥片が得られにくい材質であるため採取された剥片にばらつきがあり、また方向も一定していない。262は青灰色チャート製、263・264は赤色チャート製。

265～268は玄武岩製の磨製石斧である。265は刃部には使用の際の剥離が見られる。266の刃部は片刃に近い形状となる。267は刃部のみの破片である。丁寧に研磨が行われている。268は蛇紋岩製で刃部を欠損する。断面が丸味を帯び基部側が細い形状である。頂部には研磨は行っていない。ほぼ全面に研磨痕が見られる。

269～274は凹石である。全て凝灰岩製。269・272・273は円形に近く、直径10～12cmの同じくらいの大きさの石材を使用する。270・271は楕円形に近い石材を使用し、長さ10cm、幅6cmと大きさが類似する。271・272は一面使用、269・273は二面使用、270は三面使用。274は中世の遺構から出土したものであり中世期に属する可能性もある。大きさも17cmと他と比べて大きい。一面使用。

275～279は磨石である。全て凝灰岩製。277は使用が顕著で明瞭な稜が形成される。表面・裏面及び側面を全面使用する。275・276・278・279はそれほど顕著な使用痕は見られない。

280・281は敲石である。280は石英円礫を使用しており、両頂部が顕著に潰れている。281は凝灰岩製で縦長の円礫の一方の頂部が潰れたように剥離する。

282～290は台石である。全て凝灰岩製。282は両面を使用しており石の表面が円滑になる。283は2号竪穴住居跡出土。使用のために両面とも若干凹んでいる。284～287はあまり顕著な使用痕跡はないが、石の形状と表面の円滑さから台石の可能性があると考えて掲載した。288・289は2号集石出土。表面が平滑になるが顕著な使用痕跡はない。290は大型の扁平石の側縁を打ち欠いて形をととのえており、表面は使用のためわずかに凹んでいる。

4）中・近世の遺構と遺物（第118～120図）

上伊良原榎遺跡では、中世を中心に一部近世まで降る時期の遺構・遺物が数多く確認された。遺構はⅠ区で多く検出され、ここでは掘立柱建物跡や土坑、溝など生活関連の遺構が多い。Ⅱ区では北側を中心に墓が数基まとまって検出されており、墓域としてのまとまりが見られる。Ⅲ区では南側に遺構の集中が見られる。

以下、個々の遺構・遺物について説明を行う。

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は合計で6棟検出した。周囲には同規模のピットが無数にあるため建物の把握は困難を極めた。報告した建物跡も今一つ自信が持てないものもある。また、他にも多くの建物が存在したと思われ、現地での検討に多くの時間を費やしたが、後世の耕作地造成によって削平されている事もあって把握することが出来なかった。

１号掘立柱建物跡（図版31、第121図）

Ⅰ区南東で検出した遺構である。１号土坑と重複する位置にある。棟方向をＮ－89°－Ｗとほぼ東西方向を向く。桁行３間、梁行２間の側柱建物である。桁間は北側、南側とも240ｃｍ間隔でほぼ等間隔に配置されるが、Ｐ９・P10は柱筋から南側にはずれた位置にある。梁間は西側に関してはＰ５が多少南寄りにずれるものの、ほぼ等間隔を保っているが、東側はＰ６が南に寄った位置にあり、柱間もＰ４－Ｐ６間が270ｃｍ、Ｐ６－P10間が210ｃｍとなる。柱穴の大きさは径18～40cm、深さ20～40cmとばらつきがある。

２号掘立柱建物跡（図版31、第121図）

Ⅰ区南西で検出した遺構である。周辺には多数のピットがあり、そのような状況の中で建物を推定したため規模や構造に今一つ自信が持てない。また本来は数棟の建物跡が重複した状況とも思われるが建物を推定するまでには至っていない。

棟方向はＮ－30°－Ｗで北西－南東方向にとり、桁行は北側で５間、南側で４間、梁行は２間の側柱建物である。桁間は、南側はP12－P13間が150ｃｍとなる以外は各柱間とも180ｃｍ間隔で配置されるが、北側はＰ１－Ｐ２間が90cm、Ｐ２－Ｐ３間とＰ３－Ｐ４間が180cm、Ｐ４－Ｐ５間が135cm、Ｐ５－Ｐ６間が105ｃｍとばらつきが大きい。梁間は、東側は210ｃｍで等間隔に配置されるが、西側はＰ１－Ｐ７間が225cm、Ｐ７－Ｐ９間が195ｃｍとなり、Ｐ７が大きく南側に寄った位置にある。柱穴の大きさは径20～50cm、深さ20～55cmと差が大きい。

３号掘立柱建物跡（図版31、第123図）

Ⅰ区南側で検出した遺構である。周辺には多数のピットがある中で推定した建物跡であり配置等に不安が残る。

棟方向はＮ－５°－Ｅでほぼ南北方向にとり、桁行は西側で4間、東側で5間、梁行は北側で３間、南側で１間となる側柱建物である。柱間の間隔も規則性がなく不安定な構造である。柱穴の大きさは径20～50cm、深さ20～40cmを測る。

４号掘立柱建物跡（図版32、第123図）

Ⅰ区南側で検出した遺構である。周辺には多数のピットがある中で推定した建物跡であり配置等に不安が残る。

棟方向をＮ－12°－Ｅにとる南北棟で、桁行は西側で４間、東側で４間、梁行は北側で２間、南側で３間となる側柱建物である。南東側は１間×２間規模で南北に長い縁となるようである。またＰ１－Ｐ３間には布掘り状の溝がある。桁間は北側の２間は210cm間隔、南側の２間は180cm間隔になる。梁間は東側が210ｃｍ、西側が270ｃｍとなり、南側のＰ５－P10間は縁のため二等分されて105cm等間隔となる。柱穴の大きさは径30～60cm、深さは20～50cm。深さにばらつきが見られるのは西側が後世の造成により削平を受けているためである。

出土遺物（第122図）

１は土師器皿である。体部は緩やかに外反し、底部外面に糸切り痕が残る。２は土師器坏である。底部は糸切りによる平底であるが、口縁部にかけて丸みをもつ。

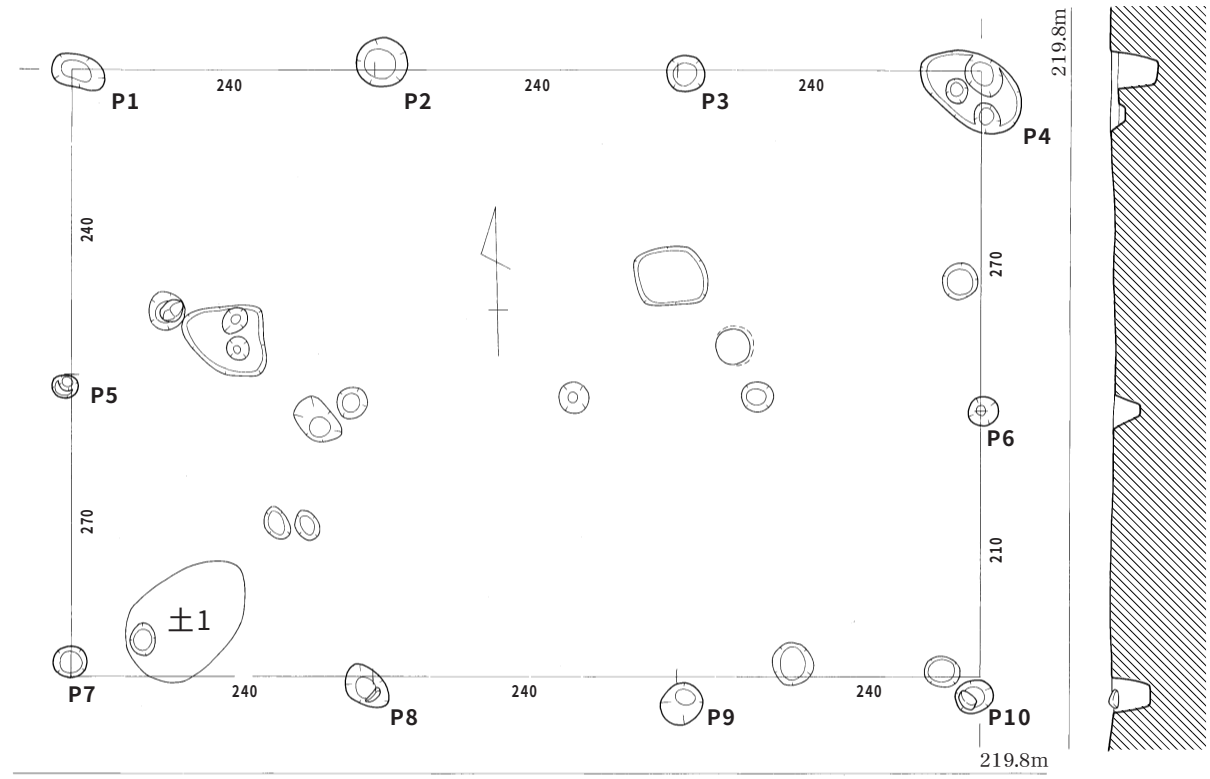
X+625
X+500
X+480
X+460
X+440
X+420
Y-4 280
Y-4 300
Y-4 320
219m
218m
217m
216m
220m
不整形ピット群
溝1
溝2
溝3
溝4
建1
建2
建3
建4
建5
±1
±2
±3
±4
±5
±6
±7
±8
±9
±10
±11
±12
±13
±14
±15
±16
±17
±18
±19
±20
±21
±22
±23
±24
±25
±26
±27
±28
P361
P362
0
20m

第118 図　Ⅰ区遺構配置図（1/300）

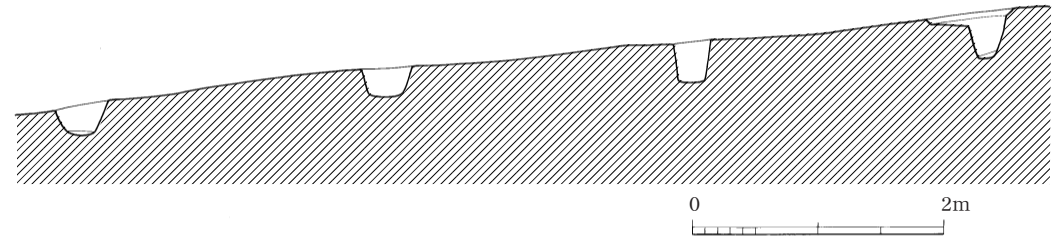
X+62 400
X+62 380
X+62 360
X+62 340
Y-4 300
Y-4 320
Y-4 340
222m
221m
220m
217m
218m
溝5
溝6
土54
土56
土60
土61
土62
土65
土23
土63
土64
土66
土67
土68
土69
土70
土71
土72
土73
土74
土75
0
10m

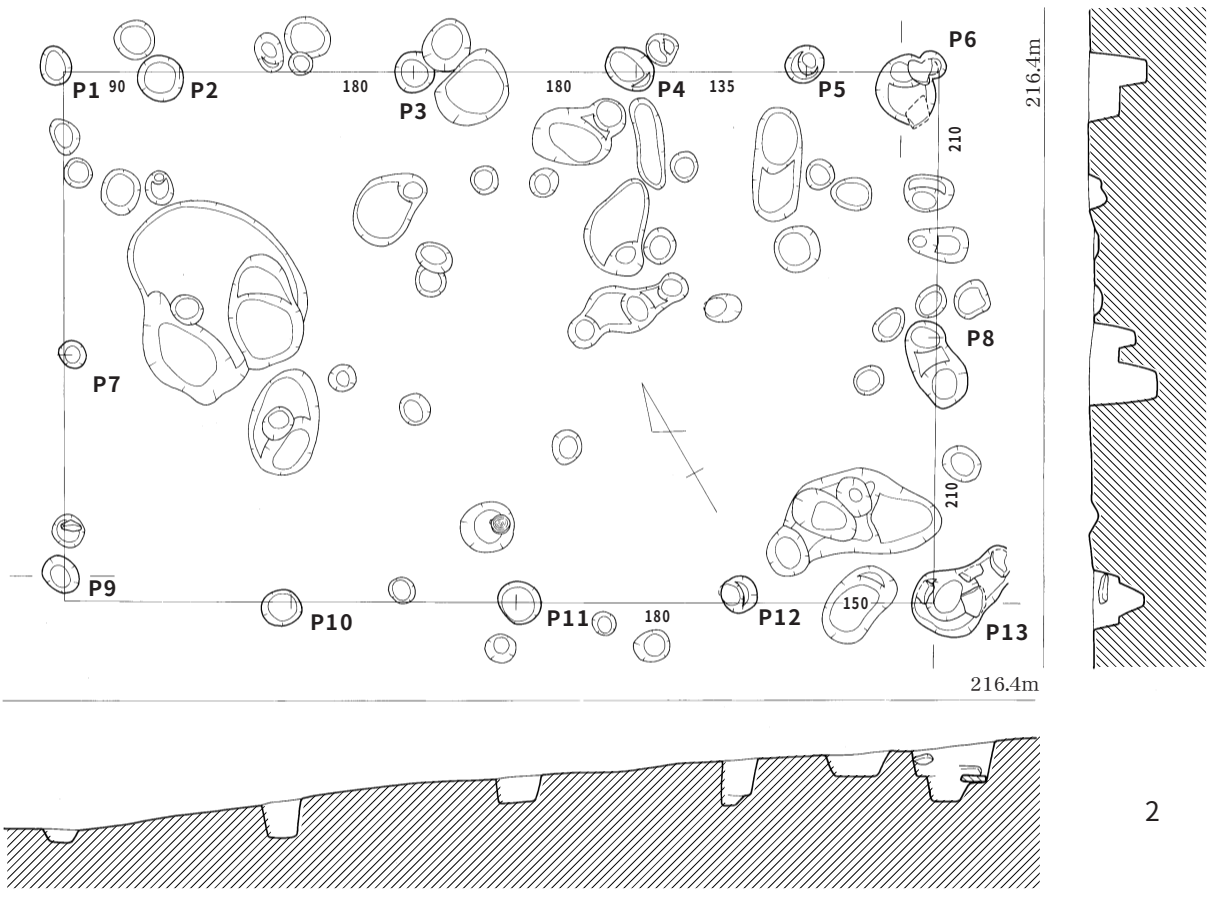
第119 図　Ⅱ区遺構配置図（1/300）

第120 図　Ⅲ区遺構配置図（1/300）



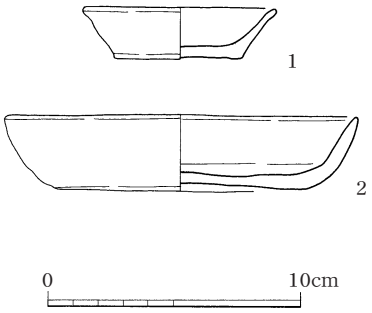
1





2

第121図　1・2号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第122図　4号掘立柱建物跡
出土土器実測図（1/3）

5号掘立柱建物跡（図版32、第124図）

Ⅰ区南側で検出した遺構である。棟方向はN－78°－Wで東西方向にとり、桁行2間、梁行1間の側柱建物である。柱間はかなり広く、桁間の北側は300cmで等間隔、南側はP4－P5間が250cm、P5－P6間が350cmでP5が西に寄った位置にある。梁間は350cm。柱穴の大きさは径20～40cm、深さ20～40cm。

6号掘立柱建物跡（図版32、第124図）

Ⅲ区北側で検出した小型の建物跡である。周辺には中世の遺構はほとんどなく、建物としての認識が問題なく行えた遺構である。棟方向はN－5°－Wで南北方向にとり、桁行2間、梁行2間の側柱建物である。桁間は東側のP1－P2間が245cm、P2－P3間が205cmとP2が南側に寄った位置にある。西側は225cmで等間隔である。梁行は北側・南側とも105cmで等間隔に配置される。柱穴の大きさは径15～20cm、深さ20～30cmと規模が揃う。

墓

墓は合計で7基検出した。これらは全て隅丸長方形を呈し、副葬品の存在から墓と判断したものである。従って、副葬品のない同規模の土坑については、墓の可能性も考えられたが、土坑として報告を行う。

15号土坑（図版33、第125図）

Ⅰ区南側で検出した遺構である。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方位を南北に向ける。長軸158cm、短軸93cm、深さ25cm。覆土は灰褐色粘質土からなる。

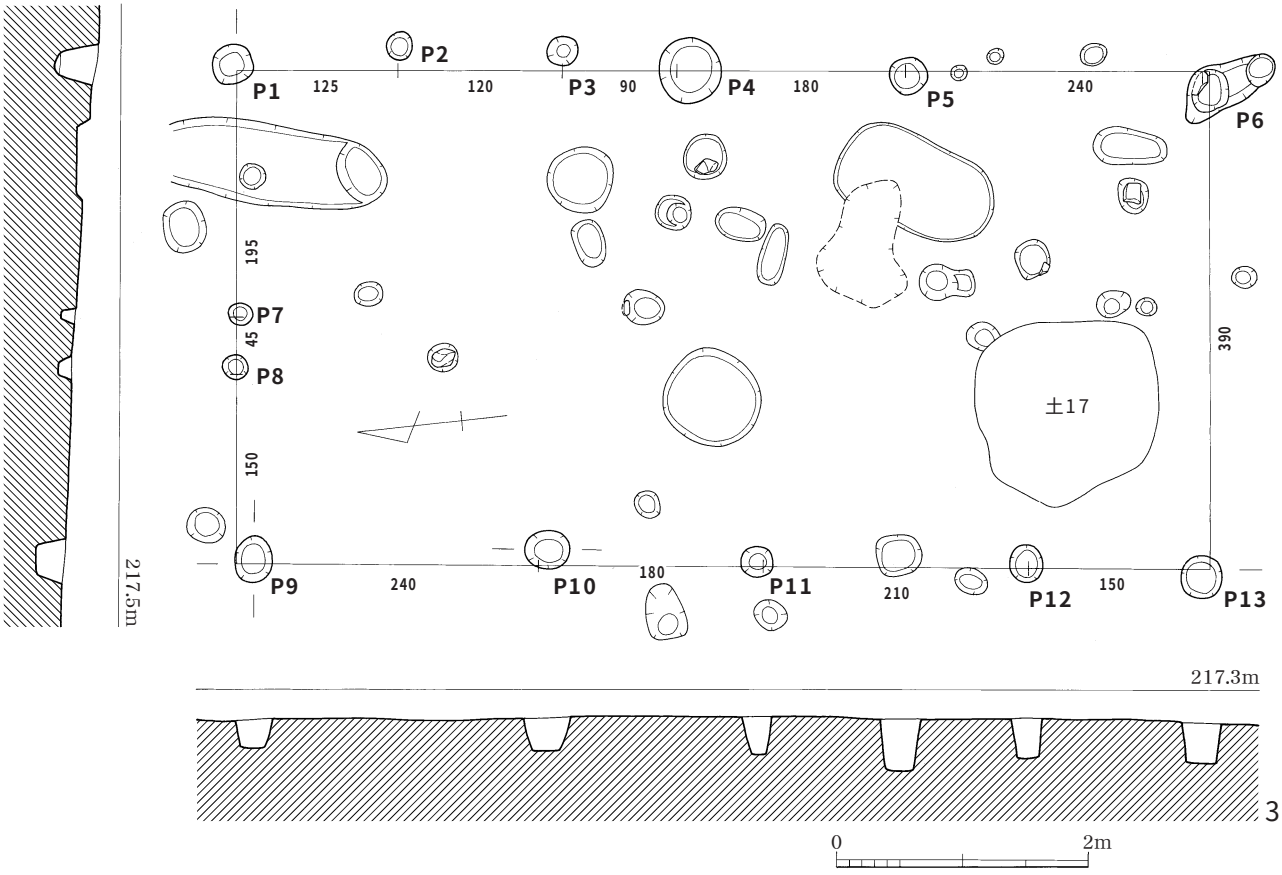
墓坑内からは土師器小皿4点、瓦器椀2点、第171図31の鉄小刀1点が副葬品として出土した。これらのうち第126図7のみは底面から10cm程浮いた状態で、破砕して出土した。他は墓坑の中央から北西寄りの位置でまとまって出土した。

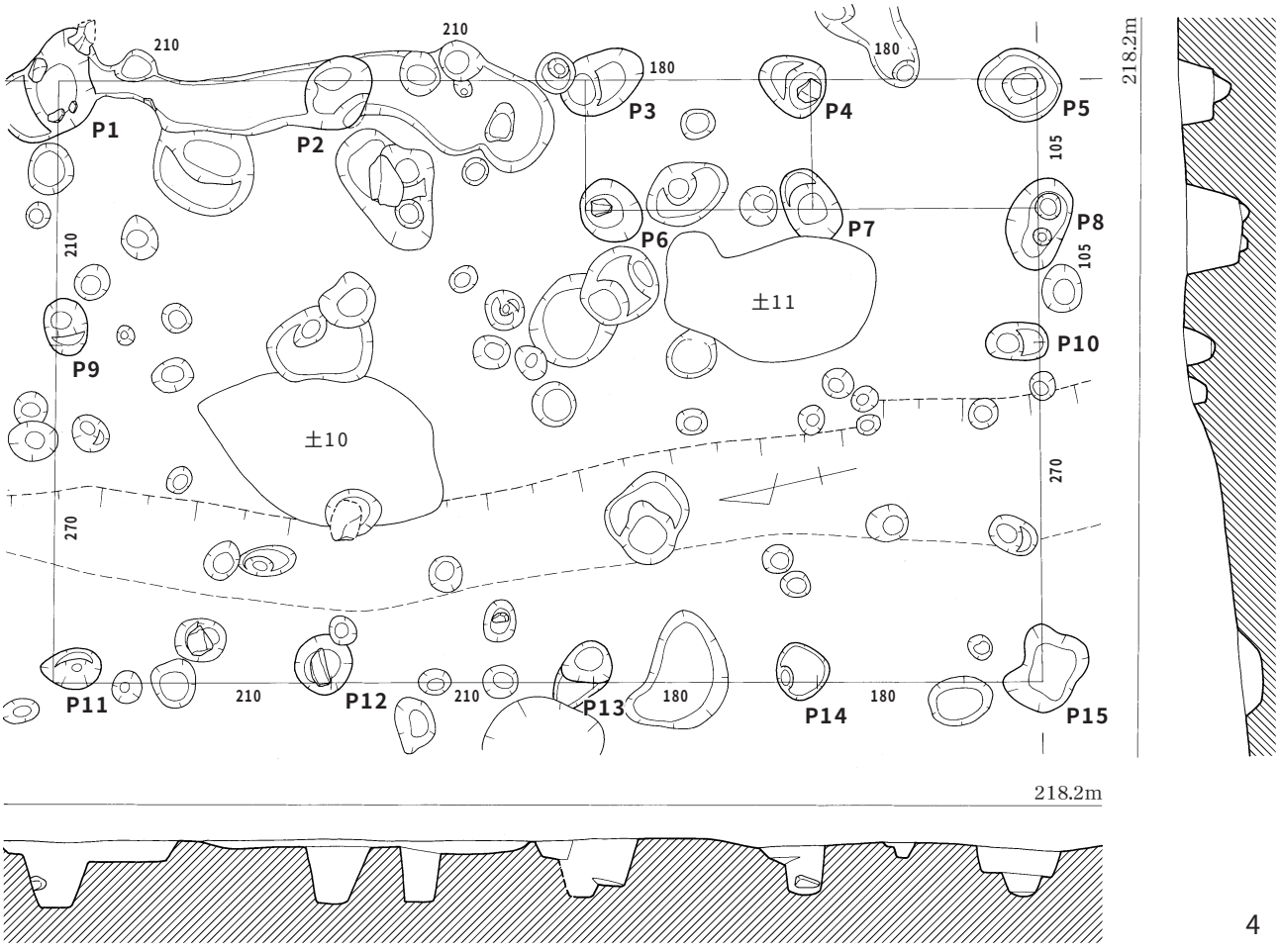
出土遺物（図版59、第126図）

3～6は土師器皿である。いずれも器高が低く、糸切り底である。このうち4～6には板目の圧痕が残る。7・8は瓦器椀である。7は焼成が甘く軟質であるため、磨滅して調整は不明瞭である。高台は断面三角形を呈する。内外とも重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。8は焼成が良く須恵質で、内面は粗いミガキ、外面は指オサエの後に粗くミガキを施す。高台は断面三角形を呈するがかなり退化しており、底面には板目の痕跡がみられる。外面には重ね焼きの痕跡が残り、さらに鉄小刀に接していた部分には鉄錆が付着する。

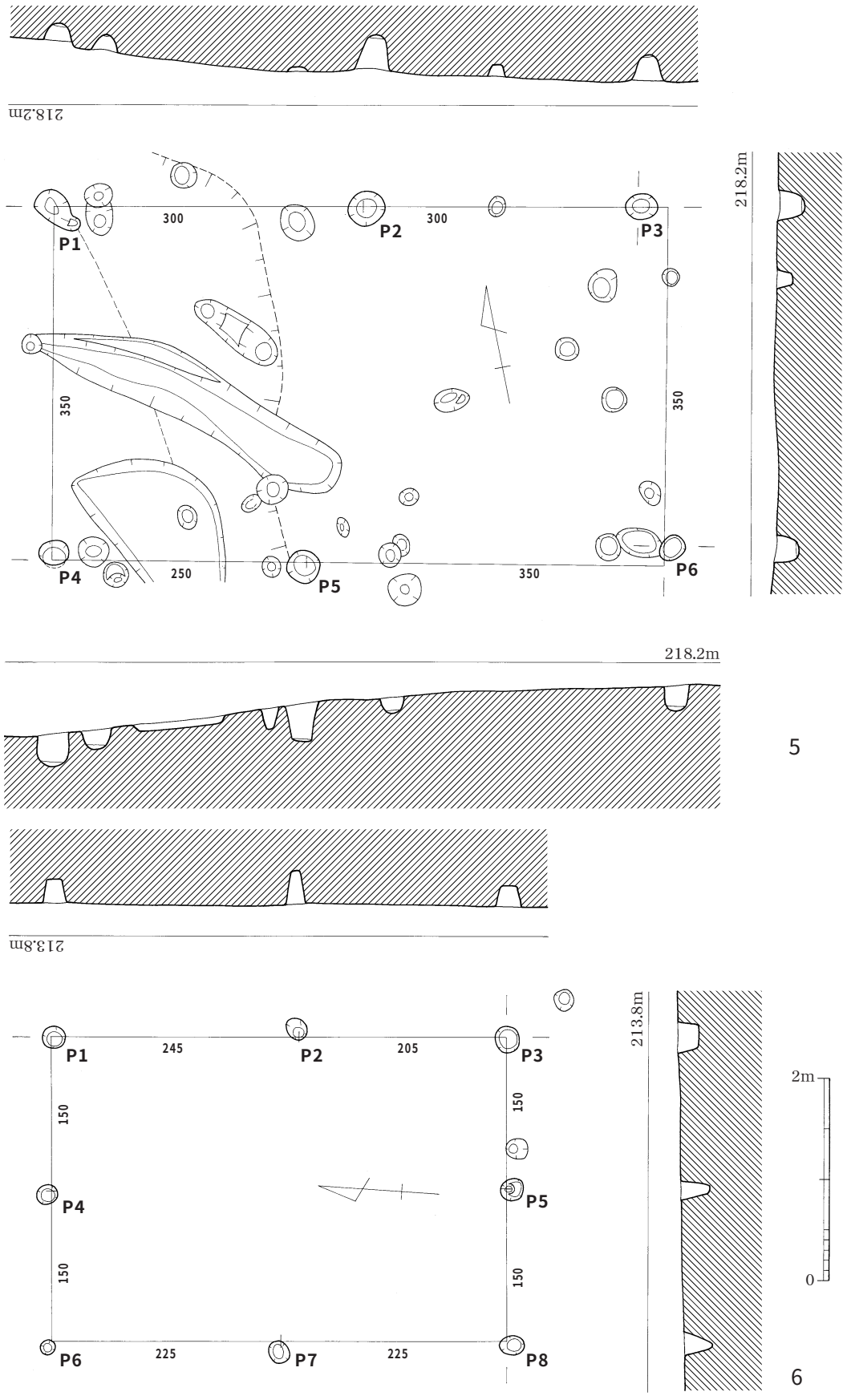
26号土坑（図版33、第125図）

Ⅰ区西端で検出した遺構である。南西側を後世の削平により失うが、隅丸長方形に復元される。主軸方位を南北に向け、長軸123cm、短軸67cm、深さ25cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。





第123図　3・4号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第124図　5・6号掘立柱建物跡実測図（1/60）

墓坑内からは東壁沿いの床面直上から若干浮いた位置で、主軸方位と向きを揃えて第171図32の鉄小刀１点が出土した。他に南壁際で数個の礫が出土した。

31号土坑（図版33、第125図）

Ⅲ区南側で検出した遺構である。上層を覆う灰褐色土の包含層掘削中に和鏡が出土し、その後の遺構面精査の結果土坑を把握したものである。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方位を東西に向ける。長軸125cm、短軸90cm、床面は西側が若干高く、深さは西側で10cm、東側で18cmを測る。覆土は暗黄灰褐色土の単一層からなる。

墓坑内からは、北壁沿いの中央から西に少し寄った位置で第173図１の青銅製倭鏡が１点、鏡面を土坑内側に向け床面直上に立位の状態で出土した。

62号土坑（図版34、第127図）

Ⅱ区中央付近で検出した遺構である。平面形は不整形を呈し、長軸290cm、短軸250cmを測る。本来の墓坑の形状は検出面から20cm程掘り下げた時点で確認され、平面形は隅丸長方形で主軸方位を南北にとり、長軸230cm、短軸110cm、深さは50cmを測る。壁の立ち上がりは南側を除いて急角度で立ち上がっている。

土層観察によると、墓坑内はにぶい灰褐色土で、ほぼ垂直に立ち上がることから本来の棺の位置を表しているものと思われる。第３層や第４層は裏込め土であろう。

墓坑内からは、中央付近から瓦器椀１点、中央東寄りの位置で第171図30の鉄製弓削刀子１点と第172図38の鉄小刀１点、北端に近い位置で青磁碗１点が出土した。青磁碗は床面直上だが、他の３点は床面から若干浮いた位置にある。

出土遺物（図版59、126図）

９は瓦器椀の完形品である。焼成は良好で、外面に重ね焼きの痕跡が残る。外面下半は指オサエ、上半はヨコナデを行い、横方向の粗いミガキで仕上げる。内面はヨコナデで、横方向の粗いミガキで仕上げる。高台は退化して断面三角形を呈し、底面に板目の痕跡がみられる。10は龍泉窯系青磁碗の完形品である。内外とも素文であるが、見込みと口縁部に沈線状の筋が入り、貫入がみられる。畳付きから高台内にかけては露胎である。釉調には色斑が見られる。腰部の丸みが強いため、安定感がある。

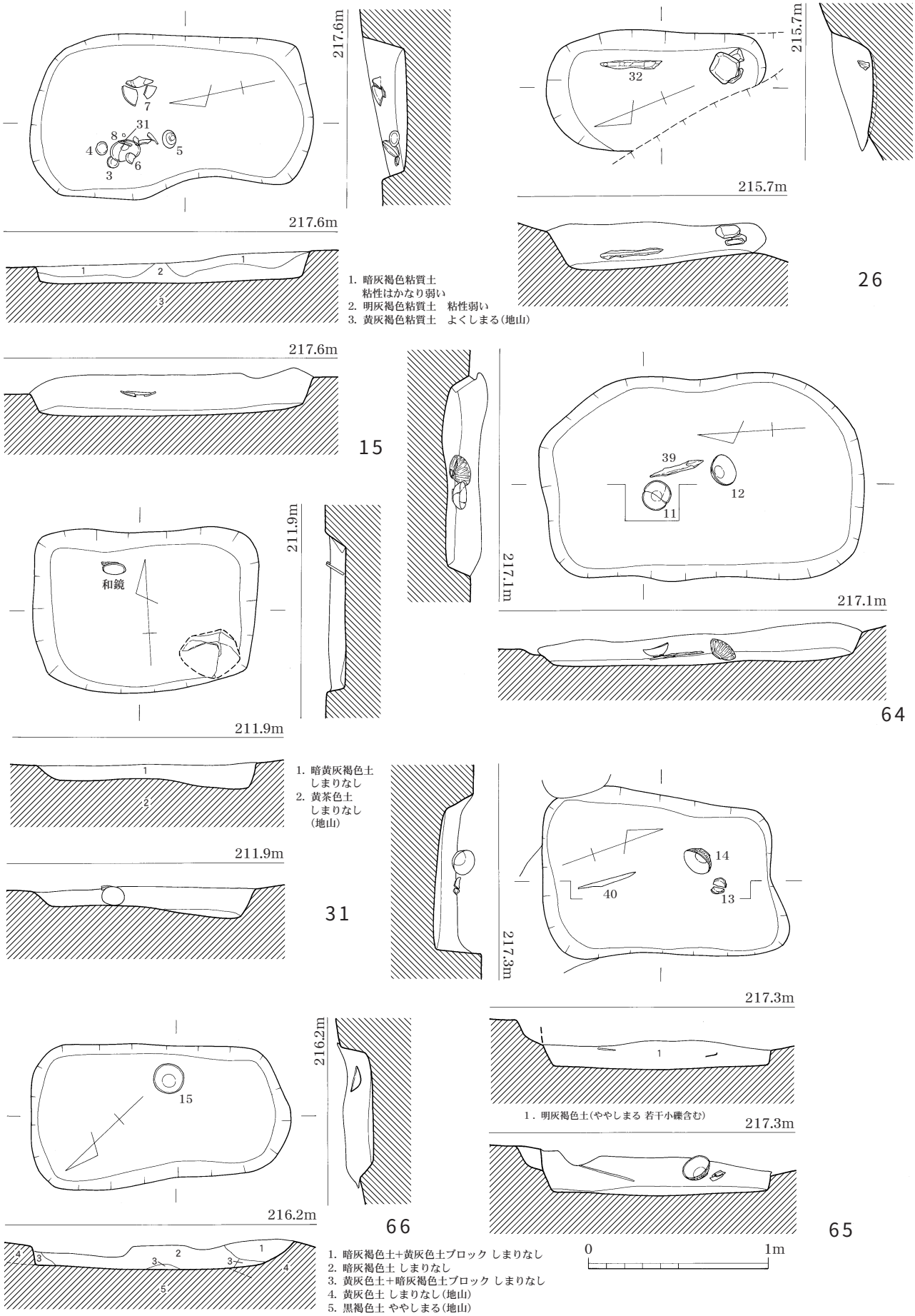
64号土坑（図版34、第125図）

Ⅱ区北西側で検出した遺構である。平面形は東壁が若干膨らんだ形状となるが、ほぼ隅丸長方形を呈し、主軸方位を南北に向ける。長軸180cm、短軸115cm、深さは20cmを測る。

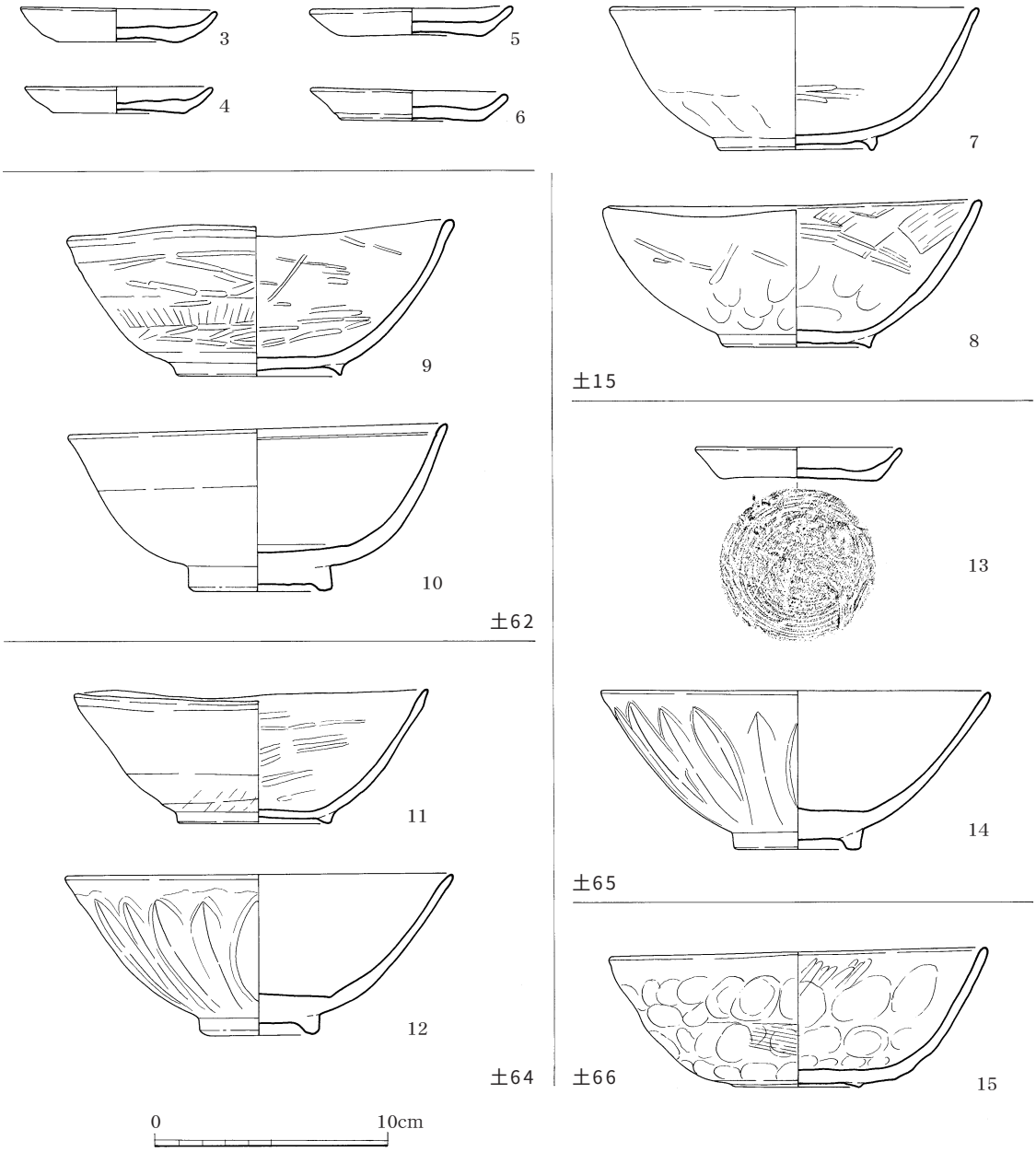
土坑内からは中央付近の床面直上からわずかに浮いた位置で瓦器椀1点、青磁碗１点、第172図39の鉄小刀１点がまとまって出土した。

出土遺物（図版59、第126図）

11は瓦器椀の完形品である。若干ひずみが認められるものの、焼成は非常に良く須恵質で、内外に重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。外面下半は型押しによる整形で上半はヨコナデにより仕上げる。内面はヨコナデの後に横方向の粗いミガキを施す。高台は断面三角形を呈する。12は龍泉窯



第125図　15・26・31・64～66号土坑実測図（1/30）



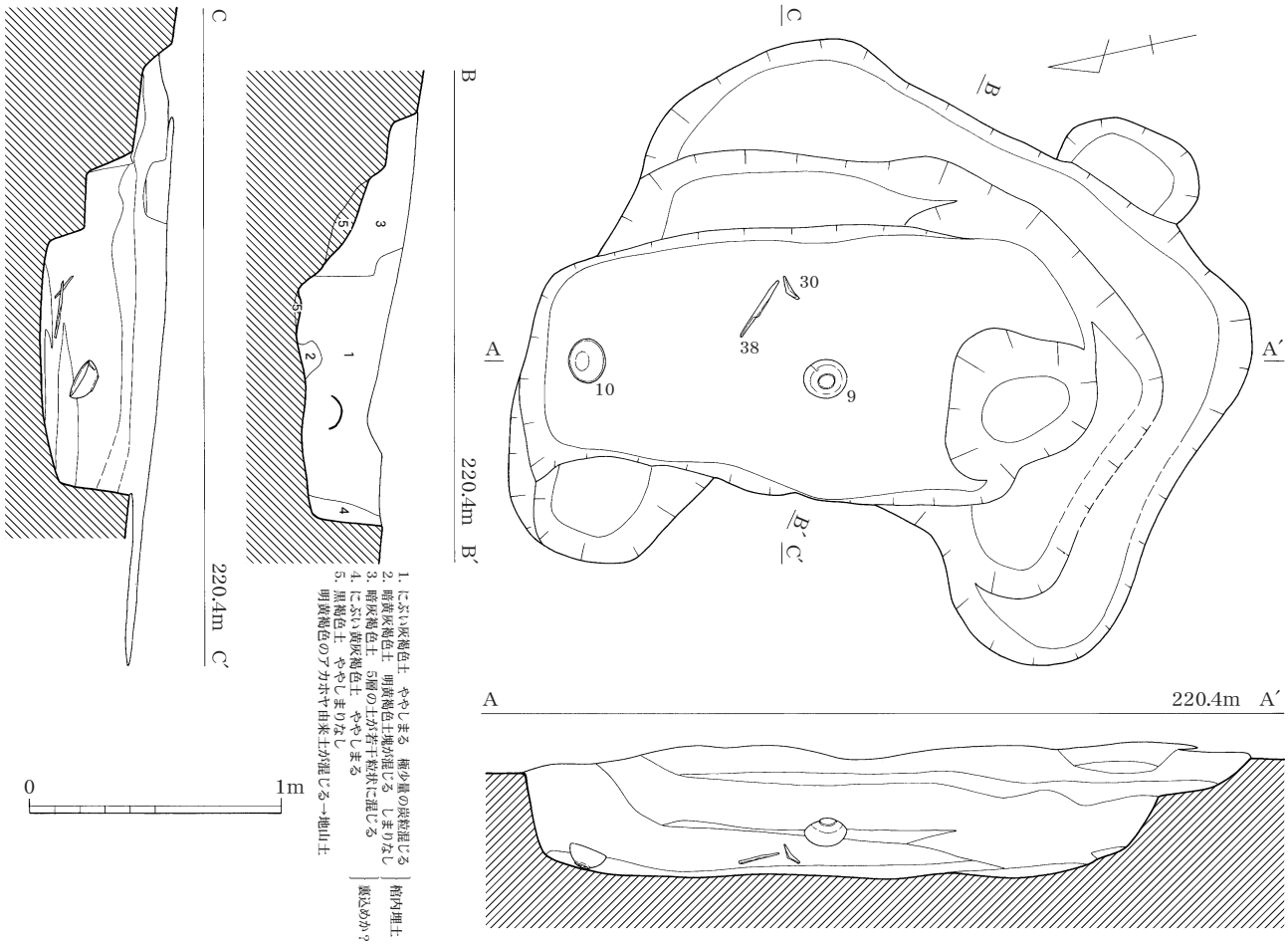
第126図　15・62・64～66号土坑出土土器実測図（1/3）

系青磁碗の完形品である。外面には鎬蓮弁を施す。畳付きから高台内にかけては露胎で、高台内には融着物が認められ、亀裂も生じている。内外とも貫入がみられるが、密度は低い。

65号土坑（図版34、第125図）

Ⅱ区北西側で検出した遺構である。平面形は北東隅が若干崩れているが、ほぼ隅丸長方形を呈し、主軸方位を南北に向ける。長軸125cm、短軸95cm、深さは20cmを測る。覆土は明灰褐色土の単一層である。

土坑内からは、中央から北に寄った位置で土師器小皿１点と青磁碗１点、南寄りの位置で第172図40の鉄小刀１点が出土した。３点とも床面からは若干浮いた位置にある。



第127図　62号土坑実測図（1/30）

出土遺物（図版59、第126図）

13は土師器皿である。全体に薄手につくり、底部は糸切りである。14は龍泉窯系青磁碗の完形品である。外面には鎬蓮弁を施す。畳付きから高台内にかけては露胎である。内外とも若干の色斑があり、口縁部及び内底面を中心に貫入がみられる。

66号土坑（図版35、第125図）

Ⅱ区北西側で検出した遺構である。平面形は隅丸長方形で主軸方位を北東－南西方向に向ける。長軸145cm、短軸80cm、深さは15cmを測る。覆土は暗灰褐色土が堆積する。

土坑内からは青磁碗が１点出土した。床面からは５cm程浮いた状態である。

出土遺物（図版59、第126図）

15は瓦器椀の完形品である。焼成はやや甘く、内外とも重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。内外とも指オサエの痕跡がみられ、内外とも若干ミガキの痕跡がみられる。高台はかなり退化し、粘土を若干貼り付けた程度である。

土坑

土坑は合計で48基検出した。土坑内に礫が詰まった集石土坑が多い。また隅丸長方形で整った

形状のものは墓の可能性もあるが、土坑として報告を行う。

１号土坑（図版35、第128図）

Ⅰ区南側で検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸の方位を北東－南西に向ける。規模は長軸113cm、短軸80cm、床面はほぼ平坦で、深さは20cmを測る。床面の西端はピット状にわずかに深くなる。壁は北側・南側は緩やかな角度で、東側や西側は急角度で立ち上がる。

覆土は上層に灰色砂質土、下層に焼土ブロックを含んだ暗灰色砂質土が堆積する。

２号土坑（図版35、第128図）

Ⅰ区南側で検出した遺構である。平面形は整った形の長方形を呈し、長軸の方位を南北に向ける。規模は長軸112cm、短軸63cm、床面はほぼ平坦で深さは20cmを測る。壁は比較的急な立ち上がりとなる。北東隅部では径８cm、深さ10cmの小ピットを１基検出した。

覆土は上層が黒灰色粘質土、下層は黄灰色土小ブロックが混じった黒灰色粘質土が堆積する。

規模および形状から墓坑の可能性もある。

３号土坑（図版36、第128図）

Ⅰ区南側で検出した遺構である。平面形は不整楕円形を呈し、長軸の方位を北西－南東に向ける。規模は長軸215cm、短軸142cm、床面は北側が最も深く45cm、西側テラス部で20cm、南側テラス部で25cmを測る。壁は北東側が急な立ち上がりとなる。

覆土は上層に黄灰色土ブロックが混ざった暗灰色粘質土、下層に黄灰色土ブロックが混ざった暗灰色土や黄茶色粘質土が堆積する。

出土遺物（第129図）

16・17はいずれも瓦器椀である。16は焼成が良好で、内外とも工具による調整を行う。

17も焼成は良好であるが、16と比べると若干甘い。重ね焼きの痕跡が残り、外面には横方向のミガキ、内面には工具による調整の痕跡が認められる。

４号土坑（図版36、第128図）

Ⅰ区南側で検出した遺構である。５号土坑と重複しており、これを切った形で掘削される。平面形は不整楕円形を呈し、長軸の方位を南北に向ける。規模は長軸232cm、短軸172cm、床面は北側がテラス状に高くなっており、北側で25cm、南側で35cmを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。

覆土は上層に暗灰色粘質土、中層に暗灰色ブロックが混ざった黄灰色土が堆積し、下層には炭を多く含んだ暗灰色粘質土が堆積する。

出土遺物（図版59・60、第129図）

18は土師器皿である。若干焼成が甘く磨滅しているが、底部には糸切り痕が残る。

19～23は土師器坏である。19は内底面に回転ナデの痕跡が顕著である。底部は糸切りであるが、中心付近は粘土の継ぎ目で剥離している。20は底部から口縁部まで緩やかな弧を描く形態で、内面のナデの痕跡から轆轤が時計回りであったことが窺える。内底面は雑にナデ、外底面は糸切りである。内外とも若干煤が付着する。21は焼成が良好で、つくりも比較的丁寧である。底部は

糸切りで、板目痕跡が残る。22はやや外反する口縁部で、内底面のナデは粗い。底部は糸切りで、板目痕が明瞭に残る。23は６分の１ほどの小片であるため、口径復元にやや不安が残る。焼成は良好で、底部は糸切りである。内面に若干煤がみられる。

24・25は瓦器椀である。24は口縁部のみで、薄手で焼成も良好である。重ね焼きの痕跡がみられる。外面はヨコナデ、内面は工具調整により仕上げる。25は底部付近の破片である。体部下半は深みのある弧を描き、底部にはかなり退化した断面三角形の高台が貼り付けられる。

５号土坑（図版36、第130図）

Ⅰ区南側で検出した遺構である。４号土坑と重複しており、先後関係ではこれよりも古い。北端を４号土坑に切られるために失っているが、平面形は不整楕円形を呈し、主軸方位を南北に向ける。規模は長軸268cm、短軸150cm、床面は中央付近が若干深くなっており、深さは35cmを測る。壁の立ち上がりはかなり緩やかである。

覆土は上層に暗灰色粘質土、中層に黄灰色土ブロックが混ざった灰色土、下層に黄灰色土が堆積する。

出土遺物（第129図）

26は瓦質鉢である。口縁端部付近に重ね焼きの痕跡が残り、胎土中には１cm大の小礫がみられる。27は土師質土器の鍋である。口縁部片で、焼成は不良であるが、内外ともハケによる調整の痕跡がうかがえる。

６号土坑（図版36、第130図）

Ⅰ区中央付近で検出した遺構である。平面形は不整楕円形を呈し、長軸を東西に向ける。規模は長軸220cm、短軸105cm、床面は西側が若干深くなっており、深さ38cmを測る。床面や壁面からは地山に含まれる礫が露出している。壁の立ち上がりは緩やかである。

覆土は上層に黄茶色土ブロックが混ざった暗灰褐色粘質土、中層に黄灰色土ブロックが混ざった灰褐色粘質土、下層にブロックをあまり含まない灰褐色粘質土が堆積する。出土遺物には第129図28の備前焼甕の他、第170図16の鉄釘がある。

出土遺物（第129図）

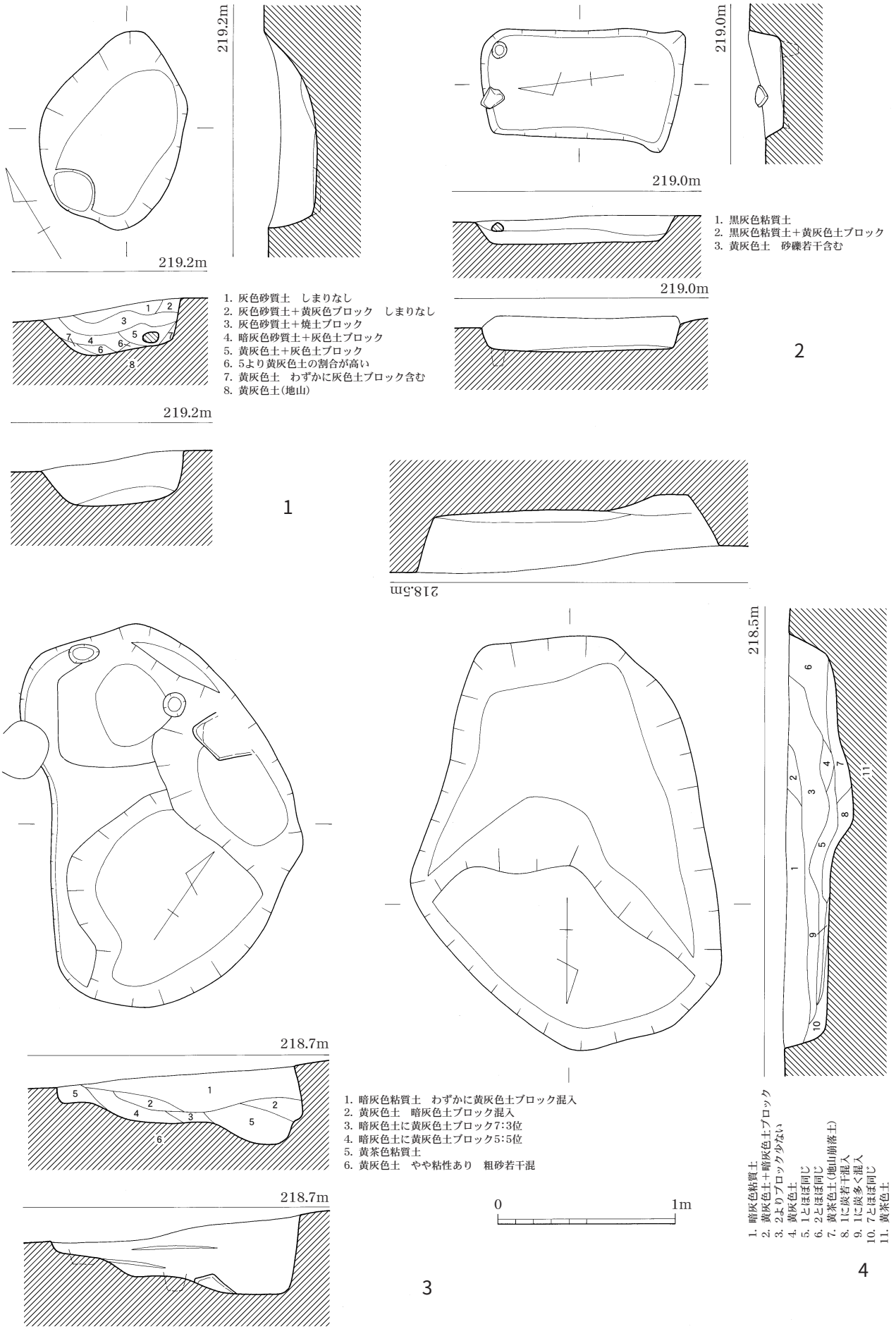
28は備前焼の甕である。口縁部付近の破片で、口縁部上面や頸部外面などに灰かぶりが顕著である。全体に厚手で、口縁部は粘土を折り返して肥厚させる。色調は胎土も含め暗赤紫色である。

７号土坑（図版37、第130図）

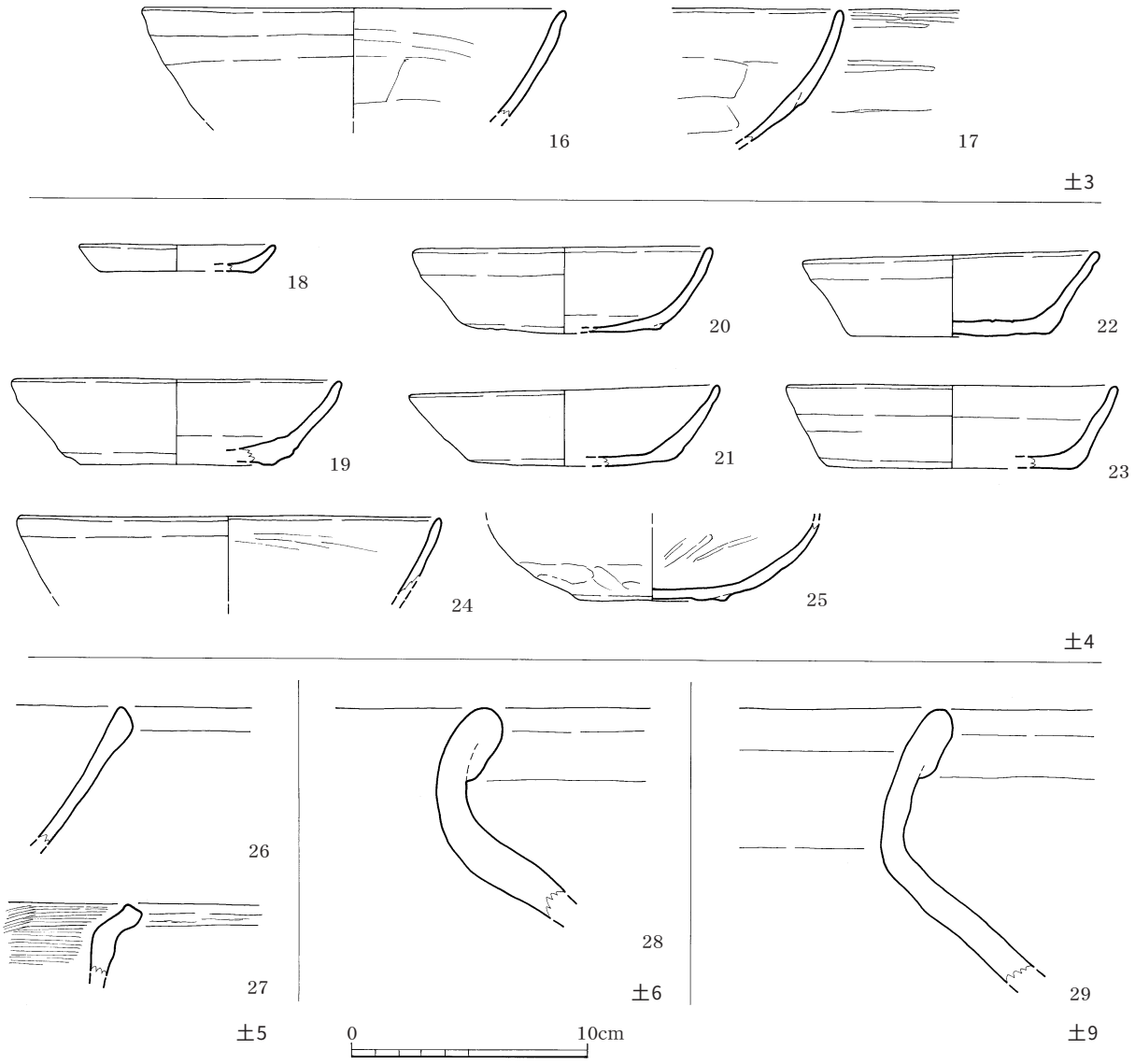
Ⅰ区中央付近で検出した遺構である。平面形は不整楕円形を呈し、北端は岩の露頭に接触する。長軸を南北に向け、長軸165cm、短軸95cm、床面はほぼ平坦で深さは５cm程度である。土坑底面には広範囲にわたって炭の広がりが見られた。

８号土坑（図版37、第131図）

Ⅰ区中央付近で検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸を南北に向ける。長軸114cm、短軸70cmを測る。底面は南側が深くなっており、深さは南側で45cm、北側で30cmを測る。壁は



第128図　1～4号土坑実測図（1/30）



第129図　3～6・9号土坑出土土器実測図（1/3）

南壁・北壁は急角度で、西壁・東壁は緩やかな角度で立ち上がる。

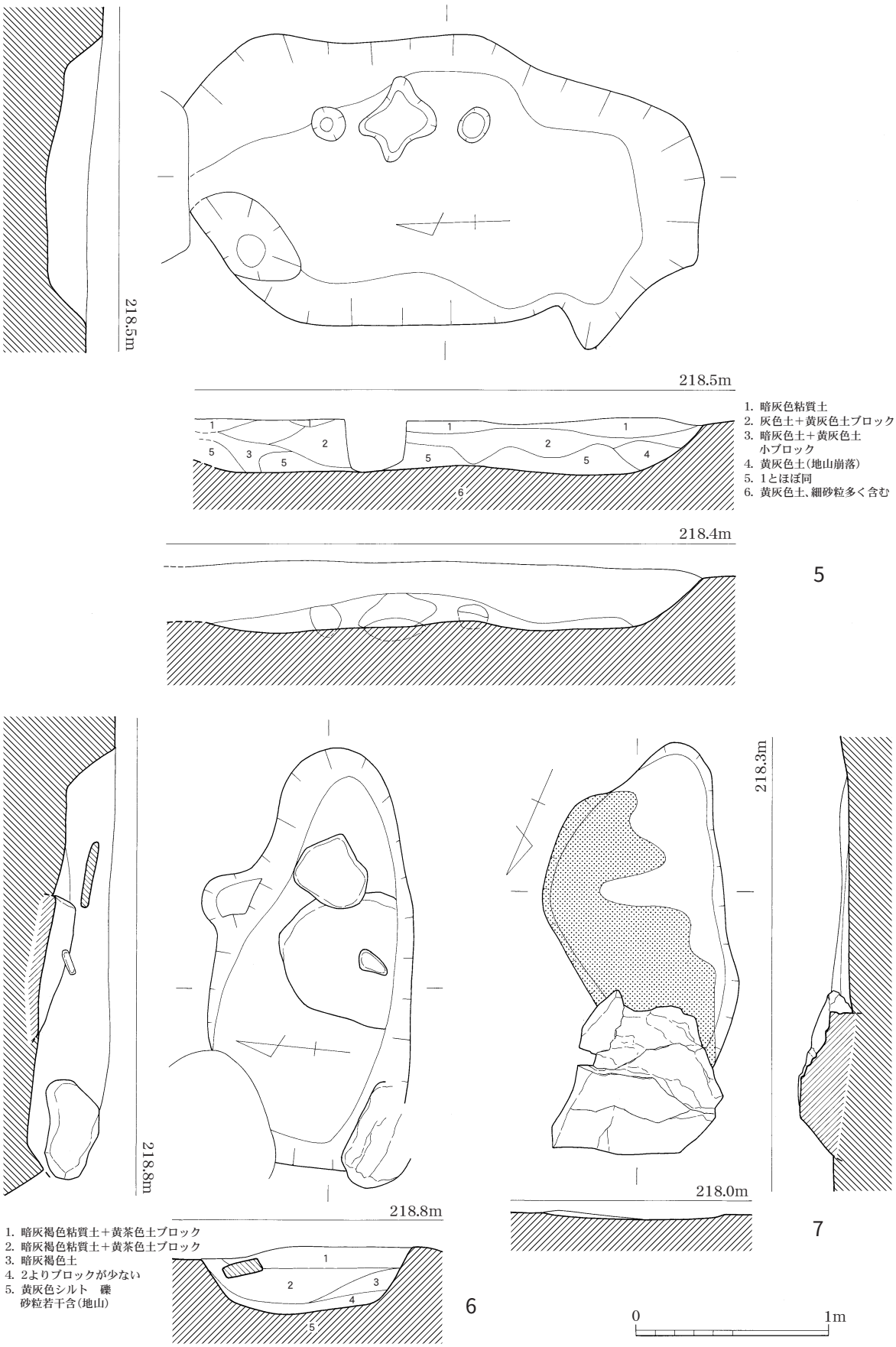
覆土は上層が灰色シルト、下層が灰色シルトブロックの混ざった黄灰色粘質土が堆積する。覆土中から礫が出土したが、自然礫であった。

9号土坑（図版37、第131図）

Ⅰ区中央付近で検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸を南北に向ける。長軸175cm、短軸90cmを測る。底面は南側がテラス状に浅くなっており、この部分で30cm、北側は45cmを測る。壁は比較的緩やかな立ち上がりとなる。北東壁面には地山に含まれた礫が露頭する。

出土遺物（第129図）

29は備前焼の甕である。6号土坑出土の甕に比べると薄手で、口縁部を折り曲げて肥厚させる点では共通するが、頸部に立ち上がりがみられる点が異なる。口縁端部及び体部外面に灰かぶりが



第130図　5 ～ 7 号土坑実測図（1/30）

顕著である。色調は暗赤紫色であるが、胎土は赤褐色を呈する。

10号土坑（図版38、第131図）

Ⅰ区南側で検出した遺構である。平面形は不整楕円形を呈し、長軸を北東－南西に向ける。長軸207cm、短軸122cm、底面は南端がピット状に深くなっており、深さは60cmを測る。壁は南側が急傾斜で、その他は比較的緩やかな立ち上がりとなる。

覆土は上層に灰色土、下層ににぶい灰黄褐色土が堆積する。

11号土坑（図版38、第131図）

Ⅰ区南側で検出した遺構である。平面形は不整楕円形を呈し、長軸を北東－南西に向ける。長軸170cm、短軸97cm、床面は北側がテラス状に浅くなっており、この部分で深さ25cm、それ以外は深さ35cmを測る。壁は急な立ち上がりとなる。

覆土は上層に粒状の炭化物を含んだ暗灰色土、下層ににぶい黄褐色土や暗褐色土が堆積する。

12号土坑（図版38、第132図）

Ⅰ区南側で検出した遺構である。平面形は不整形を呈し、長軸を南北方向に向ける。長軸165cm、短軸103cm、床面はほぼ水平で深さ10cmを測る。床面上で数基のピットを検出したが、このうち北端のピットは深さ17cm、中央のピットは深さ13cmを測る。

覆土は上層に黒灰色土、下層に暗黄灰色粘質土が堆積する。

出土遺物（第133図）

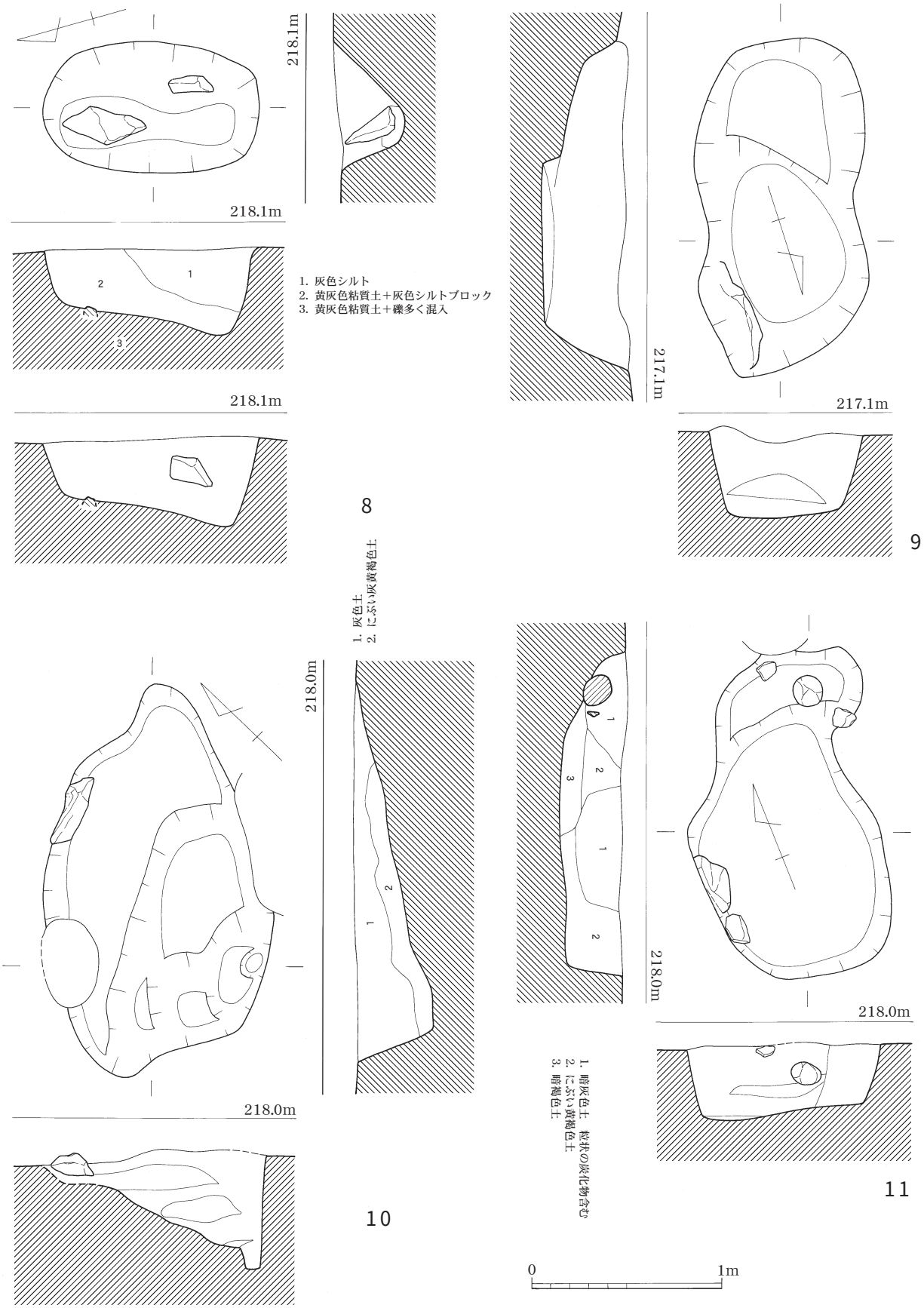
30～34は瓦器椀である。30は 6 分の 1 ほどの破片で、接合箇所はないが後述する31と同一個体である可能性がある。若干焼成が甘く全体に磨滅しているものの、内面に工具調整の痕跡が残る。底部と体部との境に割れ目があり、高台は断面三角形を呈する。口縁部付近に重ね焼き痕が残る。31はやや磨滅気味であるが、体部外面下半の指オサエや内面の工具調整の痕跡が残る。また内面には横方向のミガキとみられる痕跡もあるが、あまり明瞭ではない。やはり口縁部付近に重ね焼き痕が残る。32は外面が磨滅しているが、内面に横方向のミガキがみられる。とくに外面には重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。33は焼成が若干甘く全体に磨滅し、調整は不明瞭である。高台は断面三角形を呈する。内外とも 2 mm大ほどの砂礫が脱落した痕跡が多い。34は外面に工具調整、内面に粗いミガキがみられる。

13号土坑（図版38、第132図）

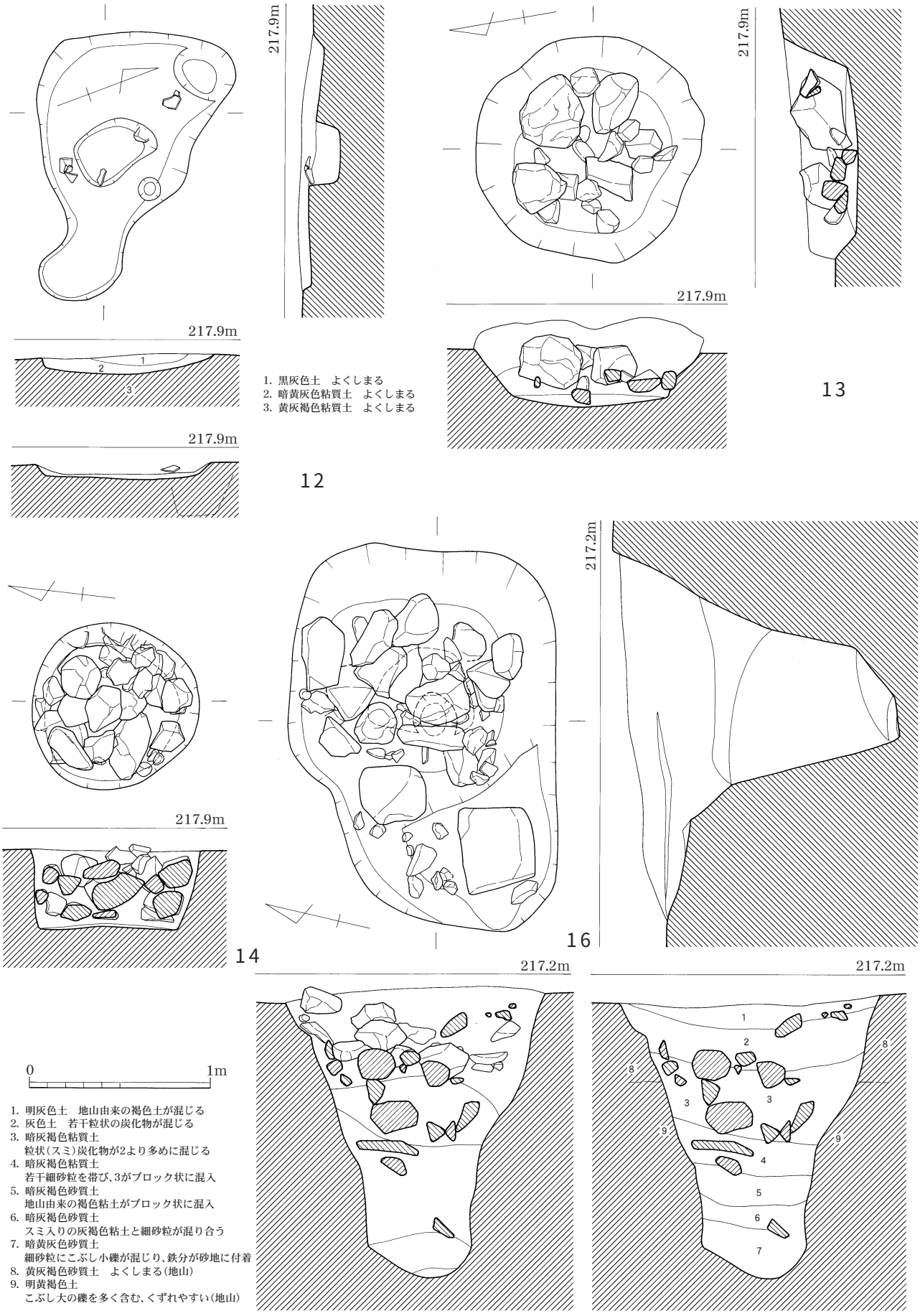
Ⅰ区南側で検出した遺構である。平面形は円形を呈し、直径125～130cmを測る。床面はほぼ水平で、深さは45cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。土坑内からは10cm～40cmの礫が多く出土した。

14号土坑（図版38、第132図）

Ⅰ区南側で検出した遺構である。平面形は円形を呈し、直径95cmを測る。床面はほぼ水平で、深さは45cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。土坑内は10cm～30cmの礫で充填されていた。



第131図　8～11号土坑実測図（1/30）



第132図　12～14・16号土坑実測図（1/30）

出土遺物（第133図）

35は土師器皿である。口縁部は薄く引き延ばし、底部は糸切りで板目の痕跡が残る。胎土中には雲母が目立つ。

16号土坑（図版39、第132図）

Ⅰ区南側で検出した遺構である。平面形は不整形で、長軸を東西に向ける。長軸210cm、短軸145cm、底面は中央付近が擂り鉢状に深くなっており、深さは160cmを測る。西側はテラス状に浅くなっており、深さは25cmを測る。ここからは40cm程の厚い角礫が出土している。

土坑内は上層に灰色土、中層付近に暗灰褐色粘質土や暗灰褐色砂質土が堆積し、最下層には鉄分が沈着した暗黄灰色砂質土が堆積する。土坑内からは多くの礫が検出されたが、特に上層付近に多く出土した。

湧水は無かったが、土坑の形状や最下層の鉄分の沈着状態から見て、溜め井戸ではないかと思われる。

17号土坑（図版39、第134図）

Ⅰ区南側で検出した遺構である。平面形は若干いびつな方形を呈し、一辺145cmを測る。底面はほぼ水平で、深さは55cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い急な角度で傾斜している。

土坑内からは10～50cmの礫が数多く出土したが、これらは特に上層にまとまって見られた。出土遺物には第170図14の鉄釘がある。

18号土坑（図版39、第134図）

Ⅰ区南側で検出した遺構である。平面形は不整楕円形を呈し、長軸を東西方向に向ける。長軸155cm、短軸90cmの楕円形土坑の南側にテラス状の張り出しが付いた形状となる。深さはテラス部分で10cm、土坑東側で45cm、西側が若干深くなっており60cmを測る。

土坑内からは10cm～40cmの礫が数多く出土し、特に下層付近から集中して見られた。

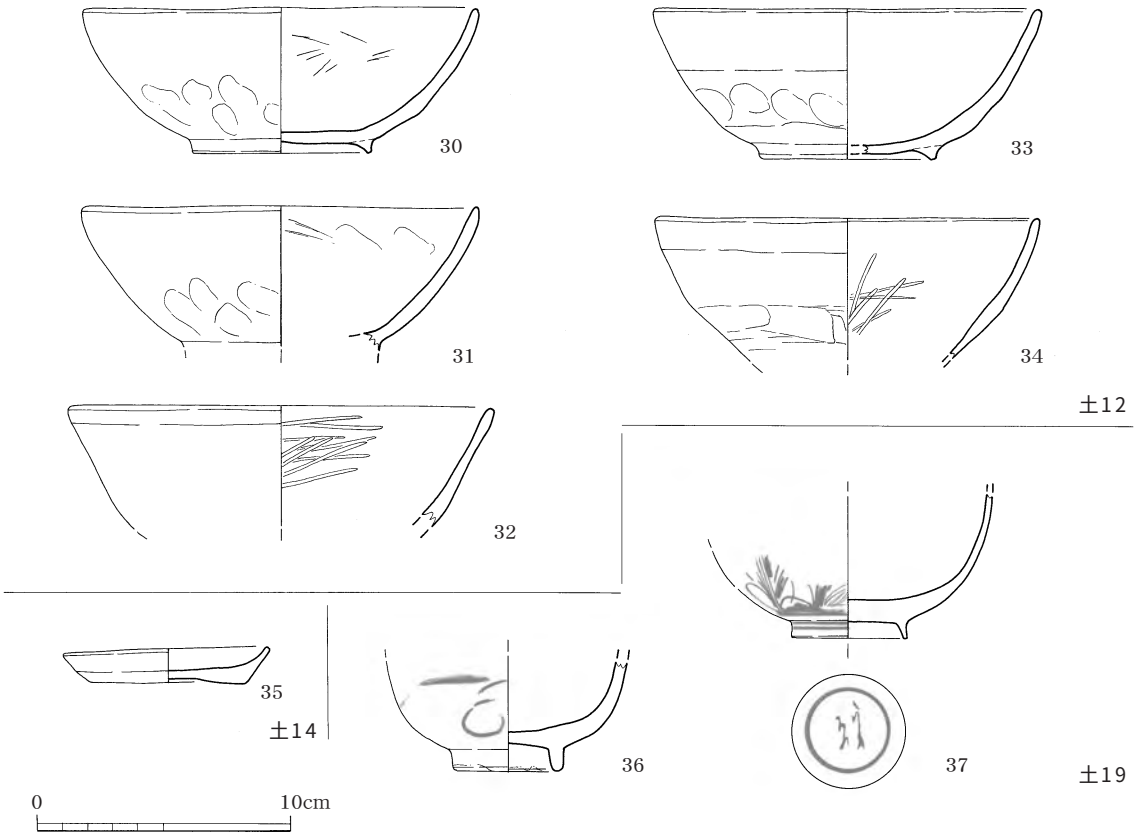
19号土坑（図版40、第134図）

Ⅰ区北側で検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸を北西－南東方向に向ける。長軸195cm、短軸105cm、底面はほぼ水平で深さは25cmを測る。壁の立ち上がりは急傾斜である。

土坑内には10cm～30cmの礫が数多く充填された状態で出土した。これらの礫は他の集石土坑と比較すると小型のものが多い。

出土遺物（第133図）

36は陶器碗である。釉は灰緑色を呈し、そのためか体部に描かれた文様がややぼやけてみえる。貫入が密にみられる。畳付き付近は暗赤褐色に発色しており、釉が薄くなっているが本来は露胎ではなかったとみられる。37は染付碗である。薄手で体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。畳付きのみ露胎である。体部外面に草花文を施しており、高台内にも文様があるが文字か図柄かの判別はできない。



第133図　12・14・19号土坑出土土器実測図（1/3）

20号土坑（図版40、第134図）

Ⅰ区北側で検出した遺構である。平面形は円形を呈し、直径90～100cm、底面は平坦で深さは55cmを測る。覆土は上層に灰褐色砂質土、中層に暗灰色粘質土、下層に粗砂を含んだにぶい灰褐色土が堆積する。

土坑内からは10～30cmの礫が多く出土したが、これらは中層の第３層に含まれていた。

21号土坑（図版40、第134図）

Ⅰ区北側で検出した遺構である。平面形は若干いびつな円形を呈し、直径90cm、底面は平坦で深さは30cmを測る。土坑内からは10～30cmの礫が多く出土したが、これらは上～中層に集中しており下層からは出土しなかった。

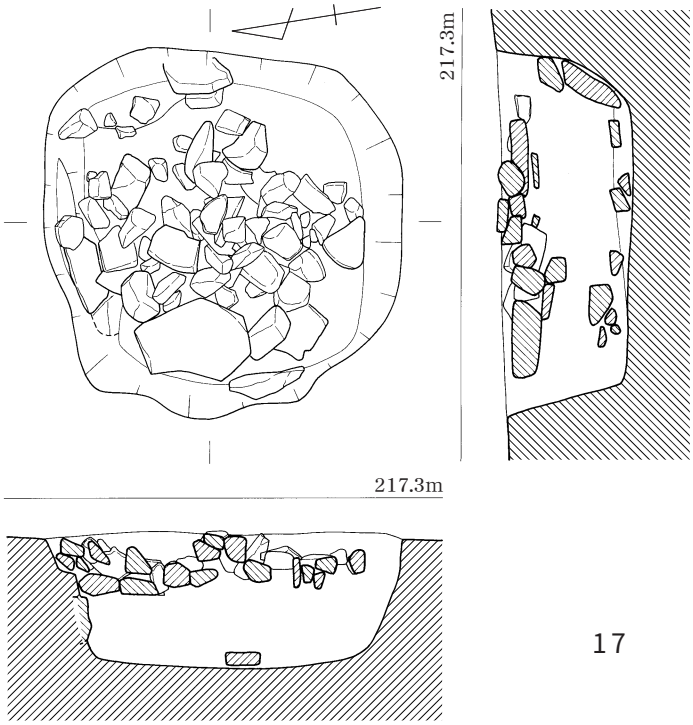
22号土坑（図版41、第135図）

Ⅰ区北側で検出した遺構である。平面形は西壁の一部が張り出すものの、ほぼ長方形を呈しており、主軸方位を北西－南東に向ける。長軸140cm、短軸85cm、底面はほぼ平坦で深さは８cm、底面の南西壁際に深さ５cmのピットがある。

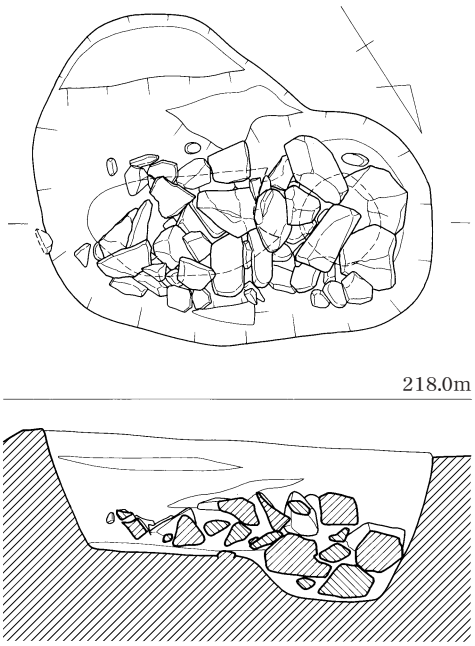
覆土の大半は暗灰褐色土に地山由来の暗赤茶色土がブロックに混ざった層からなる。

出土遺物（第136図）

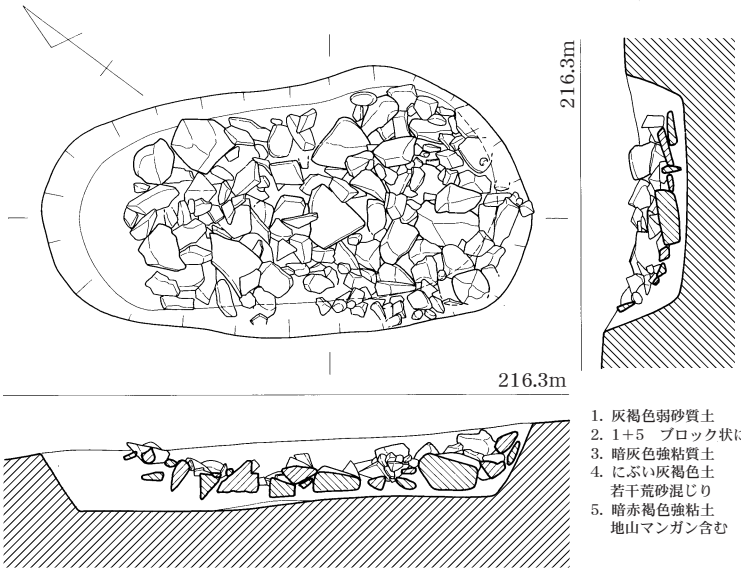
38は陶器甕底部である。ヘラ削りで調整された底部から直線的に外方へのびる体部が特徴で、外



17

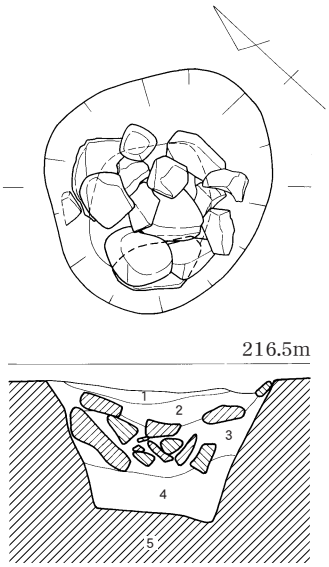


18

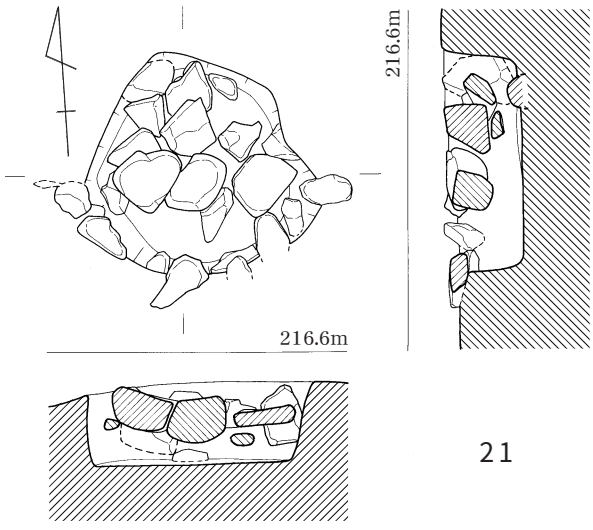


1. 灰褐色弱砂質土
2. 1+5　ブロック状に4が入る
3. 暗灰色強粘質土
4. にぶい灰褐色土
　若干荒砂混じり
5. 暗赤褐色強粘土
　地山マンガン含む

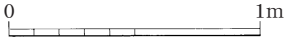
19



20



21



第134図　17～21号土坑実測図（1/30）

面はヨコハケ、内面はヨコナデで調整する。内外とも赤褐色の薄い釉薬で下地をつくり、その上から黒褐色の鉄釉を流す。胎土は明灰色を呈する。

23号土坑（図版41、第135図）

Ⅰ区北西側で検出した遺構である。平面形は不整円形を呈し、長軸275cm、短軸320cmを測る。土坑内には深さ100cmを過ぎたあたりで一つの巨石が出土し、引き上げることも下を掘り下げることも出来なくなったため、これより下層の掘削を断念せざるをえなかった。確認できた土坑の深さは160cmを測り、壁の立ち上がりは急角度である。土坑内の南側と西側にそれぞれテラスがあり、深さは南側テラスで20cm、西側テラスで80cm。

覆土は上層に灰褐色砂質土、中層に茶褐色砂質土やにぶい黄褐色砂など周辺の地山土に由来する土、下層に礫を多く含んだ灰色砂が堆積する。土坑の規模や形状、覆土から井戸として使用されたものと思われる。

出土遺物（第136図）

39は白磁小皿である。口縁端部内面と体部下位から底部にかけては露胎で、体部下位は焼成による被熱で明褐色となる。底部には別個体が若干付着している。見込みの周囲には小さな段を設ける。

24号土坑（図版41、第135図）

Ⅰ区西側で検出した遺構である。平面形は不整楕円形を呈し、長軸107cm、短軸87cm、底面は西側が一段深くなっており、深さは東側で８cm、西側で12cmを測る。遺構面精査時に瓦器椀が１点露出していたが、土坑底面から浮いた状態である。

出土遺物（図版60、第136図）

40は瓦器椀である。外面は体部下半が指オサエにより凹凸が激しく、上半部は強いヨコナデで整える。内面は磨滅により調整が不鮮明であるが、わずかにミガキの痕跡がうかがえる。底部は広く、高台は断面三角形で一部板目痕により台形状を呈する。内外とも重ね焼きの痕跡が明瞭である。

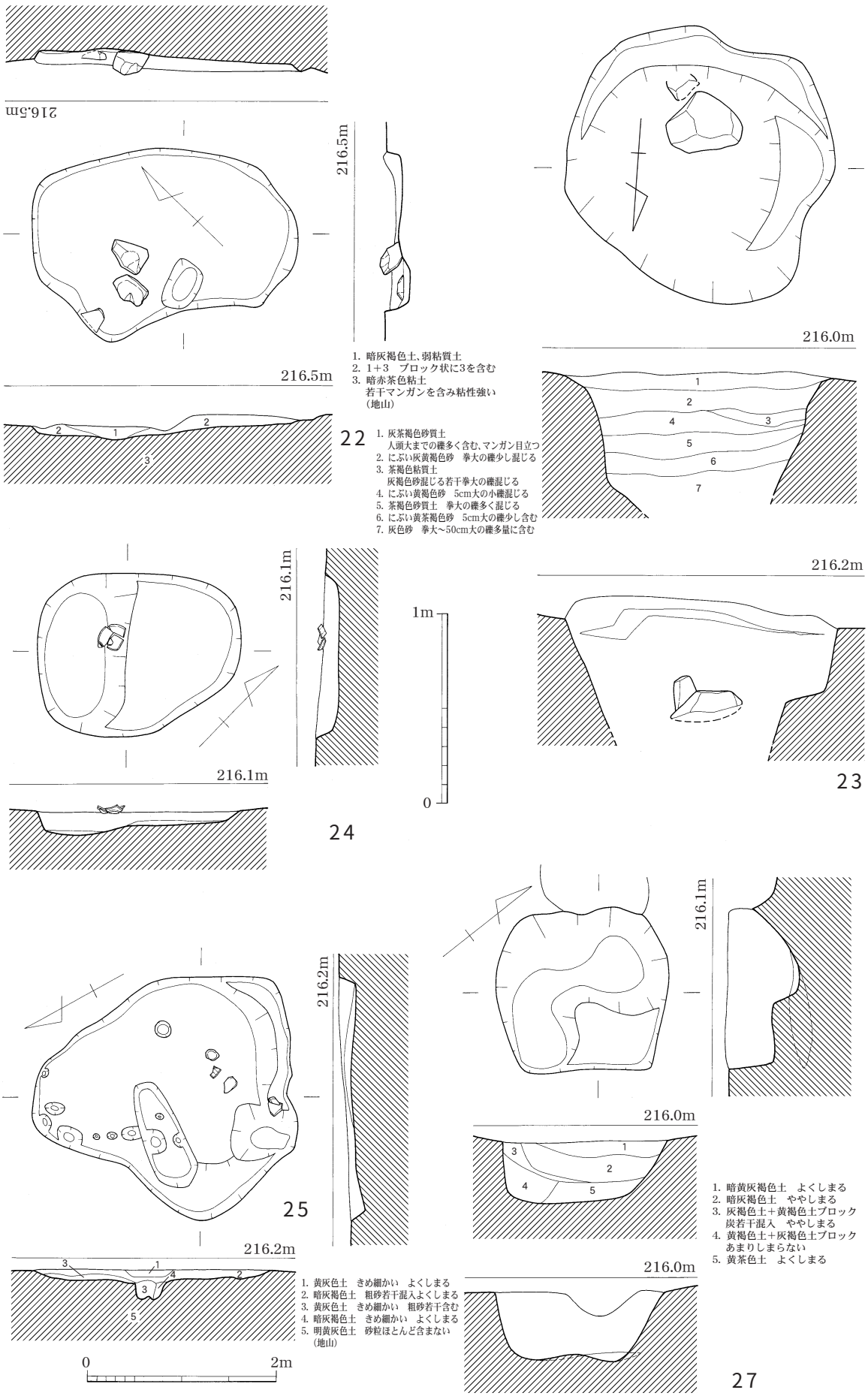
25号土坑（図版42、第135図）

Ⅰ区西側で検出した遺構である。平面形は不整形を呈し、長軸265cm、短軸255cmを測る。底面は西側に向かって傾斜しており、東端で20cm、中央で８cm、西端で15cmを測る。また底面でいくつかのピットを検出しており、中央西寄りのピットで深さ40cm、南西端のピットで８cmを測る。覆土は暗灰褐色土が多く堆積し、一部底面上に地山土に近い黄灰色土が薄く堆積する。

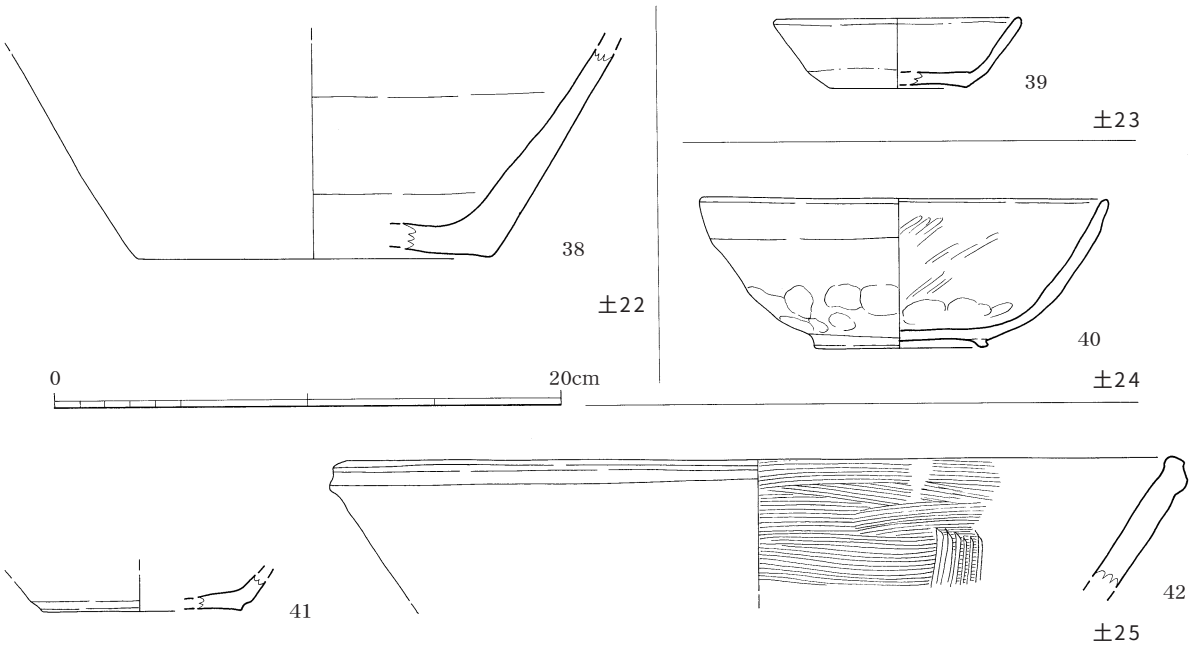
底面上の中央から南寄りの位置で土師器坏が１点出土した。

出土遺物（第136図）

41は土師器坏である。やや磨滅気味であるが、底部は糸切りで板目もみられる。42は瓦質の擂鉢である。口縁部付近の破片で段を設けているものの形骸化した感がある。外面はヨコナデ、内面はヨコハケで調整する。内面にはわずかだが６本の擦目がみられる。



第135図　22～25・27号土坑実測図（23・25：1/60、他：1/30）



第136図　22～25号土坑出土土器実測図（1/3）

27号土坑（第135図）

Ⅰ区西側で検出した遺構である。平面形は不整方形を呈し、長軸90cm、短軸85cm、底面は東側にテラス状の段があり、ここまでの深さは23cm、北側で40cmを測る。壁の立ち上がりは東側や南側は急角度で、北側や西側は緩やかな角度で立ち上がる。覆土は上層に暗黄灰褐色土、中層に暗灰褐色土、下層に灰褐色土ブロックの混ざった黄褐色土や黄茶色土が堆積する。

28号土坑（第137図）

Ⅰ区南西側で検出した遺構である。平面形は円形を呈し、直径85～88cm、底面はほぼ平坦で深さは13cmを測る。覆土は上層に炭・焼土粒を多く含んだ暗灰褐色土、下層に同じく炭・焼土粒を多く含んだ黄灰褐色土が堆積する。

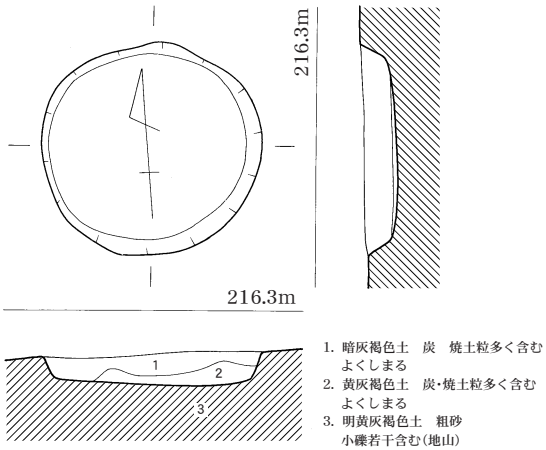
29号土坑（図版42、第137図）

Ⅲ区中央付近で検出した遺構である。平面形は東西に少し長い楕円形を呈し、長軸95cm、短軸80cm、底面は中央に向かって擂り鉢状に深くなっており深さは28cm、土坑内は西半部にテラス状の段があり、ここまでの深さは８cmを測る。土坑内からは10～25cmの礫が多く出土した。

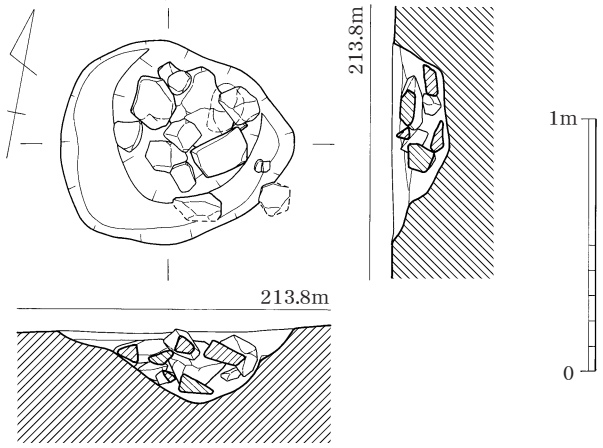
30号土坑（図版42、第137図）

Ⅲ区中央付近で検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し、主軸方位を東西方向に向ける。規模は長軸137cm、短軸95cmを測る。西側にテラス状の段があり、ここまでの深さは25cmを測る。東側は径95cmの大きさで円形に深くなっており、底面はほぼ平坦で、深さは45cmを測る。壁の立ち上がりは急傾斜で、特に東壁は一部内傾する。

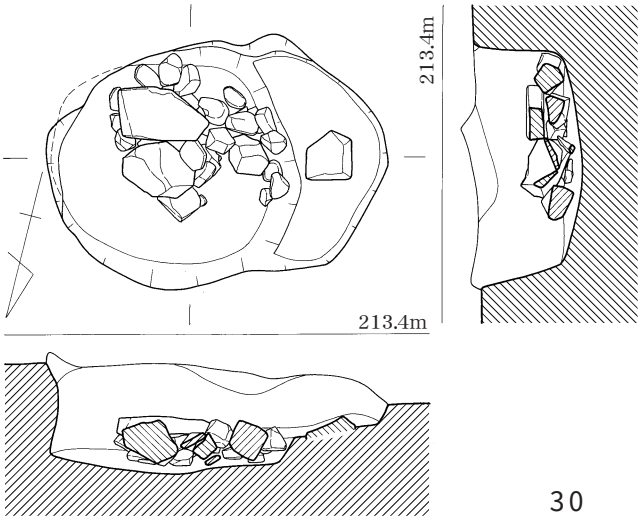
南側の底面に接して、10～30cmの礫が集中して出土した。



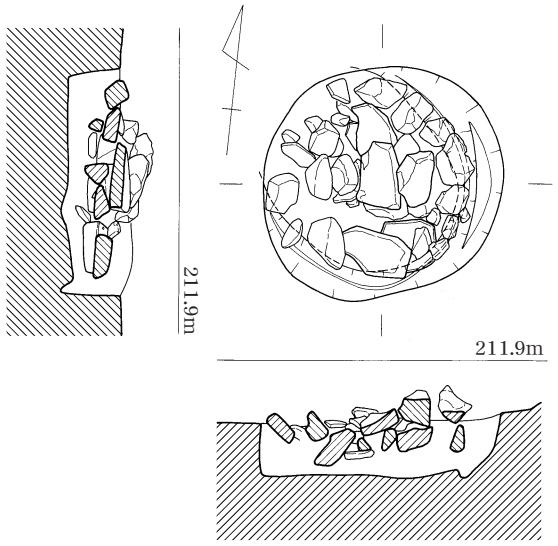
28



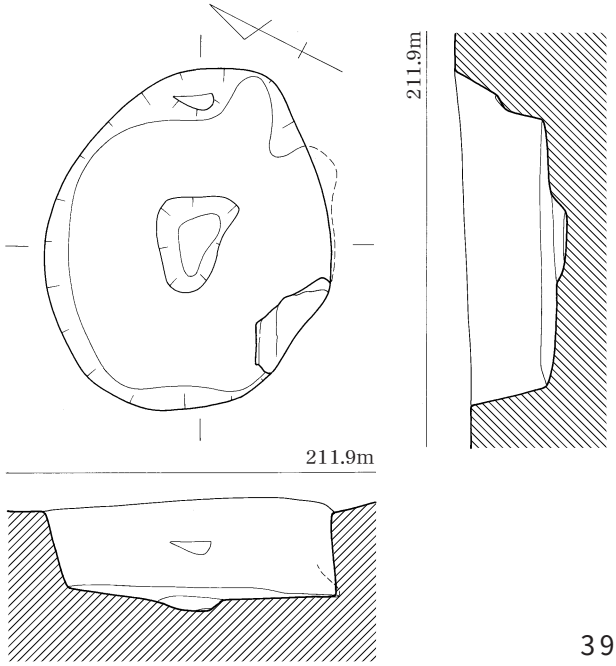
29



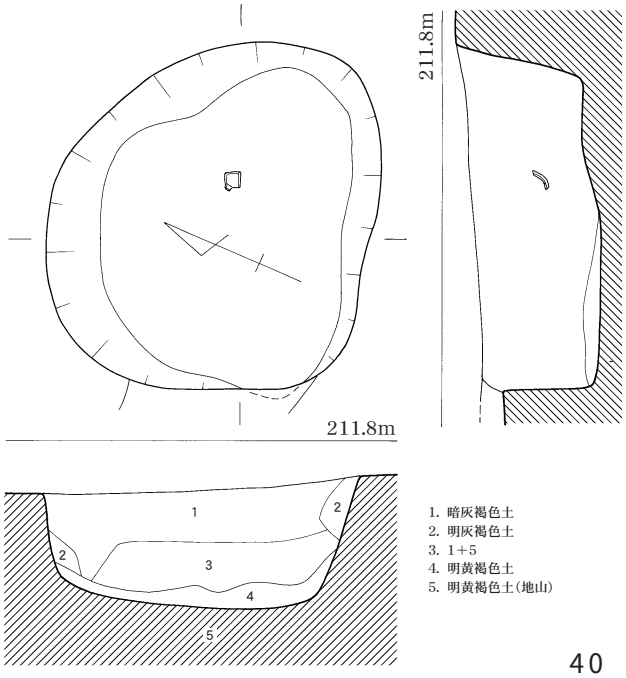
30



38



39



40

第137図　28～30・38～40号土坑実測図（1/30）

38号土坑（図版43、第137図）

Ⅲ区南側で検出した遺構である。41号土坑と重複しており、これよりも新しい。平面形は円形を呈し、直径は90～95cmを測る。底面はほぼ平坦で深さは25cmを測る。底面の西壁際に沿って幅５cm、深さ５cmの浅い溝が半周する。壁の立ち上がりは垂直に近い。

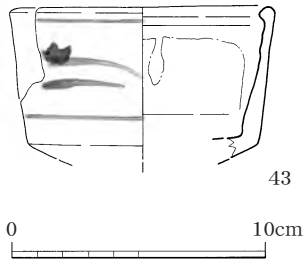
土坑内からは多くの礫が見つかった。10～30cmの大きさで、土坑の上層に集中しており下層からは出土していない。

39号土坑（図版43、第137図）

Ⅲ区南側で検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸方向を北東－南西に向ける。長軸135cm、短軸112cm、底面の中央には40cmほどのピットが１基あり、検出面からの深さはこのピット内で40cm、その周辺で35cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。

40号土坑（図版43、第137図）

Ⅲ区南側で検出した遺構である。平面形は不整円形を呈し、直径130～140cm、底面は中央付近が若干深くなっており、深さは50cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急な角度になる。覆土は上層に暗灰褐色土、中層に明黄褐色土の地山土を含んだ暗灰褐色土、下層に地山土と大差ない土が堆積する。



第138図　40号土坑出土土器実測図（1/3）

出土遺物（第138図）

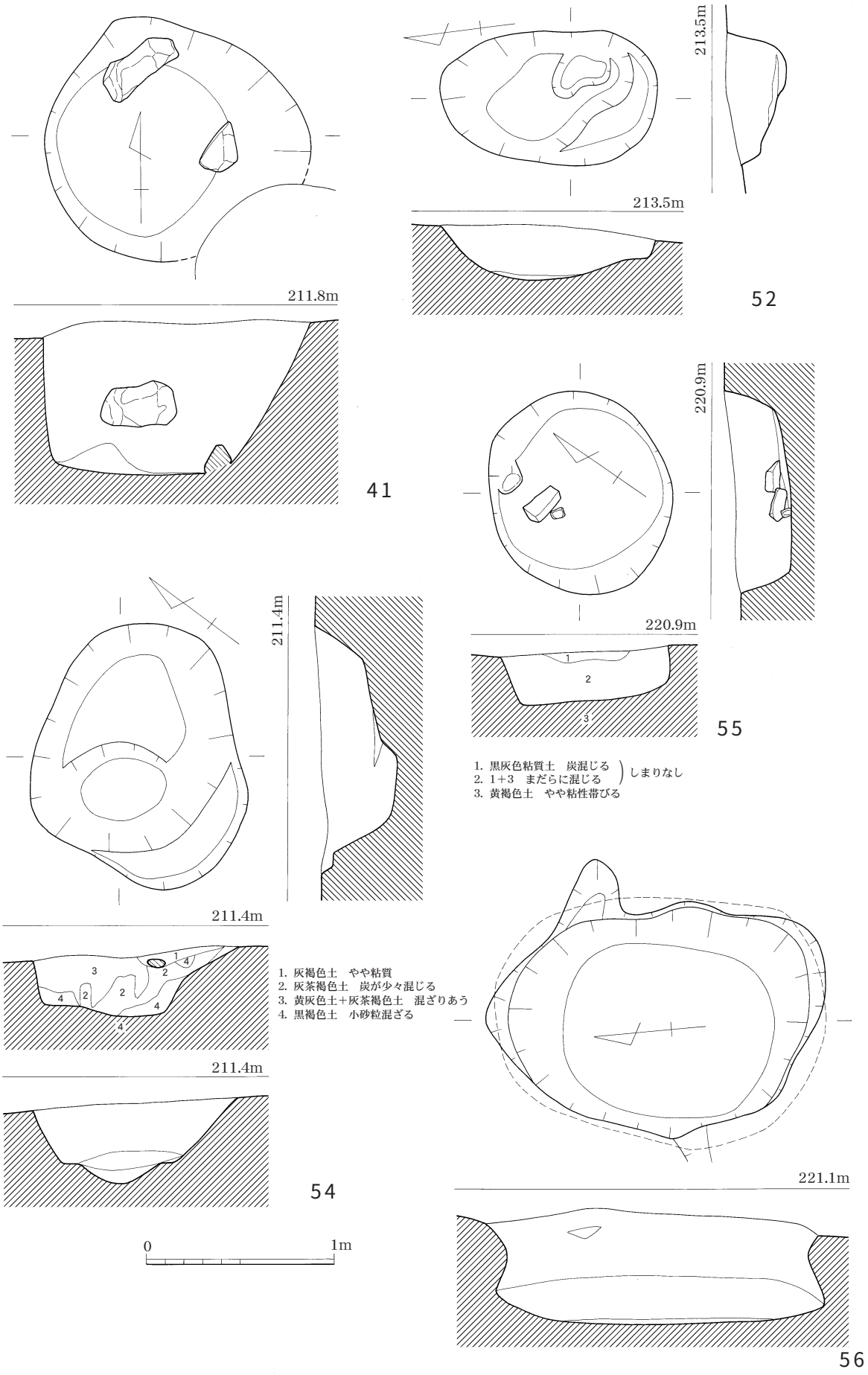
43は陶器碗である。腰部が急に折れて、口縁部は内側が肥厚する。緑褐色の笹草文が描かれる。釉は透明で口縁部内面から外面にかけて施釉され、体部内面は露胎である。施釉部分は胎土の色調によって灰色にみえ、内外とも貫入がみられる。

41号土坑（図版43、第139図）

Ⅲ区南側で検出した遺構である。38号土坑と重複しておりこれに切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸方向を東西に向ける。長軸143cm、短軸130cm、底面は平坦で深さは80cmを測る。底面は直径90cmの整った円形であることから、この土坑は本来円形であったものが、東壁が崩れて楕円形になったものと推測される。土坑内からは２つの大きな礫が出土したが、これらは底面から30cm程浮いた位置にある。

52号土坑（図版44、第139図）

Ⅲ区中央付近で検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸方向を南北に向ける。大きさは長軸115cm、短軸70cm、底面は東側が深くなっており、深さは33cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、壁から底面へと屈曲せず揺り鉢状に深くなる。出土遺物には第163図15の砥石、第171図33・34の鉄小刀がある。



第139図　41・52・54～56号土坑実測図（1/30）

54号土坑（図版44、第139図）

Ⅱ区東半部の中央付近で検出した遺構である。平面形は不整楕円形を呈し、長軸方向を北東－南西に向ける。長軸135cm、短軸110cm、底面は中央から西に寄ったところが最も深く40cm、東側で25cmを測る。南側にテラスがあり、ここまでの深さは５cm。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は上層に灰褐色土、中層に灰茶褐色土の混ざった黄灰色土、下層に地山と大差ない黒褐色土が堆積する。

55号土坑（図版44、第139図）

Ⅱ区東半部の南端で検出した遺構である。平面形は円形を呈し、直径95～105cmを測る。底面は東から西へと若干傾斜しており、深さは東側で25cm、中央で30cm、西側で30cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。土坑内の中央から北西に寄った位置で、底面に接して礫が出土した。覆土は上層に黒灰色粘質土、下層に黄褐色土の混ざった黒灰色粘質土が堆積する。

56号土坑（図版45、第139図）

Ⅱ区東半部の南端で検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸方向を南北に向ける。長軸180cm、短軸125cmの大きさで、床面はほぼ平坦となり、深さは60cmを測る。壁は底面から20cm程上で明瞭な稜をもって奥へと入り込む、いわゆる袋状断面を呈している。

60号土坑（図版45、第140図）

Ⅱ区東半部の西側で検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸方向を南北に向ける。長軸143cm、短軸93cmの大きさで底面はほぼ平坦である。深さは35cmを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。土坑の形状から墓の可能性も考えたが、副葬品等が出土していないため憶測の域を出ない。

出土遺物（図版60、第141図）

44は土師器皿である。比較的口径の大きな皿で、全体に薄手である。底部は不明瞭ながら糸切りとみられる。45は土師器坏である。腰部がやや丸みをもち、底部は糸切りで板目痕が残る。若干ながら内外ともに煤けている。46は瓦器椀である。内外ともに粗い横方向のミガキで仕上げる。

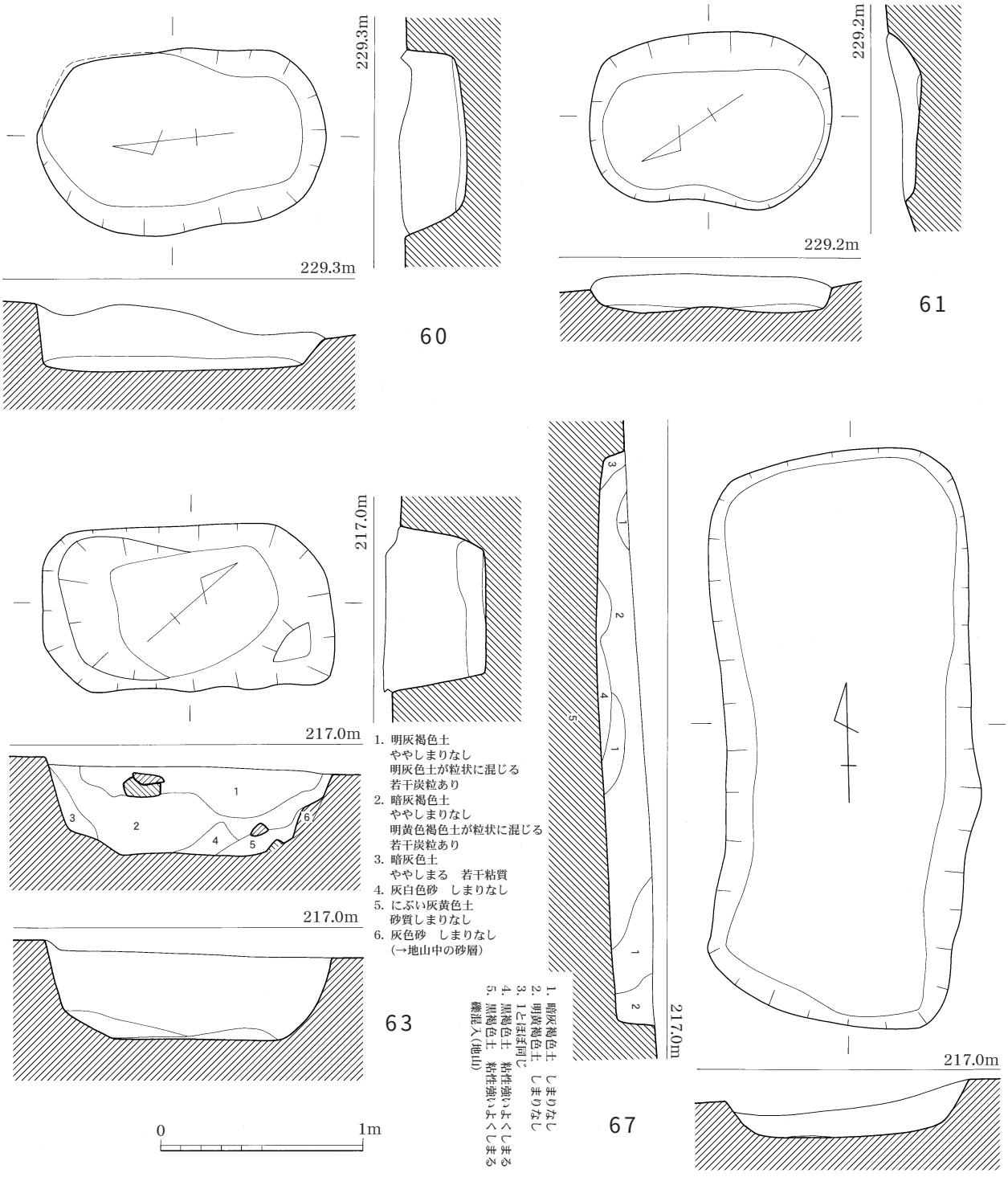
61号土坑（図版45、第140図）

Ⅱ区東半部の西端で検出した遺構である。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向を北東－南西に向ける。長軸120cm、短軸88cmの大きさで底面はほぼ平坦である。深さは15cmを測り、壁の立ち上がりは急角度ではない。土坑の形状等から墓の可能性も考えたが、憶測の域を出ない。

出土遺物（図版60、第141図）

47・48は土師器皿である。ともに糸切り底で、口縁部は47が直線的、48は内湾気味に立ち上がる。

49は瓦器椀である。外面は下半部が強い指オサエで、横方向のミガキかと思われる痕跡も若干ある。内面は縦方向の粗いミガキで仕上げられている。高台は断面三角形を呈するが、かなり退化している。重ね焼きの痕跡が顕著にみられる。

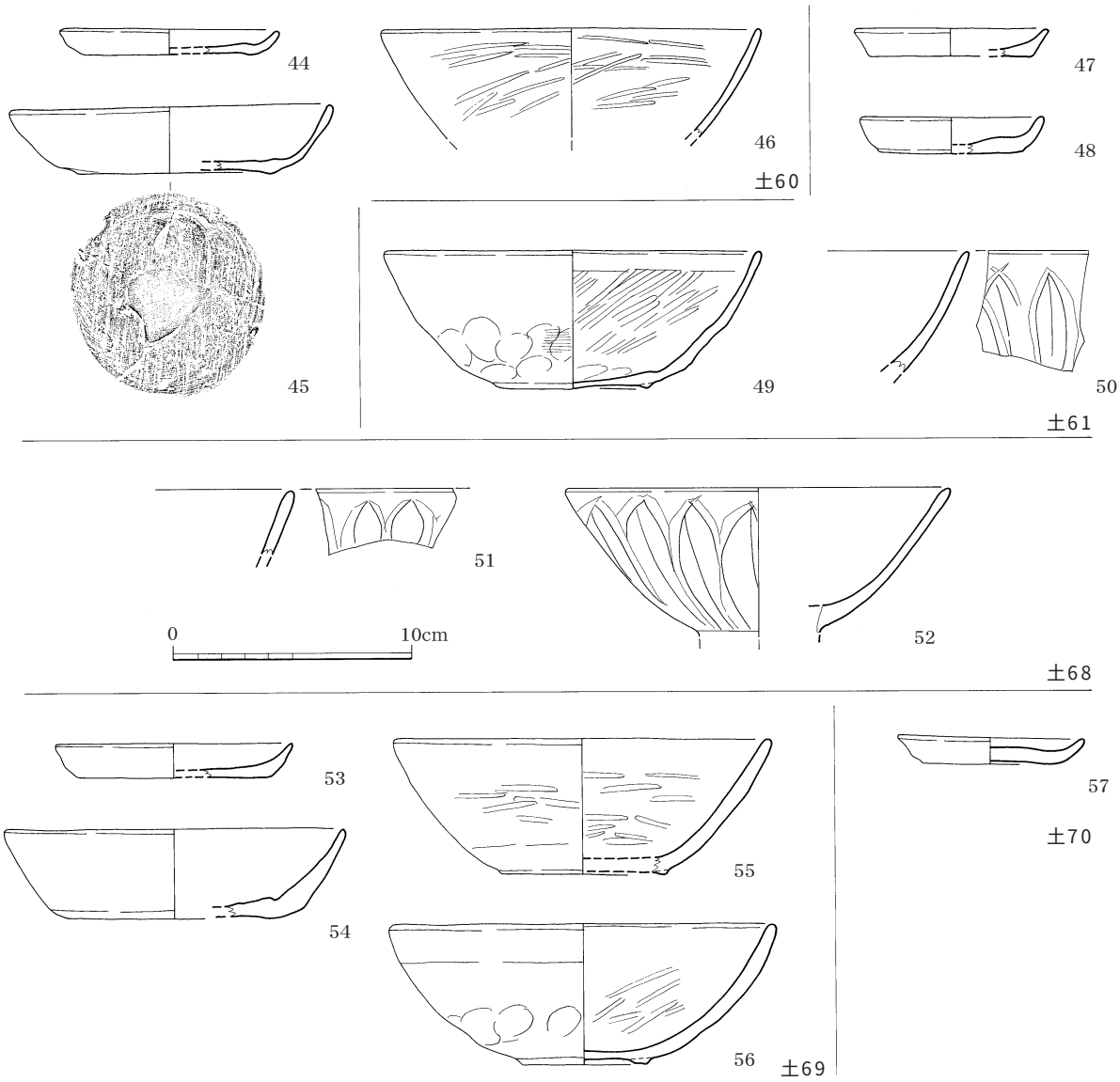


第140図　60・61・63・67号土坑実測図（1/30）

50は龍泉窯系の青磁碗である。体部外面に鎬蓮弁がみられ、釉は青味の強い青緑灰色で全体に薄くかかる。

63号土坑（図版46、第140図）

Ⅱ区西半部の北端で検出した遺構である。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向を北東－南西



第141図　60・61・68～70号土坑出土土器実測図（1/3）

に向ける。長軸143cm、短軸80cm、底面はほぼ平坦で深さは40cmを測る。壁は南東壁・北西壁は垂直に近い傾斜で立ち上がり、北東壁・南西壁は緩やかな立ち上がりとなる。覆土は上層に明灰褐色土、下層に暗灰褐色土、下層の一部に灰色味を帯びた砂層が堆積する。

土坑の規模や形状、周辺に墓坑が多いことから墓の可能性もあると思われるが、副葬品が出土していないため憶測の域を出ない。出土遺物には第163図14の砥石がある。

67号土坑（図版46、第140図）

Ⅱ区西半部の西端で検出した遺構である。平面形は長方形を呈し、長軸方向を南北に向ける。長軸283cm、短軸130cmの大きさを測り、床面はほぼ平坦で深さは25cmを測る。壁の立ち上がりは北壁・南壁は急傾斜で、西壁・東壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。覆土は暗灰褐色土や暗黄褐色土の自然堆積による。

68号土坑（図版46、第142図）

Ⅱ区西半部の中央付近で検出した遺構である。74号土坑と重複しており、これを切る。平面形は不整楕円形を呈し、長軸方向を北東－南西方向に向ける。長軸135cm、短軸110cmの大きさとなる。底面は平坦で深さは50cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、明瞭な稜をなさずに壁面から底面へと移行する。

覆土は上層に炭を若干含んだ暗灰褐色土、中層に黄灰色土を含んだ暗灰褐色土、下層に同じく黄灰色土を含んだ明灰褐色土が堆積する。

出土遺物（第141図）

51・52はともに龍泉窯系青磁碗である。51は口縁部小片で、外面に鎬蓮弁が施され、釉には貫入がみられる。52は底部を欠くが、体部外面に鎬蓮弁が施されている。内外とも貫入がみられる。

69号土坑（図版47、第142図）

Ⅱ区西半部の西側で検出した遺構である。平面形は不整形を呈しており、長軸180cm、短軸140cmの大きさを測る。底面は西側に向けて若干傾斜しており、検出面からの深さは東端で25cm、西端で15cmを測る。底面にはいくつかのピットがある。覆土は灰褐色土と黄灰色土からなる。

出土遺物（図版60、第141図）

53は土師器皿である。比較的口径の大きな個体で、底部は糸切りである。54は土師器坏である。体部はやや丸みをもって立ち上がり、底部は糸切りであるが板目の痕跡によりほとんどみえない。

55・56は瓦器椀である。55は 8 分の 1 程度の小片であるため、口径復元にやや不安が残る。焼成は良好で、内外とも粗いミガキにより仕上げられる。高台は低平な断面台形状を呈し、かなり形骸化している。56は内外とも磨滅しているが、外面下半には指オサエ、内面には斜め方向のミガキの痕跡が窺える。高台は径が5.2cm程度と小さく、断面が低平な台形状を呈する。

70号土坑（図版47、第142図）

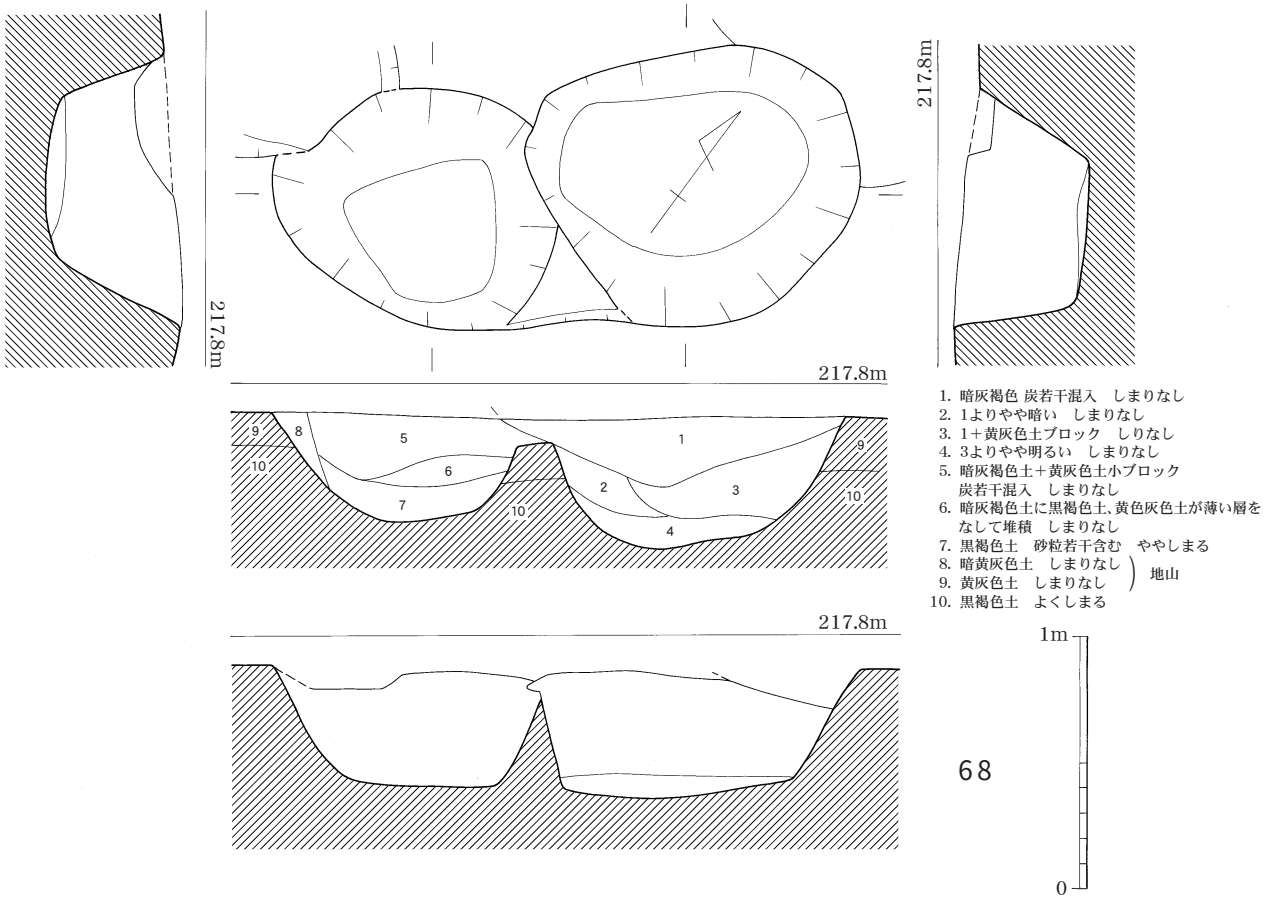
Ⅱ区西半部の西側で検出した遺構である。平面形は不整楕円形を呈し、長軸112cm、短軸98cm、底面までの深さは30cmを測る。底面の中央には径15cm、深さ25cmのピットがある。壁の立ち上がりは緩やかで、底面へ向かって擂り鉢状に傾斜する。覆土は灰褐色土からなり、層によっては黄灰色土がブロック状に混入する。また第 2 層には炭が多く含まれる。

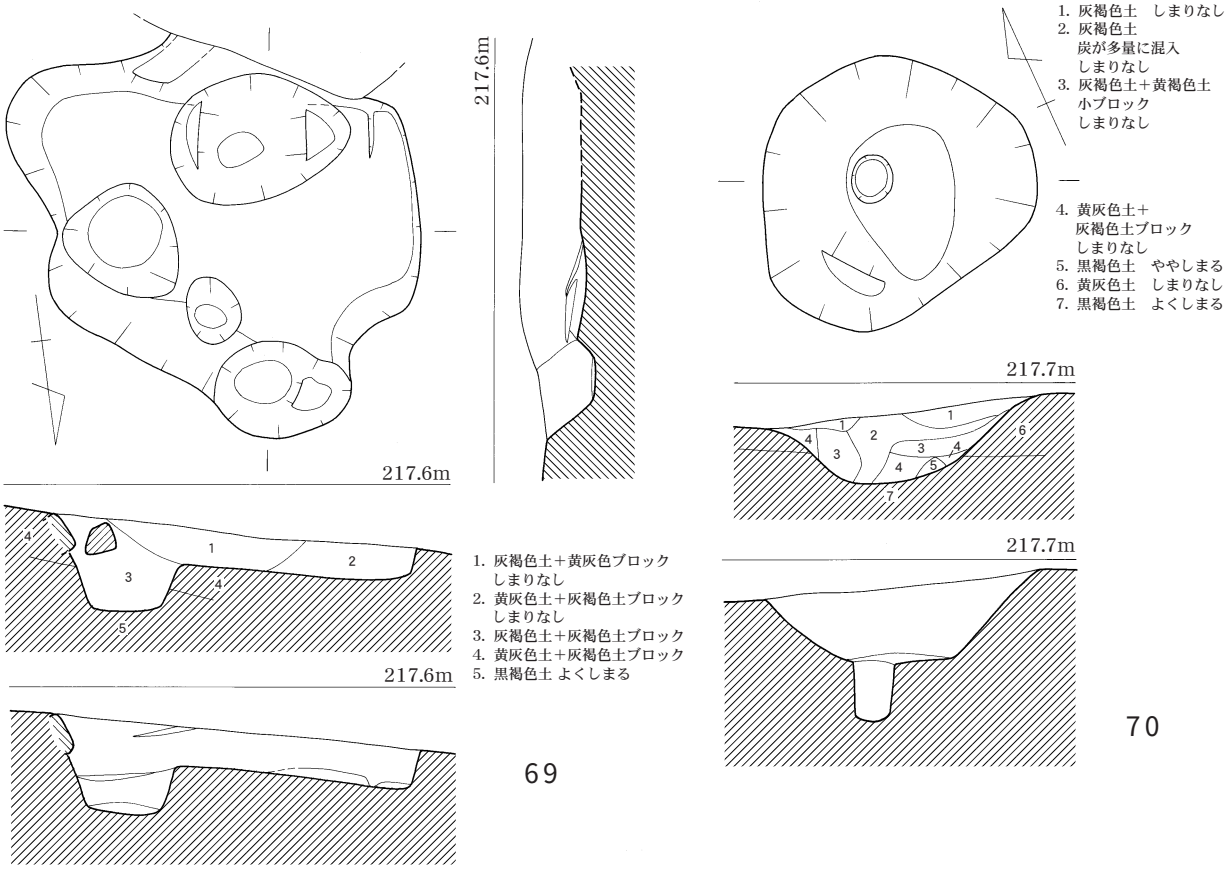
出土遺物（第141図）

57は土師器皿である。底部は糸切りで、内外ともにわずかに煤が付着する。

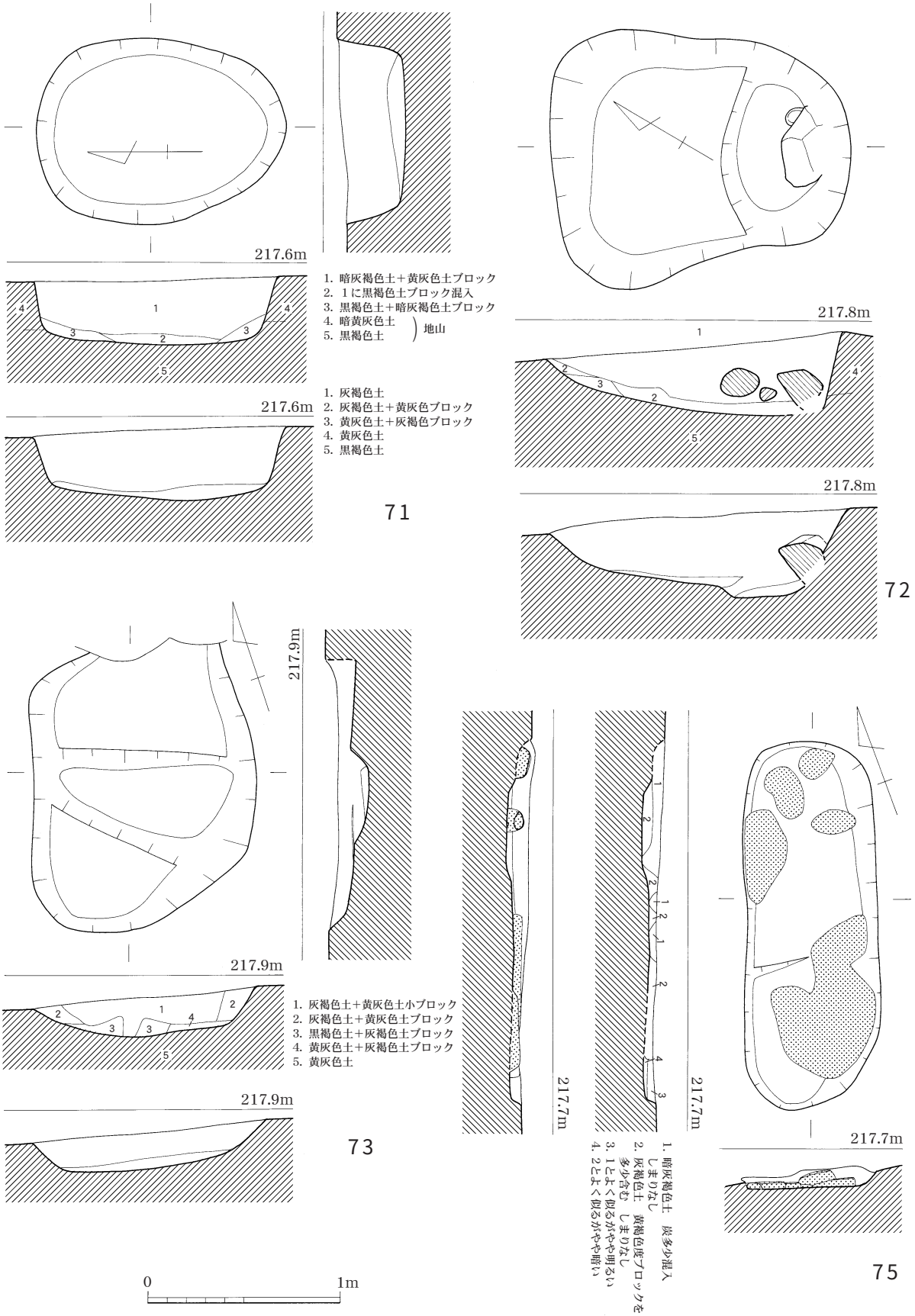
71号土坑（図版47、第143図）

Ⅱ区西半部の西側で検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸を南北方向に向ける。長軸130cm、短軸97cm、底面はほぼ平坦で、深さは33cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は上層に黄灰色土ブロックの混ざった灰褐色土が堆積し、底面近くにはこの層に黒褐色土ブロックが混ざる。出土遺物には第174図 2 の椀形鍛冶滓、10のガラス質滓がある。





第142図　68～70・74号土坑実測図（1/30）



第143図　71～73・75号土坑実測図（1/30）

72号土坑（図版48、第143図）

Ⅱ区西半部の西側で検出した遺構である。平面形は不整長方形を呈し、長軸方向を北西－南東に向ける。長軸156cm、短軸135cmを測る。底面は南側が若干深くなっており、検出面からの深さは40cm、北西側で深さ30cmを測る。覆土は灰褐色土が堆積し、下層付近には黄灰色土がブロック状に混ざる。

73号土坑（図版48、第143図）

Ⅱ区西半部の西側で検出した遺構である。平面形は不整形を呈し、長軸方向を南北に向ける。北側を一部他の遺構に切られるが、長軸150cm、短軸115cm、底面は中央付近が深くなっており、深さ15cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は灰褐色土に黄灰色土がブロック状に混入する。

74号土坑（図版46、第142図）

Ⅱ区西半部の中央付近で検出した遺構である。68号土坑と重複しており、これに切られる。平面形は不整楕円形を呈し、長軸方向を北東－南西方向に向ける。長軸115cm、短軸95cm程度の大きさになると思われる。底面は平坦で、深さは45cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、明瞭な稜をなさずに壁から底面へと移行する。覆土は上層に炭や暗灰色土のブロックを含んだ暗灰褐色土、中層に黒褐色土と貴灰色土が混ざった暗灰褐色土、下層に砂粒を若干含んだ黒褐色土が堆積する。

75号土坑（図版48、第143図）

Ⅱ区西半部の西端で検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸方向を南北に向ける。長軸190cm、短軸73cm、底面は北側が少し深くなっており、検出面からの深さは12cmを測る。土坑内の北側から礫が数個見つかったが、これらは地山に含まれる自然礫である。覆土は炭を含んだ灰褐色土からなる。

溝

1号溝（第144図）

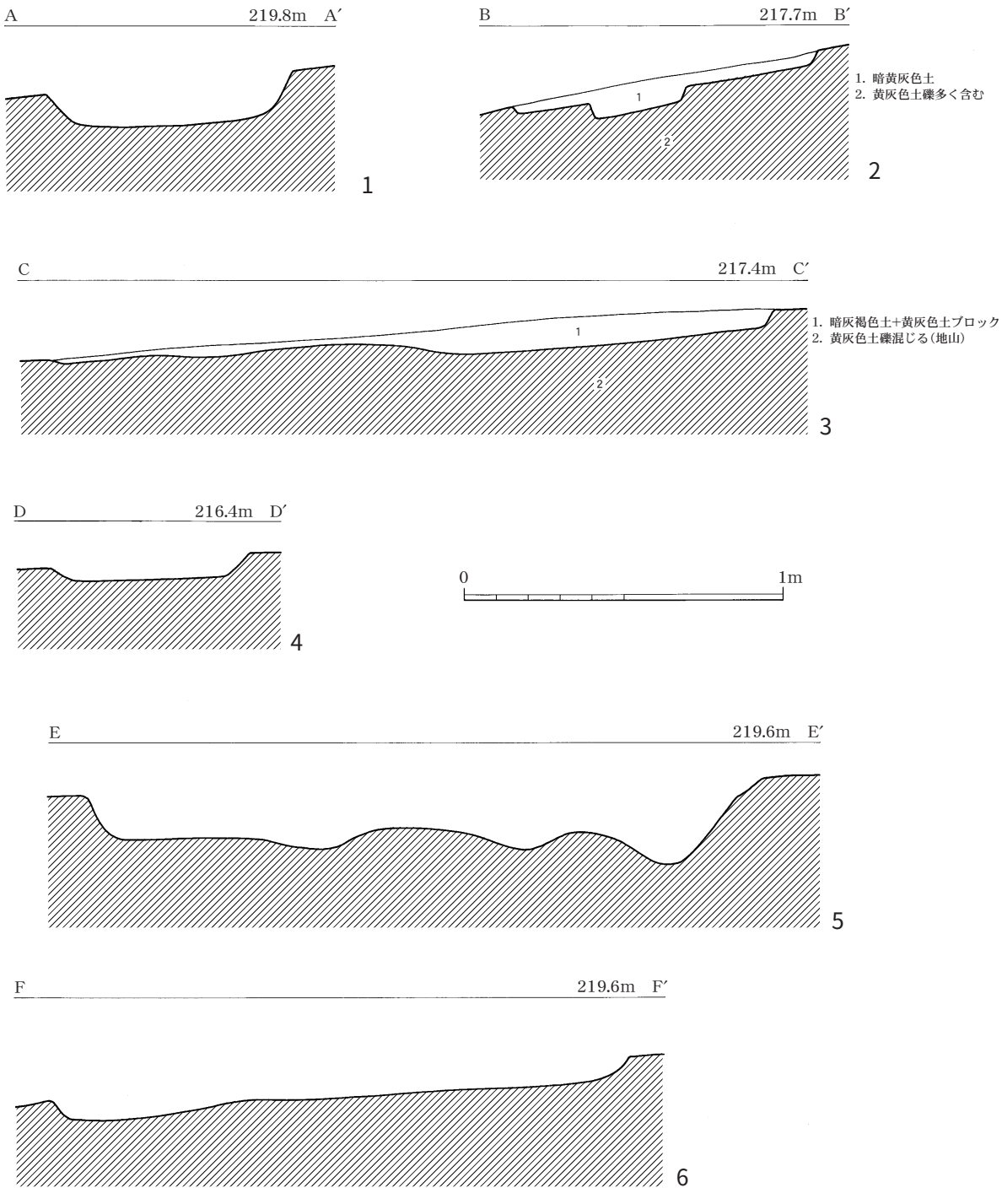
Ⅰ区東側に位置する遺構である。南北方向へと途切れながら直線的に伸びており、全長13.3m、幅80cm、深さは20cmを測る。覆土は灰褐色土からなる。

2号溝（第144図）

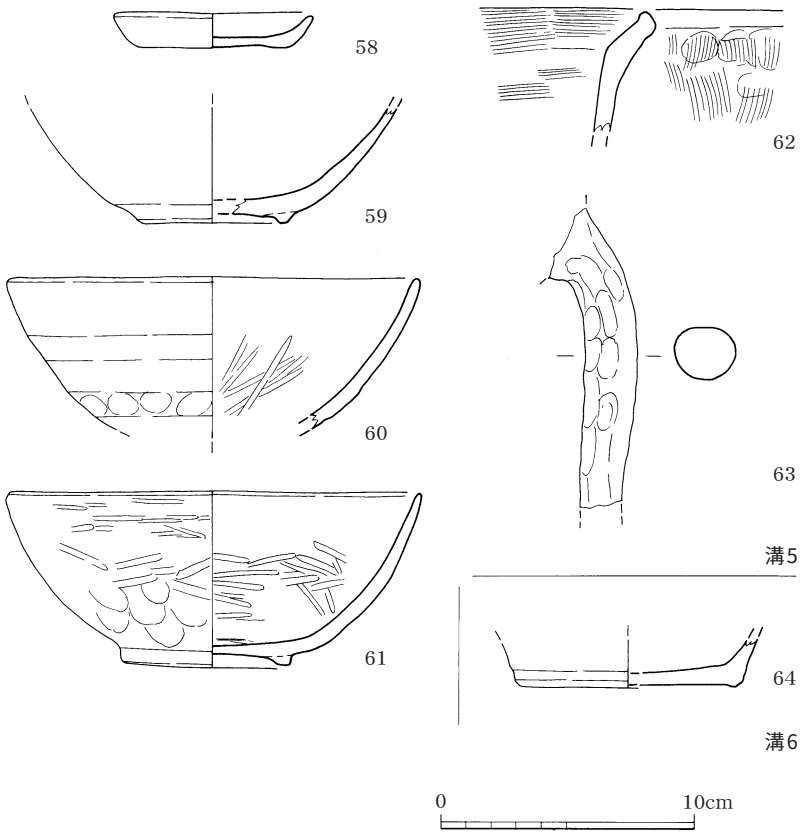
Ⅰ区中央付近に位置する遺構である。南北方向へと直線的に伸びており、全長で10.6m、幅は北側がかなり膨らんでおり250cm、南側で50cmを測る。深さは15cm前後である。覆土は暗黄灰色土の単一層である。

3号溝（第144図）

Ⅰ区南側に位置する遺構である。南北方向へと直線的に伸びており、全長で4.9m、幅は60～



第144図　1 ～ 6 号溝断面図（1/20）



第145図　5・6号溝出土土器実測図（1/3）

90cmを測る。深さは20cm。覆土は暗灰褐色土の単一層である。

4号溝（第144図）

Ⅰ区西側に位置する溝である。南北方向へと途切れながら直線的に伸びており、全長で15.3m、幅は50～90cm、深さは20cmを測る。覆土は暗灰褐色土の単一層である。

5号溝（第144図）

Ⅱ区東半部北側に位置する溝である。北西－南東方向へと伸びており、全長17m、幅は4.5mを測る。溝底面は幾条もの流路によって起伏があり、深さは20～30cmを測る。覆土は灰褐色土の単一層である。出土遺物には図示した土器の他に第170図19の鉄楔、27の刀子がある。

出土遺物（図版60、第145図）

58は土師器皿である。薄手であるが胎土はやや粗い。底部は糸切りである。59～61は瓦器椀である。59は底部付近の破片で、内外とも磨滅している。全体に少し厚手であるが、口縁部側に向かって薄くなる。60は外面下半に指オサエの痕跡がよく残り、内面はナデの後に粗いミガキで仕上げる。62は土師質の鍋である。口縁部がやや内湾ぎみに外反し、外面はタテハケ、内面はヨコハケにより成形される。上半部に煤が認められる。63は土師質足鍋の脚部片である。指オサエやナデによる成形の痕跡がみられ、上半部には煤の付着が認められる。

6号溝（第144図）

Ⅱ区東半部西側に位置する溝である。北東－南西方向へと伸びており、全長4.3m、幅は1.8m、深さは10cmと浅い。覆土は暗灰褐色土である。出土遺物には第162図８の滑石製石鍋がある。

出土遺物（第145図）

64は土師器坏である。底径からするとやや小振りの坏で、内外ともヨコナデで調整し、底部は糸切りの後に板目の圧痕がつく。

3号集石（図版48・49、第146図）

Ⅲ区南側に位置する遺構である。調査前から石塔類が視認できたため、調査時に清掃を行い、記録類を作成するに至ったものである。

もともと岩塊が集中していた場所のようであり、近世以降の耕地造成の際にはその岩塊を取り込むように石垣を築いている。この集石の上面には五輪塔や宝篋印塔、石臼や陶磁器片が散乱しているが、これらはもともとこの周囲にあったものを、耕作の際に邪魔になるためにこの場所に集めたのではないかと思われる。集石中央にある石塔は、五輪塔の地輪・水輪に宝篋印塔の相輪が組み合わされる。

出土遺物には図示した土器・陶磁器の他、第165図20～23、第166図27の五輪塔の一部、第166図24の宝篋印塔の相輪、第167図26・第169図31の茶臼の一部、第167図28・第168図29・第169図30・32の粉挽臼の一部、第170図22の鉄製鋤先がある。

出土遺物（図版60・61、第147・148図）

65・67・68は磁器碗である。65は小碗で、腰の深みはない。外面には簡単な草花文を描き、高台付近には圏線をめぐらせる。釉が薄い乳白色であるため、文様がやや薄くみえる。67は３分の１ほど残存し、体部外面に草花文、高台付近に圏線、高台内面に記号が描かれている。釉は若干青味のある透明釉で、畳付きのみ露胎である。68は小碗で、外面に草花文を、腰部と高台外面に圏線を描く。また高台内面に文字が書かれているが判読はできない。釉は若干青味を帯びた透明釉で、畳付きのみ露胎である。

66は施釉陶器碗である。少し高めの高台に腰の深い体部がのる。釉は薄い乳白色で細かい貫入がみられ、畳付きのみ露胎である。胎土は淡黄白色である。

69は褐釉陶器碗である。体部は低く広がり口縁部付近で垂直に立ち上がる。釉は暗茶褐色の褐釉で、畳付きのみ露胎で、見込み部分は油滴により黄褐色～暗緑色に発色する。胎土は明灰色である。

70は陶製の仏飯器である。口縁部と体部の境が少し強く折れ、脚部上端付近に稜がみられる。皿部内面から脚部上端付近にかけて褐色の釉がかけられ、脚部から高台内までは露胎である。皿部の見込みには黄褐色の釉がかけられ景色をつくる。

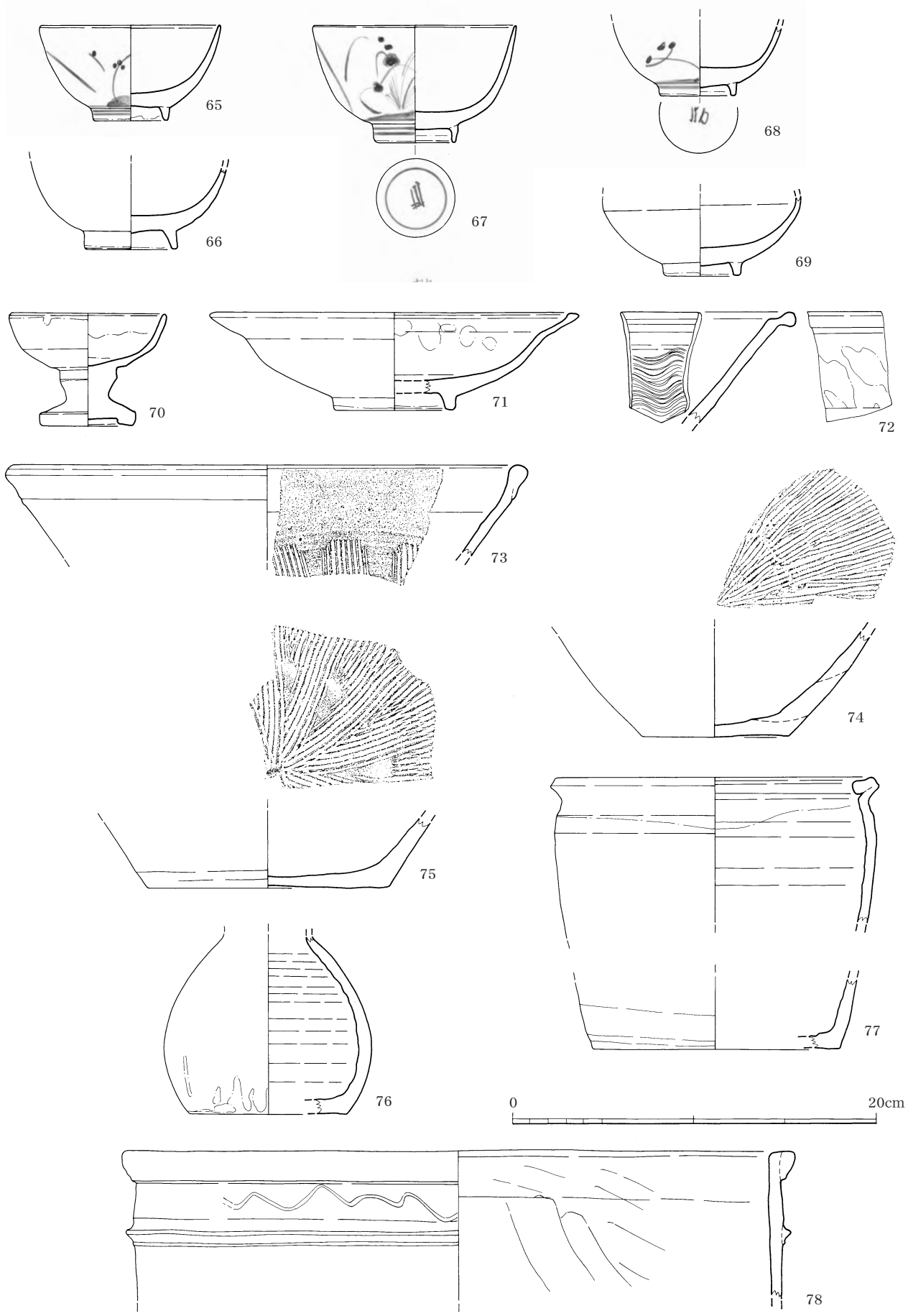
71は施釉陶器の高台付皿である。低平に開く体部で、口縁部付近で一度屈曲し、口縁端部は内側に肥厚させる。釉は緑茶色を呈し内面には暗緑色の釉を垂らす。畳付きのみ露胎で、見込みは大きな蛇の目剥ぎを行う。内外とも細かい貫入がみられる。

72は施釉陶器鉢である。釉は乳白色で内面から外面にかけて施されるが、体部の中央付近から下半は釉を剥いでいる。内面には波状文が描かれる。胎土は赤褐色である。

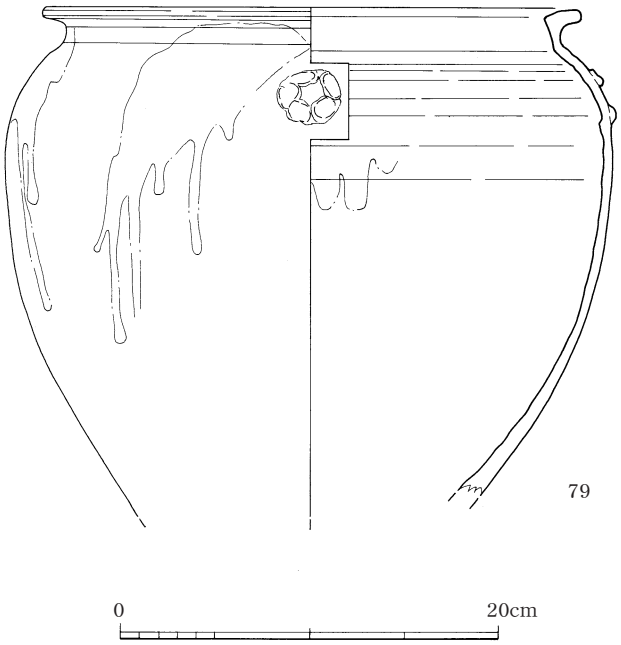
73～75は陶製擂鉢である。73は口縁部片で、口縁部を少し肥厚させる。口縁部より下がった位置から擦り目が施され、拓本では見えづらいが10本を単位とする。薄く透明釉がかかり、胎土は赤褐色である。74は底部片で、暗茶褐色を呈する。内面には擦り目が密に施され、底部外面には胎土と異なる目土が付着している。75も底部片で、内面には放射状に摺り目が施されている。底部にはわずかであるが、板目の痕跡が認められる。

76は陶製壺である。体部下半に重心があり、外面に褐釉が施される。内面は露胎で轆轤ナデの痕跡が明瞭に残る。胎土は薄い赤白色である。

第146図　3 号集石実測図（1/40）



第147図　3 号集石出土土器実測図①（1/3）



第148図　3号集石出土土器実測図②（1/4）

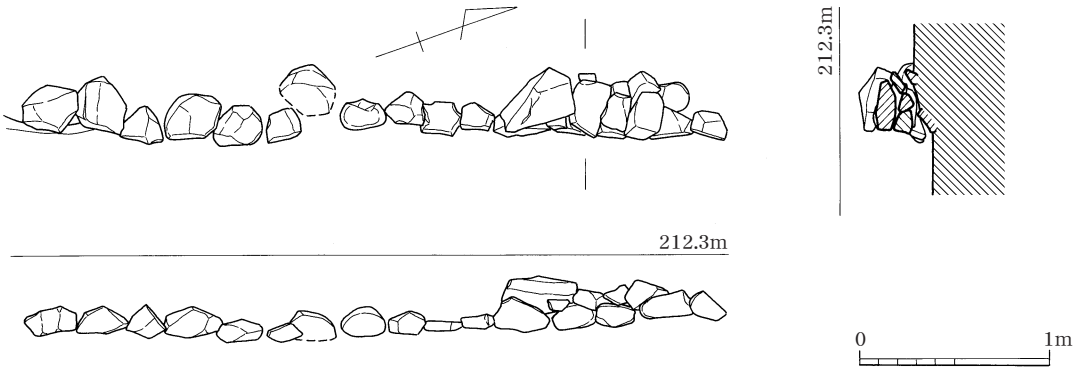
77は陶製の鉢である。底部は平底で、体部はやや開き気味に立ち上がり、口縁部は一度外へくの字に折れてから内側に折り返す。口縁部の内外面のみ露胎で、体部から底部までは内外とも黄白色の釉が施される。胎土は暗赤褐色で、少し砂粒が目立つ。

78は土師質の火鉢である。体部は垂直に立ち上がり、口縁部は外面が肥厚し、体部のやや上寄りに小さな突帯がめぐり、口縁部と突帯との間にはヘラ描きの波状文が雑に施されている。外面は削り気味の調整で、内面はハケ状工具による調整の痕跡が窺える。

79は褐釉壺である。底部を失っているが、上半部は概ね完形である。肩が張る形状で頸部が短く立ち上がってから口縁部が外へ折れる。肩部には2か所に花状の飾りを張り付けている。釉は褐色であるが、肩部外面には数か所白色の釉を掛け流しており、白色釉の部分はやや緑がかった発色となる。

石列（図版49、第149図）

Ⅱ区南側にあり、3号集石に続く石垣近くで検出した遺構である。20～30cmの礫を3.8mの長さで直線的に並べており、東側に小口面を揃えるように据え置かれている。現状では東側には石垣が組まれているが、この状況から推測すると以前は東側が開けた土地として利用されていたのかもしれない。北側は部分的に2段に置かれることから、本来は複数段の石が組まれていた可能性もある。



第149図　石列実測図（1/40）

ピット

P361・362（図版50、第150図）

Ⅰ区西側で検出したピットである。両ピットは20cmの間隔を置いて並列する。東側に位置するP361は長軸60cm、短軸47cm、深さ6cmで、覆土である暗灰褐色土中には炭・椀形鍛冶滓やガラス質滓・小鉄片などを多く含んでいた。西側に位置するP362は長軸67cm、短軸52cmでP361とほとんど変わらない大きさである。深さは5cm程度である。覆土は灰黄褐色粘質土で炭が若干含まれる。これら2基のピットはいずれも鍛冶炉と思われ、出土した椀形鍛冶滓には底面に炉床土が付着するものや木炭が付着するものがみられ、おそらく最初に浅い掘り込みを行い、粘土を張り、その上に木炭片で炭層を設ける構造であったと推測される。なお、今回の調査では羽口が1点も出ていないが、ガラス質の滓も出土しており羽口が存在していた傍証となろう。

出土遺物は第174図3・4・5・6の椀形鍛冶滓、11・12のガラス質滓が出土した。

P875（図版50、第150図）

Ⅱ区西半部北側で検出したピットである。平面形は楕円形を呈し、長軸90cm、短軸65cm、深さは50cmを測る。遺構精査時に完形の瓦器椀が出土したために墓の可能性を考えて周辺を精査したが、墓坑の形状をなさないためピットとして報告するものである。

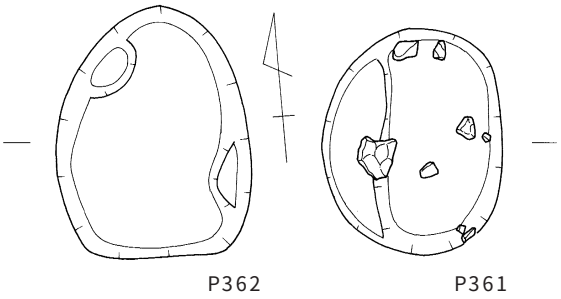
ピット出土土器（図版61・62、第151～155図）

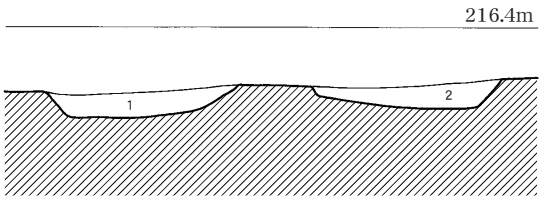
ここではピットから出土した土器のうち、図示し得たもののみ紹介する。

80～112は土師器皿である。

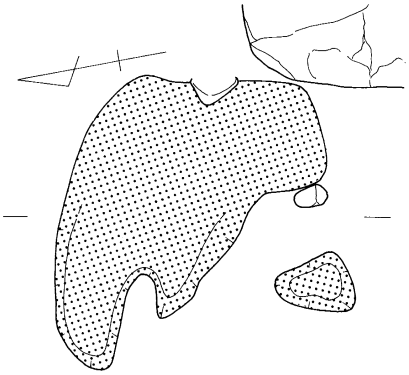
80は唯一底部ヘラ切りで、内底面に回転ナデの痕跡がよく残る。色調は褐色である。P482出土。81は口縁部が垂直気味に立ち上がり、底部は糸切りである。色調は淡褐色を呈する。P28出土。82は完形である。やや焼成が甘く、明赤褐色を呈し、底部は糸切りである。P385出土。83は底部糸切りで、やや磨滅気味であるが板目痕跡が残る。色調は明橙褐色である。P508出土。84は底部糸切りで、板目痕跡が残る。内外ともやや煤けている。P22出土。

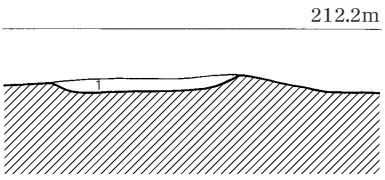
85は口縁部まで滑らかに伸び、底部は糸切りで少し板目痕跡がみられる。色調は淡灰褐色で、内外とも一部に煤が付着する。P166出土。86はやや磨滅気味であるが、底部糸切りである。色調は淡灰褐色を呈する。P116出土。87は口縁部がやや外反し、底部は糸切りで板目痕が残る。色調は淡褐色を呈する。P23出土。88は2分の1ほど残存し、口縁部を若干外反させる。底部は糸切りで、板目の痕跡がみられる。色調は淡褐色を呈し、内外とも煤が付着する。P224出土。89は底部がやや厚く、底部外面は糸切りで若干板目痕跡が残る。色調は淡橙褐色を呈する。P10出土。90はやや薄手で、底部は糸切りであるが板目痕跡が強く残る。色調は淡灰褐色を呈し、胎土中に雲母が目立ち、内外とも煤が付着する。P69出土。91は底部糸切りで、板目痕が少し残る。胎土がやや粗く、雲母が目立つ。内外とも一部に煤がみられる。P10出土。92はやや低平である。底部は糸切りで板目の圧痕と粗いナデによりほとんどみえない。色調は淡褐色を呈する。P747出土。93はやや薄手で、底部は糸切りであるが板目痕跡によりほとんどみえない。色調は褐色を呈する。P953出土。94は完形である。口縁部が外反する形態で、底部は糸切りである。色調は淡茶褐色を呈する。P616出土。95は内外とも磨滅気味であるが、底部は糸切りで板目痕がわずかに残る。色調は内





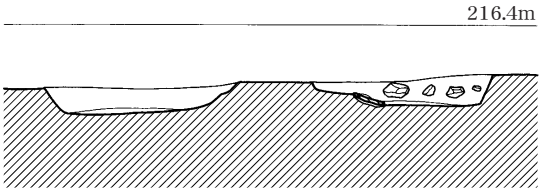
1. 灰色褐色粘質土(若干炭混じる)
2. 暗灰褐色土(炭、鉄宰、小鉄片など含む)



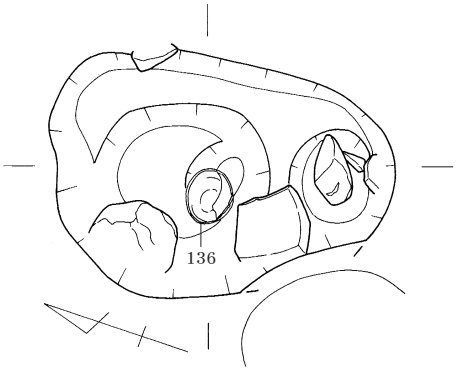


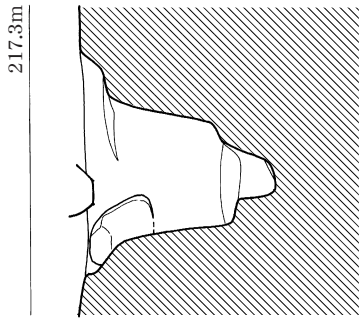
1. 暗茶褐色土(焼土及び炭を含む)

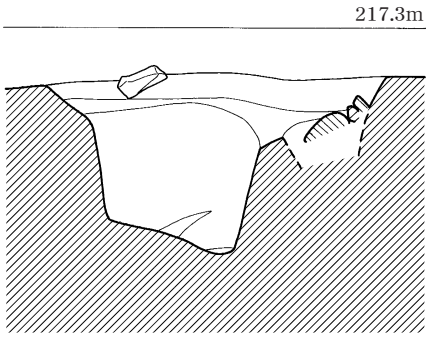
焼土



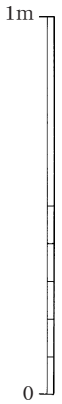
P361・362







P875

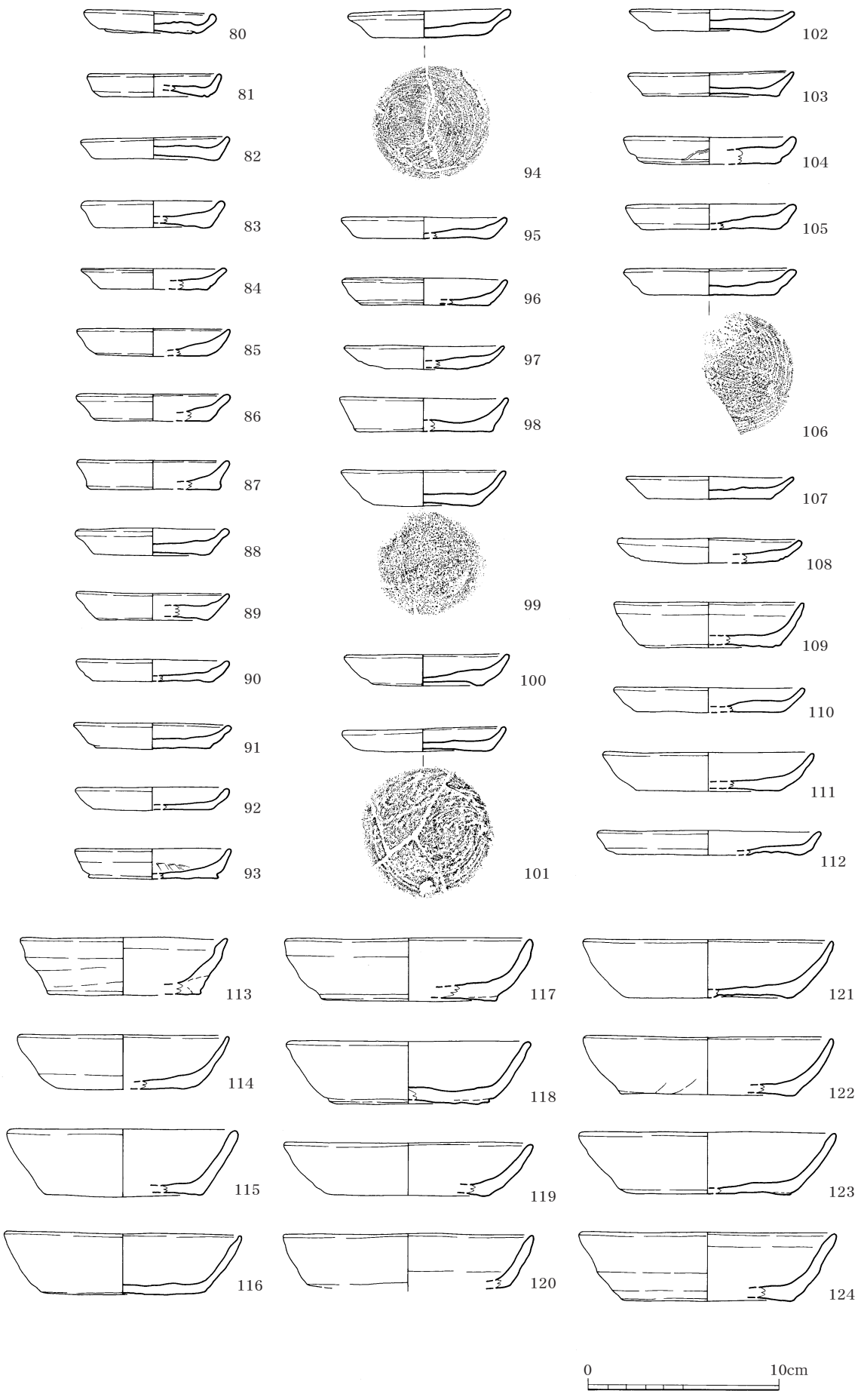


第150図　ピット・焼土実測図（1/20）

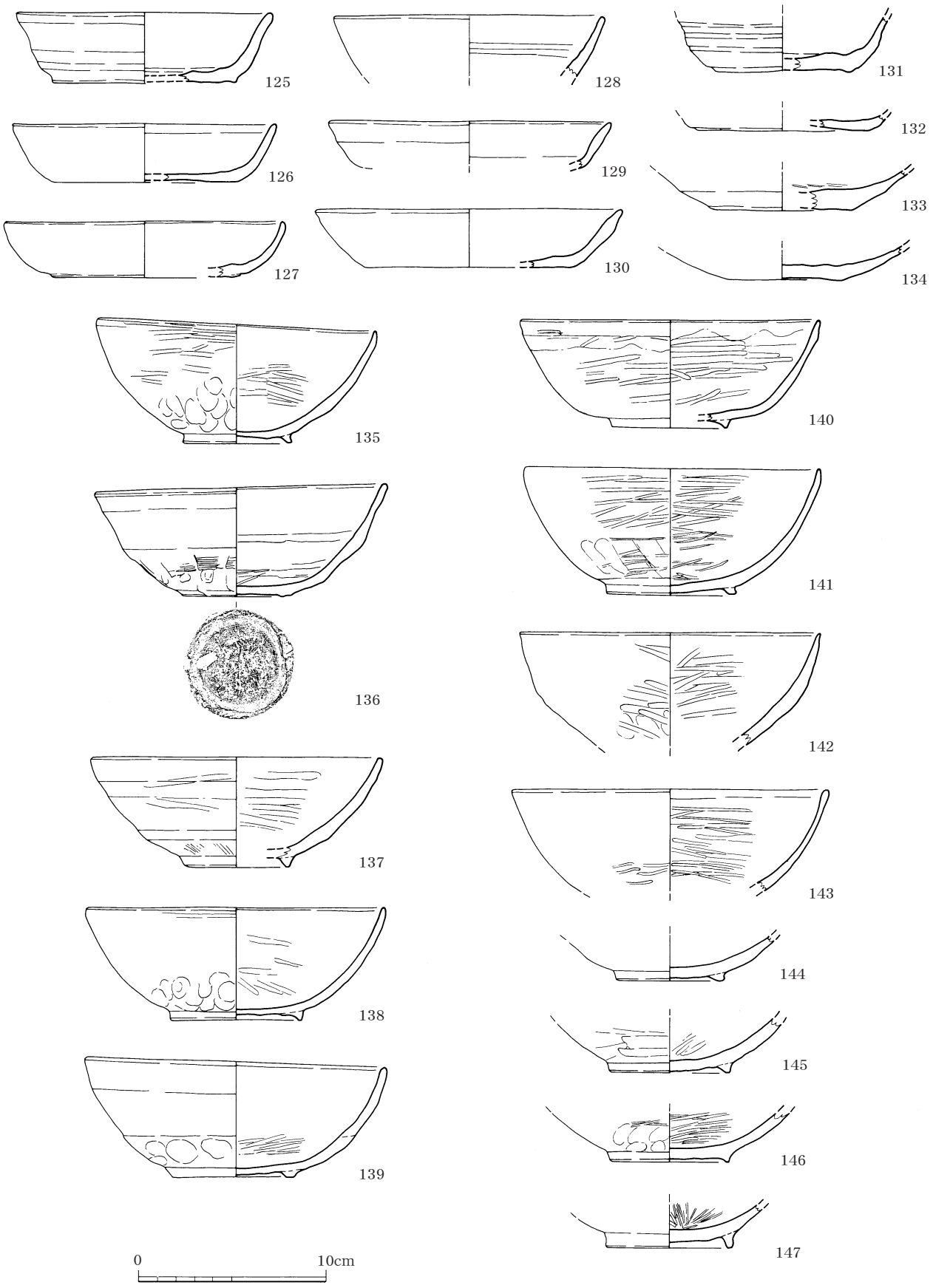
面が明橙色、外面が灰黄褐色を呈する。P119出土。96は少し薄手で、底部は糸切りで板目痕が残る。色調は淡褐色を呈し、胎土中には雲母が目立つ。P207出土。97は低平で、口縁部も開き気味に伸び、底部は糸切りで板目痕が少しみられる。焼成は良好で色調は明橙色を呈する。胎土中には１cm大の砂礫も含まれ、雲母が目立つ。P271出土。98は器高が高く、底部は糸切りで板目の痕跡が残る。色調は明褐色を呈し、口縁端部付近に一部煤が付着する。P205出土。99は焼成が甘くやや瓦質で、色調は白色を呈し、口縁部付近のみ灰色を呈する。底部は糸切りである。100は完形である。口縁部が若干内湾し、底部は糸切りである。口縁端部に２か所煤がみられる。色調は淡褐色である。P486出土。101は概ね完形である。底部は糸切りで、わずかに板目の痕跡がみられる。色調は明橙色を呈する。P673 出土。102は口径の割に底部径が小さいのが特徴である。内面には回転ナデの痕跡がよく残り、底部は糸切りで板目痕跡が残る。色調は明褐色を呈する。P674出土。103は完形である。やや低平である点が特徴で、底部は糸切りで板目痕が少し残る。色調は淡黄褐色である。P172出土。104は全体に厚手で、底部は糸切りである。色調は灰褐色を呈し、内外とも煤が付着する。P158出土。105は底部糸切りで、板目痕跡が残る。色調は淡褐色を呈する。P415出土。106は２分の１程度残存している。底部は糸切りで、若干板目痕が残る。色調は明橙褐色を呈する。P805出土。107は低平で、底部は糸切りで少し板目痕跡が残る。色調は明橙褐色を呈する。P941出土。108は底部糸切りで、板目の痕跡も残る。胎土中に雲母が目立ち、色調は内面が赤褐色、外面がにぶい灰褐色を呈する。P744 出土。109は器高が高いのが特徴で、底部は糸切りで板目の痕跡がみられる。色調は淡灰褐色から灰色を呈し、胎土は精良である。P119出土。110は底面が糸切りである。色調は橙褐色を呈し、胎土中に雲母が目立つ。P823出土。111は焼成不良のため軟質である。底部は糸切りで、板目の痕跡が認められる。色調は灰色～灰白色を呈する。P747出土。112は小片であるため、口径復元に不安がある。底部は糸切りであるが、板目の痕跡により大半は消されている。色調は褐色で、内外とも一部黒斑がある。P547出土。

113～134は土師器坏である。

113は糸切り底である。口縁部付近を強くナデるため、屈曲している。色調は黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。P932出土。114は底部糸切りで、板目痕跡がみられる。色調は褐色～灰褐色を呈し、胎土中には雲母が目立つ。P119出土。115は若干厚手で、底部は糸切りでわずかに板目の痕跡が残る。焼成は良好で、色調は明褐色である。P705出土。116は概ね完形である。口縁端部を少しつまみあげるのが特徴で、底部は糸切りである。色調は明橙褐色を呈する。P482出土。117は底部糸切りで、色調は明灰褐色を呈する。P166出土。118は外面の焼成がやや甘いが、底部は糸切りで一部に板目の痕跡がみられる。色調は淡灰褐色で、底面に黒斑がある。P166出土。119は焼成がやや甘く磨滅気味であるが、底部は糸切りである。色調は淡褐色で、外面に一部煤が付着する。P155出土。120はやや磨滅気味であるが、底部の糸切り痕は明瞭に残る。色調は明橙褐色を呈する。P348出土。121は底部糸切りで、板目の圧痕が強くつく。焼成は良好で、色調は淡灰褐色～明橙色であるが、内面はほとんど黒色を呈する。P119出土。122は口縁部内面に重ね焼きの痕跡が残り、底部は糸切りで板目の痕跡が明瞭に残る。色調は淡褐色～灰褐色を呈する。P522出土。123は底部糸切りである。色調は淡灰褐色から暗灰褐色を呈し、外面の一部に煤がみられる。P166出土。124は焼成不良で、全体に磨滅しているが、底部は糸切りの痕跡がわずかに残る。色調は黄褐色を呈する。P450出土。125は体部が少し外反し、外面には回転ナデの痕跡がよく残



第151図　ピット出土土器実測図①（1/3）

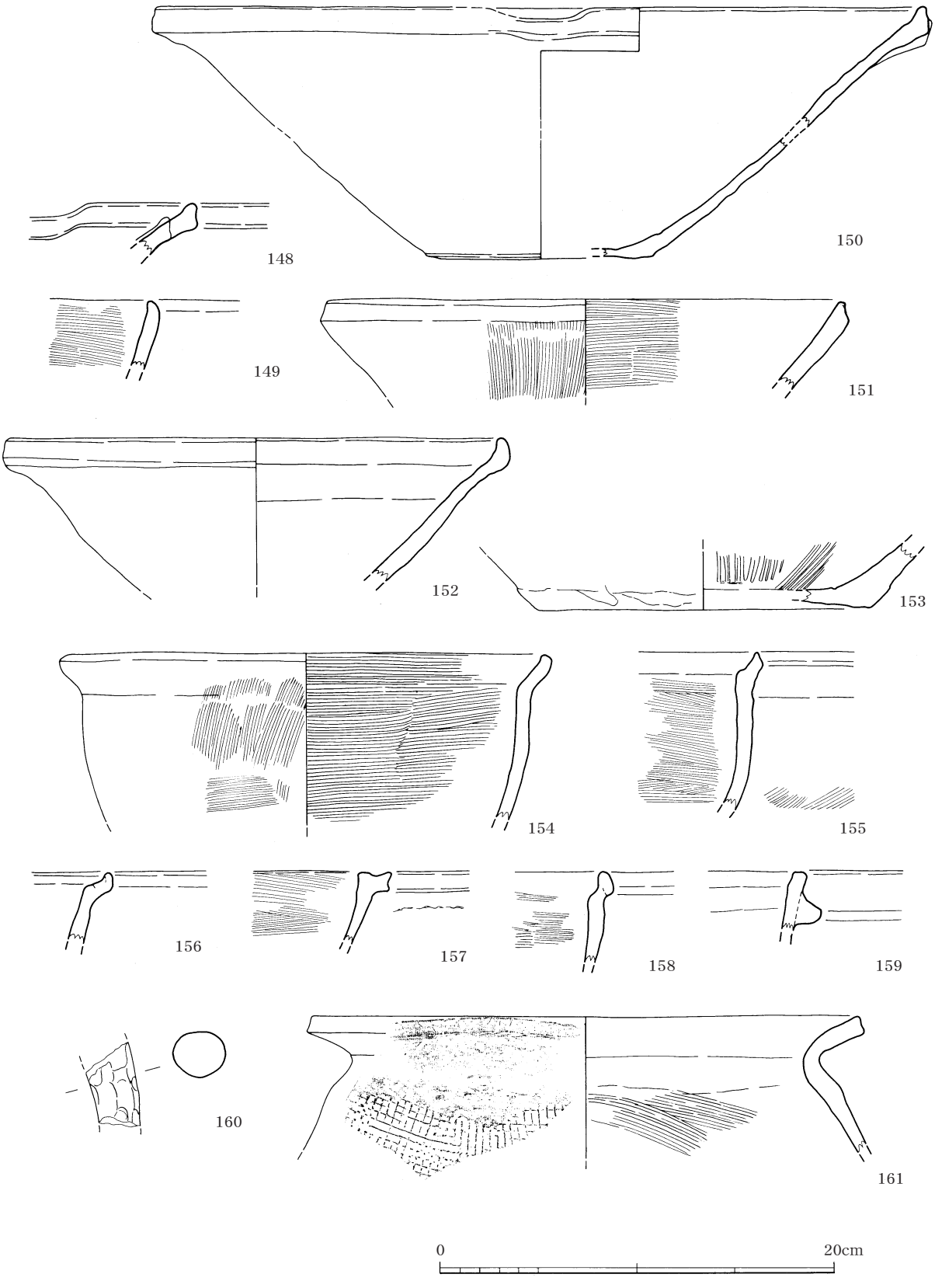


第152図　ピット出土土器実測図②（1/3）

る。底部は糸切りで、若干板目の痕跡が残る。色調は淡褐色を呈する。P1004出土。126は底部糸切りで、板目痕跡が少し残る。色調は黄褐色～橙褐色を呈し、胎土中には雲母が目立つ。外面の一部に煤が付着する。P414出土。127は体部に丸みをもち、底部は糸切りである。色調は明褐色を呈する。P115出土。128は口縁部片で、内面に回転ナデの痕跡が良く残る。色調は褐色～灰褐色を呈し、内面には煤が付着する。P892出土。129は小片である。色調は淡橙褐色を呈する。P341出土。130は底部糸切りで、板目らしき痕跡がわずかに残る。色調は明赤橙色を呈し、内面の一部に煤が付着する。P166出土。131は底部片で、体部外面に回転ナデの痕跡がよく残り、底部は糸切りである。色調は淡橙褐色を呈する。P891出土。132は底部片で、底部に糸切り痕が残る。色調は淡灰褐色を呈するが、内面はかなり煤が付着しており黒色となる。P241出土。133は底部片で、径に対して底部径が小さく、坏というよりも皿とする方が適切か。底部は糸切りである。色調は灰褐色で、断面は褐色を呈する。P370出土。134は底部片で、やはり皿となる可能性もある。底部は糸切りで、糸の痕跡が体部下半にまで及ぶ。胎土は精良で、色調は淡橙褐色を呈する。P385出土。

135～147は瓦器椀である。

135はやや焼成が甘く全体に磨滅気味である。外面は下半部に指オサエを行い、上半部に横方向の粗いミガキを施す。内面は一部に横方向のミガキがみられる。高台は小さいながらも外へ踏ん張る形をとる。P492出土。136はほぼ完形で、焼成も良好である。外面下半には指オサエの痕跡が明瞭に残り、内面にはかなり粗く螺旋状ミガキを施す。高台はわずかに逆台形状をなすが、ほとんど退化している。内外とも重ね焼きの痕跡が明瞭である。P875出土。137は焼成良好で、重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。外面の下半はハケ調整をナデ消しており、内外とも粗い横方向のミガキで仕上げる。138は焼成がやや甘く磨滅気味で、体部外面下半に指オサエの痕跡が明瞭に残り、内面にはわずかながらミガキの痕跡が認められる。高台は断面三角形を呈する。内外とも重ね焼きの痕跡が窺える。P492出土。139は焼成不良で、半ば土師質になっている。内外とも磨滅が著しいが、外面下半には指オサエ、内面は横方向のミガキの痕跡が窺える。高台は本来断面三角形であるが、板目の圧痕によりほとんど逆台形状になっている。色調は淡赤褐色～黄褐色を呈し、底部のみ灰褐色である。P729出土。140は若干焼成不良であるが、重ね焼きの痕跡は明瞭である。内外とも横方向のミガキで仕上げる。高台は断面逆台形に近い。P743出土。141は焼成良好で、内外とも重ね焼きの痕跡が残る。外面は下半に指オサエを行い、上半は横方向のミガキで調整する。内面は横方向の粗いミガキを施す。高台は断面三角形である。P876出土。142は焼成良好である。外面下半には指オサエ、外面上半と内面には横方向のミガキを行う。内外とも重ね焼きの痕跡が明瞭で、外面には煤がかなり付着している。P519出土。143は口縁部片で、焼成は良好である。内外とも粗い横方向のミガキで仕上げる。内外とも重ね焼きの痕跡が残る。P747出土。144は高台片で、やや焼成が甘く全体に磨滅している。高台は断面三角形を呈する。P28出土。145は底部片である。焼成は良好で、体部下半には工具による調整とミガキを行い、底部は回転ヘラ削りを行う。内面は粗くミガキを行う。高台は断面三角形を呈し、板目の圧痕により一部台形状となる。P240出土。146は底部片で、焼成は良好である。外面には指オサエを行い、内面は横方向のミガキで仕上げる。高台は小さな断面三角形を呈し、板目の圧痕で一部つぶれている。P833出土。147は底部片で、焼成は良好である。内面には粗いミガキが施される。高台は他の個体に比べると比較的高めである。見込み部分には重ね焼きによる痕跡が残る。P1054出土。



第153図　ピット出土土器実測図③（1/3）

第154図　ピット出土土器実測図④（1/4）

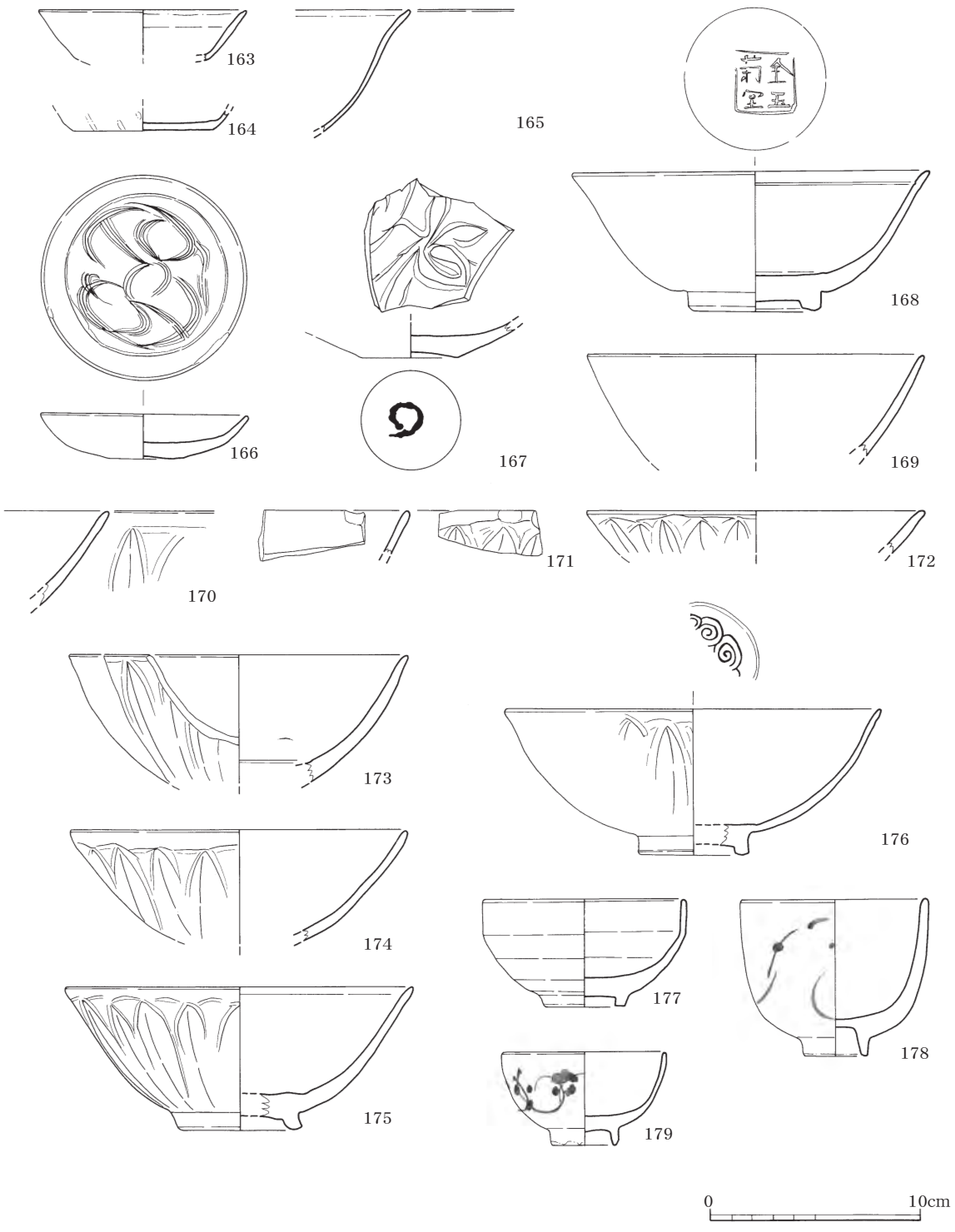
148～152は鉢である。

148は東播系の須恵質片口鉢の口縁部片で、焼成は良好である。口縁部外面に段を有し、成形後に一部を折り曲げ片口とする。P747出土。149は瓦質片口鉢である。内外ともヨコナデで仕上げ、口縁端部をわずかに折り曲げて片口とする。口縁付近は焼成が良好で灰色～暗灰色を呈し、体部及び底部は灰白色を呈する。P508出土。150は瓦質鉢であるが、焼成が甘く土師質になっている。外面の調整は不明瞭であるが、内面は細かいヨコハケにより調整する。色調は内外とも黒色で、断面は黄灰白色を呈する。P397出土。151は土師質の鉢である。口縁端部は粘土を付加して成形するが、一部は粘土がはがれて接合面が現われている。外面はタテハケ、内面はヨコハケにより調整する。P102出土。152は瓦質の鉢である。口縁部を内側に曲げるため、外面は段となる。内外とも磨滅により調整が不明瞭であるが、概ねヨコナデである。外面には全体に煤が付着している。P864出土。

153は陶製擂鉢の底部片である。底部はナデ調整で凹凸が激しいものの体部はヨコナデにより丁寧に仕上げられている。内面には10本を単位とする擦り目が施されている。色調は暗赤紫～暗青灰色を呈し、胎土も同様の色調となる。P385出土。

154～159は鍋である。

154は口縁部片で、焼成は瓦質である。外面はヨコハケ及びタテハケ、内面はヨコハケで調整し、外面の口縁部より下にはかなり煤が付着している。P813出土。155は土師質の鍋で、外面い煤が多量に付く。外面は斜めハケ、内面はヨコハケで調整する。色調は内面が淡褐灰色で外面は暗灰褐色を呈する。P397出土。156は土師質鍋で、焼成はやや甘い。口縁部を外側に折り曲げて、最



第155図　ピット出土土器実測図⑤（1/3）

後に端部を上方へつまみあげる。外面は薄く煤けている。P305出土。157は土師質鍋であるが、焼成が良好で瓦質にも近い。口縁部を受口状につくり出す点が特徴で、単純に屈曲させる156とは趣を異にする。外面の調整は不明瞭であるが、内面はヨコハケで調整する。外面には接合痕が明瞭に残る。P890出土。158は土師質鍋の口縁部片で、端部外面に粘土を付加して受口状に整える。

内外とも磨滅が著しいが、内面には細かいヨコハケの痕跡が残る。P42出土。159は羽釜状の突帯を有する鍋の口縁部片である。焼成は良好で、瓦質である。内外ともハケ調整を行い、外面には煤が付着する。P772出土。

160は足鍋の脚部片である。焼成は土師質で、ナデによる整形痕がみられ、一部に煤が付着する。P781出土。

161は瓦質の甕である。外面は正格子の叩きが行われ、内面はヨコハケで調整する。色調は内外とも灰黒～黒色を呈し、断面は灰白色を呈する。P823出土。

162は瓦質の大甕である。頸部は短く口縁部外面を肥厚させる。外面は格子の叩きを施し、内面はタテハケ後に粗いヨコハケで調整する。P446出土。

163～165は白磁である。

163は直線的に開く口縁部をもつ皿の破片で、底部を失っているが、無高台の可能性もある。釉は乳白色を呈し、口縁端部の内面は露胎でいわゆる「口禿」である。P674出土。164は皿底部片である。底部は糸切りで、見込み外縁は小さな段を設けて圏線とする。釉はやや青味のある白色で、基本的に全面施釉であるが底部外面の施釉は粗い。P824出土。165は碗の口縁部片で、体部は薄手である。釉調は乳白色を呈し、口縁端部の内外が露胎となる「口禿」である。P851出土。

166は青白磁の皿である。無高台の底部からほぼ水平にひろがり、口縁部が斜めに立ち上がる。底部の調整はヘラ削りである。釉は淡青色で薄くかかり、底部のみ露胎で、底部に少しだけ目土が残る。胎土は灰白色である。P501出土。

167は青磁皿である。見込みにはヘラ描きによる花文が施され、底面には墨書により丸印が書かれている。釉は淡黄緑色で、底部のみ露胎である。胎土は黄白色である。P971出土。

168～176は龍泉窯系青磁碗である。

168は口縁部内面に１条の沈線を施す他は無文であるが、見込みに「金玉満堂」の刻印を施す。釉は黄緑色～灰緑色で、全体に色斑がある。畳付きから高台内にかけては露胎である。胎土は淡灰色である。畳付き付近に目土らしきものが付着しており、見込みにも１ヶ所だけ目土の痕跡がある。P581出土。169は口縁部片である。内外とも無文で、透明度の高い薄い黄緑色の釉が内外にかかる。貫入はみられないが、気泡が目立つ。胎土は淡灰色である。P905出土。170は口縁部片で、鎬蓮弁であるが間隔は比較的ゆったりとしている。釉はやや濃い黄緑色で、内外に施釉される。胎土は淡灰色である。P68出土。171は口縁部片である。釉はやや濃い黄緑色を呈し、外面では気泡が目立つ。外面には鎬蓮弁が施されている。胎土は淡灰色である。P851出土。172は口縁部片で、外面には鎬蓮弁がやや密に施されている。釉はやや白味のある黄緑色で、内外に施釉される。胎土は灰白色である。P63出土。173は外面に細めの鎬蓮弁が比較的密に施されている。釉は淡緑色で、内外にかけられている。胎土は灰白色を呈する。P1043出土。174は口縁部片である。外面には鎬蓮弁が施されている。釉は灰緑色を呈し、内外にかけられる。胎土は淡灰色である。P207出土。175は２分の１ほど残存する。外面には鎬蓮弁が施される。釉は濃緑色で、全体に厚くかけられ高台の外側に流れた釉が溜まっている。内外とも大きく貫入がみられる。畳付きから高台内にかけては露胎であるが、施釉後に掻き取っている。胎土は灰白色を呈する。P918出土。176は外面に鎬蓮弁が施されるが、浅く削り出されているため顕著ではない。見込みには渦巻き状の文様がヘラで描かれている。釉は青緑色で、内外に薄くかけられ、畳付きから高台内は露

胎である。貫入は内外面とも下半部にみられる程度である。P545出土。

177は小形の天目である。緩やかに広がった体部が口縁部で垂直に立ち上がる。全体に褐釉がかけられた後、黄土色の釉が見込みと外面に数か所垂らされる。畳付きは露胎である。胎土は明灰色である。P606出土。

178は施釉陶器の碗である。外面には釉の下に草花文が薄くみえる。釉はやや青味がかった透明釉で、全体に細かい貫入がみられ、畳付きのみ露胎である。胎土は明灰色で、やや粗い。P606出土。

179は磁器の染付小碗である。外面には草花文を描き、高台付近には圏線をめぐらせる。釉はやや白味を帯びた透明で、畳付きのみ露胎とする。胎土は灰白色である。P606出土。

焼土（図版50、第150図）

Ⅲ区南側にあり、３号集石の北側に位置する遺構である。後世の造成により大半を削平されていたようであり、遺構面精査時には既に焼土面が露頭していた。本来はもっと広範囲に及んでいたと思われるが、現状では東西75cm、南北70cmの範囲に暗茶褐色土の炭を含んだ焼土が広がる。厚さは３cmほどしかない。

不整形ピット群（第156図）

Ⅰ区東側に位置する遺構である。地形の落ち際に沿って、長さ21m、幅３mの範囲で帯状に続くピット群である。ほとんどが不整円形または楕円形を呈し、主軸を地形に沿って北東－南西方向に向ける傾向にある。深さは20～60cm。中には覆土は上層に暗灰色砂質土、下層に明黄色粘質土や黄褐色粘質土が堆積する。

遺構面出土土器（図版62、第157図）

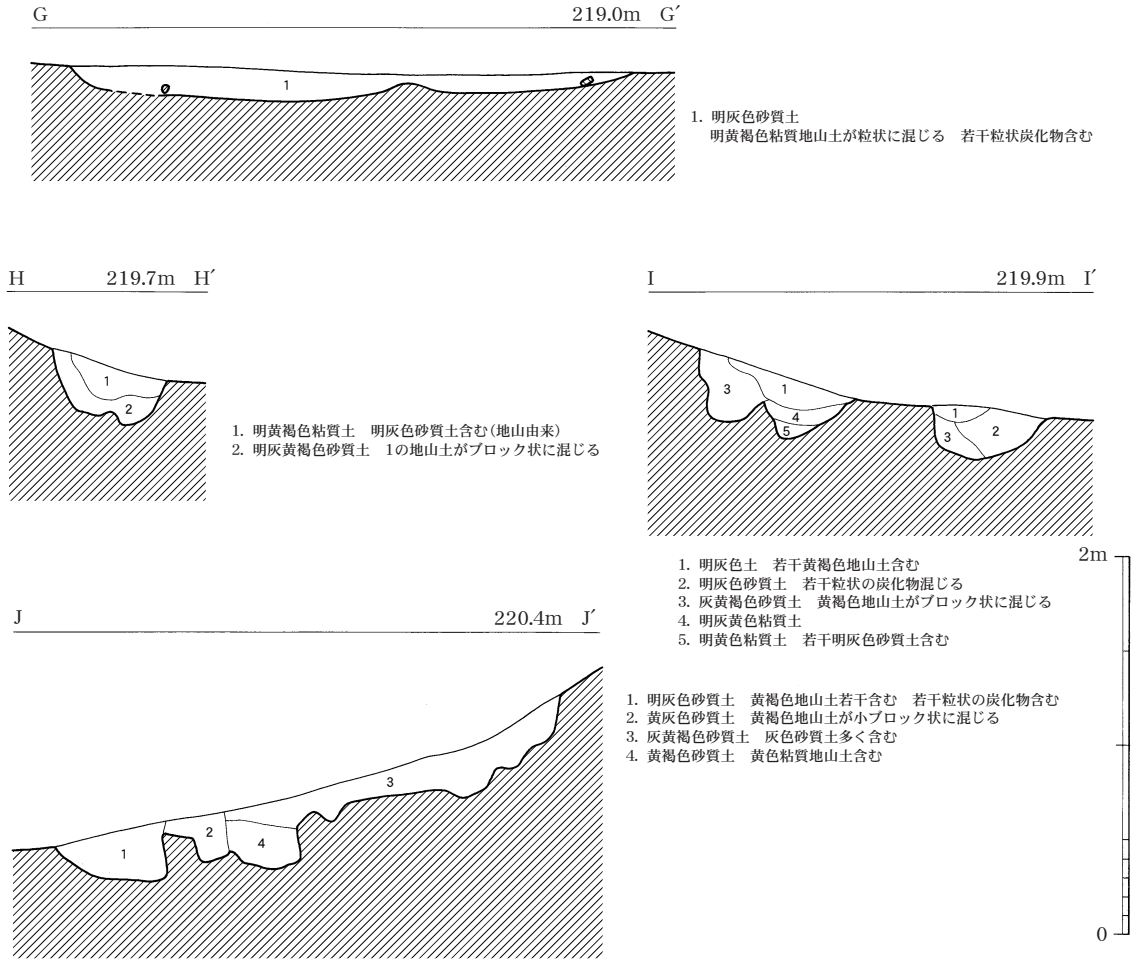
ここでは遺構面検出時などに採集した土器について掲載する。

180～183は土師器皿である。

180は概ね完形で、口縁部を垂直に立ち上げる。内面には回転ナデの痕跡が明瞭で、底部は少し磨滅しているが糸切りである。色調は明褐色を呈する。遺構面出土。181は２分の１が残存し、底部は糸切りである。色調は淡褐色を呈し、胎土は精良である。遺構面出土。182は焼成不良であるため色調は灰白色を呈し、軟質である。薄手で外面は糸切りである。遺構面出土。183は低平で、底部は糸切りである。色調は明橙褐色を呈する。Ⅱ区遺構面出土。

184～189は土師器坏である。

184は底部糸切りであるが、板目痕跡が顕著である。色調は淡灰褐色を呈し、外面は全体に煤けている。Ⅱ区上段遺構面出土。185は厚手で、胎土も少し粗い。底部は磨滅しているが糸切りの痕跡がわずかにみえる。色調は明褐色を呈する。Ⅱ区遺構面出土。186は焼成良好であるが、内底面は粘土の継ぎ目で剥落している。底部の糸切り痕と板目痕が顕著に残る。口縁部外面には数か所煤が付着する。色調は明褐色を呈する。Ⅱ区上段遺構面出土。187はやや厚手で、内面のヨコナデ痕跡が顕著にみられ、底部は糸切りである。色調は明橙褐色を呈する。Ⅱ区下段遺構面出土。188は比較的焼成が良好で、底部は糸切りであるが板目圧痕により見えづらい。色調は明橙褐色を呈



第156図　不整形ピット群断面土層図（1/40）

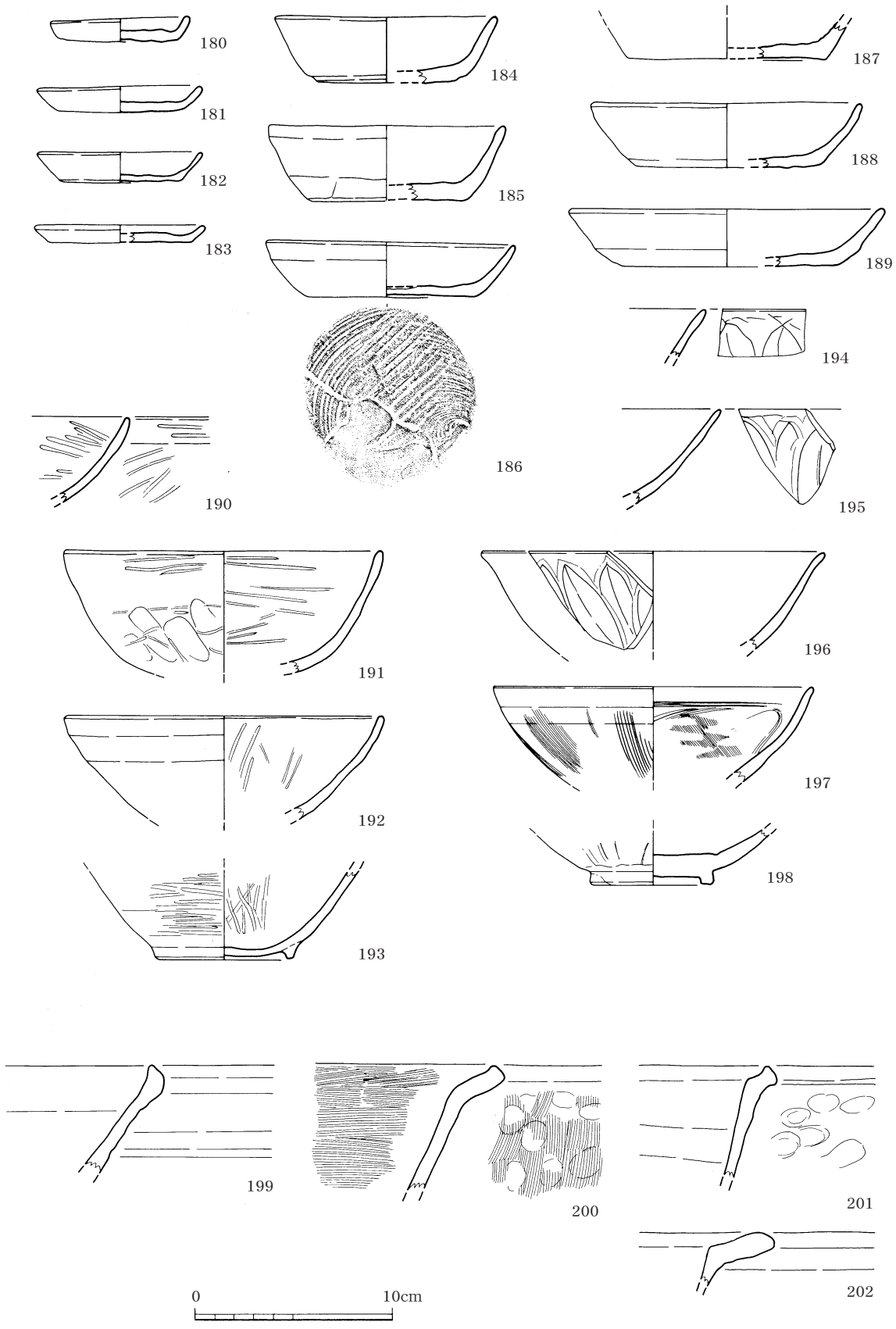
する。遺構面出土。189はやや焼成が甘く、磨滅気味である。口縁部を強くなでたために、体部外面に段差が生じている。底部は糸切りで、板目の痕跡が少し残る。色調は明黄褐色を呈する。Ⅱ区下段遺構面出土。

190～193は瓦器椀である。

190は焼成良好で、重ね焼きの痕跡が窺える。内外ともミガキによる仕上げを行っている。Ⅱ区遺構面出土。191は焼成がやや良好で、外面下半には指オサエの痕跡があり、上半は横方向のミガキで仕上げる。内面は粗い横方向のミガキで仕上げる。内外とも重ね焼きの痕跡が明瞭である。遺構面出土。192は焼成が良好で、やや須恵質である。外面はヨコナデ、内面は粗い放射状のミガキで仕上げる。色調は内面が灰白色、外面が灰白色～灰色を呈する。Ⅱ区下段遺構面出土。193は底部片で、外面は横方向のミガキ、内面は縦方向の粗いミガキで仕上げる。高台は断面逆台形をなす。外面には重ね焼きの痕跡が少し窺える。Ⅱ区下段遺構面出土。

194～196・198は龍泉窯系青磁碗である。

194は口縁部小片である。外面に幅の広い鎬蓮弁が施されており、明緑色の釉が内外にかかる。胎土は灰白色である。遺構面出土。195は口縁部小片である。外面にはやや細身の鎬蓮弁が施されており、濃緑色の釉が内外にかかる。胎土は明灰色である。遺構面出土。196は口縁部片である。



第157図　遺構面出土土器実測図（1/3）

外面に幅広の鎬蓮弁が施され、青緑色の釉が内外にかかる。やや細かい貫入が内外にみられる。遺構面出土。198は底部片である。外面にはわずかながら鎬蓮弁がみられる。釉は黄緑色で、細かい貫入がみられ、畳付きから高台内にかけては露胎である。Ⅱ区遺構面出土。

197は同安窯系青磁碗である。外面に放射状の櫛描文、内面にも櫛描文を施す。釉は薄緑色で、内外に施釉されるが、体部下半から下は露胎となる。胎土は淡灰色である。Ⅱ区下段遺構面出土。

199は東播系の須恵器鉢である。色調は明灰色で、口縁部外面のみ暗灰色であることから、重ね焼きで焼成されたと考えられる。

200～202は土師質鍋である。

200は口縁部片で、外へくの字に曲げ、内側の端部を少しつまみ上げる。外面にはタテハケ調整前のナデの痕が顕著で、内面はヨコハケで仕上げる。外面は全体に煤が付着している。色調は淡褐色で、外面は灰褐色である。遺構面出土。201は口縁部片で、外へ短く曲げて、内側端部をつまみ上げており、受け口状を呈する。外面は全体に煤が付着しており、色調は内面が淡褐白色、外面は灰褐色を呈する。遺構面出土。202は口縁部片で、内外ともヨコナデで整える。色調は明赤橙色を呈するが、外面は煤けているために灰褐色を呈する。Ⅱ区下段遺構面出土。

包含層出土土器（図版62、第158・159図）

ここでは中世の包含層と考えられる、第Ⅰ文化層の黒灰色土および灰褐色土から出土した土器について報告する。

203～208は土師器皿である。

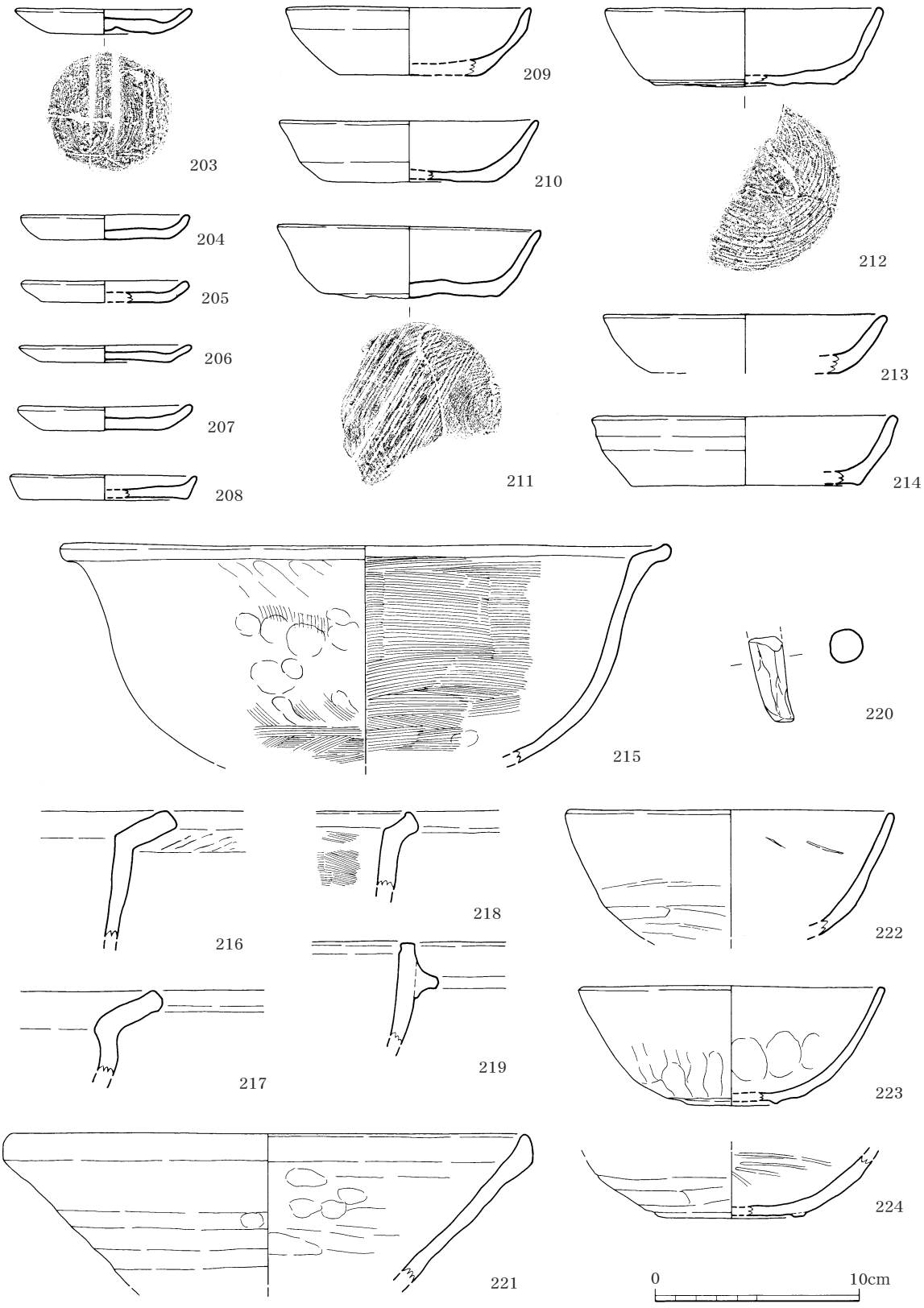
203はほぼ完形で、底部は糸切りで板目痕が強く残る。色調は明赤橙色を呈し、胎土中には雲母が目立つ。Ⅲ区包含層出土。204は底部糸切りで、板目の痕跡が明瞭に残る。色調は明褐色で、底部に黒斑がある。Ⅲ区包含層出土。205は底部糸切りで、板目の痕跡が少し残る。色調は明褐色で、胎土中に雲母が目立つ。Ⅲ区包含層出土。206は低平で、底部は糸切りである。色調は明黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。Ⅲ区包含層出土。207は底部糸切りで、板目の痕跡が少し残る。色調は明褐色を呈し、胎土はやや精良である。Ⅲ区包含層出土。208は口縁部が垂直気味に立ち上がる。底部は糸切りで、色調は明黄褐色を呈する。Ⅱ区灰褐色土層出土。

209～214は土師器坏である。

209は口縁部片で、底部はわずかながら糸切りの痕跡が残る。色調は明赤橙色を呈し、外面の一部が煤けている。Ⅱ区黒灰色包含層出土。210は作りが粗く、底部の糸切りも雑に行われ、腰部の器壁は荒れている。色調は赤褐色を呈し、内外とも若干煤けている。Ⅱ区黒灰色包含層出土。211は焼成良好で、底部は糸切り後の板目圧痕がよく残る。色調は褐色～灰褐色を呈し、内外とも若干煤けている。Ⅱ区黒灰色包含層出土。212は焼成良好で、底部は糸切りでわずかに板目の痕跡が残る。色調は褐色～灰褐色を呈し、外面には黒斑がある。Ⅱ区黒灰色包含層出土。213は少し厚手で、体部は丸みを帯びる。底部は糸切りである。色調は灰褐色を呈する。外面に煤が付着し、内面も少し煤けている。Ⅲ区包含層出土。214は口縁部小片で、底部は糸切りである。色調は明橙褐色を呈し、口縁端部付近に煤の付着がみられる。Ⅱ区黒灰色包含層出土。

215～220は土師質鍋である。

215は口縁部から体部下半にかけての破片である。口縁部はくの字に折れて、端部を少しつまみ



第158図　包含層出土土器実測図（1/3）

上げる。体部は浅めでゆったりと平底気味になる。色調は淡褐色を呈し、外面の一部に煤が付着する。内外ともハケ調整が行われるが、内面には幅4.5cmほどのハケ状工具の痕跡が明瞭に残る。区黒灰色包含層出土。216は口縁部片で口縁部がくの字に折れる。色調は赤褐色であるが、外面は煤が付着しているため暗灰褐色を呈する。Ⅲ区包含層出土。217は口縁部片で216と同様に口縁部はくの字に折れる。色調は明褐色を呈し、内外とも煤が付着しているため、灰褐色の部分も多い。Ⅲ区包含層出土。218は口縁部片で、口縁部を短く外へ曲げた後に端部をつまみ上げる。外面の調整は不明瞭であるが、内面には非常に細かいヨコハケが行われている。色調は淡褐色である。Ⅱ区灰褐色土層出土。219は口縁部片で、体部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部下に突帯をめぐらせる。本来の色調は淡黄褐色であるが、外面は煤が付着し灰褐色～黒褐色を呈する。Ⅱ区灰褐色土層出土。220は足鍋の脚端部片である。外へ踏ん張る形態で、ナデによる調整が行われる。色調は淡灰褐色～灰褐色を呈する。Ⅱ区灰褐色土層出土。

221は東播系の須恵質鉢である。色調は明灰色で、口縁部外面のみ暗灰色を呈し、重ね焼きの痕跡と判断できる。Ⅱ区灰褐色土層出土。

222～224は瓦器椀である。

222は口縁部片で、焼成良好である。体部外面の下半には指オサエの後工具で調整し、上半は粗いミガキを施す。内面は工具調整を行う。内外とも重ね焼きの痕跡が認められる。Ⅱ区灰褐色土層出土。223は若干焼成が甘いものの状態は良好で、体部外面下半には指オサエの痕跡が残る。高台は極めて小さい断面三角形を呈し、かなり退化している。体部外面下半には煤が面的に付着している。内外とも重ね焼きの痕跡が窺える。Ⅱ区黒灰色包含層出土。224は底部片である。焼成は良好で、須恵質である。外面は指オサエの痕を工具で調整し、内面は横方向の粗いミガキで仕上げる。高台は低平な逆台形を呈し、接地面は板目の圧痕がみられる。内外とも煤の付着がみられる。Ⅱ区灰褐色土層出土。

225は青白磁の合子蓋である。天井部に草花文を施し、口縁部には連続する長楕円を浮き彫りする。釉は淡青色で薄くかかり、口縁部内面と端部のみ露胎である。胎土は白色である。Ⅲ区包含層出土。

226～228は白磁である。

226は定窯系の白磁碗である。小さな玉縁口縁である。釉は黄白色を呈し、全体に薄くかかる。胎土は灰白色である。Ⅲ区包含層出土。227は口縁端部のみを外へ曲げる形態で、内面には櫛描文が施される。釉はやや緑味がかった乳白色で、貫入がみられる。胎土は灰白色である。Ⅲ区包含層出土。228は高台片である。高台には２か所に目土の剥落痕跡が残り、復元すると窯詰め時には４か所に目土が使用されたものと推測される。釉はやや緑味のある黄白色で、内外にかけられ、畳付きと高台内は露胎である。胎土は灰白色である。Ⅰ区包含層出土。

229は龍泉窯系青磁皿である。底部は回転ヘラ削りし、口縁部はやや外反気味に立ち上がる。見込みには櫛描文が施されている。釉は若干青味がある明緑色で、内外に施釉されるが、体部下部から底部にかけては露胎である。胎土は明灰色である。Ⅱ区灰褐色土層出土。

230・231は龍泉窯系青磁碗である。

230は体部外面に比較的しっかりとした鎬蓮弁文を施す。釉は明緑色で、内外にやや厚めにかける。胎土は淡灰色を呈する。Ⅱ区灰褐色土層出土。231は底部片で、体部の文様の有無は不明であ

る。釉は濃緑色で、畳付きから高台内にかけて露胎とする。高台内には目土が若干残っている。胎土は淡灰色である。Ⅱ区灰褐色土層出土。

232は磁器染付皿である。内面に文様が施されるが、割れていて全体像は不明である。釉は少し青味のある透明釉で、畳付きのみ露胎とし、見込みは蛇の目剥ぎを行う。胎土は白色である。Ⅲ区包含層出土。

233は施釉陶器碗である。釉は褐釉で、畳付きのみ露胎とする。胎土は褐白色～明灰色を呈する。Ⅲ区包含層出土。

234～236は擂鉢である。

234は口縁部片で、擦目までは残っていない。内面に受け部があり端部は外へ開く。暗赤紫褐色の釉が内外とも薄くかかる。胎土は暗灰色を呈する。Ⅲ区包含層出土。235は陶製擂鉢である。口縁部は外傾し、外面には少し折り曲げて段差を設けているが、あまり顕著ではない。内面には10本を単位とする擦目が密に施されている。色調は赤紫褐色を呈する。Ⅲ区包含層出土。236は備前系の擂鉢である。口縁内面に突起を作り出してから外側に折り曲げ突帯状に成形する。内面には密に擦り目が施されている。色調は暗赤紫色で、胎土はやや粗い。Ⅲ区包含層出土。

表土掘削中出土土器（第159図）

237・238は瓦器椀である。

237はやや焼成が甘く磨滅気味である。外面下半には指オサエの痕跡が残り、内面は横方向のミガキで仕上げられる。高台は小さな断面三角形を呈する。重ね焼きの痕跡も窺える。Ⅰ区表土掘削時出土。238は焼成がやや甘く、軟質で磨滅気味である。外面下半には指オサエの痕が残り、内面には粗いミガキの痕跡がみられる。色調は内外とも灰白色を呈する。Ⅰ区表土掘削時出土。

239は龍泉窯系青磁碗の底部片である。外面には鎬蓮弁文が密に施されている。釉は濃緑色で、内外ともやや厚くかかるが、畳付きから高台内にかけては露胎である。高台内には円弧を描くように目土が残っており、あるいは何らかの窯道具の使用も考えられる。Ⅰ区表土掘削時出土。

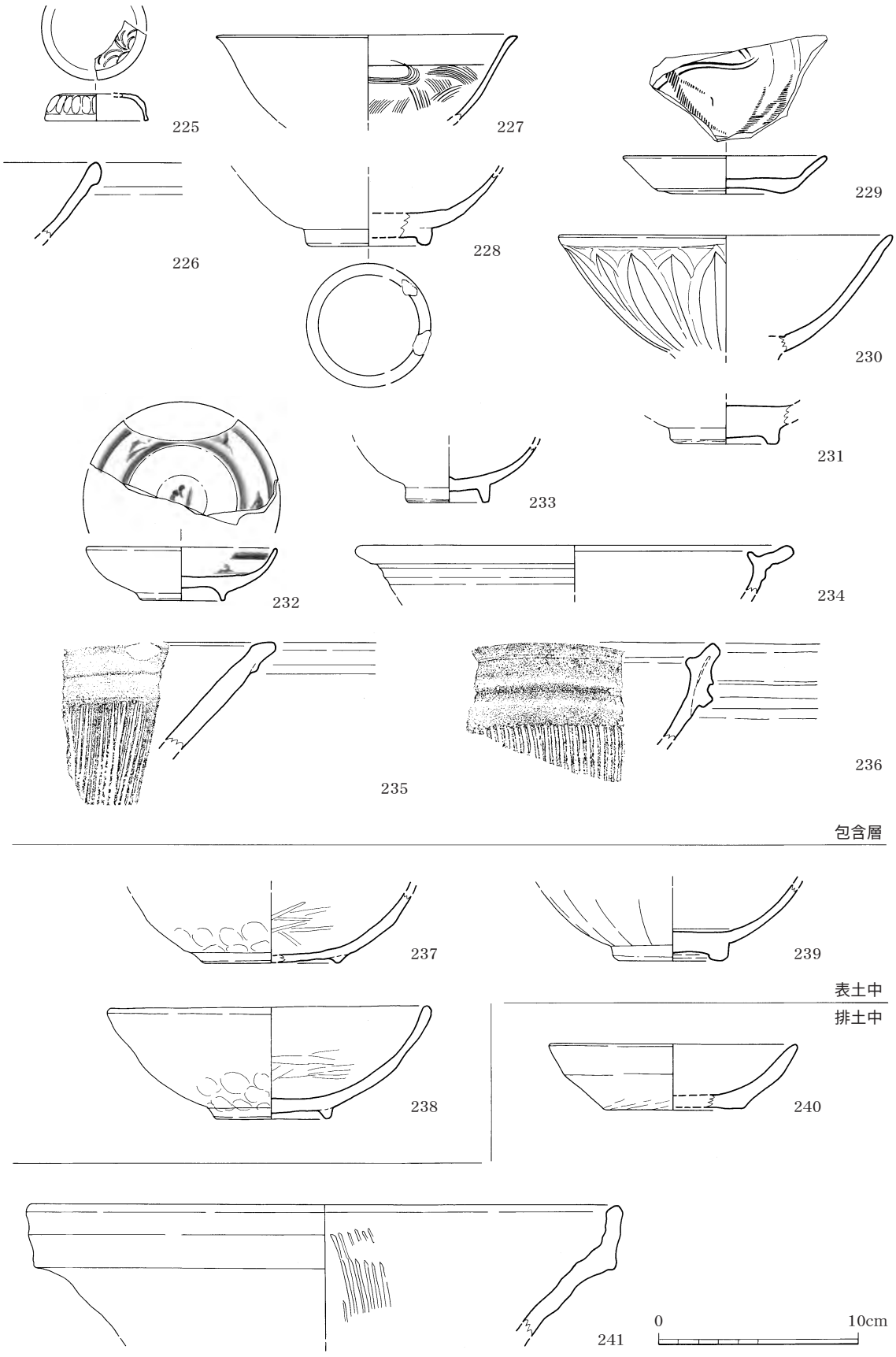
排土中出土土器（第159図）

240は土師器坏である。若干ひずみがあるが焼成は良好で、底部は糸切りである。色調は明黄褐色を呈しする。Ⅲ区排土中出土。241は備前系の擂鉢である。大きく開く体部から垂直に立ち上がる口縁部が特徴で、立ち上がる部分には段を設ける。内面に７条を単位とする擦り目が施されている。色調は暗赤紫で、口縁部付近のみ暗灰色を呈するのは重ね焼きの痕跡とみられる。排土中出土。

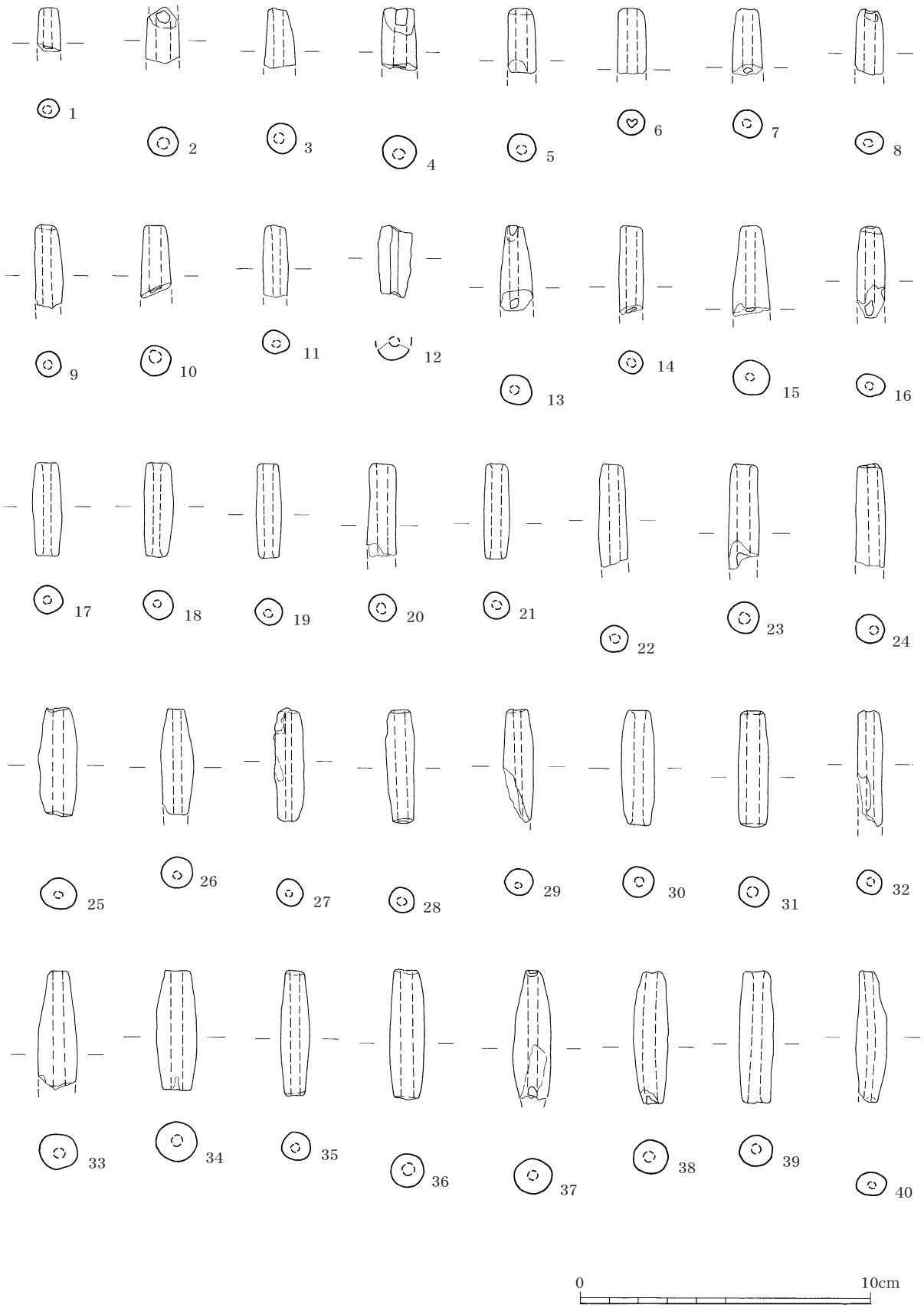
土錘（図版63、第160・161図）

法量については第８表を参照いただきたい。

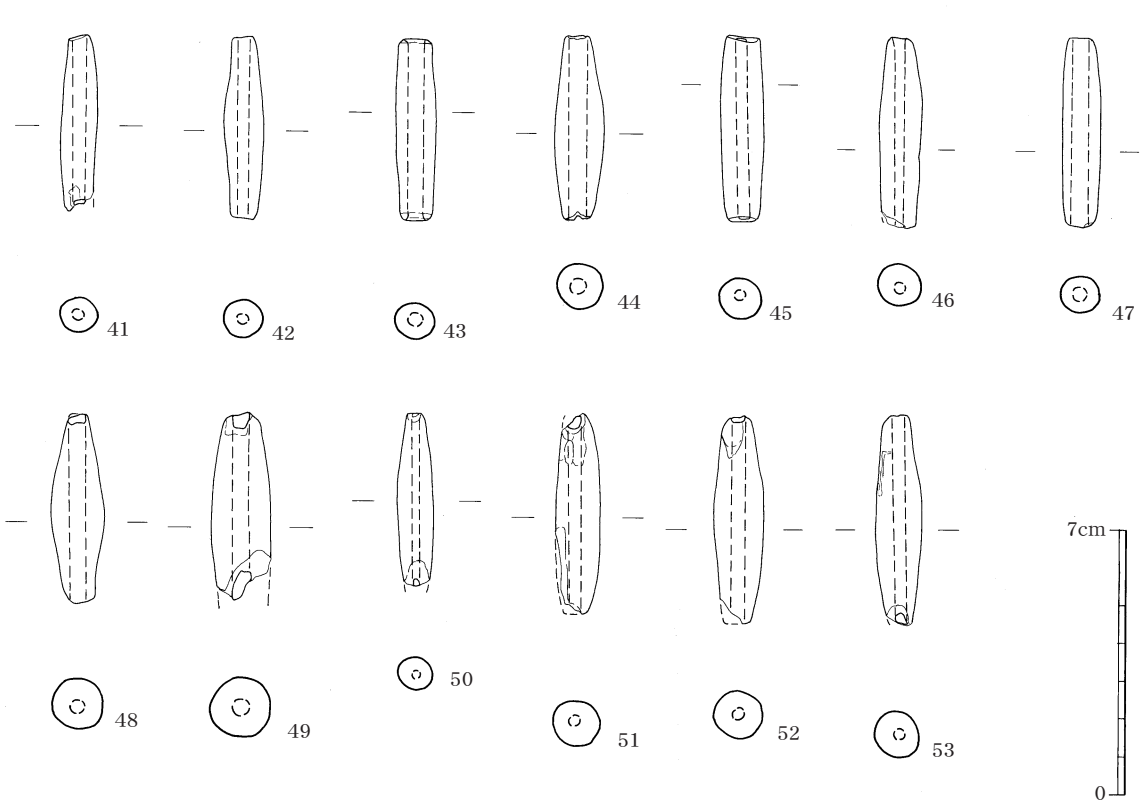
１は細身で、胎土精良、黒灰色を呈する。Ｐ９出土。２はやや磨滅気味で、明褐色～暗灰褐色を呈する。遺構面出土。３は胎土が精良で、淡灰黄褐色～淡橙色を呈する。P339出土。４は胎土精良で、明褐色を呈する。P167出土。５はやや焼成不良で、胎土は精良、淡褐色を呈する。Ⅲ区P592出土。６は断面ハート型の穿孔を行い、褐灰色～暗灰色を呈する。Ⅱ区P779出土。７は中膨らみ



第159図　包含層・表土中・排土中出土土器実測図（1/3）



第160図　土錘実測図①（1/2）



第161図　土錘実測図②（1/2）

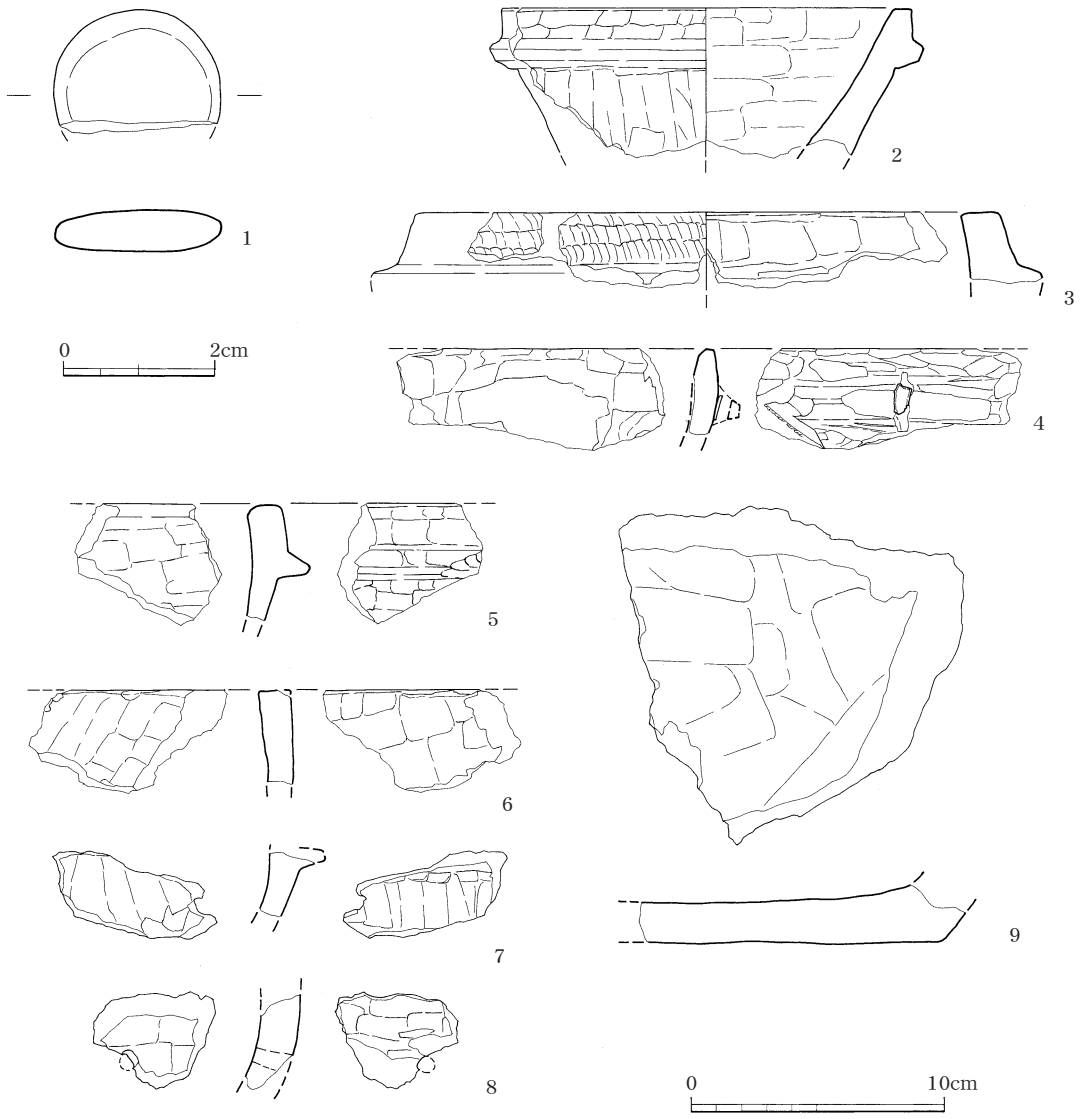
で、全体に黒色を呈する。Ⅱ区P700出土。8はやや扁平で、黒灰色を呈する。P116出土。9は胎土精良で黒灰色を呈する。P173出土。10は中途が膨らみ、黒褐色～黒色を呈する。Ⅱ区遺構面出土。11は若干中途で膨らみ、淡褐色～明褐色を呈する。Ⅱ区P897出土。12は小片であるが胎土は精良で、暗灰色～黒色を呈する。P545出土。13は中膨らみの形状である。焼成不良で、胎土は精良、淡灰褐色を呈する。Ⅲ区包含層出土。14はやや細身で棒状をなし、灰褐色～暗灰色を呈する。Ⅱ区遺構面出土。15は中膨らみで、淡褐色を呈する。P982出土。16は若干扁平で、胎土精良、黒灰色を呈する。Ⅲ区排土中出土。17は完形品で、わずかに中膨らみである。暗灰色～黒灰色を呈する。Ⅱ区排土中出土。18は完形品で、明褐色を呈する。Ⅱ区P835出土。19は完形品で、胎土精良、黒褐色を呈する。Ⅱ区6号溝出土。20は暗灰色～黒色を呈する。P956出土。21は完形品で、明橙色であるが胎土は淡灰褐色を呈する。Ⅱ区6号溝出土。22は胎土精良で、淡灰褐色～明褐色を呈する。Ⅲ区包含層出土。23は灰褐色を呈する。Ⅱ区遺構面出土。24は明褐色を呈する。Ⅱ区遺構面出土。25は完形品であるが、太く短い。胎土は精良で、明褐色を呈する。出土位置は不明。26は中膨らみで、端部は工具で切断する。明褐色を呈する。P508出土。27は完形品で、黒色の付着物がみられる。胎土は精良で、黒色を呈する。遺構面出土。28は完形品で、表面に指圧痕が残る。胎土は精良で、明灰色～黒灰色を呈する。P25出土。29は暗灰色～黒灰色を呈する。P25出土。30は完形品で、暗灰褐色を呈する。Ⅱ区P1033出土。31は完形品で、胎土は精良、明灰色～黒色を呈する。遺構面出土。32はやや細身で、黒灰褐色を呈する。Ⅱ区P1033出土。33は中膨らみで、胎土は精良、淡灰色～黒灰色を呈する。P73出土。34は完形品で、下端に緊縛の痕跡ら

しきものが残り、明灰褐色～暗灰褐色を呈する。P799出土。35はやや細身の完形品で、胎土は精良、黒褐色を呈する。P419出土。36は完形品で、外面に工具調整痕が残る。胎土は精良で、淡灰色～明灰色を呈する。遺構面出土。37はおおよそ完形で、中途が膨らみ、表面は磨滅する。胎土は精良で、淡灰白色～黒灰色を呈する。41号土坑出土。38は中膨らみの完形品で、明灰褐色～明褐色を呈する。灰褐色土層出土。39は完形品で、端部は工具で切断する。淡灰色～暗灰色を呈する。排土中出土。40は不整形な中膨らみの完形品である。胎土は精良で、明褐色を呈する。Ⅲ区包含層出土。41は細身の完形品で、表面には工具調整らしき痕跡が残る。胎土は精良で、淡灰色～黒灰色を呈する。Ⅲ区包含層出土。42は細身の中膨らみで、完形品である。表面は工具調整を行い、胎土は精良で、明橙色～黒灰色を呈する。Ⅲ区包含層出土。43は完形品で、表面は工具調整を行う。胎土は精良で、暗灰色～黒灰色を呈する。P15出土。44は中膨らみの完形品で、下端部に緊縛の痕跡が窺える。淡褐色～灰褐色を呈する。Ⅱ区P1031出土。45は完形品で、端部は工具で切断する。淡灰褐色～褐色を呈する。Ⅱ区下段遺構面出土。46は胎土精良で、明灰褐色を呈する。Ⅱ区排土中出土。47は完形品で、少し磨滅し、明灰褐色を呈する。Ⅱ区下段遺構面出土。48は太めで中膨らみの完形品で、表面は磨滅する。明橙褐色を呈する。Ⅲ区包含層出土。49は中膨らみの破片で、やや太めである。胎土はやや粗く、淡灰色～灰色を呈する。P107出土。50は細身で中膨らみの略完形品で、表面は工具調整を行う。胎土は精良で、明橙褐色を呈する。Ⅲ区包含層出土。51は中膨らみの完形品で、表面は工具調整を行う。胎土は精良で、黒灰色～黒色を呈する。P79出土。52は中膨らみの略完形品で、表面は工具調整を行う。胎土は精良で、黒色を呈する。P79出土。53は細身の中膨らみで、略完形品である。表面は工具調整を行う。胎土は精良で、黒色を呈する。P79出土。

石製品（図版64・65、第162～169図）

1は砂岩製の碁石である。半分ほど割れているが径2.2cm、厚さ0.5cmを測る。Ⅲ区包含層出土。

2～9は滑石製石鍋である。2は比較的小形の石鍋で、全体の6分の1ほどが残存する。口縁部直下に小さな台形状の鍔を削り出す。外面は縦方向、内面は横方向のケズリがみられる。排土中出土。3は口縁部付近の破片である。全体に若干内傾し、口縁部直下に鍔が削り出されており、遺存状況から鍔は台形状と推定される。口縁部外面は細かなケズリの痕跡がみられる。Ⅲ区包含層出土。4は口縁部付近の破片で、内面も大きく削られており遺存状況はよくないが、鍔の中央に縦方向に穿たれた把手金具の取り付け孔が残っている。孔には金具の一部が錆付いて残っており、鉄製の金具であったことがわかる。外面には煤が多く付着する。Ⅲ区遺構面出土。5は口縁部小片で、口縁部直下にやや細身の台形状を呈する鍔が削り出されている。内外とも横方向のケズリを行う。内面にわずかに煤が付着している。Ⅲ区包含層出土。6は口縁部小片であるが、鍔を有さない型式であるか、鍔よりも上部の破片であるのかの判断は難しい。Ⅱ区P823出土。7は体部中位の破片で、鍔から下側の一部に相当する。遺存状況から鍔は小さな台形状と考えられる。外面にはかなり煤が付着する。Ⅲ区排土中出土。8は体部小片で、下端付近に円孔の一部が遺存し、円孔の表面には若干鉄錆がみられる。この円孔が当初から存在したものであるのかは不明であるが、鉄錆の状況からするとある段階には既に使用されていたことがわかる。外面には煤が付着する。Ⅱ区6号溝出土。9は底部片である。内面は不定方向のケズリがみられ、底部外面も同様



第162図　石製品実測図①（1：1/1、他1/3）

の仕上げである。底部にはかなり煤が付着している。Ⅲ区灰褐色土包含層出土。

10～16は砥石である。

10は輝緑凝灰岩製で、上端の一部と下端を欠損する。残存長は5.9cm、幅は2.0cm、厚さ1.5cmを測り、角柱状を呈する。短辺も含め遺存する各面とも砥面としての利用が窺える。Ⅱ区暗灰褐色土包含層出土。11は凝灰岩製で、上端を欠損する。残存長4.6cm、幅2.95cm、厚さ2.5cmを測り、角柱状を呈する。短辺を除く四面が砥面である。Ⅱ区遺構面出土。12は凝灰岩製で、上端・下端ともに欠損する。残存長5.5cm、幅4.8cm、厚さ3.6cmを測り、使用によって摩耗し、断面は台形状を呈する。長辺になる四面とも砥面である。Ⅲ区包含層出土。13は砂岩製で、上端を欠損する。残存長7.1cm、幅6.1cm、厚さ4.3cmを測り、断面長方形の角柱状を呈する。短辺を除く四面が砥面である。Ⅲ区包含層出土。14は凝灰岩製で、上下両端を欠損する。ただし、上端側にはわずかに傾斜する砥面が残るため、上端側はさほど大きく失われていない可能性も考えられる。

残存長9.35cm、幅5.95cm、厚さ2.5cmを測り、扁平で延板状を呈する。遺存する長辺は四面とも砥面である。63号土坑出土。15は頁岩製で、上下両端を欠損する。残存長12.75cm、幅4.3cm、厚さ0.6cmを測り、薄い板状を呈する。遺存する四面のうち幅の狭い側には製作時の擦り切りの痕跡が残っており、平らな二面のみ砥面として使用されている。52号土坑出土。16は砂岩製で、完形品である。全長32.6cm、幅8.1cm、厚さ7.0cmを測り、不整形ながら角柱状を呈する。砥面は図示した四面で、全く使用の痕跡がみられない面もある。P656出土。

17・18は凹石である。

17は安山岩製で、縦13.15cm、横10.1cm、厚さ4.05cmを測る。上面は１ヶ所、下面は２ヶ所に敲打による窪みがつくられている。３号集石出土。18は安山岩製で、半分に割れており、残存長11.9cm、残存幅6.3cm、厚さcmを測る。片面にのみ敲打による窪みがみられ、もう一方の片面は自然石の原面が残る。３号集石出土。ここで報告する17・18はともに３号集石から石塔類などとともに出土し、後述する25が陽石の可能性が考えられることから、近世期の民俗信仰における隠石として利用された可能性も否定しえない。

19は敲石である。安山岩製で、端部を一部欠損しているが、残存長16.7cm、幅7.05cm、厚さ2.45cmを測る。下端部には敲打による痕跡がわずかながら残っている。P166出土。

20～24・27は石塔部材である。

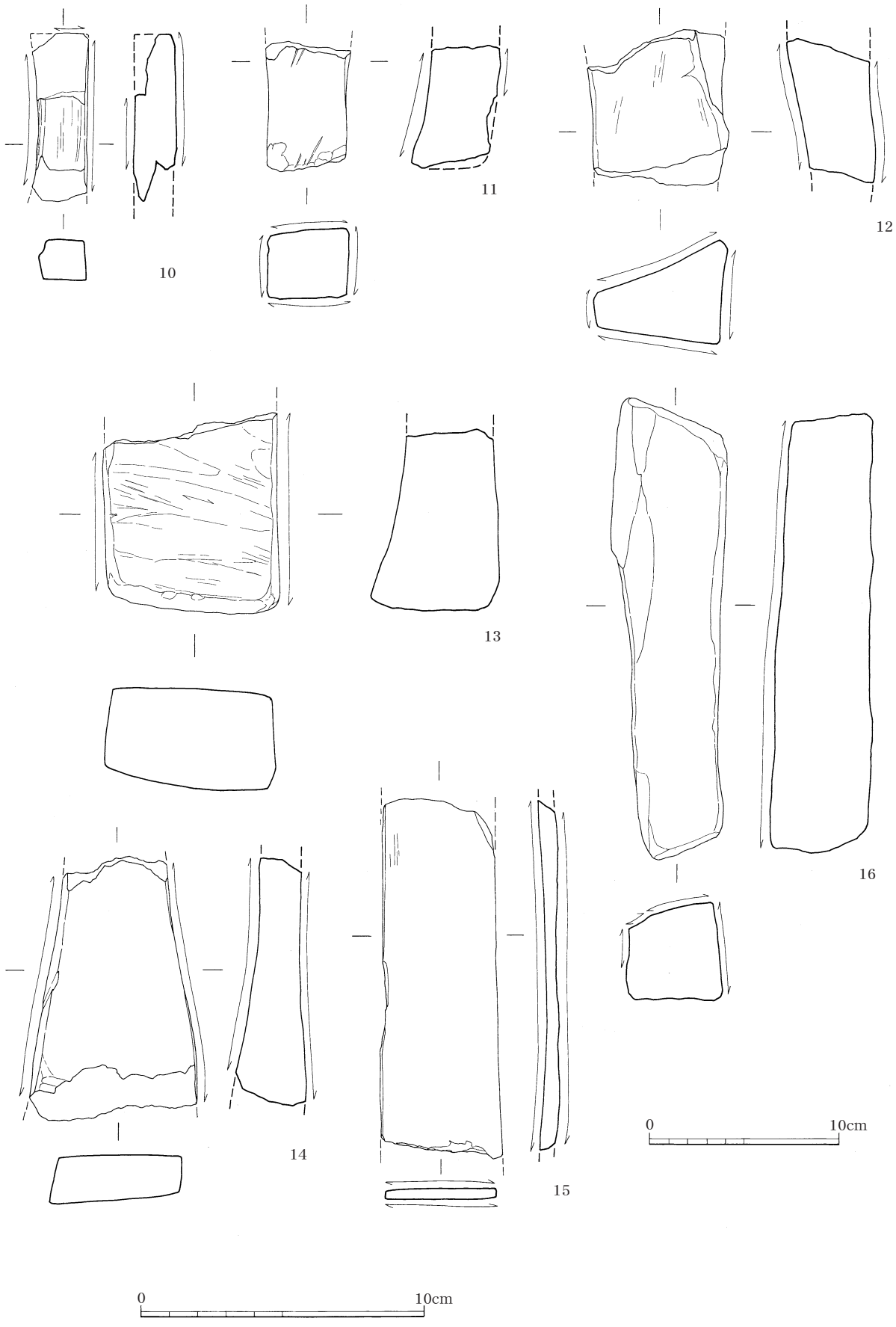
20は五輪塔の空風輪で、凝灰岩製である。頂部を欠損している他は概ね完存しており、残存する高さは23.4cm、空輪部径14.6cm、風輪部径16.6cmを測る。３号集石出土。21は五輪塔の火輪で、凝灰岩製である。若干欠損するも概ね完形品である。幅28.4cm、高さ17.0cmを測り、頂部には径約7.7cm、深さ4.8cmの円孔が穿たれている。３号集石出土。

22は五輪塔の火輪で、凝灰岩製である。一部欠損しているが、幅28.0cm、高さ15.3cmを測り、頂部に径7.4cm、深さ3.3cmの円孔を穿つ。３号集石出土。23は五輪塔の水輪で、凝灰岩製である。全体に剥離が目立ち、径26.1cm、高さ18.9cmを測り、上下両面ともややへこみ気味で、頂部側の中央には径5.7cm、深さ1.1cmの窪みがあり舎利孔の可能性がある。３号集石出土。24は宝篋印塔の相輪で、凝灰岩製である。各部とも欠損が激しく本来の形状はあまり残っていないが、削り出された九輪が確認でき、下端部には笠部と接合させるための突起がみられる。この突起はほとんど破損がみられない。３号集石出土。27は宝塔の基部で、凝灰岩製である。径34.8cm、高さ19.2cmを測り、円柱状で上面には径20.2cm、深さ2.1cmのへこみがある。３号集石出土。

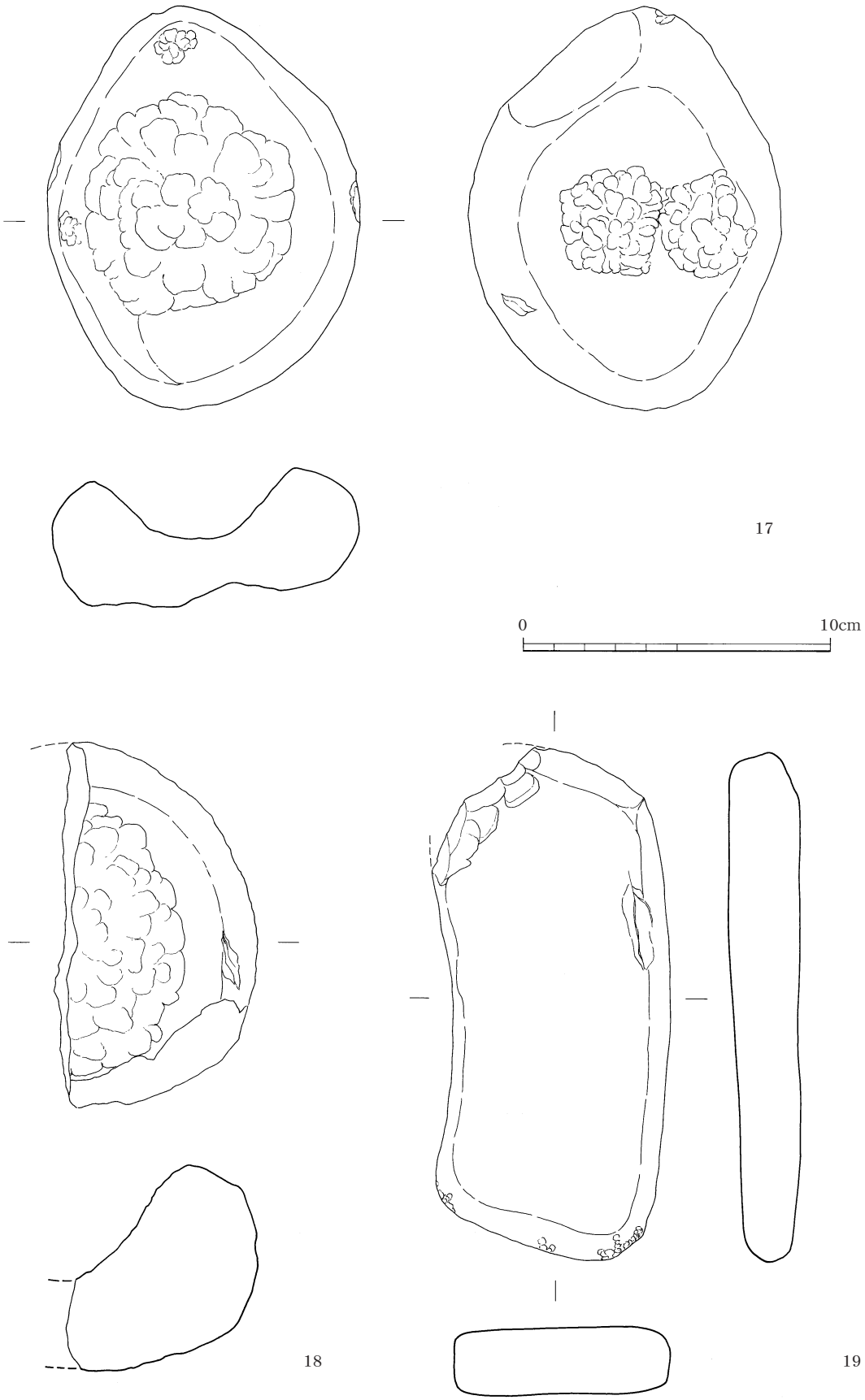
25は不明石製品である。花崗岩製であるが、左右の端部は異なる岩石で、全体に突起状を呈する。３号集石から石塔類や石臼、近世陶磁器などとともに出土した。周辺の石垣に使用された石材とも異なり、上面は大きく剥離しているが、全体に人工的な加工の痕跡が窺えるので、人工遺物と判断した。用途は先に紹介した凹石２点とともに出土していることも勘案すれば、民俗信仰による陽石として製作されたものの可能性も考えられる。

26・31は茶臼である。

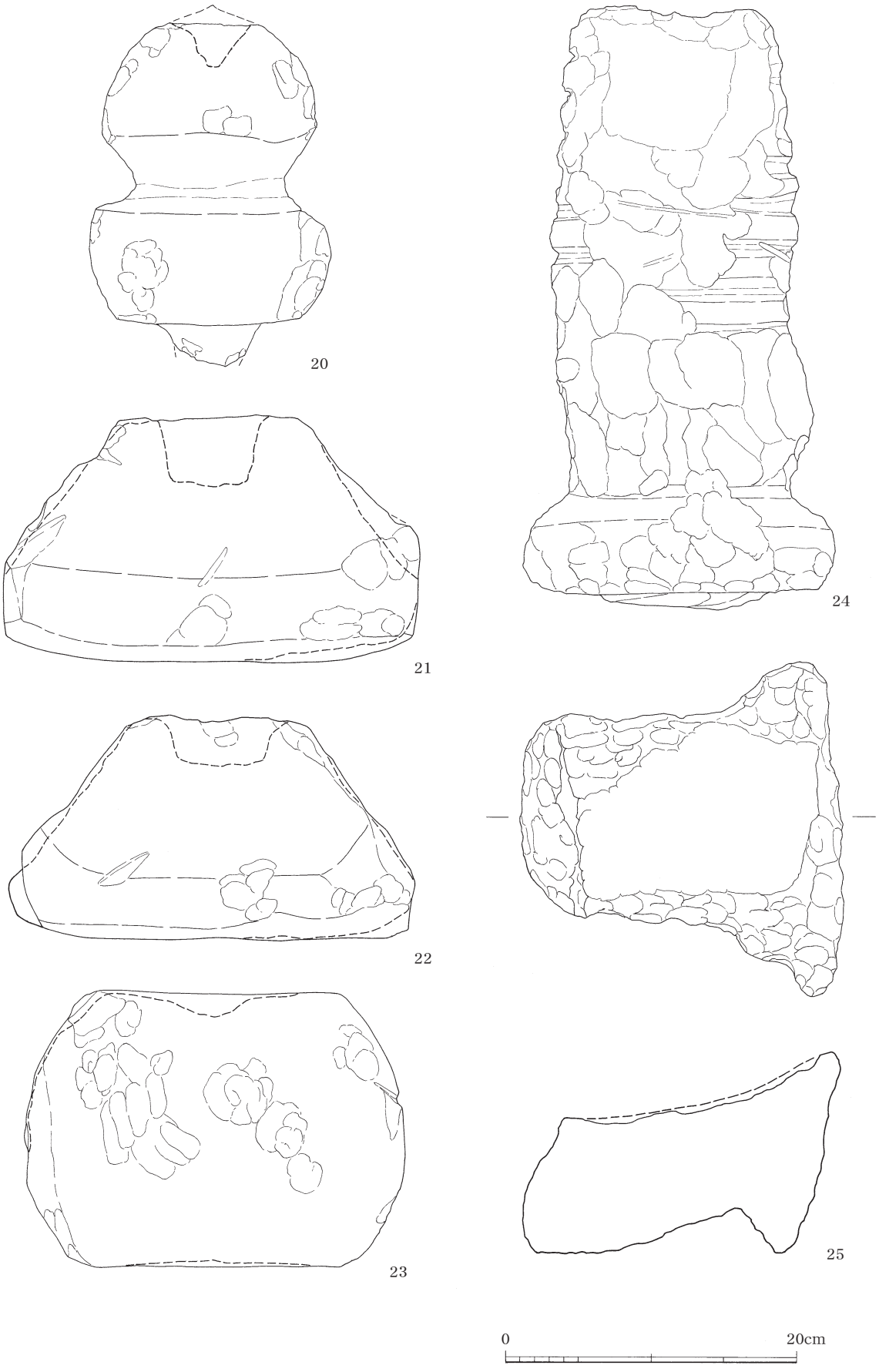
26は茶臼の下臼で、凝灰岩製である。径40.6cm、高さ14.0cmを測り、中央には径21.0cmのやや膨らみのある突出部があり、ほとんど磨滅しているが表面には擦り目が残る。周囲には深さ2.5cmほどの受け部がある。中心には下面から円孔が穿たれ、貫通している。３号集石出土。31は茶臼の下臼片で、やや粗い砂岩製である。４分の１程度が遺存し、復元口径は30.4cm、高さは8.8cm



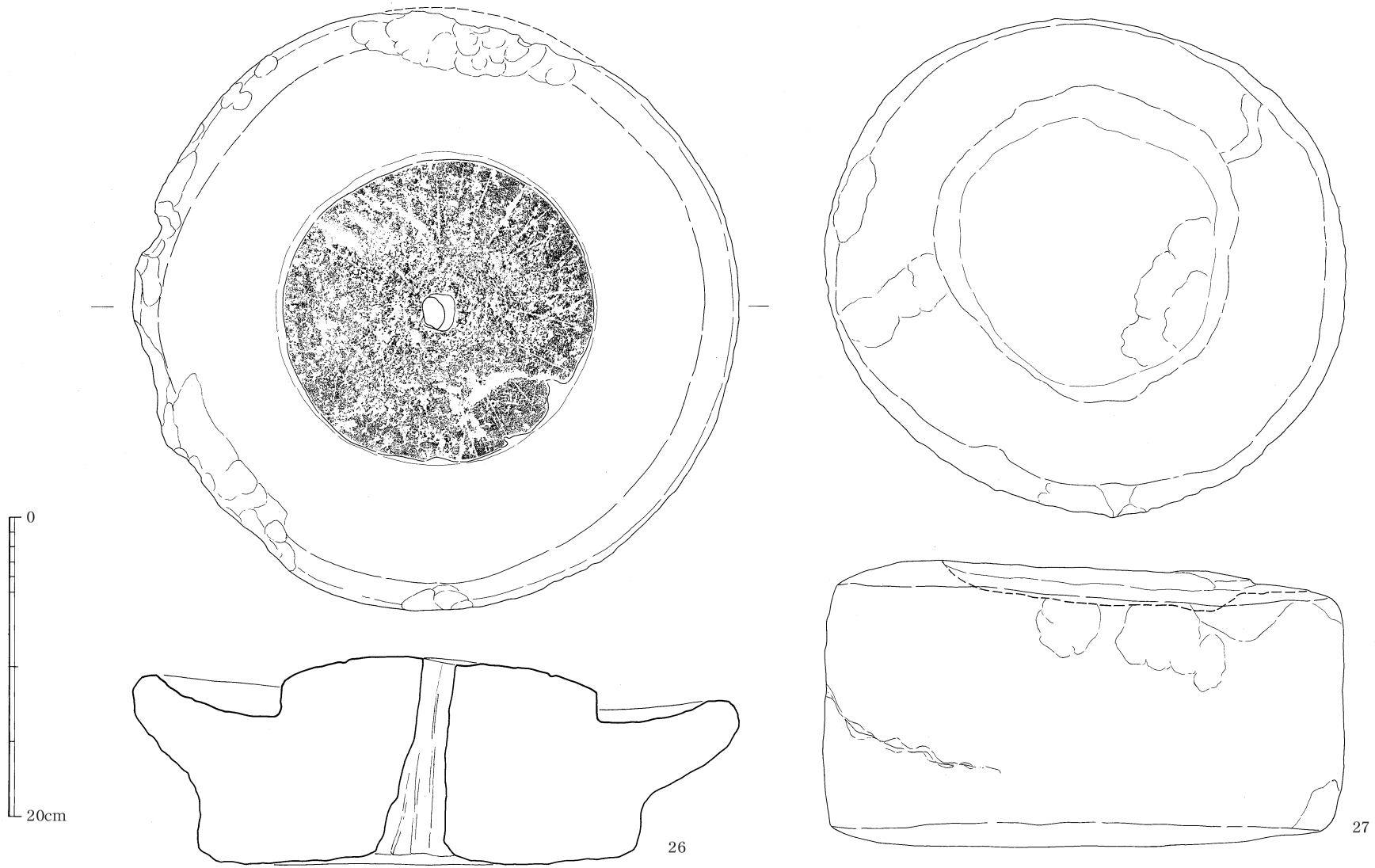
第163図　石製品実測図②（16：1/3、他1/2）



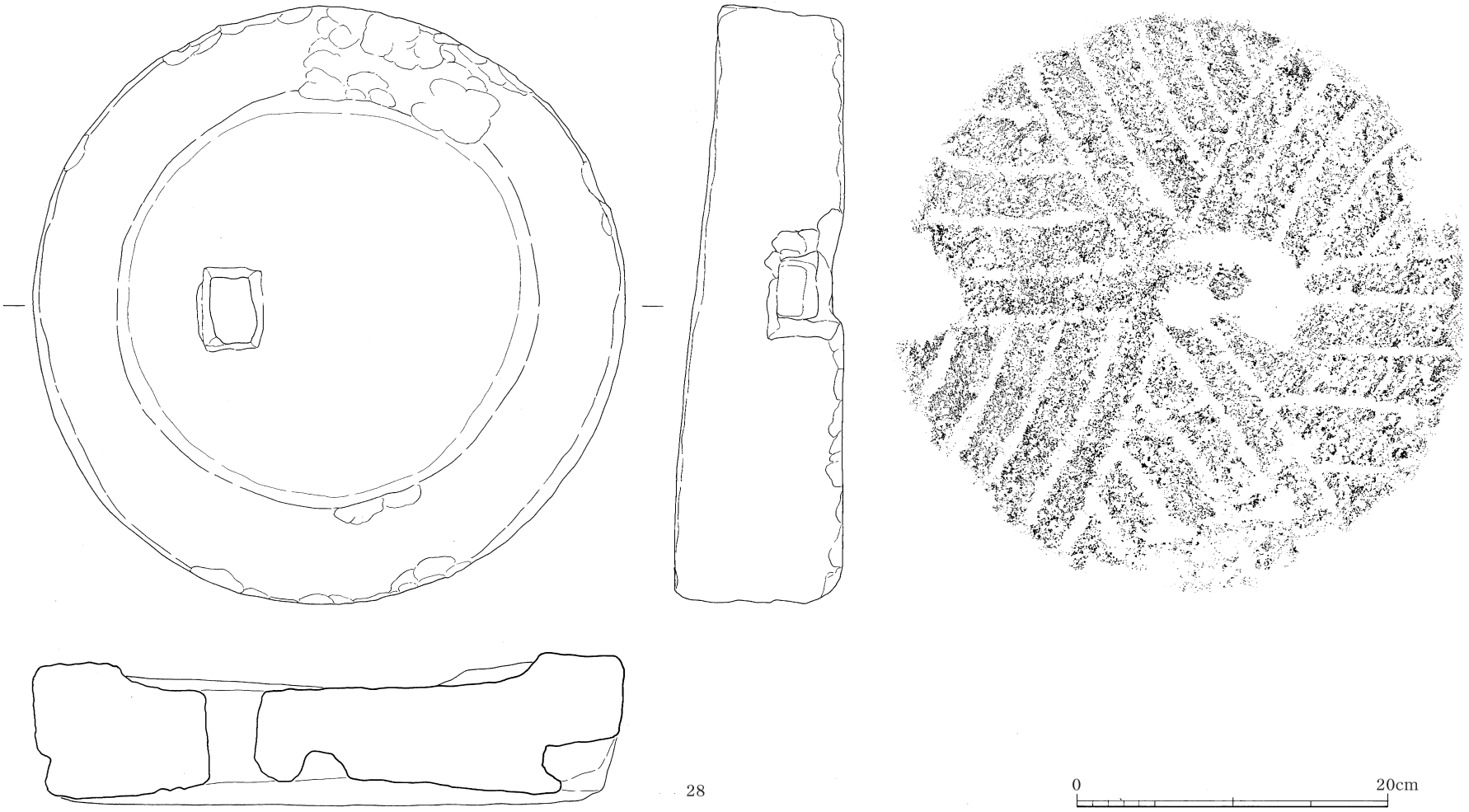
第164図　石製品実測図③（1/2）



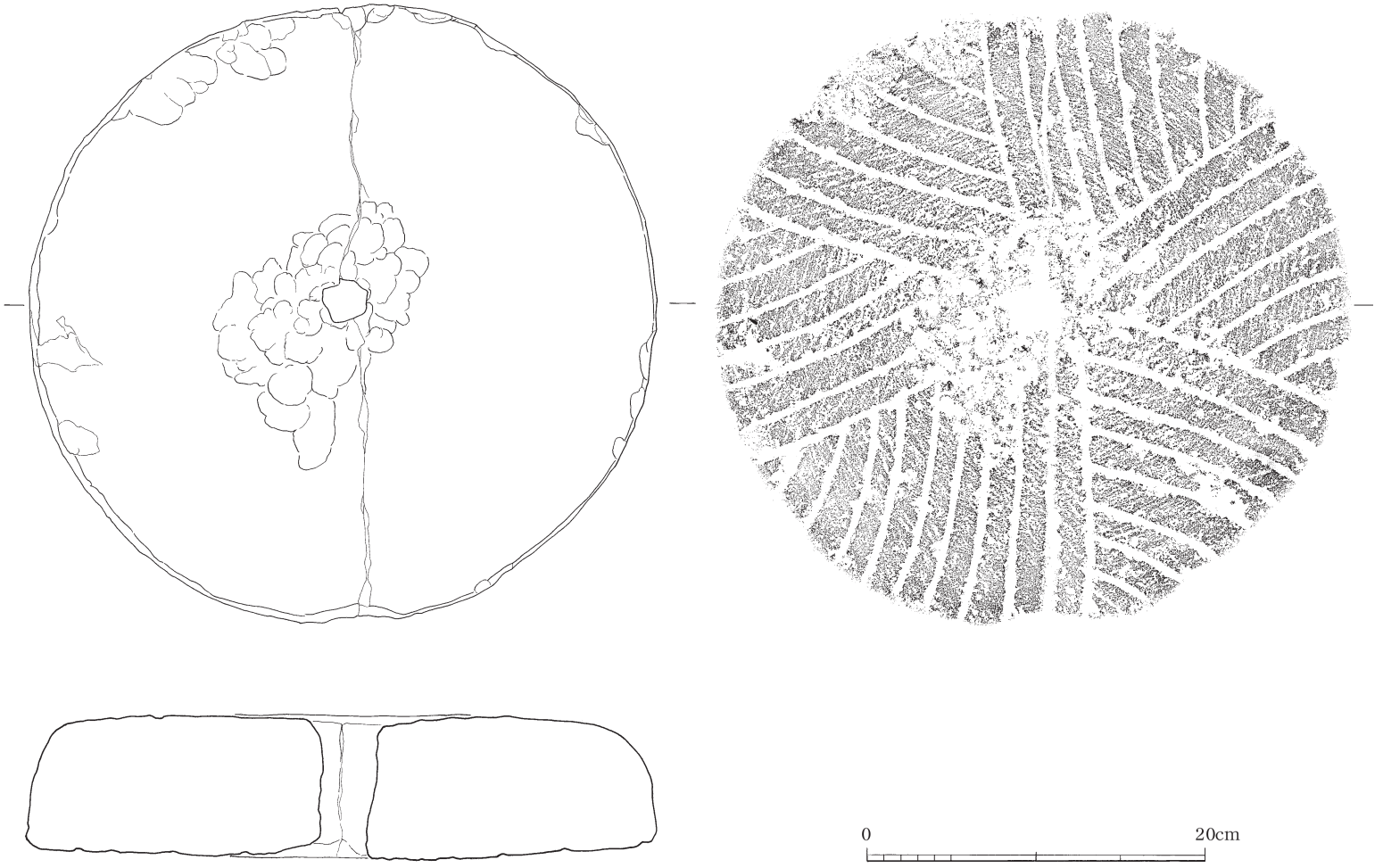
第165図　石製品実測図④（1/4）



第166図　石製品実測図⑤（1/4）

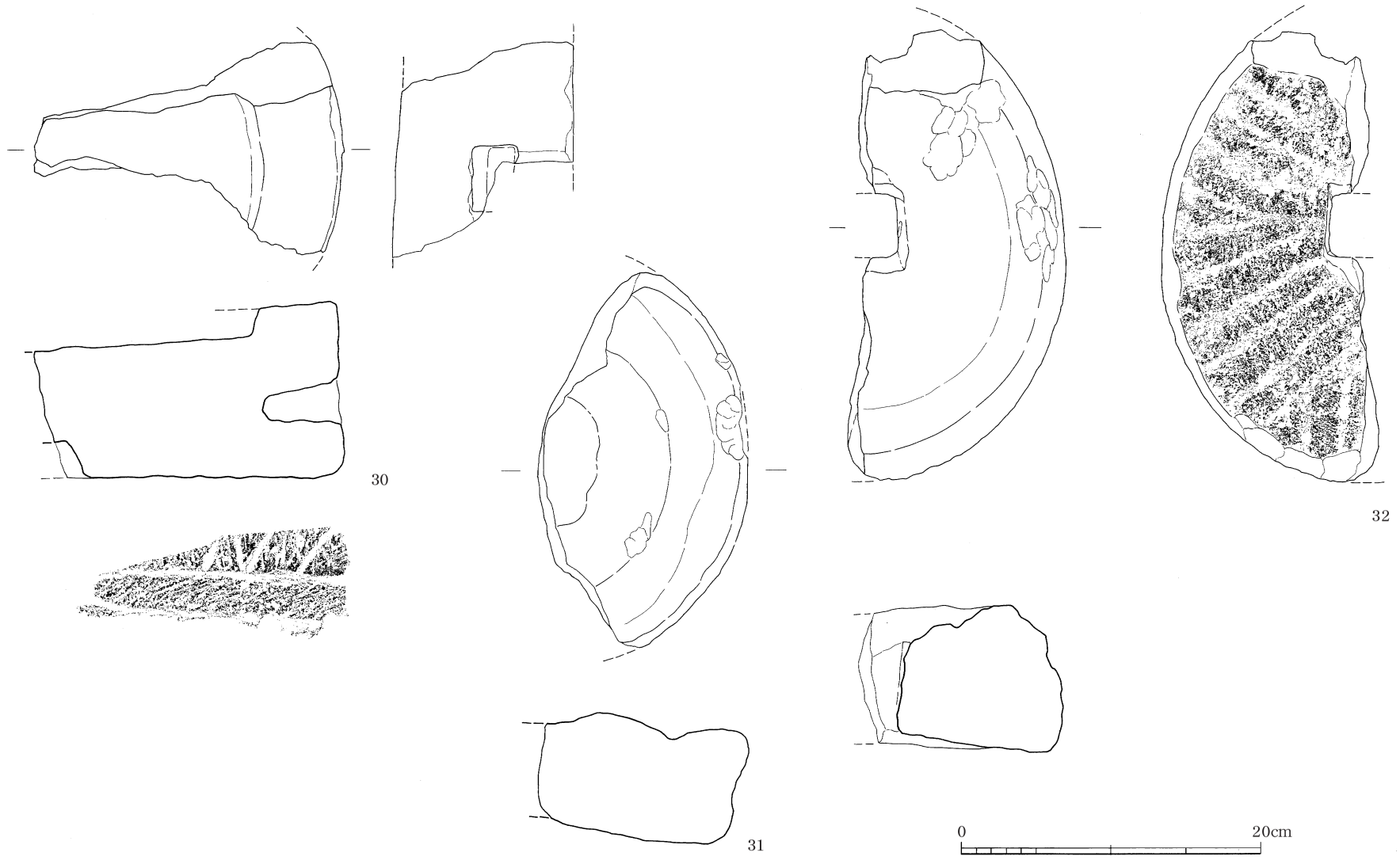


第167図　石製品実測図⑥（1/4）



29

第168図　石製品実測図⑦（1/4）



第169図　石製品実測図⑧（1/4）

を測る。上面は受け部があり、少し隆起させた中心部はややへこむ。側面は中央がへこませる形態で、31のような形態を意識したものと考えられる。３号集石出土。

28～30・32は粉挽き臼である。

28は粉挽臼の上臼の完形品で、凝灰岩製である。径38.3cm、高さ9.65cmを測り、上面は外縁以外は径27.2cm、深さ1.9cmで一段下げる。下面はややへこみ気味で、六分割の擦り目が刻まれ、中心には軸を受ける孔が径3.6 cm、深さ1.8cmで穿たれている。中央から少し側へ寄った位置に長辺5.2cm、短辺3.9cmの長方形を呈する投入孔が貫通している。側面には縦2.6cm、横4.0cm、奥行き4.8cmの木製把手を差し込む長方形の孔が穿たれている。３号集石出土。29は粉挽臼の下臼で、凝灰岩製である。二分割された状態で別々に出土したが、接合し完形品である。径32.4cm、高さ18.6cmを測り、下面側の径が少し小さくなる。上面には六分割の擦り目が刻まれており、下面にも磨滅しているが８分割かと推定される分割線の痕跡がわずかに残る。中心には軸を入れる円孔が下側から穿たれている。３号集石出土。30は粉挽臼の上臼で、硬質の凝灰岩製である。８分の１程度しか遺存しておらず、径は下面に穿たれた軸受け孔から復元すると37.4cmほどで、高さは11.7cmを測る。上面は外縁以外を2.0cm程度一段下げる。側面には把手を差し込む長方形の孔が残り、縦3.0cm、横4.4cm、奥行き6.3cmを測る。３号集石出土。32は粉挽臼の上臼で、凝灰岩製である。２分の１に満たない程度の破片で、復元口径は約35.0cm、高さ9.8cmを測り、中心から少し外れて長辺5.9cm、短辺残存長2.8cmの投入孔が穿たれている。３号集石出土。

鉄製品（図版66、第170～172図）

１は鉄銭である。全面鉄錆で覆われ、砂礫が融着しているため、銭種は不明であるが、中央に１辺0.6cmの方孔があるので、銭貨と判断した。径4.6cm、厚さ0.25cmを測る。Ⅱ区P881出土。

２～16は鉄釘である。

２は先端部片である。残存長2.4cmを測り、断面は一辺0.3cmで、角錐状を呈する。Ⅱ区中段包含層出土。３は先端部片で、端部を欠損する。残存長2.3cmを測り、断面は一辺0.3cmで、角錐状を呈する。Ⅱ区中段包含層出土。４は先端部片で、端部が曲がる。残存長2.65cmを測り、断面は一辺0.4cmで、角錐状を呈する。溝２出土。５は両端を失う。残存長2.7cmを測り、断面は一辺0.4cmで、角柱状を呈する。Ⅱ区遺構面出土。６は頭部と先端側の端部を失う。残存長4.55cmを測り、断面は一辺0.4cmで、角柱状を呈する。Ⅱ区暗灰褐色土包含層出土。７は先端部を欠損する。頭部はL字状に折り曲げる。残存長3.55cmを測り、断面は一辺0.4cmで、角柱状を呈する。25号土坑出土。８は先端部を欠損する。頭部はT字状を呈し、他の釘に比べるとやや細身である。残存長3.9cmを測り、断面は一辺0.3cmで、角柱状を呈する。Ⅱ区P881出土。９は頭部と先端部を欠損する。残存長4.5cmを測り、断面は0.65cm×0.4cmの長方形で柱状を呈する。Ⅱ区P881出土。10は頭部と先端部を欠損する。頭部はL字状に曲げるようである。鉄錆で固着した砂礫に覆われており長さは不明であるが、断面は0.8cm×0.4cmの長方形で、柱状を呈する。Ⅱ区P1037出土。11は頭部と先端部を欠損する。残存長5.1cmを測り、断面は一辺0.5cmで、角柱状を呈する。Ⅱ区P747出土。12は先端部を若干欠き、先端側が少し曲がる。頭部はL字状に少し折り曲げる程度である。残存長5.9cmを測り、断面は一辺0.7cmで、柱状を呈する。Ⅲ区包含層出土。13は頭部と先端部を欠損するが、比較的大型である。残存長は7.2cmを測り、断面は0.5cm×0.4cmの

長方形で柱状を呈する。遺構面出土。14は頭部と先端部を失うが、比較的大型である。残存長7.9cmを測り、断面は0.6cm×0.5cmの長方形で柱状を呈する。17号土坑出土。15は先端部を欠き、頭部は鉄錆で固着した土砂により形態不明である。大型の部類である。残存長はおよそ8.0cmで、断面は0.7cm×0.6cmの長方形で、角柱状を呈する。Ⅲ区包含層出土。16は頭部、先端ともにわずかに欠ける。推定される全長は9.8cmで、断面は一辺0.65cmで、角柱状を呈する。 6 号土坑出土。

17・18は鏃である。

17は両端を欠損し、残存長5.85cmを測る。断面は胴張り気味の方形で、一辺0.4cm程度である。P989出土。18は一部だけが遺存しており、釘の可能性も考えたが、屈曲の程度が弱くほぼ一定の幅と厚みであることから鏃とした。残存長3.25cm、厚み0.35cmを測る。Ⅲ区包含層出土。

19は楔である。全面砂礫が鉄錆で固着しているため不明な点も多いが、長辺1.25cm、短辺1.0cm、残存長4.9cmの角錐状を呈する。Ⅱ区溝 5 出土。

20・21は鉄製飾金具である。

20は内外とも錆化が激しく、遺存状況はよくないが、中央部が半球状に膨らむ円形を呈する。鋲の痕跡や有機質の付着などは一切みられないが、後述する21の外縁が花形になっていることから飾金具と推定する。 3 区包含層出土。21は 2 分の 1 ほどが遺存するが、鉄錆の進行もあって状態は不良である。20と同様に中央が半球状に膨らむが、外縁は花形を呈する。鋲などの痕跡は一切ないが飾金具と考える。Ⅲ区包含層出土。

22・23は鉄製鋤先である。

22は側面部分の小片で、袋状に折り返された形態が残り、断面はくの字状を呈する。 3 号集石出土。23は側面から先端部へ移行する部分の小片である。やはり袋状に折り返されており、断面はくの字状を呈する。表土掘削時出土。

24～29は刀子である。

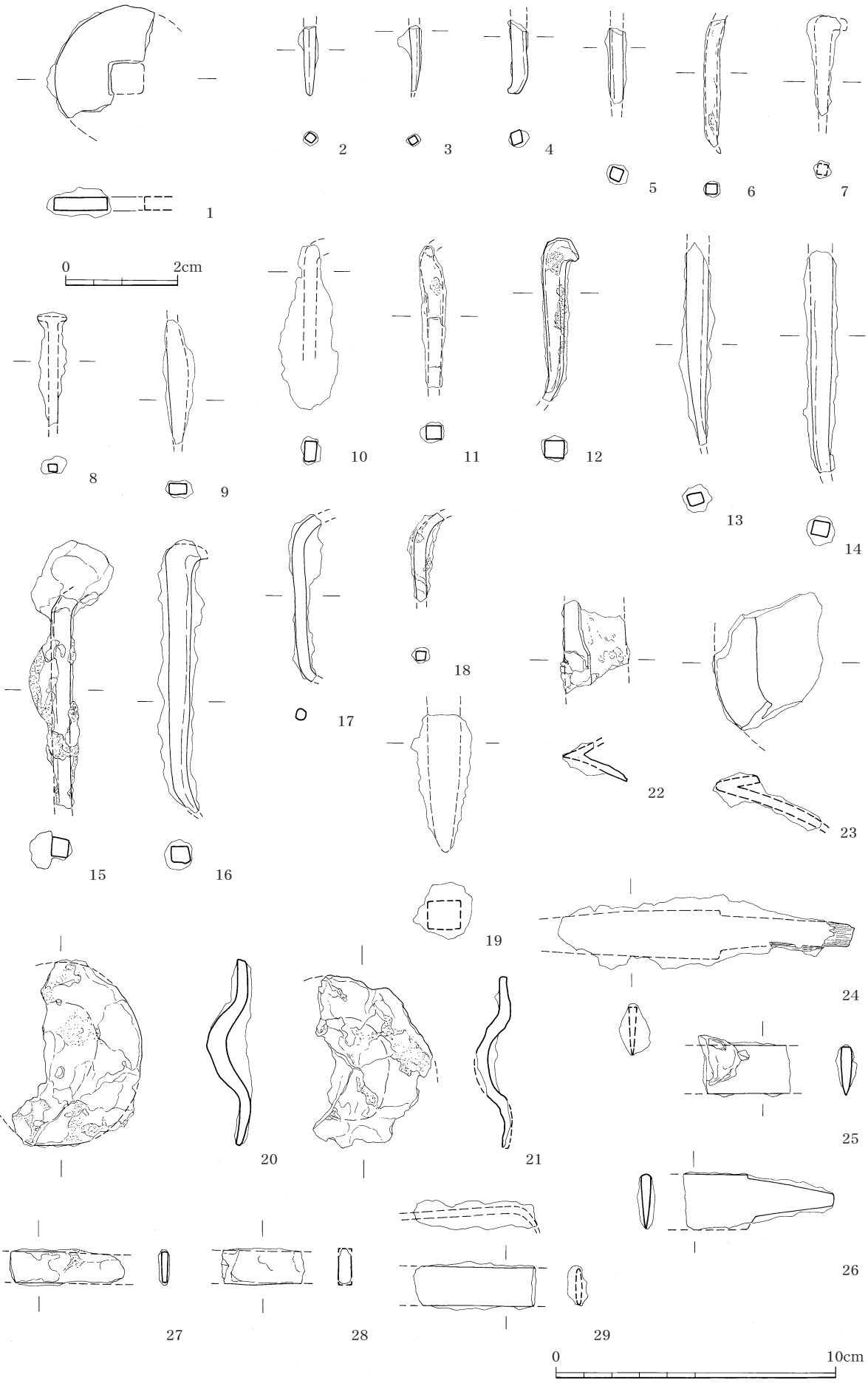
24は比較的良好に遺存し、残存長は10.6cm、刃部幅1.75cm、厚さ0.3cm、茎幅1.0cmを測る。茎には一部木質が遺存し、目釘は不明である。図面では観察し得る範囲で形態を復元し、両関であることは確かであるが、その位置についてはやや不安がある。P525出土。25は刃部の破片である。刃部幅1.7cm、厚さ0.4cmを測る。Ⅲ区排土中出土。26は茎側の破片である。茎は先細りで短く、関は遺存状況から両関に復元でき、刃部幅1.95cm、厚さ0.3cmを測る。遺構面出土。27は茎の破片で、残存長3.1cm、厚さ0.2cmを測る。Ⅲ区包含層出土。28は茎の破片で、残存長2.9cm、幅1.3cm、厚さ0.5cmを測る。溝 5 出土。

29は片方が少し曲がっており、断面形状が長方形を呈さないため、やや不安が残るが茎の可能性を考える。残存長4.35cm、幅1.35cm、厚さ0.2cmを測り、断面は端部に丸みをもつ凸レンズ状を呈する。P522出土。

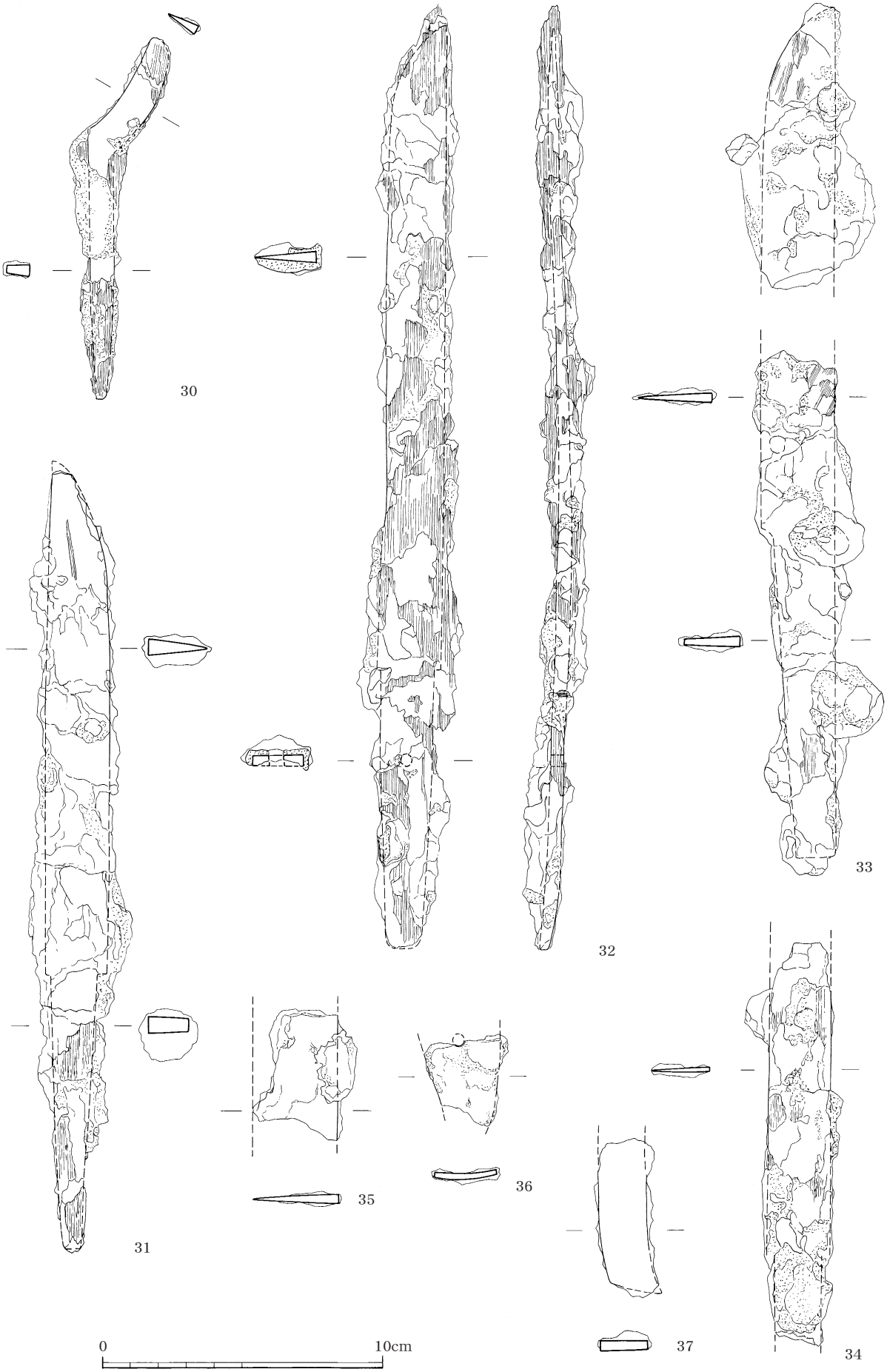
30は弓削刀子である。完形品で、刃部がへの字に曲がる形態が特徴で、内側ではなく外側に刃がつく。茎には木質がかなり付着していることから、木製の柄であろう。刃部にも木質が付着しているが、本来この形態の刃部に鞘が付属していたのか判らない。刃部は長さ4.0cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmを測り、茎部は長さ9.6cm、幅0.9cm、厚さ0.4cmを測る。62号土坑出土。

31～40は鉄小刀である。

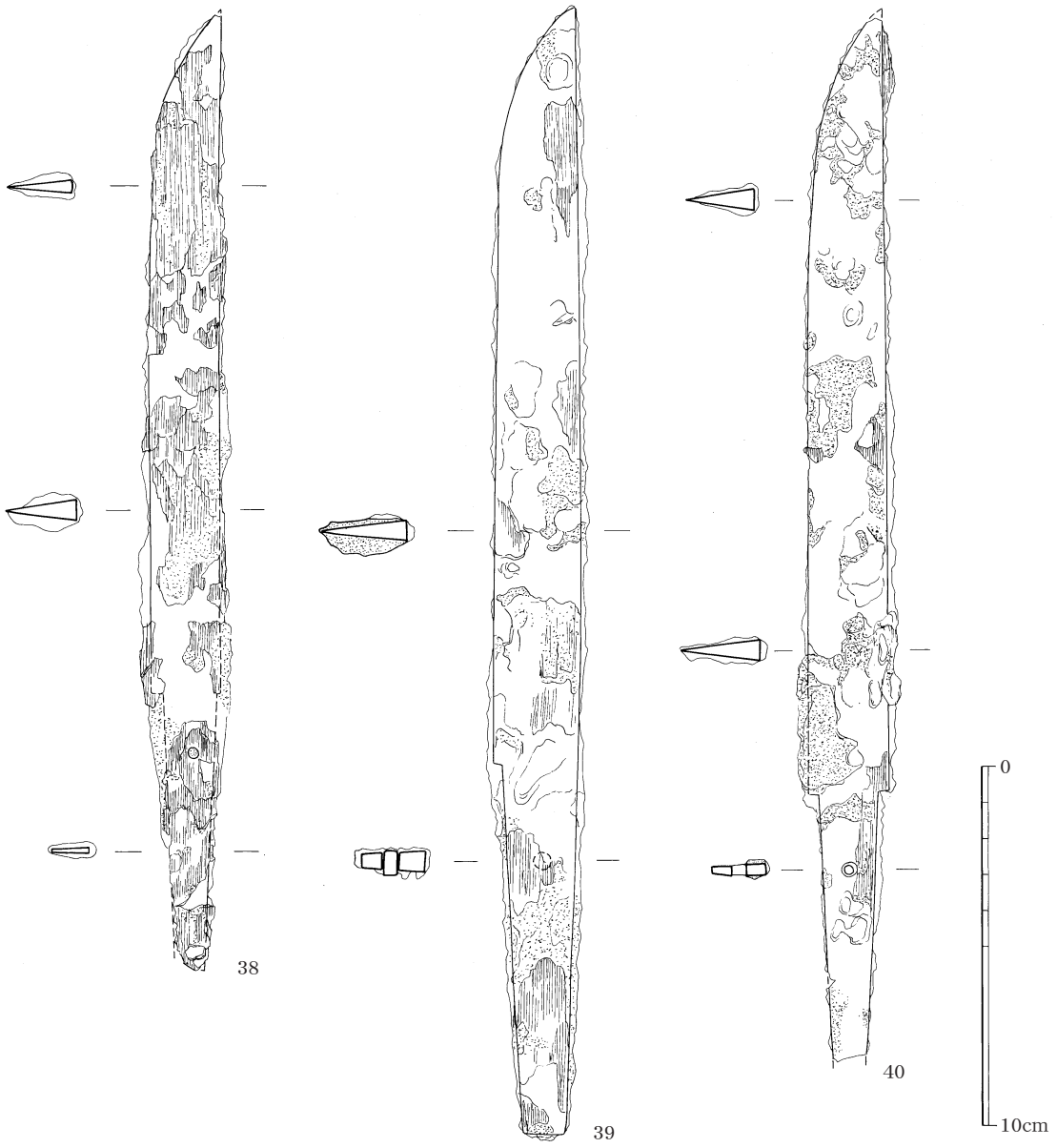
31は切先を少し欠く程度で概ね完形である。土圧のためか若干横方向に反る。先細の切先で両



第170図　鉄製品実測図①（1：1/1、他：1/2）



第171図　鉄製品実測図②（1/2）



第172図　鉄製品実測図③（1/2）

関、茎部は細茎の一文字尻である。茎部は多くが木質で覆われており、目釘孔の位置は不明である。刃部は復元長18.4cm、幅2.4cm、厚さ0.55cmを測る。茎部は長さ9.7cm、幅1.45cm、厚さ0.6cmを測る。15号土坑出土。32は完形で、少し横方向に反る。フクラ切先で両関、茎部は中細で端部は若干丸みをもつ。全体的に木質が付着する。目釘は関部寄りに一孔確認できる。刃部は長さ23.1cm、幅2.2cm、厚さ0.4cmを測る。茎部は長さ10.0cm、幅1.8cm、厚さ0.4cmを測る。26号土坑出土。33は刃部中央を欠損する。フクラ切先で片関、茎は中細の一文字尻である。全体に鉄錆が覆うが、わずかに木質もみられる。刃部は幅2.65cm、厚さ0.4cmを測り、茎部は幅2.2cm、厚さ0.4cmを測る。52号土坑出土。34は他に比べると小さめであるが、刀子よりも大きいので小刀として報告する。切先側と茎尻を欠損し、刃部側に木質が少し遺存する。刃部は残存長11.2cm、幅2.2cm、

厚さ0.2cmを測り、茎部は残存長3.2cm、幅1.6cm、厚さ0.2cmを測る。52号土坑出土。35は刃部片である。やや薄手で、残存長4.5cm、幅3.1cm、厚さ0.3cmを測る。Ⅱ区排土中出土。36は茎片である。実測図ではかなり先細りになっているが、全体に少し変形しているためである。破面に目釘孔が遺存する。残存長3.1cm、幅2.3cmを測る。Ⅱ区P1031出土。37は茎片とみられるが、端部が少し反る形態が特徴である。残存長5.5cm、幅1.75cm、厚さ0.35cmを測る。P166出土。38は切先先端と茎尻をわずかに欠損する程度で概ね完形である。先細切先で、関は刃部の幅から両関と推定され、茎部は中細茎の一文字尻である。茎には関寄りに目釘孔を一孔確認できる。全体に木質が残る。刃部は長さ19.0cm、幅2.0cm、厚さ0.6cmを測り、茎部は長さ7.7cm、幅1.45cm、厚さ0.2cmを測る。62号土坑出土。39は完形である。先細切先で片関、茎部は中細茎の一文字尻である。茎には関寄りに目釘孔があり、目釘が遺存している。全体に少し木質が残っている。刃部は長さ21.0cm、幅2.4cm、厚さ0.6cmを測り、茎部は長さ10.3cm、幅1.5cm、厚さ0.2cmを測る。64号土坑出土。40は切先先端と茎尻を欠損するのみで、概ね完形である。先細切先で両関、茎部は中細茎でおそらく一文字尻であろう。全体に鉄錆に覆われ、木質はわずかに残る程度で、茎の関寄りに目釘孔が開いている。刃部は長さ21.8cm、幅2.2cm、厚さ0.6cmを測り、茎部は残存長7.4cm、幅1.7cm、厚さ0.35cmを測る。65号土坑出土。

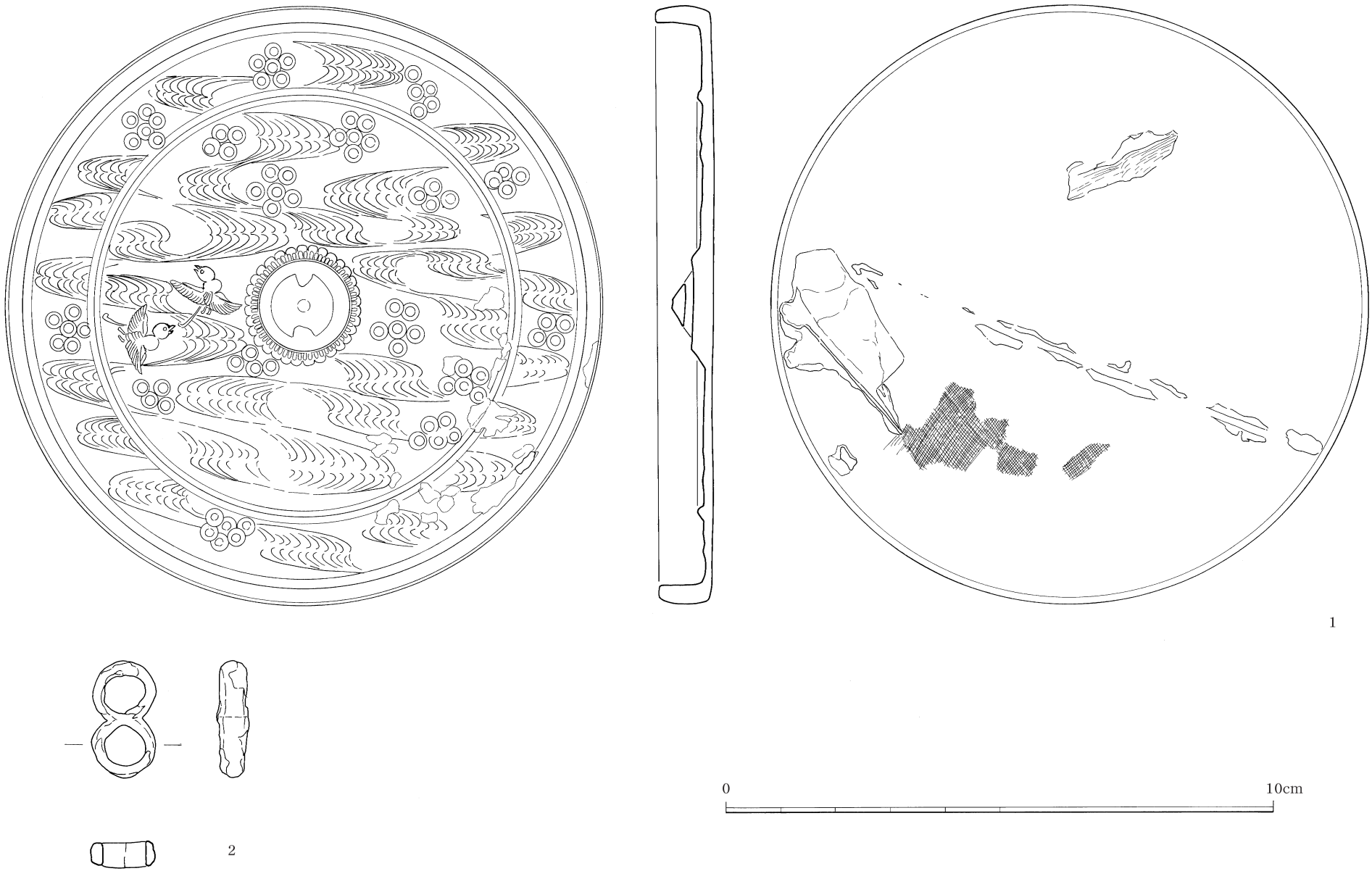
銅製品（図版66、第173図）

1は和鏡の完形品である。面径は10.9cm、高さは1.0cm、鏡面そのものの厚みはおよそ0.2cmを測る。鈕は花形座を有し、半球状というよりも円錐状で頂部が丸い。内区と外区との境に断面三角形の突帯が一条めぐる。口縁部は高さ9.5cm、厚さは最大で3.5cmを測り、やや中膨らみの形状を呈する。外縁沿いに1ヶ所穴があいているが、人工的な痕跡はなく、腐食によるものと推定する。文様は内区と外区の区別はなく、全体に横方向の流水文を下地とし花文を散らす。花文は竹管状の工具で施文されており、4個から6個で1つの花を表現する。桔梗の可能性もあるが、ここでは梅花と推定する。向かって左側には二羽の雀が旋回する。こうした特徴から鏡式名称を与えるならば「梅花流水双雀文鏡」となろうか。

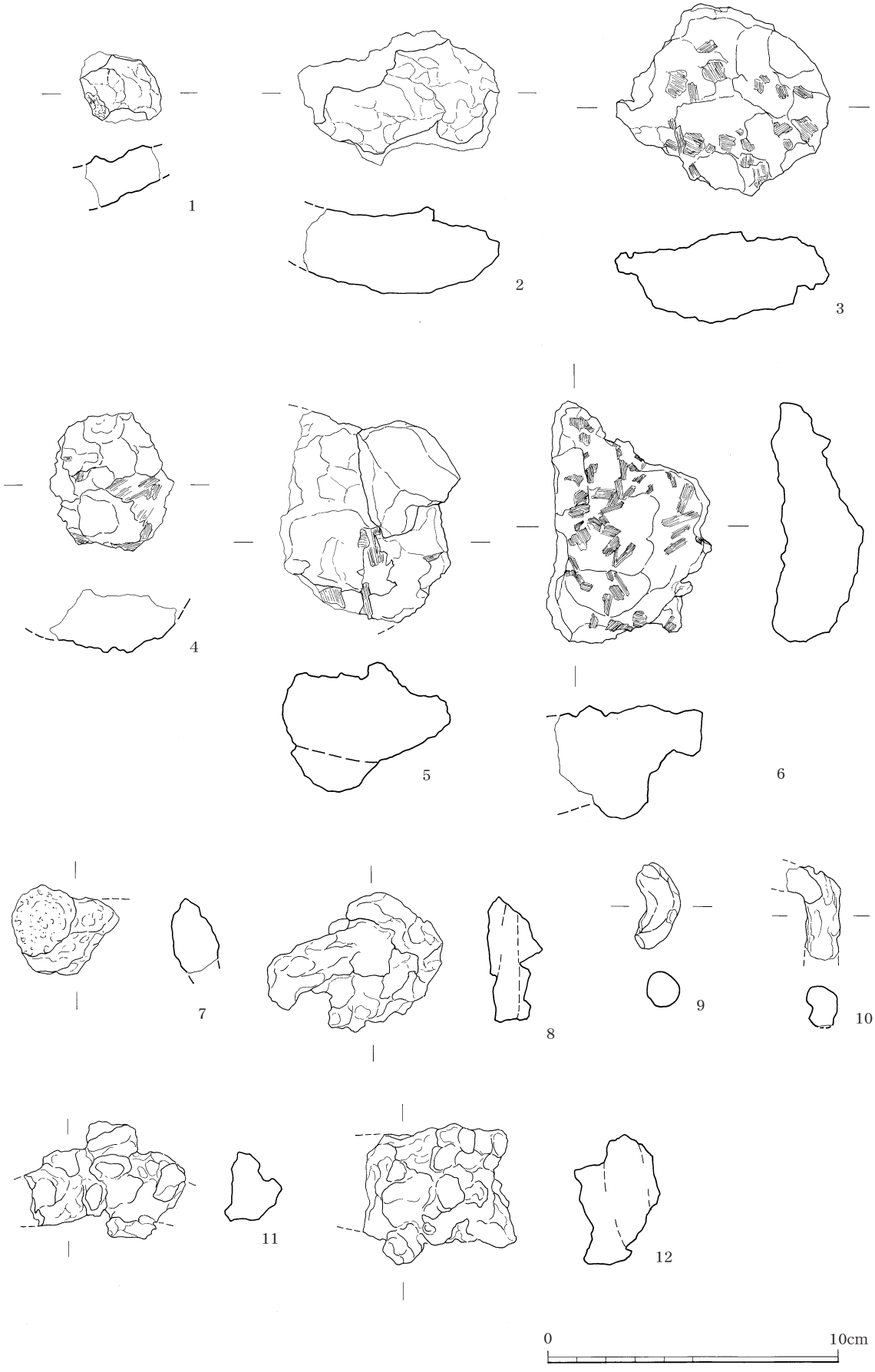
2は双輪状金具である。径1.2cm程度の輪が二連になった形態で、長さは2.1cm・幅は1.2cm・厚さ0.5cmを測る。銅芯に鍍銀したもので、劣化した銀とともに、剥離部分に緑青がみえる。用途は不明である。Ⅲ区包含層から出土。

鍛冶関連遺物（図版66、第174図）

1～6は椀形鍛冶滓である。1は小片であるが、底面には炉床土がみられる。表面は錆色を呈する。磁着があり、メタル度はH（○）である。縦2.4cm、横2.8cm、厚さ1.75cm、重さ16.3gを測る。試掘トレンチ出土。2は底面に炉床土面がみられ、わずかに木炭痕が残る。上面は流動質である。上面には鉄錆がみられる。磁着があり、メタル度はH（○）である。縦4.6cm、横7.0cm、厚さ3.0cm、重さ116.7gを測る。71号土坑出土。3は底面の形態は整っていないが、概ね炉底面に接する箇所と思われる。上下両面に1cm以下の木炭や木炭痕が多くみられる。表面は鉄錆が目立つ。磁着はあるが、メタル度は錆化（△）である。縦6.6cm、横7.35cm、厚さ3.2cm、重さ141.6gを測る。P361出土。4は底面が遺存し、上面には木炭ないし木炭痕が認められる。鉄錆があり、



第173図　銅製品実測図（1/1）



第174図　鍛冶関連遺物実測図（1/2）

全体に脆い。磁着があり、メタル度はH（○）である。縦4.7cm、横4.3cm、厚さ2.2cm、重さ46.0gを測る。P361出土。5は底面に粘土質の炉床土が付着しており、上面には木炭ないし木炭痕が散見される。また、上面には4cm大の石が融着している。磁着があるが、メタル度は錆化（△）である。縦7.25cm、横6.25cm、厚さ3.45cm、重さ144.6gを測る。P361出土。6は各面とも剥離しているとみられるが、底面は炉底面にほぼ近いものと考えられる。上下両面に1cm以下の木炭ないし木炭痕が多数みられ、鉄錆もみられる。磁着があるが、メタル度は錆化（△）である。縦8.3cm、横5.65cm、厚さ3.3cm、重さ120.3gを測る。P361出土。

7・8は鍛冶滓である。7は金属質で、上面には砂礫が固着している。磁着が強く、メタル度もH（○）である。単なる鍛冶滓としたが椀形鍛冶滓の破片である可能性もある。縦2.65cm、横3.7cm、厚さ1.55cm、重さ24.4gを測る。試掘トレンチ出土。8は流動質の滓が重層している。磁着が少しあり、メタル度は錆化（△）である。縦4.8cm、横6.0cm、厚さ1.95cm、重さ53.1gを測る。P517出土。

9～12はガラス質滓である。9は前面が流動状をなし、色調は暗緑色～黒色を呈する。内面にはガス孔もみられ、磁着はない。縦3.0cm、横1.65cm、厚さ1.25cm、重さ4.0gを測る。P438出土。10は両端が欠損しており、それ以外は流動状を呈する。色調は黒色で、磁着はない。縦3.25cm、横1.85cm、厚さ1.45cm、重さ5.7gを測る。71号土坑出土。11は両端が欠けており、全体に流動状を呈する。色調は黒緑色である。磁着はない。縦4.0cm、横5.5cm、厚さ1.9cm、重さ26.6gを測る。P361出土。12は両端が欠けているが、全体に流動状を呈し、大きく三段に重層している。色調は黒色である。磁着はない。縦4.8cm、横5.3cm、厚さ2.9cm、重さ56.8gを測る。P361出土。

5）小結

上伊良原榎遺跡では縄文時代と中・近世の二つの時期に帰属する各遺構・遺物が確認された。以下に概要と特記事項を記してまとめとする。

縄文時代の遺構と包含層について

本遺跡では、第Ⅱ文化層～第Ⅳ文化層の計3つの縄文時代文化層を確認した。まず第Ⅱ文化層の様相を見てみると、Ⅰ区北側では明茶色粘質土の堆積があり、点数は少ないが後期の土器が出土している。石器の中には先行する時期の所産と思われる遺物も見られるが層としては後期に形成された遺物包含層である。

Ⅰ区東側には明黄灰褐色土からなる層が認められた。この層は近隣の遺跡を調査した際に行った科学的分析結果によりアカホヤ火山灰に由来する堆積層であることが判明しており、時期判別の目安となる。出土した土器は粘土瘤のある刺突文土器、押型文土器、轟B式土器と複数の時期にまたがるが、この層の時期を示すのは出土点数こそ少ないが轟B式土器であり、他の土器は下層から混入したものと思われる。

Ⅱ区でもやはりアカホヤに由来する明黄橙色土の堆積が見られた。ここでは縄文時代後期初頭前後の遺物が出土しており、この時期を中心とした遺物包含層であることが判った。この層と同時期の遺構には57・58号土坑がある。この二つの土坑は人工的な遺構ではなく風倒木痕であるが、特に58号土坑から出土した遺物は小片こそ多いものの、後期初頭の西和田式土器を中心とし時期的にもまとまりがある一群である。

Ⅲ区西側でも同質の黄橙色土層が厚く堆積していたが、出土した遺物は旧石器から縄文時代早期の遺物しか見られず、前期以降の遺物は皆無に等しかった。これらは下層から混入したものであり土層本来の時期を示すものではない。

第Ⅲ文化層は明灰色粗砂の堆積による層でⅡ区でのみ確認された層である。出土遺物は早期の刺突文土器や押型文土器と後期前半の土器がある。第Ⅲ文化層はアカホヤ火山灰堆積層である第Ⅱ文化層の下層に位置することから少なくとも前期に下る時期ではないので、後期の遺物に関しては混入品と考えてよい。土層図の観察所見でもふれたように、この付近一帯は風倒木による土層の撹乱が多く見られたので、こうしたことも混入の一要因となったものと思われる。

第Ⅳ文化層は黒褐色土からなる層で広範囲にわたって確認された。Ⅰ区東側では点数は少ないが、ほぼ押型文土器単純と言ってもよい状況で遺物が出土している。供伴する石器も含めて一括性の高い資料として評価して良いだろう。上層の第Ⅱ文化層からも同時期の遺物が多数出土したが、これらはこの層に由来するものである。なお、この層からは確実に同時期の所産である１・２号集石も見つかっている。

Ⅱ区第Ⅳ文化層では明らかに後期の混入品である一部の土器を除いて粘土瘤のある刺突文土器、鰭状突起のある土器とこれらに伴う条痕文土器しか出土しておらず、供伴する石器も含めて限定された時期幅にある資料群とすることができる。検出した76号土坑は層位的にも出土遺物からも同時期のものと判断される。

Ⅲ区北側のＦ－17～Ｋ－21Gr付近は削平のため既に包含層は失われてしまっていたが、遺構の覆土と出土土器から第Ⅳ文化層に相当する遺構として調査した場所である。ここでは旧石器、粘土瘤のある刺突文土器、轟B式土器が出土した。同一遺構面で各遺構の調査を行ったたため時期比定は各遺構の覆土の様相と出土遺物の時期に頼らざるをえない状況であった。出土した遺物のうち旧石器は出土状況から明確な遺構からの出土ではなく混入品と見てよい。轟B式土器もわずかな点数にとどまり、出土遺物の大半は刺突文土器の時期に帰属するものと考えられる。１～４号竪穴住居跡については、規模が小さいことや主柱穴、炉跡などが明瞭でないなど竪穴住居跡とするのに不安な点もあるが、１号竪穴住居跡が典型であるように平坦な床面と中央土坑や柱穴の配置から竪穴住居跡と考えた。これらは出土遺物から刺突文土器の時期に位置付けられるものである。なお同種の遺構は福岡市南区の柏原E遺跡でも数多く検出され、竪穴住居跡として報告されている。

Ⅲ区南側や西側でも黒褐色土の堆積があり、この層からは旧石器と、粘土瘤のある刺突文土器、条痕文土器しか出土していない。旧石器は単一層を形成するものではなく混入品と考えられるため、粘土瘤のある刺突文土器の時期にほぼ限定された層と言うことができる。

上記をまとめると、第Ⅱ文化層はアカホヤに由来する層で前・後期の遺物包含層、第Ⅲ文化層は早期の刺突文土器から押型文土器までの遺物を含む包含層、第Ⅳ文化層も早期の刺突文土器から押型文土器までを含む包含層で、このうちⅠ区東側はほぼ押型文土器に限定される層、Ⅱ区やⅢ区は刺突文土器に限定される層、という結果になる。

粘土瘤をもつ刺突文土器について

上伊良原榎遺跡では、粘土瘤をもつ刺突文土器がまとまって出土しており、本遺跡を代表する土

器群の一つである。これらは「柏原式土器」と称され早期初頭に比定される一群に相当する。ここでは上伊良原榎遺跡から出土した一群の特徴をふまえた上で、福岡県内の各地で発見されている他の同種の土器（第175図）との比較を行いたい。

本遺跡から出土した粘土瘤をもつ刺突文土器には以下のような特徴がある。

① 口縁部はほぼ例外なく外反する。底部まで接合する資料に恵まれなかったが供伴関係から乳房状の狭角尖底になるものと思われる。

② 外面の口縁端部から２～３cm下がった位置に連続する刺突文を配置する。判断できる限りでは全て一列に巡っており複数列配置されることはない。刺突文の間隔は２cm以上のものが大半で、１cm以内のものは１点のみである。

③ 刺突文の施文具は棒状の工具と二枚貝頂部押圧によるものとがある。このうち棒状工具の一部には頂部が欠損した巻貝の押圧によると思われるものがある。いわゆる押引きによる刺突は１点のみである。

④ 刺突文の施文深度は浅く、深いものでも器壁の厚みの半分程度にとどまる。

⑤ 刺突文より下位に粘土瘤を貼り付ける。瘤は指整形のため指圧痕が明瞭な不整半球形となる。一定の間隔をあけて一列に配置されるが縦軸を刺突文と揃えたものは１点しかなく、基本的には刺突文と粘土瘤との配置間隔は異なっており現状では規則性を窮うことができない。

⑥ 器壁の調整は内外面とも粗い二枚貝条痕を深く明瞭に施文しており、その後口縁部付近に横ナデを行う。刺突文の施文や粘土瘤の貼付はその後に行われる。

⑦ 器壁は10mmを超えるものが多いがせいぜい12mm程度の厚さであり、極端に厚いものは見られない。７～８mm程度の薄いものもある。

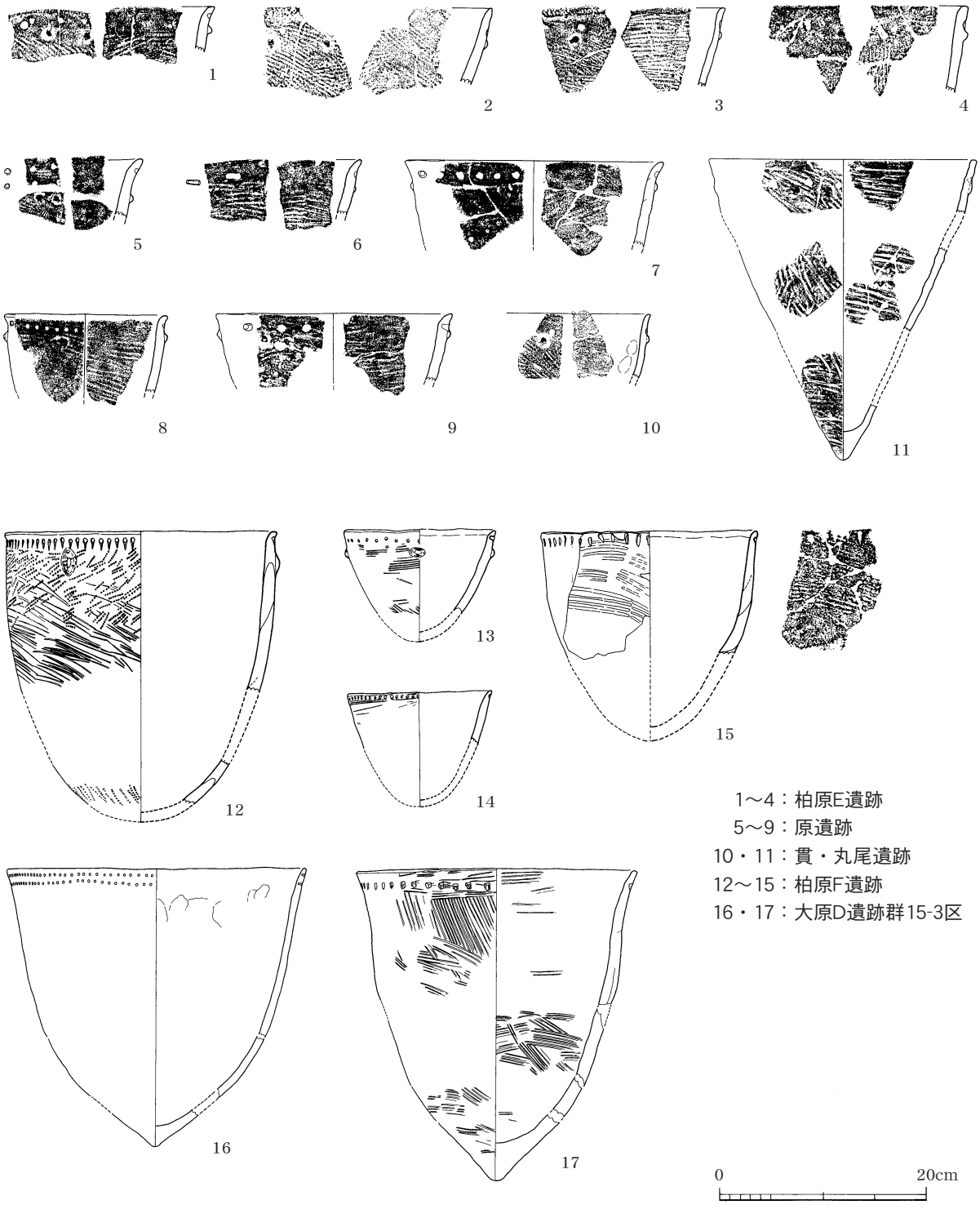
⑧ 焼成は良いものが多い。色調は暗灰褐色のものもあるが、明るい黄褐色や茶褐色のものが特徴的に見られる。胎土には角閃石を含むものが多いが、これは地域的な特徴である。

図示した中で第83図８は施文方法や間隔で他と異なっており異質な存在だが、それ以外は①～⑧の特徴を共通要素として備えたものである。口径については復元できる破片が少ないが、可能な範囲で復元した限りでは20cm前後に復元される。こうした特徴のある上伊良原榎遺跡の刺突文土器を、次に福岡県内の他遺跡から出土した刺突文土器と比較する。

柏原遺跡群（福岡市南区）

樋井川沿いの標高50～70mの河岸段丘上に立地する遺跡で、E・F・Kの各遺跡から刺突文土器が出土しており「柏原式土器」設定の契機となった遺跡である。刺突文土器は調査担当者によってE・K遺跡から主体的に出土した一群とF遺跡から出土した一群に二分され、前者から後者への時期的変遷が想定されている。なお底部の形状については調査当時は不明だったが類例の増加により尖底になることが判明している。

上伊良原榎遺跡出土例と比較した場合、E・K遺跡出土の一群とは口縁部の外反具合や刺突文の施文間隔、粘土瘤の大きさや配置、器壁の調整で共通し、上伊良原榎遺跡には二列の刺突文土器が見られない点では異なる。一方でF遺跡出土の一群とは口縁部下の刺突に関しては共通するが、刺突文の大きさや間隔、粘土瘤の形状や配置で異なる。一本一本の条痕を施文する土器も上伊良原榎遺跡では見られない。刺突文施文の際の押引き手法や刺突文の間隔の狭さは上伊良原榎遺跡の一群では異質とした第83図８に見られる特徴である。



第175図　刺突文土器の出土例(1/6)

大原Ｄ遺跡群15ー3区（福岡市西区）

浅い谷に面した標高26mの斜面にあり、埋没谷の土石流堆積物から柏原式土器が多く出土している。ここで出土した柏原式土器は刺突文の施文方法から横方向から刺突する１類と下方からの押引きによる２類とに分類され、柏原Ｆ遺跡との共通性が指摘されている。上伊良原榎遺跡出土例と比較した場合、まず刺突工具が異なっており、大原Ｄ遺跡15－３区例では径３mm前後が多い

とされるが上伊良原榎例では小さくても５mmを超え、大きな刺突文であることが挙げられる。施文の深さも大原Ｄ例ほど深く施文されるものはない。２類とされた下方からの押引き施文も上伊良原例では見られない。刺突文の施文間隔も上伊良原例の方が広く施文される。粘土瘤も大原D例では基本的に見られない。

原遺跡（筑紫野市）

標高81mの低位段丘に立地する遺跡で、包含層等から刺突文土器が出土している。この遺跡から出土した一群の口縁部形態や器壁の厚さは上伊良原榎例に共通し、刺突文の大きさや施文間隔、刺突文の下位に貼付される粘土瘤の形状や間隔もまた共通する。異なる点を強いてあげるとすれば、原遺跡例は内面に粘土の盛り上がりが見られるほど刺突がかなり深く施文されるのに対し、上伊良原榎例はこれほど深く施文されるものはない。また刺突文を複数条施文するものも上伊良原榎例にはない。

貫・丸尾遺跡（北九州市小倉南区）

貫川上流域南岸の標高20m前後の舌状丘陵先端部に立地する遺跡で、自然流水路と考えられる谷地形状の窪みに堆積した包含層から柏原式土器が出土している。完形に復元された資料があり、これと比較すると刺突文の間隔や粘土瘤（円形浮文）の形状、施文間隔で上伊良原榎例と共通するが、口縁部が直線的に開き、刺突文の工具に断面二等辺三角形の棒状施文具を使用するなど異なる点もある。

上記の比較結果をまとめると、柏原式土器とされた一群には柏原遺跡群で当初から設定されたように二種類に大別され、刺突文の大きさや角度、配置、粘土瘤の有無、大きさや配置に顕著な差が見られるということになるだろう。上伊良原榎遺跡出土例は福岡県内では柏原E・K遺跡、原遺跡、貫・丸尾遺跡出土例と共通点が見られ、少なくともこれらの地域を包括した範囲を分布圏とする一群として位置付けることができる。なお類似する土器が大分県の北部等でも散見されており、分布圏はさらに広範囲にわたることも予想される。

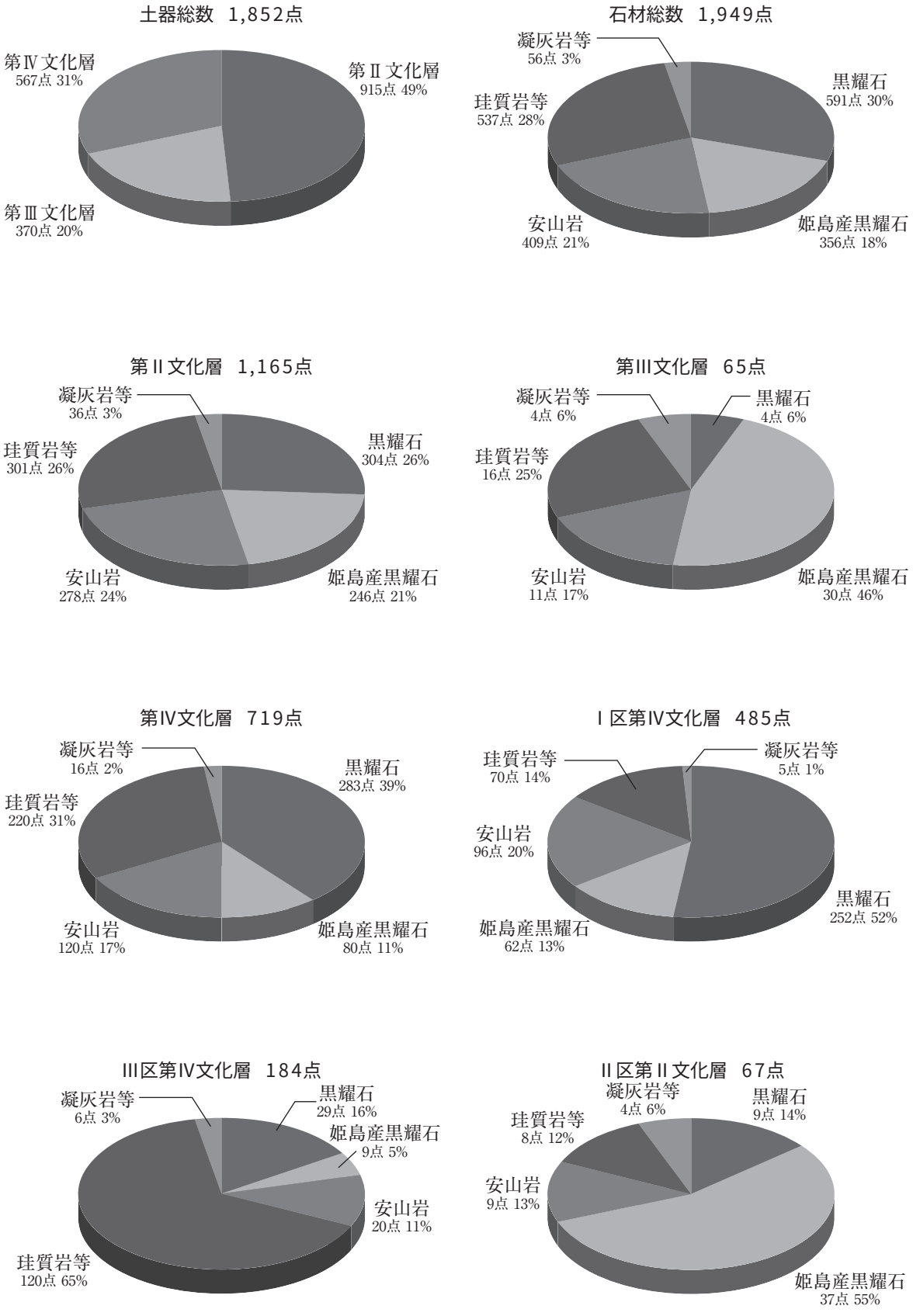
押型文土器について

押型文土器はⅠ区第Ⅱ文化層・第Ⅳ文化層から主に出土しており、Ⅱ区でも数点出土している。特にⅠ区第Ⅳ文化層はほぼ押型文土器単純層である点については先述したとおりである。

出土土器について見てみると、文様は横位の楕円文を施文する押型文土器が多く、横位の山形文施文がこれに次ぐ。格子文はⅡ区58号土坑から後期土器に混じって出土した同一個体の２点のみである。楕円文の粒の大きさは４mm～６mmが大半だが、１点だけ第87図53は楕円文の長さが８mmを図り、縦位施文である。内面の施文は外面と同じ横位の山形文や楕円文施文が多いが、原体条痕もある。底部の形状は広角尖底と狭角尖底とがある。こうした様相は押型文土器の中でも若干の幅を持つものと思われ、早水台式を中心に若干前後する時期を含む可能性がある土器群として捉えておきたい。

石器について

上伊良原榎遺跡では、遺跡内に設定した各グリッドからチップも含めて1,949点の石器が出土した。これら石器の石材について第１表をもとにグラフ化したのが第176図である。ここでは石



第176図　上伊良原榎出土土器・石器出土比率

材を黒色黒耀石、姫島産黒耀石、安山岩、珪質岩等、凝灰岩等に大別し、チャート、石英、水晶、珪化木等は珪質岩等に含めて統計化を図った。なお極小剥片から大型の石材まで全て同じ１点として計上していることを予め断っておきたい。

地区別に見ると、Ⅰ区の出土総数は1,043点、Ⅱ区は182点、Ⅲ区は724点でⅠ区が最も多く、全体の半数以上を占める。石材毎の出土傾向を見てみると、黒色の黒耀石が591点で全体の30%を占め、次いで珪質岩等が537点で28%を占める。安山岩は409点で21%、姫島産黒耀石は356点で18%という内訳になる。姫島産黒耀石や珪質岩等が多く出土するのはこの地域の特徴であり、その傾向が端的に表れる。

次に各文化層の出土傾向について見てみたい。第Ⅱ文化層では1,165点出土しており全体の60%を占め、第Ⅲ文化層は65点で3%しか出土しておらず、第Ⅳ文化層は719点で37%を占める。石材毎の出土傾向を見ると、第Ⅱ文化層では黒耀石が304点で26%を占め、次いで珪質岩等の301点で同じく26%、安山岩の278点で24%、姫島産黒耀石の246点で21%という割合になる。第Ⅳ文化層では黒耀石が283点で39%、珪質岩等が220点で31%、安山岩が120点で17%、最も少ないのは姫島産黒耀石で80点、全体の11%に過ぎない。第Ⅳ文化層の黒耀石と珪質岩等の比率の高さが窺われる。

さらに細かく見ていくと、押型文土器が主体を占めるⅠ区第Ⅳ文化層では石器総点数485点のうち黒耀石が252点で全体の52%、安山岩が96点で20%、珪質岩等が70点で14%、姫島産黒耀石が最も少なく62点で全体の13%という割合になる。黒耀石の優位性と姫島産黒耀石の寡少性が窺える。刺突文土器が主体を占めるⅢ区第Ⅳ文化層では、総数184点中珪質岩等が120点で全体の65%を占め、次いで黒耀石が29点で16%、安山岩が20点で11%、姫島産黒耀石は９点で５%に過ぎない。姫島産黒耀石の少なさと珪質岩等の割合の高さが特徴的である。Ⅱ区第Ⅱ文化層は出土遺物が前期から後期におよぶ時期幅の広い層であり点数も少ないため信頼性に乏しい数値ではあるが、総数67点のうち姫島産黒耀石が37点で55%を占める。豊前地域の前期以降の縄文遺跡では一般的に姫島産黒耀石が石材の主体を占める傾向にあり、Ⅱ区第Ⅱ文化層の数値もこれに矛盾しない。Ⅰ区第Ⅳ文化層やⅢ区第Ⅳ文化層と比較した場合、使用石材に明確な差が数値となって表れており、同じ遺跡でも時期によって使用する石材に差があり、上伊良原榎遺跡では刺突文土器の時期には珪質岩、押型文土器の時期には黒耀石を多く使用する傾向にあり、対照的に姫島産黒耀石の使用は少ないという結果になった。

出土した石器のうち、旧石器については単独で包含層を形成せず縄文時代の包含層中に混入した状況だが、個々の出土状況を注意深く見てみると第Ⅳ文化層でも下位のレベルから出土しており比較的原位置に近い状況を留めているものが多いことが窺われる。出土地点はⅢ区に多く活動圏をここに想定することができる。出土した石器は大きくナイフ形石器文化の時期と細石刃文化の時期に区分される。ナイフ形石器は３点出土したが３点とも同じ時期で、ナイフ形石器文化後半期の所産として良いものと思われる。旧石器の可能性があるとした剥片類もほぼ同時期のものと考えている。細石刃文化期では２点の細石刃核が出土しているが、どちらも野岳・休場型の範疇にある。従来この野岳・休場型細石刃核は豊前方面ではほとんど確認されていなかっただけに確実な資料として貴重である。供伴する細石刃も同時期の所産であり旧石器時代の調査事例が少ない当地域では価値のある資料を提示できる成果となった。

縄文時代の石器のうち最も多いのは石鏃で160点出土した。これは図化した石器の57%におよぶ。石材別に見ると、黒耀石製は46点、姫島産黒耀石製が48点、安山岩製が57点で安山岩製が最も多いとはいえ三者とも同程度の比率で作られていることが判る。他に数は少ないが珪質岩やチャート、石英製の石鏃もあることに注意を払いたい。時期毎の特徴が顕著にある訳ではないが、後期の石鏃には姫島産黒耀石製が多く作りの粗雑なものが目につくこと、早期の包含層から出土した石鏃は丁寧な作りで整った形状のものが多く珪質岩やチャート製の石鏃は刺突文土器の包含層に伴う例が多いこと、全体の２割が未製品であること、局部磨製石鏃は見られないこと、等を整理中に気づいた点として付記したい。

石匙・スクレイパーは黒耀石製が３点、姫島産黒耀石製が10点、安山岩製が10点、珪質岩製が10点で、黒耀石製が圧倒的に少なく小型品に限定される傾向にある。姫島産黒曜石や珪質岩は在地的な石材であり数量が多いのは当然の結果と言える。大型品にこれらの石材が多く使われるのは入手し易さもあったのだろう。石核については珪質岩が多い点が特徴的であり、剥離を見てみると定型的な剥片を意図して採取した様子ではなく、いわば偶然の所産から加工に適した目的の剥片を採取したような意向が図られる。

中・近世期の遺構について

上伊良原榎遺跡が所在する地区には小字に「マドコロ」「寺ノ下」「寺田」などの名称があり、中世期に遡る居館もしくは山林寺院などが所在する可能性を推定させ、それらに関連する建物等の検出が期待された。

今回の調査では、中世期に属する遺構は掘立柱建物跡６棟、土壙墓７基、土坑48基、溝６条、集石１基、石列１条を確認した。

掘立柱建物はⅠ区で５棟、Ⅲ区で１棟を確認したが、これ以外にも柱穴とみられるピットが多数確認できるため、本来はさらに棟数は増えるものと予想される。建物は概ね傾斜面に対して直交ないし平行するように建ち、とくにⅠ区では一定の計画的配置が行われたことが判明した。残念ながら明確な時期を示す遺物が乏しいが、４号掘立柱建物の柱穴内より出土した土師器皿・坏が概ね13世紀ごろの時期に位置付けられる。その他の建物もこれと同時か前後する時期と考えられ、空間的な区画の確認はできないが中世前期の屋敷地が幾つかまとまって形成されていたものと考えられる。なお、今回確認した建物等が冒頭で述べた寺院と関わるものとするには根拠が不十分で、現時点では屋敷地とするにとどめたい。

溝は出土遺物が限られるが、５号溝では瓦器椀・土師器皿・土師質鍋・足鍋などが出土し、概ね13世紀中ごろの時期に位置付けられる。６号溝も土師器坏の小片のみであるが、概ね同じ時期であろう。掘立柱建物と同様に等高線に平行するように掘削されたものもあり、時期的にもあまり大差ないので、区画溝などの区画であった可能性が考えられる。

土壙墓については別に述べるが、概ね建物や溝と同じ13世紀代に収まり、集落域に営まれていることから先に述べた屋敷地に付随する屋敷墓であった可能性もある。

土坑については、不整形な形態を呈するものが多く性格は不分明であるが、出土する陶磁器では龍泉窯系青磁碗で鎬蓮弁を有するもの（Ⅰ５ｂ類）が圧倒的に多く、この他瓦器椀の出土が目立ち、それらは概ね13世紀代の範疇に収まる。また、一部で白磁Ⅴ４類の破片や同安窯系青磁碗・

皿（Ⅰ１ｂ類）の破片や、青白磁合子・皿などが出土するなど、12世紀後半ごろまで遡る資料も僅かであるが認められる。また、少量ながら備前焼の甕、東播系の鉢なども出土しているが、全体量に占める割合は極めて小さい。

なお、19・40号土坑については近世期に位置付けられる。

３号集石については、五輪塔や宝篋印塔などの部材のほか茶臼や粉挽臼などが多数集積されており、その多くは五輪塔の形態等から15・16世紀ごろの所産と考えられる。しかし、ともに出土した土器類をみると、大半が近世後期ごろの製品とみられ、石製品とは齟齬がある。

石列については、３号集石の西側に接するように平行に並ぶことから、両者はほぼ同時か、石列が後から築かれたものであろう。出土遺物はないが、３号集石に近い時期を考えたい。

この他、注意されるのは鍛冶関連遺構とその遺物である。今回の調査ではⅠ区の南側で多数のピット群から少し離れて２基の鍛冶炉（P361・362）が営まれており、炉床土が付着した椀形鍛冶滓が数点出土している。調査では、遺物の観察も含めて既述のように①浅い窪みを掘り、②粘土で炉床を整え、③比較的細かい木炭を敷きつめる、という３段階の構築工程が復元でき、羽口の出土はなかったもののガラス質滓が少なからず存在している。遺跡全体でみれば確認された掘立柱建物群に隣接した場所に設けられており、屋敷に伴う鍛冶場と考えられる。

最後に、多数のピットや包含層等から出土した遺物についてみてみると、やはり年代的な中心は龍泉窯系青磁碗や瓦器椀、土師器皿・坏、石鍋などから13世紀代が中心とみてよいようであるが、一部は中世後期まで下るものも含まれるが、さほど顕著ではない。

以上のように、調査で確認した遺構の多くは概ね13世紀を中心とし、一部12世紀代まで遡るもの、あるいは14世紀以降に下るものも存在する。したがって、当遺跡では古代末ごろから一部居住がはじまり、中世前半期に屋敷地と墓が形成され、中世後期にはほとんど姿を消していくという流れが復元できる。近世についても遺物は極めて少なく、段造成や開墾時に岩や礫などを土坑に埋積したものが幾つか確認できることから、近世以降は畑地等の耕作地としてのみ利用があったのではないかと推測される。

中世墓について

今回の調査では、発掘時の状況や出土遺物等から墓の可能性がある遺構を７基確認した。これまで伊良原地域ではほとんど中世墓の確認はなされていないので、当時の墓制を考える上で重要な資料になると思われるので、紙幅を割いて若干のまとめを行いたい。

これまで伊良原地域で確認された中世墓の詳細は第１表のとおりである。

15・26・62・64・65・66号土坑は、覆土等に木棺などの存在を示す痕跡は確認できなかったことから、いずれも単純な土壙墓であったと考えられる。一方、31号土坑では出土した和鏡が立てかけられたような状態で斜めに傾いて出土し。外側から木片が出土したことから木棺墓であった可能性が考えられる。ちなみに、31号土坑の平面形は略長方形で、長軸125cm、短軸90cmを測り、成人であれば伸展葬での埋葬は不可能であることから屈肢葬と考えられる。同様に26・65号土坑なども長軸が123cmや125cmであることから、成人の伸展葬はやや困難である。

次に、副葬形態について概観してみたい。第１表に示したように７基の中世墓では様々な副葬品が出土しているが、幾つかの組合せに分類することができ、その相違には被葬者の階層性が反映

第１表　上伊良原榎遺跡　中世墓一覧表

No.	遺構名	種　別	時　期	規　模	副葬遺物						被葬者(佐藤分類)	備　考
				(縦×横)	和鏡	鉄小刀	弓削刀子	青磁碗	瓦器椀	土師器		
1	62号土坑	土壙墓	13C前～中	230×110		1	1	1	1		名主層	
2	64号土坑	土壙墓	13C前～中	180×115		1		1	1			
3	65号土坑	土壙墓	13C前～中	125×95		1		1		1		
4	31号土坑	木棺墓？	13C	125×90	1					小片	有力百姓（名主層か）	木片出土
5	15号土坑	土壙墓	13C前	158×93		1			2	4	有力百姓	
6	26号土坑	土壙墓	？	123×67		1					中層及び上層の一部の百姓	
7	66号土坑	土壙墓	13C後～14C前？	145×80					1			

されているものと考えられる。以下少しみてみよう。

７基の墓を副葬品別に分けると、次の５種になる。

A類　鉄小刀（＋刀子）＋青磁碗＋瓦器椀＋土師器皿〔62・64・65号土坑〕

B類　鉄小刀＋瓦器椀＋土師器皿〔15号土坑〕

C類　鉄小刀〔26号土坑〕

D類　和鏡＋土師器片（皿？）〔31号土坑〕

E類　瓦器椀〔66号土坑〕

これらの組合せから、土器類では「青磁碗＞瓦器椀＞土師器皿」という優劣があり、その他では鉄小刀が基本的な構成品で、和鏡及び弓削刀子は特殊な副葬品といえる。

ところで、豊前地域の中世墓については佐藤浩司氏が副葬品から検討を行い、その類別ごとに被葬者像を推定している（佐藤2001）。その当否は別として、試みに上伊良原榎遺跡の中世墓を佐藤氏分類に当てはめると、A類は名主層、B類とD類は有力百姓層、C類とE類は百姓のなかでも中層から上層の一部に相当する（第１表）。佐藤氏分類では、これよりも上位の階層に郡レベルの在地領主層、郷クラスの在地領主層などが存在し、それらに共通する副葬品としては銅鏡・陶磁器・鉄器の組合せである。とくに副葬品中に占める銅鏡の優位性は陶磁器などよりも上位とされ、今回D類とした31号土坑については有力百姓層とはいえ、一段階上位の名主層に近い存在として位置づけられている。

実際の遺構でみれば、62・64号土坑など２m近い長軸を有する墓が上位に位置する点ではこうした階層順序に合致するといえるが、全てが副葬品の組合せの順になるわけではなく、１つの傾向である。遺構の配置でみると、15・26号土坑はⅠ区、62・64・65・66号土坑はⅡ区、31号土坑はⅢ区に営まれ、Ⅰ区は上・中層の百姓層、Ⅱ区は名主層の一群と中～上層の百姓、Ⅲ区は名主層に近い上層百姓というように、大きくは地区ごとに被葬者階層に差があるようである。

時期的には、Ⅰ区は15号土坑が13世紀前半ごろ、Ⅱ区は62・64・65号土坑が13世紀前半～中頃で、66号土坑が13世紀後半～14世紀初頭ごろ、Ⅲ区は31号土坑が13世紀代に位置付けられ、概ね鎌倉期に限定された墓域としての利用が確認できる。

これに続く時期の埋葬遺構は確認できないが、15・16世紀ごろに位置付けられる３号集石の石塔類が墓塔として認めて良いのであれば、中世後期には石塔の樹立へと埋葬形態が変化していくことになる。狭川真一氏は13世紀中ごろ以降葬送の中心は土葬墓から火葬墓へと移行していくと

指摘しており（狭川1993）、３号集石の五輪塔部材のうち水輪に舎利孔と考えられる窪みがあることからも、やはり火葬墓としての石塔造立へと墓制が転換した可能性は捨てきれない。ただし、土壙墓等と石塔との間にある空白期には注意が必要で、この間に墓地を営む集団の異同が生じている可能性も考慮しなければならないだろう。

和鏡について

31号土坑出土の和鏡について若干触れておきたい。報文中でも述べたので繰り返しになるが、背面に流水文を基調として梅花を散らし二羽の雀が旋回するという構図から「梅花流水双雀文鏡」とした。鈕座は花蕊座で比較的本来の花蕊を再現しており、13世紀代ごろの類品に多い。界圏は断面三角形の中線単圏で、13～14世紀ごろの鏡にみられる特徴である。鏡胎は厚さ２ｍｍで、比較的古相を呈する。外縁は直角式の中縁で、やや中膨らみを呈する。

以上のような諸特徴を考え合わせると、概ね13世紀代の所産と推定される。31号土坑が営まれているⅡ区では13世紀前後の時期の遺構は見られない。既述のように３号集石の石塔類もいずれも15・16世紀ごろに位置付けられることから、年代的には乖離している。そうすると、単独で営まれた墓であったといえるが、仮に鏡が伝世していた場合には石塔類と共伴していた可能性も出てくる。ただ仮定に仮定を重ねるだけなので、ここでは13世紀ごろの墓とし、木質の遺存から棺内の副葬品と考えたい。

なお、京築地域でこれまでに中世の墓地から出土した和鏡は、上毛町内の上唐原了清遺跡３号木棺墓と南田遺跡20号土坑（土壙墓）をはじめわずかに７例が知られるに過ぎない。前者は12世紀後半、後者は12世紀後半～13世紀初頭に位置付けられ、31号土坑より半世紀程度遡る事例である。また、豊前地域として大分県側の地域まで含めても墓地出土の和鏡は５例が追加されるのみである。時期的には11世紀ごろから16世紀ごろまでと幅がある。埋葬形態も土壙墓、木棺墓、甕棺墓、古墳石室再利用など多様で、方形周溝をもつ事例もあり、一定の階層に受容されていたとは言い難い。豊前地域では南部に資料が多い。

ちなみに、みやこ町内では31号土坑出土鏡のほかに、末江A遺跡群や上屋敷遺跡、蔵持山修験遺跡（未報告資料）でそれぞれ１面ずつの出土が確認され、町内では４例目となる。前二者は中世墓地、後者は修験道に関わる坊跡付近の墓地からの出土品である。時期的には後者が古く、町立資料館の展示で実見した様子では、薄手で外縁は細縁、界圏は細線、鈕は素鈕で、平安時代後期ごろの所産とみられる。一方末江例は外縁が外傾式の厚縁で、界圏は中線単圏、鈕は低い花形

第２表　京築地域における中世墓出土和鏡一覧表

No.	遺跡名	所在地	種　別	時　期	共　伴　遺　物	備　考
1	上伊良原榎遺跡31号土坑	みやこ町（旧犀川町）	土壙墓？	13C	土師器小片	梅花流水双鳥鏡
2	末江A遺跡88号土坑	みやこ町（旧犀川町）	土壙墓？	12C末～13C前	土師器皿	草花蝶鳥鏡
3	上屋敷遺跡1号墓	みやこ町（旧犀川町）	木棺墓	13C	青磁碗1、土師器皿7、鉄釘、鋲	山吹双鳥鏡
4	蔵持山修験道遺跡	みやこ町（旧犀川町）	集石遺構	11C～12C？	？	未報告
5	小石原泉遺跡	豊前市	土壙墓	？	？	未報告
6	上唐原了清遺跡3号木棺墓	上毛町（旧大平村）	木棺墓	12C後	青白磁合子、瓦器、歯	方形、屈肢葬
7	南田遺跡20号土坑	上毛町（旧新吉富村）	土壙墓	12C後～13C初	青磁碗1･皿1、青白磁合子1、土師皿4、瓦器1	長方形
参考						
8	定留遺跡赤松地区	中津市	土壙墓	13C後	土師器皿４、瓦器１	山吹飛雀鏡
9	外園遺跡甕棺	中津市（旧三光村）	甕棺墓	15C～16C	銅製品、水晶切子玉、ガラス玉、人骨	瓦質甕
10	城遺跡16号土坑	宇佐市	土壙墓	13C	土師器皿３、瓦器１	
11	吉久遺跡4号墓	宇佐市	土壙墓	12C後～13C前	青磁碗1、青白磁合子1、白磁四耳壺1、土師器皿5、和鋏1	方形区画
12	池の端古墳	宇佐市	石室再利用	11C～13C	青磁碗･皿、白磁碗、土師器椀･皿･鍋、黒色土器椀、瓦器椀･片口鉢、小刀	

座で、鏡胎も1.5mm程度と薄く、やはり31号土坑例よりも古相を呈する。遺物等からも12世紀末～13世紀前半ごろに位置付けられている。上屋敷例もこれと類似する。３例とも31号土坑例よりも古い資料であるが、ともに墓地と関わる遺物でやはり副葬品としての扱いが行われたと考えられる。多様な階層・職種の人々の間で、鏡の副葬ということが共通した副葬形態として存在していたことがわかる。その背景には鏡そのものが持つ呪的性格が起因するものと推測される。

ところで、被葬者と関連して注目されるのは大分県中津市（旧下毛郡三光村）の外園遺跡の甕棺墓で、ガラス製や水晶製の玉とともに和鏡が副葬されており、僧侶の墓と推定されていることである。再びみやこ町内の例をみると、須恵A遺跡の例に関しては被葬者像は掴めないが、蔵持山修験遺跡は修験道と深く関わり、上伊良原榎遺跡も31号土坑よりも時期は下るが五輪塔や宝篋印塔が存在し、遺跡内に「寺田」や「寺ノ下」などの小字がみられる。そうした諸要素を考えると、被葬者の中には宗教的な色彩が強い人物が一定程度含まれていたと考えることもできる。とはいえ、上伊良原榎遺跡では遺構の内外を問わず、仏教・修験道を含め宗教的性格を示す遺物がほとんど皆無であり、あくまで１つの可能性にとどめたい。

いわゆる「弓削刀子」について

Ⅱ区62号土坑からは刃部が屈曲し、屈曲した外側に刃が付く特殊な刀子が出土した。外側に刃が付くため、手前から奥に削る工具とみられる。この種の類品は、長野県教育委員会の小山第Ⅱ遺跡の調査報告書において「弓削刀子」の名称で報告されたが、その根拠は室町時代末の「弓作」の絵図（高取・小沢編1982）に形態の似た工具が描かれていることによる（長野県教育委員会1985）。その後柳田康雄氏が集成と検討を行い、現代の類似する工具との比較検討も行っている（柳田1997）。また、宮宏明氏も竹を削る道具、弓を削る道具など多様な用途について検討を行っているが（宮1998）、類例が乏しいためにその用途についてはまだ決定的な根拠は得られていないのが現状である。ちなみに、絵図の工具に関しては、細部の表現がないため刃部の内側と外側とどちらに刃が付くのか確認できない。絵図の工具が内湾する側に刃があれば「弓削刀子」と同形であるが、外側に付くのであれば近年「へ」の字形鉄製品などと称される古墳時代の鉄器との関連も注意する必要がある。

さて、今回62号土坑から新例が出土したが、柳田氏が全国的に集成した６例に続いて、ようやく７例目となる。出土地は北海道（３例）と福岡県（３例）にまとまるようであるが、やはり類例が少なく分布の意味するところまでは不明である。しかし、福岡県の中でも豊前北部にのみ事例が存在し、いずれも土壙墓からの出土であることは注意される。一般的に流通していない特殊な工具が副葬されている事実は、その被葬者の生前の職種・職掌と直接関わる可能性も考えられる。

第３表　「弓削刀子」出土遺跡一覧表

№.	遺跡名	所在地	時　期	法量(cm) (刃+茎)	刃 部	角 度	備　考
1	大川遺跡F29区Ⅰ層	北海道余市町	15C前	10+6.7	直	132°	
2	勝山館遺跡	北海道余市町	中世				
3	カリンバ２遺跡AP-1土壙墓	北海道恵庭町	中世	8.7+7.1	外湾	142°	大刀･刀子･銅銭･釘状鉄器･環状鉄器
4	小山第Ⅱ遺跡1号掘立柱建物	長野県駒ケ根市	13C末～14C前	8.5+13	直	152°	
5	長野A遺跡1号土壙墓	北九州市小倉南区	12C	7.6+13.2	外湾	123°	白磁・鏃・刀子
6	徳永川ノ上遺跡E区4号土壙墓	京都郡みやこ町	13C	6.8+12.6	内湾	146°	青磁・小皿
7	上伊良原榎遺跡62号土坑	京都郡みやこ町	13C前～中	4.0+9.6	内湾		青磁・瓦器・小刀
参考	長谷川康則氏所有	東京都港区	現代	6.2+8.3	直	157°	

（柳田1997に追補、各遺跡の出典については柳田1997を参照していただきたい）

現時点では「弓を削る」刀子であるかは断定できないが、将来事例が蓄積されれば被葬者像に迫ることができる資料になるかもしれない。ちなみに、県下３例について共伴する副葬品の組合せから佐藤氏の被葬者分類に当てはめれば、いずれも名主層ということになる。

参考・引用文献

（財）北九州市教育文化事業団　埋蔵文化財調査室　2000『貫・丸尾遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第239集

犀川町教育委員会　1994　『城井遺跡群Ⅱ』犀川町文化財調査報告書第４集

三光村教育委員会　1992　『三光地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』

福岡県教育委員会　1994　『原遺跡』福岡県文化財調査報告書第119集

福岡県教育委員会　1997　『徳永川ノ上遺跡Ⅲ』椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第９集

福岡市教育委員会　1983　『柏原遺跡群Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第90集

福岡市教育委員会　1987　『柏原遺跡群Ⅳ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第158集

福岡市教育委員会　1988　『柏原遺跡群Ⅴ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第190集

福岡市教育委員会　2003　『大原Ｄ遺跡群4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第741集

みやこ町教育委員会　2009　『みやこ町内遺跡Ⅱ』みやこ町文化財調査報告書第２集

長野県教育委員会　1985　『小山第Ⅱ遺跡』

久保智康　1999　『日本の美術394　中世・近世の鏡』至文堂

狭川真一　1993　「墳墓にみる供献形態の変遷とその背景―北部九州を中心として―」『貿易陶磁研究』№13

佐藤浩司　2001　「豊前地域における中世墳墓の副葬品」『中世土器研究論集－中世土器研究会20周年記念論集－』　中世土器研究会

高取正男・小沢弘編　1982　『日本庶民生活史料集成』第30巻（諸職風俗図絵）　三一書房

中野政樹編　1969　『日本の美術42　和鏡』至文堂

宮　宏明　1998　「中・近世と古墳時代の特殊な刀子」『人類史研究』10

第４表　上伊良原榎遺跡　グリッド別出土遺物点数一覧表

Ⅰ区第Ⅱ文化層

Gr名	土器		黒曜石		姫島産黒曜石		安山岩		珪質岩等		凝灰岩等		石器類合計	合計
	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数		
L−9					4	1	3						7	7
L−10	6	1	1		3	1	1				1	1	6	12
L−11	4				1				1				2	6
L−12	1		1		5								6	7
M−9	1		1		3		5	2					9	10
M−10	10		2	1	8	1	8	1	2				20	30
M−11	16	1	3		6	1	3	1	1				13	29
M−12	3		4		10		4	1					18	21
M−13			2	1									2	2
N−9	2										1	1	1	3
N−10			3	1	1		3	1	1				8	8
N−11	2		1		5		2		2				10	12
N−12	5		2		8	1	4	1	3				17	22
N−13	2		4		3		1		1				9	11
O−4											1	1	1	1
O−8	4								1				1	5
O−10	3				2		4						6	9
O−11			1		1		1						3	3
O−12	4	2			3	1	4	1	4	2			11	15
O−13	3		2		4				2				8	11
P−7			1										1	1
P−10									1				1	1
P−11	2				1								1	3
P−12	5		7		18		1		1				27	32
P−13	11	1	3	1	13		5		4				25	36
Q−5			1										1	1
Q−9			1	1									1	1
Q−12	3		5	1	3		8	1	3				19	22
Q−13	2				3				1	1			4	6
R−2	1		1										1	2
R−5			2	1									2	2
R−7			1	1			1	1					2	2
R−8	2		1										1	3
R−12	1												0	1
S−3					1	1	1		1				3	3
S−5			1		1				1				3	3
S−8									1				1	1
S−11	3				1		1						2	5
T−5			1										1	1
T−6	1												0	1
T−15									1				1	1
T−15下	3												0	3
T−16			1										1	1
U−6					1								1	1
U−15							2	1					2	2
U−15下	1				1		2						3	4
U−16									1		2	2	3	3
V−4	2		12				3	2					15	17
V−5	2		6						1	1			7	9
V−15	2	2	1	1					3				4	6
V−16							1						1	1
W−3	1												0	1
W−4	4		10	1			1	1	2	1			13	17
W−5	14	2	81	4	6		7	1	7	1	3		104	118
W−6	2		9	2	3		2		1				15	17
W−10									1	1			1	1
W−15	2												0	2
W−16							1						1	1
X−4	14	4	9		2		2	1					13	27
X−5	5		9	1	7	1	1	1	5				22	27
X−6	1		6	1	1		1						8	9
X−7			1				1				1		3	3
X−15	1				1								1	2
X−16	13				7	1	1						8	21
Y−4	3												0	3
Y−5	1		2		3				1				6	7
Y−6	2		4				1						5	7
Y−7			3		1								4	4
Y−16	19		2		3	2	1						6	25
Z−4	17	2	5	1	2	1	3		1		1	1	12	29
Z−5	1		3	1	2								5	6
Z−7	2		1										1	3
Z−8			2										2	2
AA−4	7		3		2		2						7	14
AA−5	6	2											0	6
AA−7	5		9		1	1	2		2				14	19
AA−8			1		1		1		1	1			4	4
AA−9	1												0	1
AA−11	1												0	1
AA−16	2												0	2
AB−5	3		1								1		2	5
AB−6									1				1	1
AB−8					1								1	1
AB−9			1										1	1
AB−10			1	1									1	1
AC−7	1				1								1	2
AD−8	4		1		2	1							3	7
AE−5	1												0	1
AF−9					1	1							1	1
合計	240	17	236	21	157	15	95	17	59	8	11	6	558	798

第４表　上伊良原榎遺跡　グリッド別出土遺物点数一覧表

Ⅰ区第Ⅳ文化層

Gr名	土器		黒曜石		姫島産黒曜石		安山岩		珪質岩等		凝灰岩等		石器類合計	合計
	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数		
Q−13	3		1		7	1	4	2	1	1			13	16
Q−14	1		4	3					6				10	11
W−4	9	1	29	1	1				5				35	44
W−5	4		28	2			6	2	2				36	40
W−6	3		11	1			5	1	3	1	1		20	23
W−7	3		5				3						8	11
X−4	4	1	8		2	1	4	1	4	2			18	22
X−5	18	2	22	5	3		11	2	3				39	57
X−6	3		10	1	1		4						15	18
X−7	4		8		1		7		2	1			18	22
Y−4	7		7				4		1				12	19
Y−5	5	1	11	1	2		1						14	19
Y−6	5		12	3	2		5		1				20	25
Y−7	9	1	4	1	4		2		6				16	25
Z−4	2		1				1						2	4
Z−5	4		8	1			3		1				12	16
Z−6	22	5	9	1	3		7				2	2	21	43
Z−7	10		10		1		4						15	25
Z−8	12		6	1					1				7	19
Z−9			1										1	1
AA−4			1										1	1
AA−5	1		2	1									2	3
AA−6	9	1	5		1		2		2	1			10	19
AA−7	20	1	9		2		1		8				20	40
AA−8	7		3		4	1	1		3				11	18
AA−9	1		1				1						2	3
AA−10	8		2	1	2		1						5	13
AA−11			1										1	1
AA−15					3								3	3
AB−6	5		4		1		1						6	11
AB−7	1		1						1				2	3
AB−8	1		4				1						5	6
AB−9	2		1		1		2						4	6
AB−10	2		6		1	1	3	1	4		1		15	17
AB−11	3		2				1		1		1	1	5	8
AB−12	4		4		3		2		2				11	15
AB−13	3		1		2		1						4	7
AB−15					5		2						7	7
AB−16	2		1										1	3
AC−5	6								1				1	7
AC−8			1										1	1
AC−9	3		2		2								4	7
AC−10							1	1	2				3	3
AC−11	6		1		3		1		6	2			11	17
AC−12	3		4	1	3	1	4	1	3	1			14	17
AC−13			1		2	1			1				4	4
合計	215	13	252	24	62	6	96	11	70	9	5	3	485	700
I区合計	455	30	488	45	219	21	191	28	129	17	16	9	1043	1498

Ⅱ区第Ⅱ文化層

Gr名	土器		黒曜石		姫島産黒曜石		安山岩		珪質岩等		凝灰岩等		石器類合計	合計
	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数		
AR−15	7												0	7
AS−15	5	1			1				2				3	8
AS−16	9		1	1	1	1	1	1					3	12
AT−15	2												0	2
AT−16	11	1									1		1	12
AT−17	4												0	4
AU−14	6	1			5	1							5	11
AU−15					1	1							1	1
AU−16	13		1				1						2	15
AU−17	11												0	11
AV−14	4				3				1		1		5	9
AV−15	1								1				1	2
AV−16	8												0	8
AV−17	18		1										1	19
AV−18	6												0	6
AW−14	13	1			1								1	14
AW−15	14		1		2		1						4	18
AW−16	2	1											0	2
AW−17	3				3				1				4	7
AW−18	2												0	2
AX−14	26				4	1							4	30
AX−15	38	6	1		5	1	3				1	1	10	48
AX−16	3										1		1	4
AX−17			1										1	1
AX−18	3												0	3
AY−14	2												0	2
AY−15	5		2						1				3	8
AY−16	4												0	4
AY−18	2				1				1				2	4
AZ−14	15	2											0	15
AZ−15	1				1	1							1	2

第 4 表　上伊良原榎遺跡　グリッド別出土遺物点数一覧表

AZ−16	2				2								2	4
AZ−18							1						1	1
BA−14	3						1	1					1	4
BA−15	11								1				1	12
BA−16	19				5	2	1						6	25
BA−17	3												0	3
BA−18					1								1	1
BB−14	3				1								1	4
BB−15	13		1										1	14
BB−16	2												0	2
合計	294	13	9	1	37	8	9	2	8	0	4	1	67	361

II区第III文化層

Gr名	土器		黒耀石		姫島産黒耀石		安山岩		珪質岩等		凝灰岩等		石器類合計	合計
	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数		
AR−15	1								2				2	3
AR−16	1												0	1
AS−15	1				1	1			1				2	3
AS−16	2	1			1								1	3
AT−15	13	3			1	1			1				2	15
AT−16	22	3			2				1		3		6	28
AU−13	3								1				1	4
AU−14	10	1			3		1						4	14
AU−15	3												0	3
AU−16	18				3		1						4	22
AU−17	8								1				1	9
AV−13	6												0	6
AV−14	20	1	2				1						3	23
AV−15	11		1						1				2	13
AV−16	16				2				1				3	19
AV−17	14												0	14
AV−18	1						1	1					1	2
AW−13	4												0	4
AW−14	35	4											0	35
AW−15	36	2			4	1			1				5	41
AW−16	9								1				1	10
AW−17	10	1			3		3	1					6	16
AW−18	2				1	1							1	3
AX−13	4				2	1			1				3	7
AX−14	20	2			2								2	22
AX−15	11												0	11
AX−16	4				1								1	5
AX−17	3												0	3
AX−18	4												0	4
AY−14	6						1						1	7
AY−15	12				1		1						2	14
AY−16	10												0	10
AY−17	1				1								1	2
AY−18	5				1	1					1		2	7
AZ−14	6	1											0	6
AZ−15	5		1				1		1				3	8
AZ−16	5												0	5
BA−14	3				1		1						2	5
BA−15	18								3				3	21
BA−16	7	1											0	7
合計	370	20	4	0	30	6	11	2	16	0	4	0	65	435

II区第IV文化層

Gr名	土器		黒耀石		姫島産黒耀石		安山岩		珪質岩等		凝灰岩等		石器類合計	合計
	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数		
AR−14	1												0	1
AR−15									1				1	1
AS−14									1		1		2	2
AS−15	1												0	1
AT−13	1												0	1
AT−14	4	1											0	4
AT−15	8												0	8
AT−16	3										1		1	4
AU−13	7	1							1				1	8
AU−14	5				2				2		1	1	5	10
AU−15	6	2									1		1	7
AU−16	2												0	2
AV−13	6				1				2				3	9
AV−14	9	1					1		1				2	11
AV−15	4								3				3	7
AW−13	15	2			1								1	16
AW−14	13	1			2				5				7	20
AW−15	4								3				3	7
AW−17	3						1						1	4
AX−13	4	1									1		1	5

第 4 表　上伊良原榎遺跡　グリッド別出土遺物点数一覧表

AX−14	5	1			1				5	1			6	11
AX−15	8	1					1	1	1				2	10
AX−16	5		1	1	1		1						3	8
AY−13	3								1				1	4
AY−14	8								2	1			2	10
AY−15	22	2			1				1				2	24
AY−16	12	1							1				1	13
AZ−14	3		1										1	4
AZ−15	5												0	5
AZ−16	5												0	5
BA−13	2												0	2
BA−14	4												0	4
合計	178	14	2	1	9	0	4	1	30	2	5	1	50	228
Ⅱ区合計	842	47	15	2	76	14	24	5	54	2	13	2	182	1024

Ⅲ区第Ⅱ文化層

Gr名	土器		黒曜石		姫島産黒曜石		安山岩		珪質岩等		凝灰岩等		石器類合計	合計
	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数		
F−18					1		3		2				6	6
F−19	4						6		27	1	1		34	38
F−20	19		4	1	4		5		23		1		37	56
F−21	7	1	1				1				2	1	4	11
G−16			1	1					2				3	3
G−17	1						1		3				4	5
G−18			2		3		3		1		1		10	10
G−19	8	1	9	2	4		15	1	7		1		36	44
G−20			1		2				2				5	5
G−21	21	1	4				8		5		1	1	18	39
G−22	11	1	3		2		5	1	5				15	26
H−17					1								1	1
H−18	18		1				4		1	1			6	24
H−19	8		1		1		11	2	8	1			21	29
H−20	49		3	1	3	1	34	5	23	1			63	112
H−21	39	2	3		3		18	1	16	1			40	79
H−22			1						2	1			3	3
I−17					1				1				2	2
I−18	8	1	2		3		4		6				15	23
I−19	2		2		3		6		2	1	3		16	18
I−20	6		2		1		7	2	3				13	19
I−21	11	1	4		1	1	5		5	1			15	26
I−22			1										1	1
J−18							1						1	1
J−19	2		2				6	1	2	1			10	12
J−20	5		1		2		5		6		1		15	20
J−21	9	1					6	2	7	1			13	22
K−18									1				1	1
K−19	5				1		2						3	8
K−20	6		2				3						5	11
K−21	1								1				1	2
K−24	3								2				2	5
L−23	11	1	2	1					8		2		12	23
L−24	19		3		2				14	1	4	2	23	42
M−23	37	2	2				9	1	15		1		27	64
M−24	36	5	1		12	1	1		10		1	1	25	61
M−25	2						1		2				3	5
M−26	2	1											0	2
N−23	4								2				2	6
N−24	9						1		10				11	20
O−18	3	1											0	3
O−23	3										1		1	4
O−24											1		1	1
P−17	4		1	1					2				3	7
P−18	2				2		1		7				10	12
P−23							1	1					1	1
Q−17	5						1		1				2	7
Q−18	1												0	1
合計	381	19	59	7	52	3	174	17	234	11	21	5	540	921

Ⅲ区第Ⅳ文化層

Gr名	土器		黒曜石		姫島産黒曜石		安山岩		珪質岩等		凝灰岩等		石器類合計	合計
	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数		
K−24	2		1				1						2	4
L−20	1		2				1		2	1			5	6
L−23	15	3	2	1					7		2		11	26
L−24	9	1					1		6	1			7	16
L−25	3		1						1				2	5
L−26	3		1		1		1						3	6
M−18	2	1	3		1		1						5	7
M−19					1				1				2	2

第4表　上伊良原榎遺跡　グリッド別出土遺物点数一覧表

M−22	5								3	1			3	8
M−23	32	4	3				2		7		3	1	15	47
M−24	7	1							1				1	8
M−26	2								1				1	3
M−27	4				1								1	5
N−17							2		2				4	4
N−18	14	1	4				2		14				20	34
N−19	4	1	1						3				4	8
N−22	4						1	1	4				5	9
N−23	19	1											0	19
N−24	5	1							1				1	6
O−16							1		2				3	3
O−17	20	2					4	1	35	2	1		40	60
O−18	7		2		1		2		8				13	20
O−19	3				1				2				3	6
O−23	2						1		1				2	4
O−24	4	2											0	4
P−16			2						8	1			10	10
P−17	6		2		2				8				12	18
P−24	1												0	1
Q−16			1		1				2	1			4	4
Q−17			3										3	3
Q−18			1										1	1
Q−24									1				1	1
合計	174	18	29	1	9	0	20	2	120	7	6	1	184	358
Ⅲ区合計	555	37	88	8	61	3	194	19	354	18	27	6	724	1279

第Ⅱ文化層合計	915	49	304	29	246	26	278	36	301	19	36	12	1165	2080
第Ⅲ文化層合計	370	20	4	0	30	6	11	2	16	0	4	0	65	435
第Ⅳ文化層合計	567	45	283	26	80	6	120	14	220	18	16	5	719	1286
総計	1852	114	591	55	356	38	409	52	537	37	56	17	1949	3801

第５表　上伊良原榎遺跡出土縄文土器観察表

掲載図	掲載番号	出土場所	層位	整理番号	種類	調整		色調		胎土（砂粒）	備考
						外	内	外	内		
第83図	1	M−24Gr	第Ⅱ文化層	440	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・刺突文・瘤文	二枚貝条痕	暗黄灰色	黒褐色	石英・長石	
	2	AV−14Gr	第Ⅳ文化層	443	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・刺突文・瘤文	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石（多い）	
	3	G−22Gr	第Ⅳ文化層	437	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・刺突文・瘤文	二枚貝条痕	茶褐色	茶褐色	石英・長石・角閃石　粗砂若干	
	4	M−23Gr	第Ⅱ文化層	449	柏原式（刺突文・瘤文）	器表剥離　刺突文	器表剥離	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	5	N−23Gr	第Ⅱ文化層	442	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・刺突文・瘤文	二枚貝条痕	黄灰色	黒色	石英・長石・角閃石	
	6	M−24Gr	第Ⅱ文化層	376	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・刺突文・瘤文	二枚貝条痕	茶褐色	茶褐色	石英・長石	
	7	AT−15Gr	第Ⅲ文化層	453	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・刺突文・瘤文	ナデ	黒褐色	黒褐色	石英・長石・角閃石	
	8	M−23Gr	第Ⅳ文化層	457	柏原式（刺突文・瘤文）	器表剥離　刺突文・瘤文	器表剥離	茶褐色	茶褐色	石英・長石・角閃石	
	9	M−23Gr	第Ⅳ文化層	438	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・刺突文・瘤文	二枚貝条痕	明黄茶色	明黄茶色	石英・長石・角閃石　胎土緻密	
第84図	10	L−23Gr	第Ⅳ文化層	365	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・刺突文・瘤文	二枚貝条痕	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石　粗砂若干	
	11	N−18Gr	第Ⅳ文化層	344	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・刺突文・瘤文	二枚貝条痕	褐色	褐色	石英・長石・角閃石	
	12	AT−15Gr	第Ⅱ文化層	347	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・刺突文	二枚貝条痕	黄褐色	黒色	石英・長石・角閃石	
	13	O−17Gr	第Ⅳ文化層	363	柏原式（刺突文・瘤文）	器表剥離　刺突文	器表剥離	黄茶色	黄灰色	石英・長石	
	14	V−15Gr	第Ⅱ文化層	361	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・刺突文	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	15	AU−15Gr	第Ⅱ文化層	352	柏原式（刺突文・瘤文）	ナデ・刺突文・瘤文	二枚貝条痕	暗黄褐色	暗黄褐色	石英・長石・角閃石	
	16	M−24Gr	第Ⅱ文化層	439	柏原式（刺突文・瘤文）	ナデ・刺突文	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	17	AZ−14Gr	第Ⅲ文化層	441	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・刺突文・瘤文	二枚貝条痕	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石・角閃石	
	18	AW−13Gr	第Ⅳ文化層	454	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・瘤文	二枚貝条痕	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石・角閃石	
	19	Z−4Gr	第Ⅱ文化層	452	柏原式（刺突文・瘤文）	ナデ・瘤文	二枚貝条痕	茶褐色	茶褐色	石英・長石・角閃石（多い）	
	20	L−24Gr	第Ⅳ文化層	303	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・瘤文	二枚貝条痕	茶褐色	茶褐色	石英・長石　粗砂多い	
	21	O−17Gr	第Ⅳ文化層	291	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・瘤文	二枚貝条痕	茶灰色	茶灰色	石英・長石・角閃石	
	22	58号土坑		367	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・刺突文・瘤文	二枚貝条痕	茶褐色	茶褐色	石英・長石	
	23	G−21Gr	第Ⅳ文化層	354	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・刺突文	二枚貝条痕	茶褐色	茶褐色	石英・長石・角閃石	
	24	J−21Gr	第Ⅳ文化層	351	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・刺突文	二枚貝条痕	黄茶色	黄茶色	石英・長石・角閃石	
	25	AX−14Gr	第Ⅳ文化層	444	柏原式（刺突文・瘤文）	二枚貝条痕・刺突文・瘤文	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
第85図	26	AY−15Gr	第Ⅳ文化層	349	条痕文	二枚貝条痕	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石（多い）	
	27	M−23Gr	第Ⅳ文化層	420	条痕文	二枚貝条痕	ナデ	暗褐色	暗褐色	石英・長石・角閃石	
	28	N−24Gr	第Ⅳ文化層	417	条痕文	二枚貝条痕	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石・角閃石	
	29	G−19Gr　1号竪穴住居跡	第Ⅳ文化層	355	条痕文	二枚貝条痕	器表剥離	茶褐色	茶褐色	石英・長石・雲母（多い）	
	30	L−23Gr	第Ⅱ文化層	418	条痕文	二枚貝条痕	ナデ	暗黄茶色	暗黄茶色	石英・長石・角閃石	
	31	AX−15Gr	第Ⅳ文化層	292	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	34と同一個体
	32	V−15Gr	第Ⅱ文化層	282	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	33	M−24Gr	第Ⅱ文化層	435	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	34	AS−16Gr	第Ⅲ文化層	290	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	31と同一個体
	35	AA−6Gr	第Ⅳ文化層	278	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黒灰色	石英・長石・角閃石	
	36	O−24Gr	第Ⅳ文化層	432	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	37	AU−15Gr	第Ⅳ文化層	294	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	38	AW−13Gr	第Ⅳ文化層	366	鰭状突起	ナデ・鰭状突起	二枚貝条痕	暗褐色	茶色	石英・長石・角閃石	
	39	AY−15Gr	第Ⅳ文化層	456	鰭状突起	条痕後ナデ・鰭状突起	ナデ	黄茶色	黄茶色	石英・長石・角閃石	
第86図	40	AA−5Gr	第Ⅱ文化層	273	押型文（山形）	押型文（山形）	押型文（山形）・ナデ	茶褐色	暗褐色	石英・長石	
	41	AA−4Gr	第Ⅱ文化層	283	押型文（山形）	押型文（山形）	ナデ	暗灰褐色	茶色	石英・長石	
	42	Z−6Gr　2号集石	第Ⅳ文化層	289	押型文（山形）	押型文（山形）	ナデ	茶色	黒褐色	石英・長石・角閃石	
	43	AA−5Gr	第Ⅱ文化層	272	押型文（山形）	押型文（山形）	ナデ	灰褐色	茶色	石英・長石	
	44	Y−4Gr	第Ⅱ文化層	306	押型文（山形）	押型文（山形）	ナデ	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石・角閃石	
	45	W−4Gr	第Ⅳ文化層	447	押型文（山形）	押型文（山形）	ナデ	黄茶色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	46	X−5Gr　1号集石	第Ⅳ文化層	460	押型文（楕円）	押型文（楕円）	押型文（楕円）・ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	47	Z−6Gr　2号集石	第Ⅳ文化層	327	押型文（楕円）	押型文（楕円）	押型文（楕円）	灰褐色	暗茶灰色	石英・長石・角閃石	外面炭化物付着
	48	Z−6Gr　2号集石	第Ⅳ文化層	460	押型文（楕円）	押型文（楕円）	押型文（楕円）・ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石・角閃石	外面炭化物付着
	49	Z−6Gr　2号集石	第Ⅳ文化層	462	押型文（楕円）	押型文（楕円）	押型文（楕円）・ナデ	褐色	褐色	石英・長石・角閃石	47〜50は同一個体
	50	Z−6Gr　2号集石	第Ⅳ文化層	446	押型文（楕円）	押型文（楕円）	押型文（楕円）・ナデ	褐色	褐色	石英・長石・角閃石	
第87図	51	Ⅱ区遺構面		409	押型文（楕円）	押型文（楕円）	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	52	Y−7Gr	第Ⅳ文化層	451	押型文（楕円）	押型文（楕円）	ナデ	茶色	黒褐色	石英・長石・角閃石	
	53	AA−7Gr	第Ⅳ文化層	277	押型文（楕円）	押型文（楕円）	ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・長石	
	54	W−5Gr	第Ⅱ文化層	455	押型文（楕円）	押型文（楕円）	押型文（楕円）・ナデ	黄茶色	黄茶色	石英・長石・角閃石	
	55	X−5Gr	第Ⅳ文化層	448	押型文（楕円）	押型文（楕円）	ナデ	茶灰色	茶灰色	石英・長石	
	56	Y−5Gr	第Ⅳ文化層	286	押型文（楕円）	押型文（楕円）	ナデ	黄茶色	黄茶色	石英・長石・角閃石	
	57	58号土坑		372	押型文（格子）	押型文（格子）	押型文（格子）・原体条痕	灰褐色	灰褐色	石英・長石・角閃石	
	58	58号土坑		371	押型文（格子）	押型文（格子）	条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	57と同一個体
	59	ピット（P774）		392	押型文（格子）	押型文（格子）	条痕	黄茶色	黄茶色	石英・長石・角閃石	
	60	X−4Gr	第Ⅱ文化層	281	押型文（不明）	器表剥離	原体条痕	黒褐色	黒褐色	石英・長石・角閃石	
	61	AW−17Gr	第Ⅱ文化層	368	撚糸文	撚糸文	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	62	Z−4Gr	第Ⅱ文化層	450	変形楕円文	変形楕円文	変形楕円文・ナデ	褐色	褐色	石英・長石・角閃石	
	63	O−13Gr	第Ⅱ文化層	274	底部（尖底）	ナデ	ナデ	黄灰色	暗灰色	石英・長石・角閃石	
	64	X−4Gr	第Ⅳ文化層	271	底部（広角尖底）	ナデ	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	65	I−21Gr	第Ⅳ文化層	445	底部（尖底）	ナデ	ナデ	黄茶色	黄茶色	石英・長石　砂粒少ない	
	66	X−4Gr	第Ⅱ文化層	458	底部（尖底）	ナデ	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	67	N−23Gr	第Ⅱ文化層	459	底部（尖底）	ナデ	ナデ	茶色	茶色	石英・長石・角閃石	
	68	BA−16Gr	第Ⅱ文化層	301	底部（尖底）	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黒灰色	黒灰色	石英・長石・角閃石	
第88図	69	F−21Gr	第Ⅳ文化層	416	轟B式	ナデ・隆起帯	ナデ	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石	
	70	ピット（P985）		401	轟B式	ナデ・隆起帯・刻目	二枚貝条痕	黒褐色	黒褐色	石英・長石	炭化物付着
	71	X−4Gr	第Ⅱ文化層	338	轟B式	ナデ・隆起帯	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	72	X−4Gr	第Ⅱ文化層	345	轟B式	ナデ・隆起帯	二枚貝条痕	茶褐色	茶褐色	石英・長石・角閃石	
	73	W−5Gr	第Ⅱ文化層	285	轟B式	ナデ・二枚貝条痕・隆起帯	二枚貝条痕	暗灰褐色	暗灰色	石英・長石・角閃石	炭化物付着
	74	ピット（P790）		396	轟B式	二枚貝条痕・隆起帯	二枚貝条痕	黒褐色	黒褐色	石英・長石	
	75	Ⅱ区遺構面		413	西和田式	ナデ・凹線・端部指押圧	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	76	ピット（P726）		391	西和田式	ナデ・凹線・端部押圧	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	77	58号土坑		316	西和田式	ナデ・凹線・端部指押圧	二枚貝条痕	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石・雲母（多い）	
	78	Ⅱ区遺構面		412	西和田式	ナデ・凹線・端部指押圧	二枚貝条痕	灰褐色	灰褐色	石英・長石	
	79	58号土坑		343	西和田式	ナデ・凹線・端部指押圧	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	80	AX−15Gr	第Ⅱ文化層	374	西和田式	ナデ・凹線・端部指押圧	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・雲母	
	81	58号土坑		360	西和田式	ナデ・凹線・端部指押圧	二枚貝条痕	黄褐色	黄褐色	石英・長石・角閃石	
	82	AW−15Gr	第Ⅲ文化層	329	西和田式	ナデ・凹線・端部指押圧	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	83	58号土坑		340	西和田式	ナデ・凹線・端部指押圧	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
第89図	84	Ⅱ区遺構面		411	西和田式	ナデ・凹線・端部指押圧	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	85	ピット（P821）		399	西和田式	ナデ・凹線・端部指押圧	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	86	ピット（P848）		400	西和田式	ナデ・凹線・端部指押圧	二枚貝条痕後ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石・雲母	
	87	58号土坑		357	西和田式	ナデ・凹線・端部棒状工具押圧	ナデ	灰褐色	灰褐色	石英・長石・角閃石	
	88	58号土坑		339	西和田式	ナデ・凹線・端部棒状工具押圧	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	89	58号土坑		359	西和田式	ナデ・凹線	二枚貝条痕・ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石	波状口縁
	90	AX−15Gr	第Ⅱ文化層	335	西和田式	ナデ・端部指押圧	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	91	AW−14Gr	第Ⅲ文化層	328	西和田式	二枚貝条痕・端部指押圧	二枚貝条痕	黄灰色	黒灰色	石英・長石　砂粒少ない	
	92	ピット（P720）		388	西和田式	二枚貝条痕・端部押圧	ナデ	暗褐色	暗褐色	石英・長石・雲母	波状口縁

第５表　上伊良原榎遺跡出土縄文土器観察表

	93	Ⅱ区遺構面		414	西和田式	二枚貝条痕・端部指押圧	二枚貝条痕	茶灰色	茶灰色	石英・長石・雲母	
	94	58号土坑		309	西和田式	ナデ・端部指押圧	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石　粗砂やや多い	
	95	58号土坑		314	西和田式	二枚貝条痕・指押圧	二枚貝条痕	茶灰色	茶灰色	石英・長石	
	96	AT−16Gr	第Ⅱ文化層	350	阿高式	ナデ・凹線	二枚貝条痕	茶褐色	茶褐色	石英・長石・角閃石	
	97	AW−14Gr	第Ⅱ文化層	379	西和田式	ナデ・凹線	ナデ	灰褐色	灰褐色	石英・長石・角閃石	
	98	AZ−14Gr	第Ⅱ文化層	296	西和田式	ナデ・凹線	二枚貝条痕	茶灰色	黒色	石英・長石	
第90図	99	57号土坑		386	西和田式	二枚貝条痕・凹線	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	100	58号土坑		317	西和田式	ナデ・凹線	二枚貝条痕	茶灰色	黒色	石英・長石　粗砂多い	
	101	AT−16Gr	第Ⅲ文化層	304	西和田式	ナデ?凹線	二枚貝条痕	黄茶色	黄茶色	石英・長石	
	102	58号土坑		358	中津式+沈線文	二枚貝条痕後ナデ・凹線・端部刻目	二枚貝条痕	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石・角閃石	
	103	AW−15Gr	第Ⅲ文化層	348	西和田式	ナデ・凹線	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	104	Ⅱ区遺構面		415	鐘崎式	ナデ・凹線	二枚貝条痕	灰褐色	灰褐色	石英・長石・角閃石	炭化物付着
	105	54号土坑		382	凹線文	ナデ・凹線	ナデ	暗褐色	暗褐色	石英・長石・角閃石	
	106	AX−14Gr	第Ⅲ文化層	302	凹線文	ナデ・凹線	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	107	58号土坑		318	凹線文	二枚貝条痕・凹線	二枚貝条痕	黄茶色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	108	AZ−14Gr	第Ⅱ文化層	300	凹線文	ナデ・凹線	ナデ	黒灰色	黒灰色	石英・長石・角閃石	
	109	58号土坑		315	凹線文	ヘラミガキ・凹線	ナデ	黒褐色	茶色	石英・長石・角閃石	
	110	AT−11Gr	第Ⅲ文化層	299	凹線文	ナデ・凹線	二枚貝条痕	黄茶色	黄茶色	石英・長石	
	111	P−13Gr	第Ⅱ文化層	275	磨消縄文	縄文	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石	
	112	ピット(P783)		394	磨消縄文	縄文・ナデ・凹線	ヘラミガキ	灰色	灰色	石英・長石	
	113	57号土坑		385	磨消縄文	縄文・ナデ・凹線	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	114	AX−15Gr	第Ⅱ文化層	375	磨消縄文	縄文・二枚貝条痕・凹線	ナデ・二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	115	BA−15Gr	第Ⅲ文化層	346	磨消縄文	縄文・凹線	二枚貝条痕	黒褐色	黒褐色	石英・長石	
	116	58号土坑		321	磨消縄文	縄文・ナデ	ナデ	黄茶色	黄茶色	石英・長石・角閃石	
	117	ピット(P720)		389	刻目(後期?)	ナデ・刻目	二枚貝条痕	黒褐色	黒褐色	石英・長石・角閃石	
	118	D−12Gr	第Ⅱ文化層	280	刻目(轟式?)	二枚貝条痕・刻目	二枚貝条痕	暗褐色	暗褐色	石英・長石	
第91図	119	AX−15Gr	第Ⅱ文化層	333	突帯(後期)	ナデ・二枚貝条痕・突帯	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	120	58号土坑		313	突帯(後期)	ナデ・突帯	ナデ	茶色	茶色	石英・長石　砂粒多い	
	121	AX−15Gr	第Ⅱ文化層	380	突帯(前期?)	ナデ・突帯	ナデ	茶灰色	茶灰色	石英・長石・角閃石	
	122	S−11Gr	第Ⅱ文化層	279	沈線文	ナデ・沈線	ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・長石・角閃石	
	123	AW−14Gr	第Ⅲ文化層	331	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	124	O−18Gr	第Ⅱ文化層	423	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	灰褐色	灰褐色	石英・長石・角閃石	
	125	I−18Gr　49号土坑	第Ⅳ文化層	421	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	茶色	茶色	石英・長石・雲母	
	126	58号土坑		341	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	茶色	茶色	石英・長石・雲母	
	127	ピット(P725)		390	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	暗黄褐色	暗黄褐色	石英・長石・角閃石	
	128	AS−15Gr	第Ⅱ文化層	332	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	茶灰色	茶灰色	石英・長石	
	129	54号土坑		383	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	暗褐色	暗褐色	石英・長石・角閃石	波状口縁
	130	O−12Gr	第Ⅱ文化層	289	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黒褐色	石英・長石・角閃石	波状口縁
第92図	131	58号土坑		308	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	茶褐色	茶褐色	石英・長石・雲母	
	132	AU−14Gr	第Ⅱ文化層	330	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・雲母	
	133	58号土坑		312	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	134	AX−15Gr	第Ⅱ文化層	336	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・雲母	
	135	ピット(P790)		395	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	茶灰色	茶灰色	石英・長石	
	136	AX−14Gr	第Ⅲ文化層	378	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	茶灰色	茶灰色	石英・長石・角閃石	
	137	M−11Gr	第Ⅱ文化層	276	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	茶褐色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	138	58号土坑		295	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	暗褐色	暗褐色	石英・長石・雲母	
	139	M−24Gr	第Ⅳ文化層	429	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	140	AX−13Gr	第Ⅳ文化層	297	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	141	O−24Gr	第Ⅳ文化層	427	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	茶褐色	茶褐色	石英・長石・角閃石	
	142	AW−14Gr	第Ⅲ文化層	305	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄茶色	灰褐色	石英・長石	
	143	M−24Gr	第Ⅱ文化層	429	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	144	AW−14Gr	第Ⅲ文化層	293	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	暗茶色	黄茶色	石英・長石　砂粒少ない	
	145	58号土坑		311	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	146	ピット(P821)		398	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	茶褐色	茶褐色	石英・長石・雲母	
第93図	147	AU−14Gr	第Ⅲ文化層	370	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	148	L−23Gr	第Ⅳ文化層	422	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄茶色	黒色	石英・長石	
	149	AU−15Gr	第Ⅳ文化層	326	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	茶灰色	茶灰色	石英・長石・角閃石	
	150	L−23Gr	第Ⅳ文化層	419	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄茶色	黒色	石英・長石	148と同一個体
	151	M−23Gr	第Ⅱ文化層	431	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石・角閃石	
	152	N−23Gr	第Ⅳ文化層	425	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	茶色	黒色	石英・長石・角閃石	
	153	M−26Gr	第Ⅱ文化層	434	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	154	AW−14Gr	第Ⅳ文化層	369	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	茶褐色	茶褐色	石英・長石	
	155	M−18Gr	第Ⅳ文化層	426	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	灰褐色	灰褐色	石英・長石・角閃石	
	156	AT−16Gr	第Ⅳ文化層	325	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	157	M−23Gr	第Ⅳ文化層	436	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	茶色	黒色	石英・長石	
	158	N−19Gr	第Ⅳ文化層	433	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黒色	石英・長石・角閃石	
	159	AY−16Gr	第Ⅳ文化層	373	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	灰褐色	灰褐色	石英・長石	
	160	ピット(P1057)		405	条痕文	巻貝条痕	巻貝条痕	灰褐色	灰褐色	石英・長石	
	161	58号土坑		342	条痕文	巻貝条痕	巻貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
第94図	162	Ⅱ区遺構面		408	条痕文	巻貝条痕	巻貝条痕	灰褐色	灰褐色	石英・長石・角閃石	
	163	ピット(P1065)		353	条痕文	巻貝条痕	巻貝条痕	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石・角閃石	
	164	AU−13Gr	第Ⅳ文化層	356	条痕文	巻貝条痕	巻貝条痕	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石・雲母	
	165	ピット(P1057)		404	条痕文	巻貝条痕	巻貝条痕	灰褐色	灰褐色	石英・長石	160と同一個体
	166	Ⅱ区遺構面		407	条痕文	巻貝条痕	巻貝条痕	灰褐色	灰褐色	石英・長石	165と同一個体
	167	Ⅱ区遺構面		410	条痕文	巻貝条痕	巻貝条痕	黄褐色	黄褐色	石英・長石・角閃石	
	168	ピット(P1057)		402	条痕文	巻貝条痕	巻貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石	166と同一個体
	169	ピット(P676)		387	底部(高台状上げ底)	二枚貝条痕・ナデ	ナデ	茶灰色	茶灰色	石英・長石・角閃石	
	170	58号土坑		322	底部(上げ底)	二枚貝条痕	二枚貝条痕後ナデ	茶灰色	茶灰色	石英・長石	
	171	AT−16Gr	第Ⅲ文化層	307	底部(上げ底)	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	172	58号土坑		319	底部(高台状上げ底)	ナデ	二枚貝条痕	茶色	茶色	石英・長石・雲母	
	173	58号土坑		324	底部(上げ底)	二枚貝条痕・ナデ	二枚貝条痕	茶灰色	茶灰色	石英・長石	
	174	57号土坑		384	底部(高台状上げ底)	二枚貝条痕	二枚貝条痕	茶色	茶色	石英・長石・雲母	
	175	58号土坑		323	底部(高台状上げ底)	二枚貝条痕	二枚貝条痕・ナデ	茶灰色	茶灰色	石英・長石・雲母	
第95図	176	58号土坑		320	底部(高台状上げ底)	二枚貝条痕後ナデ	二枚貝条痕	茶色	茶色	石英・長石・雲母	
	177	AU−16Gr	第Ⅲ文化層	381	底部(高台状上げ底)	ナデ	二枚貝条痕・ナデ	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石・角閃石	
	178	58号土坑		298	底部(上げ底)	二枚貝条痕・ナデ	二枚貝条痕	明茶色	明茶色	石英・長石・角閃石	
	179	58号土坑	第Ⅲ文化層	310	無文	ナデ	条痕後ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	180	AV−14Gr	第Ⅲ文化層	377	無文	ナデ	ナデ	黒灰色	黒灰色	石英・長石・雲母	
	181	L−10Gr	第Ⅱ文化層	288	無文	ナデ	ナデ	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石・角閃石	
	182	ピット(P798)		397	無文	ナデ	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	183	H−21Gr	第Ⅳ文化層	430	無文	条痕後ナデ	条痕後ナデ	暗茶色	暗茶色	石英・長石・雲母	
	184	AW−16Gr	第Ⅱ文化層	334	無文	ナデ	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石　粗砂多い	波状口縁
	185	58号土坑		337	無文	ナデ	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	186	H−21Gr	第Ⅳ文化層	461	無文	ナデ	ナデ	黄茶色	茶褐色	石英・長石・雲母	

第６表　上伊良原榎遺跡出土石器観察表

掲載図	掲載番号	出土場所	文化層	整理番号	石材	種類	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
第97図	1	L−23Gr	第Ⅱ文化層	122	黒曜石	ナイフ形石器	28	15	3	1.2	
	2	M−22Gr	第Ⅳ文化層	123	水晶	ナイフ形石器	31	16	11	4.0	
	3	N−22Gr	第Ⅳ文化層	121	安山岩	ナイフ形石器	22	7	2	11.5	
	4	ピット(P1064)		129	黒曜石	細石刃	53	21	11	0.2	
	5	Y−6Gr	第Ⅳ文化層	130	黒曜石	細石刃	20	10	2	0.3	
	6	P−17Gr	第Ⅱ文化層	128	黒曜石	細石刃	21	8	2	0.3	
	7	ピット(P974)		127	黒曜石	細石刃	31	29	2	0.7	
	8	F−20Gr	第Ⅳ文化層	126	黒曜石	細石刃	34	11	5	1.0	
	9	L−23Gr	第Ⅳ文化層	132	黒曜石	細石刃核	24	23	14	9.6	
	10	G−19Gr	第Ⅳ文化層	131	黒曜石	細石刃核	35	22	16	8.6	
	11	G−16Gr	第Ⅳ文化層	175	黒曜石	剥片	41	21	11	7.1	
	12	廃土中		232	黒曜石	剥片	34	25	8	5.5	
第98図	13	M−10Gr	第Ⅱ文化層	243	安山岩	剥片	62	26	7	16.6	
	14	Q−13Gr	第Ⅳ文化層	244	安山岩	剥片	52	24	12	17.4	
	15	Z−6Gr	第Ⅳ文化層	245	安山岩	剥片	82	75	20	103.9	
	16	H−20Gr	第Ⅳ文化層	211	珪質岩	剥片	30	34	6	8.2	
	17	廃土中		212	珪質岩	剥片	59	37	9	29.7	
第99図	18	X−6Gr	第Ⅱ文化層	7	黒曜石	石鏃	15	11	3	0.4	
	19	AA−10Gr	第Ⅳ文化層	2	黒曜石	石鏃	14	11	3	0.3	
	20	ピット(P630)		135	黒曜石	石鏃	14	12	2	0.2	
	21	Y−5Gr	第Ⅳ文化層	109	黒曜石	石鏃	16	12	5	0.6	
	22	V−15Gr	第Ⅱ文化層	5	黒曜石	石鏃	20	12	3	0.4	
	23	ピット(P248)		134	黒曜石	石鏃	14	13	3	0.4	
	24	P−13Gr	第Ⅱ文化層	3	黒曜石	石鏃	17	10	3	0.1	
	25	X−7Gr	第Ⅱ文化層	4	黒曜石	石鏃	18	16	5	0.4	
	26	Ⅲ区遺構面		133	黒曜石	石鏃	15	15	4	0.7	
	27	包含層		137	黒曜石	石鏃	15	17	3	0.5	
	28	ピット(P359)		136	黒曜石	石鏃	18	16	3	0.6	
	29	W−6Gr　2号集石	第Ⅱ文化層	28	黒曜石	石鏃	19	17	5	1.6	
	30	廃土中		22	黒曜石	石鏃	21	14	4	0.9	
	31	Q−14Gr	第Ⅳ文化層	14	黒曜石	石鏃	23	16	3	0.7	
	32	W−5Gr	第Ⅱ文化層	8	黒曜石	石鏃	22	13	4	0.5	
	33	W−5Gr	第Ⅳ文化層	15	黒曜石	石鏃	22	15	4	0.6	
	34	Y−7Gr	第Ⅳ文化層	20	黒曜石	石鏃	17	12	5	0.8	
	35	W−6Gr　2号集石	第Ⅱ文化層	6	黒曜石	石鏃	19	16	4	0.7	
	36	R−7Gr	第Ⅱ文化層	9	黒曜石	石鏃	20	16	3	0.6	
	37	W−5Gr	第Ⅳ文化層	10	黒曜石	石鏃	17	11	4	0.6	
	38	Q−14Gr	第Ⅳ文化層	31	黒曜石	石鏃	16	21	4	1.1	
	39	遺構面		139	黒曜石	石鏃	17	19	4	0.8	
	40	AS−16Gr	第Ⅱ文化層	26	黒曜石	石鏃	20	14	3	0.6	
	41	ピット(P569)		25	黒曜石	石鏃	18	15	3	0.5	
	42	M−13Gr	第Ⅱ文化層	24	黒曜石	石鏃	18	21	4	1.0	
	43	W−5Gr	第Ⅱ文化層	27	黒曜石	石鏃	25	17	4	0.9	
第100図	44	H−20Gr　50号土坑	第Ⅳ文化層	23	黒曜石	石鏃	22	20	5	1.5	
	45	Z−6Gr	第Ⅳ文化層	1	黒曜石	石鏃	21	21	5	1.3	
	46	W−4Gr	第Ⅱ文化層	21	黒曜石	石鏃	18	25	6	2.1	
	47	X−5Gr	第Ⅱ文化層	18	黒曜石	石鏃	27	15	5	1.4	
	48	遺構面		138	黒曜石	石鏃	28	21	6	1.8	
	49	AB−10Gr	第Ⅱ文化層	13	黒曜石	石鏃	30	17	5	1.4	
	50	Z−4Gr	第Ⅱ文化層	19	黒曜石	石鏃	27	18	5	1.6	
	51	Z−5Gr	第Ⅱ文化層	11	黒曜石	石鏃	27	17	6	2.1	
	52	試掘トレンチ(3Tr)		168	黒曜石	石鏃	25	16	5	1.5	
	53	X−5Gr	第Ⅳ文化層	16	黒曜石	石鏃	29	19	6	1.5	
	54	AA−5Gr	第Ⅳ文化層	12	黒曜石	石鏃	29	20	5	1.8	
	55	W−5Gr	第Ⅱ文化層	17	黒曜石	石鏃	29	20	5	2.4	
	56	ピット(P728)		142	姫島産黒曜石	石鏃	19	12	3	0.7	
	57	遺構面		143	姫島産黒曜石	石鏃	19	13	5	1.0	
	58	58号土坑		144	姫島産黒曜石	石鏃	22	15	4	1.2	
	59	Z−4Gr	第Ⅱ文化層	42	姫島産黒曜石	石鏃	15	12	3	0.4	
	60	AA−7Gr	第Ⅱ文化層	41	姫島産黒曜石	石鏃	12	11	3	0.3	
	61	N−12Gr	第Ⅱ文化層	58	姫島産黒曜石	石鏃	15	14	3	0.6	
	62	Ⅲ区包含層		145	姫島産黒曜石	石鏃	15	14	3	0.4	
	63	BA−16Gr	第Ⅱ文化層	52	姫島産黒曜石	石鏃	17	18	4	0.7	
	64	M−24Gr	第Ⅱ文化層	53	姫島産黒曜石	石鏃	15	17	3	0.4	
	65	I−21Gr	第Ⅳ文化層	35	姫島産黒曜石	石鏃	16	17	3	0.7	
	66	Ⅱ区包含層		36	姫島産黒曜石	石鏃	17	15	3	0.4	
	67	AF−9Gr	第Ⅱ文化層	54	姫島産黒曜石	石鏃	17	18	4	0.5	
第101図	68	M−10Gr	第Ⅱ文化層	49	姫島産黒曜石	石鏃	19	16	4	0.6	
	69	AX−14Gr	第Ⅱ文化層	107	姫島産黒曜石	石鏃	17	12	4	0.4	
	70	X−16Gr	第Ⅱ文化層	60	姫島産黒曜石	石鏃	15	11	3	0.3	
	71	ピット(P230)		57	姫島産黒曜石	石鏃	21	13	4	0.6	
	72	Ⅱ区遺構面		48	姫島産黒曜石	石鏃	19	17	4	1.2	
	73	Ⅱ区遺構面		141	姫島産黒曜石	石鏃	20	12	3	0.6	
	74	ピット(P537)		153	姫島産黒曜石	石鏃	20	12	3	1.1	
	75	X−5Gr	第Ⅱ文化層	55	姫島産黒曜石	石鏃	18	18	6	0.9	
	76	ピット(P630)		147	姫島産黒曜石	石鏃	19	14	3	0.4	
	77	M−11Gr	第Ⅱ文化層	50	姫島産黒曜石	石鏃	20	16	2	0.4	
	78	遺構面		47	姫島産黒曜石	石鏃	20	18	4	0.8	
	79	ピット(P692)		148	姫島産黒曜石	石鏃	22	14	4	0.9	
	80	AC−12Gr	第Ⅳ文化層	61	姫島産黒曜石	石鏃	19	14	5	1.0	
	81	60号土坑		146	姫島産黒曜石	石鏃	19	15	4	0.8	
	82	遺構面		151	姫島産黒曜石	石鏃	24	14	4	0.8	
	83	ピット(P786)		150	姫島産黒曜石	石鏃	23	17	5	1.1	
	84	S−3Gr		39	姫島産黒曜石	石鏃	18	17	3	0.6	
	85	AD−8Gr	第Ⅱ文化層	59	姫島産黒曜石	石鏃	22	12	4	0.7	
	86	Ⅱ区遺構面		152	姫島産黒曜石	石鏃	18	14	4	0.8	
	87	AX−13Gr	第Ⅲ文化層	40	姫島産黒曜石	石鏃	27	16	5	1.2	
	88	BA−16Gr	第Ⅱ文化層	38	姫島産黒曜石	石鏃	24	17	4	0.9	
	89	Y−16Gr	第Ⅱ文化層	56	姫島産黒曜石	石鏃	19	18	3	1.0	
	90	ピット(P368)		155	姫島産黒曜石	石鏃	27	17	4	0.9	
	91	Y−16Gr	第Ⅱ文化層	44	姫島産黒曜石	石鏃	26	16	4	1.1	
第102図	92	AW−18Gr	第Ⅲ文化層	51	姫島産黒曜石	石鏃	24	18	3	0.8	
	93	H−20Gr	第Ⅳ文化層	63	姫島産黒曜石	石鏃	28	18	7	2.7	
	94	Q−13Gr	第Ⅳ文化層	45	姫島産黒曜石	石鏃	26	19	6	2.1	
	95	AC−13Gr	第Ⅳ文化層	46	姫島産黒曜石	石鏃	27	19	6	2.7	
	96	AZ−15Gr	第Ⅱ文化層	37	姫島産黒曜石	石鏃	28	17	4	1.5	

第６表　上伊良原榎遺跡出土石器観察表

	97	ピット(P359)		149	姫島産黒耀石	石鏃	26	19	5	1.5	
	98	試掘トレンチ(1Tr)		43	姫島産黒耀石	石鏃	26	19	4	1.4	
	99	58号土坑		154	姫島産黒耀石	石鏃	29	19	6	2.1	
	100	AT−15Gr	第Ⅲ文化層	34	姫島産黒耀石	石鏃	30	19	7	2.2	
	101	H−20Gr　50号土坑	第Ⅳ文化層	91	安山岩	石鏃	14	12	3	0.4	
	102	M−23Gr	第Ⅱ文化層	77	安山岩	石鏃	14	12	5	0.6	
	103	J−19Gr	第Ⅳ文化層	79	安山岩	石鏃	11	12	4	0.3	
	104	H−20Gr　50号土坑	第Ⅳ文化層	90	安山岩	石鏃	13	11	4	0.4	
	105	O−17Gr	第Ⅳ文化層	92	安山岩	石鏃	13	9	2	0.2	
	106	AC−10Gr	第Ⅳ文化層	85	安山岩	石鏃	15	13	2	0.4	
	107	W−5Gr	第Ⅱ文化層	83	安山岩	石鏃	16	12	3	0.5	
	108	J−21Gr　59号土坑	第Ⅳ文化層	82	安山岩	石鏃	19	13	3	0.5	
	109	H−19Gr	第Ⅳ文化層	104	安山岩	石鏃	16	11	3	0.4	
	110	J−21Gr　59号土坑	第Ⅳ文化層	78	安山岩	石鏃	16	13	3	0.5	
	111	P−23Gr	第Ⅱ文化層	87	安山岩	石鏃	18	13	2	0.3	
	112	W−5Gr	第Ⅳ文化層	94	安山岩	石鏃	11	13	3	0.3	
	113	J−21Gr	第Ⅳ文化層	80	安山岩	石鏃	17	15	2	0.4	
	114	AS−15Gr	第Ⅱ文化層	106	安山岩	石鏃	21	11	3	0.4	
	115	AB−10Gr	第Ⅳ文化層	108	安山岩	石鏃	21	11	3	0.4	
	116	H−20Gr　50号土坑	第Ⅳ文化層	81	安山岩	石鏃	19	12	4	0.7	
	117	L−10Gr	第Ⅱ文化層	88	安山岩	石鏃	18	11	3	0.3	
	118	Y−4Gr	第Ⅱ文化層	86	安山岩	石鏃	15	15	3	0.4	
第103図	119	M−9Gr	第Ⅱ文化層	95	安山岩	石鏃	18	14	3	0.7	
	120	Ⅲ区包含層		157	安山岩	石鏃	21	17	3	1.0	
	121	X−4Gr	第Ⅳ文化層	73	安山岩	石鏃	24	19	6	2.0	
	122	W−4Gr	第Ⅱ文化層	67	安山岩	石鏃	24	18	5	1.5	
	123	X−5Gr	第Ⅳ文化層	66	安山岩	石鏃	19	17	5	0.9	
	124	AC−12Gr	第Ⅳ文化層	102	安山岩	石鏃	21	14	5	1.0	
	125	遺構面		69	安山岩	石鏃	23	15	5	1.2	
	126	ピット(P545)		159	安山岩	石鏃	19	17	4	0.8	
	127	包含層		160	安山岩	石鏃	19	18	3	1.0	
	128	M−12Gr	第Ⅱ文化層	68	安山岩	石鏃	25	22	6	2.3	
	129	9号土坑		165	安山岩	石鏃	25	14	6	1.0	
	130	ピット(P354)		158	安山岩	石鏃	25	18	4	0.7	
	131	M−10Gr	第Ⅱ文化層	74	安山岩	石鏃	20	20	4	0.9	
	132	58号土坑		156	安山岩	石鏃	25	14	4	1.1	
	133	Q−13Gr	第Ⅳ文化層	70	安山岩	石鏃	24	16	6	2.1	
	134	V−4Gr	第Ⅱ文化層	76	安山岩	石鏃	19	22	5	1.9	
	135	ピット(P976)		166	安山岩	石鏃	31	15	4	1.9	
	136	G−22Gr	第Ⅳ文化層	97	安山岩	石鏃	33	18	5	2.4	
	137	AX−15Gr	第Ⅳ文化層	99	安山岩	石鏃	29	28	3	1.4	
	138	O−12Gr	第Ⅱ文化層	71	安山岩	石鏃	35	14	4	0.9	
	139	Ⅲ区遺構面		162	安山岩	石鏃	26	16	4	0.9	
	140	AS−16Gr	第Ⅱ文化層	75	安山岩	石鏃	24	17	4	1.2	
	141	BA−14Gr	第Ⅱ文化層	72	安山岩	石鏃	27	16	4	1.1	
	142	W−6Gr	第Ⅳ文化層	65	安山岩	石鏃	27	17	3	1.3	
第104図	143	Ⅲ区撹乱		161	安山岩	石鏃	32	17	4	1.6	
	144	Y−4Gr	第Ⅳ文化層	115	珪化木	石鏃	35	14	12	1.9	
	145	AY−14Gr	第Ⅳ文化層	112	赤褐色チャート	石鏃	17	13	2	1.5	
	146	H−19Gr	第Ⅳ文化層	111	赤褐色チャート	石鏃	17	13	3	0.6	
	147	F−19Gr	第Ⅳ文化層	113	赤褐色チャート	石鏃	18	15	4	0.7	
	148	廃土中		110	灰色チャート	石鏃	18	13	3	0.6	
	149	AX−14Gr	第Ⅳ文化層	114	珪質岩	石鏃	22	13	3	0.6	
	150	AA−8Gr	第Ⅱ文化層	116	石英	石鏃	14	13	4	0.6	
	151	O−12Gr	第Ⅱ文化層	117	石英	石鏃	20	14	4	1.1	
	152	X−5Gr	第Ⅳ文化層	140	黒耀石	石鏃未製品	21	14	3	0.8	
	153	廃土中		29	黒耀石	石鏃未製品	22	22	4	1.6	
	154	Y−6Gr	第Ⅳ文化層	177	黒耀石	石鏃未製品	16	21	7	2.5	
	155	R−5Gr	第Ⅱ文化層	176	黒耀石	石鏃未製品	19	15	5	1.1	
	156	Q−14Gr	第Ⅳ文化層	30	黒耀石	石鏃未製品	15	18	4	0.7	
	157	T−5Gr	第Ⅱ文化層	32	黒耀石	石鏃未製品	15	21	7	1.8	
	158	X−5Gr	第Ⅳ文化層	174	黒耀石	石鏃未製品	17	22	9	2.0	
	159	X−5Gr	第Ⅳ文化層	33	黒耀石	石鏃未製品	27	22	9	4.5	
	160	ピット(P369)		184	姫島産黒耀石	石鏃未製品	23	15	4	1.1	
	161	O−12Gr	第Ⅱ文化層	62	姫島産黒耀石	石鏃未製品	28	17	7	2.5	
	162	AU−15Gr	第Ⅱ文化層	64	姫島産黒耀石	石鏃未製品	37	21	7	3.2	
	163	M−9Gr	第Ⅱ文化層	84	安山岩	石鏃未製品	15	12	3	0.4	
	164	M−9Gr	第Ⅱ文化層	101	安山岩	石鏃未製品	16	15	4	0.7	
	165	H−19Gr	第Ⅳ文化層	103	安山岩	石鏃未製品	23	12	4	0.9	
	166	H−20Gr　50号土坑	第Ⅳ文化層	93	安山岩	石鏃未製品	19	15	5	1.4	
第105図	167	X−5Gr	第Ⅳ文化層	96	安山岩	石鏃未製品	18	16	5	1.2	
	168	H−11Gr	第Ⅱ文化層	89	安山岩	石鏃未製品	14	16	6	1.3	
	169	G−19Gr　1号竪穴住居跡	第Ⅳ文化層	164	安山岩	石鏃未製品	23	17	6	2.6	
	170	AB−11Gr	第Ⅳ文化層	98	安山岩	石鏃未製品	21	20	8	2.4	
	171	H−22Gr	第Ⅳ文化層	105	安山岩	石鏃未製品	21	18	4	1.2	
	172	R−7Gr	第Ⅱ文化層	100	安山岩	石鏃未製品	19	22	8	2.5	
	173	N−10Gr	第Ⅱ文化層	196	安山岩	石鏃未製品	25	16	8	3.0	
	174	N−12Gr	第Ⅱ文化層	197	安山岩	石鏃未製品	29	21	6	2.5	
	175	AV−18Gr	第Ⅲ文化層	195	安山岩	石鏃未製品	28	16	5	2.2	
	176	I−20Gr	第Ⅳ文化層	163	安山岩	石鏃未製品	26	19	6	2.4	
	177	ピット(P769)		167	黒色凝灰岩	石鏃未製品	25	28	8	5.2	
第106図	178	AA−6Gr	第Ⅳ文化層	119	珪質岩	石匙	45	19	5	2.5	
	179	AW−17Gr	第Ⅲ文化層	120	安山岩	石匙	59	32	8	10.4	
	180	58号土坑		118	安山岩	石匙	55	44	12	25.9	
	181	X−4Gr	第Ⅳ文化層	125	姫島産黒耀石	つまみ形石器	20	15	5	1.2	
	182	ピット(P1066)		124	安山岩	つまみ形石器	39	20	6	3.4	
	183	Ⅱ区遺構面		187	姫島産黒耀石	石錐	31	12	7	2.0	
	184	U−15Gr	第Ⅱ文化層	204	安山岩	石錐	25	34	9	5.5	
	185	Q−13Gr	第Ⅳ文化層	249	赤色チャート	楔形石器	34	18	7	5.2	
	186	AB−12Gr	第Ⅳ文化層	250	赤色チャート	楔形石器	33	16	11	5.3	
	187	X−4Gr	第Ⅳ文化層	213	珪質岩	楔形石器	33	16	8	4.1	
	188	X−7Gr	第Ⅳ文化層	248	珪質岩	楔形石器	36	18	12	7.1	
第107図	189	表土掘削時		173	黒耀石	スクレイパー	33	24	10	4.8	
	190	耕作土中		172	黒耀石	スクレイパー	43	28	14	21.9	
	191	G−19Gr　1号竪穴住居跡	第Ⅳ文化層	169	黒耀石	スクレイパー	32	27	6	4.9	
	192	Ⅱ区包含層	第Ⅰ文化層	192	姫島産黒耀石	スクレイパー	44	34	9	9.5	
	193	AY−18Gr	第Ⅲ文化層	191	姫島産黒耀石	スクレイパー	41	31	8	8.8	

第６表　上伊良原榎遺跡出土石器観察表

	194	AS−15Gr	第Ⅲ文化層	182	姫島産黒耀石	スクレイパー	40	19	12	7.4	
	195	58号土坑		190	姫島産黒耀石	スクレイパー	43	35	10	8.3	
	196	AB−10Gr	第Ⅳ文化層	181	姫島産黒耀石	スクレイパー	47	19	9	7.1	
	197	L−9Gr	第Ⅱ文化層	183	姫島産黒耀石	スクレイパー	28	18	5	2.5	
	198	Ⅱ区包含層	第Ⅰ文化層	185	姫島産黒耀石	スクレイパー	23	28	9	4.4	
	199	AX−15Gr	第Ⅱ文化層	186	姫島産黒耀石	スクレイパー	25	19	8	4.1	
第108図	200	Ⅲ区遺構面		188	姫島産黒耀石	スクレイパー	29	22	11	5.7	
	201	AU−14Gr	第Ⅱ文化層	189	姫島産黒耀石	スクレイパー	32	25	9	5.9	
	202	Ⅱ区包含層		206	安山岩	スクレイパー	51	58	11	28.1	
	203	X−4Gr	第Ⅱ文化層	205	安山岩	スクレイパー	48	59	8	23.7	
	204	I−20Gr	第Ⅳ文化層	201	安山岩	スクレイパー	40	54	12	23.1	
	205	ピット(P908)		203	安山岩	スクレイパー	35	53	11	18.9	
	206	X−5Gr	第Ⅱ文化層	198	安山岩	スクレイパー	27	34	7	4.5	
	207	H−20Gr	第Ⅳ文化層	194	安山岩	スクレイパー	23	31	4	3.3	
	208	W−5Gr	第Ⅳ文化層	193	安山岩	スクレイパー	26	31	8	6.6	
	209	包含層		202	安山岩	スクレイパー	36	33	9	11.3	
第109図	210	AC−11Gr	第Ⅳ文化層	261	珪質岩	スクレイパー	55	54	21	61.1	
	211	L−20Gr	第Ⅳ文化層	215	珪質岩	スクレイパー	42	51	11	20.5	
	212	廃土中		208	珪質岩	スクレイパー	37	48	11	15.6	
	213	廃土中		210	珪質岩	スクレイパー	33	49	11	13.8	
	214	I−21Gr　51号土坑	第Ⅳ文化層	218	珪質岩	スクレイパー	32	48	12	16.1	
	215	Ⅱ区包含層		207	珪質岩	スクレイパー	36	23	8	6.7	
	216	Q−16Gr	第Ⅳ文化層	217	珪質岩	スクレイパー	36	33	7	10.7	
	217	V−5Gr	第Ⅱ文化層	220	珪質岩	スクレイパー	35	29	10	9.8	
	218	AC−12Gr	第Ⅳ文化層	219	珪質岩	スクレイパー	23	35	9	8.6	
	219	AC−11Gr	第Ⅳ文化層	216	珪化木	スクレイパー	28	28	7	4.3	
	220	L−24Gr	第Ⅳ文化層	224	水晶	スクレイパー	26	22	6	3.5	
第110図	221	AC−12Gr	第Ⅳ文化層	242	黒耀石	剥片	35	17	10	5.6	
	222	Q−9Gr	第Ⅱ文化層	238	黒耀石	剥片	36	23	9	7.5	
	223	W−5Gr	第Ⅱ文化層	231	黒耀石	剥片	26	16	8	2.5	
	224	AX−16Gr	第Ⅳ文化層	235	黒耀石	剥片	18	33	7	3.6	
	225	X−6Gr	第Ⅳ文化層	171	黒耀石	剥片	17	19	4	0.8	
	226	W−6Gr	第Ⅳ文化層	241	黒耀石	剥片	21	22	5	2.7	
	227	W−4Gr	第Ⅳ文化層	237	黒耀石	剥片	37	21	14	9.9	
	228	Q−12Gr	第Ⅱ文化層	240	黒耀石	剥片	35	20	12	7.3	
	229	Z−5Gr	第Ⅳ文化層	170	黒耀石	剥片	28	14	5	1.5	
	230	Z−8Gr	第Ⅳ文化層	230	黒耀石	剥片	20	22	6	2.6	
	231	Y−6Hr	第Ⅳ文化層	236	黒耀石	剥片	31	28	7	4.1	
	232	ピット(P333)		179	姫島産黒耀石	剥片	45	15	10	4.9	
	233	耕作土中		247	姫島産黒耀石	剥片	39	27	13	10.4	
	234	AS−16Gr	第Ⅱ文化層	239	姫島産黒耀石	剥片	37	18	19	12.6	
	235	AA−8Gr	第Ⅳ文化層	180	姫島産黒耀石	剥片	47	15	6	4.5	
第111図	236	AW−15Gr	第Ⅱ文化層	246	姫島産黒耀石	剥片	38	38	11	11.8	
	237	Q−12Gr	第Ⅱ文化層	199	安山岩	剥片	42	34	10	11.2	
	238	H−21Gr	第Ⅳ文化層	200	安山岩	剥片	30	26	6	4.2	
	239	M−23Gr	第Ⅱ文化層	221	珪質岩	剥片	48	46	11	21.2	
	240	L−24Gr	第Ⅱ文化層	255	珪質岩	剥片	90	62	21	97.2	
	241	O−12Gr	第Ⅱ文化層	222	赤茶色チャート	剥片	37	33	8	12.4	
	242	W−6Gr	第Ⅳ文化層	223	珪質岩	剥片	38	34	10	13.7	
第112図	243	Ⅱ区包含層		214	珪質岩	剥片	62	83	17	92.9	
	244	Ⅱ区包含層		209	珪質岩	剥片	40	33	12	16.4	
	245	J−19Gr　37号土坑	第Ⅳ文化層	254	珪質岩	剥片	43	30	6	10.5	
	246	W−4Gr	第Ⅱ文化層	252	珪質岩	剥片	25	33	12	7.4	
	247	W−10Gr	第Ⅱ文化層	251	珪質岩	剥片	25	25	5	2.9	
	248	H−18Gr	第Ⅳ文化層	270	石英	剥片	36	22	7	11.2	
	249	J−21Gr	第Ⅳ文化層	269	石英	剥片	44	60	14	51.2	
第113図	250	Y−5Gr	第Ⅳ文化層	233	黒耀石	石核	20	38	14	10.5	
	251	X−5Gr	第Ⅳ文化層	234	黒耀石	石核	33	48	12	15.6	
	252	N−10Gr	第Ⅱ文化層	178	黒耀石	原石	22	22	17	9.0	
	253	O−13Gr	第Ⅱ文化層	256	珪質岩	石核	37	56	47	94.7	
	254	遺構面		264	珪質岩	石核	35	58	31	50.5	
	255	P−16Gr	第Ⅳ文化層	260	珪質岩	石核	27	43	33	39.9	
	256	O−17Gr	第Ⅳ文化層	266	珪質岩	石核	42	63	25	60.3	
	257	X−4Gr	第Ⅳ文化層	262	珪質岩	石核	59	39	34	90.5	
	258	W−5Gr	第Ⅱ文化層	258	珪質岩	石核	35	54	32	47.9	
	259	O−17Gr	第Ⅳ文化層	257	珪質岩	石核	20	48	26	16.6	
第114図	260	Q−13Gr	第Ⅱ文化層	263	珪質岩	石核	45	57	34	75.1	
	261	M−24Gr	第Ⅱ文化層	259	珪質岩	石核	31	52	40	55.3	
	262	廃土中		265	青灰色チャート	石核	33	41	27	41.3	
	263	I−19Gr　49号土坑	第Ⅳ文化層	268	赤色チャート	石核	47	43	31	57.5	
	264	H−21Gr	第Ⅳ文化層	267	赤色チャート	石核	39	60	31	66.0	
第115図	265	O−4Gr		228	玄武岩	磨製石斧	117	52	24	215.0	
	266	溝6		225	玄武岩	磨製石斧	111	47	21	175.6	
	267	Ⅱ区礫層上面		226	玄武岩	磨製石斧	50	40	20	57.4	
	268	58号土坑		227	蛇紋岩	磨製石斧	95	57	30	223.7	
	269	I−19Gr　49号土坑	第Ⅳ文化層	511	凝灰岩	凹石	94	117	42	497.5	
	270	Z−4Gr	第Ⅱ文化層	512	凝灰岩	凹石	98	61	35	252.6	
	271	L−24Gr	第Ⅱ文化層	513	凝灰岩	凹石	96	59	47	273.9	
	272	M−24Gr	第Ⅱ文化層	510	凝灰岩	凹石	82	96	36	342.8	
	273	M−23Gr	第Ⅳ文化層	509	凝灰岩	凹石	97	102	56	607.1	
	274	3号集石		508	凝灰岩	凹石	106	173	50	1201.4	中世?
第116図	275	ピット(P910)		515	凝灰岩	磨石	74	53	50	268.3	
	276	AU−14	第Ⅳ文化層	518	凝灰岩	磨石	73	70	50	384.3	
	277	L−23Gr	第Ⅳ文化層	514	凝灰岩	磨石	83	75	50	368.1	
	278	ピット(P443)		506	凝灰岩	磨石	106	87	73	925.7	
	279	P−18Gr	第Ⅳ文化層	519	凝灰岩	磨石	74	60	30	156.5	
	280	L−10Gr	第Ⅱ文化層	229	石英	敲石	50	38	28	77.3	
	281	X−7Gr	第Ⅱ文化層	516	凝灰岩	敲石	111	88	84	1483.7	
	282	AB−11Gr	第Ⅳ文化層	503	凝灰岩	台石	225	320	92	11000.0	
	283	G−21Gr　2号竪穴住居跡	第Ⅳ文化層	478	凝灰岩	台石	261	35	69	7500.0	
第117図	284	L−4Gr	第Ⅱ文化層	507	凝灰岩	台石	140	183	74	2397.6	
	285	F−21Gr	第Ⅳ文化層	517	凝灰岩	台石	155	215	85	4770.1	
	286	U−16Gr	第Ⅱ文化層	504	凝灰岩	台石	219	173	59	3574.6	
	287	U−16Gr	第Ⅱ文化層	505	凝灰岩	台石	209	245	87	6500.0	
	288	Z−6Gr　2号集石	第Ⅳ文化層	502	凝灰岩	台石	236	321	90	9500.0	
	289	Z−6Gr　2号集石	第Ⅳ文化層	501	凝灰岩	台石	354	280	74	11500.0	
	290	AX−15Gr	第Ⅱ文化層	479	凝灰岩	台石	479	389	65	19800.0	

第７表　上伊良原榎遺跡出土土製品（土器片円盤）観察表

掲載図	掲載番号	出土場所	文化層	整理番号	種類	長軸（mm）	短軸（mm）	厚（mm）	重量（g）	備考
第96図	1	AX−15Gr	第Ⅱ文化層	362	土器片円盤	56	53	9	25.4	
	2	58号土坑		480	土器片円盤	58	50	11	30.6	
	3	58号土坑		481	土器片円盤	54	48	8	21.9	
	4	58号土坑		482	土器片円盤	49	47	8	24.8	
	5	58号土坑		483	土器片円盤	46	45	10	21.8	
	6	AS−16Gr	第Ⅲ文化層	484	土器片円盤	38	34	8	11.7	
	7	AU−16Gr	第Ⅱ文化層	485	土器片円盤	50	49	10	25.3	
	8	AU−17Gr	第Ⅱ文化層	486	土器片円盤	42	39	11	18.0	
	9	AW−14Gr	第Ⅱ文化層	488	土器片円盤	52	46	9	22.8	
	10	AX−14Gr	第Ⅱ文化層	489	土器片円盤	50	48	7	16.8	
	11	AX−14Gr	第Ⅱ文化層	490	土器片円盤	43	40	8	17.1	
	12	AX−14Gr	第Ⅱ文化層	491	土器片円盤	50	48	11	30.7	
	13	AX−14Gr	第Ⅲ文化層	492	土器片円盤	34	31	9	10.1	
	14	AY−16Gr	第Ⅲ文化層	493	土器片円盤	50	46	12	27.2	
	15	AY−15Gr	第Ⅱ文化層	494	土器片円盤	42	39	10	18.5	
	16	54号土坑		495	土器片円盤	50	49	11	24.3	
	17	57号土坑		496	土器片円盤	48	42	8	19.1	
	18	ピット（P815）		497	土器片円盤	35	33	7	11.5	

第８表　上伊良原榎遺跡出土土錘観察表

№.	遺構名	長さ（cm）	径（cm）	重量（g）	焼　成	胎　土	色　調
1	P9	（1.5）	0.8	0.9	良	精良	黒灰色
2	遺構面	（1.9）	1.2	1.7	普通	良	明褐～暗灰褐色
3	P339	（2.1）	1.1	1.9	普通	精良	淡灰黄褐～淡橙色
4	P167	（2.15）	1.25	2.5	普通	精良	明褐色
5	Ⅲ区P592	（2.2）	1.0	2.4	やや不良	精良	淡褐色
6	Ⅱ区P779	（2.25）	0.95	2.1	良	良	褐灰～暗灰色
7	Ⅱ区P700	（2.3）	1.05	2.3	良	良	黒色
8	P116	（2.3）	1.0	1.8	良	普通	黒灰色
9	P173	（2.4）	0.9	2.3	良	精良	黒灰色
10	Ⅱ区遺構面	（2.45）	1.05	2.6	良	良	黒褐～黒色
11	Ⅱ区P897	（2.5）	0.9	1.8	良	良	淡褐～明褐色
12	P545	（2.5）	（1.25）	1.6	良	精良	暗灰～黒色
13	Ⅲ区包含層	（2.95）	1.1	2.7	不良	精良	淡褐灰色
14	Ⅱ区遺構面	（3.05）	0.8	2.1	良	良	灰褐～暗灰色
15	P982	（3.15）	1.25	4.2	普通	良	淡褐色
16	Ⅲ区排土中	（3.2）	1.0	2.8	良	精良	黒灰色
17	Ⅱ区排土中	3.2	1.0	3.3	良	良	暗灰～黒灰色
18	Ⅱ区P835	3.25	1.0	3.5	普通	良	明橙色
19	Ⅱ区溝6	3.25	0.9	2.5	良	精良	黒褐色
20	P956	（3.25）	1.0	3.1	良	良	暗灰～黒色
21	Ⅱ区溝6	3.3	0.9	2.8	普通	良	明橙色
22	Ⅲ区包含層	（3.55）	1.0	3.3	良	精良	淡灰褐～暗灰色
23	Ⅱ区遺構面	（3.6）	1.05	4.2	良	良	灰褐色
24	Ⅱ区遺構面	（3.6）	1.05	3.9	普通	良	明褐色
25	遺跡内	3.7	1.3	5.2	普通	精良	明褐色
26	P508	（3.7）	1.1	3.7	普通	良	明褐色
27	遺構面	3.9	1.0	4.1	良	精良	黒色
28	P25	3.9	0.9	3.6	良	精良	明灰～黒灰色
29	P25	（3.9）	1.0	3.7	良	普通	暗灰～黒灰色
30	Ⅱ区P1033	3.95	1.1	5.4	普通	良	暗灰褐色
31	遺構面	4.0	1.0	4.8	良	精良	明灰～黒色
32	Ⅱ区P1033	（4.0）	0.8	3.2	良	良	黒灰褐色
33	P73	（4.1）	1.35	6.5	普通	精良	淡灰～暗灰色
34	P799	4.15	1.4	8.0	良	良	明灰褐～暗灰褐色
35	P419	4.35	1.0	4.1	良	精良	黒褐色
36	遺構面	4.5	1.2	6.1	良	精良	淡灰～明灰色
37	41号土坑	（4.5）	1.35	6.7	良	精良	淡灰白～黒灰色
38	灰褐色土層	4.6	1.2	5.2	普通	普通	明灰褐～明褐色
39	排土中	4.6	1.2	6.1	普通	良	淡灰～暗灰色
40	Ⅲ区包含層	（4.6）	1.05	3.6	普通	精良	明褐色
41	Ⅲ区包含層	（4.7）	1.0	4.3	良	精良	暗灰～黒灰色
42	Ⅲ区包含層	4.8	1.05	5.1	良	精良	明橙～黒灰色
43	P15	4.8	1.1	5.3	良	精良	暗灰～黒灰色
44	Ⅱ区P1031	4.8	1.25	6.5	良	良	淡褐～灰褐色
45	Ⅱ区下段遺構面	4.9	1.2	5.4	良	良	淡灰褐～灰褐色
46	Ⅱ区排土中	（5.0）	1.1	5.7	良	精良	明灰褐色
47	Ⅱ区下段遺構面	5.0	1.0	5.2	良	良	明灰褐色
48	Ⅲ区包含層	5.0	1.4	6.2	普通	普通	明橙褐色
49	P107	（5.0）	1.6	10.3	普通	やや粗	淡灰～灰色
50	Ⅲ区包含層	（5.05）	0.95	3.6	普通	精良	明橙褐色
51	P79	5.25	1.2	7.1	良	精良	黒灰～黒色
52	P79	5.45	1.3	8.6	良	精良	黒色
53	P79	5.5	1.2	7.9	良	精良	黒色

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2133051
登録年度 22	登録番号 1

伊良原Ⅱ 上巻

福岡県文化財調査報告書　第229集

平成23年3月31日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園７－７

印　刷　石橋印刷株式会社
福岡市博多区東比恵3－21－10